

管理およびセキュリティー・ガ イド



©

この資料は、IBM Cognos Analytics バージョン 11.0.0 に適用され、それ以降のリリースにも適用される場合があります。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示さ れたりする場合があります。

原典: IBM Cognos Analytics Version 11.0 Administration and Security Guide

発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当: トランスレーション・サービス・センター

著作権

Licensed Materials - Property of IBM

© Copyright IBM Corp. 2005, 2018.

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

- Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国に おける登録商標または商標です。
- Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国 における商標です。
- Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。
- UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
- Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標 または登録商標です。

Microsoft 製品のスクリーン・ショットは、Microsoft の許可を得て使用しています。

目次

既要................................	xii	Íİ
第 1 章 IBM Cognos ソフトウェアの管理		1
BM Cognos Administration		1
システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化.........		2
タスクの自動化		3
多言語レポート環境のセットアップ.........................		4
多言語レポートを作成するためのデータベースの設定...............		6
フォントのインストール		6
IBM Cognos のデフォルト・フォント		7
Reporting $7 \pm 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2$		7
プリンターの設定..............................		7
Neb ブラウザーの設定		9
Series 7 のレポートへのユーザー・アクセスの許可	1	2
BM Cognos ソフトウェアへのアクセス制限	1	3
第 2 章 IBM Cognos Analytics アプリケーションの作成	1	5
	4.	7
		8
		8
		.1
		.2
		.2
呆護されているエラー・メッセージの完全な詳細表示	2	.3
	2	.4
等定ユーザーの問題を診断するためのログ記録の使用	2	.4
コンボーネント指定 ipf ファイルの編集による特定ユーザーのログの実行	2	.5
選択カテゴリーを使用した特定ユーザーのログの実行	2	.6
特定ユーザーのログ記録の無効化	2	7
第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標		9
評価指標データの収集方法		9
システム評価指標	3	0
「ステータス」タブの「システム」ページのウィンドウ	4	2
システム・パフォーマンスの評価	4	4
評価指標スコアの属性の表示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4	.5
評価指標のしきい値の設定	4	5
メトリックのリセット	4	-6
システムの評価指標のリセット		7
Report サービス接続の更新	4	.7
	Λ	0
お 3 早 リーハー 目生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		3
アイ人ハツアヤーとサービ人	4	9
アイスハッナヤーとサーヒスの開始およひ停止		3
Y クティフ Content Manager サービス	5	5
環境からのディスバッチャーの削除	5	6
構成フォルダー内のティスバッチャーのグルーブ化	5	8
局度なティスパッチャー・ルーティング	5	9
IBM Cognos Series 7 PowerPlay データに対するゲートウェイ・マッピングの指定	6	2

ディスパッチャーの名前変更	. 63
ディスパッチャーのテスト	. 64
複数のディスパッチャーのフェイルオーバー	. 65
ディスパッチャーの保護....................................	. 66
JMX プロキシー・サーバーをホストするためのディスパッチャーの指定.................	. 66
Content Manager の場所	. 68
詳細な Content Manager パラメーターの設定	. 68
Content Manager キャッシュ用キャッシュ・サイズの上限の設定	. 71
ユーザー・セッション・ファイルをローカルに格納することによる Content Manager の負荷の削減	. 72
プロンプト・キャッシュでのデフォルト・ロケール処理のオーバーライド	. 73
Content Store 保守タスク	. 73
内部 Content Store の保守を開始する前に....................................	. 74
外部ネームスペースにおける Content Store の保守	. 74
Content Store 保守タスクの作成	. 75
Content Store 保守タスクの実行	. 76
バックグラウンド・アクティビティーの開始と停止...............................	. 76
サーバー・パフォーマンスの調整	. 76
拡張ディスパッチャー・ルーティングのためのサーバー・グループの設定	. 77
ディスパッチャー間での要求の分散	. 78
進行中の要求係数を使用したディスパッチャーの負荷の分散	. 79
ディスパッチャーの負荷分散プロパティーをクラスター互換モードに設定する	. 80
使用量のピーク期間の設定....................................	. 81
最大プロセス数と最大接続数(....................................	. 82
キューの時間制限の指定....................................	. 84
PDF ファイルの設定	. 85
最長実行時間の設定	. 89
監視リスト出力レポートの保存期間の指定....................................	. 90
Analysis Studio または Reporting のグラフで生成されるホット・スポットの制限	. 91
Report Data サービスに対するレポート・サイズの上限値の設定	. 92
IBM WebSphere Web サービス・タスクからのエージェントのコンテキスト ID の除外	. 92
リポジトリー・サービスのキャッシュの調整	. 93
NC テーブルの一括クリーンアップ	. 93
クエリーの同時実行	. 94
クエリーの同時実行用のパラメーターの設定....................................	. 96
クエリーの優先順位の設定....................................	. 96
クエリーにおける数値検索キーの文字列への変換....................................	. 99
セッション・キャッシュ	. 100
サーバー・レベルでのセッション・キャッシュの無効化	. 100
	. 101
バッケージ・レベルまたはレボート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする...........	
バッケージ・レベルまたはレボート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102
バッケージ・レベルまたはレボート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする CAM Passport Cookie の保護のための HTTPOnly パラメーターの有効化 小数の精度の引き下げ 出力レポートをローカルに保管する外部オブジェクト・ストア 保存した出力レポート	. 101 . 102 . 102 . 103
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 103 . 104 . 106
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・ギャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109 . 109
バッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109 . 109 . 110
パッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109 . 109 . 110 . 112
パッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109 . 109 . 109 . 110 . 112 . 112
パッケージ・レベルまたはレボート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	. 101 . 102 . 102 . 103 . 103 . 104 . 106 . 106 . 107 . 109 . 109 . 109 . 110 . 112 . 112 . 113
パッケージ・レベルまたはレボート・レベルでセッション・キャッシュを無効にする	 101 102 103 103 104 106 106 107 109 109 110 112 112 113 114

多数のスケジュールの追加または更新時における Content Store のロックの回避	. 115
第6章 データ・ソースと接続	. 117
\vec{r} - g - y - λ - σ	. 118
IBM Db2 データ・ソース	. 118
IBM Cognos キューブ	. 121
Oracle Essbase データ・ソース	. 126
IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services	. 130
Informix $\tilde{\vec{r}}$ - \hat{y} - \hat{y} - \hat{y} - \hat{z} -	. 130
Microsoft Analysis Services データ・ソース	. 131
Microsoft SQL Server データ・ソース	. 137
ODBC データ・ソース接続	. 139
Oracle $\vec{r} - \beta \cdot \gamma - \lambda$. 141
外部リポジトリー・データ・ソース接続	142
SAP Business Information Warehouse (SAP BW) $\vec{\tau} - \hat{x} \cdot \hat{y} - \hat{x}$	144
Subsec Adaptive Server Enterprise $\vec{r} - \dot{\gamma} - \dot{\gamma} - \dot{\gamma}$	1/17
TM1 $\vec{r} = \Delta \cdot V = Z$	1/0
$\begin{array}{c} \text{IMI} \mathcal{I} $. 149
$\begin{array}{c} \text{AIVIL} f = f = f \\ $. 151
	. 155
	. 154
新しい接続の追加	. 160
	. 161
	. 161
JDBC 接続の動的接続パラメーター	. 163
データ・ソース・サインオン	. 163
サインオンの作成....................................	. 163
サインオンの変更....................................	. 164
分離レベル	. 165
IBM Cognos コンテキストをデータベースに渡す方法	. 168
\overrightarrow{av}	. 168
Db2 用の IBM Db2 CLI 接続属性の使用	. 176
動的 SOL でのアプリケーション・コンテキストの使用	. 178
更新済み PowerCube の配布	. 180
データ・ソースの保護	. 181
第7章 Querv サービス管理	. 183
O_{uerv} サービス・プロパティーの設定	183
Query サービスのキャッシュ管理	186
	186
	. 100
Λ (アンコ (C用 (K), (N)) (N) (N) (N) (N) (N) (N) (N) (N) (N	. 107
Query $f = C \land f \equiv \varphi \land f \circ f = h \land f \land f \land f = h \land f \land$. 18/
Query $\eta = \ell \times 0 \exists \forall \mathcal{P} \uparrow API \dots	. 189
笋 g 音 データのバックアップ	101
	. 191
Content Store $\mathcal{E} \land \mathcal{P} / \mathcal{P} / \mathcal{P} / \mathcal{P} $. 191
Framework Manager のフロジェクトとモナルのバックアック	. 192
笠 O 音 IPM Compas コンニンツ・アーカイブ	102
用 9 早 IDM COUNTS コノノノノ・アーカイノ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	193
	. 195
ノアイル・ンステム・リホントリーのノアイルの場所の作成	. 195
IBM FileNet Content Manager へのカスタム・クラス定義とブロパティーのインポート	. 196
IBM Content Manager 8 へのカスタム・クラス定義とブロパティーのインポート	. 197
アーカイブ処理を実行できる時刻の指定	. 198
スレッド実行時間の指定....................................	. 199
レポート出力に関する選択済み形式のアーカイブ	. 200
アーカイブしないレポート仕様の指定方法....................................	. 200

コンテンツ・アーカイブの管理 レポート出力用の外部リポジトリーの指定 コンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスクの作成 保存規則更新保守タスクの作成 コンテンツ削除コンテンツ保守タスクの作成 ハー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 201 . 201 . 202 . 203 . 204 . 205 . 205
用 10 草 セキュリティー・セテル	. 207
認証ノロハイター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 207
承認	. 210
Cognos ネームスペース	. 210
IBM Cognos Application Firewall	. 211
テータの検証と保護	. 211
ロク記録と監視	. 212
第 11 章 ユーザー、グループ、および役割	. 215
<u> ユーザー</u>	. 215
ユーザー・ロケール	. 216
$\mathcal{D}\mathcal{V}$ ーノと反剖	. 216
Cognos グループまたは Cognos 役割のメンバーの追加または削除	. 210
第12章 アクセス権と資格情報	. 223
エントリーに対するアクセス権の設定	. 231
信頼されている貨格情報	. 233
「自殺これ」でいる負忙自我の作成	. 233
データ・ソース資格情報の保存	. 235
データ・ソース資格情報の表示と削除	. 236
	~~~
	. 237
休護されている機能よだは特性に対するノクセス権の設定	. 246
第 14 章 オブジェクト機能	. 249
パッケージに対するオブジェクト機能の設定	. 251
第 15 章 セキュリティーの初期設定	. 255
組み込みのエントリー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 255
北ライヤンス役割	. 257
ライセンス役割	. 259
ライセンスに基づくデフォルトの権限	. 259
ライセンス役割に基づく機能の割り当て	. 267
アップグレード・シナリオ: カスタマイズされた役割の名前が新しい Cognos ライセンス役割と同じである場	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
一台・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 267
システム管理者と定義済みの役割の保護	. 207
Cognos $\hat{\lambda} - \Delta \lambda^{\mathcal{A}} - \lambda O R$	. 269
Content Store の保護	. 269
	074
第 10 早 エントリーのノロハティー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 2/1
土取ノロハフィー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 271 274
$\vec{y} = \vec{y} + \vec{y} = \vec{y} + $	. 274

エージェント・プロパティー	. 276
規則プロパティー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 276
第17章 処埋の管理 ...................................	279
現在の処理の管理..................................	. 279
過去の処理の管理..................................	. 281
特定の日に予定されている処理の管理..................................	. 282
中断された処理....................................	. 283
エントリーの中断....................................	. 284
特定の日に中断しているエントリーの表示..................................	. 285
スケジュールされた処理の管理...................................	. 286
エントリー実行優先度の管理	. 287
エントリーの実行履歴の表示	. 288
実行履歴の保存期間の指定....................................	. 290
失敗したエントリー・タスクの再実行	. 290
第 18 章 人ケシュール管理	293
	. 295
例 - スケジュールの資格情報の変更	. 297
複数のエントリーをスケジュールするジョブの使用..............................	. 297
キャッシュされたプロンプト・データ	. 300
トリガー駆動型エントリー・スケジュール機能.................................	. 301
トリガー駆動型スケジュール機能の設定....................................	. 301
発生に基づいたエントリーのスケジュール..................................	. 302
第 19 草 配布	303
配布仕様....................................	. 304
配布アーカイブ....................................	. 304
配布計画....................................	. 304
セキュリティーと配布....................................	. 304
古いアーカイブのインポート時のローカライズされたオブジェクト名の維持 ...............	. 306
Content Store 全体の配布	. 307
選択した共有フォルダーとディレクトリーの内容の配布	. 309
詳細な配布設定....................................	. 313
出力レポートが配布の一部であるかどうかの指定.................................	. 313
設定オブジェクトとその子を配布に含める....................................	. 314
インポートおよびエクスポート時における配布の競合解消規則....................................	. 314
競合解消の規則....................................	. 315
Content Store 全体を配布する場合の競合解消規則	. 316
部分的配布に対する競合解消規則....................................	. 318
IBM Cognos エントリーの配布	. 320
ソース環境からのエクスポート	. 321
配布アーカイブの移動	. 325
ターゲット環境へのインポート....................................	. 325
Content Store 全体のインポートに設定オブジェクトを含める	. 328
配布したアプリケーションのテスト....................................	. 329
レポート仕様のアップグレード	. 329
コンテンツ ID の割り当て	. 330
Human Task サービスと Annotation サービスの配布	. 331
IBM Cognos Workspace コメントの配布	. 333
IBM Cognos Workspace コメントの保管とレポート	. 334
第 20 章 パッケージ .................................	337
PowerCube のパッケージの作成....................................	. 337
SAP BW パッケージ	. 337
SAP BW パッケージの作成	. 338

SAP BW パッケージの編集	338 338
第 21 章 ユーザー・プロファイルの管理	. 341
デフォルト・ユーザー・プロファイルの編集................................	341
ユーザー・プロファイルの表示または変更................................	342
ユーザー・プロファイルの表示または変更...............................	342
コンテンツの削除....................................	343
ユーザー・プロファイルの削除	343
ユーザー・プロファイルのコピー...............................	344
第 22 章 マルチテナント環境	. 347
マルチテナンシーの構成...................................	348
階層ノードに基づくマルチテナンシーの構成..............................	349
ユーザー・アカウント属性に基づくマルチテナンシーの構成....................	350
カスタム・テナント・プロバイダーに基づくマルチテナンシーの構成...............	352
	353
「テナント・バウンド・セット・マッピング」ブロパティーの構成	354
マルチテナンシーを無効にする	358
	359
マルチテナンシーの格納規則	359
	360
アナント ID を既存のコンテンツに割り当てる	361
共有オフジェクトのアナント ID の設定	362
	362
	363
仮想アナントをセットアップしてアナント間のコンテンツ共有を有効にする	364
Cognos Analytics ユーザー・インターフェースにアナント名を表示する	366
アナント・ユーサー・ノロノアイルの官理	366
アナント・コンテンソの配作	367
ナナントのナクナイフはユーリー・セッションの終了	3/1
	572
「アントの制味	372
Content Store	373
マルチテナント環境での双方向処理へのアクセス	374
	575
第23章 リソース・ライブラリー	. 379
視覚化....................................	379
ライブラリーへの視覚化のインポート	379
視覚化の管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	380
第 24 章 レポートとキューブ...............................	. 383
IBM Cognos のアクティブ・レポート	384
$\nu \vec{x} - \vec{v} \cdot \vec{v} = 0$	384
データ・アイテムの系統情報の表示....................................	384
InfoSphere Business Glossary へのアクセス	385
レポートの形式	386
HTML 形式	387
PDF 形式	387
Microsoft Excel 形式	387
CSV 形式	388
レポートの言語....................................	388
レポートの言語の指定	389
レポートのデフォルト・プロンプト値の指定	389
出力レポート・バージョンの保存期間の指定..............................	389

出力レポート履歴の保存期間の指定....................................	389
名前付きセットを持つデータ・ソースで予期しない結果が得られる可能性 . . . . . . . . . . . . . . .	390
IBM Cognos Analytics での Series 7 レポート	390
Series 7 PowerPlay のレポートとキューブ	390
シングル・サインオン	391
Series 7 PowerPlay レポートのデフォルト値の変更	391
Series 7 のレポートとキューブの多言語プロパティー	391
第 25 章 ヒューマン・タスクの管理	393
承認要求とアドホック・タスクー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	393
コメントを表示する....................................	394
E メール通知に登録する	394
アドホック・タスクを作成する	395
承認要求とアドホック・タスクに対して実行できる操作	397
タスクの要求	397
タスクの受信者の変更	397
現在の所有者を変更する。	398
潜在所有者および利害関係者を変更する	398
タスクの所有権の取り消し、	399
タスクのデッドラインの設定	399
タスクの優先度の変更	399
タスクへのコメントの追加	400
タスクの開始または停止	400
タスクの完了	400
タスクのキャンヤル	402
	402
	402
通知要求の問封と確認	403
	404
アーカイブしたタスクの表示	405
	405
第26章 ドリルスルー・アクセス	407
ドリルスルーの概念の理解	408
ドリルスルー・パス	408
選択コンテキスト	409
さまざまなレポート形式へのドリルスルー	409
	410
ブックマークによる参昭	411
	411
	412
ビジネス・キー	413
有効範囲	414
石が地西・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	111 111
V > C > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > C < V > V > V > C < V > C < V > V > V > V > V > V > V > V > V > V	/15
TowerCube ビデレーションル パンテント ションの いってい パント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	116
	110
成行の「アルバル」と我の欄末	419
「リルスルーマレム」「のハリス」スー設定	419
ドリルヘル $\mathcal{L}_{30}$ $\mathcal{L}_{30$	422
I J M AND J Z AND J Z CALL I I I I I I I I I I I I I I I I I I	+24 /12/
レリー ノルハル C 我 ワノ ハノノ · · · · · · · · · · · · · · · · ·	424 425
レホート このトラルヘル ニラン こへの政定	423
	420
第 27 章 IBM Cognos Workspace	429

ユーザーのための Cognos Mobile ネイティブ・アブリケーションの事前構成.       432         Cognos Mobile の詳細設定の指定       434         Mobile デーマの構成.       435         カスタム Mobile デーマの作成       437         Cognos Mobile サービスの構成設定       438         (OS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成.       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         Eパイル・デバイスでのしばート管理       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile の世グスル       450         Cognos Mobile の世グスル       450         Cognos Mobile の世グスル       451         Cognos Mobile の世グスル       452         Cognos Mobile の世グスル       453         Cognos Mobile の世グスル       454         Cognos Mobile の世グスル       454         ビグオン中の HTML および HTTP のサポート       455         ボフロード (根達       454         ビグオーン・ディクシンのとキュリティー       457
Cognos Mobile の詳細設定の指定       434         Mobile テーマの構成       435         がスタム Mobile テーマの作成       437         Cognos Mobile サービスの構成       437         Cognos Mobile サービスの構成       437         Cognos Mobile サービスの構成       437         Cognos Mobile サービスの構成       438         ICS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成       442         Apple ブッシュ通知の SL 証明書の管理       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         ビバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile クログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile クログ記録       446         Cognos Mobile のログ記録       447         Mobile クログ記録       446         Mobile のログ記録       446         Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の世ンブル       451         Cognos Mobile の世ンブル       451         Cognos Mobile マブリケィー       452         Cognos Mobile マブリケィー       452         Cognos Mobile アブリケィー       453         パスワード保護       454         Cognos Mobile アブリケィー       455         Cognos Mobile アブリケィー       456         Cognos Mobile アブリケィー       457
Mobile デーマの権成.       435         カスタム Mobile デーマの権成.       437         Cognos Mobile サービスの構成.       437         Cognos Mobile サービスの構成.       438         (OS ネイティブ・ワブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成.       442         Apple ブッシュ通知の SSL 証明書の管理.       442         Apple ブッシュ通知のの使用可能化.       443         EXイA ・デバイスでのレポート管理.       445         EXイA ・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile ロッグ記録       446         Cognos Mobile ロッグ記録       446         Cognos Mobile ウェーク       447         ユーザー参断       450         Cognos Mobile ロック記録       446         Cognos Mobile ロック記録       446         Cognos Mobile ロックボート       451         Cognos Mobile ロックボート       452         Cognos Mobile ロックボーク       453         バスワード保護       454         バスワード保護       454         バスワード保護       454         バスワード保護       454         バスワード保護       454         バイス い デバイス Col レポート・データンのセキュリティー       455         証明書認証       456         Cognos Mobile の機能       70         ジェークーションのセキュリティー       457         ディイス ル・デバイスのローボー報告報       458         Leas
カススム Mobile デーマの作成       437         Cognos Mobile サービスの構成設定       438         iOS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         EXイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録       446         Cognos Mobile のログ記録       447         ユーザー診断       446         Cognos Mobile のログ記録       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のログ記録       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のログ記録       451         Cognos Mobile のログ記録       451         Cognos Mobile のログ記録       451         Cognos Mobile のログ記録       451         Cognos Mobile のログンプル       451         Cognos Mobile セキュリティー       452         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       453         ボズマード保護       454         パスワーシーンションのセキュリティー       455         デバイスのののレディーのレオード・ディスののレオーシージャー       455         ビグスレステムマル ディー補助機能       455         Lease Key の設定       458         モバイル ・デバイスのロューザー補助機能       451<
Cognos Mobile サービスの構成設定       437         Cognos Mobile サービスの構成設定       438         iOS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成.       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         ビバル・デバイスでのしボート管理.       445         モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機能.       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー参断       450         Cognos Mobile のサブル       451         Cognos Mobile のサブル       451         Cognos Mobile のサブル       451         Cognos Mobile のサブル       451         Cognos Mobile の地ブル       451         Cognos Mobile の地ブル       451         Cognos Mobile の地ブル       451         Cognos Mobile の地ボート       452         Cognos Mobile の地ボート       453         ボスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile の炭流       457         デバイスル・デバイスのロレボート・データのセキュリティー       457         デバイスル・デバイスのコーザー電認証ボリシーの設定       458         Lease Key の設定       458         ビステム・デバイスのコーザー補助機能       461         システムを依のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile の
Cognos Mobile サービスの構成設定       438         iOS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の構成.       442         Apple ブッシュ通知の SSL 証明書の管理.       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         モバイル・デバイスでのしボート管理.       445         Eバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のログ記録       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の増ンゴル       452         Cognos Mobile の増た       454         バスワード保護       455         証明書認証       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       454         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         デバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイル・デバイスのコーザー補助機能       458         Lease Key の設定       458         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cogn
iOS ネイティブ・アブリケーション用の Apple ブッシュ通知の器は       442         Apple ブッシュ通知の SSL 証明書の管理.       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー参断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の単       452         Cognos Mobile の単       453         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認諾       454         パスマード保護       455         証明書認諾       454         パスマード保護       457         ビグオン中の HTML および HTTP のサギータータのセキュリティー       457         ビグオントディイス でのレポート・データのセキュリティー       457         ビグオント デバイス でのレポート・データのセキュリティー       457         ビグオント デバイス のコーザー 報助機能       458         Lease Key の設定
Apple ブッシュ通知の使用可能化       442         Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         Eパイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         モパイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録機能       447         ユーザー参断       450         Cognos Mobile やコワティー       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       454         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         ごがけ、デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスののレポート・データのセキュリティー       457         デバイン、デバイスののレポート・データのセキュリティー       457         ビase Key の設定       458         Lease Key の設定       458         ビase Key の設定       458         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       458         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       458         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       458         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       450      <
Apple ブッシュ通知の使用可能化       443         モバイル・デバイスでのレボート管理       445         Cognos Mobile のログ記録機能       445         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       451         バスワード保護       452         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         ボバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイル・デバイスのロンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         モバイル・デバイスのコーザー認証ポリシーの設定       458         イグ和 ・デバイスのコーザー認証ポリシーの設定       458         ビステム全体のコーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         マステム全体のユーザー補助機能       464         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         成別の問題       464         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         マンテンド・トリッブ・セーフティー Configu
モバイル・デバイスでのレポート管理       445         モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機能       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー参断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile クリンブル       451         Cognos Mobile クリンブル       451         Cognos Mobile クレンブル       452         Cognos Mobile クレンブル       452         Cognos Mobile クレンブル       452         Cognos Mobile クレンブル       453         Cognos Mobile クレンブル       454         Cognos Mobile クレンブル       452         Cognos Mobile クレンブル       454         レグオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         Exiイル・デバイスのコーザー福勤機能       461         システム全体のコーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         成知の問題       エーゲーオーレガーキャー         Cognos Mobile のキャボード・ショートカット       463         Cogno
モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット.       445         Cognos Mobile のログ記録機       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile クサンブル       451         Cognos Mobile クサンブル       452         Cognos Mobile クサンブル       452         Cognos Mobile セキュリティー       452         Cognos Mobile クサンブル       452         Cognos Mobile マナュリティー       454         バスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスのロコーザー書記載ボリシーの設定       458         Lease Key の設定       458         ビステム全体のコーザー補助機能       451         システム全体のコーザー補助機能       452         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         システム全体のコーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         グロッガー・ド・ショートカット       463         ウンド・トリッブ・セーフティー Configuration ユーティリティー       463         ウンド・トリッブ・セーフティー Configuration ユーティリティー       464         ウンド・トリッブ・セーフティー Configuration ユーティリティー <t< td=""></t<>
Cognos Mobile のログ記録機能       446         Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のサンプル       451         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       453         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスのコンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         センデムシーグー補助機能       458         グ録 A. ユーザー補助機能       451         システム全体のユーザー補助機能       451         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー・ボード・ショートカット       463         成知の問題       466         付録       B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー       467         例:Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフを変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         水気の内立       469         マンデットリップ・セ
Cognos Mobile のログ記録       446         Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       454         パスワード保護       452         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         ギバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         セグオンロ・ボード・データのセキュリティー       458         マグスシムウェー・ボーボーションのセキュリティー       457         デバイスへのレボート・データのセキュリティー       458         Lease Key の設定       458         センディンのションテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         付録 A. ユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーディド・ショートカット       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティーラな変換       468         ラウンド・トリッブ・セーフティー Configuration ユーティリティーティリティー       469         交換の指定
Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化       447         ユーザー診断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile のサンブル       452         Cognos Mobile の機能       451         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile ブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスホらのコンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         ビase Key の設定       458         ウステム全体のコーザー補助機能       451         システム全体のコーザー補助機能       461         システム全体のコーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       467         例Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフティー       467         グ録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー       467         例Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフティー       467         グ酸次的指定       461         マケッグ・トリップ・セーフティー       467         ダ酸の指定       467         ダ酸と、トリッブ・セーフティー       467         グジェー       467         グ録表したのティー       467         グ録と、トリッブ・セーフティー       467         グ録と、日本       470         変換の指定       470<
ユーザー診断       450         Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile クサンブル       451         Cognos Mobile の機能       452         Cognos Mobile の機能       452         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       457         Lease Key の設定       458         セステム全体のコーザー補助機能       458         Cognos Mobile のキーボード・ジョートカット       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         東知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例(Shift-JIS のラウンド・トリッブ・セーフな変換       468         ラウンド・トリッブ・セーフティー       469         液換の情定       469         代替文字の指定       470         変換の指定       470         変換の指定       470         変換の指定       470         変換の指定       471         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
Cognos Mobile のサンブル       451         Cognos Mobile セキュリティー       452         Cognos Mobile の機能       454         パスワード保護       451         ログオン中の HTML および HTTP のサポート.       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスのコーザーキ・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスのコーザー部誌証ポリシーの設定       458         Lease Key の設定       458         Cognos Mobile のユーザー補助機能       451         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         欧別の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフティーのfiguration ユーティリティー       469         ☆し、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Cognos Mobile セキュリティー       452         Cognos Mobile の機能       454         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       457         Lease Key の設定       458         Lease Key の設定       458         マケー補助機能       458         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Sagno Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフを変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       470         変換の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       471         変換設定をデフォルトに戻す方法       472
Cognos Mobile の機能       454         パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       457         Lease Key の設定       458         Lease Key の設定       458         マステム全体のコーザー補助機能       451         システム全体のユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフティーConfiguration ユーティリティー       469         変換の指定       470         水管の適用       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
パスワード保護       454         ログオン中の HTML および HTTP のサポート.       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー.       457         デバイスからのコンテンツの消去.       457         Lease Key の設定.       458         セバイル・デバイスのユーザー潮証ボリシーの設定.       458         セバイル・デバイスのユーザー潮助機能       451         システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         システム全体のユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         取知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフキャー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         マウンド・トリップ・セーフキャー Configuration ユーティリティー       469         火陸の適用       470         変換改定をデフォルトに戻す方法.       472
ログオン中の HTML および HTTP のサポート.       455         証明書認証       456         Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー.       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー.       457         デバイスからのコンテンツの消去.       458         Lease Key の設定.       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         マイル・デバイスのユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換と代替の適用       471         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472
証明書認証       456         Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       458         Lease Key の設定       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定       458         付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         検検の指定       469         火検散の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
Cognos Mobile アブリケーションのセキュリティー       457         モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー       457         デバイスからのコンテンツの消去       457         Lease Key の設定       458         Lease Key の設定       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定       458         マクロンのセーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       463         成知の問題       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフネット       468         ラウンド・トリップ・セーフネット       469         変換の指定       470         変換の指定       471         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー.       457         デバイスからのコンテンツの消去.       458         Lease Key の設定.       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         セバイル・デバイスのユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       463         ワンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         マウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
デバイスからのコンテンツの消去.       458         Lease Key の設定.       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         セバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット.       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         代替文字の指定       470         変換の指定       471         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
Lease Key の設定.       458         モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定.       458         付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         M知の問題       463         成知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
付録 A. ユーザー補助機能       461         システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         火替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化       461         Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       463         (付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       466         (付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
Cognos Mobile のユーザー補助機能       462         Cognos Mobile のキーボード・ショートカット       463         既知の問題       466         付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
Cognos Mobile のキーボード・ショートカット
既知の問題
付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法.       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定       467         例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換       468         ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
<ul> <li>例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換</li> <li>ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー</li> <li>変換の指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックの指定</li> <li>イロックのの指定</li> <li>イロックのの一般の指定</li> <li>イロックのの一般の指定</li> <li>イロックの一般の指定</li> <li>イロックの一般の目的</li> <li>イロックの一般の</li> <li>イロックの一般の</li> <li>イロックの一般の</li> <li>イロックの一般の</li> <li>イロックの</li> <li>イロックの<!--</td--></li></ul>
ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー       469         変換の指定       469         代替文字の指定       470         変換と代替の適用       471         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定       472
変換の指定
代替文字の指定.       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .       .
変換と代替の適用       471         変換設定をデフォルトに戻す方法       472         Series 7 PowerPlay Web       レポートの変換の指定         472
変換設定をデフォルトに戻す方法
Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定
付録 C. 初期アクセス権
ルートおよび最上位の Content Manager オブジェクトの初期アクセス権
機能に対する初期アクセス権
付録 D. サンプル・データベースのローカライズ
付録 D. サンプル・データベースのローカライズ       497         1 言語につき 1 列       497         モデル内での使用言語 (列) の確定       497         サンプル・クエリー       497         1 言語につき 1 行       497         モデル内での言語 (行) の確定       497
付録 D. サンプル・データベースのローカライズ
付録 D. サンプル・データベースのローカライズ

**X** IBM Cognos Analytics バージョン 11.0: 管理およびセキュリティー・ガイド

当該国表記拡張	500 500
付録 E. データ・ソース・コマンドのスキーマ	. 503
commandBlock	504
commands	504
sessionStartCommand	505
sessionEndCommand.	505
arguments	506
argument	506
setCommand	506
sqlCommand	507
sql	507
name	507
value	508
付録 F. ログ・メッセージのデータ・スキーマ	. 509
テーブルの定義....................................	509
COGIPF_ACTION テーブル	509
$COGIPF_AGENTBUILD $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $ $ = - $	511
COGIPF_AGENTRUN テーブル	512
$COGIPF_ANNOTATIONSERVICE \ \mathcal{F} - \mathcal{I}\mathcal{V} \cdot	514
COGIPF_EDITQUERY テーブル	515
COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブル	517
COGIPF_HUMANTASKSERVICE_DETAIL テーブル	519
COGIPF_NATIVEQUERY テーブル	521
COGIPF_PARAMETER テーブル	522
COGIPF_RUNJOB テーブル	523
COGIPF_RUNJOBSTEP テーブル	524
COGIPF_RUNREPORT テーブル	526
COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS テーブル	528
COGIPF_USERLOGON テーブル	531
COGIPF_VIEWREPORT テーブル	533
付録 <b>G</b> . 詳細設定の構成	. 535
詳細設定のグローバル構成....................................	535
特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成	536
特定のサービスに対する詳細設定の構成	537
詳細設定のリファレンス....................................	538
Agent サービスの詳細設定	538
Content Manager サービスの詳細設定	539
共通構成設定	545
Portal Services (presentationService)の詳細設定	547
Delivery サービスの詳細設定	549
ディスパッチャー・サービスの詳細設定	551
Event Management サービスの詳細設定	552
Iob サービスの詳細設定	554
Metrics Manager サービスの詳細設定	555
Monitor サービスの詳細設定	555
Report サービスと Batch Report サービスの詳細設定	561
Repository サービスの詳細設定	572
	572
索引	. 577

# 概要

この情報は、IBM[®] Cognos[®] ソフトウェアの管理コンポーネントである IBM Cognos Administration の使用にあたって参照してください。

この情報では、IBM Cognos ソフトウェアの管理に役立つ手順を 1 つずつ解説し、 背景となる情報を提供します。

#### 情報の入手方法

製品資料 (各国語版のすべての資料を含む) を Web で入手するには、IBM Knowledge Center (http://www.ibm.com/support/knowledgecenter) にアクセス してください。

#### ユーザー補助機能

IBM Cognos Administration には、動作が制限されている方、視力の限られた方な ど、身体障害者の方々が IT 製品を使用できるように支援するユーザー補助機能が 用意されています。ただし、ユーザー補助機能をサポートしない他のページやコン ポーネントが Cognos Administration ユーザー・インターフェースに追加された場 合は、ユーザー補助機能の使用可能度が変化することがあります。

IBM Cognos Administration で使用可能なユーザー補助機能について詳しくは、 461 ページの『付録 A. ユーザー補助機能』を参照してください。

IBM Cognos の HTML 文書は、ユーザー補助機能を備えています。 PDF 文書は 補足的なもので、それ自体には追加のユーザー補助機能はありません。

#### 将来の見通しに関する記述

このドキュメントには製品の現在の機能が記載されています。現在提供されていな い項目に言及する場合がありますが、将来的に使用可能になることを示唆するもの ではありません。このような言及は、なんらかの資料、規約、または機能を提供す るという誓約、保証、または法的義務ではありません。特性や機能の開発、公開、 およびその時期に関しては、引き続き IBM が単独裁量権を有します。

#### サンプルに関する特記事項

Sample Outdoors Company、Great Outdoors 社、GO 販売、および Sample Outdoors または Great Outdoors 名のすべてのバリエーション、および Planning サンプルは、IBMおよび IBM のお客様向けのサンプル・アプリケーションを開発す るために使用される架空の企業活動とサンプル・データを表します。これらの架空 のレコードには、販売取引、製品配布、財務、および人事に関するサンプル・デー タが含まれています。実在する名称、住所、連絡先電話番号、取引額とは一切関係 がありません。また、他のサンプル・ファイルの中には、手動またはコンピュータ ーで生成された架空のデータ、学術的ソースまたは公共のソースを基に編集された 実際のデータ、著作権所有者の許可を得て使われているデータなどが含まれてお り、サンプル・アプリケーションを開発するためのサンプル・データとして使用さ れている場合もあります。参照される製品名は、それぞれ各社の商標です。許可な く複製することは禁止されています。

# 第1章 IBM Cognos ソフトウェアの管理

IBM Cognos ソフトウェアをインストールして設定した後は、サーバー管理、デー タ管理、セキュリティーとコンテンツの管理、処理の管理、サービスの管理を実行 できます。

次の管理タスクも実行できます。

- タスクの自動化
- 多言語レポートを作成するための環境設定とデータベースの設定
- フォントのインストール
- プリンターの設定
- Web ブラウザーの設定
- Series 7 レポートへのユーザー・アクセスの許可
- IBM Cognos ソフトウェアへのアクセス制限

通常の管理タスクのみでなく、さまざまな IBM Cognos コンポーネントの外観と機能をカスタマイズすることもできます。

潜在的な問題については、「IBM Cognos Analytics トラブルシューティング・ガイ ド」を参照してください。

# **IBM Cognos Administration**

**IBM Cognos Administration** にアクセスできる権限が必要です。

詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照し てください。

表 1. 管理ツールのタイプ

<b>F</b>		
管理領域	タブ	使用する値
アクティビティー	ステータス	現在、過去、将来、スケジュ ール済みの IBM Cognos の エントリーを管理する
Content Manager コンピュ ーター	ステータス	Content Manager コンピュ ーターを管理する
Content Store	設定	Content Store の保守タスク を実行する
データ・ソース	設定	データ・ソース接続の作成と 管理を行う

表 1. 管理ツールのタイプ (続き)

管理領域	タブ	使用する値
配布	設定	IBM Cognos の配布と、ソー ス環境からのエクスポート後 に、ターゲット環境へのイン ポートを行う
ディスパッチャーとサービス	ステータス	ディスパッチャーとサービス を管理する
プリンター	設定	プリンターの作成と管理を行 う
セキュリティー	セキュリティー	特定の製品機能 (管理やレポ ートなど)、および機能内の特 性 (バーストやユーザー定義 SQL など) へのアクセスを制 御する
システム、ディスパッチャ ー、サーバー、およびサービ ス管理	ステータス	システムの評価指標を使用し たシステム・パフォーマンス の監視と、サーバーの管理を 行う
サーバーの調整	ステータス	IBM Cognos ソフトウェアの 処理速度と処理効率を最適化 する
ユーザー、グループ、および 役割	セキュリティー	ユーザー、グループ、役割の 作成と管理を行う

# システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化

ユーザー補助機能付きの出力レポートに対してシステム全体の設定を指定できま す。この設定は、レポート、ジョブ、およびスケジュールされたエントリーなど、 すべてのエントリーに適用されます。

ユーザー補助機能付きのレポートには代替テキストなどの機能が含まれています。 これにより、身体の不自由なユーザーはスクリーン・リーダーなどの支援テクノロ ジーを使用して、レポート・コンテンツにアクセスできます。

IBM Cognos Administration のシステム全体の設定は、ユーザー設定およびレポート・プロパティーのユーザー補助機能の設定によって上書きできます。

ユーザー補助機能付きのレポートは、他のレポートよりも複雑なレポート処理が必 要で、ファイル・サイズも大きくなります。その結果、ユーザー補助機能付きのレ ポートはパフォーマンスに影響を与えます。デフォルトでは、ユーザー補助機能付 きの出力レポートのサポートは無効になっています。 ユーザー補助機能付きの出力レポートは、PDF、HTML、および Microsoft Excel 形式で利用可能です。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 「設定」ページ・ツールバーで、「プロパティーを設定」ボタン
   をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 「カテゴリー」ドロップダウン・リストで、「管理者によるオーバーライド」を クリックします。
- 5. 「管理者によるオーバーライド」カテゴリーの「レポートでのユーザー補助機能 のサポート」の横にある「値」列で、「編集」をクリックします。
- 「レポートでのユーザー補助機能のサポート」ページで、次のオプションのいず れかを選択します。

オプション	説明
無効にする	ユーザーは、ユーザー補助機能付きの出力レ ポートを使用できません。
必須にする	ユーザー補助機能付きの出力レポートは常に 作成されます。
ユーザーによる指定を許可	ユーザー補助機能付きの出力レポートはユー ザーが指定します。このオプションを「未選 択」に設定すると、ユーザー補助機能付きの 出力レポートは自動的には作成されません。 これはデフォルトです。このオプションを 「選択済み」に設定すると、ユーザー補助機 能付きの出力レポートはデフォルトで作成さ れます。

# タスクの自動化

この製品を使用して行えるほぼすべての作業は、次の表に示す適切な API、URL インターフェース、またはコマンド行ツールを使用して実行できます。

表 2.	タスクの	自動化
------	------	-----

目的	自動化インターフェース	情報
モデルの変更または UNIX オペレーティング・システム や Microsoft Windows オペ レーティング・システムへの モデルの再発行を行う。	Script Player ツール	「IBM Cognos Framework Manager Developer Guide」お よび「IBM Cognos Framework Manager ユーザ ー・ガイド」

表 2. タスクの自動化 (続き)

目的	自動化インターフェース	情報
updateMetadata メソッドと queryMetadata メソッドを使 用して未発行のモデルを変更 する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
getMetadata メソッドを使用 して発行パッケージの中にあ るクエリー・アイテムを取得 する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
ユーザーに機能を付与する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
セキュリティーを管理および 実装する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
HTML ページのハイパーリ ンクを使用してレポートの実 行、表示、編集を行う。	URL インターフェース	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
URL を使用して、レポート の表示、編集、および実行を 行う。		
Content Store 内のオブジェ クトを操作する。 Content Manager を管理す る。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
レポートを管理する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
サーバーとディスパッチャー を管理する。	BI Bus API	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide
レポートを変更または作成す る。	BI Bus API およびレポート 仕様	IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide

# 多言語レポート環境のセットアップ

多言語レポート環境を設定できます。

作成したレポートでデータを複数の言語で表示したり、異なる地域設定を使用した りすることができます。つまり、1 つのレポートを作成すると、そのレポートを世 界中のあらゆるユーザーが使用できることになります。

IBM Cognos ソフトウェアに付属しているサンプル・データベースには、名前や説 明などのテキスト・フィールドが 25 カ国語以上で格納されています。これによ り、多言語レポート作成環境のデモンストレーションを行うことができます。

多言語レポート作成環境の作成プロセスは、次のとおりです。

• 多言語メタデータを使用する。

データ・ソース管理者は、多言語データを個々のテーブル、行、または列に格納 できます。

• 多言語モデルを作成する。

モデル作成者は、Framework Manager を使用し、OLAP 以外のデータ・ソー ス・タイプのモデルに多言語メタデータを追加します。多言語メタデータを追加 するには、モデルがサポートする言語を定義し、オブジェクト名や説明などのモ デル内のテキスト文字列を翻訳し、各パッケージにエクスポートする言語を定義 します。データ・ソースに多言語データが含まれる場合、モデル作成者はレポー ト・ユーザーのデフォルト言語でデータを取得するクエリーを定義できます。

詳細については、「IBM Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照 してください。

• 多言語マップを作成する。

管理者やモデルの作成者は、Map Manager という Microsoft Windows オペレ ーティング・システムのユーティリティーを使用して地図をインポートし、 Reporting で地図のラベルを更新します。また、管理者やモデルの作成者は国名 または地域名や都市名などの地図特性に対して代替の名前を定義し、地図に表示 されるテキストの多言語のバージョンを提供できます。

詳細については、「IBM Cognos Map Manager Installation and User Guide」を 参照してください。

• 多言語レポートを作成する。

レポート作成者は、Reporting を使用して、各種の言語で表示できるレポートを 作成します。例えば、ドイツのユーザーがレポートを開いたときに、タイトルな どのテキストがドイツ語で表示されるように指定できます。また、テキスト・オ ブジェクトの翻訳を追加したり、言語依存の他のオブジェクトを作成したりする ことができます。

詳細については、IBM Cognos Analytics - Reportingユーザー・ガイド を参照し てください。

- レポートの表示言語を指定する。
  - ポータル内のエントリーごとに名前、画面のヒント、説明などの多言語プロ パティーを定義する。
  - レポートの実行時に使用されるデフォルト言語を指定する。

ヒント: デフォルトの言語は、実行オプション・ページ、レポート・プロパティー、または設定で指定できます。

- レポートの実行時に使用されるデフォルト以外の言語を指定する。

データは、次のいずれかで指定した言語および地域設定で表示されます。

- ユーザーの Web ブラウザー・オプション
- 実行オプション
- IBM Cognos Analytics 設定

ユーザーまたは作成者が追加するテキストは、入力された言語で表示されます。

# 多言語レポートを作成するためのデータベースの設定

IBM Cognos Analytics は、さまざまな言語とエンコード方式でデータのクエリー を実行できる Unicode 製品です。

IBM Cognos Analytics では通常、データベースのクエリーは、そのデータベース のネイティブ・データ・エンコード方式 (Latin-1、Shift-JIS、Unicode など)を使用 して行われます。このデータは必要に応じて IBM Cognos Analytics によって Unicode に変換されます。

複数のデータ・エンコード方式でデータベースにクエリーを実行する場合、 Reporting ではデータを Unicode で要求します。データベースによっては、この機 能を有効にするためにクライアント・ソフトウェアやサーバー・ソフトウェアで特 定の設定が必要なことがあります。詳細については、使用しているデータベースの 製造元が提供しているドキュメントを参照してください。

注:文字を Unicode から Shift-JIS に変換する場合やその逆の場合のラウンド・トリ ップ・セーフティー問題については、 467 ページの『付録 B. Shift-JIS 文字のラウ ンド・トリップ・セーフティー設定』を参照してください。

### フォントのインストール

IBM Cognos ソフトウェアでは、ブラウザーでの HTML レポートやページの表示、IBM Cognos サーバーでの PDF レポートの表示、および PDF レポートや HTML レポートで使用されるグラフの表示にフォントが使用されます。

レポートやグラフの出力結果を正しく表示するには、使用されているフォントが存 在している必要があります。グラフや PDF レポートの場合、フォントは IBM Cognos サーバーにインストールします。例えば、Reporting のユーザーがレポー トで Arial フォントを選択した場合、グラフや PDF ファイルを正しく表示するに は、IBM Cognos サーバーに Arial フォントをインストールしておく必要がありま す。要求されたフォントを使用できない場合、IBM Cognos ソフトウェアでは別の フォントが使用されます。

HTML レポートでは、レポートがブラウザーに表示されるため、HTML レポート を表示する各 IBM Cognos ソフトウェア・ユーザーのコンピューターには、必要な フォントがインストールされている必要があります。要求されたフォントを使用で きない場合、ブラウザーでは別のフォントが使用されます。 レポートを作成するときは、IBM Cognos サーバーやユーザーのコンピューターに インストールされているフォントを使用してください。Microsoft ではさまざまな言 語パックで幅広いフォントを用意しているため、Microsoft Windows オペレーティ ング・システムでこのようなフォントの問題が発生する可能性はあまりありませ ん。ただし、UNIX サーバーにはほとんどの場合フォントがインストールされてい ません。サーバーとブラウザー・クライアントの両方に、フォントを購入してイン ストールする必要があります。

PDF ファイルの設定については、 85 ページの『PDF ファイルの設定』を参照し てください。 PDF 形式をレポートで使用する方法については、 386 ページの『レ ポートの形式』を参照してください。フォントの設定および代替フォントのマッピ ングについては、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」を参照 してください。

# IBM Cognos のデフォルト・フォント

要求したフォントが見つからない場合、IBM Cognos サーバーではデフォルト・フ ォントを使用して PDF ファイルとグラフが表示されます。

sans serif フォント・ファミリーに属する Andale WT は、Unicode 文字を幅広く サポートしているため、デフォルト・フォントになっています。ただし、言語によ ってはない文字もあり、市販のフォントほど見栄えがよくない場合もあります。ま たこのフォントでは、ほとんどの言語において、GSUB (グリフの置換) 機能や合字 がサポートされていません。

#### Reporting フォント

Reporting は、ブラウザーで実行される HTML および JavaScript によるアプリケ ーションです。

ブラウザーの設計上、Reporting はブラウザーのセキュリティーの制限内で機能 し、ローカル・コンピューターにインストールされたフォント・リストの情報には アクセスできません。代わりに、Reporting では、IBM Cognos グローバル設定で 設定されたフォントが使用されます。

詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照して ください。

# プリンターの設定

ユーザーがレポートを配布するときにプリンターを使用できるようにするには、プ リンターのエントリーを作成して、IBM Cognos の Content Store に保存します。

これで、ユーザーがレポートを印刷するときに、ネットワーク・アドレスの詳細が わからなくても管理者が設定したプリンターを選択できます。

プリンターのエントリーを作成する際は、IBM Cognos がインストールされている コンピューターに、定義したプリンターが設定されていることを確認します。 プリンターを設定するには、IBM Cognos Administration の機能にアクセスする ために必要な権限が付与されていなければなりません。 Cognos ネームスペースに 対する書き込み権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と 特性』を参照してください。

正常に印刷処理を行うには、印刷を始める前に次の条件を満たしていることを確認 します。

- IBM Cognos サーバーがインストールされている各コンピューターに Adobe Reader がインストールされていることを確認します。
- IBM Cognos サーバーが、ネットワーク・プリンターにアクセスできるアカウン トを使用して起動されていることを確認します。

システム・アカウントではネットワーク・プリンターにアクセスできない場合も あります。

- IBM Cognos が UNIX オペレーティング・システムにインストールされている 場合は、コマンド lpstat -v によって、設定されているプリンターが返されること、またプリンター変数が定義されていることを確認します。
- プリンターのネットワーク・アドレスを定義する際に、次の構文を使用すること。

Microsoft Windows オペレーティング・システムの場合は、¥¥<サーバー名>¥< プリンター名>

UNIX オペレーティング・システムの場合は、lpstat -v コマンドによって表示 される印刷キュー名であるプリンター名。

- ネットワーク名は、lp の印刷キュー名と一致する必要があります。
- IBM Cognos ユーザーがプリンターの正当なアクセス権を持っていること。

"ディレクトリー管理者"役割はすべてのアクセス権を付与されている必要があり、" すべてのユーザー"グループは読み取り、実行、および通過権限が付与されている必 要があります。

ヒント: プリンターに対するアクセス権の確認または割り当てをするには、「操作」 列で、プリンターの「プロパティーを設定」ボタン をクリックし、「権限」タ ブをクリックします。

#### 手順

1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「プリンター」をクリック します。

プリンターのリストが表示されます。

ヒント: プリンターを削除するには、プリンターのチェック・ボックスをオンに し、「削除」ボタンをクリックします。

- 2. ツールバーの「プリンターの新規作成」ボタン 🎒 をクリックします。
- 3. 名前を入力し、必要に応じてプリンターの説明を入力します。

ヒント: 「4 階のカラー・プリンター」など、プリンターの詳細がわかる名前を 付けます。

- プリンターのネットワーク・アドレスは、Windows インストール環境のネット ワーク・プリンターの場合、「¥¥サーバー名¥プリンター名 」の形式を使用して 入力します。 UNIX オペレーティング・システムのインストール環境の場合や Windows のローカル・プリンターの場合は、「プリンター名 」の形式で入力 します。
- 5. 「終了」をクリックします。

# Web ブラウザーの設定

IBM Cognos Analytics コンポーネントでは、デフォルトのブラウザー設定が使用 されます。他に必要な設定は、ブラウザーによって異なります。

#### Cognos Analytics で必要なブラウザー設定

次の表は、有効にする必要がある設定を示しています。

表 3. 有効にされたブラウザー設定

ブラウザー	設定
Internet Explorer	Cookie の使用
	アクティブ・スクリプト
	META REFRESH の実行許可
	ActiveX コントロールとプラグインの実行
	スクリプトを実行しても安全だとマークされてい る ActiveX コントロールのスクリプトの実行
	バイナリーおよびスクリプトの動作
	スクリプトによる貼り付け処理の許可
	ユーザー・データの永続性
Firefox	Cookie の使用
	Java [™] の有効化
	JavaScript の有効化
	画像のロード
Safari 5	Java の有効化
	JavaScript の有効化
	Cookies をブロック: しない
Google Chrome	Cookies: ローカルへのデータを設定する
	画像: すべての画像を表示する
	JavaScript: すべてのサイトで JavaScript の実行 を許可する

Reporting および Query Studio では、ブラウザーのコンポーネントであるネイテ ィブの Microsoft Internet Explorer XML サポートが使用されます。Microsoft の アプリケーションでは、ActiveX を使用して XML を実装しているため、ActiveX サポートを有効にする必要があります。Cognos Analytics は ActiveX コントロー ルを備えていません。また、ActiveX コントロールのダウンロードも行われませ ん。この構成で有効になるのは、Internet Explorer の一部としてインストールされ た ActiveX コントロールのみです。

Microsoft Internet Explorer を使用している場合は、ゲートウェイの URL を信頼 済みサイトのリストに追加できます。例えば、http://

<server_name>:<port_number>/ibmcognos などです。これによって、「ファイルの ダウンロード時に自動的にダイアログを表示」が有効になります。

すべてのブラウザーのすべての Cognos Analytics ページでポップアップを許可します。

#### Cognos Analytics コンポーネントで使用する Cookie

Cognos Analytics では、次の Cookie を使用してユーザー情報を保存します。

Cookie	タイプ	目的
AS_TICKET caf	1 セッションのみの一時 Cookie 1 セッションのみの一時	Cognos Analytics が IBM Cognos Series 7 ネームスペ ースを使用するように設定さ れている場合に作成される。 セキュリティー状態の情報を
	Cookie	保持する。
Cam_passport	1 セッションのみの一時 Cookie	Content Manager サーバー に保存されたユーザー・セッ ションへの参照を保存する。 管理者は HTTPOnly 属性を 設定して、Web ブラウザー を使用するユーザーのセッシ ョン中に、スクリプトによる CAM パスポート cookie の 読み取りや操作をブロックす ることができます。
cc_session	1 セッションのみの一時 Cookie	セッション情報を保持する。
cc_state	1 セッションのみの一時 Cookie	切り取り、コピー、貼り付け などの編集操作中の情報を保 存する。

表 4. Cognos Analytics コンポーネントで使用する Cookie

表	4.	Cognos	Analytics	コンポーネン	トで使用する	Cookie	(続き)
---	----	--------	-----------	--------	--------	--------	------

Cookie	タイプ	目的
CRN	1 セッションのみの一時 Cookie	データおよびユーザー・イン ターフェースのロケール情報 を保存し、すべての IBM Cognos ユーザーに設定され る。
CRN_RS	永続 Cookie	Reporting のメンバー・フォ ルダーの表示についてユーザ ーが選択した内容を保存す る。
PAT_CURRENT_ FOLDER	永続 Cookie	ローカル・ファイルへのアク セスを行う場合に現在のフォ ルダー・パスを保存し、「開 く」または「保存」ダイアロ グ・ボックスを使用した後に 更新される。
pp_session	1 セッションのみの一時 Cookie	PowerPlay [®] Studio 固有のセ ッション情報を保存する。
qs	永続 Cookie	メニューやツールバーなどの ユーザー・インターフェース の設定内容が保存される。
userCapabilities	1 セッションのみの一時 Cookie	現在のユーザーのすべての機 能と署名が格納される。
usersessionid	1 セッションのみの一時 Cookie	ブラウザー・セッション中に 有効な一意のユーザー・セッ ション識別子が格納される。
FrameBorder PageOrientation PageSize	1 セッションのみの一時 Cookie	これらの Cookie には、PDF へのエクスポートに関する設 定が保存される。
PDFLayerDimension PDFOPTS		
DimTreeToolbarVisible	永続 Cookie	ディメンションの表示ツール バーを表示するかどうかを決 定する設定が保存される。
cea-ssa	1 セッションのみの一時 Cookie	ユーザー・セッションの情報 を他の Cognos Analytics コ ンポーネントと共有するかど うかを決定する設定が保存さ れる。
BRes	1 セッションのみの一時 Cookie	グラフを表示する際の面解像 度を決定するために使用する 情報が保存される。

Cookie	タイプ	目的
XSRF (クロスサイト・リクエ	1 セッションのみの一時	XSRF は Web ブラウザーを
スト・フォージェリー)	Cookie	巧妙に操って、ユーザーが現
		在認証されている信頼できる
		サイトで悪意のあるアクショ
		ンを実行させます。 XSRF
		はユーザーのブラウザーがサ
		イトに対して持っている信頼
		を悪用します。
		ユーリーが既にドクイン
		に認証伯のこのるこ兄なし T ドメイン $Y$ から詰み込
		まわた Web ページがドメイ
		ン $V$ に対して要求を行うこ
		とができないようにします
		Cognos Analytics に対して
		最初に認証されるときに、
		XSRF Cookie が設定されま
		す。この時点から、すべての
		要求で、XSRF-TOKEN
		Cookie と X-XSRF-TOKEN
		という HTTP ヘッダーの両
		方が必要になります。

表 4. Cognos Analytics コンポーネントで使用する Cookie (続き)

アップグレードまたは新しいソフトウェアのインストールが完了したら、Web ブラ ウザーを再起動し、ブラウザーのキャッシュをクリアするようにユーザーに指示し てください。

## Series 7 のレポートへのユーザー・アクセスの許可

IBM Cognos Series 7 ネームスペースを使用できるように IBM Cognos ソフトウェアが適切に設定されている場合、ユーザーは IBM Cognos Upfront Series 7 バージョンの NewsIndex や NewsBox にアクセスできます。

相対 URL を使用するように Upfront が設定されている場合は、IBM Cognos Analytics および IBM Cognos Series 7 で同じ Web サーバーを使用することを推 奨します。IBM Cognos Analytics と IBM Cognos Series 7 で異なる Web サー バーを使用する場合は、完全修飾 URL を使用するように Series 7 を設定してくだ さい。このように設定すると、ユーザーは、Web ブラウザーの「戻る」ボタンで Upfront から IBM Cognos Analytics にナビゲートできます。

Series 7 の設定方法については、「IBM Cognos Series 7 Configuration Manager User Guide」を参照してください。

#### 手順

- IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos Series 7 ネームスペースを使用 できるように IBM Cognos を設定します。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。
- 2. 「プロパティー」ウィンドウの「**Cookie** 設定」で、「セキュア・フラグを立て る」プロパティーが「無効」に設定されていることを確認します。
- 「ファイル」メニューの「保存」をクリックし、IBM Cognos Configuration を 終了します。
- 4. IBM Cognos Series 7 ネームスペース用チケット・サーバーが稼働中であることを確認します。
- 5. Series 7 チケット・サーバーのタイムアウト値は、IBM Cognos Passport のタ イムアウト値と同じか、これよりも大きい値に設定する必要があります。
- 6. IBM Cognos ソフトウェアがインストールされているコンピューターの インス トールの場所/templates/ps/system.xml ファイルをエディターで開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされているこ とを確認してください。

7. series7 パラメーターを検索して、XML エディターで次のように編集します。

```
<!-- Series 7 Integration parameters -->
<param name="series7">
    <enabled>true</enabled>
    <!-- character encoding used by series7 -->
    <encoding>series7_character_encoding
<!-- host and port to connect to Upfront server -->
    <host>Upfront_host_name</host>
    <port>Upfront_dispatcher_port_number</port>
    <!-- Upfront gateway location -->
    <gateway>Upfront_gateway_location</pateway>
    <!-- If required, specify the prefix for IBM Cognos
back URLs when linking to Series 7 content. (eg. http://ibmcognos_computer)
otherwise relative URL's will be used -->
    <back-prefix>http://Series 7_server</back-prefix>
</parame>
```

Series 7 Configuration Manager で、Series 7 に使用される文字エンコード方 式を表示するには、「プロパティー」タブの「**IBM Cognos** 共有」、「ロケー ル」、「エンコード」プロパティーの順にクリックします。

- 8. "system.xml"ファイルを UTF-8 形式で保存します。
- 9. IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos Analytics を停止してから再起動 します。

IBM Cognos Analytics の停止方法についての詳細は、「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

### **IBM Cognos** ソフトウェアへのアクセス制限

認証ソースに存在する一部のユーザーが、IBM Cognos ソフトウェアにアクセスで きないようにしたい場合があります。 IBM Cognos ソフトウェアを保護するには、認証ソースまたは Cognos ネームスペースの特定のグループまたは役割に属するユーザーによるアクセスのみを許可する ように Cognos ソフトウェアを設定します。

Cognos ネームスペースにあらかじめ定義されているグループや役割を利用すると 手早く IBM Cognos ソフトウェアを保護できるため、Cognos ネームスペースを使 用することを推奨します。あらかじめ定義されているグループの 1 つに、"すべて のユーザー"があります。デフォルトでは、"すべてのユーザー"グループは Cognos ネームスペースの複数の組み込みグループと役割に属しています。Cognos ネーム スペースを使用することにした場合は、すべての組み込みのグループと役割から"す べてのユーザー"グループを削除し、IBM Cognos ソフトウェアへのアクセスを許可 されたグループ、役割またはユーザーに置き換える必要があります。

IBM Cognos ソフトウェアへのアクセスを制限するには、次の手順を実行します。

• IBM Cognos Configuration で、アクセスを制限するために必要なプロパティー を有効にします。

詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照 してください。

• IBM Cognos Administration で、すべての組み込みグループと役割から"すべてのユーザー"グループを削除します。

代わりに、IBM Cognos ソフトウェアのさまざまな機能領域へのアクセスを許可 されたグループや役割、ユーザーを指定します。詳細については、 255 ページ の『第 15 章 セキュリティーの初期設定』を参照してください。

 フォルダー、パッケージ、レポート、ページなどの個々のエントリーに対するア クセス権を設定します。詳細については、 223 ページの『第 12 章 アクセス権 と資格情報』を参照してください。

IBM Cognos ソフトウェアに実装されているセキュリティー概念の詳細について は、 207 ページの『第 10 章 セキュリティー・モデル』を参照してください。

# 第 2 章 IBM Cognos Analytics アプリケーションの作成

IBM Cognos Analytics コンポーネントを使用して、レポートおよび分析アプリケ ーションをビルドできます。

IBM Cognos Analytics アプリケーションのライフサイクルは数カ月から数年にま で及びます。その期間中にデータは変更される可能性があり、新しい要件が生じま す。基本データが変更されると、作成者は既存のコンテンツを変更して新しいコン テンツを作成する必要があります。やがて、管理者もモデルやデータ・ソースを更 新する必要が生じます。データ・ソースの使用方法の詳細については、IBM Cognos Analytics「管理およびセキュリティー・ガイド」と IBM Cognos Framework Manager「*User Guide*」を参照してください。

#### 始める前に

実用的なアプリケーションには、変更管理やデータ制御などを目的としたプロセス に加え、技術インフラストラクチャー、セキュリティー・インフラストラクチャ ー、ポータルなどが含まれています。追加情報については、IBM Cognos Solutions Implementation Methodology ツールキットを参照してください。このツールキッ トには、実装ロードマップやサポート・ドキュメントが含まれます。ツールキット に関する情報は、IBM サポート・ポータル (www.ibm.com/support/entry/portal/ support) で入手できます。

IBM Cognos Analytics を使用してすべての IBM Cognos Analytics コンポーネン トにまたがるアプリケーションを構築する際には、データ・ソースとモデルを探し て準備し、コンテンツを作成して発行してから、情報を配信します。次の図は、ワ ークフローの概要を示します。



図 1. Cognos Analytics を使用してアプリケーションを構築する

#### 手順

1. データ・ソースとモデルを探して準備する。

IBM Cognos Analytics では、リレーショナル・データ・ソースとディメンショ ン・データ・ソースの両方からレポートを作成できます。データベース接続は Web 管理インターフェースで作成され、モデルの作成や、アプリケーションの 作成および実行の目的に使用されます。 オーサリングや表示の目的でデータを使用するには、Studio/Authoring ツール に (パッケージと呼ばれる) メタデータのモデルのサブセットが必要になりま す。このメタデータは Framework Manager での詳細なモデル化を必要とする 場合があります。

2. コンテンツを作成して発行する。

レポート、スコアカード、分析、ワークスペースなどは、IBM Cognos Analytics の Studio/Authoring ツールで作成します。どの Studio/Authoring ツールを使用するかは、レポートの内容、使用期間、対象読者などによって異な り、ディメンションを使用してデータをモデル化するか、リレーショナルにデー タをモデル化するかによっても異なります。例えば、IBM Cognos Query Studio および IBM Cognos Analysis Studio ではセルフサービスによるレポー ト作成と分析が行われ、IBM Cognos Analytics - Reporting ではスケジュール されたレポートが作成されます。通常、Reporting のレポートとスコアカードは 広範囲の利用者向けに作成され、発行されて、バーストや配布などのスケジュー ルが設定されます。また、Reporting では、セルフサービスによるレポート作成 のためのテンプレートを作成することもできます。

3. 情報を配信して表示する。

IBM Cognos ポータルからコンテンツを配信し、他のメカニズムによって保存 および配信された情報を表示します。作成に使用した Studio/Authoring ツー ル内からレポート、分析、スコアカードなどを実行することもできます。

調整とパフォーマンスについては、「*IBM Cognos Analytics* 管理およびセキュ リティー・ガイド」および IBM サポート・ポータル (www.ibm.com/support/ entry/portal/support) を参照してください。

# 第3章 ログの設定

ログ・メッセージには、エラー・メッセージの他にも、コンポーネントのステータ スや重要なイベントの概要に関する情報が出力されます。例えば、サービスの開始 や停止を試みた操作、処理要求の完了、致命的なエラーのインディケーターを記録 できます。監査ログはログ記録データベースから使用でき、このログにはユーザー やレポート処理に関する情報が出力されます。

各コンピューターにある IBM Cognos サービスは、ローカル・ログ・サーバーにエ ラーやイベントに関する情報を送信します。ローカル・ログ・サーバーは、Content Manager やアプリケーション層コンポーネントが含まれているすべての IBM Cognos Analytics コンピューター上の "インストールの場所/logs" フォルダーにイ ンストールされています。ログ・サーバーは他の IBM Cognos Analytics コンポー ネントとは異なるポートを使用するため、ローカル・コンピューターでディスパッ チャーなどの他のサービスが使用不可になっても、イベント記録は続行されます。

次のワークフローは、ログ記録の準備に必要なタスクを示しています。



- 計画の段階では、使用する環境に合ったログ記録設定を決めます。例えば、さま ざまなログ・メッセージ・リポジトリーを評価します。リポジトリーとしては、 ローカル・ログ・ファイルに加えて、UNIX または Linux syslog や Windows NT イベント・ログなどのリモート・ログ・サーバーおよびログ・ファイルも候 補となります。データベースに監査ログ情報のみを送信することもできます。シ ステム障害やユーザーによる改ざんからログ・ファイルを保護するために適用可 能な方法など、セキュリティーについて検討してください。
- 設定の段階では、データベースへの接続設定などログ記録の始動プロパティーを 定義します。監査ログを収集する予定であれば、ログ記録データベースも作成す る必要があります。ローカル・ログ・サーバーとリモート・ログ・サーバー間の 通信を保護する必要がある場合は、両方の IBM Cognos Analytics コンピュータ ーで適切な設定変更を行います。また、ユーザー固有のログ記録など、特定のロ グ記録機能を有効にすることもできます。
- ログ記録の設定時に、所属している組織に関連のあるメッセージが重点的に記録 されるように詳細レベルを指定します。ユーザーやレポート処理の状況を監視す るよう監査レポートを設定することもできます。

ログ・メッセージを使用して問題を解決する方法、およびログ記録に関する問題の 解決方法については、「IBM Cognos Analytics トラブルシューティング・ガイド」 を参照してください。

## ログ・メッセージ

ログ・メッセージの場所、およびログ・ファイルのサイズと数を指定できます。また、ログ・サーバーのプロパティーも構成できます。

ログ・メッセージは、デフォルトでは、install_location/logs ディレクトリーに ある cogaudit.log ファイルに保存されます。ログ・メッセージをデータベースに 保存することもできます。詳細については*IBM Cognos Analytics*「インストールおよ び設定ガイド」を参照してください。

ログ・メッセージはトラブルシューティングのみに使用します。レポート、ダッシ ュボード、またはストーリーの使用状況を追跡する場合は、監査レポートを使用し ます。詳細については、 22 ページの『監査レポート』を参照してください。

ログ・サービスの詳細については、 49 ページの『ディスパッチャーとサービス』 を参照してください。

#### ログ記録レベル

ログ記録レベルを設定して、ログ・ファイルまたはログ・データベースに記録する イベントやメッセージを指定します。

イベントとは、サービスの開始や停止など、IBM Cognos 環境で発生する事象の中 でも特に追跡する価値のある重要なものを指します。

ディスパッチャー・サービスごとに異なるログ記録レベルを設定できます。ディス パッチャーごとに設定することも、同じフォルダーにあるすべてのディスパッチャ ーに対して設定することもできます。異なるサービスに異なるログ記録レベルを設 定すると、無関係な情報のログ記録を減らすことができます。例えば、Batch Report サービスのトラブルシューティングを行う場合は、そのサービスにのみ詳細 なログ記録レベルを選択して、ログ・メッセージを必要最低限に抑えることができ ます。サービスのログ記録レベルはそのすべてのコンポーネントに適用されます。

ヒント: Log サービスにはログ記録レベルがありません。

各ログ記録レベルの出力内容は次の表のとおりです。

詳細	最小限	基本	要求	トレース	完全な書式
システムおよ びサービスの 始動および終 了、実行時エ ラー	Х	Х	Х	Х	Х
ユーザー・ア カウントの管 埋と実行時の 使用状況		Х	Х	Х	Х

表 5. ログ記録レベル

表 5. ログ記録レベル (続き)

詳細	最小限	基本	要求	トレース	完全な書式
		X	X	X	X
ユーサーの要					
*					
サービスへの			Х		X
要求と応答					
すべてのコン				Х	Х
ポーネントに					
対するすべて					
の要求とその					
パラメーター					
値					
IBM Cognos				Х	Х
コンポーネン					
トに対する他					
のクエリー					
(ネイティブ・					
クエリー)					

サーバーで記録するログの量を管理することで、システムのパフォーマンスを維持 できます。ログ記録の範囲が広範囲に及ぶとサーバーのパフォーマンスに影響を与 えるため、ログ記録レベルを上げると IBM Cognos ソフトウェアのパフォーマンス が低下する場合があります。

デフォルトのログ記録レベルは「最小限」です。「最大」のログ記録および「トレ ース」のレベルは、お客様サポートの指示の下で、詳細なトラブルシューティング のためだけに使用してください。これらのレベルを使用すると、サーバーのパフォ ーマンスが大幅に低下する場合があります。

監査レポートを使用する場合は、ログ記録のレベル設定のガイドラインについて 22 ページの『監査レポートのセットアップ』を参照してください。監査レポートの ログ・レベルの設定については、 22 ページの『監査レポート』を参照してくださ い。

#### レポート検証レベルとログ記録レベル

対応するログ記録のレベルを設定することで、レポート検証レベルに関する情報を 収集できます。レポート検証メッセージをシステム・ログ・メッセージに含めるこ とができます。

検証情報は、さまざまな方法で使用できます。システムの応答が一般的におもわし くない場合は、ログ記録のレベルを高く設定できます。これによって記録される追 加の情報が、どのレポートでエラーが生じているかと、その原因を特定する上での 手掛かりになる場合があります。ログに警告メッセージが表示されている場合は、 ユーザーに対して問題となる結果がもたらされていることが考えられるため、問題 のレポートの所有者にアラートすることができます。 レポート検証には 4 つのレベルが、ログ記録には 5 つのレベルがあります。次の 表に、これらの関係を示します。

表 6. レポート検証レベルとログ記録レベル

レポート検証レベル	ログ記録レベル
エラー	最小限、標準
警告	要求
キー変換	トレース
情報	完全な書式

ログ記録レベルを高く設定すると、システムのパフォーマンスは低下します。通 常、エラーに関する情報を収集するにはログ記録を「最小限」または「標準」に、 エラーと警告に関する情報を収集するには「要求」に設定します。

レポートとレポートの検証については、「*IBM Cognos Analytics - Reporting* ユーザ ー・ガイド」を参照してください。

#### ネイティブ・クエリー・ログ記録

レポートのデータ・ソースに対して実行するクエリーを含む監査レポートを作成す るには、ネイティブ・クエリー・ログ記録を有効にする必要があります。ネイティ ブ・クエリー・ログ記録を使用すると、ユーザーがどのような情報を求めている か、またはレポートが効率的に実行されているかを知ることができます。監査レポ ートの作成の詳細については、 22 ページの『監査レポート』を参照してくださ い。

動的クエリー・モード (DQM) でネイティブ・クエリー・ログ記録を有効にするに は、監査レポートのセットアップ時に、「Query サービス用のログ記録監査レベ ル」を「要求」またはさらに高位の値に設定します。ただし、監査レポートを使用 する場合は、 21 ページの『ログ記録レベルの設定』で説明されているように、 「要求」レベル・ログ記録と関係なくネイティブ・クエリー・ログ記録を有効にす ることができます。

#### レポート実行オプションのログ記録

レポート実行オプションをログ・システムに記録することができます。レポート実 行オプションには、プロンプト・パラメーター、実行オプション、およびレポート の仕様が含まれます。

この機能はデフォルトでは無効になっています。この機能は、Report サービスおよび Batch Report サービスの以下の詳細パラメーターを使用して有効にすることができます。

#### **RSVP.PARAMETERS.LOG**

このパラメーターを true に設定すると、実行オプションおよびプロンプ ト・パラメーターがログに記録されます。 デフォルト:False

#### **RSVP.REPORTSPEC.LOG**

このパラメーターを true に設定すると、レポートの仕様がログに記録されます。

デフォルト:False

Report サービスおよび Batch Report サービスのこれらのパラメーターの設定については、 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』を参照してください。

#### ログ記録レベルの設定

ログ記録レベルを設定して、ログ・ファイルまたはログ・データベースに記録する イベントやメッセージを指定します。

イベントとは、サービスの開始や停止など、IBM Cognos 環境で発生する事象の中 でも特に追跡する価値のある重要なものを指します。

システムに対して設定するログ記録レベルは、すべてのディスパッチャーとサービ スに適用されます。ディスパッチャー・レベルで設定するログ記録レベルは、その ディスパッチャーと関連付けられたすべてのサービスに適用されます。個別のサー ビスに対して設定するログ記録レベルは、すべてのディスパッチャーのそのサービ スに適用されます。

ディスパッチャーに対してログ記録レベルを設定すると、システムに対して設定さ れているログ記録レベルが上書きされます。サービスに対してログ記録レベルを設 定すると、ディスパッチャーまたはステムに対して設定されているログ記録レベル を上書きします。

トラブルシューティングの目的でログ記録を使用する場合は、ログ記録のレベル設定のガイドラインについて 18 ページの『ログ記録レベル』を参照してください。 監査レポートを使用する場合は、 22 ページの『監査レポートのセットアップ』を 参照してください。

#### 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照し てください。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 ログ記録レベルを設定する対象に応じて「すべてのディスパッチャー」または 「サービス」をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. ログ記録レベルを設定する項目に対して、その「操作」メニューから「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. リストをフィルターに掛けるには、「カテゴリー」メニューで「ログ記録」をク リックします。
- 6. リストで、対象サービスを検索し、「値」メニューから対象サービスのログ記録 レベルを選択します。
- そのサービスでネイティブ・クエリー・ログ記録を使用可能で、それを使用する 場合は、「Batch Report サービス用ネイティブ・クエリーの監査」チェック・ ボックスを選択します。 詳細については、 20 ページの『ネイティブ・クエリ ー・ログ記録』を参照してください。
- 8. 「**OK**」をクリックします。

# 監査レポート

監査レポートを使用して、ログ記録データベース内のレポート、ダッシュボード、 およびストーリーのアクティビティーに関する情報を参照します。

監査レポートは、レポート、ダッシュボード、およびストーリーへのアクセスに関 する情報を示します。この情報は、レポート、ダッシュボード、またはストーリー が作成、実行、または変更されるときにログ記録データベースに記録されます。こ れには、レポート、ダッシュボード、またはストーリーの名前と場所、それを実行 または変更したユーザーの名前、およびそれが生じた日時が含まれます。

監査情報の使用方法には以下が含まれます。

- キャパシティー・プランニング
- ライセンスへの準拠
- パフォーマンスの監視
- 未使用コンテンツの識別

IBM Cognos Analytics 拡張サンプルには、サンプル監査レポートが含まれていま す。詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* サンプル・ガイド」を参照してください。

#### 監査レポートのセットアップ

監査レポートを作成したり、IBM Cognos ソフトウェアに用意されているサンプル 監査レポートを使用したりする前に、監査レポートを設定する必要があります。

監査レポートを有効にするには、すべてまたは選択した IBM Cognos サービスのロ グ記録レベルを「標準」(監査が有効) または「要求」に設定します。ログ記録レベ ルを「最小」に設定した場合は、監査が無効になります。「最大」のログ記録およ び「トレース」のレベルは、お客様サポートの指示の下で、詳細なトラブルシュー ティングのためだけに使用してください。これらのレベルを使用すると、サーバー のパフォーマンスが大幅に低下する場合があります。

#### 手順

 組織で使用されるデータベース・システム内でログ記録データベースをセットア ップします。
詳しくは、「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」で、ロ グ・データベースを作成するためのガイドラインを参照してください。

- 2. IBM Cognos Configuration の「環境」 > 「ログ記録」の下で、ステップ 1 で作成したデータベースにログ・メッセージを送信するように設定します。
- 3. 「**Cognos Administration**」で、Cognos サービスに適切なログ記録レベルを設 定します。
  - a. 「管理」 > 「管理コンソール」に移動します。
  - b. 「ステータス」タブで「システム」を選択します。
  - c. 「スコアカード」ペインで、「すべてのディスパッチャー」ビューを選択し ます。
  - d. ディスパッチャーの「操作」メニューで、「プロパティーを設定」をクリッ クして「設定」タブをクリックします。
  - e. 「カテゴリー」ドロップダウン・リストから、「ログ記録」を選択します。
  - f. Content Manager Cache サービス、Content Manager サービス、Query サービスに「標準」のログ記録レベルを設定します。監査ログ記録は、組織 の要件に応じて他のサービスに対して有効にすることもできますし、サーバ ーのパフォーマンスに対する影響が気にならなければ、すべてのサービスに 対して有効にすることさえ可能です。
  - g. 互換クエリー・モード (CQM) でネイティブ・クエリー・ログ記録を有効に するには、以下のチェック・ボックスを両方とも選択します。
    - Batch Report サービス用ネイティブ・クエリーの監査
    - Report サービス用ネイティブ・クエリーの監査
  - h. 動的クエリー・モード (DQM) でネイティブ・クエリー・ログ記録を有効に するには、「Query サービス用のログ記録監査レベル」を「要求」または さらに高位の値に設定します。
  - i. 「**OK**」をクリックします。
- 4. Cognos Configuration で、「IBM Cognos」サービスを再始動します。

## 保護されているエラー・メッセージの完全な詳細表示

機密情報が含まれている可能性のある詳細なエラー・メッセージを表示できます。

IBM Cognos のエラー・メッセージには、サーバー名などの機密情報が含まれてい る場合があります。デフォルトでは、IBM Cognos Application Firewall のエラ ー・メッセージの保護機能オプションが有効になっています。ユーザーには、エラ ーが発生したことを示す情報のみが表示されます。

適切な権限が付与されているなら、詳細エラー・メッセージを取得できます。また、ログ・メッセージを確認することもできます。 18 ページの『ログ・メッセー ジ』を参照してください。

#### 手順

 ユーザー・エラー・メッセージでエラー・コード ID を見つけます。例えば、 次のメッセージのエラー・コードは secureErrorID:2004-05-25-15:44:11.296-#9 です。 エラーが発生しました。管理者に連絡してください。詳細なエラー情報は CAF により次の SecureErrorID で記録されました:2004-05-25-15:44:11.296-#9

- 2. *install_location*/logs ディレクトリーにある cogaudit.log ファイルを開きま す。
- 3. エラー・コード ID を検索して該当するエラー・メッセージを特定します。

# コア・ダンプ・ファイルの作成の無効化

コア・ダンプ・ファイルは、IBM Cognos プロセスの処理不可能な例外や異常終了 など、重大な問題に対して作成されます。

このような問題が発生した場合、次のエラー・メッセージが表示されます。 Report Server not responding.

コア・ダンプ・ファイルはサイズが大きく、問題が発生するたびに新しいファイル が作成されるため、コア・ダンプ・ファイルを無効化することもできます。コア・ ダンプ・ファイルを必要とするような問題が発生したときには、コア・ダンプ・フ ァイルを再度有効化できます。

トラブルシューティングにおいて必要なければ、IBM Cognos サーバー・インスト ール環境の "\bin" ディレクトリーから、既存のコア・ダンプ・ファイルを削除する ことも可能です。Microsoft Windows 環境では、コア・ダンプ・ファイルには .dmp という拡張子が付けられ、ファイル名は プロセス *ID*.dmp という形式になり ます (例えば BIBusTKServerMain_seh_3524_3208.dmp)。 UNIX 環境では、"core" という名前が付けられます。Linux 環境では、core.プロセス *ID* というファイル名 になります。

# 手順

- IBM Cognos Analytics がインストールされているサーバーの install_location¥configuration ディレクトリーで cclWinSEHConfig.xml ファ イルを開きます。
- 設定要素で、環境変数を次のように変更して、0 (ゼロ) に設定します。
   <env_var name="CCL_HWE_ABORT" value="0"/>
- 3. ファイルを保存します。

# 特定ユーザーの問題を診断するためのログ記録の使用

ログを使用すると、特定の1人以上のユーザーに発生する問題を診断できます。

特定ユーザーのログのみを記録するように一時的に設定します。問題の解決後は、 ユーザー固有のログ記録を無効にして通常のログ記録を再開します。既存のログ記 録設定には影響を与えません。

特定ユーザーのログ記録を有効および無効にするには、Java Management Extensions (JMX) のリモート処理サービスを使用します。JMX は、アプリケーシ ョンとサービス指向のネットワークを管理および監視するツールを提供する技術で す。JMX リモート処理サービスに接続するには、Java JDK に付属の jconsole 実行 可能ファイルを使用します。ユーザー固有のログ記録の出力は、デフォルトで イン ストールの場所¥logs ディレクトリーに保存されます。

## 始める前に

最初に、IBM Cognos Analytics に対するユーザー固有のログ記録を有効にする必 要があります。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイ ド」を参照してください。

## 手順

- 1. jconsole 実行可能ファイルを起動して次の情報を指定し、JMX リモート処理サ ービスに接続します。
  - データに接続するための URL。例えば、次のようになります。

service:jmx:rmi://Content_Manager_server/jndi/rmi://
monitoring_server:<JMXport>/proxyserver

ここで、*JMXport* は IBM Cognos Configuration の「外部 JMX ポート」 の値で、*Content_Manager_server* と *monitoring_server* はコンピューター名で す。ローカルで接続する場合であっても、localhost という名前は使用しない でください。

- 接続を保護するためのユーザー ID とパスワード。
- IBM Cognos Configuration の「外部 JMX 資格情報」の値。
- リモート処理サーバー接続ウィンドウで、「com.cognos」、「Metrics」、 「camAsyncAA」、「http://<サーバー名>:<ポート番号>/p2pd」と展開し、 「Operations」ノードを選択します。
- ユーザーの CAMID を「enableDyeTrace」フィールドにコピーして、 「enableDyeTrace」ボタンをクリックします。

ヒント: CAMID は、IBM Cognos Administration で次の操作により見つける ことができます。

- 「セキュリティー」タブをクリックし、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- ユーザーの「プロパティーを設定」をクリックし、「検索パス、ID、URL を表示」をクリックします。

IBM Cognos Administration にアクセスできる権限が必要です。詳細につい ては、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してくださ い。

4. ユーザーを正しく有効にしていることを確認するには、「属性」にナビゲートし、「**DyeTracedUsers**」設定の内容を表示します。

# コンポーネント指定 ipf ファイルの編集による特定ユーザーのロ グの実行

コンポーネント固有の ipf ファイルを編集することにより、指定されたユーザーの ログの開始とダイ・トレースの実装を行えます。

#### 手順

1. <filter> 要素を既存 <appender> 定義に追加するか、新規 <appender> 定義を 追加します。 カテゴリーが、<filter> 要素を使用している <appender> 定義を参照している ことを確認する必要があります。

 <appender> 定義がログ・サーバーを指定している場合、ポート値を構成されて いるログ・サーバー・ポートに変更してください。

# 選択カテゴリーを使用した特定ユーザーのログの実行

指定のユーザーのログ記録を開始するには、選択したカテゴリーを使用して 1 つ以 上の appender 定義に出力を配布することにより、ダイ・トレースを実装して出力 をカスタマイズします。

### 手順

- インストールの場所¥configuration ディレクトリーで、トレース対象のコンポ ーネントの ipf トレース・ファイルを見つけます。このファイルの名前は、ipf コンポーネント clientconfig.xml.sample です。例えば、 ipfAAAclientconfig.xml などです。
- 2. 該当する ipf**コンポーネン**トclientconfig.xml.sample ファイルのコピーを ipfclientconfig.xml.off という名前を使用して作成します。
- 3. テキスト・エディターを使用して、ipfclientconfig.xml.off ファイルを開き、 次の変更を行います。
  - 必要な <categories> のログ記録レベルを追加または変更します。
  - 以下の2つのアクションのいずれかを実行します。

既存の最後の <appender> 要素の下に、新しい <appender> セクションを次のように追加します。

または、既存の appender 定義の 1 つに次の行を追加して変更します。

<filter class="com.cognos.indications.LogIPFDyeTraceFilter"/>

これは、</appender> クローズ・タグの前に追加します。

ダイ・トレース・フィルターを適用する <categories> セクションの、
 <appender-ref> 属性を編集して DyeTraceOutput appender または追加された
 フィルターのある appender を参照するようにします。次に例を示します。

```
<category name="Audit.RTUsage.CAM.AAA" class="com.cognos.indications.
LogTypedLogger" additivity="false">
<level value="debug"/>
<appender-ref ref="DyeTraceOutput"/>
</category>
```

- 5. ipfclientconfig.xml.off ファイルを保存します。
- 6. このファイルをアクティブにするために、ipfclientconfig.xml に名前を変更し ます。

 ipfclientconfig.xml ファイルの名前を ipfclientconfig.xml.off に戻せば、 ユーザー固有のログを無効にし通常のログを再開できます。製品を再始動した 後、DyeTracing を適用したユーザーをリセットしてください。

### タスクの結果

60 秒以内に、ユーザー固有のログ記録が自動的にアクティブになり、出力が生成されます。ここで説明した appender では、出力は インストールの場所 ¥logs¥dyetrace_output.log ファイルに保管されます。他の appender について は、その appender に構成されている宛先になります。認証セッションが IBM Cognos と確立されると、指定されたユーザーによるアクションだけがログに記録 されます。

指定されたユーザーと関連していない標識を受信する場合があります。例えば、製品を始動した際、またはユーザーの認証が完了する前に標識がログされた際などに 発生します。カテゴリーのログ・レベルを変更して、標識の数が多くなり過ぎるこ とを避けられます。

# 特定ユーザーのログ記録の無効化

特定ユーザーのログ記録を無効にできます。

#### 手順

24 ページの『特定ユーザーの問題を診断するためのログ記録の使用』で作成した "ipfclientconfig.xml" ファイルを削除します。

## タスクの結果

すべてのユーザーについて通常のログ記録が再開されます。ユーザー固有のログ記録を停止するには、最長で 30 秒かかる可能性があります。

# 第4章 システム・パフォーマンス評価指標

IBM Cognos Administration の評価指標を使用してシステム・パフォーマンスを監 視できます。これを使用すれば、問題を素早く診断して修正できます。

例えば、キュー内のアイテムが 50 を超えていないかどうかや、指定の時間を超え て待機しているアイテムがないかどうかを調べることができます。

**IBM Cognos Administration** 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』 にアクセスできる権限が必要です。

評価指標を使用すると、システム全体のステータスのみでなく、個々のサーバー、 ディスパッチャー、およびサービスのステータスも評価できます。各評価指標スコ アの属性の表示、評価指標スコアの計算に使用されるしきい値の設定、評価指標の リセットを実行できます。PowerCube が再構築された場合は、Report サービス接 続の更新が必要となる場合があります。

ディスパッチャーやサービスの開始および停止 53 ページの『ディスパッチャーと サービスの開始および停止』、ディスパッチャーの登録解除 56 ページの『環境か らのディスパッチャーの削除』などの機能を実行することもできます。

ログ・ファイルを使用して、長期にわたるパフォーマンスや使用状況を分析できま す 17 ページの『第 3 章 ログの設定』。

トラブルシューティング用に評価指標のダンプ・ファイルを作成できます。

# 評価指標データの収集方法

評価指標のデータは、評価指標に関連付けられた評価指標変更タイプ、時間範囲、 および収集タイミングにより、収集方法が異なります。

これらの要素が個別の評価指標に適用される方法の詳細については、 30 ページの 『システム評価指標』を参照してください。

### 評価指標変更タイプ

評価指標に対して表示される値は、次の表で示す変更タイプによって異なります。

表 7. 評価指標変更タイプ

変更タイプ	説明
カウンター	値は、変更のたびに増加する合計値。例え ば、要求の数はカウンター変更タイプです。
ゲージ・チャート	値は、イベントに応じて時間とともに増減す る。例えば、ある時点で実行しているプロセ スの数は、ゲージ変更タイプです。

# 評価指標の時間範囲

評価指標の値が収集される間隔は、次の表で示すように評価指標によって異なりま す。

表 8. 評価指標の時間範囲

時間範囲	説明
特定の時点	値は、評価指標グループをリセットしたとき やサービスを再開したときなど、特定の時点 で収集される。
リセット以降	値は、評価指標が最後にリセットされてから の期間について収集される。

# 評価指標収集タイミング

評価指標の値が収集されるタイミングは、次の表で示すように評価指標によって異 なります。

表 9. 評価指標収集タイミング

収集タイミング	説明
変更時	要求の数が変化したときなど、変更が発生し た時点で値を収集する。
要求時	「スコアカード」ウィンドウで新しいアイテ ムを選択したときまたは評価指標グループを リセットしたときに値を収集する。詳細につ いては、 42 ページの『「ステータス」タブ の「システム」ページのウィンドウ』および 46 ページの『メトリックのリセット』を参 照してください。
不明	収集タイミングが不明。

# システム評価指標

IBM Cognos ソフトウェア・インストールのパフォーマンスの監視に役立つさまざ まな評価指標があります。

詳細については、 29 ページの『評価指標データの収集方法』を参照してください。

評価指標の中には、サービスが再開されるとリセットされるものがあります。一部 の評価指標は手作業でリセットすることもできます 46 ページの『メトリックのリ セット』。

システムおよびサーバーのレベルでは、評価指標には関連するすべてのディスパッ チャーが含まれます。ディスパッチャーのレベルでは、評価指標には関連するすべ てのサービスが含まれます。サーバー・グループの場合は、評価指標はグループ内 のすべてのディスパッチャーに関するものです。

#### セッション評価指標

セッション評価指標を使用すると、ユーザー・セッションを監視できます。これ は、曜日や時間帯による使用状況パターンなどのシステムの傾向を監視するのに役 立ちます。また、他の評価指標のコンテキストを理解するためにもセッション評価 指標が役立ちます。例えば、セッション数が異常に多い場合は、それが原因となっ てキューの長さの評価指標が通常より高くなる可能性があります。詳細について は、『キュー評価指標』を参照してください。

次のセッション評価指標を使用できます。

セッション数

現在アクティブになっているユーザー・セッションの数を指定します。

表 10. セッション数

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時

• 高水準セッション数

最後のリセット以降でのアクティブなユーザー・セッションの最大数が指定され ます。

表 11. 高水準セッション数

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時

• 低水準セッション数

最後のリセット以降でのアクティブなユーザー・セッションの最小数が指定され ます。

表 12. 低水準セッション数

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時

### キュー評価指標

キュー評価指標を使用すると、システムが要求に遅れずに対応しているかどうかを 判断できます。例えば、要求がキューに長時間留まっている場合は、要求に対応す るために十分なリソースがない可能性があります。 キューを使用するサービス (Report サービスや Report Data サービスなど) では、 キュー評価指標を使用できます。

システム・レベルでは、次のエントリーに対してキュー評価指標を使用できます。

• ジョブ

ジョブ・キューには、すべての Event Management サービスによって使用され る内部キューに関連する評価指標が含まれます。

タスク

タスク・キューには、すべての Monitor サービスによって使用される内部キューに関連する評価指標が含まれます。このキューには、処理がまだ正常に終了していないタスクが含まれています。

• SMTP

SMTP キューには、すべての Delivery サービスによって使用される内部キュー に関連する評価指標が含まれます。このキューには、送信前の E メールが含ま れています。

これらのキュー評価指標グループに対して使用できる評価指標の中には、有効化し ないと表示されないものがあります。詳細については、 110 ページの『ジョブ・キ ュー、SMTP キュー、タスク・キュー評価指標の有効化』 を参照してください。

次のキュー評価指標を使用できます。

待ち時間

要求がキュー内に留まった平均時間が秒単位で指定されます。

表 13. 待ち時間

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

• キュー通過要求数

キューを通過した要求の数を指定します。

表 14. キュー通過要求数

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

• キュー長

現在キューにあるアイテムの数を指定します。

表 15. キュー長

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

高水準キュー長

最後のリセット以降にキューに存在したアイテムの最大数が指定されます。

表 16. 高水準キュー長

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

低水準キュー長

最後のリセット以降にキューに存在したアイテムの最小数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

キュー待機時間

要求がキュー内に留まった累計時間が日、時間、分、および秒で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

高水準キュー待機時間

要求がキューで待機した最大時間が日、時間、分、および秒で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

• 低水準キュー待機時間

要求がキューで待機した最小時間が日、時間、分、および秒で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
サービス			

### JVM 評価指標

JVM 評価指標を使用すると、Java Virtual Machine および関連するヒープ・サイ ズ (現在使用されているメモリーの量)を監視できます。例えば、ディスパッチャー が長時間実行されており、ヒープの使用量が多い場合は、ディスパッチャーの再起 動が必要になることがあります。最大ヒープ・サイズの評価指標を調べれば、使用 可能なハードウェア・メモリーの量に基づいて、適切な量のメモリーが JVM に割 り当てられているかどうかを判断できます。現在のヒープ・サイズと最大ヒープ・ サイズを比較すれば、使用可能なメモリーがどの程度使用されているかを確認でき ます。現在のヒープ・サイズが最大ヒープ・サイズに近づいている場合は、設定を 調整して、特定の JVM の負荷の削減が必要になる場合があります。現在のヒー プ・サイズは、システムの現在の負荷によって大幅に変動することがあります。

調整の詳細については、 76 ページの『サーバー・パフォーマンスの調整』を参照 してください。 次の JVM 評価指標を使用できます。

• 現在のヒープ・サイズ (バイト単位)

JVM ヒープの現在のサイズがバイト単位で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
ディスパッチャー	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時

• 要求された初期ヒープ・サイズ (バイト単位)

始動時に JVM がオペレーティング・システムに要求した初期メモリー量がバイ ト単位で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
ディスパッチャー	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時

• 最大ヒープ・サイズ (バイト単位)

JVM が使用できるメモリーの最大量がバイト単位で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
ディスパッチャー	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時

稼働時間

JVM が稼働している時間の長さが日、時間、分、および秒で指定されます。

システム・レベル、サーバー・レベル、サーバー・グループ・レベルでは、関連するすべてのディスパッチャーの最大の値になります。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	特定の時点	要求時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			

• 確保されたヒープ・サイズ

JVM で使用するために確保されたメモリーの量を指定します (バイト単位)。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
ディスパッチャー	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時

## 要求評価指標

要求評価指標を使用すると、要求の量、サービスの動作状態、応答時間、処理時間 を監視できます。全般的な要求評価指標にはすべてのサービスのデータが含まれ、 すべてのディスパッチャーの評価指標が集約されています。特定のサービスの要求 評価指標には、そのサービスのデータのみが含まれます。

システム・レベル、サーバー・レベル、サーバー・グループ・レベルでは、評価指標には関連するすべてのディスパッチャーのデータが含まれます。ディスパッチャ ーのレベルでは、評価指標には関連するすべてのサービスが含まれます。

次の要求評価指標を使用できます。

• 現在時刻

サービスで時刻値を解釈するために使用される現在の日時が指定されます。

サービスがクロック同期メカニズムを備えていない場合にのみ使用します。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
サービス	カウンター	特定の時点	要求時

• 前回応答時間

最後に成功または失敗した要求の処理時刻が日、時間、分、および秒で指定され ます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	特定の時点	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

失敗した要求の数

失敗した (エラーが返された) サービス要求の数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

• 処理済みの要求の数

処理された要求の数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

成功した要求の数

成功した (エラーが返されなかった) サービス要求の数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

失敗した要求の割合

処理された要求のうち失敗したものの割合が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

成功した要求の割合

処理された要求のうち成功したものの割合が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

• 高水準応答時間

成功または失敗した要求の処理に要した最大時間が日、時間、分、および秒で指 定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

## • 低水準応答時間

成功または失敗した要求の処理に要した最小時間が日、時間、分、および秒で指 定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

#### • 成功した要求の平均処理時間(秒)

成功した要求の処理に要した時間の平均が秒単位で指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

• サービス時間

すべての要求の処理に要した時間が日、時間、分、および秒で指定されます。

エントリー	変更時間	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

#### • 失敗した要求のサービス時間

すべての失敗したサービス要求の処理に要した時間が日、時間、分、および秒で 指定されます。

エントリー	変更時間	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

• 成功した要求のサービス時間

すべての成功したサービス要求の処理に要した時間が日、時間、分、および秒で 指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	カウンター	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

• 成功した要求の1分あたりの平均処理数

1 分間に処理された成功要求数の平均が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
ディスパッチャー			
サービス			

# **Report** サービスと **Batch Report** サービス、および **MetaData** サ ービスのプロセス評価指標

Report サービスと Batch Report サービス、および MetaData サービスでは、次のプロセス評価指標を使用できます。

プロセス数

現在実行されているプロセスの数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時
サーバー/サーバー・ グループ			
Report サービスと Batch Report サービ ス			
Metadata サービス			

設定されたプロセス数

関連するサービスの次のプロパティーに設定された値と同じ値が指定されます。 - 「ピーク時の [サービス名] サービスに対する最大プロセス数」

# - 「オフピーク時の [サービス名] サービスに対する最大プロセス数」(非デフ ォルト値)

この値はリセットできません。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	特定の時点	要求時
サーバー/サーバー・ グループ			
Report サービスと Batch Report サービ ス			
Metadata サービス			

高水準プロセス数

システム、サーバー、サーバー・グループの場合は、関連するすべてのリソース のすべての「高水準プロセス数」評価指標の合計が指定されます。

サービスの場合は、前回のリセット以降、任意の時点で実行されていたプロセス の最大数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
Report サービスと Batch Report サービ ス			
Metadata サービス			

低水準プロセス数

システム、サーバー、サーバー・グループの場合は、関連するすべてのリソース のすべての「低水準プロセス数」評価指標の合計が指定されます。

サービスの場合は、前回のリセット以降、任意の時点で実行されていたプロセス の最小数が指定されます。

エントリー	変更タイプ	時間範囲	収集タイミング
システム	ゲージ・チャート	リセット以降	変更時
サーバー/サーバー・ グループ			
Report サービスと Batch Report サービ ス			
Metadata サービス			

# 「ステータス」タブの「システム」ページのウィンドウ

「システム」ページには、システム・ステータスの評価に使用する「スコアカー ド」、「評価指標」、「設定」の 3 つのウィンドウがあります。

一部の列は、タイトルをクリックしてソートすることができます。デフォルトでは、列は昇順にソートされます。昇順でソートするには1回クリックします。降順でソートするには再度クリックします。デフォルトの順序で並べ替えるにはさらにもう1回クリックします。各ウィンドウは個別に更新できます。

「スコアカード」ウィンドウ

「スコアカード」ウィンドウには、システム、サーバー、サーバー・グループ、ディスパッチャー、サービスのエントリーがリストに表示されます。各エントリーに対して評価指標スコアと処理ステータスが表示され、システム・パフォーマンスを評価できます。詳細については、 44 ページの『システム・パフォーマンスの評価』を参照してください。

各評価指標スコアは、次のいずれかのアイコンで表されます。

緑色の円は良好

黄色のひし形は平均的

赤色の正方形は不良

評価指標スコアを表示するには評価指標のしきい値を設定しておく必要がありま す。詳細については、 45 ページの『評価指標のしきい値の設定』を参照してくだ さい。

IBM Cognos Configuration で無効になっているサービスは、リストに表示されません。

各エントリーの評価指標スコアは、個別の子エントリーのパフォーマンスに基づい ています。各エントリーに表示されるステータスは、子エントリーの最低のステー タスです。例えば、あるディスパッチャーのすべての評価指標が良好でも、そのデ ィスパッチャーの 1 つのサービスに不良な評価指標が含まれる場合は、そのディス パッチャーに対して表示される評価指標スコアは不良になります。

ステータスは次のいずれかです。

- 「使用可能」: すべてのコンポーネントが使用可能の場合
- 「一部使用可能」:少なくとも 1 つのコンポーネントが使用可能で、少なくと も 1 つのコンポーネントが使用不可または一部使用不可の場合
- 「使用不可」: すべてのコンポーネントが使用不可能の場合

「グループ操作」メニューを使用すると、ディスパッチャーやサービスの開始および停止 53 ページの『ディスパッチャーとサービスの開始および停止』、ディスパッチャーの登録解除 56 ページの『環境からのディスパッチャーの削除』、ディスパッチャーのテスト 64 ページの『ディスパッチャーのテスト』などの機能を実行できます。各エントリーには「操作」メニューが関連付けられています。これにアクセスするには、エントリーの隣にある矢印をクリックします。

「スコアカード」ウィンドウを使用して、表示したいエントリーにナビゲートでき ます。左上隅にある「ビューを変更」メニューを使用して表示を選択できます。エ ントリーをクリックして選択し、次のレベルのエントリーを表示できます。例え ば、サーバーをクリックすると関連するディスパッチャーが表示され、ディスパッ チャーをクリックすると関連するサービスが表示されます。

「スコアカード」ウィンドウを最大化することで、「スコアカード」ウィンドウに 表示される情報と「評価指標」ウィンドウの重要な評価指標を集約表示できます。 集約表示には、次の情報が含まれています。

- サーバーおよびサーバー・グループの場合は、評価指標スコア、処理ステータス、稼働時間、サービス時間、処理された要求の数、成功した要求の割合が表示されます。
- ディスパッチャーの場合は、評価指標スコア、処理ステータス、プロセス数、サ ービス時間、現在のヒープ・サイズ (バイト単位)、処理された要求の数、成功し た要求の割合が表示されます。
- サービスの場合、表示される情報はサービスによって異なります。

「評価指標」ウィンドウ

「評価指標」ウィンドウには、選択したエントリーの評価指標が表示されます。評価指標グループを展開して、個別の評価指標スコアおよび値を表示できます。各評価指標グループは個別にリセットできます 46 ページの『メトリックのリセット』。

表示するメトリックを選択するには、良好、普通、不良、または 「評価指標スコア なし」の値を示すチェック・ボックスの中から 1 つ以上を選択します。デフォルト では、すべての評価指標が表示されます。評価指標スコアがない評価指標には、し きい値を設定できない評価指標や、しきい値が未設定の評価指標が含まれます。後 者の評価指標を設定するには、まず「評価指標スコアなし」チェック・ボックスを クリックして、これらの評価指標を表示する必要があります。 「設定」ウィンドウ

「設定」ウィンドウには、選択したエントリーに関連する設定が表示専用モードで 表示される。設定を変更するには、「プロパティーを設定」ボタン 🔲 をクリッ クします。

「設定」ウィンドウの設定の詳細については、 49 ページの『第 5 章 サーバー管 理』を参照してください。

# システム・パフォーマンスの評価

IBM Cognos ソフトウェアのパフォーマンスを評価するために、設定したしきい値 に基づく評価指標スコアを表示できます。また、システム・コンポーネントの実行 ステータスも表示できます。

評価指標スコアを表示するには評価指標のしきい値を設定しておく必要がありま す。詳細については、 45 ページの『評価指標のしきい値の設定』を参照してくだ さい。ディスパッチャーやサービスのパフォーマンスが期待より低い場合は、サー バーのパフォーマンスを調整できます 76 ページの『サーバー・パフォーマンスの 調整』。ログ記録の設定の詳細については、 17 ページの『第 3 章 ログの設定』 を参照してください。

### 手順

1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。

「システム」エントリーの評価指標スコアのアイコンで、システム全体のステー タスが示されます。各サーバーの評価指標スコアのアイコンは、そのサーバーの ステータスを示します。「評価指標」ウィンドウには、個別の評価指標がリスト 表示されます。

 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グループ」、「すべてのディスパ ッチャー」、または「サービス」をクリックします。

「すべてのサーバー・グループ」を選択した場合、「デフォルトのサーバー・グ ループ」 をクリックすると、サーバーでグループ化されていないディスパッチ ャーが表示されます。

- 3. 表示されているアイテムの評価指標を表示するには、そのエントリーをクリック します。
- 4. 表示されているエントリーの子を表示するには、そのエントリーをクリックしま す。

ヒント:ウィンドウの「更新」ボタンをクリックすることで、個別のウィンドウ を更新できます。

エントリーのプロパティーを表示または変更するには、エントリーの隣の「操作」メニュー・ボタンをクリックして、「プロパティーを設定」をクリックします。

6. 集約表示にするには、「スコアカード」ウィンドウの「最大化」ボタンをクリッ クします。

ヒント:前の表示に戻るには、「元に戻す」ボタンをクリックします。

# 評価指標スコアの属性の表示

評価指標最後にリセットおよび更新された日時を表示できます。また、しきい値が 設定されている各評価指標スコアの現在のしきい値設定も表示できます。一定の間 隔で収集される評価指標の場合は、値が適用される期間も表示できます。

#### 始める前に

しきい値の設定の詳細については、『評価指標のしきい値の設定』を参照してくだ さい。

### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 対象の表示をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「評価指標」ウィンドウで、表示する評価指標グループを展開 します。
- 4. 「表示指標」ウィンドウの「値」列で、表示する評価指標の値にポインターを合 わせます。

評価指標の名前が表示されます。

5. 一部の評価指標に関する他の情報を表示するには、「その他」をクリックします。

# 評価指標のしきい値の設定

一部の評価指標スコアで使用されるしきい値を設定できます。

許容できるしきい値は、オペレーティング・システムによって異なります。しきい 値を超えると、評価指標スコアのステータスが変化します。

例えば、許容できる最大キュー長が 50 アイテムであると判断するものとします。 「値が低いほうが好ましい」を選択します。高い値を 50 に設定し、低い値を 40 に設定します。キューの長さが 40 アイテム未満に留まっている場合は、評価指標 スコアは緑 (良好) です。キューの長さが 40 アイテムを超えると、評価指標スコア は黄 (普通) になります。キューの長さが 50 アイテムを超えると、評価指標スコア は赤 (不良) になります。

あるいは、成功した要求の割合に対して、「値が高いほうが好ましい」を選択しま す。高い値を 98 に設定し、低い値を 95 に設定します。成功した要求の割合が 95 パーセント未満になると、評価指標スコアが赤 (不良) になります。成功した要求の 割合が 95~98 パーセントの間であれば、評価指標スコアが黄 (普通) になります。 成功した要求の割合が 98 パーセントを超えると、評価指標スコアが緑 (良好) にな ります。

しきい値の変更はただちに有効になります。

しきい値にはデフォルトがありません。評価指標スコアを表示するにはそのしきい 値を設定する必要があります。

### 始める前に

ログ・エントリー 17 ページの『第3章 ログの設定』は次の状況で発生します。

- 評価指標のしきい値を超えたとき
- 動作ステータスなどの列挙された評価指標が変更されたとき

評価指標の値が変更されても、同じ範囲に留まっていれば、ログは生成されません。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 対象の表示をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 評価指標のしきい値を変更するには、「評価指標」ウィンドウで、評価指標の 「しきい値を編集」ボタン をクリックします。
- 「値が高いほうが好ましい」、「値が中間値であるほうが好ましい」、「値が低いほうが好ましい」の中から、適切なパフォーマンス・パターンをクリックします。
- 5. しきい値を指定するには、しきい値ボックスの中をクリックし、しきい値を入力 します。
- 6. しきい値の矢印をクリックして、その値をどちらの範囲に分類するかを指定しま す。

例えば、最大値として 50 を指定し、値が 50 である場合には不良カテゴリーで はなく平均カテゴリーに分類する場合は、矢印をクリックして、そのしきい値を 平均カテゴリーに移動します。

7. 「**OK**」をクリックします。

# メトリックのリセット

評価指標のグループをいつでもリセットできます。

評価指標のグループをリセットすると、グループ内のすべての評価指標がリセット されます。例えば、サーバーの場合は、「キュー - Report サービス」の評価指標 グループをリセットできます。 リセットできない評価指標もあります。例えば、JVM 評価指標は、最後にリセット された後に再計算されたため、リセットできません。

## 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 対象の表示をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

「評価指標」ウィンドウで、リセットする評価指標グループの「リセット」ボタン
 をクリックします。

# システムの評価指標のリセット

システムにするすべての評価指標を同時にリセットできます。

リセットできない評価指標もあります。例えば、JVM 評価指標は、最後にリセット された後に再計算されたため、リセットできません。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「スコアカード」ウィンドウで、「操作」、「システムの評価指標すべてをリセット」の順にクリックします。

# Report サービス接続の更新

PowerCube が再構築された場合は、現在のユーザーに影響を与えずに接続情報を更新できます。

まず、再構築された PowerCube への接続情報を更新し、次に、再構築された PowerCube を新しい接続に対して使用するようにレポート・サーバーを更新する必 要があります

詳細については、 180 ページの『更新済み PowerCube の配布』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- すべてのサーバーが表示された状態で、目的のサーバーのチェック・ボックスを クリックし、「グループ操作」メニューから「Report サービス接続を更新」を クリックします。

ヒント:この処理は、「システム」、「サーバー」、および「ディスパッチャー」の横にある「操作」メニューから実行することもできます。また、「設定」

タブをクリックしてから、「ディスパッチャーとサービス」をクリックして、 「Report サービス接続を更新 - 設定」ボタンをクリックすることもできます。

3. 「結果を表示」ページが表示されたら、操作が成功したことを確認して「閉じる」をクリックします。

# 第5章 サーバー管理

サーバー管理には、IBM Cognos システムの管理と保守、およびシステム・パフォ ーマンスの調整が含まれます。

サーバーの管理作業を行うには、IBM Cognos の各コンポーネント、および IBM Cognos のインストールと設定の方法について理解している必要があります。IBM Cognos サーバーやコンポーネントを複数のコンピューターにインストールした場合は、すべての機能をシステム管理ツールで管理できます。IBM Cognos 環境について詳しくは、「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

一部のサーバー管理タスクでは、管理コンポーネントを使用し、アクセス管理機能
237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』 に対する権限が必要になります。

# ディスパッチャーとサービス

ディスパッチャーは、Web サーバーのゲートウェイまたは他のソフトウェアから送 信される IBM Cognos サービス要求に対する最初の受け入れ口です。ディスパッチ ャーの役割は、ルーティング要求を処理し、ユーザー要求の負荷をさまざまな IBM Cognos サービスに分散することです。

IBM Cognos 環境では、複数のディスパッチャーを使用できます。このような分散 インストールでは、その環境にインストールおよび設定されている Content Manager またはアプリケーション層コンポーネントの個々のインスタンスに 1 つ のディスパッチャーが設定されます。

IBM Cognos ソフトウェアをインストールして設定すると、デフォルトでは 1 台の コンピューターにつき 1 つのディスパッチャーが使用可能となります。各ディスパ ッチャーには、次の表のような一連の関連サービスがあります。

# IBM Cognos サービス

IBM Cognos Analytics をインストールして設定すると、デフォルトでは 1 台のコ ンピューターにつき 1 つのディスパッチャーが使用可能となります。各ディスパッ チャーには、次の表のような一連の関連サービスがあります。

サービス	目的
Agent サービス	エージェントを実行する。エージェントが実 行されているときにエージェントの条件が一
	致すると、Agent サービスから Monitor サ ービスに、タスクを実行するように指示が送 られます。

表 17. IBM Cognos サービス

サービス	目的
Annotation サービス	IBM Cognos ワークスペース経由でレポート にコメントを追加する。このコメントは、レ ポートの各バージョンにわたって存続しま す。
Batch Report サービス	レポートを実行するためのバックグラウンド 要求を管理し、Monitor サービスのための出 力を行う。
Content Manager Cache サービス	頻度の高いクエリー結果を各ディスパッチャ ーにキャッシュすることによって、全体的な システム・パフォーマンスと Content Manager の拡張性を高める。
Content Manager サービス	<ul> <li>追加、クエリー、更新、削除、移動、コピーなどの Content Store 内のオブジェクト操作機能を実行する。</li> <li>インポートやエクスポートなどの Content</li> </ul>
	Store 管理機能を実行する。
Delivery サービス	Report サービス、Job サービス、Agent サ ービスなどの他のサービスのために、外部 SMTP サーバーに E メールを送信する。
Event Management サービス	レポート、ジョブ、エージェント、Content Store 保守、配布インポートおよびエクスポ ートを表すイベント・オブジェクトの作成、 スケジュール、管理を行う。
Graphics サービス	Report サービスのために画像を生成する。 画像は、Raster、Vector、Microsoft Excel XML、または PDF という 4 種類の形式で 生成できます。
Human Task サービス	ヒューマン・タスクを作成および管理できる ようにする。レポート承認などのヒューマ ン・タスクは、その場で、またはその他の任 意のサービスによって、個人またはグループ に割り当てることができます。
Interactive Discovery Visualization サービ ス	視覚化の推奨を提供するために Cognos Workspace によって使用される。
Job サービス	ジョブ・ステップをバックグラウンドで実行 するように Monitor サービスに指示を送る ことでジョブを実行する。ステップには、レ ポート、その他のジョブ、インポート、エク スポートなどがあります。

表 17. IBM Cognos サービス (続き)

サービス	目的
Log サービス	ディスパッチャーや他のサービスによって生 成されたログ・メッセージを記録する。Log サービスによって記録されるログ情報の保存 先として、ファイル、データベース、リモー ト・ログ・サーバー、Windows イベント・ ビューアー、UNIX システム・ログを指定で きます。これにより、次に挙げるログ情報を 自分自身で、あるいは Cognos Software Services の担当者が分析できます。 ・ セキュリティー・イベント
	<ul> <li>システムおよびアプリケーションのエラー 情報</li> <li>選択した診断情報</li> </ul>
Metadata サービス	Cognos Viewer、Reporting、Query Studio、Analysis Studio で表示されるデー タ系統情報をサポートする。系統情報には、 データ・ソースや算出式などの情報がありま す。
Migration サービス	IBM Cognos Series 7 から IBM Cognos Analytics への移行を管理する。
Mobile サービス	<ul> <li>IBM Cognos Mobile クライアントに関連するアクティビティーを管理します。</li> <li>レポートおよび分析をモバイルでの使用のために変換する。</li> <li>レポートおよび分析のコンテンツを圧縮し、Over the Air 方式でモバイル・デバイスに短時間で配布してそれらのデバイスからアクセスできるようにする。</li> <li>レポートおよび分析のコンテンツをモバイル・デバイスにプッシュする。</li> <li>モバイル・デバイスと環境との間でレポートを検索、表示、および実行するために、レポート関連および分析関連の要求の着信と発信を容易にする。</li> <li>サーバー上のモバイル Content Store をモバイル・デバイス上のモバイル・データベースと同期させる。</li> <li>Simple Object Access Protocol (SOAP)メッセージをワイヤレス対応メッセージに変換する。</li> <li>モバイル・デバイスと通信する。</li> </ul>

表 17. IBM Cognos サービス (続き)

表	17.	IBM	Cognos	サービス	(続き)
---	-----	-----	--------	------	------

サービス	目的
Monitor サービス	<ul> <li>スケジュールされているか、後で実行する ように送信されているか、またはバックグ ラウンド・タスクとして実行されているタ スクの監視および実行を管理する。</li> <li>スケジュールされたタスクを処理するター ゲット・サービスを割り当てる。例えば Monitor サービスでは、Batch Report サ ービス、Job サービス、Agent サービス に対して、それぞれレポートの実行、ジョ ブの実行、エージェントの実行の指示が送 られる場合があります。</li> <li>Content Manager 内に履歴オブジェクト</li> </ul>
	を作成し、エントリー実行のフェイルオー バーと回復を管理する。
Planning Administration Console サービス	Contributor Administration Console との通 信を管理する。
Planning Data サービス	Contributor プラン・データからリアルタイ ム・レポートを作成するための通信を管理す る。
Planning Job サービス	Planning Job サーバー・サブシステムとの 通信を管理する。
Planning Web サービス	Contributor Web および Contributor Add-in for Excel ユーザーとの通信を管理す る。
PowerPlay サービス	PowerPlay レポートを実行するための要求を 管理する。
Presentation サービス	<ul> <li>他のサービスから受け取った汎用の XML 応答を、HTML や PDF などの出力形式 に変換する。</li> <li>表示、ナビゲーション、および管理機能を 提供する。</li> </ul>
Query サービス	動的クエリー要求を管理し、要求元の Batch Report サービスまたは Report サービスに 結果を返す。
Relational Metadata サービス	リレーショナル・データベースからメタデー タをインポートするために Framework Manager と CubeDesigner によって使用さ れる。実行時に Dynamic Query Analyzer によって使用されることもあります。
Report Data サービス	IBM Cognos Analytics と、データを使用す る IBM Cognos for Microsoft Office や IBM Cognos Mobile などのアプリケーショ ンの間の、レポート・データの転送を管理す る。

サービス	目的
Report サービス	レポートを実行するための双方向要求を管理 し、ユーザーに出力を提供する。
リポジトリー・サービス	アーカイブされたレポート出力をアーカイ ブ・リポジトリーまたはオブジェクト・スト アから取得する要求を管理する。
System サービス	アプリケーション全体にわたる設定パラメー ターの取得に使用される Bus API 準拠のサ ービスを定義する。また、ロケール文字列を 正規化して検証し、アプリケーションでサポ ートされているロケールにロケール文字列を マップする方法も提供されます。
Visualization Gallery サービス	Reporting で Visualization Gallery への RAVE1 視覚化のロードおよび取得のために 使用される。 Report サービスで必要です。

表 17. IBM Cognos サービス (続き)

# ディスパッチャーとサービスの開始および停止

ディスパッチャーとサービスは、手動で開始および停止できます。サービスが応答 しなくなったら、一度停止してから再開する必要があります。

各ディスパッチャーおよびサービスに対して、次の操作を実行できます。

- 開始
- ただちに停止し、実行中、またはキューにある全要求を処理の完了を待たずに削除
- 実行中、およびキューにある要求を処理後に停止

IBM Cognos 環境では、ディスパッチャーとサービスをすべて一度に停止または開始できます。

設定ツールを使用して IBM Cognos ソフトウェアを起動すると、その設定ツールで 無効と指定されているディスパッチャーとサービスを除いて、すべてのディスパッ チャーとサービスが開始されます。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インスト ールおよび設定ガイド」を参照してください。

デフォルトでは、インストール先のコンピューターを再起動すると、すべてのサー ビスが開始されます。

### 始める前に

サービスを停止すると、そのサービスのプロセスもすべて停止します。ディスパッ チャーを停止すると、そのサービスがすべて停止されます。中断されたディスパッ チャーにアクティブな Content Manager がある場合は、管理者を除くすべてのユ ーザーがロック・アウトされます。

サービスを停止すると、ステータスが「中断中」 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標』になります。

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

## 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 対象のディスパッチャーまたはサービスをクリックします。

「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グループ」、または「すべてのディスパッチャー」をクリックします。サービスを選択する場合は、「サービス」 にポインターを置き、目的のサービスをクリックします。

3. ディスパッチャーまたはサービスの操作メニュー矢印をクリックし、実行する操 作を選択します。

選択したディスパッチャーまたはサービスに応じて、次の操作を実行できます。

目的	スコアカード・ウィン ドウの表示	操作
システムにあるすべてのディ スパッチャーを開始	すべてのサーバー	「グループ操作」メニューで、「デ ィスパッチャーを起動」をクリック します。 ヒント:操作を一部のエントリーの みに適用するには、1 つ以上のエン トリーのチェック・ボックスを選択 してから、目的の操作をクリックし ます。
サーバー・グループのすべて のディスパッチャーを開始	すべてのサーバー・グ ループ	サーバー・グループの「操作」メニ ューで、「ディスパッチャーを起 動」をクリックします。
サーバーのすべてのディスパ ッチャーを開始	すべてのサーバー	サーバーの「操作」メニューで、 「ディスパッチャーを起動」をクリ ックします。
特定のディスパッチャーを開 始	すべてのディスパッチ ャー	ディスパッチャーの「操作」メニュ ーから、「開始」をクリックしま す。
特定のサービスを開始	すべてのサービス	サービスの「操作」メニューから、 「開始」をクリックします。
システムにあるすべてのディ スパッチャーを停止	すべてのサーバー	「グループ操作」メニューで、「デ ィスパッチャーをただちに停止」ま たは「実行中およびキューにある要 求を処理後にディスパッチャーを停 止」をクリックします。

表 18. ディスパッチャーとサービスの開始および停止: 目標、ビュー、および操作

目的	スコアカード・ウィン ドウの表示	操作
サーバー・グループのすべて のディスパッチャーを停止	すべてのサーバー・グ ループ	サーバー・グループの「操作」メニ ューで、「ディスパッチャーをただ ちに停止」または「実行中およびキ ューにある要求を処理後にディスパ ッチャーを停止」をクリックしま す。
サーバーのすべてのディスパ ッチャーを停止	すべてのサーバー	サーバーの「操作」メニューで、 「ディスパッチャーをただちに停 止」または「実行中およびキューに ある要求を処理後にディスパッチャ ーを停止」をクリックします。
特定のディスパッチャーを停 止	すべてのディスパッチ ャー	ディスパッチャーの「操作」メニュ ーで、「ただちに停止」または「実 行中およびキューにある要求を処理 後に停止」をクリックします。
特定のサービスを停止	すべてのサービス	サービスの「操作」メニューで、 「ただちに停止」または「実行中お よびキューにある要求を処理後に停 止」をクリックします。

表 18. ディスパッチャーとサービスの開始および停止: 目標、ビュー、および操作(続き)

ダイアログ・ボックスに操作を確認するメッセージが表示されます。

4. 「閉じる」をクリックします。

# アクティブ Content Manager サービス

待機モードにある Content Manager サービスを手動でアクティブにできます。

始動時にアクティブになるように指定されている Content Manager サービスは 1 つのみです。他の Content Manager サービスは待機モードで始動されます。どの ような場合でも、同時にアクティブにできる Content Manager サービスは 1 つの みです。サービスをアクティブにすると、現在アクティブになっているサービスが 待機モードに切り替えられます。

また、現在待機状態になっている Content Manager サービスを、始動時のデフォ ルトのアクティブなサービスとして指定することもできます。

**IBM Cognos Administration** にアクセスできる権限が必要です。 237 ページの 『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

# デフォルトの Content Manager サービスの指定

デフォルトの Content Manager サービスを指定できます。

手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Content Manager」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

3. 「Content Manager サービス」の「操作」メニューで、「デフォルトでアクティブに設定」をクリックします。

ヒント: Content Manager サービスがすでにデフォルトではない場合に限り、 「操作」メニューに「デフォルトでアクティブに設定」と表示されます。

### Content Manager サービスの有効化

特定の Content Manager サービスを有効にできます。

### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Content Manager」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

3. 「**Content Manager** サービス」の「操作」メニューから、「開始」をクリック します。

# 環境からのディスパッチャーの削除

IBM Cognos 環境で不要になったディスパッチャーを削除できます。

IBM Cognos サービスは、IBM Cognos Configuration を使用して停止できます。 サービスを停止するとディスパッチャーも停止します。先に IBM Cognos サービス を停止せずにディスパッチャーを削除すると、そのディスパッチャーは 30 秒以内 に自動的に復元します。

#### 始める前に

ディスパッチャーを削除するには、まずインストールされているコンピューターで ディスパッチャーを停止する必要があります。ディスパッチャーを停止した後は、 IBM Cognos Administration でディスパッチャーの登録を解除することにより、そ れを Content Store から削除する必要があります。

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

### 手順

1. IBM Cognos Configuration を使用して、IBM Cognos サービスを停止しま す。 サービスを停止するとディスパッチャーも停止します。IBM Cognos サービス の停止の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガ イド」を参照してください。

- 2. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 登録を解除するディスパッチャーを決定します。システムにあるすべてのディス パッチャー、サーバーのすべてのディスパッチャー、またはサーバー・グループ のすべてのディスパッチャーの登録を解除できます。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グループ」、または「すべてのディスパッチャー」をクリックします。選択する表示は、登録解除するディスパッチャーによって異なります。

表 19. ディスパッチャーの登録解除を行うために必要な操作

目的	操作
システムにあるすべてのディスパッチャーを 登録解除	「スコアカード」の「すべてのディスパッチ ャー」表示で、「グループ操作」メニューを 表示するための矢印をクリックしてから、 「ディスパッチャーの登録を解除」をクリッ クします。
	<b>ヒント:</b> 操作を一部のエントリーのみに適用 するには、1 つ以上のエントリーのチェッ ク・ボックスを選択してから、目的の操作を クリックします。
サーバーのすべてのディスパッチャーを登録 解除	「スコアカード」の「すべてのサーバー」表 示で、サーバーの「操作」メニューから「デ ィスパッチャーの登録を解除」をクリックし ます。
サーバー・グループのすべてのディスパッチ ャーを登録解除	「スコアカード」の「すべてのサーバー・グ ループ」表示で、ディスパッチャーの「操 作」メニューから「ディスパッチャーの登録 を解除」をクリックします。
特定のディスパッチャーを登録解除	「スコアカード」の「すべてのディスパッチ ャー」表示で、ディスパッチャーの「操作」 メニューから「登録解除」をクリックしま す。

ダイアログ・ボックスに操作を確認するメッセージが表示されます。

5. 「**OK**」をクリックします。

ディスパッチャー情報が Content Store から削除されます。

# 構成フォルダー内のディスパッチャーのグループ化

インストール・セットに多数のディスパッチャーがある場合、設定フォルダーを使 用してディスパッチャーを整理すると良いでしょう。ディスパッチャーをグループ 化すると、フォルダー内のディスパッチャーとサービスすべてに対して同じ設定を 一度に適用できます。

## 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

## このタスクについて

設定フォルダーに追加されたディスパッチャーには、そのフォルダーの設定が自動 的に継承されます。ただし、ディスパッチャーまたはサービスのデフォルト値を以 前に変更している場合は、変更された値が保持されます。

ディスパッチャーまたは設定フォルダーの設定を変更すると、ディスパッチャーに 関連付けられたサービスやフォルダーの子エントリーすべてに、自動的に新しい値 が適用されます。ただし、サービスの値が変更されている場合は、変更された値が 保持されます。

管理者は、設定領域のルートまたは既存の設定フォルダーに新規の設定フォルダー を作成できます。

ヒント:

- ツールバーのパスに表示されているエントリーの親の設定プロパティーを表示して編集するには、「プロパティーを設定 設定」ボタン タクリックします。設定領域のルートからは、設定領域のディスパッチャーとサービスすべての設定を変更または適用できます。
- 異なる設定レベルに移動するには、ツールバーのパスを使用します。パスは Configuration で始まります。長すぎるパスは折り返して表示されます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. 「フォルダーの新規作成」ボタンをクリックします。
- 3. 名前を入力し、必要に応じてフォルダーの説明を入力し、設定フォルダーを保存 する場所を指定します。
- 4. 「終了」をクリックします。

これで、ディスパッチャーを元の場所から切り取り、新しく作成したフォルダー 内に貼り付けて、設定フォルダーにディスパッチャーを追加できます。設定フォ ルダー・レベルでの設定も変更できます。

ヒント:ディスパッチャーを別のフォルダーに移動するには、ディスパッチャーの横にある「その他」をクリックし、次に「移動」をクリックします。
# 高度なディスパッチャー・ルーティング

システムの設定方法に応じて、サーバー間へのレポートの配布方法を制御できま す。

例えば、各部門が独自のサーバーを維持管理しているケースがこれにあたります。 また、Microsoft SQL Server データベースへのアクセスには Microsoft Windows サーバーを使用し、 IBM Db2 へのアクセスには Linux サーバーを使用するとい うように、データ・アクセスによって使用するサーバーを分けている場合もありま す。ルーティングの規則を適用することによって、特定のサーバーでレポート要求 が処理されるように IBM Cognos ソフトウェアを設定できます。

親和性の設定は、高度なルーティング設定よりも優先されます。詳細については、 82 ページの『最大プロセス数と最大接続数』を参照してください。

ルーティングの規則を定義するときに、サーバー・グループを選択する必要があり ます。サーバー・グループの名前はディスパッチャーのプロパティーか、またはデ ィスパッチャーが整理されている設定フォルダーのプロパティーです。サーバー・ グループ名の設定の詳細については、 77 ページの『拡張ディスパッチャー・ルー ティングのためのサーバー・グループの設定』を参照してください。

特定のレポートを処理するサーバー・グループを確定するには、そのサーバー・グ ループをデータ・オブジェクト (パッケージ、データ・モジュール、アップロード されたファイルなど) に対するルーティング・タグと、ユーザー・グループまたは 役割に対するルーティング・タグに関連付ける必要があります。そして、それらの ルーティング・タグを環境内のディスパッチャー間に配布する方法を指定する必要 があります。ルーティング・タグに対して作成するルーティング規則によって配布 が制御されます。レポート要求は、レポートの作成に使用されたデータ・オブジェ クトに関連付けられているルーティング・タグ、または、レポートを実行するユー ザーまたはグループに関連付けられているルーティング・タグ、またはその両方に 従い、特定のサーバーによって処理されます。

ヒント:ルーティング・タグは任意の単語や句にすることができますが、ベスト・プラクティスとして、ご使用の環境にとって意味のあるタグを指定してください。
 Sales reports、Db2 data、Europe などのタグを使用できます。

ルーティングの規則を作成する場合は、レポート処理を行うサーバー・グループを 決定する条件を作成します。例えば、「財務」グループのユーザーが作成した「財 務」パッケージのレポートが「財務」サーバーで処理されるようにするルーティン グ規則をセットアップできます。また、レポートの作成に使用したデータ・オブジ ェクトに関係なく、「販売」ユーザーが作成したレポートが「販売」サーバーで処 理されるようにするルーティング規則をセットアップすることもできます。1 つ目 の例では、グループまたは役割に対するルーティング・タグとパッケージに対する ルーティング・タグを両方指定しますが、2 つ目の例では、グループまたは役割に 対するルーティング・タグのみを指定し、パッケージのルーティング・タグは空白 のままにします。ルーティング規則に、データ・オブジェクトに対するルーティン グ・タグとグループ/役割に対するルーティング・タグを両方指定する必要はありま せん。 **IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照し てください。

#### データ・オブジェクトに対するルーティング・タグの設定

データ・オブジェクトのルーティング・タグを使用して、ディスパッチャーのルー ティング規則をセットアップできます。ルーティング・タグを指定できるデータ・ オブジェクトは、パッケージ、データ・モジュール、およびアップロードされたフ ァイルです。

### 手順

- 「チーム・コンテンツ」または「個人用コンテンツ」で、必要なパッケージ、デ ータ・モジュール、またはアップロードされたファイルを見つけ、そのプロパテ ィー・パネルを開きます。「全般」タブで、「詳細」プロパティー・セクション を展開します。
- 2. 「高度なルーティング」の「設定」をクリックします。
- 3. 以下の方法で、ルーティング・タグを指定します。
  - 「新規」ボタンを選択して、新規ルーティング・タグを 1 つ以上指定する。
  - 「選択」ボタンを選択して、既存のルーティング・タグから選択する。

注: ルーティング・タグは任意の単語や句にすることができますが、ベスト・プ ラクティスとして、ご使用の環境にとって意味のあるタグを指定してください。 Sales reports、Db2 data、Europe などのタグを使用できます。

#### タスクの結果

これらのルーティング・タグを、 61 ページの『ディスパッチャーのルーティング の規則の設定』で使用します。

## グループまたは役割に対するルーティング・タグの設定

グループまたは役割に対するルーティング・タグを設定できます。それらのルーティング・タグを使用して、ディスパッチャーのルーティング規則を指定できます。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 「セキュリティー」タブで「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. 「Cognos」ネームスペースをクリックして、グループと役割を表示します。
- 4. グループまたは役割の「プロパティーを設定」ボタン 🔲 をクリックします。
- 5. 「高度なルーティング」 > 「ルーティング・セット」の下で、「設定」をクリ ックします。

「ルーティング・セットを割り当て」ページが表示されます。

 ユーザーの役割またはグループのルーティング・タグを「使用できるルーティン グ・セット」で選択するか、「ルーティング・セットを入力」に入力し、追加ボ タンをクリックして「割り当てられたルーティング・セット」ボックスにタグを 追加します。複数のタグを入力する場合は、各タグをセミコロンで区切ります。 例えば、Sales groups;Marketing;Development のようにします。

 グループまたは役割に適用する他のルーティング・キーワードを追加するには、 ステップ 5 を繰り返します。

ルーティング・タグを追加する順序は重要ではありません。

8. 「**OK**」をクリックします。

グループまたは役割のプロパティー・ページの「高度なルーティング」の下に、 ルーティング・タグが表示されます。

9. 「プロパティーを設定」ページで、「**OK**」をクリックします。

## タスクの結果

これらのルーティング・タグを、『ディスパッチャーのルーティングの規則の設 定』で使用します。

#### ディスパッチャーのルーティングの規則の設定

ディスパッチャーまたは設定フォルダーにルーティング規則を設定できます。

サーバー・グループはディスパッチャーまたは設定フォルダーのプロパティーであ り、サーバー・グループのルーティングの規則を設定する前にセットアップする必 要があります。詳細については、 77 ページの『拡張ディスパッチャー・ルーティ ングのためのサーバー・グループの設定』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 2. 「設定」タブで、「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。

作成されているディスパッチャーと設定フォルダーが表示されます。

ヒント: サーバー・グループがセットアップ済みでなければなりません。詳細に ついては、 77 ページの『拡張ディスパッチャー・ルーティングのためのサーバ ー・グループの設定』を参照してください。

3. ツールバーで、「ルーティングの規則を指定」ボタン 💜 を選択します。

「ルーティングの規則を指定」ページが表示されます。

- 4. 「規則を追加」をクリックします。
- ルーティング・タグとサーバー・グループを突き合わせてルーティング規則を指 定します。ルーティング規則は、以下のタグとサーバー・グループの組み合わせ にすることができます。
  - 「データのルーティング・タグ (Data routing tag)」と「サーバー・グループ」
  - 「グループのルーティング・タグ (Group routing tag)」または「役割のル ーティング・タグ (Role routing tag)」と「サーバー・グループ」

- 「データのルーティング・タグ (Data routing tag)」および「グループのル ーティング・タグ (Group routing tag)」または「役割のルーティング・タ グ (Role routing tag)」と「サーバー・グループ」
- 6. 「操作」列で、「メンバーを表示」ボタンをクリックして、メンバーの概要を表示します。
- ルーティングの規則の順番を変更するには、「順番を編集」を選択します。移動 する規則を選択して、「上へ」、「下へ」、「最初へ」、または「最後へ」をク リックします。

重要: ルーティング・タグとは異なり、ルーティング規則をリストする順序は、 規則の適用方法に影響を与えます。

要求に関係するデータ・オブジェクトまたはグループ/役割に関連付けられてい るプロパティーが規則の条件を満たしている場合に、その規則に一致します。 1 つの規則が一致するまで規則は順番に評価され、最初に一致した規則によって指 定されたサーバー・グループに要求が転送されます。

8. 「**OK**」をクリックします。

# **IBM Cognos Series 7 PowerPlay** データに対するゲートウェ イ・マッピングの指定

Series 7 PowerPlay サーバーの場所を指定することができます。

IBM Cognos for Microsoft Office のユーザーが Series 7 PowerPlay サーバーに あるデータを必要とする場合、Report Data サービス (RDS) にその要求を送信でき ます。Report Data サービスは IBM Cognos アプリケーション・サーバー上で稼 働しており、Series 7 PowerPlay Enterprise Server のゲートウェイを介して Series 7 PowerPlay と通信します。

ネットワークの設定でアプリケーション・サーバーが Series 7 PowerPlay Enterprise Server のゲートウェイをホストする Web 層のサーバーにアクセスする ことを禁止している場合、2 番目の内部 Series 7 PowerPlay Enterprise Server ゲ ートウェイをアプリケーション・サーバー層にインストールする必要があります。 このタイプの設定では、Series 7 PowerPlay サーバーの場所を指定することができ ます。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Report Data」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「**Report Data** サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを設定」 をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「値」列で、ゲートウェイ・マッピングの「編集」をクリックします。

- 6. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオ ンにします。
- 7. 「マッピングを追加」をクリックします。
- 8. 「アプリケーション・ゲートウェイ (外部)」に、Web サーバーのアドレスを 入力します。
- 9. 「アプリケーション・ゲートウェイ (内部)」に、Series 7 PowerPlay サーバ ーのアドレスを入力します。
- 10. 「**OK**」をクリックします。

# ディスパッチャーの名前変更

セキュリティー対策として、ホスト・コンピューター名、ポート番号、サーブレット、またはディスパッチャーのパスを非表示にしたい場合は、ディスパッチャーの 名前を変更できます。

詳細については、 66 ページの『ディスパッチャーの保護』を参照してください。

通常、ディスパッチャー名の表示や変更を行えるのは、サーバー管理者です。

ディスパッチャーの名前を変更する際には、ホスト・コンピューター名やポート、 またはシステムやパスの情報がわかるような名前にしないことを推奨します。ただ し、監視を行う必要があるため、ディスパッチャーのインストール場所を忘れない ようにしてください。

ヒント: ディスパッチャー名の変更後に、ホスト、ポート、およびパス情報へアクセ スする必要がある場合、Software Development Kit メソッドを使用して "Dispatcher"オブジェクトの"dispatcherPath"プロパティー内にあるこれらの情報を 検索できます。

## 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 「すべてのディスパッチャー」をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. ディスパッチャーの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリック します。
- 4. 「名前」ボックスにディスパッチャーの新しい名前を入力します。

ディスパッチャーを識別しやすくするために、意味のある名前をつけます。シス テム情報を示すような名前にしないでください。

- 5. 必要に応じて、画面のヒントや説明を追加します。
- 6. 「**OK**」をクリックします。

# ディスパッチャーのテスト

IBM Cognos ソフトウェアのパフォーマンスを評価するには、ディスパッチャーの ステータスをテストします。

また、ディスパッチャーが応答していることを確認し、使用可能時間を表示することもできます。使用可能時間とは、ディスパッチャーがエラーなしに動作している時間 (秒)です。

ディスパッチャーやサービスのステータス表示や、ログ・メッセージの確認も可能 です。

## 始める前に

ディスパッチャーをテストする際、対象のディスパッチャーに属するサービスもテ ストできます。

**IBM Cognos Administration** 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』 にアクセスできる権限が必要です。

### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- テストするディスパッチャーを決定して、次の表の指示に従います。「スコアカ ード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、表示する項 目をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

表 20. ディスパッチャーをテストするための目標、表示、および操作

	スコアカード・ ウィンドウの表	
目的	示	操作
システムにあるすべてのディ スパッチャーをテスト	すべてのサーバ ー	「グループ操作」メニューで、「テスト」 をクリックします。 ヒント:操作を一部のエントリーのみに適 用するには、1 つ以上のエントリーのチェ ック・ボックスを選択してから、目的の操 作をクリックします。
サーバー・グループのすべて のディスパッチャーをテスト	すべてのサーバ ー	「グループ操作」メニューで、「ディスパ ッチャーをテスト」をクリックします。
サーバーのすべてのディスパ ッチャーをテスト	すべてのサーバ ー	テストするサーバーを見つけます。サーバ ーの「操作」メニューで、「テスト」をク リックします。

表 20. ディスパッチャーをテストするための目標、表示、および操作(続き)

	スコアカード・ ウィンドウの表	
目的	示	操作
特定のディスパッチャーをテ スト	すべてのディス パッチャー	テストするディスパッチャーを見つけま す。ディスパッチャーの「操作」メニュー から、「テスト」をクリックします。

ダイアログ・ボックスに操作を確認するメッセージが表示されます。

3. 「**OK**」をクリックします。

ディスパッチャーが本来のパフォーマンスで実行されない場合は、設定を変更し てサーバーのパフォーマンスを調整できます。詳細については、 76 ページの 『サーバー・パフォーマンスの調整』を参照してください。

# 複数のディスパッチャーのフェイルオーバー

IBM Cognos ソフトウェアの分散インストールでは、フェイルオーバーの目的で、 各ゲートウェイ・コンポーネントを複数のディスパッチャーと通信するように構成 できます。

ゲートウェイ・コンポーネントによって関連するディスパッチャーがスキャンさ れ、稼働中で正常に応答しているディスパッチャーに要求が転送されていることが 確認されます。スキャンの実行頻度を設定できます。

複数ディスパッチャーの設定方法については、「IBM Cognos Analytics インストー ルおよび設定ガイド」のゲートウェイ・コンピューターの設定に関する項を参照し てください。

## ディスパッチャー・ステータスのスキャン頻度の設定

フェイルオーバーの目的で、現在のステータスを確認するディスパッチャーのスキ ャン回数を設定できます。

次のパラメーターを使用します。

ConnectionCheckingSleepTime

ディスパッチャーのステータスをスキャンする間隔を秒単位で指定する。

有効な設定は 1~2147483647 です。5 未満に設定すると大量のリソース (CPU 時間とネットワーク帯域幅) を消費する可能性があります。デフォルト設定は 30 です。

ConnectionCheckingQuickSleepTime

動作中のディスパッチャーがない場合にスキャンする間隔を秒単位で指定する。 このパラメーターの値は ConnectionCheckingSleepTime よりも小さい値でなけ ればなりません。 有効な設定は 1~2147483647 です。5 未満に設定すると大量のリソース (CPU 時間とネットワーク帯域幅) を消費する可能性があります。デフォルト設定は 5 です。

### 手順

- 1. インストールの場所/cgi-bin/ にある cognoscgi.conf.sample ファイルを イン ストールの場所/bin にコピーし、cognoscgi.conf という名前に変更します。
- 2. UTF-8 形式でファイルを保存できるエディターで"cognoscgi.conf"ファイルを開きます。
- ファイルに次の行を追加します。
   ConnectionCheckingSleepTime=time in seconds
   ConnectionCheckingQuickSleepTime=time in seconds
- 4. "cognoscgi.conf"ファイルを UTF-8 形式で保存します。

# ディスパッチャーの保護

デフォルトのディスパッチャー名を変更することで、セキュリティー・リスクを回 避できます。

IBM Cognos ソフトウェアのユーザーは、Web ブラウザーのアドレス・フィールド またはハイパーリンクに、XML パス言語 (XPath:XML Path language) での検索パ スを入力できます。また、ユーザー・インターフェースの検索パス・パラメーター に対して検索パス構文を入力できます。IBM Cognos ソフトウェアでは、Content Manager のアクセス・コントロール・リスト (Access Control List:ACL) を利用し て、ユーザーに返すオブジェクトが確認されます。

悪意のあるユーザーがディスパッチャー名を表示できる場合があります。このよう なユーザーは、ディスパッチャー名をクリックしたり、そのディスパッチャーを操 作したりすることはできませんが、セキュリティーに危険が生じる可能性がありま す。

このようなセキュリティーの危険を回避するために、デフォルトのディスパッチャー名を変更してください。デフォルトのディスパッチャー名は"<コンピューター名>:9300"ですが、"<サーバー 1>"などに変更してポート番号とホスト名を隠すことができます。詳細については、 63 ページの『ディスパッチャーの名前変更』を参照してください。

# JMX プロキシー・サーバーをホストするためのディスパッチャー の指定

管理者は、Java Management Extensions (JMX) プロキシー・サーバーをホストす るための候補として 1 つ以上のディスパッチャーのリストを作成できます。これ は、JMX メトリックを収集するために必要になるスレッドの数を減らすのに役立 ち、Content Manager で使用できるスレッドの数を増やします。

JMX プロキシー・サーバーはディスパッチャーと通信し、それらの JMX メトリッ クを収集します。この通信には、ディスパッチャーごとに約 4 つのスレッドが必要 です。多数のディスパッチャーがある分散インストール済み環境は、多量のスレッ ドを必要とするので、Content Manager のパフォーマンスに影響を及ぼします。こ の問題を解決し Content Manager のパフォーマンスを改善するために、管理者は 1 つ以上のディスパッチャーを Java Management Extensions (JMX) プロキシー・ サーバーをホストする候補として選択できます。

## ディスパッチャーの選択

IBM Cognos Administration は Presentation サービスを使用しており、プロキシ ー・サーバーへの接続を持っているので、Presentation サービスを実行しているデ ィスパッチャーを選択してください。これにより、プロキシー・サーバーへのロー カル呼び出しが提供されます。

IBM Cognos Administration を使用して、Java Management Extensions (JMX) プ ロキシー・サーバーをホストする 1 つ以上のディスパッチャーのリストを作成でき ます。現在実行中のディスパッチャーの中で一番上にあるものが、JMX プロキシ ー・サービスをホストするものとして選択されるディスパッチャーになります。

設定済みリストのディスパッチャーのどれも実行していない場合、任意の使用可能 なディスパッチャーがランダムに選択されて JMX プロキシー・サーバーをホスト します。これが、ディスパッチャーのリストを作成していない場合の、デフォルト 動作であることに注意してください。

## JMX ホスト・ディスパッチャーの編集

IBM Cognos Administration を使用して、Java Management Extensions (JMX) プ ロキシー・サーバーのホストになるディスパッチャー候補のリストに 1 つ以上のデ ィスパッチャーを追加できます。

### 手順

- 1. IBM Cognos Administration を起動します。
- 2. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 3. 「スコアカード」ウィンドウで、「システム」エントリーに対し、「操作」メ ニューの矢印をクリックして、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「プロパティーを設定 設定」ページで、「設定」タブをクリックします。
- 「編集」をクリックして「JMX プロキシー・ホスト・ディスパッチャー」を 設定します。「JMX プロキシー・ホスト・ディスパッチャーの設定 - 構成 (Set JMX Proxy host dispatchers - configuration)」ページが表示されます。
- 6. 「追加」をクリックしてディスパッチャーを追加します。
- 7. 追加するディスパッチャーを選択します。
- 8. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。
- 9. 「**OK**」をクリックします。
- 10. 「上へ」、「下へ」、「最初へ」、または「最後へ」をクリックしてディスパ ッチャーの順序を設定します。
- 11. 「**OK**」をクリックします。

#### タスクの結果

現在実行中のディスパッチャーの中で一番上にあるものが、JMX プロキシー・サー ビスを実行するものとして選択されるディスパッチャーになります。ディスパッチ ャーの順序はいつでも変更できます。リストのディスパッチャーのどれも実行して いない場合、任意の使用可能なディスパッチャーがランダムに選択されて JMX プ ロキシー・サーバーをホストします。

## Content Manager の場所

インストール環境では、複数の Content Manager が異なる場所にインストールされている場合があります。この場合、1 台の Content Manager コンピューターが アクティブで、1 つ以上のコンポーネントが待機状態になります。

Content Manager がインストールされている各コンピューターの時計が同期されて いることを確認してください。同期されていない場合、フェイルオーバーの実行時 に異常な動作が発生する可能性があります。例えば、新しく無効になったサーバー のステータスが IBM Cognos Administration で更新される前に遅延が発生する可 能性があります。Content Manager の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* イ ンストールおよび設定ガイド」を参照してください。

Content Manager パラメーターの設定の詳細については、『詳細な Content Manager パラメーターの設定』を参照してください。

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限 237 ページの 『第 13 章 保護されている機能と特性』が必要です。

# 詳細な Content Manager パラメーターの設定

詳細な Content Manager パラメーターを設定できます。

詳細な Content Manager パラメーターには、データベース接続プールの設定値、 英語以外のロケールでのソート済みエントリー、同期、および外部ネームスペース の参照が含まれます。

## 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Content Manager」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「**Content Manager** サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを 設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「詳細設定」の横にある、「編集」をクリックします。
- 6. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオ ンにします。
- 7. 「パラメーター」列で、パラメーター名を入力します。

例えば、「CM.DbConnectPoolCleanUpPeriod」と入力します。

8. 「値」列で、パラメーターに関連付ける値を入力します。

- 9. 必要に応じて、パラメーター名と値の入力を続けます。
- 10. 「**OK**」をクリックします。
- 11. 「プロパティーを設定」ページで、「**OK**」をクリックします。

# Content Manager のデータベース接続プール設定の管理

Content Manager は、データベース接続を使用して Content Store に接続しま す。パフォーマンスが向上するように、Content Manager の接続プール設定を変更 できます。

プール接続の場合、Content Manager は新しい要求に対して接続を作成して開く必要がありません。そのため、応答時間が速くなります。ただし、プール接続ではデータベース・リソースが予約されるため、必要のないアイドル状態の接続は閉じる必要があります。

Content Store への接続数を管理するには、接続の最大数を制限し、自動的に閉じ られるまでに接続がプール内で持続する時間を指定します。

次のパラメーターを指定できます。

#### CM.DbConnectPoolMax

Content Store によって許可され同時データベース接続数の最大値を指定する。

このパラメーターは、Content Manager 接続プール設定にのみ適用されます。 同じ Content Store にアクセスする別のサービスが存在する場合は、このパラメ ーターで指定した数よりも多い同時データベース接続が存在する可能性がありま す。

有効な設定は、-1、または 5~2147483647 の範囲の数値とデータベースの設定値 のうち小さいほうの数値です。デフォルト設定は -1 (無制限) です。

### CM.DbConnectPoolTimeout

プール内の接続が使用可能になるまでスレッドが待機する最大時間をミリ秒単位 で指定する。

有効な設定は -1~2147483627 です。0 を設定すると、接続が即座に使用可能に ならない場合、スレッドで待機は行われません。デフォルト設定は -1 (無制限) です。

#### CM.DbConnectPoolIdleTime

プール内で接続がアイドル状態にとどまる最小時間をミリ秒単位で指定する。このパラメーターは、DbConnectPoolCleanUpPeriod 設定が正の値である場合にのみ使用されます。

有効な設定は -1~2147483647 です。0 または -1 が設定されると、アイドル状 態にある接続は、Content Manager の再起動時に終了されます。デフォルト設 定は 300000 (5 分) です。

#### CM.DbConnectPoolCleanUp Period

DbConnectPoolIdleTime で設定された時間よりも長い間プール内でアイドル状態 になっている接続を終了するクリーンアップ・スレッドが起動される間隔をミリ 秒単位で指定する。

有効な設定は -1~2147483647 です。デフォルト設定は 300000 (5 分) です。

#### 英語以外のロケールのエントリーのソート

Oracle または Microsoft SQL の Content Store について、英語以外のロケールの 並び替えの問題を修正できます。

並び替えの問題を修正するには、CM.SortCollation パラメーターを使用します。例 えば、中国語の音声照合を使用して Oracle データベースのエントリーをソートす るには、CM.SortCollation パラメーターを SCHINESE_PINYIN_M に設定しま す。

サポートされている照合については、Oracle および SQL Server のドキュメントを 参照してください。CM.SortCollation の値を設定しても、IBM Db2 データベース または Sybase データベースに対して実行されている Content Manager には影響 を与えません。

## Content Manager の同期の管理

インストール環境に待機中の Content Manager コンピューターが含まれている場合は、Content Manager の待機処理を指定するパラメーターを設定できます。

アクティブなディスパッチャーが失敗していないことをチェックする回数、フェイ ルオーバー発生時と始動時にアクティブになる Content Manager を決定するまで に要する時間、ビジー時にアクティブな Content Manager が応答を送信する回 数、フェイルオーバーを実行せずにネットワークを短時間中断できる時間を指定で きます。

次のパラメーターを指定できます。

#### CM.CMSync_NegotiationTime

フェイルオーバーの発生時に、アクティブな Content Manager を決定するまで に要する時間をミリ秒単位で指定する。

有効な設定は 1~9223372036854775807 です。デフォルトは 2000 です。

#### CM.CMSync_NegotiationTimeForStartUp

始動時に、アクティブな Content Manager を決定するまでに要する時間をミリ 秒単位で指定する。

有効な設定は 1~9223372036854775807 です。デフォルトは 60000 です。

#### CM.CMSync_CheckActive Time

他の Content Manager がアクティブになったときに、現在アクティブな Content Manager が待機状態になるまでに要する時間をミリ秒単位で指定す る。

デフォルトは 10000 です。

#### CM.CMSync_PingTimeout

Content Manager が処理を実行中である場合に応答を返すまでに要する時間を ミリ秒単位で指定する。

有効な設定は 1~9223372036854775807 です。デフォルトは 120000 です。

CM.CMSync_ShortNetworkInterruptionTime

フェイルオーバーを実行せずにネットワークを短時間中断できる時間をミリ秒単 位で指定する

有効な設定は 1~9223372036854775807 です。デフォルトは 3000 です。

#### 外部ネームスペース参照の制御

ユーザーが外部ネームスペースを参照できるかどうかを制御できます。

CM.SecurityQueryRequiresRead を true に設定すると、外部ネームスペース・ポリ シーがユーザーまたはグループに対する読み取り権限を拒否するように更新された 場合に、Content Manager により外部ネームスペースの参照が阻止されます。この 設定を使用して、Content Manager で外部ネームスペース・クエリーの結果に対す る読み取り権限フィルター強制的に適用するかどうかを制御します。デフォルト値 は false です。

# Content Manager キャッシュ用キャッシュ・サイズの上限の設定

キャッシュ・サイズの上限は、JVM ヒープ・サイズに対する割合として指定できます。

デフォルトは 10 です。有効な値は 0~100 です。キャッシュ・サイズを増やす と、Content Manager に対する負荷が削減されるため、より多くの分散ノードに対 応できます。ただし、高すぎる値の設定は、ディスパッチャーでのメモリー不足エ ラーの原因となる可能性があります。

値を 0 (ゼロ) に設定すると、キャッシュ・システム全体が無効になり、すべてのク エリー要求が直接 Content Manager に送信されるため、システム・パフォーマン スが低下する可能性があります。ただし、この設定は、キャッシュを使用する場合 と使用しない場合のパフォーマンスの比較に役立ちます。

### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Content Manager Cache」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「**ContentManagerCache** サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。

- 5. 「値」列で、「Content Manager Cache サービスのヒープ制限」の数値を変更 します。
- 6. 必要な設定を入力し、「**OK**」をクリックします。

# ユーザー・セッション・ファイルをローカルに格納することによる Content Manager の負荷の削減

ユーザー・セッション・ファイルの保管場所を変更できます。

ユーザーが双方向レポートを実行すると、レポート・サーバーは、要求を Content Manager に送信し、出力レポートをそのユーザーのセッション・キャッシュに格納 するように要求します。このような出力レポートの形式は、PDF、イメージを含む HTML、Microsoft Excel スプレッドシート・ソフトウェア、CSV、または XML の いずれかになります。

Content Manager に対する処理負荷を削減するために、ユーザー・セッション・ファイルはレポート・サーバーのローカル・ファイル・システムに格納されます。デフォルトでは、この場所はレポート・サーバー上になっています。この場所は、 Microsoft Windows オペレーティング・システムの共有ディレクトリーや UNIX オペレーティング・システムの共通マウント・ディレクトリーなど、リモート・コンピューターに変更できます。詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」の一時レポート出力の場所の変更に関する記述を参照して ください。

アップグレードする場合、ユーザー・セッション・ファイルは Content Manager に格納されます。Content Manager の負荷を削減するには、レポート・サーバーの ローカル・ファイル・システムを変更する必要があります。

ー時ファイルを保存すると、ディスク使用量が増大します。ファイルの保存に十分 な領域を割り当ててください。

この方法は、Software Development Kit などの古いバージョンのアプリケーション に影響を与えません。要求は引き続き Content Manager に送信されます。

次のパラメーターを指定できます。

• 一時オブジェクトの場所

ー時キャッシュ・ファイルの場所を指定します。一時キャッシュ・ファイルをレ ポート・サーバーに格納するには、「サーバー・ファイル・システム」を選択し ます。一時キャッシュ・ファイルを Content Manager に格納するには、 「Content Store」を選択します。

デフォルト値は「サーバー・ファイル・システム」です。

• 一時オブジェクトの有効期限

ー時キャッシュ・ファイルの保存期間を時間単位で指定します。0 (ゼロ) に設定 すると、ファイルは手動で削除するまで保存されます。

この設定は、ディスパッチャーでのみ使用されます。一時キャッシュ・ファイルは、ブラウザーを閉じたとき、またはブラウザーの「戻る」ボタンをクリックし

たときに削除されます。ファイルが削除されない場合は、ディスパッチャーによ ってこの設定が使用され、ファイルが削除されます。

デフォルト値は4時間です。

Cognos Configuration には、一時ファイルを暗号化するための設定もあります。この設定は、「一時オブジェクトの有効期限」または「一時オブジェクトの場所」の 設定の影響は受けません。詳細については*IBM Cognos Analytics*「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. 「プロパティーを設定 設定」ボタン をクリックし、「設定」をクリックします。
- 3. 「カテゴリー」メニューの「調整」をクリックします。
- 4. 必要に応じて、「一時オブジェクトの場所」および「一時オブジェクトの有効期 限」の設定を変更します。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

プロンプト・キャッシュでのデフォルト・ロケール処理のオーバーライド

すべてのレポートのプロンプト・キャッシュのロケール処理をオーバーライドすることができます。

これは、RSVP.PROMPTCACHE.LOCALE 詳細設定を使用して実行できます。この 設定が完了すると、指定されたロケールが、プロンプトのキャッシュ・データが作 成、更新、または使用されるときには必ず、レポートに指定したロケールの代わり に使用されます。つまり、レポート・ユーザーのロケールとは関係なく、単一のプ ロンプト・キャッシュが各レポートで使用されるということです。

#### 手順

- 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. 「**ReportService**」の「パラメーター」列で、**RSVP.PROMPTCACHE.LOCALE** と入力 します。
- 3. 「値」列で、パラメーターに関連する値を入力して、「**OK**」をクリックしま す。

# Content Store 保守タスク

コンテンツ保守タスクを作成して、必要に応じ、スケジュールされた時間またはト リガーに基づいて実行できます。

例えば、データベース更新や E メール送信などです。コンテンツ保守タスクは、ジョブまたはエージェントの一部としてスケジュールできます。また、コンテンツ保 守タスクの実行履歴を表示することもできます。 Content Store 内や、Content Store と外部ネームスペース間の整合性の問題を発見し、修正できます。

コンテンツ保守タスクでは、欠落データや古くなったデータによる Content Store 内の整合性に関する問題や、Content Store と外部ネームスペース間の整合性の問 題をチェックできます。

必要な場合、Content Store で実行されるバックグラウンド・タスクの開始と停止 を行うこともできます。

マルチテナント環境での Content Store 保守タスクの使用について詳しくは、 374 ページの『Content Store 整合性検査の作成と実行』を参照してください。

# 内部 Content Store の保守を開始する前に

残しておきたいデータが削除されないようにするために、最初に検索モードを選択 し、Content Store の修正を行う前に結果を確認してください。

Content Store 内に欠落しているデータがあると、更新に失敗することがありま す。また、古くなったデータがあると、新規オブジェクトを作成できない場合があ ります。Content Store の管理タスクによって Content Store が修正されるときに は、欠落しているデータにデフォルト値が追加されますが、後で変更することがで きます。また、古くなったデータは永久的に削除されます。

データの検索と修正を行う場合、コンテンツ保守タスクの実行中には、修正は行われません。Content Manager を次回に起動する際に、整合性の問題が修正されます。

重要:コンテンツ管理タスクを実行して Content Store の検索と修正を行ったら、 Content Manager を再起動する前に Content Store をバックアップしてください。

内部の保守チェックは定期的に実行することを推奨しますが、特にアップグレード の前には、Content Store の整合性を確認するために必ずチェックを実行してくだ さい。

# 外部ネームスペースにおける **Content Store** の保守

IBM Cognos Administration を使用して、外部ネームスペースで Content Store の保守を行えます。

認証プロバイダーでユーザーを削除すると、ユーザー・アカウント情報が Content Store に残ります。IBM Cognos Administration を使用して、Content Store に残 っているユーザー情報を見つけ、外部ネームスペースに存在しないユーザーを削除 して、Content Store を修正できます。Content Store から個々のユーザー・プロフ ァイルを削除することもできます。

複数のネームスペースに対してコンテンツ保守タスクを実行するには、次のいずれ かを行います。

 コンテンツ保守タスクを今すぐ実行する場合は、ネームスペースにログオンして コンテンツ保守タスクを作成します。 コンテンツ保守タスクを将来または定期的に実行するようにスケジュールする場合、スケジュールされたコンテンツ保守タスクは、コンテンツ保守タスクを作成したときに選択したネームスペースに対して実行されることに注意してください。コンテンツ保守タスクをスケジュールする前に、コンテンツ保守タスクの実行対象となる各ネームスペースにログオンするたびに資格情報を新しくして、資格情報に各ネームスペースに対して適切なログオン情報が含まれていることを確実にします。

ヒント:「個人用領域のオプション」、「個人用設定」、「個人用」タブ、「資格 情報を更新」の順にクリックします。

選択した各外部ネームスペースに対するアクセス権と、各外部ネームスペース内の すべてのユーザー・アカウントに対する読み取り権限が必要です。ユーザー・アカ ウントに対する読み取り権限がない場合、そのユーザーはネームスペースから削除 されたとみなされます。コンテンツ保守ジョブを実行すると、Content Store のユ ーザー情報は矛盾(「検索のみ」の場合)または自動削除(「検索して修正」の場 合)として表示されます。

**IBM Cognos Administration** にアクセスできる権限が必要です。詳細について は、237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

# **Content Store** 保守タスクの作成

Content Store の保守タスクを作成することができます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「コンテンツ管理」をクリ ックします。
- ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」ボタン ♥
   の矢印をクリックし、「整合性検査を新規作成」をクリックします。
- 3. 名前を入力し、必要に応じて説明や画面のヒントを入力して、「次へ」をクリッ クします。
- 4. 次の整合性チェックのうち、実行するものを選択します。
  - Content Store の整合性をチェックする場合は、「内部参照」をクリックします。
  - ネームスペースでコンテンツ保守を実行する場合は、「外部ネームスペース への参照」をクリックして、対象のネームスペースを選択します。
- 5. 「次へ」をクリックします。
- 6. 次のいずれかを実行します。
  - タスクをすぐに実行する場合、または後で実行する場合は、「保存して1回 実行」、「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を指定しま す。「検索のみ」または「検索して修正」をクリックし、「実行」をクリッ クします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的にタスクを実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日を選択します。「検索のみ」または「検索して修正」をクリックし、「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。スケジュールのステータスを確認 するには、 286 ページの『スケジュールされた処理の管理』を参照してくだ さい。

 スケジュールや実行を行わずにタスクを保存するには、「保存のみ」、「終 了」の順にクリックします。

# **Content Store** 保守タスクの実行

Content Store 保守タスクを実行することができます。

### 手順

- 1. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 2. コンテンツ保守タスクの横にある「オプションを指定して実行」をクリックしま す。
- コンテンツ保守タスクを今すぐ実行するには、「今すぐ実行」チェック・ボック スをオンにします。または、「指定時に実行」チェック・ボックスをオンにして 実行日時を設定します。
- 4. 「検索」または「検索して修正」をクリックします。
- 5. 「実行」をクリックします。

# バックグラウンド・アクティビティーの開始と停止

Content Manager で実行するバックグラウンド・アクティビティーの開始と停止を 行えます。

このタスクについて

バックグラウンド・アクティビティーを停止すると、Content Manager の処理負荷 が削減され、パフォーマンスを向上させることができます。Content Manager がリ ソースを大量に必要とするジョブを完了した後、バックグラウンド・アクティビテ ィーを開始できます。

## 手順

- 1. IBM Cognos Administration を起動します。
- 2. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 3. 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Content Manager」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

 Content Manager サービスの横にある矢印をクリックして「操作」メニューを 表示し、次に「バックグラウンド・アクティビティーの開始」または「バックグ ラウンド・アクティビティーの停止」をクリックします。

# サーバー・パフォーマンスの調整

管理者は定期的なサーバー管理の一環として、パフォーマンスを調整する必要があ ります。 ディスパッチャーとサービスの構成設定を調整すると、IBM Cognos ソフトウェア の処理速度と処理効率を最適化できます。ユーザーが求める最適なパフォーマンス とは、エラーが発生することなくレポートが高速に実行されることであり、管理者 にとっては、IBM Cognos ソフトウェアが安定して動作し、ユーザーが満足してい ることです。

サーバーに対する処理要求がピークに達する時間帯にユーザーの要求が満たされる ようにサーバーを設定するのが理想的です。

ユーザーの要求を満たすために、ディスパッチャーの追加インストールが必要になることもあります。あるいは、インストール環境の分割や、IBM Cognos ソフトウェアがインストールされているコンピューターのアップグレードが必要になることもあります。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

ログ記録レベル 21 ページの『ログ記録レベルの設定』は、パフォーマンスに影響 を与えることがあります。IBM Cognos ソフトウェアのログをより詳細なものにす ると、ログ記録に割り当てられるリソースが増加するため、レポートの実行に利用 できるリソースが減少します。

設定を変更する前に、必ずディスパッチャーをテストし、関係するログ・メッセージ(18ページの『ログ・メッセージ』)を確認します。ディスパッチャーのテストの詳細については、 64ページの『ディスパッチャーのテスト』を参照してください。パフォーマンスの要件も把握しておく必要があります。

#### モデル

使用しているモデルがレポート用に最適化されていることを確認します。詳細につ いては、「IBM Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照してくださ い。

### オペレーティング・システム

IBM Cognos ソフトウェアのパフォーマンスは、IBM Cognos ソフトウェアがイン ストールされているコンピューターのオペレーティング・システムのパフォーマン スと密接に関係しています。このため、そのオペレーティング・システムを必ず調 整してください。

# 拡張ディスパッチャー・ルーティングのためのサーバー・グループ の設定

レポートのルーティング規則を定義する場合は、レポートの転送先であるディスパ ッチャーまたは設定フォルダーのサーバー・グループを設定する必要があります。

ルーティング規則の定義については、 59 ページの『高度なディスパッチャー・ル ーティング』を参照してください。

ヒント: 拡張ディスパッチャー・ルーティングをセットアップし、PowerPlay を使 用する場合は、PowerPlay 要求を処理する PowerPlay サーバーが 1 つ以上サーバ ー・グループに含まれていることを確認してください。 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 2. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 3. 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 「すべてのディスパッチャー」をクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 4. ディスパッチャーの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリック します。
- 5. 「設定」タブをクリックします。
- 6. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 7. 「サーバー・グループ」プロパティーの「値」列に名前を入力します。

重要:名前には最大 40 文字まで含めることができます。

8. 「**OK**」をクリックします。

このサーバー・グループを、ルーティング規則を定義するときに使用します (61 ページの『ディスパッチャーのルーティングの規則の設定』のトピックの 説明を参照)。

# ディスパッチャー間での要求の分散

環境に複数のディスパッチャーが存在する場合は、各ディスパッチャーの処理容量 を変更することで、各ディスパッチャーで処理する要求の比率を指定できます。

これを一般に、負荷の分散といいます。ディスパッチャーの容量は通常、インスト ール先のコンピューターで使用している CPU のクロック速度に基づいて設定しま す。

例えば、1 番目のディスパッチャーがクロック速度 2 GHz のコンピューターに、 また 2 番目のディスパッチャーがクロック速度 1 GHz のコンピューターにインス トールされているとします。この場合は、1 番目のディスパッチャーに 2.0、2 番目 のディスパッチャーに 1.0 の処理容量を設定すると、1 番目のディスパッチャーで 全要求の 3 分の 2 が、2 番目のディスパッチャーで全要求の 3 分の 1 が処理さ れます。両方のディスパッチャーの処理容量を 1.0 に設定すると、要求は 2 つのデ ィスパッチャーに交互に送信されます。

各ディスパッチャーのデフォルトの処理容量は 1.0 です。

親和性の設定は、処理要求の負荷分散の設定に優先します。詳細については、 82 ページの『最大プロセス数と最大接続数』を参照してください。

ディスパッチャーの負荷分散は、進行中の要求係数を設定して制御することもでき ます。 79 ページの『進行中の要求係数を使用したディスパッチャーの負荷の分 散』を参照してください。また、ディスパッチャーの負荷分散のために使用されて いる重み付きラウンドロビン方式をオフにすることもできます。 80 ページの『ディスパッチャーの負荷分散プロパティーをクラスター互換モードに設定する』を参照してください。

## 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 5. 「値」列の「処理容量」に新しい値を入力し、「OK」をクリックします。

新しい値がただちに有効になります。

# 進行中の要求係数を使用したディスパッチャーの負荷の分散

進行中の要求係数を設定すると、ラウンドロビン・アルゴリズムにフィードバック を提供し、各ディスパッチャーの処理状況を示すことができます。

重み付きラウンドロビン方式の負荷分散では、すべての要求は等しく、すべてのデ ィスパッチャーは受信要求を等しく処理できるとみなされます。しかし、要求はさ まざまであり、高い処理能力を必要する場合と必要としない場合があります。ディ スパッチャーも処理能力の異なるさまざまなサーバーで実行されます。例えば、処 理能力の低いサーバーで実行されているため、または高い処理能力を必要とする多 数の要求を取得中であるためにディスパッチャーの処理が遅れている場合でも、ラ ウンドロビン方式ではすべてのディスパッチャーが同様に扱われます。処理が遅れ 始めたディスパッチャーのキューには、多数の進行中の要求があります。ラウンド ロビン・アルゴリズムでは、この情報を使用して、過負荷の状態が解消されるまで ディスパッチャーに新規要求を送信しないようにできます。

inProgressRequestFactor 詳細設定によって、ラウンドロビン・アルゴリズムに送信 するフィードバックの量が制御されます。値が大きいほど、進行中の要求が多いノ ードが使用される可能性が低くなります。調査によると、理想的なフィードバック の量はデフォルト値の 2.0 です。単純なラウンドロビン方式を使用するには、この 値をシステム・レベルで 0.0 に設定します。

値は、システム・レベルまたはサービス・レベルで設定できます。システム・レベ ルの設定は、すべてのサービスのデフォルトとして使用されます。サービスの設定 は、システム・レベルの設定に優先します。

ディスパッチャーの負荷分散は、容量処理を設定して制御することもできます。 78 ページの『ディスパッチャー間での要求の分散』を参照してください。また、ディスパッチャーの負荷分散のために使用されている重み付きラウンドロビン方式を オフにすることもできます。 80 ページの『ディスパッチャーの負荷分散プロパテ ィーをクラスター互換モードに設定する』を参照してください。IBM Cognos Administration の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの 『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

システム全体での進行中の要求係数のプロパティーの設定 すべてのサービスに対して進行中の要求係数のプロパティーを指定できます。

#### 手順

- 1. 535 ページの『詳細設定のグローバル構成』のセクションの手順に従います。
- 2. 「パラメーター」列で、DISP.default.inProgressRequestFactor を入力しま す。
- 「値」列に、値を入力します。この値はすべてのサービスのデフォルトとして使用されます。指定可能な値については、79ページの『進行中の要求係数を使用したディスパッチャーの負荷の分散』を参照してください。
- 4. 「**OK**」をクリックします。

新しい値が即時に適用されます。

# 特定のサービスに対する進行中の要求係数のプロパティーの設定

特定のサービスに対して進行中の要求係数のプロパティーを指定できます。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. 構成するサービスの「パラメーター」列で、
  - **DISP.service_name.inProgressRequestFactor** (ここで、*service_name* はサービ スの名前) と入力します。

例えば、Report サービスの場合は、

**DISP.reportService.inProgressRequestFactor** と入力します。

- 3. 「値」列に、関連付ける値を入力します。この値はサービスのデフォルトとして 使用されます。指定可能な値については、 79 ページの『進行中の要求係数を使 用したディスパッチャーの負荷の分散』を参照してください。
- 4. 「**OK**」をクリックします。

新しい値が即時に適用されます。

# ディスパッチャーの負荷分散プロパティーをクラスター互換モード に設定する

IBM Cognos サーバーが負荷分散インフラストラクチャー内で稼働している場合、 ディスパッチャーの負荷分散のために使用されている重み付きラウンドロビン方式 をオフにできます。

このパラメーターを設定しない場合、クラスターと IBM Cognos Software で負荷 分散が重複し、パフォーマンスが低下する可能性があります。

ディスパッチャーの"loadBalancingMode"というプロパティーには、 "weightedRoundRobin"または"clusterCompatible"を設定できます。 "weightedRoundRobin"モードでは、ディスパッチャーの設定に基づき、要求がディ スパッチャーによって重み付きラウンドロビン方式で分散されます。詳細について は、 78 ページの『ディスパッチャー間での要求の分散』を参照してください。こ れがデフォルトのモードです。

"clusterCompatible"モードでは、非親和性要求は可能であればローカルで処理され ます。ローカル・ディスパッチャーにサービスが存在しない場合、要求は失敗しま す。これにより、負荷分散インフラストラクチャーによって実行される負荷分散 が、IBM Cognos ソフトウェアに優先されることになります。

"loadBalancingMode"プロパティーは、1 つのディスパッチャーに対して設定することも、設定フォルダーのディスパッチャー・グループに対して設定することもできます。詳細については、 58 ページの『構成フォルダー内のディスパッチャーのグループ化』を参照してください。"loadBalancingMode"は継承プロパティーであるため、ディスパッチャーを設定フォルダーに移動し、このフォルダーに "loadBalancingMode"プロパティーを設定することで、ディスパッチャー・グループに対して素早くプロパティーを設定できます。

ディスパッチャーの負荷分散は、進行中の要求係数を設定して(79 ページの『進行中の要求係数を使用したディスパッチャーの負荷の分散』を参照)、または容量処理を設定して(78 ページの『ディスパッチャー間での要求の分散』を参照)制御することもできます。

## 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。

ヒント:ディスパッチャー・レベルで負荷分散設定を変更することもできます。

- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 5. 「値」列で「負荷分散モード」の値として「重み付きラウンドロビン (WRR)」 または「クラスター互換」を選択し、「**OK**」をクリックします。

新しい値がただちに有効になります。

## 使用量のピーク期間の設定

組織の要求ピーク時の開始時刻と終了時刻を指定できます

多くの組織には、処理要求がピークに達する時間帯があります。通常は、社員が仕 事中で双方向のレポートを実行している営業時間内がピーク時になります。 ピーク時には、ジョブの実行速度を上げ、ユーザーからの双方向要求を処理するた めに十分なシステム・リソースを確保できるように、接続数とプロセス数を少なく 設定します。詳細については、『最大プロセス数と最大接続数』を参照してくださ い。システムに対する処理要求が少ないオフピーク時には、接続数とプロセス数を 多めに設定できます。

デフォルトのピーク時は、7 時~18 時です。ピーク時とオフピーク時のサービスご とのデフォルト接続数は 4 です。

### 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 「すべてのディスパッチャー」をクリックします。

ヒント:「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示は「すべてのサーバー」、 「すべてのサーバー・グループ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サ ービス」のいずれかです。

- 3. ディスパッチャーの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリック します。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 6. 「値」列で、次の設定に新しい値を入力します。
  - ピーク時の開始時刻
  - オフピーク時の開始時刻

ヒント: 設定をデフォルト値にリセットする場合は、該当する設定のチェック・ボックスをオンにして、「デフォルト値に戻す」をクリックします。

7. 「**OK**」をクリックします。

## 最大プロセス数と最大接続数

最大プロセス数と最大接続数を設定できます。

Report サービス、Batch Report サービスでは、ディスパッチャーが要求を処理す るために開くことができる最大プロセス数、および、親和性の高い接続と低い接続 の最大数を設定できます。Agent サービス、Content Manager サービス、Delivery サービス、Job サービス、Report Data サービスでは、最大接続数を設定できま す。

ピーク時とオフピーク時のために別々の設定があります。詳細については、 81 ペ ージの『使用量のピーク期間の設定』を参照してください。

## 最大接続数

各ディスパッチャーには、Agent サービス、Content Manager サービス、Delivery サービス、Job サービス、Report Data サービスがそれぞれ最大 1 つ存在します。 接続で一度に処理されるのは、1 つのサービスからの 1 つの要求です。

次の設定により、ピーク時とオフピーク時のサービスごとの最大接続数を指定できます。

- オフピーク時の <サービス名> サービスの最大接続数
- ピーク時の<サービス名> サービスの最大接続数

デフォルトの接続数は4です。

#### 最大プロセス数

各ディスパッチャーには、複数の Report サービスおよび Batch Report サービス のプロセスが存在する場合があります。次の設定により、ピーク時の最大プロセス 数を指定できます。

- ピーク時の <サービス名> サービスに対する最大プロセス数
- オフピーク時の<サービス名>サービスに対する最大プロセス数

各サービスのデフォルト接続数は2 です。

#### 親和性の接続

レポート・サーバーでは、Batch Report サービスと Report サービスの要求を処理 するために、親和性の低い接続と高い接続を受け入れます。

親和性の低い要求は、どのレポート・サーバーでも処理できます。通常、親和性の 低い要求は、レポートの実行が最初に要求されたときに使用されます。

親和性の高い要求は、理想的には特定のレポート・サーバーによって処理されま す。通常、親和性の高い要求は、すでに要求されているレポートで使用されます。 これには、レポートのページ送りなどの操作が含まれる場合があります。特定のレ ポート・サーバーが使用不可または使用中の場合、レポートは任意のレポート・サ ーバーで再実行され (親和性の低い要求)、次のページ (親和性の高い要求) はその サーバーに転送されます。

親和性の設定は、処理要求の負荷分散の設定と高度なルーティングの設定に優先し ます。詳細については、 78 ページの『ディスパッチャー間での要求の分散』およ び 59 ページの『高度なディスパッチャー・ルーティング』を参照してください。

サービスに対する親和性の設定がエントリーの実行中に変更されると、サーバー・ プロセス数が倍になる可能性があります。変更が有効になっている間、プロセス数 が一時的に最大設定数を超える場合があります。使用しているシステムに十分なメ モリーがないと、この際に問題が起きる場合があります。

次の設定により、Report サービスおよび Batch Report サービスの親和性の低い接 続数と高い接続数を指定できます。

オフピーク時の <サービス名> に対する親和性の <低い | 高い> 接続の数

注: この設定の名前から、この設定がオフピーク時のみに適用されるように思われま すが、これはオフピーク時とピーク時の両方に適用されます。

Batch Report サービスの場合、親和性の低い接続数のデフォルトは 2 です。 Report サービスの場合、親和性の低い接続数のデフォルトは 4 です。親和性の高 い接続数のデフォルトは、すべてのサービスで 1 です。

## 最大プロセス数と最大接続数の設定

最大プロセス数と最大接続数を設定できます。

始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」をクリックし、対象サービスをクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

3. サービスの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。

ヒント: Report サービスと Batch Report サービスの場合、一部の設定をシス テム・レベルまたはディスパッチャー・レベルで設定することもできます。

- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 6. 変更するプロセスと接続に対して、新しい値を「値」列に入力します。

ヒント: 設定をデフォルト値にリセットする場合は、該当する設定のチェック・ ボックスをオンにして、「親の値に戻す」をクリックします。

7. 「**OK**」をクリックします。

## キューの時間制限の指定

管理者は、ユーザーが発行する双方向要求が、キュー内で有効な Report サービス への接続を待機する最大時間 (秒) を指定できます。

この制限時間内に要求を処理できないと、要求は失敗し、ユーザーにエラー・メッ セージが返されます。オペレーティング・システムに十分なリソースがあり、IBM Cognos ソフトウェアが正しく設定されていれば、要求は制限時間内に処理されま す。

時間制限を指定する場合は、ユーザーによる最大応答待ち時間 (秒) を考慮します。 デフォルトでは、キューの時間制限は 240 秒です。

Batch Report サービスに対する要求がキュー内に保持される時間は不定です。

165 ユーザーを超える高いユーザー負荷があり、分散インストールで継続的に双方 向レポートが実行されている場合は、キューの制限時間を 360 秒に増やして、エラ ー・メッセージを回避します。非同期タイムアウトの設定も増やしてエラー・メッ セージを回避する場合もあります。詳細については*IBM Cognos Analytics*「インスト ールおよび設定ガイド」を参照してください。

#### 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。

ヒント:ディスパッチャー・レベルまたはサービス・レベルでキューの時間制限 設定を変更することもできます。

- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 5. 「値」列で、「**Report** サービスのキューの時間制限 (秒)」設定に新しい値を入 力します。

ヒント:設定をデフォルト値にリセットする場合は、該当する設定のチェック・ ボックスをオンにして、「デフォルト値に戻す」をクリックします。

6. 「**OK**」をクリックします。

#### PDF ファイルの設定

PDF ファイルには 4 種類の設定があり、その組み合わせで PDF ファイルの作成 速度とファイル・サイズが決まります。

最適な設定は、環境によって異なります。例えば、夜間のバッチ・ジョブの一部と して PDF ファイルを作成する場合など、速度が問題にならないのであれば、生成 に時間がかかっても、簡単に配布できる小さなファイルを作成する設定を選択する 場合があります。アドホック PDF ファイルや、グラフや画像を多数含む複雑な PDF ファイルを作成する場合は、ファイルのサイズよりも、生成する速度を重視す ることになります。

Report サービスと Batch Report サービスには、異なる PDF ファイル設定を使用 できます。

#### PDF の文字エンコード方式

PDF の文字エンコード方式により、PDF ファイルの作成に使用される文字セット が決定します。西欧表記体系のラテン文字に対する Microsoft Windows オペレー ティング・システムの標準的な 1 バイト・エンコード方式である Windows1252 エ ンコード方式、または Unicode (UTF-16) エンコード方式を選択できます。デフォ ルトでは、PDF の文字エンコード方式は、ファイルで検出された文字に基づいて自 動的に決定されます。 次の設定名があります。

- Report サービス用の PDF 文字エンコード方式
- Batch Report サービス用の PDF 文字エンコード方式

值	目的
Windows1252	ファイルが Windows1252 文字のみを含むこ とがわかっている場合、PDF ファイル作成 を高速化するためにこの設定を使用する。
	Windows1252 に対応する文字がない Unicode (UTF-16) 文字は、未定義の Windows1252 文字に変換されます。
フォント	ファイルが Windows1252 以外の文字 (中国 語など) を含むことがわかっている場合は、 PDF ファイル作成を高速化するために、自 動設定ではなくこの設定を使用する。
	PDF の組み込みフォントは、すべて Windows1252 で文字エンコードされていま す。他のほとんどのフォントでは、UTF-16 文字セットが使用されます。
	この設定では通常、Windows1252 設定より PDF ファイルのサイズが大きくなります。 UTF-16 でエンコードされたファイルのほう が、優れたファイル圧縮を実現できます (88 ページの『コンテンツ圧縮タイプ』を参 照)。
自動	ドキュメントのテキストをエンコードする際 に、Windows1252 を使用するか UTF-16 を 使用するか自動的に決定する場合は、この設 定を使用する。
	大量のテキストを分析する必要がある場合、 3 種類の設定のうち最も速度が遅くなりま す。速度が重要な場合は、さまざまなレポー トで他の設定を試して、使用している環境に 最適な設定を決定することもできます。
	これはデフォルトです。

# フォントの埋め込み

レポートで使用されているフォントをすべてのリーダーで使用できるようにするため、フォントを PDF ファイルに埋め込むことができます。IBM Cognos Configuration には、Report サービス用と Batch Report サービス用の 2 つのフォ ント埋め込みリストがあります。 フォントは常に埋め込むように指定することも、埋め込まないように指定すること もできます。例えば、再配布する法的権利がないフォントは埋め込まないように指 定できます。遠隔地の営業所では使用できないものの、PDF レポートを読むために 必要なフォントは常に埋め込むように指定できます。

フォント埋め込みリストについて詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* インストール および設定ガイド」を参照してください。

IBM Cognos Administration では、Report サービスと Batch Report サービスに よる PDF ファイルへのフォントの埋め込みを許可するかどうかを指定できます。 自動フォント埋め込みを選択することもできます。埋め込みフォントが含まれたフ ァイルはサイズが大きくなり、生成に時間がかかる点に注意してください。埋め込 みフォントは、ネットワーク・リソースにとって負担になる場合があります。埋め 込みフォントを少なくするほど、ネットワーク・リソースの消費を削減できます。

一部のフォントのライセンスでは、埋め込みが禁止されています。ライセンスのあるフォントを埋め込む場合は、ベンダーの許可を受けていることを確認します。

次の設定名があります。

- 生成した PDF ドキュメントへの Report サービスによるフォントの埋め込み を許可するオプション
- 生成した PDF ドキュメントへの Batch Report サービスによるフォントの埋 め込みを許可するオプション

バーコード・フォントなど、使用時に常に埋め込まれる特殊なフォントがありま す。これらの設定では、特殊なフォントの埋め込みは制御されません。PDF 組み込 みのフォントは埋め込まれません。

值	目的
許可	PDF レポートの表示に必要なフォントの一 部をユーザーが持っていないことがわかって いる場合、この設定を使用する。ファイルの サイズは大きくなり、PDF 出力の生成は遅 くなります。
	IBM Cognos Configuration で埋め込まない フォントのリストに記載されているフォント は埋め込まれません。
	これはテフォルトです。
不可	PDF レポートの表示に必要なすべてのフォ ントをユーザーが持っていることがわかって いる場合、この設定を使用する。ファイルの サイズは小さくなり、生成は速くなります。
	IBM Cognos Configuration で常に埋め込む フォントのリストに入っていない限り、フォ ントは埋め込まれません。

値	目的
自動	どのフォントを埋め込むか自動的に決定され る。この設定では、PDF レポートの生成に 最も時間がかかります。
	データに Windows1252 の文字のみが含まれ ている場合、IBM Cognos Configuration で 設定された、常に埋め込むフォントのリスト と埋め込まないフォントのリストの両方が使 用されます。同じフォントが両方のリストに 指定されている場合は、埋め込まないフォン トのリストのほうが優先されます。
	特殊なフォントを除き、リストに記載されて いないフォントが埋め込まれるのは、通常そ のフォントの UTF-16 文字がファイル内で使 用されている場合に限られます。

## コンテンツ圧縮タイプ

PDF レポートの作成時に使用する圧縮タイプを設定できます。圧縮率が高いタイプ の場合、ファイルの PDF 出力の作成には時間がかかりますが、作成されるファイ ルのサイズは小さくなります。

コンテンツ圧縮タイプでは、圧縮するデータを指定します。 89 ページの『PDF フ ァイル設定の指定』では、データをどの程度圧縮するかを指定します。2 種類の設 定を組み合わせて、最終的なファイルのサイズを決定します。

次の設定名があります。

- **Report** サービスで作成する **PDF** 文書の **PDF** 圧縮タイプ
- Batch Report サービスで作成する PDF 文書の PDF 圧縮タイプ

この設定には、圧縮率が最も低いタイプから最も高いタイプまで、「クラシック」、「標準」、「強化」、「高度」、「完全」という 5 つの選択肢があります。 「クラシック」がデフォルトです。

圧縮タイプは、PDF レポート内で圧縮されるデータ量を示します。通常、圧縮率が 低いと圧縮速度が速くなり、ドキュメントのサイズが大きくなります。バージョン 6.0 より前の Adobe PDF Acrobat Reader では、「クラシック」より高い圧縮タ イプはサポートされていません。

まれに、圧縮によって、サイズの小さなファイルがわずかに大きくなる場合があり ます。

#### 圧縮アルゴリズム・レベル

コンテンツ圧縮タイプでは、圧縮するデータを指定します。『コンテンツ圧縮タイ プ』では、データをどの程度圧縮するかを指定します。2 種類の設定を組み合わせ て、最終的なファイルのサイズを決定します。 次の設定名があります。

- Report サービスで作成する PDF 文書のコンテンツ圧縮レベル
- Batch Report サービスで作成する PDF 文書のコンテンツ圧縮レベル

圧縮アルゴリズム・レベルは、0 (圧縮なし) から 9 (最大圧縮率) の間で選択できます。デフォルトは 9 です。

### PDF ファイル設定の指定

PDF ファイル設定を指定できます。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」をクリックし、対象サービスをクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. サービスの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 6. 「値」列に、個々の PDF ファイル設定の値を入力します。

ヒント: 設定をデフォルト値にリセットする場合は、該当する設定のチェック・ ボックスをオンにして、「デフォルト値に戻す」をクリックします。

7. 「**OK**」をクリックします。

## 最長実行時間の設定

Report サービスと Batch Report サービスの最長実行時間を設定できます。

例えば、タスクの実行にかかる時間がますます長くなっているため、何か間違って いることが分かった場合、実行時間を制限することができます。また、どのタスク もサーバー時間を独占せず、他のタスクに損失を及ぼさないようにすることもでき ます。

時間制限を超えると、実行はキャンセルされます。デフォルトは 0 であり、実行時 間に制限はありません。

この設定は、ガバナー上限の設定よりも優先されます。詳細については、 92 ページの『Report Data サービスに対するレポート・サイズの上限値の設定』を参照してください。

## 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。 このタスクについて

この設定は、システム、ディスパッチャー、またはサービスのレベルで変更できま す。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」をクリックし、対象サービスをクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. サービスの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 6. 「値」列に、「<サービス名> サービスの最長実行時間 (秒)」設定の新しい値を 入力します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。

## 監視リスト出力レポートの保存期間の指定

一定の実行回数、または一定期間 (日数や月数)の間、監視リスト出力レポートを保存することができます。

例えば、バージョン 10 まで保存したり、出力レポート・バージョンを 2 日間また は 6 カ月間、保存したりすることができます。

次の2 つの設定があります。

- 監視リスト出力レポートの最長保存期間を指定する場合は、「定期ドキュメントのバージョン保存期間」設定を使用します。デフォルト値は1日です。これは「設定」ウィンドウで"1日間"と表示されます。
- どのバージョンまで保存するかを指定する場合は、「定期ドキュメントのバージョン保存カウント」設定を使用します。デフォルトはありません。

両方の設定を指定した場合は、最初に到達したほうの設定により、保存されるバー ジョン数が決定します。

これらの設定の選択は、監視リスト出力レポートが作成される頻度やシステム・リ ソースに依存します。例えば、ポータルを介した要求に応じ、レポートが夜間に実 行され日中に出力を提供し、かつ、監視リストが週 1 回更新される場合、1 カ月で 4 バージョン、せいぜい 5 バージョンを保存する可能性があります。ジョブを使用 してレポートが実行され、ジョブの実行時に監視リストが更新される場合は、毎日 1 バージョンのみ保存する可能性があります。

#### 始める前に

IBM Cognos Administration の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

## 手順

- 1. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。
- 5. 「値」列の「定期ドキュメントのバージョン保存期間」設定に新しい値を入力 し、ドロップダウン・メニューから「日間」か「カ月間」を選択します。
- 6. 「値」列の「定期ドキュメントのバージョン保存カウント」設定に新しい値を入 力します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。

# Analysis Studio または Reporting のグラフで生成されるホッ ト・スポットの制限

パフォーマンスを上げるには、Analysis Studio および Reporting のグラフで生成 されるホット・スポットの数を制限することができます。

グラフ内のホット・スポットは、ポインターをその場所に置くと表示されます。ホ ット・スポットの例は、ドリルダウン記号や、または、縦棒、折れ線、円グラフの スライスの詳細を表示するツールチップなどです。ホット・スポットの数とともに ブラウザーの応答時間は長くなります。多数のメンバーを含むグラフが生成された 場合、ホット・スポットによってシステム・リソースへの負荷が増大し、ブラウザ ーがフリーズする可能性があります。

ホット・スポットの数を制限する場合、棒グラフや円グラフのスライスなどの個々 のグラフ要素よりも、軸ラベルや凡例ラベルなどのアイテムが優先されます。グラ フにあるアイテムの数やホット・スポットの最大数の設定によって、一部の軸アイ テムにはホット・スポットがあるのに他の軸アイテムとすべてのグラフ要素にはな いこともあれば、すべての軸アイテムと一部のグラフ要素にはホット・スポットが あるのに他のグラフ要素にはないこともあります。

**Reporting** でホット・スポットの最大数が設定されている場合、この設定よりも優 先されます。詳細については、*IBM Cognos Analytics - Reporting*ユーザー・ガイド を参照してください。

デフォルトでは、ホット・スポットの数に制限はありません。

#### 手順

- 1. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。

ヒント:ディスパッチャー・レベルまたはサービス・レベルでホット・スポット 設定を変更することもできます。

- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」リストから「調整」を選択します。

- 5. 「Batch Report サービスによってグラフに生成されるホット・スポット数」ま たは「Report サービスによってグラフに生成されるホット・スポット数」を見 つけます。「値」列で、「無制限」の横にある矢印をクリックし、「<数値>」 をクリックします。ホット・スポットの最大数として新しい値を入力します。
- 6. 「**OK**」をクリックします。

# Report Data サービスに対するレポート・サイズの上限値の設定

レポート・データのサイズの上限を大きくすることができます。

Report Data サービスで使用されるメモリーなどのリソースを制限するために、 IBM Cognos ソフトウェアでは送信できるレポート・データのサイズが制限されて います。IBM Cognos for Microsoft Office でレポートの結果が大きすぎるという エラーが出力された場合、ガバナーの上限設定を変更し、レポート・データのサイ ズの上限値を引き上げることができます。

最長実行時間の設定はこの設定よりも優先されます。詳細については、 89 ページ の『最長実行時間の設定』を参照してください。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Report Data」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「**Report Data** サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを設定」 をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「値」列で、「ガバナー上限 (MB)」の数値を変更します。
- 6. 「**OK**」をクリックします。

IBM WebSphere Web サービス・タスクからのエージェントのコ ンテキスト ID の除外

> デフォルトでは、Agent サービスが Web サービスと対話する際に、エージェント のコンテキスト ID が含まれます。

> IBM WebSphere[®] の Web サービス・タスクを含むエージェントを実行する場合、 このコンテキスト ID を除外して WebSphere 自身のコンテキスト ID と競合しな いようにしなければなりません。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 「AgentService」の「パラメーター」列で、asv.webservice.useRunContext と 入力します。

実行しているすべての AgentService インスタンスについて、この設定を指定 する必要があります。

- 3. このパラメーターの値として「true」を入力し、「OK」をクリックします。
- 4. IBM Cognos サービスを再開します。

# リポジトリー・サービスのキャッシュの調整

リポジトリー・サービスのキャッシュを調整できます。ローカル・メモリーおよび ディスク・リソースに設定可能な、各種のサイズ設定プロパティーがあります。こ れは、ディスパッチャーごとに一意に設定することができます。

次の表には、リポジトリー・サービスに関して調整可能なキャッシュのタイプの説 明が示されています。

表 21. リポジトリー・サービスで使用可能なキャッシュのタイプ

パラメーター	説明
レポートおよびレポートの要素がキャ ッシュ内に存在できる最大秒数	レポートを (使用頻度を問わず) キャッシュ内に保 持できる最大秒数。期限切れになったレポート は、キャッシュではなくリポジトリーから取り出 されます。デフォルト値は 1200 秒 (20 分) で す。値 0 は、レポートがキャッシュ内に保存され ないことを意味します。
ディスクにオーバーフローさせること ができるレポートおよびレポートの要 素の最大数	ローカル・メモリーに保持できるキャッシュ・エ ントリーの最大数。デフォルト値は 1000 エント リーです。値 0 は、ローカル・メモリーに保持で きるアイテムの数に制限がないことを意味しま す。
メモリー内に保管できるレポートおよ びレポートの要素の最大数	<ul> <li>ローカル・ディスクに書き込みできるキャッシュ・エントリーの最大数。メモリー・キャッシュが制限に達すると、アイテムはローカル・ディスクにオーバーフローされます。デフォルト値は100個のレポートおよびレポート要素です。0を設定すると、ディスクに書き込まれるアイテムの数に制限がないことを意味します。エントリーは、IBM Cognos Configuration で定義されたデータ・ファイルの場所に書き込まれます。</li> </ul>

リポジトリー・サービスは、拡張設定 repository.maxCacheDocSize を使用して、 キャッシュに格納可能な各レポート出力の最大サイズ (メガバイト単位) を指定しま す。指定のサイズを超える出力はキャッシュに入れられず、常にリポジトリーまた は Content Manager から取得する必要があります。デフォルト値は 10 です。こ の拡張設定は、特定のリポジトリー・サービスまたはディスパッチャーに個別に指 定することも、IBM Cognos 環境全体でグローバルに指定することもできます。詳 細については、 535 ページの『付録 G. 詳細設定の構成』を参照してください。

# **NC** テーブルの一括クリーンアップ

一括クリーンアップ・プロセスを使用して、Content Store 内の NC テーブルから 終了したタスクを除去します。 さまざまなタスクとオブジェクトでバッチ処理がサポートされています。一般的な 例として、レポートの実行を含んだスケジュール・ジョブがあります。モニター・ サービスは、NC テーブル内のタスク・キューに、ジョブとレポートの実行コマン ドを格納します。理想的な環境では、終了したタスクがバックグラウンド・スレッ ドによって 1 つずつ除去されます。しかし、サーバーがビジー状態である場合、ま たはスケジュールされた実行速度がシステム容量を超えている場合には、終了した タスクをこの方法で除去する時間がないことがあります。タスク・キューが拡大を 続けて、サーバー・パフォーマンスの問題が発生する可能性があります。管理コン ポーネントで現行アクティビティーを表示すると、処理待ちのレポート実行の長い リストが出現して、この問題が明らかになります。

以下の NC テーブルが影響を受けます。

- NC_TASK_ANCESTOR_STOREIDS
- NC_TASK_HISTORY_DETAIL
- NC_TASK_QUEUE
- NC_TSE_STATE_MAP
- NC_TASK_PROPERTY

一括クリーンアップ・プロセスは、データベースに固有の

BulkFinishedTaskCleanerThread スクリプトを使用します。このスクリプトは、 IBM Cognos サービスの始動時にモニター・サービスによって開始されます。この スクリプトが有効になると、最初に NC テーブル内に特定の (構成可能な) 数の完 了したタスクが含まれているかどうかが検査されます。そのようなタスクが検出さ れた場合、それらは一時テーブルに移動され、NC テーブルは 1 つのトランザクシ ョンですべてクリアされます。 NC スキーマからドロップしたり再作成したりする 必要のあるテーブルはありません。 IBM Cognos サービスを停止する必要もありま せん。

クリーンアップ・プロセスは、以下のモニター・サービス詳細設定を使用して有効 化および構成することができます。

- event.finished.check.active
- event.finished.check.interval
- event.finished.check.threshold

これらの設定について詳しくは、 555 ページの『Monitor サービスの詳細設定』の トピックを参照してください。

詳細設定の構成方法について詳しくは、 535 ページの『付録 G. 詳細設定の構成』 を参照してください。

重要: Content Store の最新の有効なバックアップを常に取ってください。

# クエリーの同時実行

環境によっては、クエリーの同時実行を有効にしてレポート実行のパフォーマンス を上げることができます。
デフォルトの場合、IBM Cognos ソフトウェアではレポート内のクエリーが順番に 実行されます。クエリーの同時実行を有効にするには、Report サービスまたは Batch Report サービス、あるいはその両方について、サーバーの詳細プロパティー を設定します。同時クエリー実行を有効にすると、レポート内のどのクエリーを同 時実行できるかがレポート・サーバーによって判断されます。

レポート作成者は、レポート内のどのクエリーが同時実行の対象候補となるかを指 定する必要があります。詳細については、*IBM Cognos Analytics - Reporting*ユーザ ー・ガイド を参照してください。

#### RSVP.CONCURRENTQUERY.NUMHELPERSPERPROCESS

このパラメーターを使用すると、クエリーの同時実行を有効化し、各 Report サービス・プロセスおよび Batch Report サービス・プロセスのクエリー実行ヘルパー の最大数を設定することができます。

デフォルトでは値は 0 で、クエリーの同時実行は無効になっています。

各クエリー実行ヘルパーは追加のデータ・ソース接続になります。例えば Report サービスには、親和性の高い 2 つの接続と親和性の低い 2 つの接続を持つプロセ スが 4 つあります。

- クエリー実行ヘルパーの最大数が 0 (無効) に設定されている場合、Report サービスで作成されるデータ・ソース接続の最大数は 16 になります (親和性の低い 2 つの接続 + 親和性の高い 2 つの接続 + 0 個のクエリー実行ヘルパー x 4 プロセス)。
- クエリー実行ヘルパーの最大数が2 に設定されている場合、Report サービスで 作成されるデータ・ソース接続の最大数は24 になります(親和性の低い2 つの 接続 + 親和性の高い2 つの接続 + 2 個のクエリー実行ヘルパー x 4 プロセス)。

#### RSVP.CONCURRENTQUERY.MAXNUMHELPERSPERREPORT

このパラメーターには、レポートごとのクエリー実行ヘルパーの最大数を指定でき ます。このパラメーターは、使用可能なすべてのクエリー実行ヘルパーが 1 つのレ ポートで消費されてしまうのを防ぐために使用します。

例えば、同時実行できるクエリーがレポート内に 8 つあるとします。

- RSVP.CONCURRENTQUERY.NUMHELPERSPERPROCESS および RSVP.CONCURRENTQUERY.MAXNUMHELPERSPERREPORT がいずれも 4 に設定されている場合、レポート実行時にすべてのクエリー・ヘルパーがこのレ ポートで消費されることになります。このレポートの実行が終わるまで、他のレ ポートはクエリーを同時実行できません。
- RSVP.CONCURRENTQUERY.MAXNUMHELPERSPERREPORT を 2 に設定すると、レポートで消費されるクエリー・ヘルパーが 2 つになるため、残りの 2 つのヘルパーを他のレポートで使用できます。

このパラメーターのデフォルト値は1 です。

この設定は、RSVP.CONCURRENTQUERY.NUMHELPERSPERPROCESS が 0 より大きい値に設定されない限り、効果がありません。

#### RSVP.CONCURRENTQUERY.ENABLEDFORINTERACTIVEOUTPUT

このパラメーターを使用すると、Report サービスで双方向出力を行うときに、クエ リーの同時実行を有効にすることができます。

双方向レポートでクエリーの同時実行が有効な場合、結果が使用されない不必要な クエリーが実行される可能性があります。例えば、複数のページで構成されるレポ ートのすべてのクエリーが各ページで少なくとも 1 クエリーずつ実行されるのに、 ユーザーは 1 ページ目しか表示しないということがあります。双方向レポートで、 使用されない結果のためにリソースが消費されないようにするには、このパラメー ターを無効にします。

作成済みのプロンプト・ページは双方向出力ではないため、この設定の影響は受け ません。

デフォルトでは、このパラメーターの値は false で、クエリーの同時実行は無効に なっています。

#### **RSVP.PROMPT.EFFECTIVEPROMPTINFO.IGNORE**

このパラメーターを使用すると、メタデータ要求の effectivePromptInfo 属性の発 行を無効にし、事実上、レベルの caption 属性より下からレベル自体へのプロンプ ト情報の移動を無効にすることができます。

デフォルトでは、このパラメーターの値は false で、クエリーの同時実行は無効に なっています。

## クエリーの同時実行用のパラメーターの設定

以下の手順を使用して、クエリーの同時実行用のパラメーターを設定します。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 「ReportService」または「BatchReportService」の「パラメーター」列で、 94 ページの『クエリーの同時実行』のセクションで説明したパラメーター名の 1 つを入力します。
- 3. 「値」列で、パラメーターに対応する値を入力します。
- 4. 「**OK**」をクリックします。

#### クエリーの優先順位の設定

クエリーの優先順位を指定するパラメーターを設定できます。

プロンプト・コントロールが定義されているレポートを実行するとレポート、モデ ル、データ・ソースに定義されているパラメーター情報など、すべてのパラメータ ー情報が取得されます。これは、データ型を決定し、プロンプト・コントロールの 機能と、プロンプトに関連付けられたパラメーターの機能を揃えるために必要で す。この処理は、クエリーの数が多かったり複雑であったりする場合は特に、パフ オーマンスに影響を及ぼす可能性があります。ユーザーの視点から見ると、最初の プロンプト・ページまたはレポート・ページが表示されるまでに時間がかかりすぎ る場合があります。

レポート作成者は、Reporting でクエリーのヒントを設定して、パラメーター情報 の判別においてどのクエリーを優先するか指定することによって、処理速度を上げ ることができます。クエリーには、どこで使用されるか、フィルターが含まれてい るかどうかによって優先順位が付けられます。優先順位グループは、フィルターな ど、類似した属性を共有するクエリーのセットです。作成者が優先順位を定義する と、すべてのクエリーに対するパラメーターが同時に取得されるのではなく、まず 優先順位を付けられたクエリーのパラメーターが取得されます。この場合、クエリ ーの優先順位が自動的に付けられたかどうかは関係ありません。パラメーター、フ ィルター、およびプロンプト・コントロールの詳細については、「IBM Cognos Analytics - Reporting ユーザー・ガイド」を参照してください。

クエリーは優先順位によって、次の表のようにグループ化されます。クエリー・グ ループにサブグループがある場合、最初のサブグループが2番目のサブグループよ りも優先されます。

クエリー・グループ	優先順位
Reporting で「パラメーター情報に使用」プロパティーが「は い」に設定されているクエリー	1
フィルターが定義されており、プロンプト・コントロールに値を 挿入するのに使用されないクエリー	2
<ul><li>これらのクエリーへの最初の参照</li><li>これらのクエリーへの後続の参照</li></ul>	
フィルターが定義されており、プロンプト・コントロールに値を 挿入するのに使用されるクエリー	3
<ul> <li>これらのクエリーへの最初の参照</li> <li>これらのクエリーへの後続の参照</li> </ul>	
フィルターが定義されておらず、プロンプト・コントロールに値 を挿入するのに使用されないクエリー	4
<ul> <li>これらのクエリーへの最初の参照</li> <li>これらのクエリーへの後続の参照</li> </ul>	
フィルターが定義されておらず、プロンプト・コントロールに値 を挿入するのに使用されるクエリー	5
<ul> <li>これらのクエリーへの最初の参照</li> <li>これらのクエリーへの後続の参照</li> </ul>	

クエリーやクエリー・グループの処理方法を定義したシステム全体の設定を指定す るには、設定の値または名前をレポート・サーバーの詳細設定 RSVP.PROMPT.RECONCILIATION に割り当てます。これにより、プロンプト・コ ントロールの機能とデータ型との調整レベルを、関連付けられたパラメーターの調 整レベルに指定できます。選択した設定によって、調整の精度と速度のどちらを重 要視するか決まります。例えば、レポート作成者がすべてのクエリーを通じて同じ データ型と機能 (つまり、選択性、カーディナリティー、および離散性) でパラメー ターを定義しようとする場合は、"CHUNKED"または"3"を指定すると、最も幅広い 状況で最高のパフォーマンスが得られます。

RSVP.PROMPT.RECONCILIATION.CHUNKSIZE によってチャンクのサイズを指 定します。この設定は、CHUNKED GROUPED や CHUNKED を使用する場合に 適用されます。デフォルトのチャンク・サイズは 5 です。

レポート・サーバーの詳細プロパティーと Reporting のクエリーのヒントが連動して、最高のパフォーマンスを提供します。

RSVP.PROMPT.RECONCILIATION の指定に使用可能な設定を次の表に示します。

設定	名前	目的
0	COMPLETE	すべてのクエリーが一度に送信されます。これは、最も速度が 遅く、かつ最も正確な調整の形式です。 デフォルトではこの設定になっています。
1	GROUPED	優先順位グループごとにクエリーが送信されます。この設定 は、フィルターをかけられていないクエリーが大部分で、フィ ルターをかけられているクエリーがほとんどないレポートに最 適です。中程度の速度と高い調整精度が提供されます。
2	CHUNKED GROUPED	1 要求当たり最大数のクエリーが、優先順位グループごとに送 信されます。クエリーが複数のグループにまたがることはあり ません。この設定は、類似したフィルター式を含むクエリーが 多数あるレポートに最適です。最高の速度と最小の調整精度が 提供されます。
3	CHUNKED	1 要求当たり最大数のクエリーが、優先順位グループごとに送 信されます。クエリーが複数のグループにまたがる場合があり ます。

#### 始める前に

**IBM Cognos Administration** 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特 性』 にアクセスできる権限が必要です。

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. 「**Report**」サービスの「パラメーター」列で、このセクションで説明するパラ メーター名の 1 つを入力します。
- 3. 「値」列で、この設定に関連する値を入力します。
- 4. オプション:必要に応じて、引き続き他の設定および値を入力します。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

6. 「BatchReportService」についても、同じ手順を繰り返します。

#### クエリーにおける数値検索キーの文字列への変換

データ・ソースで数値データ・アイテムが文字列に変換されない場合は、エラーが 発生する可能性があります。

検索のプロンプトは、検索のプロンプトの最初の表示で実行されないクエリーに関 連付けられます。検索文字列を入力すると、クエリーにフィルターがかけられ、結 果がリスト・ボックスに表示されます。ほとんどのデータ・ソースでデータ・アイ テムが文字列 (varchar) に変換され、フィルターが有効になるため、レポート・サ ーバーでは、フィルターがかけられたクエリー・アイテムのデータ型はチェックさ れません。ただし、Teradata などの一部のデータ・ソースでは変換が行われないた め、エラーの原因となります。

Reporting または Query Studio のレポートを実行すると、次のエラー・メッセー ジが表示されます。

RQP-DEF-0177 'sqlPrepareWithOptions' 処理中にエラーが発生しました。ステータ ス ='-69'。UDA-SQL-0043 SQL 要求の処理中に、基となるデータベースでエラーが 検出されました。[NCR][ODBC Teradata Driver][Teradata Database] Partial string matching requires character operands.

このエラーを防ぐには、ReportService および BatchReportService の詳細設定 RSVP.PROMPT.CASTNUMERICSEARCHKEYTOSTRING が true (デフォルト値) に設定されて いることを確認してください。この詳細設定を使用すると、数値データ・アイテム が文字列 (varchar) 形式に変換されます。詳細設定の構成について詳しくは、 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』を参照してください。

#### 変換されないデータ・アイテムの例

[data item] starts with '20'

[data item] contains '123'

または論理結合を使用する

[data item] starts with '2' AND [data item] contains '009' OR [data item] contains '119'

### lower 関数を使用した変換されないデータ・アイテムの例

検索で大文字と小文字を区別しない場合、これらの式には lower 関数が含まれま す。lower 関数は、数値より文字列データ・アイテムを検索する場合に有効です。

lower([data item]) starts with lower('20')

lower([data item]) contains ('123')lower

([data item]) starts with lower('2') AND lower([data item]) contains lower('009') OR lower([data item]) contains lower('119') 文字列に変換されるデータ・アイテムの例

cast([data item], varchar(128)) starts with '20'

cast([data item], varchar(128)) contains '123'

cast([data item], varchar(128)) starts with '2' AND cast([data item], varchar(128)) contains '009' OR cast([data item], varchar(128)) contains '119'

### セッション・キャッシュ

Reporting、Query Studio、および IBM Cognos Viewer でセッション・キャッシュが有効になっている場合は、データベースへの以前の要求の結果がセッション中 キャッシュされます。

IBM Cognos ソフトウェアでは、パフォーマンスの向上を図るため、以後のクエリ ーではデータベースにアクセスせずにキャッシュされた操作結果を使用します。こ の方法は、同じ結果を使用できる場合や、新しい結果がキャッシュされた結果のサ ブセットである場合に適用されます。セッション・キャッシュをサーバー・レベル で、あるいはパッケージまたはレポート・レベルで無効にできます。

パフォーマンスに影響を与える可能性があるため、次の状況ではサーバー・レベル でのセッション・キャッシュを無効にすることもできます。

- すべてのクエリーについてデータベースから最新の結果、例えば、その間にデー タベースに追加された新しいレコードなどを直接入手することをユーザーが期待 する場合
- セッション中にキャッシュにアクセスする回数を制限する場合

バーストを使用するレポートなど、リソース消費が激しい個別のレポートについて も、セッション・キャッシュを無効にすることができます。

また、Reporting のレポートにある特定のクエリー (「*IBM Cognos Analytics - Reporting* ユーザー・ガイド」を参照) および Framework Manager のモデル (「*IBM Cognos Framework Manager* ユーザー・ガイド」を参照) のセッション・キャッシュの有効と無効を切り替えることもできます。

新しいモデルやレポートのセッション・キャッシュは、デフォルトでは有効化され ています。既存のパッケージやレポートでは、既存のセッション・キャッシュ設定 が保持されています。

### サーバー・レベルでのセッション・キャッシュの無効化

セッション・キャッシュをサーバー・レベルで無効にできます。

#### 手順

 インストールの場所/configuration ディレクトリーで、CQEConfig.xml.sample ファイルのコピーを作成し、それを CQEConfig.xml に名前変更します。

- エディターで インストールの場所/configuration/CQEConfig.xml ファイルを開 きます。 使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートさ れていることを確認してください。
- 3. CQEConfig.xml ファイル内で queryReuse パラメーターを探し、値を 0 に変更 します。
- 4. CQEConfig.xml ファイルを保存します。
- IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos サービスを停止してから再開し ます。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」 を参照してください。

# パッケージ・レベルまたはレポート・レベルでセッション・キャッ シュを無効にする

セッション・キャッシュをパッケージ・レベルまたはレポート・レベルで無効にで きます。

#### 手順

- インストールの場所/configuration/ にある CQEConfig.xml.sample ファイル をインストールの場所/bin にコピーし、CQEConfig.xml という名前に変更し ます。
- 2. インストールの場所/bin/ にある CQEConfig.xml をエディターで開きます。
- 3. 使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされているこ とを確認してください。
- 4. "queryReuse"パラメーターを探し、削除します。
- 5. "CQEConfig.xml"ファイルを保存します。
- IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos ソフトウェアを停止してから再 開します。詳細については「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガ イド」を参照してください。

## **CAM Passport Cookie** の保護のための HTTPOnly パラメーターの有効化

CAM Passport は、ユーザーによるこのサーバーとの Web ブラウザー・セッショ ンを識別します。管理者は HTTPOnly 属性を設定して、Web ブラウザーを使用す るユーザーのセッション中に、スクリプトによる CAM パスポート cookie の読み 取りや操作をブロックすることができます。

#### このタスクについて

HTTPOnly 属性を有効にすることにより、悪意のあるスクリプトにユーザーのセッション ID を盗まれないようにします。管理者がこの属性を設定すると、Web ブラウザーはサーバーに HTTP 要求を送信するためだけにセッション Cookie を使用できるようになります。

HTTPOnly 属性を有効にする場合、ユーザーがこの属性をサポートする Web ブラ ウザーを持っていることを確認してください。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Administration に移動します。
- 2. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 「スコアカード」ウィンドウの「システム」ドロップダウン・メニューから、 「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「カテゴリー」リストから「環境」を選択します。
- 6. 「HTTPOnly Cookie サポート」パラメーターの「値」列で対応するチェック・ボックスを選択します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。

# 小数の精度の引き下げ

クロス集計レポートの 10 進数精度を設定することができます。

クロス集計レポートの値には、最大 18 桁の数字、および小数点を使用できます。 小数の精度によって、数値の小数部分を表すために予約される桁数が決定されま す。残りの桁は、数値の整数部分を表すために予約されます。デフォルトでは、小 数の精度が 7 桁に設定されており、整数の桁は 11 桁に制限されます。

数値の整数部分で 11 桁を超える整数を予約する場合は、小数の精度を引き下げる 必要があります。例えば、小数の精度を 2 に設定すると、数値の整数部分で最大 16 桁を予約できます。

#### 手順

- インストールの場所¥configuration ディレクトリーで、qfs_config.xml ファイル を検索します。
- "qfs_config.xml"ファイルをコピーして、コピーしたファイルを "qfs_config.xml.backup"という名前に変更します。
- 3. 元の"qfs_config.xml"ファイルを開いて、次のコード行を検索します。

<provider name="CubeBuildProvider"libraryName="qfsCubeBuildProvider" serviceProvider="true"> <providerDetails>

4. providerDetails 要素に、次の行を追加します。

<scaleOfFloatDouble value="n"/>

ここで、"n" は指定する小数の精度の値を示しています。

デフォルト値は7です。

- 5. "qfs_config.xml"ファイルを保存します。
- 6. IBM Cognos サービスを再開します。

# 出力レポートをローカルに保管する外部オブジェクト・ストア

外部オブジェクト・ストアを定義することにより出力レポートをローカル・ドライ ブまたはネットワーク共有に保管するように Content Manager を構成できます。 出力レポートに外部オブジェクト・ストアを使用することにより、Content Store のサイズは削減され、Content Manager のパフォーマンスが改善されます。

外部オブジェクト・ストアの設定について詳しくは、「IBM Cognos Analytics イン ストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## 保存した出力レポート

出力レポート・ファイルのコピーを保存する場所を指定できます。

保存できるレポート出力形式は、PDF、CSV、XML、Microsoft Excel 2002、2007、2007 データ、および埋め込み画像のない HTML です。

保存された出力レポート・ファイルを、外部アプリケーションや、IBM Cognos ソ フトウェアに対するアクセス権限を持たないユーザーと共有できます。

出力レポート・ファイルを保存するための、次のようなオプションがあります。

• IBM Cognos ソフトウェア外部の場所

このオプションを使用すると、ユーザーは、どの出力レポート・ファイルをファ イル・システムに保存するかを制御できます。詳細については、『IBM Cognos ソフトウェア外部への出力レポート・ファイルの保存』を参照してください。

IBM Cognos ソフトウェア内部の場所

このオプションを使用すると、すべての出力レポート・ファイルは、Content Manager に定義された同じファイル・システムの場所に保存されます。このた め、このオプションは、配布を目的とした場合に有効です。このオプションで作 成される _desc 拡張子付きの記述子ファイルには、IBM またはサード・パーテ ィー製のアーカイブ・ソフトウェアに役立つ情報が含まれています。

このオプションにより、出力ファイルごとに事前定義されたスクリプトを実行で きます。これは、サード・パーティーの組み込みに役立ちます。

詳細については、 104 ページの『IBM Cognos ソフトウェアに出力レポート・ファイルを保存』を参照してください。

出力レポート・ファイルを保存するための両方のオプションは、相互に独立してい て、同時に使用することができます。

# **IBM Cognos** ソフトウェア外部への出力レポート・ファイルの保存

出力レポート・ファイルは、IBM Cognos ソフトウェア外部のファイル・システム に保存できます。ユーザーは、どの出力ファイルを保存するかを選択できます。

#### 始める前に

この機能を使用する前に、IBM Cognos Configuration の「アーカイブ・ファイ ル・システムのルートの場所」プロパティーによって示されるルート・ディレクト リーを構成します。詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガ イド」の IBM Cognos Analytics 外部での出力レポートの保存に関するセクション を参照してください。

#### このタスクについて

このオプションは、ユーザーがレポートを Web サイトなどの外部アプリケーショ ンと共有する場合に有用です。レポートは更新するたびにこの場所に保存されるの で、現在のコンテンツが常に使用可能になります。このオプションを使用して、 IBM Cognos ソフトウェアにアクセスできないユーザーのために、レポートをロー カル・ネットワークに保存することもできます。

ディスパッチャーおよびサービス用に複数の場所を指定できます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. ツールバーの「ファイル・システムの場所の定義」アイコン 😫 をクリックします。
- 3. 「新規」をクリックして名前、説明、および画面のヒントを入力します。
- 4. 「ファイル・システムの場所」ボックスに、出力レポート・ファイルを保存する 場所を入力します。
- 5. 「終了」をクリックします。

#### タスクの結果

指定した場所は、IBM Cognos Configuration で設定した「ファイル・システムの ルートの場所」に追加されます。

ヒント: IBM Cognos Configuration で、「ファイル・システムのルートの場所」 は、「アーカイブ・ファイル・システムのルートの場所」というプロパティーによ って示されます。

#### 次のタスク

ユーザーがレポートを実行またはスケジュールする際に、レポート配信方法として 「レポートを外部ファイルとして保存 (Save report as an external file)」を選択 すると、出力レポート・ファイルは、レポートが実行されるたびにこの場所に保存 されます。

## IBM Cognos ソフトウェアに出力レポート・ファイルを保存

ユーザーは、出力レポート・ファイルのコピーを IBM Cognos ソフトウェアに保存 できます。すべての出力レポート・ファイルは、Content Manager で指定された場 所に保存されます。

#### 始める前に

この機能を使用する前に、IBM Cognos Configuration の「出力レポートをファイ ル・システムに保存しますか。」プロパティーを「true」に設定します。詳細につ いてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

#### このタスクについて

Content Manager 内の出力レポート・ファイルのコピーを保存する場所を指定する 必要があります。場所が適用されるのは、選択した Content Manager サービスか ら保存した出力です。この場所は、CM.OutPutLocation パラメーターで表されま す。

この方法で出力レポートを保存すると、その出力ファイルに対応する XML 記述子 ファイルも作成されます。記述子ファイルには、名前、ロケール、作成時間、バー スト・キー、関連のレポート検索パス、レポート・バージョン連絡先などの出力レ ポートに関する情報が含まれています。記述子ファイルの名前には、出力ファイル の名前にサフィックス _desc を加えたものが使用されます。例えば、 158_1075940415360.pdf という名前で保存した PDF レポートは、 158_1075940415360_desc.xml という名前の記述子ファイルを持ちます。

さらに、スクリプトを指定して、出力レポートがファイル・システムにコピーされ るごとに後処理コマンドを実行することもできます。

レポート出力は、必ず、Delivery サービス・インスタンスごとに構成されたディレ クトリーに書き込まれます。レポート出力が複数の場所に書き込まれるのを防ぐに は、実行する Delivery サービス・インスタンスを 1 つのみにするか、共有ネット ワーク・ファイル・ロケーションを使用するようにすべてのサービス・インスタン スを構成します。 Delivery サービスを実行するディスパッチャーはすべて、ファ イル・システムへのアクセス権限を持っている必要があります。あるいは、レポー ト出力を保存しないすべてのシステムでこのようなディスパッチャーを無効化する 必要があります。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. 「ContentManagerService」について、以下のパラメーターを定義します。
  - CM.OutPutLocation

出力レポート・ファイルのコピーが保存される IBM Cognos ソフトウェア 内の場所を指定します。新しいバージョンのレポートを保存しても、古いバ ージョンのレポートはこの場所から削除されません。この場所は、選択した レポート・バージョンだけが保持されるように、適切に管理する必要があり ます。

このパラメーターは、IBM Cognos ソフトウェアに出力レポート・ファイル を保存する場合は必須です。

• CM.OutputScript

出力レポートがターゲット・ディレクトリーに保存された後に実行される、 .bat ファイルや .sh ファイルなどのシェル・スクリプトの場所と名前を指定 する。出力レポート・ファイルと関連する記述子ファイルの絶対パス名が、 スクリプトに渡されます。このパラメーターはオプションです。

#### CM.OutputByBurstKey

このパラメーターは、出力レポートがバーストによって配布される場合に適 用可能です。ここには、バースト・キーと同じ名前のサブディレクトリーに 出力レポート・ファイルを格納するかどうかを指定します。デフォルトは 「false」であり、出力の格納にバースト・キーは使用されません。

# 大規模ワークシートを使用するためのレポートと Batch Report サービスの設定

管理者は、Microsoft Excel 2007 の大規模ワークシートに対するサポートを有効に することができます。有効にした場合、最大 1,048,576 行を持つワークシートがサ ポートされます。

大規模ワークシートに対するサポートを有効にするには、「ReportService」および 「BatchReportService」に詳細設定「RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_LARGE_WORKSHEET」を 指定します。RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_LARGE_WORKSHEET 設定を指定すると、以下の 設定も指定可能になります。

RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_WORKSHEET_MAXIMUM_ROWS

新しいワークシートに移動する前に、出力する行数を指定します。

RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_OUTPUT_FRAGMENT_SIZE

IBM Cognos Analytics サーバーがディスクへのフラッシュ前に生成する、内部 メモリー断片サイズ (行単位)を調整します。この値が指定されていない場合、 デフォルトは約 45 000 行です。このプロパティーは、デフォルト値を使用した レポートの生成時に、メモリー不足などの問題がある場合に有用です。レポート が正常に実行されるようにするには、値を小さくする必要がある場合がありま す。

#### 手順

- 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 「ReportService」の「パラメーター」列で、 RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_LARGE_WORKSHEET と入力します。
- 3. 「値」列に、true を入力します。
- RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_WORKSHEET_MAXIMUM_ROWS 設定と
   RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_OUTPUT_FRAGMENT_SIZE 設定を同様の方法で指定し、それぞれに必要な値を入力します。
- 5. 「**OK**」をクリックします。
- 6. 「BatchReportService」についても、同じ手順を繰り返します。

# Excel 2007 レポートのワークシート・タブに動的に名前を付ける

IBM Cognos Analytics で、詳細プロパティー RSVP.EXCEL.PAGEGROUP_WSNAME_ITEMVALUE が true に設定されたとき、 Excel 2007 出力のタブには、指定された改ページに基づいて動的に名前が付けられ ます。 注: このプロパティーは Analysis Studio には適用されません。

#### このタスクについて

製品ラインごとに改ページが指定されている場合、ワークシートのタブには対応す る名前が付けられます。例えば、キャンプ用品、登山用品、個人装備、アウトドア 用保護用品、ゴルフ用品の各製品ラインで改ページされている場合、各タブにはそ の同じ名前が付けられます。

レポートに製品ラインをグループ化アイテムとして使用する 2 つのページ・セット が含まれるとき、またはネストされたページ・セットが含まれるときのタブ名につ いて詳しくは、「*IBM Cognos Reporting* ユーザー・ガイド」を参照してください。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のトピックの手順に 従います。
- 「詳細設定 ReportService」ページの「パラメーター」列で、 RSVP.EXCEL.PAGEGROUP_WSNAME_ITEMVALUE と入力します。
- 3. 「値」列に、「true」と入力します。

## 系統ソリューションの構成

レポートのデータについての詳細な情報 (データ・ソース、算出式など) を確認する 場合は、系統を参照します。IBM Cognos ソフトウェアのデフォルトの系統ソリュ ーション、IBM InfoSphere[®] Information Governance Catalog の系統ツール、ま たはカスタムの系統ソリューションを設定できます。

IBM Cognos Viewer、Reporting、Query Studio、および Analysis Studio で系統 情報にアクセスできます。デフォルトのソリューションまたは IBM InfoSphere Information Governance Catalog を使用するには、このセクションの手順で示され ているように、「環境」カテゴリーの「Metadata Information サービスの URI」 パラメーターの値を設定してください。

カスタムの系統ソリューションを実装するには、次の操作を行う必要があります。

 IBM Cognos ソフトウェア系統の要求パラメーターを変換して、カスタムの系統 ソリューションを呼び出す Web インターフェースを作成する。

詳細については、「IBM Cognos Software Development Kit Developer Guide」の カスタム系統ソリューションの統合に関するセクションを参照してください。

 「環境」カテゴリーの「Metadata Information サービスの URI」パラメーター の値を系統サーバーの URL に変更する。

#### 始める前に

「系統」機能を使用可能にしておく必要があります。詳細については、 237 ページ の『第 13 章 保護されている機能と特性』および 249 ページの『第 14 章 オブジ ェクト機能』を参照してください。 注: InfoSphere Information Server のサポートされているバージョンのリストを確認するには、Cognos Analytics Software Product Compatibility Reports を参照してください。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」「操作」メニューの「プロパティーを設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「環境」カテゴリーの「Metadata Information サービスの URI」に、次の値 のいずれかを入力します。
  - IBM Cognos ソフトウェアのデフォルトの系統ソリューションを設定する場合は、「/lineageUIService」と入力します。

この値がすでに設定済みの場合は、「キャンセル」をクリックします。設定 内容を変更する必要はありません。

• IBM InfoSphere Information Governance Catalog を系統ソリューションと して構成する場合は、次のように URL を入力します。

/lineageUIService?iis=https://*igc_server_name*:9080/ibm/iis/ igc#cognosLineage/*cognos_server_name* 

ここで、 https://*igc_server_name*:9080/ibm/iis/igc#cognosLineage/ *cognos_server_name* は、ネットワークでアクセスできる IBM InfoSphere Information Governance Catalog の URL です。

*igc_server_name* は、IBM InfoSphere Information Governance Catalog がイ ンストールされているサーバー名を表しています。

 Cognos の系統と InfoSphere Information Governance Catalog の系統 の組み合わせを利用するために、設定する必要がある追加のパラメーター があります。「launchPoint」パラメーターの値が「indirect」に設定され ている場合、 Cognos レベルの系統(つまり、レポートおよびモデル・レ ベルの情報) については Cognos の系統を使用する必要があり、データ・ ソースの系統を調べるには Information Governance Catalog を使用でき ることを示しています。Cognos Lineage Viewer でデータ・ソース・オ ブジェクトをクリックすると、 IBM InfoSphere Information Governance Catalog が起動され、詳細なデータ・ソース・レベルの系統 情報を調べることができます。

/lineageUIService?launchPoint=indirect &iis=Information_Governance_Catalog_URL

例: /lineageUIService?launchPoint=indirect&iis=https:// igc_server_name:9080/ibm/iis/igc#cognosLineage/cognos_server_name

*igc_server_name* は、IBM InfoSphere Information Governance Catalog がインストールされているサーバー名を表しています。

 カスタムの系統ソリューションを設定する場合は、既存の値を、系統の Web インターフェースを表す URI に変更します。 例えば、次のように入力します。 https://mycompany.com/ ourLineageService.cgi

5. 「**OK**」をクリックします。

## InfoSphere Business Glossary URI の設定

IBM Cognos Analytics のビューアーと、Reporting、Query Studio、および Analysis Studio のメタデータ・ツリーから IBM InfoSphere Business Glossary に アクセスするには、Glossary Web ページの URI を指定する必要があります。

デフォルトでは、Cognos ソフトウェアに表示される Glossary の検索結果として、 検索で指定したキーワードを含む用語のみが返されます。他のタイプの資産は返さ れません。

詳細については、 385 ページの『InfoSphere Business Glossary へのアクセス』を 参照してください。

#### 始める前に

InfoSphere Business Glossary にアクセスするには、「用語集」機能に対する権限 が必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特 性』および 249 ページの『第 14 章 オブジェクト機能』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 2. 「ステータス」タブの「システム」をクリックします。
- 3. 「システム」の「操作」メニューをクリックし、「プロパティーを設定」をクリ ックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「環境」カテゴリーの「**IBM Business Glossary URI**」に、次の URI を入力 します。 https://*igc_server_name:port_number*/*ibm*/*iis*/*igc*/popup/ popupSearch.do?exactMatch=1

例えば、次のように入力します。 https://*igc_server_name*:9080/ibm/iis/igc/ popup/popupSearch.do?exactMatch=1

6. 「**OK**」をクリックします。

# Collaboration ディスカバリー URI の設定

コラボレーションによる意思決定に IBM Connections を使用するように、IBM Cognos Analytics および IBM Cognos Workspace を構成できます。IBM Connections との統合によって、ビジネス・ユーザーは、レポートの作成や閲覧、 分析の実行、ワークスペースの監視を行いながら共同作業を行えます。ユーザー は、IBM Cognos Workspace 内から IBM Connections アクティビティーにアクセ スし、IBM Cognos Analytics および IBM Cognos Workspace 内から IBM Connections のホーム・ページにアクセスできます。 Collaboration ディスカバリー URI は、コラボレーション・プロバイダーとして使 用する IBM Connections サーバーを指定します。 URI を指定すると、コラボレー ション関連のサポートが IBM Cognos Analytics に次のように追加されます。

- リンクが IBM Cognos Analytics ポータルの「ようこそ」ページに追加される。 ユーザーに IBM Connections のホーム・ページへのアクセス権がある場合、リ ンクは「個人用ソーシャル・ネットワークにアクセス」という名前になり、ユー ザーはホーム・ページにリンクできます。ユーザーに IBM Connections のアク ティビティーへのアクセス権はあるものの、ホーム・ページへのアクセス権がな い場合、リンクは「マイ・アクティビティー」という名前になり、ユーザーはア クティビティーにリンクできます。
- IBM Connections のホーム・ページへのリンクがポータルの「起動」メニューに 追加される。
- IBM Connections のホーム・ページへのリンクが IBM Cognos Workspace の 「操作」メニューに追加される。
- IBM Cognos Workspace のワークスペース・アプリケーション・バー上に「共同作業」メニュー・ボタンが追加される。この結果、ユーザーは、IBM Connections でワークスペース・アクティビティーを作成または表示できるようになります。

IBM Connections のホーム・ページや「アクティビティー」ページにアクセスする には、管理者が「共同作業」機能を有効にする必要があります。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックしてディスパッチャーのリストを表示します。
- 2. ツールバーから「プロパティーを設定 設定」ボタンをクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「環境」カテゴリーの「**Collaboration** ディスカバリー **URI**」に、URI を次の ように指定します。

http://server name:port number/activities/serviceconfigs

例えば http://server name:9080/activities/serviceconfigs と入力します。

ここで、server_name は、IBM Connections がインストールされているサーバ ーの名前です。

5. 「**OK**」をクリックします。

# ジョブ・キュー、SMTP キュー、タスク・キュー評価指標の有効化

デフォルトでは、ジョブ・キュー、タスク・キューおよび SMTP キュー評価指標で キューの長さの評価指標のみが有効になっています。それぞれについて他の評価指 標も使用できますが、それらは 0 に設定されており、有効にしない限りユーザー・ インターフェースに表示されません。

- 高水準キュー待機時間
- 低水準キュー待機時間

- キュー待機時間
- キュー通過要求数
- 高水準キュー長
- 低水準キュー長

これらの評価指標の詳細については、 29 ページの『第 4 章 システム・パフォー マンス評価指標』を参照してください。これらの設定を有効にすると、パフォーマ ンスに影響する可能性がある点に注意してください。

#### 始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」「操作」メニューの「プロパティーを設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 「環境」カテゴリーの「詳細設定」の横にある「編集」リンクをクリックします。
- 5. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスが表示された場合は、このチェック・ボックスをオンにします。表示されない場合は、次の手順に進みます。
- 「パラメーター列」列に、「enable.tide.metrics.smtpqueue」、
   「enable.tide.metrics.jobqueue」、および「enable.tide.metrics.taskqueue」
   という設定を入力します。
- 7. 各パラメーターの横の「値」列に、「**True**」と入力し、評価指標を有効にしま す。
- 8. 「**OK**」をクリックします。
- 9. インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/classes/iManagemetadata.xml ファイルをエディターで開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされている ことを確認してください。

分散インストールでは、各コンピューターで"iManage-metadata.xml"ファイル を編集する必要があります。このファイルを編集しない場合は、最初にグロー バル評価指標が表示される場合がありますが、ページから移動した後は保持さ れません。

- 10. <!-- These metrics have been explicitly disabled. Please consult documentation on how to enable them. --> で始まるセクションのコメントを 外します。
- 11. ファイルを保存します。
- IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos ソフトウェアを停止してから再 開します。

IBM Cognos ソフトウェアの停止の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## 実行済みヒューマン・タスクと注釈 (コメント)の有効期限の設定

実行済みの注釈とヒューマン・タスクの有効期限を設定できます。

有効期限とは、関連付けられているエントリーの削除後の期間を指しています。例 えば、注釈の有効期限が 60 日間に設定されている場合、その注釈は、関連付けら れているレポートの削除後 60 日間で削除されます。ヒューマン・タスクの有効期 限が 120 に設定されている場合、そのヒューマン・タスクは、リンクされているレ ポートまたはダッシュボードがすべて削除されると、120 日間で削除される場合が あります。

デフォルトの有効期限は、実行済みのヒューマン・タスクが 90 日間、実行済みの 注釈が 180 日間です。

ヒューマン・タスクの詳細については、 393 ページの『第 25 章 ヒューマン・タ スクの管理』を参照してください。注釈 (コメント)の詳細については、「*IBM Cognos Workspace* ユーザー・ガイド」を参照してください。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、 「サービス」 > 「Human Task サービス」とクリックするか、または「サー ビス」 > 「Annotation サービス」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. サービスの「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 注釈の場合は、設定「完了した注釈の有効期間」を探します。「Human Task サービス」の場合は、設定「完了したヒューマン・タスクの有効期間」を探しま す。有効期限を日数または月数で設定し、「OK」をクリックします。

#### タスクの結果

完了した注釈またはヒューマン・タスクは、指定した日数が経過すると削除されま す。

## ドリルスルー・フィルターの動作の変更

ドリルスルーにおいて、デフォルトの動作であるメンバーのキャプションを使用す るフィルターの代わりにメンバーのビジネス・キーを使用するフィルターを生成し たいという場合は、動的ドリルスルー・フィルターの動作を変更できます。 メンバーのキャプションを使用するには、

RSVP.DRILL.DynamicFilterUsesBusinessKey パラメーターを 0 に設定します。ビジネス・キーを使用するには、このパラメーターを 1 に設定します。

始める前に

**IBM Cognos Administration** の機能にアクセスするには適切な権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから、「サービス」 > 「レポート」とクリックするか、または「サービス」 > 「Batch Report」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「**Report** サービス」または「**BatchReport** サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを設定」をクリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「詳細設定」の横にある、「編集」をクリックします。
- 6. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオ ンにします。
- 7. 「パラメーター」列に、「RSVP.DRILL.DynamicFilterUsesBusinessKey」と入力 します。
- 8. 「値」列で、パラメーターに関連付ける値を入力します。
- 9. 「**OK**」をクリックします。
- 10. 「プロパティーを設定」ページで、「**OK**」をクリックします。

# **URL** パラメーターを Content Manager に送信するかどうかの制御

パフォーマンスを考慮して、URL パラメーターは Content Manager へのクエリー に含められません。

しかし、例えば認証プロバイダーでのシングル・サインオンの失敗を避けるためな どに、URL パラメーターが必要になる場合があります。 URL パラメーターが必要 な場合、forwardURLParamsToCM を true に設定することによってそれらを含めるこ とができます。

このパラメーターのデフォルト設定は false です。

- IBM Cognos Administration で、「設定」 > 「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。
- 2. 単一のディスパッチャーの forwardURLParamsToCM 設定を指定するには、次のようにします。

- a. 「名前」列で、ディスパッチャーをクリックし、「プロパティーを設定」を クリックします。
- b. 「**Presentation** サービス」に移動し、「プロパティーを設定」をクリックします。
- c. 「設定」タブをクリックし、「環境」、「詳細設定」で、「編集」をクリッ クします。
- d. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」をクリックします。こ れで、手順 4 に進みます。
- 3. 複数のディスパッチャー用にグローバルに forwardURLParamsToCM パラメーター を指定するには、次のようにします。
  - a. 「設定」ツールバーで、「プロパティーを設定 設定」をクリックしま す。
  - b. 「設定」タブをクリックし、「環境」、「詳細設定」で、「編集」をクリッ クします。
- 4. 「パラメーター」フィールドに forwardURLParamsToCM と入力し、「値」フィー ルドに true と入力します。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

## UNIX オペレーティング・システムからの印刷

RSVP.PRINT.POSTSCRIPT プロパティーは、UNIX オペレーティング・システムか ら PDF 文書を印刷するために使用するインターフェースを制御します。 Adobe Acrobat PDF インターフェースを引き続き使用する場合、このプロパティーの値を false に設定します。

RSVP.PRINT.POSTSCRIPT プロパティーは UNIX オペレーティング・システムに のみ適用され、デフォルト値は true になります。デフォルト値のままにすると、 UNIX オペレーティング・システムから内部 PostScript インターフェースを使用し て PDF を印刷する機能をユーザーに提供できます。

RSVP.PRINT.POSTSCRIPT プロパティー値を false に変更する前に、ご使用のオペ レーティング・システム用の最新バージョンの Adobe Acrobat Reader をインスト ールしていることを確認してください。

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. 「BatchReportService」の「パラメーター」列で、RSVP.PRINT.POSTSCRIPT と入 力します。
- 3. 「値」列に、false を入力します。
- 4. 「**OK**」をクリックします。

## 有効なドメイン・リストへの Cognos Workspace ドメインの追加

IBM Cognos Workspace のツールボックス・ウィジェットでは、有効なドメインを URL に使用する必要があります。Cognos Workspace ユーザーが使用するドメイ ンを、有効なドメイン・リストに追加します。

#### 手順

- IBM Cognos Administration で、「設定」 > 「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。
- 2. 「プロパティーを設定」アイコン 💭 をクリックします。
- 3. 「設定」タブを開きます。
- 4. 「詳細設定」を選択し、「編集」をクリックします。
- 5. パラメーター BUXClientValidDomainList を追加します。
- 6. 「値」列に、ドメインをコンマ区切りリストで追加します。

# 多数のスケジュールの追加または更新時における Content Store のロックの回避

IBM Cognos Analytics において多数のスケジュールを追加または更新する場合、 スケジュールに無効なデータが含まれていると Content Store データベースがロッ クされる可能性があります。この問題が生じる場合、スケジュール・プロパティー を検証し、無効なスケジュールを使用不可にする拡張プロパティーを設定できま す。

#### このタスクについて

無効なデータが含まれるスケジュールにより、Content Store データベースがロッ クされる可能性があります。例えば、スケジュールに無効なユーザー・アカウント 資格情報が含まれることがあります。スケジュールを追加または更新し、資格情報 プロパティーが無効なユーザー・アカウント資格情報を参照する場合、Content Manager は無効なスケジュールの更新を繰り返し試行しますが失敗します。

emf.schedule.validation.enabled プロパティーを true に設定すると、開始日、終了 日、データ型、ユーザー・アカウント資格情報などのスケジュール・プロパティー が検証されます。無効なスケジュールが見つかるとそれは使用不可になり、使用不 可にされたスケジュールの詳細がログ・ファイルに記録されます。

このプロパティーのデフォルトは false です。スケジュールの検証を使用可能にするには、このプロパティーを true に設定します。

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』というトピックの手順に従います。
- **2.** ディスパッチャー・サービスのリストで、「**EventManagementService**」を選択 します。
- 3. 「環境」構成設定の「値」列で、「編集」をクリックします。

- パラメーター名を追加するには、emf.schedule.validation.enabled と入力します。
- 5. 値を追加するには、true と入力します。

# 第6章 データ・ソースと接続

データ・ソースでは、データベースへの物理的な接続が定義されます。IBM Cognos Analytics は、さまざまなリレーショナル・データ・ソース、OLAP データ・ソー ス、および DMR データ・ソースをサポートしています。

データ・ソース接続には、データベースの場所やタイムアウト期間など、データベ ースに接続するために必要なパラメーターを指定します。データ・ソース接続に は、資格情報とサインオンを含めることができます。 1 つのデータ・ソースに複数 の接続を含めることができます。

Framework Manager を使って作成および発行されるパッケージの中で、データ・ ソースを他の要素とともに組み合わせて、1 つ以上のデータ・ソースを使用可能に することができます。パッケージの作成手順については「*IBM Cognos Framework Manager* ユーザー・ガイド」を参照してください。一部のデータ・ソースについて は、IBM Cognos ソフトウェアでパッケージを作成して編集することもできます。 詳細については、 337 ページの『第 20 章 パッケージ』を参照してください。

IBM Cognos のセキュリティーを使用して、データ・ソースを保護することができ ます。また、IBM Cognos ソフトウェアでは、データ・ソース内で定義されたセキ ュリティー設定も考慮されます。詳細については、 181 ページの『データ・ソース の保護』を参照してください。

データ・ソースをある環境から別の環境に移動するには、Content Store 全体を配 布します。詳細については、 303 ページの『第 19 章 配布』を参照してくださ い。

#### 互換クエリー・モード

IBM Cognos Analytics バージョン 10.2.2 以前では、このタイプのクエリー処理が 使用されます。互換クエリー・モードを使用するレポートを実行するには、32 ビッ トのデータ・ソース・クライアント・ライブラリーを使用して、レポート・サーバ ーを 32 ビットになるように構成する必要があります。互換クエリー・モードで は、ネイティブ・クライアントと ODBC 接続を使用して、データ・ソースと通信 します。

データ・ソースが 64 ビットである場合に互換性クエリー・モードを使用するに は、必ず 32 ビット・クライアント・ライブラリーを使用してそのデータ・ソース に接続してください。

#### 動的クエリー・モード

動的クエリー・モードでは、Java または XMLA 接続を使用してデータ・ソースへ の通信が提供されます。

サポートされているリレーショナル・データベースの場合は、タイプ 4 の JDBC 接続が必要です。タイプ 4 の JDBC ドライバーでは、JDBC 呼び出しがベンダー 固有のデータベース・プロトコルに直接変換されます。これは Pure Java で作成さ れており、プラットフォームに依存しません。リレーショナル・データベースの場 合、JDBC ドライバーを IBM Cognos Analytics *install_location*¥drivers ディ レクトリーにコピーする必要があります。詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」の中の、レポート作成データベース用のデータベ ース接続の設定に関するトピックを参照してください。

サポートされる OLAP データ・ソースでは、特定ソースおよび特定バージョンの OLAP テクノロジー用にカスタマイズ/拡張された MDX を使用することで、 XMLA 接続によってアクセスが最適化され、高機能の OLAP データ・ソースが利 用されます。

詳細については、 153 ページの『データ・ソース用の JDBC 接続の使用』を参照 してください。

# データ・ソースのタイプ

IBM Cognos Analytics は、リレーショナル・データ・ソース、OLAP データ・ソース、 XML データ・ソースなど、さまざまな種類のデータ・ソースをサポートします。

サポートされるデータ・ソース・タイプのリストは、リリースごとに変更される場合があります。現在サポートされるデータ・ソースについては、サポート対象のソフトウェア環境 (www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27047186) Web サイトを参照してください。追加情報については、重要な問題 (www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27047185) のリストもご覧ください。データ・ソースについての情報がここに含まれることがあります。

データ・ソースのタイプごとにデータ・ソース接続情報が異なる可能性がありま す。データ・ソースへの接続に指定する必要があるパラメーターについては、ベン ダー資料の情報を参照してください。

# IBM Db2 データ・ソース

IBM Cognos Analytics では、Db2 データ・ソースがサポートされています。

JDBC 接続は、Db2 for Linux, UNIX, and Microsoft Windows operating systems、および Db2 for z/OS[®] に接続するために使用できます。

#### IBM Db2 信用データベース接続

データベースの信頼されているコンテキスト機能を使用して複数のユーザーがデー タベースに接続する場合は、 IBM Db2 データベースと IBM Cognos ソフトウェ ア間の接続を確立できます。

信用アプリケーション接続に使用するデータ・ソースでは、(プロキシー・ユーザー のクエリーが発行される前に定義する必要がある)ユーザーに固有のデータベース 状態においてセッションを開くブロックを定義する必要があります。関連付けられ た接続を開くブロックは、信用接続の試行時に1回のみ実行されるのに対し、セッ ションを開くブロックは、さまざまなユーザーに対して何度も実行できます。

プロキシー・ログオンを許可されたユーザーのために接続が要求をプロキシーする という情報は、信頼されているデータベース接続に添付される次のセッション・コ マンド・ブロックを使用してデータベースに提供されます。セッション変数 OCI_ATTR_USERNAME のために使用する値は、Db2 ユーザー名と一致する必要 があります。

```
<commandBlock>
<commandBlock>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<name>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>#$account.defaultName#</value>
</argument>
</arguments>
</sessionStartCommand>
</commandBlock>
```

データ・ソース接続のコマンド・ブロックを追加する方法について詳しくは、 175 ページの『データ・ソースの作成時のコマンド・ブロックの追加』を参照して ください。

#### 信用接続を使用するための前提条件

信用接続を使用する場合には、いくつかの前提条件を検討する必要があります。

- すべてのプラットフォームで、Db2 クライアント・バージョン 9.5 以上を使用 します。
- Db2 Call Level Interface (Db2 CLI) を使用して信用接続を作成します。
- データ・ソース接続のサインオンを作成して、信頼されている Db2 ユーザーの Db2 資格情報を指定する必要があります。
- Db2 データベースに定義された信頼されているコンテキストで、プロキシー対象 ユーザーの資格情報を要求してはなりません。

#### IBM Db2 接続パラメーター

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。

詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

表 22. Db2 接続パラメーター

パラメーター	説明
Db2 データベース名	Db2 クライアントの設定時に使用された Db2 データベ ースの名前 (別名) を入力します。
<b>Db2</b> 接続ストリング	オプション。Db2 CLI ベンダーまたは ODBC ベンダー が受け入れることができる、名前/名前の値のペアを入 力します。

表 22. Db2 接続パラメーター (続き)

パラメーター	説明
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を入力しま す。
	照合順序が必要になるのは、IBM Cognos Analytics と データベースの間でソートの不一致が発生する可能性が ある、特定の場合のみです。Cognos クエリー・エンジ ンは、1252-IDENTITY および 1252-UNIQUE を含む Db2 データベースの特定のタイプの照合順序を検出でき ます。 Db2 データベースがそれらの照合順序のいずれ かに設定されている場合、ローカル処理とデータベース 処理の間でソートが一致します。
非同期で開く	不使用。
信頼されているコンテキスト	IBM Cognos Analytics から適切に設定された Db2 サ ーバーに対して、信頼されている接続を試行できるよう にするには、このチェック・ボックスを選択します。詳 細については、Db2 管理ドキュメントを参照してくださ い。
	この機能をサポートしていないクライアントまたはサー バーでこのチェック・ボックスをオンにすると、接続エ ラーまたはレポート実行エラーが発生する可能性があり ます。
タイムアウト	データベースへの接続や応答待機に対するタイムアウト 時間を、秒単位で指定します。有効なエントリーは 0~ 32,767 です。データベースがタイムアウトしないように するには、「0」を入力します。これがデフォルトです。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページの『データ・ ソースの保護』を参照してください。 認証が不要である場合は、「認証不要」をクリックしま す。 認証が必要である場合は、「サインオン」をクリックし ます。
	接続文字列でユーザー ID とパスワードを使用する場合 は、「ユーザー ID」チェック・ボックスをオンにしま す。
	パスワードを使用する場合は、「パスワード」チェッ ク・ボックスをオンにし、「パスワード」ボックスと 「パスワードの確認」ボックスにパスワードを入力しま す。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワー ドを作成するには、「'すべてのユーザー' グループで使 用できるサインオンを作成」をクリックします。「ユー ザー ID」にユーザー ID を入力し、「パスワード」ボ ックスと「パスワードの確認」ボックスにパスワードを 入力します。

#### IBM Db2JDBC 接続パラメーター

「JDBC 接続の設定」チェック・ボックスをオンにしている場合は、データ・ソー スを作成するときに、JDBC 接続パラメーターを指定できます。

詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

## IBM Cognos キューブ

IBM Cognos Analytics のデータ・ソースとして使用可能な IBM Cognos キューブ には、IBM Cognos Planning Contributor および IBM Cognos PowerCubes など があります。

Cognos キューブへのデータ・ソース接続を作成する際に問題が発生した場合は、 「*IBM Cognos Analytics* トラブルシューティング・ガイド」を参照してください。

発行されていない (リアルタイムの)IBM Cognos Planning - Contributor データへ の接続については、「IBM Cognos Planning Installation Guide」を参照してくださ い。

#### **IBM Cognos Planning Contributor**

IBM Cognos Analytics では、データ・ソースとして IBM Cognos Planning Contributor がサポートされています。

IBM Cognos Analytics を使用すると、Contributor のリアルタイム・データをレポ ートおよび分析できます。

IBM Cognos の Contributor パッケージは、次のいずれかの方法で作成できます。

- Contributor Administration Console を使用すると、アプリケーションのすべてのキューブが格納されたパッケージを作成できます。ユーザーがStudio/Authoring ツールでこのパッケージを開くと、アプリケーションのすべてのキューブについてメタデータが表示されるため、複数のキューブから選択してレポートを作成できます。ただし、複数のキューブの値を使用するために不注意にクエリーを作成すると、データが存在しないレポートとなる危険性があります。詳細については、「IBM Cognos Planning Contributor Administration Guide」を参照してください。
- Framework Manager を使用すると、パッケージ内のキューブ数を決定できます。デフォルトでは、パッケージごとに 1 つのキューブが取得されます。ただし、この場合は多数のパッケージが存在することになり、管理が困難になる可能性があります。詳細については、「IBM Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照してください。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表 23. Planning Contributor データ・ソースの接続パラメーター

パラメーター	説明
外部ネームスペース	外部ネームスペースを選択します。

#### **IBM Cognos PowerCube**

IBM Cognos Analytics では、Transformer 7.3 以降のバージョンで作成した PowerCube がサポートされています。

エンド・ユーザーが PowerCube を使用できるようにするには、パッケージを作成 し、Transformer または Framework Manager からそのパッケージを発行します。 PowerCube パッケージは、IBM Cognos Analytics でも作成できます (337 ペー ジの『第 20 章 パッケージ』を参照)。PowerCube へのデータ・ソース接続は、 Transformer で作成するか、キューブを発行する際に Framework Manager で作成 します。または、キューブを発行した後に IBM Cognos Administration で作成し ます。

PowerCube は、Transformer を使用して Linux オペレーティング・システム環境 や HP-UX Itanium 環境で作成できます。このようなタイプのキューブでは、IBM Cognos のセキュリティーを使用できますが、Series 7 のセキュリティーは使用で きません。ただし、Cognos Content Store が Series 7 対応のサーバーで実行され ている場合は、IBM Cognos 環境でレポート・サーバーとして機能している Linux コンピューターや HP-UX Itanium コンピューターに、保護された Series 7 PowerCube を配布できます。

Impromptu クエリー定義 (.iqd) ファイルをデータ・ソースとして使用している場 合、Linux または HP-UX Itanium ではキューブを構築できません。これは、 Series 7 IQD Bridge がこれらのプラットフォームでサポートされていないためで す。

PowerCube への接続が作成された後は、次の操作を実行できます。

- PowerCube のパッケージの作成、 337 ページの『PowerCube のパッケージの 作成』を参照してください。
- 更新した PowerCube の配布、 180 ページの『更新済み PowerCube の配布』
   を参照してください。

PowerCube の詳細については、「*IBM Cognos Transformer* ユーザー・ガイド」を 参照してください。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表	24.	PowerCubes	データ	٠	ソース接続のパラメータ-
---	-----	------------	-----	---	--------------

パラメーター	説明
読み込みキャッシュ・サイズ	注: このパラメーターのデフォルト値は 80 MB で す。このパラメーターは、最適なクエリー・パフォー マンスを得るために、必要に応じて 1 MB~1 GB の 値に設定できます。
	最適な読み込みキャッシュ・サイズは、デフォルト値 の 80 MB より大きい場合も小さい場合もあります。 これは、実働環境における PowerCube がそのタイプ とクエリーの特性によって大幅に変化する可能性があ るためです。
	読み込みキャッシュ・サイズは、最初にキューブを開 くときに必要な時間に対しては影響がないことに注意 してください。
	クエリー・パフォーマンス (処理時間) では、読み込み キャッシュ・サイズの増加に従ってパフォーマンスが 向上し、最適な設定サイズを超えると横ばいになると いうパターンが典型的なプロファイルです。
	最適な設定サイズを判断するには、デフォルト値より 10 MB (あるいは、必要とする微調整レベルに応じて 5 MB または 1 MB) 小さくして得られたクエリー・ パフォーマンスの結果を基準にして、さらに小さい値 または大きい値にする必要があるかどうかを決めるこ とを推奨します。
	実働環境での最適な読み込みキャッシュ・サイズは、 キューブの拡大や変更に従って変化します。そのた め、ユーザーのクエリー・パフォーマンスのパターン や PowerCube の特性が変化した場合は、最適な読み 込みキャッシュ・サイズを確認する必要があります。

パラメーター	説明
場所	すべてのレポート・サーバーが Microsoft Windows オペレーティング・システムのコンピューターにイン ストールされている場合は、「Windows での場所」 を指定します。すべてのレポート・サーバーが UNIX オペレーティング・システムのコンピューターにイン ストールされている場合は、「Unix または Linux で の場所」を指定します。
	<ul> <li>キューブの完全なパスとファイル名を入力します。例 えば、ローカル・キューブでは</li> <li>C:¥cubes¥sales_and_marketing.mdc を入力します。ネットワーク・キューブでは、</li> <li>¥<i>Yservername</i>¥cubes¥sales_and_marketing.mdc を入力します。</li> <li>注: UNIX コンピューターにあるキューブの場合、正しい UNIX の場所を指定して、Windows の場所に任 意の文字を入力します。Windows の場所を空白にすることはできません。</li> <li>注: レポート・サーバーが Windows コンピューター と UNIX コンピューターにインストールされていて、 要求を実行しているレポート・サーバーが両方の環境 の PowerCube にアクセスできるようにするには、</li> <li>Windows と UNIX の場所を指定します。レポート・ サーバーがキューブにアクセスする環境にかかわらず、同じデータが返されるようにするには、両方の場</li> </ul>
	所に同じキューブ・ファイルを保存する必要がありま す。

表 24. PowerCubes データ・ソース接続のパラメーター (続き)

パラメーター	説明
サインオン	IBM Cognos セキュリティーを使用する場合は、 「 <b>PowerCube</b> 認証を単一のネームスペースに限定」 をクリックし、リストからネームスペースを選択しま す。
	パスワードで保護された PowerCube に接続する場合 は、「キューブのパスワード」をクリックし、「パス ワード」ボックスと「パスワードの確認」ボックスに パスワードを入力します。 注:「該当するすべてのネームスペース (保護されてい ない PowerCube も含む)」は、開発環境やテスト環境 で Series 7 PowerCube を IBM Cognos Analytics に移行しようとしている場合にのみ選択します。この 設定は、実働環境にある保護されていない PowerCube に対しても使用できます。
	キューブ・パスワードを使用する場合は、「キュー ブ・パスワード」をクリックし、「パスワード」ボッ クスと「パスワードの確認」ボックスにパスワードを 入力します。データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユーザ ー' グループで使用できるサインオンを作成」をクリ ックします。
	詳細については、 181 ページの『データ・ソースの保 護』を参照してください。

表 24. PowerCubes データ・ソース接続のパラメーター (続き)

#### 推奨 - IBM Cognos ソフトウェアでの PowerCube の使用

IBM Cognos ソフトウェアで PowerCubes を使用する場合の推奨事項があります。

具体的には、以下のとおりです。

 Series 7 PowerCube の移行をテストしている場合は、サインオン・オプション として「該当するすべてのネームスペース」による認証を選択できる。

このオプションは、Transformer モデルでのネームスペースの移行にのみ使用し ます。実働環境で複数のネームスペースがサポートされないことに変わりはあり ません。

• Series 7 PowerCube をデータ・ソースとして使用する場合は、PowerCube を IBM Cognos Analytics 用に最適化する。

最適化した PowerCube を使用すると、実行時にデータを素早く取得できます。 PowerCube は、pcoptimizer というコマンド行ユーティリティーを使用して最 適化します。このユーティリティーは IBM Cognos ソフトウェアに付属してい ます。 PowerCube の最適化の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* トラブルシュ ーティング・ガイド」を参照してください。

 PowerCube を発行する場合にキューブにカスタム・ビューが格納されていると きは、有効なユーザー ID とパスワードを使用して IBM Cognos ソフトウェア で認証を受ける。

この場合、匿名アクセスはサポートされていません。

#### **PowerCube** の保護

IBM Cognos ソフトウェアでサポートされている PowerCube は、IBM Cognos の セキュリティー・ネームスペースを使用して保護できます。セキュリティーは、キ ューブ全体またはそのカスタム・ビューに適用できます。IBM Cognos ネームスペ ースに対して保護されたキューブにアクセスするには、まず該当するネームスペー スにログオンする必要があります。

実働環境では、IBM Cognos ソフトウェアは、単一のネームスペースに対して保護 された PowerCube のみをサポートします。そのため、実働環境で使用する PowerCube を配布する場合は、サインオン・オプションの「PowerCube 認証を単 一のネームスペースに限定」を選択する必要があります。

注: IBM Cognos セキュリティーを使用する代わりに、パスワード保護を PowerCube に追加できます。セキュリティーを使用しないことも可能です。

# Oracle Essbase データ・ソース

データ・ソースでシナリオ・ディメンション、階層、または数値データが使用され る場合、Oracle Essbase のデータ・ソースに接続する前に、幾らかの構成が必要で す。

Oracle Essbase System 9 データ・ソースが LDAP ネームスペースを使用して設定 されている場合は、シングル・サインオンがサポートされます。LDAP ネームスペ ースへのログオンに使用するユーザー ID とパスワードで、自動的にデータ・ソー スに接続されます。LDAP ネームスペースの設定の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

パラメーター	説明
サーバー名	データベースが配置されているサーバーの名 前を入力します。UNIX オペレーティング・ システムの場合は、サーバーの TCP/IP ア ドレスを入力できます。

表 25. Oracle Essbase データ・ソースのパラメーター

パラメーター	説明
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	認証が不要である場合は、「認証不要」をク リックします。
	<ul> <li>Essbase Server が LDAP ネームスペース用 に設定されている場合、Essbase Server</li> <li>System 9 および IBM Cognos 8.4 ではシン グル・サインオンがサポートされます。</li> <li>「外部ネームスペース」を選択し、リスト から「LDAP」を選択します。</li> <li>LDAP ネームスペースへのログオンに使 用するユーザー ID とパスワードで、自 動位にデーターンレースに接続されます。</li> </ul>
	接続文字列でユーザー ID とパスワードを使 用する場合は、「サインオン」をクリックし ます。
	<ul> <li>パスワードを使用する場合は、「パスワード」チェック・ボックスをオンにし、「パスワード」ボックスと「パスワードの確認」ボックスにパスワードを入力します。</li> </ul>
	<ul> <li>データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべ てのユーザー' グループで使用できるサイ ンオンを作成」をクリックします。「ユー ザー ID」にユーザー ID を入力し、「パ スワード」ボックスと「パスワードの確</li> </ul>
	認」ボックスにパスワードを入力します。

表 25. Oracle Essbase データ・ソースのパラメーター (続き)

# シナリオ・ディメンションの設定

Oracle Essbase データ・ソースに接続し、そのデータ・ソースにシナリオ・ディメ ンションが含まれている場合は、IBM Cognos Analytics で認識できるように手作 業でシナリオ・ディメンションを設定する必要があります。設定しない場合、IBM Cognos Analytics ではシナリオ・ディメンションが標準ディメンションとして扱わ れます。

#### 手順

Oracle Essbase で、シナリオ・ディメンションに COGNOS_SCENARIO_DIMENSION という名前のユーザー定義属性 (UDA) を割 り当てます。

#### 均衡階層の指定

Oracle Essbase Provider は、階層が均衡であるか不均衡であるかを判断しません。 デフォルトでは、すべての階層を不均衡とみなします。

均衡階層では各パスは同じ深さになりますが、バランスのとれていない階層では各 分岐の最終レベルが異なるレベルになります。

#### 手順

- Hyperion Solutions Essbase Administration Services ツールで、Essbase デー タベースのアウトラインに COGNOS_HIERARCHY_BALANCED という名前 の特別なユーザー定義属性 (User Defined Attribute:UDA) を作成します。 UDA は、均衡階層を含む対応するディメンションのルート・メンバー用に作成 します。
- 2. この属性を1に設定します。

#### 数値データ形式の指定

レポートされる値を読みやくするために、任意の数値データに対して代替の形式を 指定できます。

次のように、"アカウント"ディメンションの適切なメンバーに対して、UDA を定義 します。

COGNOS_FORMAT=format_string

*format_string* の値には、次の表に示す既定の数値形式のいずれかを使用できます。 事前に設定された数字書式を使用し、100 万 (M) または 1000 (K) 単位で表示でき ます。例えば、1,801,791 は、1.8M や 1,801.8K と表示できます。

既定の形式文字列は次のとおりです。

表 26. Oracle Essbase データ・ソースの事前定義されたストリン	グ
------------------------------------------	---

形式オプション	サンプル値	例
標準	1000000	1000000
0	1000000	1000000
#,##0	1000000	1,000,000
\$0	1000000	\$100000
\$# ##0	1000000	¥1 000 000
00/	1000000	100000000/
0%	1000000	10000000%
%0	1000000	%10000000
0E+000	1000000	1E+006
0K	1000000	1000K

形式オプション	サンプル値	例
#,##0K	1000000	1,000K
K0	1000000	K1000
K#,##0	1000000	K1,000
\$0K	1000000	\$1000K
\$#,##0K	1000000	\$1,000K
0M	100000000	1000M
#,##0M	100000000	1,000M
M0	100000000	M1000
M#.##0	100000000	M1.000
\$0M	10000000	\$1000M
\$#,##0M	100000000	\$1,000M

表 26. Oracle Essbase データ・ソースの事前定義されたストリング (続き)

"General"以外の形式文字列では、<形式文字列>~n という形で表示する小数点以下の桁数を設定できます (n は小数点以下の桁数)。例えば、1,801,791 は形式文字列 \$#,##0~2 を使用することにより \$1,801,791.00 と表示することが可能です。小数点 以下が不要な場合は、形式文字列の終わりに ~0 を付けます。

クライアント・アプリケーションで異なるロケールを使用する場合、 COGNOS_FORMAT UDA に対する<形式文字列>の値の通貨(\$)、桁区切り(,)、 および小数点(.)の記号は、クライアント・アプリケーションで使用されているロ ケール記号に置き換える必要があります。

表示する小数点以下の桁数を指定しない場合、または形式文字列が既定の値のいず れにも一致しない場合 (ロケール記号を含む)、デフォルトで全般の形式文字列が使 用されます。

各数値データに異なる形式を適用できます。次に、異なる数値データに異なる形式 を適用する例を示します。

Measure	適用する形式
数値データ (アカウント・ディメンション)	COGNOS_FORMAT=#,##0
単位	COGNOS_FORMAT=#,##K
コスト	COGNOS_FORMAT=\$#,###

表 27. 数値データ用の Oracle Essbase データ・ソースの形式

表 27. 数値データ用の Oracle Essbase データ・ソースの形式 (続き)

Measure	適用する形式
利益	COGNOS_FORMAT=0%

## **IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services**

IBM Cognos ソフトウェアでは、バージョン 9.5.2 以降の IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services テクノロジーへのアクセスがサポートされています。 IBM Cognos コンポーネントを Cubing Services サーバーにインストールする必要 はありません。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表 28. InfoSphere Warehouse Cubing Services データ・ソースの接続パラメーター

パラメーター	説明
サーバー URL	http:// <hostname>:<cube server="" xmla<br="">port&gt;/IBMXmlAnalysis/ または https://<hostname>:<cube server="" xmla<br="">port&gt;/IBMXmlAnalysis/ の形式で、サーバ ーの URL を入力します。 例えば、<hostname>:<cube server="" xmla<br="">port&gt;は wottcub1:80 のようになります。</cube></hostname></cube></hostname></cube></hostname>
SSL 接続を開く	保護されているソケットを使用するには、こ のチェック・ボックスをオンにします。保護 されていないソケットを使用するには、この チェック・ボックスをオフにします。 設定内容は、サーバーの設定と同じにする必 要があります。
サインオン	接続文字列でユーザー ID とパスワードを使 用する場合は、「ユーザー ID」チェック・ ボックスをオンにします。パスワードを使用 する場合は、「パスワード」チェック・ボッ クスをオンにし、「パスワード」ボックスと 「パスワードの確認」ボックスにパスワード を入力します。

# Informix データ・ソース
データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表 29. Informix データ・ソースの接続パラメーター

パラメーター	説明
Informix データベース名	データベース名を入力します。
ホスト名	ホスト名を入力します。
サーバー名	サーバー名を入力します。
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を 入力します。
	照合順序が必要になるのは、IBM Cognos ソフトウェアとデータベースの間でソートの不一致が発生する可能性がある、特定の場合のみです。
サービス	リモート・データベース・サーバーで受信要 求に使用されるサービス名を選択または入力 します。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	接続文字列でユーザー ID またはパスワード を使用する場合は、「ユーザー ID」チェッ ク・ボックスをオンにします。
	パスワードを使用する場合は、「パスワー ド」チェック・ボックスをオンにし、「パス ワード」ボックスと「パスワードの確認」ボ ックスにパスワードを入力します。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを 作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ ードを入力します。

# Microsoft Analysis Services データ・ソース

IBM Cognos ソフトウェアでは、Microsoft Windows オペレーティング・システム・プラットフォームからの Microsoft Analysis Services への接続がサポートされています。

Analysis Services は、Microsoft SQL Server をインストールするときに追加でき ます。接続には Microsoft Pivot Table クライアント・ライブラリーが必要です。 このライブラリーは Microsoft SQL Server クライアント・コンポーネントととも にインストールされます。

IBM Cognos Analytics Server または IBM Cognos Framework Manager 用のア プリケーション層コンポーネントが実行されるコンピューターごとに、対応するバ ージョンの SQL Server クライアント・ソフトウェアをインストールする必要があ ります。

Microsoft SQL Server および Microsoft SQL Server クライアント・コンポーネン トに対して TCP プロトコルを有効にします。

IBM Cognos Analytics Server では、Analysis Services データ・ソースに対する 3 種類の認証がサポートされています。

- 134 ページの『サインオンを使用した認証』
- 134 ページの『サービスの資格情報を使用した認証』
- 135 ページの『外部ネームスペースを使用した認証』

Framework Manager を使用する場合、特別な考慮事項があります。 136 ページの 『Framework Manager の考慮事項』を参照してください。多次元式 (MDX) クエ リーについては、 136 ページの『多次元式 (MDX) クエリー』を参照してくださ い。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。次のデータ・ソース・タイプから選択できます。

- Microsoft Analysis Services 2012 (ODBO)
- Microsoft Analysis Services 2014 (ODBO)
- Microsoft Analysis Services 2016 (ODBO)
- Microsoft Analysis Services (HTTP XMLA)

詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

表	30.	Microsoft	Analysis	Services	データ	・ン	/ースの接続パ	ラメ	ーター

パラメーター	説明
サーバー名	注: データベースが配置されているサーバー 名を入力します。
既定のインスタンス	インストール中に指定した場合は、既定のイ ンスタンスを入力します。 注: このパラメーターは Microsoft Analysis Services 2005 および 2008 のみに適用され ます。

パラメーター	説明
言語	言語を選択します。
	Microsoft Analysis Services 2005 および 2008 では、設計ロケールとしてレポート作 成者によって使用され、レポートに表示する メタデータをキューブから取得する目的に使 用されます。作成されたレポートは、いずれ のロケールでも実行できます。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	IBM Cognos サービスが実行される Windows ドメイン・アカウントの資格情報 を使用して認証を行う場合は、「IBM Cognos Software サービスの資格情報」を 選択します。詳細については、 134 ページ の『サービスの資格情報を使用した認証』を 参照してください。
	外部ネームスペースを使用するには、「外部 ネームスペース」を選択して、ネームスペー スを選択します。詳細については、 135 ペ ージの『外部ネームスペースを使用した認 証』を参照してください。
	以前にサインオンを使用していた既存のデー タ・ソースを変更するときは、外部ネームス ペースに切り替えてから、サインオンを削除 します。この手順を踏まないと、サインオン が優先されてしまいます。
	すべてのユーザーが使用できる静的なサイン オンを作成するには、「サインオン」と「'す べてのユーザー' グループで使用できるサイ ンオンを作成」を選択します。「パスワー ド」チェック・ボックスをオンにして、有効 な Windows ドメインの「ユーザー ID」を 入力してから、「パスワード」ボックスと 「パスワードの確認」ボックスにパスワード を入力します。
	詳細については、 134 ページの『サインオ ンを使用した認証』を参照してください。

表 30. Microsoft Analysis Services データ・ソースの接続パラメーター (続き)

## サインオンを使用した認証

IBM Cognos ソフトウェアで Microsoft Analysis Services データ・ソースへの認 証を行うための資格情報を保存および維持する場合は、データ・ソースを作成する ときにサインオンを使用します。すべてのユーザーが使用するサインオン (デフォ ルト)を定義するか、特定のユーザーにアクセス権を付与することができます。ま た、複数のサインオンを作成し、権限を使用して特定のユーザー、グループ、また は役割にアクセス権を付与することもできます。

サインオンには有効な Windows ドメインの資格情報が保存されます。この情報は Analysis Services への認証に使用されます。認証情報は次の構文で指定します。

#### <DOMAIN>¥<USERNAME>

Microsoft Analysis Services 2005 と 2008 では、資格情報を持つユーザーは、 Analysis Services が実行されるコンピューターに存在するローカル OLAP ユーザ ー・グループに属している必要があります。このグループは Analysis Services の インストール時に作成されるもので、SQLServerMSASUser\$<サーバー名 >\$MSSQLSERVER と呼ばれます。

IBM Cognos アプリケーション層コンポーネントの各インストールで、IBM Cognos ソフトウェアが LocalSystem 組み込みアカウントとして実行されているこ と、または IBM Cognos ソフトウェアがローカル・セキュリティー・ポリシーの 「オペレーティング・システムの一部として機能」権限を付与されている有効なド メイン・アカウントとして実行されていることを確認します。

IBM Cognos ユーザーには、そのサインオンに対する読み取り権限と実行権限が付 与されている必要があります。

#### サービスの資格情報を使用した認証

Microsoft Analysis Services への認証を行うために、IBM Cognos サービスが実行 されるアカウントの資格情報を使用する場合は、サービスの資格情報を使用しま す。どのユーザーが要求を実行するかにかかわらず、Microsoft Analysis Services データ・ソースへのすべての接続でサービスの資格情報が使用されます。

サービスの資格情報を使用するには、IBM Cognos ソフトウェアが Windows サー ビスとして起動され、有効な Windows ドメイン・ユーザーとして実行されている 必要があります。LocalSystem または NetworkService の組み込みアカウントは使 用できません。1 つのアカウントで IBM Cognos サービスを開始する方法について は、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」のユーザー・アカウ ントまたはネットワーク・サービス・アカウントの設定に関する情報を参照してく ださい。

IBM Cognos サービスが実行されるアカウントは、次の要件を満たす必要があります。

Analysis Services と同じ Active Directory フォレストのメンバーであるか、またはフォレストの信頼がクロスフォレスト設定に対して確立されているアカウントであること。

- IBM Cognos アプリケーション層コンポーネントが実行されるすべての Windows コンピューターのローカル・セキュリティー・ポリシーで、「サービ スとしてログオン」権限が付与されているアカウントであること。
- マルチノード設定では、IBM Cognos アプリケーション層コンポーネントが実行 されるすべてのコンピューターで同じアカウントが使用されていること。
- Microsoft Analysis Services 2005 と 2008 では、必要なキューブに接続してデ ータを取得できる権限を SSAS セキュリティーで付与されているサービス・アカ ウントであること。
- Microsoft Analysis Services 2005 と 2008 では、Analysis Services が実行されるコンピューターに存在するローカル OLAP ユーザー・グループに属しているアカウントであること。このグループは Analysis Services のインストール時に作成されるもので、SQLServerMSASUser\$<サーバー名>\$MSSQLSERVER と呼ばれます。

#### 外部ネームスペースを使用した認証

IBM Cognos のユーザーに自の資格情報 (ユーザー通過権限、サインオン) による Microsoft Analysis Services データ・ソースへのアクセスを許可する場合は、外部 ネームスペースを使用します。Analysis Services への認証に使用する資格情報は、 そのユーザーが以前に認証された特定のネームスペースから取得されます。

そのネームスペースにログオンしているユーザーによって提供された資格情報が、 Analysis Services に渡されます。Analysis Services でサポートされている認証方 法では、ネームスペースのタイプとして Microsoft Active Directory のみ選択でき ます。

外部ネームスペース認証に指定された Active Directory ネームスペースにユーザー がどのように認証されているかに応じて、次のようなサインオン設定により、ユー ザーにとってシームレスな使用感を実現できます。

- ドメイン・ユーザー名とパスワードを明示的に提供して認証されたユーザーの場合は、通過認証が可能です。提供されたドメイン資格情報が Analysis Services に渡されます。
- Kerberos に基づかないサインオンによって Active Directory ネームスペースに 認証されたユーザーの場合は、ユーザー通過認証はできません。これは、Active Directory ネームスペースが ID マッピング・モード用に設定されている場合に あてはまります。

Analysis Services へのユーザー通過認証を設定するには、次の条件が満たされていることを確認してください。

- IBM Cognos アプリケーション層コンポーネントが実行されるすべてのコンピュ ーターで、IBM Cognos Analytics が、有効なドメイン・アカウントまたは LocalSystem の下で Windows サービスとして実行されていること。
- IBM Cognos ソフトウェアが実行されるすべてのコンピューターに、Microsoft Windows サーバー・オペレーティング・システムが搭載されていること。 (Windows XP では通過認証はサポートされていません。)
- Analysis Services と IBM Cognos ソフトウェアが実行されるコンピューター が、同じ Active Directory フォレストに属していること。

- ドメイン・アカウント (ユーザー・アカウント) またはコンピューター・アカウント (LocalSystem) が委任に対して信頼されていること。
- IBM Cognos ソフトウェアを通じて Analysis Services にアクセスする必要があ るすべてのユーザー Windows アカウントで、「アカウントは重要なので委任で きない」プロパティー・セットを選択していないこと。

Analysis Services は Kerberos 認証用に設定されています。詳細については、 Analysis Services 管理者にお問い合わせください。

SSAS 2005 と SSAS 2008 では、すべてのユーザーの Windows アカウントが、 Analysis Services が実行されるコンピューターのローカル OLAP ユーザー・グル ープに属している必要があります。このグループは Analysis Services のインスト ール時に作成されるもので、SQLServerMSASUser\$<サーバー名>\$MSSQLSERVER と呼ばれます。

Analysis Services と Analysis Services にアクセスするクライアントの両方が AES を意識したオペレーティング・システム (Windows 2008、Microsoft Vista、Windows 7) で実行されている場合、ユーザー通過認証が妨げられるという Microsoft の問題があります。詳細については、Microsoft のドキュメントを参照し てください。

また、外部ネームスペース認証用に設定されたデータ・ソースはテストできない点 にも注意してください。このデータ・ソースが機能していることを検証するには、 クエリーでデータ・ソースにアクセスします。

#### Framework Manager の考慮事項

IBM Cognos Framework Manager は、Report サービスや Metadata サービスを 使わずに直接 Analysis Services データ・ソースにアクセスします。このことは、 特に Analysis Services に対するユーザー通過認証を伴う設定の場合に重要な意味 を持ちます。

Kerberos ベースのサインオンが Active Directory ネームスペースに対して有効に なっている場合で、このネームスペースが Analysis Services データ・ソースに対 する外部ネームスペース認証ソースとして設定されている場合は、Framework Manager を実行するユーザーが次の基準を満たすことを確認してください。

- Framework Manager が実行されるコンピューターのローカル・セキュリティ ー・ポリシーで「オペレーティング・システムの一部として機能」権限を付与さ れているか、または Framework Manager コンピューターで「ローカル・ログ オン」権限を付与されたローカル管理者グループのメンバーであること
- 委任に対して信頼されていること

## 多次元式 (MDX) クエリー

MDX クエリーを行うには、ROUNDDOWN などの Microsoft Excel Visual Basic for Applications (VBA) 関数の Microsoft Office コンポーネントをインストールす る必要があります。次のものをインストールします。

- Office Excel
- Microsoft Visual Basic for Applications (Office の共有機能)

これらのコンポーネントを、MSAS では IBM Cognos サーバー、および SSAS 2005 または SSAS 2008 では Analysis Services サーバー・コンピューターにイン ストールしてから、サーバー・コンピューターを再起動します。

## Microsoft SQL Server データ・ソース

IBM Cognos ソフトウェアでは、Microsoft SQL Server データ・ソースのタイプと して、ODBC、SQL 2012 Native Client、および SQL 2014 Native Client がサポ ートされています。

使用している Microsoft SQL Server データ・ソースのタイプによっては、一部の タイプの認証を定義する際に考慮すべき事項があります。

#### **IBM Cognos** サービスの資格情報を使用した認証

Microsoft SQL Server OLE DB データ・ソースを使用する IBM Cognos サーバー へのログオンには、Microsoft Windows ローカル・システムのアカウントは使用し ないでください。

#### 外部ネームスペースを使用した認証

IBM Cognos ソフトウェアでは Microsoft Active Directory ネームスペースを使用 するように設定することができます。この場合、IBM Cognos のログオン・プロセ スの一部として、ユーザーに資格情報の入力が求められます。IBM Cognos ソフト ウェアでは、Microsoft SQL Server データ・ソースにアクセスする際に、この資格 情報を自動的に使用するように設定できます。Microsoft SQL Server のデータ・ソ ース接続が「外部ネームスペース」に設定され、このネームスペースが Active Directory ネームスペースであることが必要です。

IBM Cognos ソフトウェアでは、Microsoft Active Directory ネームスペースを使 用し、Kerberos の認証と委任を使用して IBM Cognos ソフトウェアのユーザーを 認証するように設定できます。IBM Cognos ソフトウェアでは、Microsoft SQL Server データ・ソースにアクセスする際に自動的にユーザーを認証するように設定 できます。次の構成が必要です。

- IBM Cognos ゲートウェイが、Windows 統合認証用に設定された IIS Web サ ーバーにインストールされている必要があります。
- Content Manager、レポート・サーバー (アプリケーション層コンポーネント)、 IIS Web サーバー、およびデータ・ソース・サーバー (Microsoft SQL Server) が同じ Active Directory ドメインに属している必要があります。
- Microsoft SQL Server のデータ・ソース接続が「外部ネームスペース」に設定 され、このネームスペースが Active Directory ネームスペースであることが必 要です。
- レポート・サーバーは委任において信用されます。

制約事項: シングル・サインオンで Kerberos 認証を使用する場合、それぞれのデー タ・ソースで持つことができる接続の数は 1 つだけです。シングル・サインオンを 有効にした SQL Server に複数の接続がある場合、データ・ソースを複数作成する か、各データ・ソースに対して接続を 1 つ作成する必要があります。 ゲートウェイおよび Content Manager のインストール・オプションの詳細、およ びネームスペースと信用の委任の設定については、「インストールおよび設定ガイ ド」を参照してください。

## Microsoft SQL Server の接続パラメーター

Microsoft SQL Server データ・ソースによって次のパラメーターが使用されます。

パラメーター	説明
サーバー名	サーバー名を入力します。
	Microsoft SQL Server のインスタンスが複数ある場合 は、サーバー名¥インスタンス名 を指定します。
データベース名	データベース名を入力します。
アプリケーション名	アプリケーション名を入力します。
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を入力しま す。
	照合順序が必要になるのは、IBM Cognos ソフトウェ アとデータベースの間でソートの不一致が発生する可能 性がある、特定の場合のみです。
MARS 接続	MARS (Multiple Active Results Set) 接続を選択しま す。このパラメーターは、Microsoft SQL Server (SQL 2005 Native Client 以上) によってのみ使用されます。
	「はい」をクリックすると、アプリケーションによっ て、接続ごとに複数の保留中の要求と、接続ごとに複数 のアクティブなデフォルト結果セットを保持できるよう になります。
オプションの接続パラメーター	次の構文を使用して、キーと値の形式のオプションのパ ラメーターを入力します。param1=value1 複数のパラメ ーターは、以下の例に示すように、セミコロンで区切る 必要があります。param1=value1;param2=value2
	このパラメーターに入力したすべての値は、接続文字列 のデータベース部分に追加されます。 ヒント:最初に出現する @ 記号は、その @ 記号がユ ーザー ID またはパスワードの一部である場合を除い て、接続文字列のデータベース部分と接続文字列の IBM Cognos 部分とを分離します。これは動的クエリ ー・モードには適用されません。

表 31. Microsoft SQL Server の接続パラメーター

表 31. Microsoft SQL Server の接続パラメーター (続き)

パラメーター	説明
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページの『デー タ・ソースの保護』を参照してください。
	認証が不要な場合は、「認証不要」を選択します。
	<b>IBM Cognos Analytics</b> の詳細については、 137 ペー ジの『IBM Cognos サービスの資格情報を使用した認 証』を参照してください。
	Microsoft Active Directory のネームスペースを使用し ており、シングル・サインオンをサポートする場合は、 「外部ネームスペース」を選択し、Active Directory の ネームスペースを選択します。詳細については、 137 ページの『外部ネームスペースを使用した認証』を参照 してください。
	認証が必要な場合は、「サインオン」を選択します。
	接続文字列でユーザー ID とパスワードを使用する場合 は、「ユーザー ID」チェック・ボックスをオンにしま す。
	パスワードを使用する場合は、「パスワード」チェッ ク・ボックスをオンにし、「パスワード」ボックスと 「パスワードの確認」ボックスにパスワードを入力しま す。

このタイプのデータ・ソースでは、接続情報にデータベース・コマンドを含めることができます。詳細については、 168 ページの『IBM Cognos コンテキストをデー タベースに渡す方法』を参照してください。

Microsoft SQL Server (ODBC) の接続パラメーターについては、『ODBC デー タ・ソース接続』を参照してください。

## **ODBC** データ・ソース接続

IBM Cognos ソフトウェアでは、ODBC 接続を 2 つのカテゴリーに分けます。1 つは、クエリーの作成にドライバー固有の機能を使用するベンダー固有の ODBC データ・ソース接続、もう 1 つは一般的な機能を使用する汎用の ODBC データ・ ソース接続です。

IBM Cognos ソフトウェアでは、次の表に示す ODBC データ・ソースがサポート されています。データベース・コードは接続文字列に表示されますが、編集できま せん。

表 32. ODBC データ・ソースおよびデータベース・コード

ODBC データ・ソース	データベース・コード
ODBC	OD
Microsoft SQL Server (ODBC)	SS
Netezza [®] (ODBC)	NZ
Sybase IQ (ODBC)	IQ
Teradata (ODBC)	の初日から今日まで

記載されていない ODBC データ・ソース接続は、一般的な ODBC データ・ソース (データベース・コード OD) を使用して作成する必要があります。

#### **ODBC**の接続パラメーター

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。

詳細については、153ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

表 33. ODBC の接続パラメーター

パラメーター	説明
ODBC データ・ソース	"ODBC.ini"ファイルに定義されているデー タ・ソース名 (Data Source Name:DSN) を 入力します。
	ODBC.ini ファイルの詳細については、IBM Cognos Analytics「インストールおよび設定 ガイド」を参照してください。
ODBC 接続文字列	接続文字列に追加する必要があるテキストを 入力します。
	通常、このパラメーターは空白にしておきま す。
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を 入力します。
	照合順序が必要になるのは、IBM Cognos ソ フトウェアとデータベースの間でソートの不 一致が発生する可能性がある、特定の場合の みです。
非同期で開く	相互に独立している複数の要求を処理するか どうかを選択します。現在の要求を完了して から別の要求を開始する場合は、選択しませ ん。

表 33. ODBC の接続パラメーター (続き)

パラメーター	説明
Unicode ODBC	<ul> <li>IBM Cognos ソフトウェアで Unicode デー タ標準を使用してデータを解釈する場合は選 択します。IBM Cognos ソフトウェアで ANSI を使用してデータを解釈する場合は未 選択の状態にします。</li> <li>この選択は Teradata および一般的な ODBC データ・ソース接続にのみ当てはまります。</li> </ul>
タイムアウト	データベースへの接続や応答待機に対するタ イムアウト時間を、秒単位で指定します。 有効なエントリーは 0~32,767 です。データ ベースがタイムアウトしないようにするに は、「0」を入力します。これがデフォルト です。
サインオン	<ul> <li>サインオンの詳細については、181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。</li> <li>Teradata、Microsoft SQL、および一般的な ODBC の場合: <ul> <li>認証が不要な場合は、「認証不要」を選択 します。</li> <li>データベースへの資格情報が、シングル・ サインオンで IBM Cognos 環境へのログ オンに使用される資格情報と一致する場合 は、「外部ネームスペース」を選択し、適 切なネームスペースを選択します。</li> </ul> </li> <li>認証が必要な場合は、「サインオン」を選 択します。パスワードを使用する場合は、 「パスワード」チェック・ボックスをオン にし、「パスワード」ボックスと「パスワ ードの確認」ボックスにパスワードを入力 します。データ・ソースに自動接続するユ ーザー ID とパスワードを作成するに は、「・すべてのユーザー・グループで使用 できるサインオンを作成」を選択します。 「ユーザー ID」にユーザー ID を入力 し、「パスワード」ボックスと「パスワー ドの確認」ボックスにパスワードを入力し ます。</li> </ul>

# Oracle データ・ソース

IBM Cognos ソフトウェアでは、Oracle データ・ソースがサポートされています。

#### **Oracle** の接続パラメーター

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。

詳細については、153ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

表 34. Oracle の接続パラメーター

パラメーター	説明
SQL*Net の接続文字列	tnsnames.ora ファイルに入力されていると おりに Oracle データベースのインスタンス 名を入力します。
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を 入力します。
	照合順序が必要になるのは、IBM Cognos ソ フトウェアとデータベースの間でソートの不 一致が発生する可能性がある、特定の場合の みです。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	接続文字列でユーザー ID が必須の場合は、 「ユーザー ID」ボックスにユーザー ID を 入力します。
	パスワードが必須の場合は、「パスワード」 チェック・ボックスをオンにし、「パスワー ド」ボックスと「パスワードの確認」ボック スにパスワードを入力します。
	<ul> <li>データ・ソースに自動接続するユーザー ID</li> <li>とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを</li> <li>作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック</li> <li>スと「パスワードの確認」ボックスにパスワードを入力します</li> </ul>

# 外部リポジトリー・データ・ソース接続

IBM Cognos ソフトウェアは、外部レポート・リポジトリーへのデータ・ソース接 続をサポートします。レポート・リポジトリー接続を使用して、ファイル・システ ムまたは IBM FileNet[®] Content Manager リポジトリーに接続します。

外部リポジトリー・データ・ソース接続を作成する前に、IBM FileNet Content Manager リポジトリーのインストール、構成、および設定が必要です。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

## IBM FileNet Content Manager 接続

次の表の情報を使用して、IBM FileNet Content Manager リポジトリーへの接続を 作成するために必要なパラメーターを指定します、

データ・ソースの作成の詳細については、 154 ページの『データ・ソース接続の作 成』を参照してください。

パラメーター	説明
リポジトリー・タイプ	外部 FileNet リポジトリーに接続するには、「IBM FileNet Content Manager」を選択してください。
リポジトリー CMIS URL	Filenet のロケーションを示す URL を、http://<サーバ ー名>:ポート番号/ <filenet cmis="" 名<br="">&gt;/resources/<filenet オブジェクト・ストア名="">/ とい う形式を使用して入力してください。 次に例を示します。</filenet></filenet>
	http://server1:9080/fncmis/resources/archive/
ルート・パス	アーカイブ・コンテンツを保管するための、FileNet 内 のフォルダーの場所を入力してください。この場所は既 に FileNet に存在していなければなりません。例えば、 report_repository というフォルダーを Filenet に作成し ておきます。
リポジトリー接続パラメーター	オプションで、ドライバー・クラス名の URL に追加す るパラメーターを入力してください。
サインオン	「ユーザー ID」チェック・ボックスをオンにします。 「パスワード」チェック・ボックスをオンにします。 データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワー ドを作成するには、「'すべてのユーザー' グループで使 用できるサインオンを作成」をクリックします。「ユー ザー ID」にユーザー ID を入力し、「パスワード」ボ ックスと「パスワードの確認」ボックスにパスワードを 入力します。

表 35. FileNet リポジトリーへの接続に使用される接続パラメーター

#### ファイル・システム接続

IBM Cognos Configuration で別名ルートを構成した後に、ファイル・システムへのデータ・ソース接続を作成できます。別名ルートは、ローカル・ドライブ上またはネットワーク共有上のファイルの場所を示します。

次の表の情報を使用して、ファイル・システム・リポジトリーへのデータ・ソース 接続を作成する際に必要とされるパラメーターを入力します。

パラメーター	説明
リポジトリー・ファイル・システム・ルート	別名ルートを選択します。
ルート・パス	これは、オプション・パラメーターで、別名 ルートのサブフォルダーです。ルート・パス を指定するには、アーカイブ・コンテンツを 保管するための、ファイル・システム・ロケ ーション内のサブフォルダーの場所を入力し ます。この場所は既に存在していなければな りません。例えば、「/sales」と入力しま
	す。
リポジトリー接続パラメーター	オプションで、ドライバー・クラス名の URL に追加するパラメーターを入力してく ださい。

表 36. ファイル・システム・リポジトリーへの接続に使用される接続パラメーター

# SAP Business Information Warehouse (SAP BW) データ・ソース

IBM Cognos ソフトウェアでは、SAP BW データ・ソースへのアクセスがサポート されています。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。指定するパラメーター・タイプは、選択した SAP BW ログオ ン・タイプによって異なります。

- アプリケーション・サーバー・ログオン・タイプ
- ターゲット・ログオン・タイプ
- メッセージ・サーバー・ログオン・タイプ

**アプリケーション・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター** 「**SAP** ログオン・タイプ」として「アプリケーション・サーバー」を選択した場合 は、次の表にあるパラメーターを指定します。

表 37. アプリケーション・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター

パラメーター	説明
アプリケーション・サーバー	SAP アプリケーション・サーバー名を入力 します。
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。
システム番号	システム番号を入力します。
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。

パラメーター	説明
クライアント番号	クライアント番号を入力します。
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。
SAP のサーバー コード・ページ	SAP のサーバー コード・ページを選択します。
	IBM Cognos ソフトウェアは SAP 国際化規 則に従い、IBM Cognos ソフトウェアで SAP BW を変更することなく複数のスクリ プトや言語をサポートする互換性のあるアプ リケーションを提供します。詳細について は、SAP システム管理者に問い合わせてく ださい。
SAP ルーター文字列	SAP ルーター文字列を入力します。
	ルーター文字列には、2 台のホスト間に必要 な接続のステーションが記述されています。 詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	IBM Cognos Configuration を使用して、信 頼されているサインオン・ネームスペースが 設定されている場合は、「外部ネームスペー ス」を選択して、使用するネームスペースを 選択できます。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを 作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ ードを入力します。

表 37. アプリケーション・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター (続き)

ターゲット・ログオン・タイプの接続パラメーター

「SAP ログオン・タイプ」として「ターゲット」を選択した場合は、次の表にある パラメーターを指定します。 表 38. ターゲット・ログオン・タイプの接続パラメーター

パラメーター	説明
クライアント番号	クライアント番号を入力します。
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。
SAP のサーバー コード・ページ	SAP のサーバー コード・ページを選択します。
	IBM Cognos ソフトウェアは SAP 国際化規 則に従い、IBM Cognos ソフトウェアで SAP BW を変更することなく複数のスクリ プトや言語をサポートする互換性のあるアプ リケーションを提供します。詳細について は、SAP システム管理者に問い合わせてく ださい。
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	IBM Cognos Configuration を使用して、信 頼されているサインオン・ネームスペースが 設定されている場合は、「外部ネームスペー ス」を選択して、使用するネームスペースを 選択できます。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを 作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ ードを入力します。

## メッセージ・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター

「SAP ログオン・タイプ」として「メッセージ・サーバー」を選択した場合は、次の表にあるパラメーターを指定します。

表 39. メッセージ・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター

パラメーター	説明
システム ID	接続先 SAP システムのシステム ID を入力 します。
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。

パラメーター	説明		
ログオン・グループ	SAP グループを入力します。		
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。		
クライアント番号	クライアント番号を入力します。		
	詳細については、SAP システム管理者に問 い合わせてください。		
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。		
	IBM Cognos Configuration を使用して、信 頼されているサインオン・ネームスペースが 設定されている場合は、「外部ネームスペー ス」を選択して、使用するネームスペースを 選択できます。		
	<ul> <li>データ・ソースに自動接続するユーザー ID</li> <li>とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを</li> <li>作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック</li> <li>スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ</li> <li>ードを入力します。</li> </ul>		

表 39. メッセージ・サーバー・ログオン・タイプの接続パラメーター (続き)

# Sybase Adaptive Server Enterprise $\vec{r} - \rho \cdot \nabla - \lambda$

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。

表	40.	Sybase	Adaptive	Server	Enterprise	データ	•	ソースのパ	ペラメ	ーター
---	-----	--------	----------	--------	------------	-----	---	-------	-----	-----

パラメーター	説明
サーバー名	サーバーの名前を入力します。
データベース名	データベース名を入力します。
	Sybase サーバーによってデフォルトのデー タベースを決定する場合は、「マスター」を 選択します。デフォルトを上書きするには、 有効なデータベース名を入力します。

パラメーター	説明
アプリケーション名	アプリケーション名を入力します。ここを空 欄にすると、デフォルトは Cognos 実行ファ イルの名前 (BiBustkservermain、DataBuild など) になります。
照合順序	データベース接続文字列に含める照合順序を 入力します。照合順序が必要になるのは、 IBM Cognos ソフトウェアとデータベースの 間でソートの不一致が発生する可能性があ る、特定の場合のみです。
パケット・サイズ	パケット・サイズを入力します。デフォルト は 2048 です。送信するパケット数を減らす には、パケット・サイズを大きくします。大 きなパケット・サイズが問題になる場合は、 パケット・サイズを小さくします。Sybase サーバーで許可されるサイズよりも大きなサ イズを要求することはできません。詳細につ いては、データベースの管理者に問い合わせ てください。
非同期レベル	非同期レベルを選択します。
ポーリングの間隔	ポーリングの間隔を入力します。デフォルト は 100 です。
タイムアウト	データベースへの接続や応答待機に対するタ イムアウト時間を、秒単位で指定します。有 効なエントリーは 0~32,767 です。データベ ースがタイムアウトしないようにするには、 「0」を入力します。これがデフォルトで す。

表 40. Sybase Adaptive Server Enterprise データ・ソースのパラメーター (続き)

パラメーター	説明
サインオン	サインオンの詳細については、 163 ページ の『データ・ソース・サインオン』を参照し てください。
	接続文字列でユーザー ID またはパスワード を使用する場合は、「ユーザー ID」チェッ ク・ボックスをオンにします。
	パスワードを使用する場合は、「パスワー ド」チェック・ボックスをオンにし、「パス ワード」ボックスと「パスワードの確認」ボ ックスにパスワードを入力します。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー' グループで使用できるサインオンを 作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ ードを入力します。

表 40. Sybase Adaptive Server Enterprise データ・ソースのパラメーター (続き)

## TM1 データ・ソース

ただし、TM1 クライアントのインストール先が IBM Cognos Analytics のインス トール先のコンピューターと同じであることが前提です。TM1 データ・ソース接続 を作成するにあたって、どのように認証を行うか決めておく必要があります。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表 41. TM1 データ・ソースのパラメーター

パラメーター	説明
管理ホスト	ネットワークで識別できるコンピューターの 名前を入力します。
サーバー名	"TM1S.cfg"ファイルに設定されているサーバ ー名を入力します。詳細については、TM1 のドキュメントを参照してください。

表 41. TM1 データ・ソースのパラメーター (続き)

パラメーター	説明
サインオン	サインオンの詳細については、 181 ページ の『データ・ソースの保護』を参照してくだ さい。
	認証が不要な場合は、「認証不要」を選択し ます。外部ネームスペースを使用する場合 は、「外部ネームスペース」を選択し、ネー ムスペースを選択します。
	認証が必要な場合は、「サインオン」を選択 します。
	接続文字列でユーザー ID を使用する場合 は、「ユーザー ID」チェック・ボックスを オンにします。
	パスワードを使用する場合は、「パスワー ド」チェック・ボックスをオンにし、「パス ワード」ボックスと「パスワードの確認」ボ ックスにパスワードを入力します。
	データ・ソースに自動接続するユーザー ID とパスワードを作成するには、「'すべてのユ ーザー'グループで使用できるサインオンを 作成」を選択します。「ユーザー ID」にユ ーザー ID を入力し、「パスワード」ボック スと「パスワードの確認」ボックスにパスワ ードを入力します

#### 認証

選択する内容では、TM1 サーバーの認証要件を満たす必要があります。例えば、 TM1 サーバーの処理でログオンが必要であれば、ユーザー ID とパスワードを作成 しているかどうかに関係なく、ユーザーはログオンするように要求されます。

認証方法の 1 つとして、外部ネームスペース (サード・パーティーのディレクトリ ー・サービス・プロバイダー) を使用できます。TM1 サーバーは、IBM Cognos Analytics で認証されるように設定する必要があります。Cognos の Access Manager 認証の詳細については、TM1 のドキュメントを参照してください。

注: セキュリティー・モード 5 (CAM) では、TM1 は認証済みユーザーからの cam_passport を必要とします。 TM1 は認証のためにこの cam_passport を必要 とします。TM1 サーバーの背後の TM1 キューブを表示する権限がユーザーの cam_passport にない場合、認証エラーが発生します。

# TM1 データ・ソースで集計を使用した場合に予期しない結果が返される

TM1 データ・ソースには、規則算出セルが含まれる場合があります。IBM Cognos Analytics では規則算出セルを事前に認識できないため、規則算出セルで集計を実行 すると、予期しない結果が生じる可能性があります。例えば、Reporting や Analysis Studio で規則算出値を含むセットを集計すると、予期しない結果が発生す る場合があります。

注: 合計、平均、カウント、最小値、最大値などの明示的な集計処理への影響はあり ません。

規則算出セルを含む TM1 データ・キューブを IBM Cognos Analytics で使用する 場合は、TM1 ビルド番号 9.4.00001.576 をインストールすることを推奨します。最 新バージョンでは、エラーが発生したセルがダッシュ (--) でマーキングされるた め、集計エラーを確認できます。

## 管理ホストが TM1 データ・ソースをサポートするためには完全修飾 されなければならない

インストール環境には、IBM Cognos Analytics および TM1 データ・ソースが含 まれています。TM1 データ・ソース接続のアップグレードの後か、それを作成また は変更する際に、次のエラー・メッセージを受け取る可能性があります。

COGCQ00223094 - TM1-ERR-0060 TM1 サーバーには、サポートされていないセ キュリティー・モードが設定されています。

この問題を解決するには、「データ・ソース接続」ウィザードで管理ホスト名を完 全修飾ドメイン・ネームに変更します。

## XML データ・ソース

XML データ・ソースを作成する場合、接続タイプに XML を使用し、接続文字列 に XML ドキュメントの場所を指定します。

XML データ・ソースの接続文字列は次のように指定できます。

• XML ドキュメントとの接続に必要な Content Store を識別する HTTP URL。

例: HTTP://xmltestserver.cognos.com/XML/countryregion.xml

XML ファイルがあるディレクトリーの Web 別名を作成し、ディレクトリーを 参照できるようにします。

• ファイル・パス

Microsoft Windows オペレーティング・システムのファイル・パスの例: ¥*¥servername*¥XML¥countryregion.xml

UNIX オペレーティング・システムのファイル・パスの例: /mount name/XML/countryregion.xml

• ローカル・ファイル

例: C:¥XML¥countryregion.xml;VALIDATE=ON

ローカル・ファイルにアクセスするには、プラットフォーム固有の構文に基づいて ファイルのパスを使用します。

XML 接続文字列をテストするには、文字列の最後に次のコードを入力する必要があります。

;VALIDATE=ON

このコードのテキストでは、大文字と小文字は区別されません。

データ・ソースを作成するか、データ・ソース接続を変更するときは、接続パラメ ーターを指定します。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参 照してください。

表 42. XML データ・ソースのパラメーター

パラメーター	説明
接続文字列	接続文字列を入力します。

#### パラメーターを使用した XML 接続文字列

XML データ・ソースの HTTP URL 接続文字列では、パラメーターを使用して追加の情報を送信できます。パラメーター・コンポーネントには、プロンプト定義文字列を組み込めます。

プロンプト定義がレポート内で指定されている場合その値が使用されます。それ以 外の場合は、値の入力を求めるプロンプトが表示されます。他の接続文字列タイプ では、プロンプト表示がサポートされません。

URL コンポーネントの例:<アドレッシング方式>://<ネットワークの場所>/<パス>;<パラメーター>?<クエリー>#<フラグメント識別子>

2 つ 1 組の疑問符のセットの間に定義文字列を挿入してパラメーター・コンポーネ ントをエンコードします。コンポーネント境界をまたぐプロンプト値は設定できま せん。

パラメーターを使用した XML 文字列の例: http://<ネットワークの場所>/<パス >/myxml.asp?countryregionsid=??CanadaPrompt??

パラメーターを使用した XML 接続文字列には、次の制限があります。

- URL コンポーネントがプロンプト表示される場合には、他のデータを含められません。
- XML 接続文字列に組み込まれたプロンプト値は、Framework Manager では機能しません。パラメーターを使用した XML 接続文字列からはデータをインポートできません。
- パラメーターを使用した XML 接続文字列を設定する場合、「テスト」ボタンは 機能しません。
- パラメーターを使用した XML 接続文字列に接続している場合は、Reporting で クエリー仕様の検証を行えません。

## データ・ソース接続

データ・ソース接続では、データベースの場所やタイムアウトまでの時間など、デ ータベースに接続するために必要なパラメーターが指定されます。これらのパラメ ーターによって、データ・ソースの接続文字列が形成されます。

管理者が、Framework Manager でモデルを作成する前に、必要なすべてのデー タ・ソースを設定すれば、Framework Manager メタデータ・ウィザードですべて の接続を利用できます。

データ・ソースは Cognos ネームスペースに保存されます。データ・ソースには、 一意の名前を付ける必要があります。例えば、データ・ソースとグループに同じ名 前は使用できません。

#### データ・ソース用の JDBC 接続の使用

一部のデータ・ソース接続では、追加の Java Database Connectivity (JDBC) デー タ・ソース接続情報を指定できます。 JDBC データ・ソース接続情報はオプション です。JDBC データ・ソース接続が必要となるのは、「動的クエリー・モードの使 用」オプションが有効化された状態でパッケージを Framework Manager から発行 する場合です。

リレーショナル・データ・ソースに対する JDBC 接続文字列の形式は、次のとおり です。

^User ID:^?Password:;LOCAL;JD;URL=<urlspec>; DRIVER_NAME=<driver class name spec>[;CognosProperty=value[;...]]

例えば、Microsoft SQL Server データ・ソースの JDBC 接続文字列は、次のよう になります。

^UserID:^?Password:;LOCAL;JD-SS;URL=jdbc:sqlserver://sotaimpqc05:1433; databaseName=dmsqc1;DRIVER_NAME=com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver; LOCALSORT=us_ASCII;LEVEL=PRIMARY

リレーショナル・データベースの場合、JDBC ドライバーを Cognos Analytics *install_location*¥drivers ディレクトリーにコピーする必要があります。詳細につ いては、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」の中の、レポー ト作成データベース用のデータベース接続の設定に関するトピックを参照してくだ さい。

クエリー・サービスの設定の詳細については、 183 ページの『第 7 章 Query サ ービス管理』を参照してください。

JDBC 接続に対しては分離レベルが実装されないことに注意してください。ネイテ ィブ・クライアント接続に対して選択した分離レベルが、JDBC ドライバーで使用 されているデフォルトの分離レベルと異なる場合は、動作が異なる場合がありま す。ドライバーのデフォルトの詳細については、JDBC ドライバーのドキュメント を参照してください。

分離レベルの詳細については、165ページの『分離レベル』を参照してください。

## ファイル・ベースのデータ・ソース用にネットワーク・パスを使用す る

複数のサーバーがある分散インストールでは、ファイル・ベースのデータ・ソース にはローカル・パスではなくネットワーク・パスを使用することを推奨します。こ れにより、データを必要とするサーバーがどれであるかにかかわらず、サービスは 必要なデータ・ソースにアクセスできるようになります。

PowerCube などのファイル・ベースのデータ・ソースへの接続を作成する場合は、 パスとファイル名を入力します。ファイルを示すには、C:¥cubes¥Great Outdoors Company.mdc のようなローカル・パス、または ¥¥*servername*¥cubes¥Great Outdoors Company.mdc のようなネットワーク・パスを使用します。

複数のレポート・サーバーが異なるコンピューターで実行される分散インストール でローカル・パスを使用する場合は、レポート・サーバーが実行されている各コン ピューターでファイルとパスが有効であることが必要になります。また、ネットワ ーク・パスを使用してファイルを示すと、ファイルをローカルで使用できるように しなくても、各レポート・サーバーはネットワーク上の同じファイルを示します。 また、ファイルを常に使用可能にするには、ネットワーク上でアクセスできる共有 ディレクトリーにファイルを保存してください。

IBM Cognos Analytics のコンポーネントを UNIX オペレーティング・システムの サーバーにインストールした場合は、ファイル・ベースのデータ・ソースも UNIX サーバーに配置してください。その後、UNIX パス (例えば /servername/cubes/ Great Outdoors Company.mdc) を使用してファイルにアクセスします。

すべてのコンポーネントを1台のコンピューターにインストールした場合は、ロー カル・パスを使用できますが、データを要求するサービスにコンピューター上のデ ータ・ファイルへの適切なアクセス権があることを確認する必要があります。

Microsoft Windows オペレーティング・システムの分散インストールでは、 PowerCube や XML ファイルなどのファイル・ベースのデータ・ソースに対し て、共有ディレクトリーへの UNC パスを使用してください。

## データ・ソース接続の作成

データ・ソース接続では、データベースの場所やタイムアウトまでの時間など、デ ータベースに接続するために必要なパラメーターが指定されます。これらのパラメ ーターによって、データ・ソースの接続文字列が形成されます。

データベースの認証情報は、サインオンを作成してデータ・ソース接続に組み込む ことができます。認証情報は暗号化されサーバーに保存されるため、ユーザーは、 接続を使用するたびにデータベース認証情報を入力する必要はありません。デー タ・ソースの作成時に作成されるサインオンは、"すべてのユーザー"グループが利用 できます。このサインオンを利用できるユーザーは後で変更できます。また、新し いサインオンを作成してユーザーを追加することもできます。

#### 始める前に

データ・ソースを保存するフォルダーと Cognos ネームスペースに対する書き込み 権限が必要です。保護された特性である「データ・ソース接続」に対する実行権限 も必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特 性』を参照してください。

#### このタスクについて

既存のデータ・ソース接続を Framework Manager で編集することはできません。

#### 手順

「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」を選択します。

ヒント: データ・ソースを削除するには、データ・ソースのチェック・ボック スをオンにし、「削除」ボタンを選択します。

- 2. 「データ・ソースの新規作成」ボタンを選択します。
- 3. 「名前と説明を指定」ページに一意のデータ・ソース名を入力し、必要に応じ て説明や画面のヒントを入力し、「次へ」を選択します。
- 接続ページの「タイプ」ドロップダウン・リストで、作成するデータ・ソースのタイプを選択します。

リレーショナル・データ・ソースの場合は、「JDBC 接続の設定」チェック・ ボックスがオンになっています。 JDBC 接続を作成しない場合は、チェック・ ボックスをオフにします。JDBC 接続の詳細については、 153 ページの『デー タ・ソース用の JDBC 接続の使用』を参照してください。

使用しているデータ・ソースがリストにない場合は、「その他のタイプ」をク リックします。

- 5. 次のいずれか分離レベルを指定します。
  - 「分離レベル」が表示されない場合は、「次へ」を選択します。
  - 「分離レベル」が表示されている場合も、デフォルトのオブジェクト・ゲートウェイを選択するか、値を指定して、「次へ」を選択します。
- 6. データ・ソースの接続パラメーターを指定します。

使用するデータ・ソースのタイプの接続パラメーターについては、次のリスト で関連付けられている項目をクリックします。

- 121 ページの『IBM Cognos Planning Contributor』
- 122 ページの『IBM Cognos PowerCube』
- 139 ページの『ODBC データ・ソース接続』
- 118 ページの『IBM Db2 データ・ソース』
- 130 ページの『IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services』
- 130 ページの『Informix データ・ソース』
- 137 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソース』
- 131 ページの『Microsoft Analysis Services データ・ソース』
- 141 ページの『Oracle データ・ソース』
- 144 ページの『SAP Business Information Warehouse (SAP BW) デー タ・ソース』
- 147 ページの『Sybase Adaptive Server Enterprise データ・ソース』

- 149 ページの『TM1 データ・ソース』
- 151 ページの『XML データ・ソース』
- 142 ページの『外部リポジトリー・データ・ソース接続』
- 7. 「接続をテスト」、「テスト」の順に選択し、パラメーターが正しいかどうか をテストします。

「ステータス」列で、接続が成功したかどうかを確認できます。成功しなかった場合は、「閉じる」を選択し、前の手順に戻って接続パラメーターを確認します。成功した場合は、次の手順に進みます。

8. 「終了」をクリックします。

IBM Cognos PowerCube または SAP BW 以外のデータ・ソースを選択した 場合は、新しいデータ・ソースが「設定」タブの「データ・ソース接続」に表 示され、Framework Manager でメタデータ・ウィザードを使用する際に選択 できます。

IBM Cognos PowerCube または SAP BW を選択した場合は、次の手順に進みます。

9. 「**OK**」をクリックして「データ・ソース接続」に戻るか、一部のデータ・ソースについては、「パッケージを作成」、「**OK**」の順にクリックします。

注: この時点または後で、新しいデータ・ソースを使用してパッケージを作成 できます。「パッケージを作成」チェック・ボックスは、必要な機能が付与さ れている場合のみ使用できます。

 11.0.6 - 新規管理インターフェースでデータ・ソース接続を使用可能にする には、「管理」 > 「データ・サーバー接続 (Data server connections)」で接

続の「プロパティーを設定」ボタン をクリックし、「接続」タブで 「Web ベース・モデリングを許可 (Allow web-based modeling)」チェッ ク・ボックスにチェック・マークを付けます。

#### 次のタスク

サインオンを作成した場合は、サインオンを変更したり別のサインオンを追加した りできます。詳細については、 163 ページの『データ・ソース・サインオン』を参 照してください。また、別の接続を追加することもできます。 163 ページの『デ ータ・ソース・サインオン』を参照してください。

#### Cognos 固有の接続パラメーター

Cognos 固有のオプションの接続パラメーターを JDBC 接続用に指定できます。

これらのパラメーターは、IBM Cognos Administration または IBM Cognos Framework Manager でデータ・ソースに対する JDBC 接続を作成または更新する 場合にも、IBM Cognos Analytics バージョン 11.0.x の「管理」 > 「データ・サ ーバー接続」管理インターフェースでデータ・サーバー接続を作成または更新する 場合にも指定できます。

別の接続エディターで、これらのパラメーターを「接続プロパティー」または 「**JDBC** 接続パラメーター」として指定できます。

#### ibmcognos.fetchBufferSize

このパラメーターを使用すると、IBM Cognos Analytics のデータ・ソース接続に 対する JDBC ドライバーのフェッチ・サイズを設定できます。

IBM Cognos Analytics の動的クエリー・モードで JDBC を使用してクエリーを実 行する場合、JDBC ドライバーに渡されるフェッチ・サイズ値は動的に計算されま す。フェッチ・サイズのサポートは、データベース・ベンダーによって異なりま す。フェッチ・サイズの意味や、ドライバーとサーバーで内部使用されるフェッ チ・サイズもベンダーによって異なります。詳しくは、ベンダーの JDBC 資料を参 照してください。

動的クエリー・モードでは、maximum( (bufferSize / 'row-size'), 10) という数 式を使用して、クエリーの値が計算されます

バッファー・サイズのデフォルト値は 100 キロバイト (KB) です。行サイズは、ク エリーの結果セットで射影される列のサイズから算出されます。射影する列の精度 が大きいまたは射影する列の数が多いクエリーでは、列が少ないまたは列の精度が 小さいクエリーよりも、小さいフェッチ・サイズが使用されます。

大きいバッファー・サイズを使用することで結果セットの取得を大幅に改善できる 場合、Cognos 管理者は、接続プロパティー ibmcognos.fetchBufferSize を指定で きます。この値が 10 キロバイトより小さい場合または 10 メガバイトより大きい 場合、動的クエリー・モードでは自動的に値が調整されます。

ibmcognos.fetchBufferSize > 1024 * 10240 の場合は bufferSize = 1024 * 10240

ibmcognos.fetchBufferSize < 10240 の場合は bufferSize = 10240

JDBC ドライバーによりメモリー消費量が増加し、パフォーマンスの改善につなが らない可能性があるため、大きいフェッチ・サイズが常に推奨されるわけではあり ません。ibmcognos.fetchBufferSize プロパティーに大きい値を使用する前に、必 ずデータベース・ベンダーの資料を参照して推奨方法を確認してください。

#### ibmcognos.decfloat

このパラメーターを指定すると、最大精度 34 桁で値を正確に表す 10 進浮動小数 点型 DECFLOAT 128 を使用するように動的クエリー・モードに命令できます。大 きな精度の列が検出されると、その列は内部的に DECFLOAT に変更され、モデル またはレポート内のデータ型は DECIMAL(0,0) と表されます。

この機能を有効にするには、動的クエリー・モードで使われるデータベース接続で の接続パラメーター ibmcognos.decfloat=true を指定します。既存のモデルの中で は、列を double ではなく DECIMAL(0,0) に再マップする必要があります。

動的クエリー・モードで、クエリーから戻された行を読み取るには、JDBC ドライ バーが特定の Java データ型を使用して列値を戻す必要があります。以前のリリー スでは、ORACLE などのデータベースから返される数値列の精度が原因で、動的ク エリーが double データ型を使用することがありました。クエリーから返される値 の精度が 16 桁より大きい場合、変換の結果として値が不正確になることがありま した。 例えば、ある ORACLE 列が NUMBER として (精度を指定せずに) 定義されてい た場合や、SUM などの集計を計算したものを ORACLE が NUMBER として戻す 場合に、戻り値 1234567890123456789 が 1.23456789012345677E18 という値に変換 されることがありました。この 2 つの値は同じではありません。

データベースから大きな値が返されない場合は、このパラメーターを使用せず、 DECIMAL(0,0) データ型の列をモデルに決して含めないでください。これにより、 DECFLOAT 型よりも少ないメモリーを必要とするデータ型を動的クエリー・モー ドで使用できます。

#### ibmcognos.qualifier_list

このパラメーターを使用すると、動的クエリーを実行するときのメタデータのあい まいさを解消できます。これは、IBM Cognos Analytics で定義されたデータ・ソ ースに対して 1 つ以上の修飾子を含むリストを割り当てます。

以下の例に、ibmcognos.qualifier_list パラメーターを指定する場合に使用する構 文と、パラメーターに割り当て可能な値を示します。

- ibmcognos.qualifier_list=CATALOG1.SCHEMA1、CATALOG2.SCHEMA2
- ibmcognos.qualifier_list=SCHEMA1、SCHEMA2
- ibmcognos.qualifier_list=CATALOG1.SCHEMA1、SCHEMA2
- ibmcognos.qualifier_list=CATALOG1、CATALOG2

修飾子中のピリオドは、カタログ・コンポーネントとスキーマ・コンポーネントを 区切るために使用します。ピリオドがない場合、データベースがスキーマをサポー トしていれば、その値はスキーマとして扱われます。データベースがスキーマをサ ポートしていなくて、カタログをサポートしている場合は、値はカタログとして扱 われます。

クエリー・サービスは、指定された順序でリストをサーチし、最初に一致した修飾 子で見つかった列のメタデータを使用します。該当するものがない場合、メタデー タがあいまいであるというエラーがスローされます。

管理者は、このパラメーターに指定する修飾子のリストの順序と内容が、ユーザー のデータベース・セッションで定義された可能性のある検索リストと同じであるこ とを確認する必要があります。修飾子リストが適用されるのは、JDBC ドライバー から返されたメタデータのあいまいさをセッションが解決しようとした場合のみで す。動的 SQL ステートメント内の修飾子付きの名前に、クエリーの計画中にパッ ケージ・データ・ソースで使用されたカタログまたはスキーマのプロパティーに割 り当てられた値が反映されます。

#### ibmcognos.authentication

Kerberos 認証を使用する場合に、このパラメーターを使用してデータ・ソース接続 を構成できます。

データ・ソース接続タイプに応じて、ibmcognos.authentication=java_krb5 を指定 した後に、Kerberos 認証を行うために JDBC ドライバーに必要なプロパティーを 追加します (ある場合)。以下に、データ・ソース接続に対してこのパラメーターを 指定する方法を示す例をいくつか記載します。

- Teradata 接続の場合は、ibmcognos.authentication=java_krb5;LOGMECH=KRB5; を指定します
- SAP-HANA 接続の場合は、ibmcognos.authentication=java_krb5; を指定します
- Microsoft SQL Server 接続の場合は、

bmcognos.authentication=java_krb5;authenticationScheme=JavaKerberos; を 指定します

#### ibmcognos.maxvarcharsize

動的クエリーでは、データベースでサポートされている値より大きなデフォルトの VARCHAR 精度の値を使用できます。このパラメーターは、動的クエリー・モード でのデータベース・デフォルトの VARCHAR 精度の値をオーバーライドするのに 使用します。

このパラメーターを指定するには、次の構文を使用します。N は 0 (データベー ス・ベンダーでサポートされている値) より大きい整数値です。

#### ibmcognos.maxvarcharsize=N

SQL 規格では CLOB データ型と国別文字ラージ・オブジェクト型 (NCLOB) を使 用して、大きな文字の値を保持します。CLOB データ型をサポートしているデータ ベースもあれば、特性が似ている独自のバージョンのデータ型をサポートしている データベースもあります。CLOB データ型には、クエリーで使用できる SQL 構成 体の型に関する制限が複数あります。さらにデータベース・ベンダーによっては、 JDBC など、クライアント・インターフェース内で CLOB 列が処理される方法に関 する追加の制限事項があります。CLOB 関連の制限を避けるために、動的クエリ ー・モードでは CAST 関数を使用して CLOB 列が VARCHAR 列に自動的に変換 されます。その結果、CLOB 型の最初の N 個の文字は VARCHAR として動的ク エリーに戻されます。

ヒント: JDBC ドライバーが列を CLOB ではなく VARCHAR として記述する場合 や、列参照の周辺にユーザー指定の CAST がある場合は、自動 CAST は実行されません。

行内の CLOB の長さが CAST 精度データより長い場合は、切り捨てが行われます。

ページや行のサイズなどの特定のデータベース構成の設定やサーバーの設定が満た されている場合、データベース・ベンダーがサポートする精度が大きくなるケース があります。このような事前条件が満たされている場合、データ・サーバー接続に 対して指定できる値が大きくなります。事前条件が満たされていない場合、データ ベースがサポートしている値より大きな値を使用すると、SQL ステートメントの実 行に失敗します。使用する VARCHAR 精度値を大きくする前に、データベース・ ベンダーの資料を参照し、データベース管理者と共に値を確認してください。

動的クエリーでは、データベースごとに以下のデフォルトの VARCHAR 精度値を 使用します。

表 43. 動的クエリー・モードでのデフォルトの VARCHAR 精度値

Database	デフォルトの VARCHAR の精度
Db2 iSeries	32739

Database	デフォルトの VARCHAR の精度
Db2 ZSeries	4096
Db2 LUW	8168
Exasol	2000000
Informix Dynamic Server	255
MariaDB	21845
MemSQL	21845
MySQL	65535
Oracle	4000
Pivotal Greenplum	2000000
PostgreSQL	2000000
SAP Hana	5000
SQL Server	varchar(max)
Teradata	32000
その他のベンダー	1024

表 43. 動的クエリー・モードでのデフォルトの VARCHAR 精度値 (続き)

ibmcognos.maxvarcharsize 値が Java 整数の最大値 (2147483647) より大きい場合 や整数でない場合は、値は無視されます。

ibmcognos.maxvarcharsize 値がデフォルトの 1024 とベンダーの VARCHAR サイ ズの両方より小さい場合、これらの 2 つ値のうち小さい方の値が ibmcognos.maxvarcharsize 値の代わりに使用されます。

## 新しい接続の追加

既存のデータ・ソース用に新しい接続を作成することができます。

#### 手順

- 「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. 新規の接続を追加するデータ・ソースをクリックします。

ヒント: データ・ソース接続を削除するには、データ・ソース接続のチェック・ ボックスをオンにし、「削除」ボタンをクリックします。

- 3. 「接続の新規作成」ボタン をクリックします。
- 4. 「名前と説明を指定」ページに一意の接続名を入力し、必要に応じて説明や画面 のヒントを入力し、「次へ」をクリックします。
- 5. 154 ページの『データ・ソース接続の作成』の手順 5 から 10 に進みます。

#### タスクの結果

サインオンを作成した場合は、サインオンを変更したり別のサインオンを追加した りできます。詳細については、 163 ページの『データ・ソース・サインオン』を参 照してください。

## 既存の接続の変更

新しいデータ・ソース接続を追加したり、既存の接続を編集したりできます。

既存のデータ・ソースに複数の接続を追加することができます。例えば、タイムア ウト値やアクセス権などのプロパティーが異なるが、接続先のデータベースが同じ である複数の接続を 1 つのデータ・ソースに指定できます。データ・ソースに異な るデータベースを指す接続を追加することもできますが、各データベースのスキー マは同じでなければなりません。

データ・ソース接続を作成するときは、"すべてのユーザー"グループがデータベース へのアクセスに使用できるサインオンを作成できます。このサインオンを利用でき るユーザーは後で変更できます。また、新しいサインオンを作成してユーザーを追 加することもできます。例えば、各データ・ソース接続に対して権限を設定するこ とで、データへのアクセスを制御できます。詳細については、 231 ページの『エン トリーに対するアクセス権の設定』を参照してください。

データ・ソース接続を追加または変更するには、データ・ソースを管理するために 必要な機能へのアクセス権が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている 機能と特性』を参照してください。

Oracle、IBM Db2、または Microsoft SQL Server のデータ・ソースを作成する場合は、接続情報にデータベース・コマンドを含めることができます。詳細については、 168 ページの『IBM Cognos コンテキストをデータベースに渡す方法』を参照してください。

レポート・サーバーで使用できるデータ・ソース接続の最大数の設定については、 『接続設定の変更』を参照してください。

#### 手順

- 「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. 接続を変更するデータ・ソースをクリックします。
- 3. 変更する接続の「プロパティーを設定」ボタン をクリックします。
- 4. 「接続」タブをクリックします。
- 5. データ・ソースのタイプを変更する場合は、「タイプ」ドロップダウン・リスト の項目をクリックします。
- 6. 「編集」アイコン をクリックして、接続文字列を変更します。
- 7. 154 ページの『データ・ソース接続の作成』の手順 5 から 10 に進みます。

## 接続設定の変更

使用できるデータ・ソース接続の最大数、接続を維持する時間、およびデータ・ソ ース接続の再利用方法を設定できます。

レポート・サーバーの各インスタンスには、確立されたデータベース接続のプール があります。データベース、ユーザー、およびパスワードが一致する新しい要求が あると、これらの接続が再利用されます。エントリーは、アイドルの状態でタイム アウト期間が経過して閉じられるまで、プール内に保持されます。プールがいっぱ いになると、新しい接続は追加されなくなります。この結果、要求は失敗します。 プール・サイブ

プール・サイズ

レポート・サーバーで使用できるデータ・ソース接続の最大数を指定しま す。

タイムアウト

接続を保持する時刻期間を指定します。接続状況の確認が1分ごとに行われ、アイドル状態がタイムアウト値で指定した時間を超えた接続は削除されます。

デフォルト: 900 秒

再利用可能なデータ・ソース接続

データ・ソース接続は、接続のデータベース資格情報が新しい要求の資格情報と一致する場合にのみ再利用できます。アイドル状態のデータ・ソース接続では、新しい要求によって接続要求が行われることがあります。これは、 接続が最大数に達して、新しい要求で利用できるアイドル状態の接続がない 場合に発生します。この場合、最も古いアイドル状態の接続が切断され、新しい接続が作成されます。

接続が最大数に達し、かつすべての接続が使用中である場合、新しい要求は 失敗します。同時に発生するレポート要求の数が要求プール・サイズを超え ないように、サーバーを設定する必要があります。

Report サービス要求の詳細については、 82 ページの『最大プロセス数と最大接続 数』を参照してください。

#### 手順

IBM Cognos Analytics がインストールされている各コンピューターで、インストールの場所/configuration/CQEConfig.xml.sample ファイルをテキスト・エディターで開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされているこ とを確認してください。

2. Timeout および PoolSize パラメーターを見つけて、次のように編集します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<configuration company="Cognos" version="#.#"
rendition="###">
  <component name="CQE">
    <section name="DBConnectionPool">
      <!-- Description: Database connection timeout.
      Default is 900 seconds (15minutes) -->
      <entry name="Timeout" value="number of seconds"/>
      <!--->
      <!-- Description: Database connection pool size. -->
      <!-- Maximum number of connections managed by the report
           server. Default=50 -->
      <entry name="PoolSize" value="number of connections"/>
    </section>
  </component>
</configuration>
```

 ファイルを CQEConfig.xml として インストールの場所/configuration ディレ クトリーに保存します。 4. IBM Cognos Configuration で、IBM Cognos サービスを停止してから再起動 します。

サービスの停止方法について詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* インストール および設定ガイド」を参照してください。

## JDBC 接続の動的接続パラメーター

データ・ソースへの JDBC 接続は、クエリー・エンジンによって JDBC ドライバーに渡される値の静的セットを指定します。

Apache Hive または Cloudera Impala などの環境では、クエリー・エンジンが動 的値を渡す必要がある ID 委任などの機能をサポート可能です。「JDBC URL」お よび「接続プロパティー」フィールドで、セッション変数を指定できます。例え ば、「JDBC URL」フィールドには、以下の名前と値のペアを含めることができま す。

hive.server2.proxy.user=#\$account.defaultName#

クエリー・エンジンが新規データベース接続を作成する際、セッション変数を対応 する値で置き換えます。セッション変数が存在しない場合、変数名は値が入ること なく削除されます。その結果、ドライバーが接続を拒否する可能性があります。

注:マクロ関数は使用できません。セッション変数への参照のみがサポートされています。

# データ・ソース・サインオン

データ・ソース接続にサインオンを追加すると、レポートの実行時にユーザーがデ ータベース資格情報を入力する必要がなくなります。

サインオンを作成する際には、そのサインオンを使用できるユーザーとグループを 指定します。サインオンを構成するユーザー ID とパスワードは、あらかじめデー タベース内に定義しておく必要があります。

データベースへのログオンに使用する資格情報が変更された場合や、サインオンを 使用できるユーザーを変更する場合は、既存のサインオンを変更できます。

各ユーザーに独自のサインオンが必要なデータ・ソース構成の場合は、すべてのサ インオンの管理が困難になる可能性があります。各ユーザーによる独自のデータ・ ソース資格情報の管理方法については、 234 ページの『自分のデータ・ソース資格 情報の管理』を参照してください。

## サインオンの作成

データ・ソース接続のサインオンを定義して、データに Query サービスが自動的 にアクセスできるようにする必要があります。

#### このタスクについて

データ・ソース接続には、データ・ソースに接続するために Query サービスが使 用できるサインオンが、少なくとも 1 つ必要です。データ・ソース接続に複数のサ インオンがある場合、いずれかのサインオンの名前が Dynamic Cubes でなければな りません。このサインオンは、データ・ソースに接続するために Query サービス によって使用されます。

#### 手順

- 「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. データ・ソースをクリックして、新規のサインオンを追加する接続をクリックします。
- 3. 「サインオンの新規作成」ボタン 📝 をクリックします。
- 4. 「名前と説明を指定」ページに一意のデータ・ソース・サインオン名を入力し、 必要に応じて説明や画面のヒントを入力し、「次へ」をクリックします。
- 5. データベース接続用の「ユーザー ID」と「パスワード」に値を入力して、「次 へ」をクリックします。

「ユーザーを選択」ページが表示されます。

- 6. サインオンを使用できるユーザーとグループを追加するには、「追加」をクリッ クします。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

### ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザ 一名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

7. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント:「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除 するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべてのエン トリーを選択するには、「名前」リストのタイトル・バーで、チェック・ボック スを選択します。ユーザー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを 表示する」をクリックします。

8. 「終了」をクリックします。

接続の下に新規のデータ・ソース・サインオンが表示されます。

#### サインオンの変更

既存のサインオンを変更できます。

#### 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. データ・ソースをクリックして、サインオンを変更する接続をクリックします。

ヒント:サインオンを削除するには、サインオンのチェック・ボックスをオンに し、「削除」ボタンをクリックします。

- 3. 変更するサインオンの「プロパティーを設定」ボタン をクリックします。
- 4. 「サインオン」タブをクリックします。

サインオンを使用できるユーザー・グループのリストが表示されます。

- 5. サインオンを構成するユーザー ID とパスワードを変更する場合は、「サイン オンを編集」をクリックし、新しい資格情報を入力して「**OK**」をクリックしま す。
- サインオンのリストにユーザーやグループを追加する場合は、「追加」をクリックし、ユーザーやグループの選択方法を設定します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

#### ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザ 一名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

7. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント:「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除 するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目 を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザー・エ ントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

8. 「**OK**」をクリックします。

分離レベル

データ・ソースの分離レベルを指定することができます。

分離レベルでは、データベースを変更するトランザクションをどのように扱うかが 指定されます。デフォルトでは、デフォルト・オブジェクト・ゲートウェイが使用 されます。データベースのタイプによっては、サポートされていない分離レベルも あります。分離レベルの名前は、データベースの製造元によって異なる場合があり ます。

レポートや分析で実行するクエリーでは、読み取り専用の処理が想定されていま す。クエリーは、トランザクションと呼ばれる作業単位でデータ・ソースに対して 実行され、デフォルトの分離レベルまたは管理者が定義した分離レベルで実行され ます。レポート作成者は、ストアード・プロシージャーを実行するクエリーによっ てプロシージャーの書き込みデータがコミットされることは想定しないようにする 必要があります。環境によっては、データベースの機能のためにプロシージャーに よる変更がコミットされる場合があります。Framework Manager で書き込み用の マークが付けられたストアード・プロシージャーでは、変更がコミットされます が、これを使用できるのは Event Studio のみです。

異なる分離レベルで実行する特定のクエリーが必要な場合は、異なるデータベース 接続を定義する必要があります。

SAP BW などの OLAP データ・ソースについては、トランザクション作業単位は 読み取り専用です。

次に、分離レベルを分離度の順番に示します。

非コミット読み取り

他のトランザクションによって行われた変更の内容を、ただちに別のトランザク ションで使用できるようにします。

表 44. 「非コミット読み取り」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	該当なし
Db2	非コミット読み取り
Microsoft SQL Server	非コミット読み取り
Sybase Adaptive Server Enterprise	非コミット読み取り
Informix	ダーティー・リード

コミット読み取り

トランザクションによるアクセスを、他のトランザクションでコミットされた行 に限定します。

表 45. 「コミット読み取り」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	コミット読み取り
Db2	カーソル固定
Microsoft SQL Server	コミット読み取り
Sybase Adaptive Server Enterprise	コミット読み取り
Informix	コミット読み取り
カーソル固定

トランザクションによる処理が行われている行を、別のトランザクションが更新 できないようにします。

表 46. 「カーソル固定」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	該当なし
Db2	該当なし
Microsoft SQL Server	該当なし
Sybase Adaptive Server Enterprise	該当なし
Informix	カーソル固定

非反復読み取り

トランザクションによって選択または更新されている行を、そのトランザクショ ンが終了するまで、別のトランザクションで変更できないようにします。

表 47. 「非反復可能読み取り」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	該当なし
Db2	読み取り固定
Microsoft SQL Server	反復可能読み取り
Sybase Adaptive Server Enterprise	反復可能読み取り
Informix	反復可能読み取り

• ファントム防止

トランザクション開始後に挿入または削除された行を、トランザクションのアク セスから保護します。

表 48. 「ファントム防止」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	該当なし
Db2	該当なし
Microsoft SQL Server	該当なし
Sybase Adaptive Server Enterprise	該当なし
Informix	該当なし

直列化

並行処理された一連のトランザクションで、直列処理と同様の結果を生成しま す。

表 49. 「直列化」データベース・タイプと、相当する分離レベル

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Oracle	直列化
Db2	反復可能読み取り

表 49. 「直列化」データベース・タイプと、相当する分離レベル (続き)

データベース・タイプ	相当する分離レベル
Microsoft SQL Server	直列化
Sybase Adaptive Server Enterprise	直列化
Informix	該当なし

## **IBM Cognos** コンテキストをデータベースに渡す方法

データベース管理者は、データベース・システムに接続されるアプリケーションの 詳細を知る必要があります。この情報は、監査、負荷管理、トラブルシューティン グに使用できます。

IBM Cognos アプリケーションに関する情報は、データ・ソース接続のコマンド・ ブロックを使用して、データベースに渡すことができます。コマンド・ブロック は、ORACLE (OR)、IBM Db2 (D2)、Teradata (TD)、SQL Server (SS)、および Netezza (NZ) の各データ・ソース接続に対してサポートされています。詳細につい ては、『コマンド・ブロック』を参照してください。

Db2 では、接続属性を Cognos アプリケーションに関する情報の引き渡し方法とし て使用することもできます。詳細については、 176 ページの『Db2 用の IBM Db2 CLI 接続属性の使用』を参照してください。

IBM Cognos ソフトウェアは、そのレポート作成アプリケーションや、アプリケー ションにアクセスするユーザーに関する情報を提供します。これには、認証プロバ イダーから取得した認証ユーザーに関する一連のデフォルト情報が含まれます。こ の情報は、IBM Cognos Configuration でカスタム・ネームスペース・マッピング を指定することによって拡張できます。マッピングの詳細については、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## コマンド・ブロック

接続コマンド・ブロックは、データ・ソースで開始されている接続のセッション状態を変更するために使用します。コマンド・ブロックに使用できるステートメントは、データベース・ベンダーでサポートされているステートメントや、それらのステートメントに対するユーザーの権限によって異なります。コマンド・ブロックのステートメントは、IBM Cognos セッション変数とマクロ関数を使用してパラメーター化できます。

コマンド・ブロックは、IBM Cognos ソフトウェアでデータベース接続または接続 のセッションが開始するとき、および終了するときに実行されます。コマンド・ブ ロックを使用してネイティブ SQL コマンドを実行できます。例えば、セッション が開始する際のストアード・プロシージャーなどを実行できます。

次のタイプのコマンド・ブロックを使用できます。

- 接続開始のコマンド
- セッション開始のコマンド
- セッション終了のコマンド
- 接続終了のコマンド

管理者は、データベース接続でコマンド・ブロックがいつ実行されたのかを把握す る必要があります。多くの場合、データベース式はセッション開始のコマンド・ブ ロックで定義するのが最適です。データベース開始の接続は実行される回数が少な くなります。これは、IBM Cognos でデータベース接続がプールされ、再利用され るためです。データベース接続のアプリケーション・コンテキストが頻繁に変更さ れる場合は、セッション開始のコマンド・ブロックを使用してください。

コマンド・ブロックには、頻繁に値が変更される Cognos セッション変数やマクロ を含めないようにしてください。これらのタイプのセッション変数やマクロによっ て、コマンド・ブロックの実行頻度とデータ・ソース・キャッシュの数が増え、結 果セットのキャッシュの再利用が減ります。

コマンド・ブロックを作成する際には、次のデータベース接続設定を考慮に入れて ください。

- CQEConfig.xml ファイルでデータベース接続プール設定がレポート・サーバーに 対してどのように指定されているか
- データベースでアイドル接続タイムアウトがどのように設定されているか
- クエリー・エンジンでアイドル接続タイムアウトがどのように設定されているか
- 要求間の時間がタイムアウト設定より長くなっていないか
- 接続の新規作成が必要となる別のレポート・サーバーにルートされる要求はないか

次の図は、4 つのタイプのコマンド・ブロックの相互関係の例を示したものです。 相互関係は、ユーザー 1 に対するクエリーの着信時に始まります。データベースへ の接続は存在しないと想定されます。

ユーザー1のクエリーが到着する



図 3. コマンド・ブロック間の相互関係の例

#### マクロ関数

IBM Cognos ソフトウェアで利用できるマクロ関数によって、ユーザーやレポート 作成アプリケーションのオブジェクト (パッケージ、レポート、クエリーなど) に関 する情報をコマンド・ブロックで提供できます。すべてのマクロ関数は、コマン ド・ブロックから参照されたときに値を返し、アプリケーション・コンテキスト を、コマンド・ブロックからデータベースに渡すことができます。モデル内のパラ メーター・マップを参照するマクロ関数も使用できます。

#### 考慮事項

接続プロパティーのページの「接続をテスト」リンクを使用する接続のコマンド・ブロックをテストすることはできません。Software Development Kit がインストールされている場合は、使用する XML コードをスキーマ・ファイル
 <10 の場所>/webapps/p2pd/WEB-INF/classes/ DataSource.xsd に照らし合わせて検証できます。

- コマンドの構造は、すべてのデータ・ソースで同じです。特定のデータベース・ コマンドは、使用しているデータベースによって異なります。このセクションの 例では、Oracle および IBM Db2 のコマンドを使用しています。
- ブロック内のコマンドは製造元ごとに固有であり、<sqlCommand> タグで囲む必 要があります。
- 設定によっては、通常の方法でロードされたアプリケーションの場合よりも、クエリー・エンジンの方が新しい接続を迅速に開始できる場合があります。このため、要求が実行されるたびに情報がリセットされているという誤った印象を与える場合があります。この動作を制御するために、「(DQM) Cache is sensitive to connection command blocks」ガバナーの使用を検討してください。詳しくは、「IBM Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド」の中の、動的クエリー・モードの Framework Manager ガバナーに関するトピックを参照してください。

#### 例 - 接続を開くコマンド・ブロック

次に、接続を開くコマンド・ブロックを使用して Oracle 接続の言語としてフラン ス語を設定する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql>ALTER SESSION SET NLS_LANGUAGE = FRENCH</sql>
</sqlCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

#### 例 - 接続を閉じるコマンド・ブロック

次に、Oracle データベースから切断する前に接続を閉じるコマンド・ブロックを使 用して言語を英語に再設定する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql>ALTER SESSION SET NLS_LANGUAGE = ENGLISH</sql>
</sqlCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

#### 例 - 要求の情報を渡す

次に、IBM Db2 のセッション開始のコマンド・ブロックの例を示します。コマン ド・ブロックが実行されたときに、ユーザー定義のプロシージャーに渡される一連 のパラメーターが生成されます。

この例では、マクロ関数を組み合わせて、値が確実に文字列リテラルおよびリテラ ルを含む文字列の連結として生成されるようにします。modelPath 変数は、ブロッ クが実行されたときに処理される要求のプロパティーにアクセスする方法の一例で す。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql> CALL myproc(#sq($current_timestamp) + ',' +
sq($machine) + ',' +
sq(#$modelPath}#) + 'Constant1''''#)
```

</sql> </sqlCommand> </commands> </commandBlock>

マクロが開かれた後、データベース管理者はクエリーに関する次の情報を入手しま す。

CALL myproc('2009-05-27 08:13:33.425-05:00','USERCOMPUTERNAME','/content/package[@name=''EAPPS'']/model[@name=''model'']', 'Constant1', '')

#### 例 - パラメーター・マップを使用する

この IBM Db2 の例では、データベース管理者がモデル情報を取得する方法を紹介 します。

アプリケーションの規格で、すべてのモデルで表示されるパラメーター・マップが 定義される場合があります。パラメーター・マップでは、IBM Cognos アプリケー ションに関するコンテキスト情報が定義されます。この方法では、エラーを回避す るために、接続を使用するすべてのアプリケーションでこの情報が提供される必要 があります。

```
<commandBlock>
<commandSlock>
<sqlCommand>
<sql> CALL myproc(#sq($APP_INFO{APPNAME}) + ',' +
sq($APP_INFO{'APPMAJOR'}) + ',' +
sq($APP_INFO{'APPMINOR'}) + ',' +
sq($APP_INFO{'APPCONTACT'}) + ', ''Constant1'' '#))
</sql>
</sql>
</commands>
</commandBlock>
```

マクロが開かれた後、データベース管理者はクエリーに関する次の情報を入手しま す。

CALL myproc('ApplicationName','10','1','TradingApp@email.com', 'Constant' )

#### 例 - 認証プロバイダーの詳細を渡す

この IBM Db2 の例では、認証プロバイダーから取得したセッション情報を、デー タベースに渡す情報に組み込む方法について説明します。

コマンド・ブロックが Db2 プロシージャー SYSPROC.WLM_SET_CLIENT を呼び 出し、使用可能なセッション変数から取得した値を渡します。この情報は、データ ベース管理者がデータベースの負荷管理規則を定義することにより、データベース 接続が複数のユーザー・グループによって共有される場合に特定のユーザー・グル ープに高い優先順位を与えるために使用されます。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql> CALL SYSPROC.WLM_SET_CLIENT_INFO
(#$account.personalInfo.userName#,
'UserComputerName',
#$account.parameters.var1#, 'ApplicationName', 'AUTOMATIC')
```

</sql> </sqlCommand> </commands> </commandBlock>

### 例 - プロキシー接続用のコマンド・ブロックの使用

プロキシー接続を使用している場合は、アイドル状態にある既存の接続をプロキシ ー接続へのサインオンとして使用できます。

物理的な接続は、複数のユーザーによって使用することができます。プロキシー接 続は既存の物理接続の最上位で実行されているため、少ない物理接続数で済みま す。

プロキシー接続を作成するには、XML でセッションを開くコマンド・ブロックを作成します。

次に示すのは、User1 用にプロキシー接続を作成したり (Oracle)、User1 に切り替 えたり (Db2) する簡単なセッションを開くコマンド・ブロックの例です。 sessionStartCommand は、Oracle および Db2 でのみ使用できます。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<argument>
<rname>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>PROXY_USER1</value>
</argument>
</arguments>
</sessionStartCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

認証 userNames がプロキシーのユーザー ID や信頼されているコンテキスト・ユ ーザーに等しい場合には、次に示すもう 1 つのマクロに置き換えることもできま

## す。

```
<commandBlock>
<commandBlock>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<argument>
<rname>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>#$account.personalInfo.userName#
</value>
</argument>
</argument>
</sessionStartCommand>
</commandBlock>
```

次に示すのは、プロキシー・セッション用の簡単なセッションを閉じるコマンド・ ブロックの例です。現在のプロキシー接続は終了されます。sessionEndCommand は Oracle の OCI_session を終了し、ユーザーを Db2 の信頼されているコンテキ スト所有者に切り替えます。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionEndCommand>
```

<arguments/>
</sessionEndCommand>
</commands>
</commandBlock>

## 例 - Oracle の仮想プライベート・データベース用のコマンド・ブロ ックの使用

通常、Oracle ではユーザーがアクセス可能なデータベース情報を決定するためにサインオンが使用されます。仮想プライベート・データベースでは、それ以上のサインオン情報を必要とすることなく、どのユーザーがどの情報にアクセスできるのかが決定されます。

実行時にログオン済みユーザーの代わりとなるマクロを使って接続用コマンド・ブ ロックを作成します。このマクロによってユーザーが識別されるため、サインオン 情報を再入力する必要はありません。

データベースにアクセスするすべてのユーザーがデータベース・ユーザーとして定 義され、接続にユーザー・アカウントが使用されていれば、接続が確立され次第コ ンテキストを自動的に設定できます。例えば、userNameの代わりに、このマクロ を使用できます。

XML コマンド・ブロックには、記述された順序で実行される一連のコマンドがあり ます。これには、 503 ページの『付録 E. データ・ソース・コマンドのスキーマ』 で説明されているコマンドが含まれる場合があります。

次に示すのは、仮想プライベート・データベース用の XML コマンド・ブロックの 例です。

このコマンド・ブロックでは、渡されたパラメーターに基づいて接続内にコンテキ スト (仮想プライベート・データベース)を設定します。渡されるパラメーターは、 ポータル・レベルでのユーザーのログオンに関係する環境から取得されます。これ らの変数は、設定ツールを使って変更可能です。変数の値はユーザーに固有のもの で、セキュリティー制御メカニズム (CAM)を使って取得されます。

```
<commandBlock>
```

```
<commands>
<sqlCommand>
<sql>BEGIN PKG_COUNTRY_CONTEXT.SP_SET_COUNTRY1
(#$account.parameters.var1#);
END;</sql>
</sqlCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

この例では、アカウント・パラメーターの代用が示されています。カスタム・プロ パティーとしてアカウント情報を指定する必要があります。セッション・プロパテ ィーの詳細については、「Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照してくだ さい。

注:Oracle プロキシー接続およびデータ・ソース・レベルの仮想プライベート・デー タベース用のコマンド・ブロックは、そのデータ・ソースに対するすべての接続に 適用されます。

#### データ・ソースの作成時のコマンド・ブロックの追加

データ・ソースの作成時に、コマンド・ブロックを追加できます。

デフォルトでは、接続によって親データ・ソースからプロパティーが取得されま す。各接続は後で個別に変更できます。

#### 手順

- 1. Cognos Administration の「設定」タブで、コマンド・ブロックをサポートするデータベースのデータ・ソースの作成を開始します。
- コマンド指定のページで、指定するコマンドの横にある「設定」をクリックします。
- 3. コマンド設定のページで、コマンド・ブロックの XML コードを追加し、 「**OK**」をクリックします。

ヒント: IBM Db2 と Microsoft SQL Server では、セッションを開くコマンド・ブロックのみを追加できます。

4. 必要に応じてコマンド・ブロックの追加を繰り返し、「終了」をクリックしま す。

#### 接続用のコマンド・ブロックの追加または変更

特定のデータ・ソース接続のコマンド・ブロックを追加、変更、または削除できま す。

接続によって、親データ・ソースからプロパティーが取得されます。データ・ソー スにコマンド・ブロックを追加した場合、そのコマンド・ブロックはそのデータ・ ソースのすべての接続で使用できるようになります。

#### 手順

- Cognos Administration の「設定」タブで、次のいずれかのオプションを選択 します。
  - このデータ・ソースのすべての接続のコマンド・ブロックを変更する場合、 データ・ソース・プロパティーにアクセスします。
  - 1 つの接続のコマンド・ブロックを変更する場合、データ・ソース接続プロ パティーにアクセスします。
- 2. 「接続」タブをクリックし、「コマンド」セクションで次のいずれかのタスクを 実行します。
  - コマンド・ブロックを追加するには、選択可能ないずれかのコマンド・タイプの「設定」をクリックして、コマンド・ブロックの XML コードを「XML データベース・コマンド」ボックスに貼り付けます。
  - コマンド・ブロックを変更するには、選択したコマンドの「編集」をクリックして、「XML データベース・コマンド」ボックスにあるコマンド・ブロックの XML コードを変更するか削除します。

コマンド・ブロックをリセットするには、「親の値に戻す」または「クリア」チ ェック・ボックスを選択します。

ヒント: IBM Db2 と Microsoft SQL Server では、セッションを開くコマンド・ブロックのみを追加できます。

3. 必要に応じてコマンド・ブロックの追加や変更を繰り返し、「終了」をクリック します。

## Db2 用の IBM Db2 CLI 接続属性の使用

Db2 Call Level Interface (Db2 CLI) は、Db2 LUW、Db2 for z/OS、および Db2for I の呼び出し可能 SQL インターフェースです。 IBM Cognos Analytics では、Db2 CLI 接続属性の一部を変更して、IBM Optim[™] Integrated Data Management のコンポーネントが許容できる形式でアプリケーション・コンテキス トを Db2 に渡すことができます。

この情報は、後で SQL ステートメントを使用して Db2 特殊レジスターから取得できます。

この機能を有効にするには、IBM Cognos 環境で設定された IBM Cognos レポー ト・サーバー・コンピューターのそれぞれで設定ファイルを変更する必要がありま す。この機能はクエリー・レベルで設定されているため、接続属性に関連する情報 は、レポートを実行するたびに自動的に更新されます。

次のリストは、IBM Cognos Analytics で変更可能な Db2 CLI 接続属性、および それらの属性で Db2 に渡すことができる情報の種類を示しています。

SQL_ATTR_INFO_USERID

ユーザーが実行するレポートの名前を指定します。

• SQL_ATTR_INFO_WRKSTNNAME

ユーザーのブラウザーがインストールされたシステムのアドレスを指定します。

• SQL_ATTR_INFO_APPLNAME

クエリーに関連付けられたパッケージの名前を指定します。文字列が 32 文字よ りも長い場合は、アカウント文字列の \$SLOT2 にオーバーフローします。

• SQL_ATTR_INFO_ACCTSTR

要求と IBM Cognos Analytics を関連付けるプレフィックスまたは文字列を指定 します。次のいずれかの値を入力します。

表 50. Db2 用の Db2 CLI 接続属性の使用

値	説明
COG	IBM Optim Integrated Data Management において、要求と IBM Cognos 製品を関連付ける。
ссс	要求と IBM Cognos ソリューションを関連付ける。
vr	IBM Cognos 製品のバージョンを指定する。

表 50. Db2 用の Db2 CLI 接続属性の使用 (続き)

値	説明
追加のアカウント情報	この情報は次のフィールド (スロット) に分割される。
	<ul> <li>\$SLOT2:\$packageName (\$SLOT1 のオーバーフロー・セク ション)</li> </ul>
	\$SLOT3:\$reportName
	• \$SLOT4:\$queryName
	• \$SLOT5:\$reportPath
	各スロットの長さは固定されており、46 バイト (必要な場合は スペースが埋め込まれている) までの文字列しか許容できませ ん。レポートやモデルのパスなどは長いことが多いため、文字 列を短くしてスペースの制限に合わせる場合があります。 注: Db2 では、API に渡される値に単一引用符が含まれていて はなりません。それらはスペースに変換されます。文字セット のエンコード方式で 1 文字にマルチバイトが使用されている場 合、オーバーフローを回避するため文字は「?」に変換されま す。これは Unicode が使用されている場合で、1 文字が 2 バ イトを超える可能性があるときに重要です。

#### 手順

- 1. 互換性のあるクエリー・モードでデータベースに接続する場合は、以下のステップを実行してください。
  - a. インストールの場所/configuration ディレクトリーで、
     CQEConfig.xml.sample ファイルのコピーを作成し、それを CQEConfig.xml に名前変更します。

ヒント: セッション・キャッシュの無効化など、他の目的のために CQEConfig.xml が使用された場合は、インストールの場所/configuration ディレクトリーにこのファイルが存在する可能性があります。この場合は、 既存の CQEConfig.xml ファイルを使用して残りの手順を実行します。

 b. エディターで インストールの場所/configuration/CQEConfig.xml ファイル を開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされてい ることを確認してください。

c. <section name="QueryEngine"> 要素を見つけ、以下の例に示すように値 1
 を指定した DB2WFM エントリーを追加します。

<section name="QueryEngine">
 <entry name="DB2WFM" value="1"/>
</section>

この機能を無効にするには、値を 0 に設定します。

- 2. 動的クエリー・モードでデータベースに接続する場合は、以下のステップを実行 してください。
  - a. *install_location*/configuration ディレクトリーで、xqe.config.xml ファ イルのコピーを作成し、それを xqe.config.xml.backup に名前変更しま す。

 b. エディターで インストールの場所/configuration/xqe.config.xml ファイ ルを開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされてい ることを確認してください。

 c. <setConnectionAttributes enabled="false"> 要素を見つけ、以下の例に示 すようにその値を "true" に変更します。
 <setConnectionAttributes enabled="true">

この機能を無効にするには、値を "false" に設定します。

- 3. ファイルを保存します。
- 4. これらのステップを、IBM Cognos 環境で設定された各レポート・サーバー・ コンピューターに対して繰り返します。
- 5. IBM Cognos サービスを再開します。

## 動的 SQL でのアプリケーション・コンテキストの使用

データベース・サーバー管理者は、IBM Cognos ソフトウェアで生成された動的 SQL の作業負荷を記録して分析できます。

IBM Cognos 管理者は、アプリケーションで生成された SQL 内にコメント・マー カーとして追加するアプリケーション・コンテキストなど、カスタム文字列を定義 できます。リテラル、マクロ、およびユーザー名、サーバー名、修飾レポート・パ スなどのセッション変数を使用して、Cognos ソフトウェアで生成されたコメント をカスタマイズできます。

データベース管理者は、サーバーへの送信前にデータベース・クライアントが文か らコメントを削除するかどうかを確認する必要があります。通常このオプションは 設定可能です。データベース・クライアント・プロバイダーに問い合わせてくださ い。

適用可能なセッション変数を使用すると、動的 SQL からコメントを抽出できる特定のツールや製品に対して文字列の形式を設定できます。ベンダーがこの機能をサポートしている場合、IBM Cognos ソフトウェアでは、リレーショナル・データベース管理システム (RDBMS) に対して生成する動的 SQL 内にコメントが挿入されます。

文字列仕様をカスタマイズするには、この製品に付属の"CQEConfig.xml.sample"フ ァイルを使用します。このファイルのマクロでは、IBM Cognos ソフトウェアでコ メントの生成に使用するデフォルトのエントリーが表示されます。ただし、他のエ ントリーを追加することもできます。

次の例は、"CQEConfig.xml.sample"ファイルのマクロに指定できるセッション変数の種類を示しています。

```
<configuration company="Cognos" version="0.1" rendition="cer2">
  <component name="CQE">
    <section name="QueryEngine">
    <entry name="GenerateCommentInNativeSQL" value="1"/>
    <!-- ( default(off)=0, on=1) -->
    <entry name="GenerateCommentInCognosSQL" value="1"/>
    <!-- ( default(off)=0, on=1) -->
    <!-- The content of the comments is controlled with two entries, their</pre>
```

```
defaults are specified in the value attribute -->
  <entry name="NativeCommentMacro" value="# 'NC user=' + $account.defaultName</pre>
+ 'report=' + $report + 'start=' + $startTime + 'modelPath=' +
$modelPath + 'reportPath=' + $reportPath + ' queryName=' + $queryName
+ ' REMOTE ADDR=' + $REMOTE ADDR + 'HTTP HOST=' + $HTTP HOST + 'SERVER NAME='
+ $SERVER NAME +' requestID=' + $requestID + 'sessionID=' + $sessionID
#"/>
  <entry name="CognosCommentMacro" value="# 'CC user=' + $account.defaultName</pre>
+ 'report=' + $report + 'start=' + $startTime + 'modelPath=' +
$modelPath + 'reportPath=' + $reportPath + ' queryName=' + $queryName
+ ' REMOTE ADDR=' + $REMOTE ADDR + 'HTTP HOST=' + $HTTP HOST + 'SERVER NAME='
+ $SERVER NAME +' requestID=' + $requestID + 'sessionID=' + $sessionID
#"/>
 </section>
</component>
</configuration>
実行時には、前述の例で使用されているマクロによって、次のコメントが、自動生
成された SOL またはネイティブ SOL に追加されます。
/* CC user=Anonymous report=REPORT1
start=2008-08-28T01:59:35.403Z modelPath=/content/package
[@name='New Package']/model[@name='model']
reportPath=/content/package[@name='New Package']/report[@name='REPORT1']
queryName=Query1 REMOTE_ADDR=127.0.0.1 HTTP_HOST=localhost
SERVER NAME=localhost
requestID=wq2lshM9jGhqdMj9h92MqlqvdMlhyMlGq9lyG9sq
sessionID=010:0d159165-745a-11dd-ac9f-b741aeca4631:2789499633
*/
```

EAPPS..EAPPS.ALL_TIME ALL_TIME

生成されたコメント内のすべての情報が、すべての状況で意味があるわけではあり ません。要求とセッション ID の情報では、監査機能、perfQFS パフォーマンス情 報、IBM Cognos の他のトレースへのリンクが提供されます。ただし、ユーザーが 保存済みのクエリー、分析、レポートではなく、テーマやニーズに応じたクエリー や分析を実行する場合、レポートのクエリー名とそのレポート自体には意味があり ません。

デフォルトでは、匿名ユーザーは、生成されたコメント内のすべてのセッション変数を表示できません。

#### 動的クエリー・モードのアプリケーション・コンテキストの追加

動的クエリー・モードのコメントを SQL で使用するには、インストールの場 所/configuration にある xqe.config.xml ファイルを設定します。

<queryPlanning> 要素内の次の要素を編集します。

<generateCommentsInNativeSQL enabled="true"/>
<NativeCommentMacro value="#'user=' + \$account.defaultName + ' reportPath='
+ \$reportPath +' queryName=' + \$queryName + ' REMOTE_ADDR=' + \$REMOTE_ADDR
+ ' SERVER_NAME=' + \$SERVER_NAME + ' requestID=' + \$requestID#"/>

#### 動的 SQL へのアプリケーション・コンテキストの追加

データベース・サーバー管理者は、CQEConfig.xml.sample ファイルを構成するこ とで、IBM Cognos ソフトウェアで生成された動的 SQL の作業負荷を記録して分 析できます。動的クエリー・モードの場合、管理者は xqe.config.xml ファイルを構 成します。

#### 手順

1. インストールの場所/configuration ディレクトリーで、CQEConfig.xml.sample ファイルのコピーを作成し、それを CQEConfig.xml に名前変更します。

ヒント: セッション・キャッシュの無効化など、他の目的のために CQEConfig.xml が使用された場合は、インストールの場所/configuration ディ レクトリーに既にこのファイルが存在する可能性があります。この場合は、既存 の CQEConfig.xml ファイルを使用して残りの手順を実行します。

エディターで インストールの場所/configuration/CQEConfig.xml ファイルを開きます。

使用するエディターで UTF-8 形式でのファイルの保存がサポートされていることを確認してください。

3. 次の文字列で始まるコード行を探し、非コメント行にします。

entry name="GenerateCommentInNativeSQL"...

entry name="GenerateCommentInCognosSQL"...

entry name="NativeCommentMacro"...

entry name="CognosCommentMacro"...

 必要に応じて、NativeCommentMacro と CognosCommentMacro を変更し、必須の パラメーター値を指定したり、不要なパラメーターを削除したりすることができ ます。

パラメーター値を空のままにすると、生成されたコメントにそのパラメーターは 表示されません。

- 5. CQEConfig.xml ファイルを保存します。
- 6. IBM Cognos サービスを再開します。

## 更新済み PowerCube の配布

PowerCube を再構築または更新したら、このキューブをさまざまな方法で実働環境 に配布できます。

更新済みの IBM Cognos Transformer PowerCube を配布するには、IBM Cognos Transformer のコピーおよび有効化の機能を使用します (推奨されている方法)。あるいは、自分で PowerCube をコピーして、pcactivate コマンド行ユーティリティーを使用することも可能です。

更新した Series 7 Transformer PowerCube を配布するには、まず PowerCube を コピーする必要があります。次に、pcactivate コマンド行ユーティリティーを使用 して、キューブを有効化します。

詳細については、IBM Cognos Analytics「*Transformer* ユーザー・ガイド」の「発 行済み PowerCube の新しいバージョンのコピーと有効化」を参照してください。

#### 手順

- 1. Transformer PowerCube を実働環境にコピーします。
  - 実働環境におけるコピー先のディレクトリー名は、PowerCubeの名前と同じであることが必要です。例えば、キューブ名が"production.mdc"である場合、コピー先のディレクトリーの名前は"production"でなければなりません。
  - コピー先のディレクトリーは、PowerCube と同じディレクトリーにあること が必要です。例えば、データ・ソース接続で PowerCube の場所として D:¥Cubes¥production.mdc が指定されている場合、コピー先ディレクトリー (production) は D:¥Cubes¥production でなければなりません。

例えば、PowerCube を D:¥Cubes¥production¥production.mdc にコピーします。

2. コマンド行プロンプトに、次の構文を使用して pcativate コマンドを入力しま す。

pcactivate cube_name.mdc
destination_location destination_location

複数のコピー先を入力することができます。

例えば、次のように入力します。

- pcactivate TheCube.mdc d:¥deploy¥cubes
- pcactivate production.mdc D:\u00e4Cubes
- pcactivate sales.mdc ¥¥server_1¥cubes ¥¥server_2¥cubes
- pcactivate "Production Cube.mdc" "install_location\webcontent\cubes"

注: cube_name パラメーターにパスを含めても、そのパスは削除され、無視され ます。

## データ・ソースの保護

IBM Cognos のセキュリティーやデータ・ソース特有のセキュリティーを使用して、データ・ソースを保護できます。

データ・ソースに対する IBM Cognos のセキュリティーによって、そのデータ・ソ ースにすでに存在するセキュリティー・ポリシーが上書きされることはありませ ん。例えば、IBM Cognos キューブの場合、セキュリティーはキューブ・レベルで 設定できます。Microsoft Analysis Server データ・ソースの場合、セキュリティー はキューブの役割を使用して設定できます。

データ・ソースによって、次の認証方法のうち1つ以上の方法を使用できます。

認証なし

IBM Cognos ソフトウェアで、サインオンの資格情報を入力せずにデータ・ソー スにログオンできます。

• IBM Cognos サービスの資格情報

IBM Cognos ソフトウェアでは、IBM Cognos サービスに指定されたログオン 情報を使用してデータ・ソースにログオンできます。ユーザーは個々のデータベ ースにサインオンする必要はありません。ただし、一般的に実働環境では、個々 のデータベースでサインオンを行うほうが適切だといえます。

• 外部ネームスペース

IBM Cognos ソフトウェアにより、指定した認証ネームスペースへの認証に使用 される資格情報を使用して、データ・ソースへのログオンが行われます。ネーム スペースがアクティブであること、ユーザーがデータ・ソースへのアクセスの前 にログオンしていること、およびネームスペースに使用される資格情報がデー タ・ソースへの認証と関連を持つことが必要です。

「ユーザー ID の変換」チェック・ボックスを選択した場合、Cognos Analytics サーバーは、データベース接続を確立する前に、外部ネームスペースによって返 されたドメイン名をユーザー ID から除去します。現在の実装は、以下のフォー マットでのユーザー ID 変換だけをサポートしています。

- domain name\user id 変換後のユーザー ID は user id となります
- user id@domain name 変換後のユーザー ID は user id となります

ドメイン名をユーザー ID の一部として保持する場合は、このチェック・ボック スがクリアされていることを確認してください。

すべてのデータ・ソースでは、"すべてのユーザー" グループや、個々のユーザー、 グループ、または役割に対して定義されたデータ・ソース・サインオンもサポート されます。 215 ページの『第 11 章 ユーザー、グループ、および役割』を参照し てください。データ・ソースでサインオンが要求されている場合に、このデータ・ ソースへのサインオンに対するアクセス権がないと、データ・ソースにアクセスす るたびに認証を求めるプロンプトが表示されます。

## 第 7 章 Query サービス管理

Query サービスでは、IBM Cognos Analytics 動的クエリー・モードがサポートさ れます。

詳細については、 117 ページの『第 6 章 データ・ソースと接続』を参照してくだ さい。

Cognos Administration を使用すると、次の Query サービス管理タスクを実行で きます。

- Query サービスのプロパティーの設定
- Query サービスのキャッシュの管理

また、Query サービスに対してログ記録監査レベルを設定できます。詳細について は、22 ページの『監査レポートのセットアップ』を参照してください。

IBM Cognos Administration にアクセスできる権限が必要です。詳細について は、 223 ページの『第 12 章 アクセス権と資格情報』を参照してください。ま た、Query サービスの管理権限も必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

## Query サービス・プロパティーの設定

Query サービスは、いくつかの環境、ログ記録、および調整構成の設定を使用します。

#### 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」の「ステータス」タブで、「動的キューブ」 を選択します。
- 「スコアカード」セクションで、「すべてのサーバー・グループ」ビューを選択 します。

ヒント:別のビューを選択するには、「スコアカード」セクションで、現在のビ ューのドロップダウン・メニューをクリックします。

- 3. 「システム」の下でサーバー・グループをクリックします。
- 4. 「**QueryService**  *dispatcher_name*」の「アクション」メニューから、「プロ パティーを設定」をクリックします。
- 5. 「設定」タブをクリックします。
- 6. 「値」列で、変更するプロパティーの値を入力または選択します。次のリストで は、Query サービスに対して設定できるプロパティーについて説明します。

詳細設定

「編集」をクリックして、詳細構成設定を指定します。エントリーは親から詳細設定を獲得するので、設定を編集すると獲得した詳細設定をオーバーライドします。詳細設定のタイプについては、「*IBM Cognos Analytics* 管理およびセキュリティー・ガイド」を参照してください。

動的キューブ構成

「編集」をクリックして、動的キューブを Query サービスに追加します。

Query サービス用のログ記録監査レベル

Query サービスで使用するログ記録のレベルを選択します。

クエリー実行トレースを有効化

クエリー実行トレース (実行ツリー・トレース) は、データ・ソースに 対して実行されたクエリーを示します。クエリー関連の問題をトラブル シューティングするには、トレースを使用します。

実行トレース・ログは、次の場所にあります。インストールの場所/logs/XQE/reportName/runtreeLog.xml

**IBM Cognos Dynamic Query Analyzer** を使用して、これらのログ・ファイルを表示して分析できます。詳細については、「*IBM Cognos Dynamic Query Analyzer User Guide*」を参照してください。

クエリー計画トレースを有効化

クエリー計画トレース (計画ツリー) は、クエリーの変換プロセスを取 り込みます。この情報を使用して、実行ツリーを作成するために実行さ れる意思決定や規則を詳細に理解できます。

クエリー計画トレースは、動的クエリー・モードを使用して実行される すべてのクエリーについて記録されます。計画トレース・ログは、次の 場所にあります。インストールの場所/logs/XQE/reportName/ plantreeLog.xml

計画トレース・ログは大きいため、この設定を有効にすると、クエリー のパフォーマンスに影響します。

ネイティブの SQL でのコメントの生成

データベースで SQL クエリーを生成するレポートを指定します。

- ファイルへのモデルの書き込み クエリーの実行時に Query サービスがモデルをファイルに書き込むか どうかを指定します。このファイルはトラブルシューティングにのみ使 用されます。このプロパティーは、IBM ソフトウェア・サポートの指示 がある場合にのみ変更してください。
  - このファイルは、次の場所にあります。インストールの場所 ¥logs¥model¥*packageName*.txt
- アイドル接続タイムアウト

再利用のために、アイドル・データ・ソース接続を維持する秒数を指定 する。

デフォルト設定は 300 です。有効なエントリーは 0~65535 です。

設定値を低くすると、接続数は減りますがパフォーマンスは低下しま す。設定値を高くすると、パフォーマンスが向上する可能性はあります が、データ・ソースへの接続数が増えます。

サービス開始時に動的キューブを開始しない

Query サービスの開始時に動的キューブが開始しないようにします。

動的キューブ管理コマンドのタイムアウト

リソースを動的キューブ管理操作に使用できるようになるまでの待機時 間の長さを指定します。この操作は、待機時間を超過した場合はキャン セルされます。

ヒント: この値をゼロに設定すると、コマンドの待機時間が無制限になります。

結果セットのキャッシュを考慮するまでの最小クエリー実行時間 結果をキャッシュするまでのクエリーを待機する最小時間を指定しま す。

この設定は、動的キューブにのみ適用されます。

- Query サービスの初期 JVM ヒープ・サイズ Java 仮想マシン (JVM) ヒープの初期サイズを MB 単位で指定しま す。
- Query サービスの JVM ヒープ・サイズの上限

JVM ヒープの最大サイズを MB 単位で指定します。

初期 JVM ナーサリー・サイズ

JVM が新規オブジェクトに割り振る初期サイズを MB 単位で指定しま す。ナーサリー・サイズは自動的に計算されます。IBM Cognos カスタ マー・サポートで変更が推奨されない限り、設定を変更する必要はあり ません。

JVM ナーサリー・サイズ制限

JVM が新規オブジェクトに割り振る最大サイズを MB 単位で指定しま す。ナーサリー・サイズは自動的に計算されます。IBM Cognos カスタ マー・サポートで変更が推奨されない限り、設定を変更する必要はあり ません。

JVM ガーベッジ・コレクション・ポリシー

JVM が使用するガーベッジ・コレクション・ポリシーを指定します。 IBM Cognos カスタマー・サポートで変更が推奨されない限り、設定を 変更する必要はありません。

- クエリー・サービスの追加の JVM 引数 Java 仮想マシン (JVM) を制御する、他の引数を指定します。 JVM に よって引数が異なる可能性があります。
- 冗長ログへのガーベッジ・コレクション・サイクルの出力数 冗長ガーベッジ・コレクションに組み込まれるガーベッジ・コレクショ ン・サイクルの数を指定します。これにより、ログ・ファイルの最大サ イズを制御します。設定値を増やし、さらに多くのログを収集する場合 は、IBM Cognos カスタマー・サポートにご相談ください。

JVM 冗長ガーベッジ・コレクション・ログを無効にする JVM 冗長ガーベッジ・コレクション・ログを制御します。IBM Cognos カスタマー・サポートで特殊な変更が推奨されない限り、設定を変更す る必要はありません。

7. Query サービスを始動または再始動します。

#### タスクの結果

Query サービス・プロパティーの概要が、「設定 - Query サービス」ウィンドウ に表示されます。

## Query サービスのキャッシュ管理

キャッシュでは、以前に実行した結果が再利用されるため、可能な場合は、データ ベースへの新しいクエリーが不要になります。

キャッシュによってパフォーマンスが向上するのは、小規模な変更でレポートを再 実行する場合、同一キューブ内で複数の分析を実行する場合、および大規模なレポ ートに対してマスター詳細要求を繰り返し実行する場合です。キャッシュでは、要 求を実行するユーザーのセキュリティー権限が維持されます。

キャッシュが機能する方法の詳細については、IBM Web サイトの Cognos Proven Practices (www.ibm.com/developerworks/data/library/cognos/ cognosprovenpractices.html) にある「*IBM Cognos 10 Dynamic Query Cookbook*」 を参照してください。

## キャッシュ内の全内容のクリア

キャッシュ内に保存されている古いデータを使用しないように、キャッシュをクリ アできます。

データ・ソース・メタデータの変更頻度が低い場合、またはスケジュールされた自動キャッシュ・クリア以外にキャッシュをクリアする必要がある場合は、キャッシ ュを手動でクリアできます。次に説明する手順でキャッシュをクリアすると、キャ ッシュ内の全内容がクリアされます。

特定のデータ・ソース、カタログ、またはキューブに関するキャッシュをクリアす る場合は、Query サービス管理タスクを作成します。また、データ・ソース・メタ データが定期的に変更される場合も、Query サービス管理タスクを作成できます。 例えば、1 時間ごと、毎日、または毎週、キャッシュをクリアするようにスケジュ ールを設定できます。詳細については、 187 ページの『Query サービス管理タス クの作成とスケジュール』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」の「設定」 タブで、「**Query** サービス・キャッシュ」をクリックします。
- 2. キャッシュをクリアするサーバー・グループを選択します。
- 3. 「キャッシュをクリア」をクリックします。

「キャッシュをクリア」コマンドのステータスが表示されます。

キャッシュが 1 つ以上の保留中のレポートまたはクエリーで使用されている場 合、このコマンドによって、キャッシュは「古い」と内部でマークされ、レポー トまたはクエリーでの使用が終了すると同時に自動的にクリアされます。

4. 「閉じる」をクリックします。

## キャッシュ使用状況の分析

特定のキューブ・キャッシュの状態 (キューブの異なるレベルにおけるキャッシュ・ヒットとキャッシュ・ミスの数) を示すタイム・スタンプ付き XML ファイル を作成して、キャッシュの使用状況を分析できます。

これは、任意の時点でキャッシュ内にあるキューブを検出するのに役立ちます。フ ァイルには、現在キャッシュされているキューブのデータ・ソース名、カタログ 名、およびキューブ名のリストが含まれます。このリストは、キャッシュをいつク リアするかを判断するときに役立ちます。

レポートは、 c8_location/logs ディレクトリーに格納されます。ファイル名の形 式は、"SALDump_プレフィックス_データ・ソース名_カテゴリー名_キューブ名_タ イム・スタンプ.xml"です。

また、キャッシュの状態を自動的に書き込むようにスケジュールすることもできま す。詳細については、『Query サービス管理タスクの作成とスケジュール』を参照 してください。

#### 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」の「設定」 タブで、「**Query** サービス・キャッシュ」をクリックします。
- 2. キャッシュをクリアするサーバー・グループを選択します。
- 3. 「キャッシュ状態の書き込み」をクリックします。

「キャッシュ状態の書き込み」コマンドのステータスが表示されます。

4. 「閉じる」をクリックします。

#### Query サービス管理タスクの作成とスケジュール

- 管理者は、データ・ソースの Query サービス・タスクを作成してスケジュールで きます。 Query サービス・タスクは、1 つ以上のキューブに対して、そのキャッ シュをクリア、書き込み、または更新して制御します。動的キューブの場合、キュ ーブを開始、停止、または再開するタイミング、およびセキュリティーを更新する タイミングをスケジュールすることもできます。
- キャッシュ・クリアをスケジュールしてキャッシュをクリアすることにより、特定のデータ・ソースまたはキューブによるメモリーの使用量を制御する
- タイム・スタンプ付きレポートの生成をスケジュールする (キャッシュの状態を 書き込み)。

また、キャッシュ全体を手動でクリアして、キャッシュ状態をレポートに手動で書 き込むこともできます。

詳細については、 186 ページの『キャッシュ内の全内容のクリア』および『キャッ シュ使用状況の分析』を参照してください。

Query サービス管理タスクを作成して、必要に応じて実行できます。Query サービ ス管理タスクは、スケジュールした日時に実行 293 ページの『第 18 章 スケジュ ール管理』したり、データベースの更新や E メールなどのトリガーに基づいて実行 301 ページの『トリガー駆動型エントリー・スケジュール機能』したりできます。 さらに、Query サービス管理タスクをジョブの一部としてスケジュール 297 ペー ジの『複数のエントリーをスケジュールするジョブの使用』できます。また、 Query サービス管理タスクの実行履歴を表示 288 ページの『エントリーの実行履 歴の表示』することもできます。

#### 始める前に

動的キューブのタスクを作成してスケジュールする場合、ソース・キューブと仮想 キューブとでタスクの開始および停止を別々にスケジュールする必要があります。 動的キューブのタスクを開始および停止するタイミングをスケジュールする際に は、他にも考慮すべき要素があります。

- 仮想キューブの一部であるソース・キューブが最初に開始されるようにスケジュ ールしなければなりません。
- ソース・キューブが仮想キューブの一部である場合、仮想キューブはソース・キューブより前に停止されるようにスケジュールしなければなりません。
- 仮想キューブの開始をスケジュールするよりも十分前もって、ソース・キューブが開始されるようにする必要があります。仮想キューブとソース・キューブを停止するタイミングについても、同じように考慮します。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「コンテンツ管理」をクリ ックします。
- 2. 「新規 Ouery サービス管理タスク」ボタン 1 をクリックします。
- 3. 名前、説明、画面のヒント、および場所を指定します。「次へ」をクリックしま す。
- 4. 「キャッシュをクリア」または「キャッシュ状態の書き込み」のいずれかの操作 を選択します。
- 5. Oracle Essbase および SAP BW データ・ソースの場合は、データ・ソース、 カタログ、およびキューブを入力します。「次へ」をクリックします。

すべてを指定する場合は、アスタリスク (*) をワイルドカードとして入力します。

- ディメンションを使用してモデル化されたリレーショナル (DMR) データ・ソ ースの場合は、パッケージ名またはデータ・ソースの名前のどちらかを入力しま す。データ・ソース名を指定して「キャッシュをクリア」処理を選択すると、そ のデータ・ソースに関連するすべてのパッケージのキャッシュがクリアされま す。
- 動的キューブ・タスクの場合は、「サーバー・グループ」、「ディスパッチャー」、および「キューブ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 8. 次のいずれかを実行します。
  - タスクをすぐに実行する場合、または後で実行する場合は、「保存して1回 実行」、「終了」の順にクリックします。実行する日時を指定して、「実 行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的にタスクを実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日を選択します。「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。

注: スケジュールのステータスを確認するには、 286 ページの『スケジュー ルされた処理の管理』を参照してください。

 スケジュールや実行を行わずにタスクを保存するには、「保存のみ」、「終 了」の順にクリックします。

#### 次のタスク

関連するキューブを Query サービスから削除する場合は、スケジュールされたタ スクも忘れずに削除しなければなりません。そうしないと、スケジュールされたタ スクが存在しないキューブを指すことになってしまいます。

## Query サービスのコマンド行 API

IBM Cognos Administration とコマンド行 API を使用して、キャッシュを手動または自動で管理できます。

このコマンド行ユーティリティーは、インストールの場所¥bin ディレクトリーにあ り、オペレーティング・システムに応じて QueryServiceAdminTask.sh または QueryServiceAdminTask.bat という名前です。

コマンド・シェルに QueryServiceAdminTask -help と入力すると、ユーティリティ ーの使用方法の手順が表示されます。

コマンド行ユーティリティーは、即時タスク要求を行い、ジョブ・スケジューラー および Monitoring サービスは使用しません。そのため、コマンドが影響を与える のは、実行されている IBM Cognos Analytics サーバーのみです。

# 第8章 データのバックアップ

IBM Cognos ソフトウェアのデータと設定、および Framework Manager のプロ ジェクトとモデルは、定期的にバックアップすることを推奨します。バックアップ を取ることで、コンピューターに障害が発生したときや盗難にあっても、データが 失われるのを防ぐことができます。コンピューターが正常に戻ってからデータを復 元できます。

バックアップはシステム・リソースを消耗するため、データベースのバックアップ 中に IBM Cognos ソフトウェアが実行されていると、パフォーマンスが低下しま す。

暗号化と署名鍵の設定の場所をデフォルトの場所から変更した場合、これらの設定 が収められたディレクトリーも必ずバックアップしてください。また、鍵ストアが パスワードで保護されている場合は、パスワードも控えておいてください。

バックアップしたデータは、同じコンピューターに復元することを前提としていま す。別のコンピューターにデータを移動する方法については、 303 ページの『第 19 章 配布』を参照してください。

ソフトウェアをアップグレードする前にデータをバックアップする方法について は、IBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」のアップグレードに 関するトピックを参照してください。

ソース管理システムで Framework Manager プロジェクトを保存している場合、プロジェクトをバックアップする必要はありません。

IBM Cognos Configuration や Content Store の情報をカスタマイズしてある場合 は、これらの情報も必ず正しくバックアップされるように確認してください。

## Content Store をバックアップする

Content Store をバックアップできます。

#### 手順

1. Content Store をバックアップします。

詳細については、使用しているデータベースのドキュメントを参照してください。

2. "インストールの場所/configuration"ディレクトリーをバックアップ場所にコピーします。

このディレクトリーには設定が保存されています。

#### タスクの結果

設定を復元する必要が生じたら、バックアップしたディレクトリーを正しい場所に コピーします。 Content Store の復元方法については、使用しているデータベースのドキュメント を参照してください。

# **Framework Manager** のプロジェクトとモデルのバックアップ

Framework Manager のプロジェクトとモデルのバックアップができます。

## 手順

Framework Manager のプロジェクト・ディレクトリーとそのサブディレクトリー をバックアップ場所にコピーする。 デフォルトでは、プロジェクトとモデルの場所は"My Documents/My Projects"で

す。

## タスクの結果

Framework Manager プロジェクトとモデルを復元する必要が生じたら、バックア ップしたディレクトリーを正しい場所にコピーします。

# 第9章 IBM Cognos コンテンツ・アーカイブ

アーカイブしたコンテンツを外部リポジトリーに保管することにより、規制コンプ ライアンス要件に準拠できます。また、Content Store にあるコンテンツのサイズ を削減して IBM Cognos 製品のスケーラビリティーとパフォーマンスを高めること もできます。

このソフトウェアは、IBM FileNet Content Manager を IBM FileNet CMIS 外部 リポジトリーとともにサポートします。IBM Filenet CMIS バージョン 1 ソフトウ ェアが既にインストールされている場合は、このソフトウェアを Fix Pack バージ ョン 2 でアップグレードする必要があります。ご使用のファイル・システムを使用 するようコンテンツ・アーカイブを構成することもできます。

管理者は、外部リポジトリーへのデータ・ソース接続を作成して、Content Store からリポジトリーへコンテンツを移動できるようにします。ユーザーはその後、外 部リポジトリーにあるアーカイブ・コンテンツを表示できます。最新のコンテンツ とアーカイブされたコンテンツの検索結果が見ることができるので、ユーザーは現 行データと履歴データの間で重要な比較を行えます。この効果的なメカニズムによ り、お客様の会社は、シームレスなユーザー・エクスペリエンスを提供しながら企 業および政府の要件を満たせます。

外部リポジトリーでアーカイブされたコンテンツは、IBM Cognos 環境では管理されません。例えば、IBM Cognos Analytics でレポートを削除しても、外部リポジトリー内にアーカイブされた出力は削除されません。

コンテンツをアーカイブするための、2 つのワークフロー・シナリオがあります。 最初のワークフローは、IBM Cognos コンテンツ・アーカイブ・ソフトウェアのイ ンストール後に、管理者がパッケージとフォルダーをアーカイブするものです。 2 番目のワークフローは、管理者が、新しいパッケージとフォルダーのリポジトリー 接続を作成するものです。

## ワークフロー 1: Connectivity Software のインストール後にコンテ ンツをアーカイブする

管理者は、IBM Cognos Analytics のインストールまたはアップグレード後に、特 定のパッケージとフォルダーまたはすべてのパッケージとフォルダーの保存済みの レポート出力をアーカイブすることができます。すべてのコンテンツは現在 Content Store に存在するので、このワークフローは 1 回しか行う必要はありませ ん。

- 外部リポジトリーへのデータ・ソース接続を作成する。
- アーカイブする必要があるパッケージとフォルダーのリポジトリー接続を選択する。
- コンテンツ・アーカイブ保守タスクを作成して実行し、外部リポジトリーにアー カイブするフォルダーとパッケージを選択する。

一度パッケージとフォルダーのリポジトリー接続を設定すれば、すべての新規レポ ート出力は自動的にアーカイブされます。つまり、コンテンツ・アーカイブ保守タ スクを再度行う必要はありません。

## ワークフロー **2:** 新しいパッケージとフォルダーのリポジトリー接続 を作成する

管理者は、これらのタスクを行って、新しいパッケージとフォルダーのリポジトリ ー接続を作成することができます。

- 外部リポジトリーへのデータ・ソース接続を作成する。
- アーカイブする必要があるパッケージとフォルダーのリポジトリー接続を選択する。

#### コンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスクの使用

コンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスクは、選択し設定したフォルダーと パッケージにあるレポート・バージョンへの参照を作成します。フォルダーとパッ ケージを選択してその中のコンテンツにマークを付け、外部リポジトリーにアーカ イブされるまで Content Store に残るようにすることができます。

重要な点ですが、このタスクは、コンテンツを Content Store から外部リポジトリ ーに移動するものではないことにご注意ください。最初に、パッケージとフォルダ ーのリポジトリー接続を選択しなければなりません。フォルダーとパッケージにあ る、アーカイブするマークを付けられていないレポート・バージョンは、Content Store から削除できます。

ー度コンテンツにマークを付ければ、コンテンツ・アーカイブ・タスクは完了で す。 Content Manager のバックグラウンド・タスクが、マークの付いた項目を見 つけて、外部リポジトリーにコピーして保存します。

外部リポジトリーにアーカイブするものとして構成されているフォルダーまたはパ ッケージにコンテンツをインポートしても、インポートされたコンテンツが自動的 にリポジトリーに移動されてアーカイブされるわけではありません。管理者は、こ のフォルダーまたはパッケージにコンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスク を実行して、インポートされたコンテンツをアーカイブしなければなりません。

## バックグラウンド・タスク

Content Store から外部リポジトリーにコンテンツを移動するために使用されるバ ックグラウンド XML タスクは、archiveTask.xml および deleteTask.xml です。 archiveTask.xml ファイルは、マークの付いたコンテンツを外部リポジトリーに移動 します。このファイルを使用して、スレッド実行時間を設定し、選択したフォーマ ットの出力をアーカイブすることもできます。 deleteTask.xml ファイルは、マーク の付いたバージョンのオブジェクトをキューから取り出し削除する構成ファイルで す。このファイルは変更しないでください。

#### アーカイブ前のコンテンツ **ID** の保持

必要に応じて、レポート出力をアーカイブする前に、コンテンツ ID を保持できます。

インポート配布を実行しコンテンツをターゲット環境に移動する際、デフォルトで は、Content Store にあるオブジェクトのコンテンツ ID は削除されて新しい ID に置き換えられます。しかし、例えば、レポート出力を外部レポート・リポジトリ ーに移動する場合のように、コンテンツ ID を保持しなければならない場合があり ます。

#### コンテンツ・アーカイブの構成

コンテンツ・アーカイブのための環境を構成する必要があります。構成の変更が有 効になるためには、IBM Cognos サービスを停止および開始する必要があります。

# ファイル・システム・リポジトリーのファイルの場所の作成

レポートまたはレポート仕様をアーカイブして IBM Cognos コンテンツ・アーカイ ブのファイル・システム・リポジトリーに入れるには、ローカル・ドライブ上また はネットワーク共有上のファイルの場所を示す別名ルートを作成する必要がありま す。

#### 始める前に

管理者であること、およびファイルの場所にアクセスできることが必要です。 Content Manager およびアプリケーション層コンポーネントが、ファイル URI を 使用してこの場所にアクセスできなければなりません。

#### 手順

- 1. IBM Cognos サービスが実行中の場合、それを停止します。
- 2. IBM Cognos Configuration を起動します。
- 3. 「操作」>「グローバル設定を編集」をクリックします。
- 「一般」タブで、「別名ルート」を選択し、値フィールドの中をクリックして、 「編集」ボタンをクリックします。「値 - 別名ルート (Value - Alias Roots)」ダイアログ・ボックスが表示されたら、「追加」をクリックします。
- 5. 「別名ルート名」列に、ファイル・システム・リポジトリーのための一意の名前 を入力します。

注: 作成できる別名の数に制限はありません。

- 6. ファイル・システムの場所へのパスを入力します。ここで、<ファイル・システ ムのパス> は既存のファイル場所への絶対パスです。
  - Windows では、windowsURI 列で、file:/// に続けてローカル・パスを 入力します (例: file:///c:/<ファイル・システムのパス>)。または file:// に続けてサーバー名と共有パスを入力します (例: file://server/share)。
  - UNIX または Linux では、unixURI 列で、file:/// に続けてローカル・パ スを入力します (例: file:///<ファイル・システムのパス>)。

注: 相対パス (file:///../<ファイル・システムのパス> など) はサポートされ ません。

分散インストール環境では、Content Manager およびアプリケーション層コン ポーネントの両方のコンピューターに、ファイルの場所にアクセスする権限が必 要です。分散インストール環境でのみ、両方の URI を使用してください。別名 ルートにある UNIX URI および Windows URI は、ファイル・システム上の 同じ場所を示している必要があります。

- 7. 「**OK**」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再開します。これには数分かかる場合があります。

## IBM FileNet Content Manager へのカスタム・クラス定義とプロ パティーのインポート

IBM Cognos Content Archival を使用するには、カスタム・クラスおよびプロパティー・ファイルのセットを IBM FileNet Content Manager にインポートする必要 があります。

カスタム・クラス定義とプロパティーには、FileNet 固有のメタデータが含まれてい ます。カスタム・クラスおよびプロパティー・ファイルは、いつでもインストール 可能です。

#### 手順

- FileNet アーカイブがセットアップされている場合、インストールの場 所/configuration/repository/filenet/upgrade/ ディレクトリーに移動しま す。
- FileNet アーカイブがまだセットアップされていない場合、インストールの場所/configuration/repository/filenet/new/ディレクトリーに移動します。
- 3. CMECMIntegrationObjects_CEExport._xxx.xml ファイルを FileNet サーバー上 のローカル・フォルダーにコピーします。
- 4. FileNet Enterprise Manager Administration tool を開き、FileNet 外部リポジ トリーのドメインに接続します。
- 対象のオブジェクト・ストアを選択し、「すべてのアイテムのインポート (Import All Items)」をクリックして、そのオブジェクト・ストアに定義をイン ポートします。
- 「インポートのオプション」ウィンドウで「マニフェスト・ファイルのインポート (Import Manifest File)」をクリックして、 CMECMIntegrationObjects_CEExport._xxx.xml ファイルがある場所を参照します。
- 7. CMECMIntegrationObjects_CEExport_Manifest.xml ファイルを選択し、「インポ ート」をクリックします。
- 8. FileNet Content Engine および FileNet CMIS アプリケーションを再始動して、使用する環境に変更を適用します。

注: すべての FileNet ノードで変更が更新されるまで、長い時間がかかることがあります。

# IBM Content Manager 8 へのカスタム・クラス定義とプロパティーのインポート

IBM Cognos Content Archival を IBM Content Manager 8 で使用するには、カ スタム・クラスとプロパティー・ファイルのセットをインポートする必要がありま す。また、IBM Cognos フォルダー・タイプで CMIS 設定ファイルを更新すること も必要です。

カスタム・クラス定義およびプロパティーには、IBM Content Manager 8 に固有 のメタデータが含まれています。カスタム・クラスおよびプロパティー・ファイル は、いつでもインストール可能です。

インストール・プロセスの間にリソース・マネージャーが定義されていないため、 インポート・プロセスの間に競合するエラー・メッセージが表示されます。

#### 始める前に

IBM Content Manager 8 を、IBM Content Manager 8 CMIS バージョン 1.1 外部リポジトリーと共にインストールしておく必要があります。

#### 手順

- 1. Content Manager 8 の「システム管理クライアント」を開きます。
- 3. 「XML オプションのインポート」ウィンドウの「インポートするファイル」 セクションから、以下を行います。
  - 「データ・モデル・ファイル」フィールドで、「参照」をクリックして、オブジェクトのインポート元となる CMECMIntegrationTypes_RMImport_Manifest.xsd ファイルを選択します。
  - 「管理オブジェクト・ファイル」フィールドで、「参照」をクリックし、 CMECMIntegrationTypes_RMImport_MimeTypes.xml ファイルを選択して、管 理オブジェクト・ファイルをインポートします。

デフォルトの場所は インストールの場所/configuration/repository/ contentManager8/New ディレクトリーです。

- 4. 競合を確認するには、「XML オプションのインポート」ウィンドウの「処理 オプション」の下で、「対話式に処理」を選択します。
- 5. 「インポート」をクリックして、インポート・プロセスを開始します。
  - a. 「プリプロセッサーの結果のインポート」ウィンドウから、「アイテム・ タイプ」を展開し、競合を示すアイテム・タイプをダブルクリックしま す。
  - b. 「インポート定義およびターゲット定義の詳細」ウィンドウの「結果のタ ーゲット」列で、Content Manager 8 のインストール時に作成された「リ ソース・マネージャー」および「コレクション」の名前を選択し、「組み 込み」をクリックします。
  - c. 競合を示すアイテム・タイプごとに手順 a および b を繰り返します。
- 6. すべての競合を解決した後で、「プリプロセッサー結果のインポート」ウィン ドウから「続行」をクリックします。

- 7. 「インポートの選択の確認」ウィンドウから、「インポート」をクリックしま す。
- 8. インポートの完了後、「**OK**」をクリックします。
- 9. CMIS 構成ファイルを更新して IBM Cognos のフォルダー・タイプを検出す るには、CMIS for Content Manager 8 構成プログラムを実行して、プロファ イルを作成します。
- 10. IBM CMIS for Content Manager 設定プロファイル・フォルダー内の cmpathservice.properties ファイルを開きます。

UNIX の場合、デフォルト・ファイル・パスは /opt/IBM/CM_CMIS/profiles/ profile1 です。

Windows の場合、デフォルト・ファイル・パスは C:¥Program Files¥IBM¥CM CMIS¥profiles¥profile1 です。

- a. folderTypes の行を見つけます。
- b. IBM Cognos のフォルダー・タイプ COGNOSREPORT および REPORTVERSION を大文字で追加します。各フォルダー・タイプはコン マで区切ります。

例えば、次のようになります。 folderTypes = ClbFolder,COGNOSSREPORT,REPORTVERSION

- c. ファイルを保存して閉じます。
- 11. CMIS for Content Manager 8 設定プログラムを実行し、CMIS 設定ファイル を自動的に再配布するオプションを選択します。

注: CMIS の手動による配布について詳しくは、IBM CMIS for Content Manager の手動デプロイ (http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/cmgmt/ v8r4m0/topic/com.ibm.installingcmcmis.doc/cmsde001.htm) を参照してくだ さい。

 WebSphere Application Server Liberty Profile 管理コンソールから、「CMIS for Content Manager アプリケーション」を再始動します。

## アーカイブ処理を実行できる時刻の指定

ピーク時におけるシステム・パフォーマンスを高水準に保つため、ブラックアウト 期間を構成して、アーカイブまたは削除のタスクを実行する時刻を指定できます。

ブラックアウト期間とは、データの移動が認められない一時的な期間のことです。 デフォルトでは、ソフトウェアのインストール時にはブラックアウト期間は定義さ れません。

#### 手順

- インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/cm/tasks/manager ディレクトリー に移動します。
- 2. XML テキスト・エディターを使用して、tasksManager.xml ファイルを開きま す。
- 例えば、午前 8:00 から午後 5:00 までの週間ブラックアウト期間を火曜日から 金曜日にかけて指定する場合、次の <blackoutPeriods> 要素を backgroundTasksManager 要素の子要素として追加します。

- start time = <hour>08</hour>
- stop time = <hour>17</hour>
- days =

<day>Tuesday</day> <day>Wednesday</day> <day>Thursday</day> <day>Friday</day>

- 必要な場合には、アーカイブおよび削除のプロセスで使用できるスレッド数を減らします。スレッドの最大数は7です。
- 5. ファイルを保存して閉じます。
- 6. Content Manager サービスでバックグラウンド処理を再開します。

## スレッド実行時間の指定

スレッドを使用して、オペレーティング・システムの処理時間をスケジュールに入れることができます。

アーカイブおよび削除のバックグラウンド・タスクは、スレッドを使用してコンテ ンツを移動します。スレッドとは、オペレーティング・システムによってスケジュ ールに入れられる処理時間の単位のことです。

#### 手順

- インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/cm/tasks/config ディレクトリーに 移動します。
- 2. XML テキスト・エディターを使用して、archiveTask.xml ファイルを開きま す。
- 例えば、午前 0:00 から午前 8:00 まで 3 つのスレッドを実行し、午前 8:00 か ら午後 5:00 まで 1 つのスレッドを実行し、午後 5:00 から午前 0:00 には何も スレッドを実行せず、すべてのスレッドを 1 週間毎日実行するように構成する には、次の <executionPeriods> XML 要素を backgroundTask 要素の子要素と して追加します。

```
<executionPeriods>
<executionPeriod>
 <threads>3</threads>
 <startTime>
 <hour>00</hour>
  <minute>00</minute>
 </startTime>
 <stopTime>
 <hour>08</hour>
 <minute>00</minute>
 </stopTime>
 <days>
 <day>Monday</day>
  <day>Tuesday</day>
  <day>Wednesday</day>
 <day>Thursday</day>
 <day>Friday</day>
  <day>Saturday</day>
  <day>Sunday</day>
 </days>
</executionPeriod>
<executionPeriod>
 <startTime>
  <hour>08</hour>
```

<minute>00</minute> </startTime> <stopTime> <hour>17</hour> <minute>00</minute> </stopTime> <days> <day>Monday</day> <day>Tuesday</day> <day>Wednesday</day> <day>Thursday</day> <day>Friday</day> <day>Saturday</day> <day>Sunday</day> </days> </executionPeriod> </executionPeriods>

4. ファイルを保存して閉じます。

## レポート出力に関する選択済み形式のアーカイブ

アーカイブを特定の出力形式に限定することができます。デフォルトでは、任意の 形式の出力 (PDF、XML、HTML、Excel など) がアーカイブされます。

リポジトリーに対するアーカイブを特定の出力形式のものだけに限定できます。

#### 手順

- インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/cm/tasks/config ディレクトリーに 移動します。
- 2. XML テキスト・エディターを使用して、archiveTask.xml ファイルを開きま す。
- 3. 例えば、PDF レポート出力バージョンだけのアーカイブを定義するには、以下 に記されている <outputFormats> XML 要素を、runOptions XML 要素の子要 素として追加します。

<outputFormats>
 <outputFormat>PDF</outputFormat>
 </outputFormats>

既存の outputFormats サンプル要素を使用して、リストを変更し、アーカイブ する出力形式を指定できます。

例えば、グラフィックを伴う HTML などの、複数のファイル・レポート出力を 選択的にアーカイブすることはできません。

ファイルを保存して閉じます。

## アーカイブしないレポート仕様の指定方法

デフォルトでは、レポート仕様出力はアーカイブされます。レポート仕様には、レ ポートにおけるデータの生成方法が記述されます。

レポート仕様のアーカイブをオフにするには、2 つのファイル (CM.xml ファイル と、IBM FileNet Content Manager リポジトリーまたは IBM Content Manager 8 リポジトリーのどちらにコンテンツをアーカイブするかに応じて CM_FILENET.xml ファイルまたは CM CM8.xml ファイルのどちらか) を変更する必要があります。

## 手順

- インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/repositories/config ディレクトリーに移動します。
- 2. XML テキスト・エディターを使用して、CM.xml ファイルを開きます。
- 以下の行をコメント化するか、削除します。<property name="specifications" metadataPropertyName="specification" useTempFile="true"
- 4. ファイルを保存して閉じます。
- 5. インストールの場所/webapps/p2pd/WEB-INF/repositories/config ディレクトリ ーに移動します。
- 6. 以下のいずれかの手順を行います。
  - コンテンツを FileNet にアーカイブする場合は、テキスト・エディターで CM.FILENET.xml という名前のファイルを開きます。
  - コンテンツを IBM Content Manager 8 にアーカイブする場合は、テキスト・エディターで CM.xml という名前のファイルを開きます。
- 7. 以下の要素をコメント化するか、削除します。

注: CM.xml ファイルでは、objectType name の値は <objectType name="\$t!-2_VERSIONSPECIFICATIONv-1"> です。

8. Content Manager サービスでバックグラウンド処理を再開します。詳細につい ては、*IBM Cognos Analytics*「管理およびセキュリティー・ガイド」を参照して ください。

## コンテンツ・アーカイブの管理

コンテンツ・アーカイブの管理には、アーカイブ・タスクの作成やアーカイブ場所 の指定などが含まれます。

レポート出力は、外部のレポート・リポジトリーにアーカイブして長期保管できま す。詳細については、 142 ページの『外部リポジトリー・データ・ソース接続』を 参照してください。

## レポート出力用の外部リポジトリーの指定

コンテンツをリポジトリーにアーカイブできるようにするためには、フォルダーま たはパッケージ・レベルでリポジトリーを指定しなければなりません。

リポジトリーを指定するには、リポジトリーへの接続が存在し、リポジトリーを選 択するための十分な権限がなければなりません。「外部リポジトリー」機能の保護 された特性「リポジトリー接続の管理」の実行権限がなければなりません。接続を 指定すると、任意の新規出力レポートのバージョンが自動的に外部リポジトリーに コピーされます。

外部リポジトリーへのデータ・ソース接続が既に指定されている場合は、別のリポ ジトリーを選択し、指定を上書きすることができます。パッケージまたはフォルダ ーのコンテンツのアーカイブが必要なくなった場合は、「クリア」オプションを使 用して接続への参照を削除できます。次に例を示します。サブフォルダーは、デフ ォルトで、親フォルダーからリポジトリー接続を取得します。しかし、サブフォル ダーの内容をアーカイブしない、または親フォルダー用に指定したリポジトリーに サブフォルダーの内容をアーカイブしないようにすることもできます。サブフォル ダーの内容がアーカイブされないようにするには、「クリア」オプションを使用し ます。親フォルダーとは異なるリポジトリーを使用するには、サブフォルダー用の 接続を指定します。

リポジトリーが存在しリポジトリー接続を作成する十分な権限がある場合、フォル ダーまたはパッケージの外部リポジトリーへのデータ・ソース接続も作成できま す。詳細については、 142 ページの『外部リポジトリー・データ・ソース接続』を 参照してください。

#### 手順

- 1. フォルダーまたはパッケージを選択し、「プロパティー設定」アイコンをクリッ クします。
- 2. 「全般」タブで、「レポートのリポジトリー」セクションに移動します。
- 3. データ・ソースを指定する、または既存データ・ソースを変更するには、「親エ ントリーから取得したレポート・リポジトリーを上書き」を選択します。
- 4. 「接続」の下の、「接続を選択」をクリックします。
- 5. 「データ・ソースを選択 (ナビゲート)」ウィンドウで、データ・ソースを選択 します。

## コンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスクの作成

コンテンツ・アーカイブ・コンテンツ保守タスクを作成して、フォルダーとパッケ ージのレポート出力をアーカイブのために外部リポジトリーに移動します。

#### このタスクについて

コンテンツ・アーカイブ・タスクを作成およびスケジュールして、フォルダーおよ びパッケージにある、出力レポート・バージョンにアーカイブのためのマークを付 けることができます。アーカイブのためのマークを付けられたコンテンツは、外部 リポジトリーにコピーされて保存されます。

アーカイブのためのマークを付けられたフォルダーとパッケージは、外部リポジト リーへの移動と保存が成功するまで、Content Store から削除できません。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Administration を起動します。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 3. ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」アイコンをクリックし、「コンテ ンツのアーカイブ」をクリックします。
- コンテンツ・アーカイブ・タスクの名前を入力し、オプションで、説明や画面のヒントを入力します。「次へ」をクリックします。
- 5. 記録レベルを選択します。
- 6. 「追加」をクリックします。
- アーカイブのマークを付けるフォルダー、パッケージ、ネームスペース、また はネームスペース・フォルダーを選択して、「追加」をクリックします。
- 8. 「**OK**」をクリックします。
- 9. 「次へ」をクリックします。
- 10. 次のいずれかを選択します。
  - すぐに、または後で、1回のみ実行する場合は、「保存して1回実行」を クリックします。「終了」をクリックし、実行の日時を指定して、「実行」 をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」 をクリックします。「終了」をクリックして、実行の頻度、開始日、および 終了日を選択します。「OK」をクリックします。
  - スケジュールまたは実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終了」の順にクリックします。

# 保存規則更新保守タスクの作成

保存規則更新保守タスクを作成して、現在 Content Store に保持されている出力レ ポート・バージョン、文書コンテンツ・バージョン、およびレポート履歴の数をグ ローバルに変更します。

### このタスクについて

管理者は保存規則更新タスクを使用して、Content Store に保持するレポート、ク エリー、分析および文書オブジェクトの数を指定します。履歴および出力バージョ ンを Content Store にどれほどの期間保持するか指定できます。指定した日付より も古いものはすべて Content Store から削除されます。この更新タスクは、出力バ ージョンが定義された保存規則に従っていない場合、Content Store から削除する ものとして出力バージョンにマークを付けます。 Content Manager のバックグラ ウンド・タスクが、マークの付いたオブジェクトを Content Store から削除しま す。 Content Store の内容を削減するには、Content Store には最大でも 2 つのバ ージョンだけを保持し、それより古いバージョンは外部リポジトリーにアーカイブ することを考慮してください。

重要: このタスクを実行するのは、コンテンツ・アーカイブ・タスクを作成し実行し てからにしてください。その前にこのタスクを実行した場合、アーカイブのための マークを付けられていないコンテンツは、Content Store から永久に削除されてし まいます。

### 手順

- 1. IBM Cognos Administration を起動します。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。

- 3. ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」アイコンをクリックし、「保存規則 の更新」をクリックします。
- 4. 保存規則更新タスクの名前を入力し、オプションで、説明や画面のヒントを入力 します。「次へ」をクリックします。
- 5. 含めるフォルダーとパッケージを選択します。
- 6. 「実行履歴」保存設定については、次のいずれか 1 つを実行します。
  - 特定の数の実行履歴を保存するには、「保存する数」をクリックし、数値を 入力します。出力レポートを無制限に保存するには、この値を0に設定しま す。
  - 実行履歴を一定期間保存するには、「期間」をクリックし、「日間」または 「カ月間」のいずれかを選択して、日数または月数を指定します。ボックス に適切な値を入力します。
- 7. 「出力バージョン」保存設定については、次のいずれか 1 つを実行します。
  - 出力レポートの数を指定するには、「保存する数」をクリックし、数値を入 力します。出力レポートを無制限に保存するには、この値を 0 に設定しま す。
  - 出力レポートを一定期間保存するには、「期間」をクリックし、「日間」または「カ月間」のいずれかを選択して、日数または月数を指定します。ボックスに適切な値を入力します。
- 8. 記録レベルを選択して、「**OK**」をクリックします。
- 9. 次のいずれかを選択します。
  - すぐに、または後で、1回のみ実行する場合は、「保存して1回実行」をクリックします。「終了」をクリックし、実行の日時を指定して、「実行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」 をクリックします。「終了」をクリックして、実行の頻度、開始日、および 終了日を選択します。「OK」をクリックします。
  - スケジュールまたは実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終了」の順にクリックします。

### コンテンツ削除コンテンツ保守タスクの作成

新規のコンテンツ削除コンテンツ保守タスクを作成して、フォルダーおよびパッケ ージにある、履歴オブジェクトと出力レポート・バージョンに削除のためのマーク を付けます。

### このタスクについて

履歴および出力バージョンを Content Store にどれほどの期間保持するか指定できます。指定した日付よりも古いものはすべて Content Store から削除されます。

重要: コンテンツ削除コンテンツ保守タスクを実行する際には、以下の状況を考慮し てください。

 このタスクを実行するのは、コンテンツ・アーカイブ・タスクを作成し実行して からにしてください。その前にこのタスクを実行した場合、アーカイブのための マークを付けられていないコンテンツは、Content Store から永久に削除されて しまいます。  削除のマークが付けられたコンテンツは、IBM Cognos Analytics からのみ削除 されます。このコンテンツは、外部リポジトリーからは削除されません。

### 手順

- 1. IBM Cognos Administration を起動します。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 3. ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」アイコンをクリックし、「コンテ ンツの削除」をクリックします。
- 4. コンテンツ削除タスクの名前を入力し、オプションで、説明や画面のヒントを 入力します。
- 5. 場所を編集する場合は、「別の場所を選択」をクリックしてください。フォル ダーを選択するためにナビゲートするか「フォルダーの新規作成」をクリック して、新しいフォルダーを追加します。「**OK**」をクリックします。
- 6. 「次へ」をクリックします。
- 7. 含めるフォルダーとパッケージを選択します。
- 8. 「実行履歴」設定については、「実行履歴」チェック・ボックスをクリック し、ボックスに適切な値を入力し、「日」または「月」のいずれかを選択しま す。
- 9. 「出力バージョン」設定については、「出力バージョン」チェック・ボックス をクリックし、ボックスに適切な値を入力し、「日」または「月」のいずれか をクリックします。
- 10. 記録レベルを選択して、「**OK**」をクリックします。
- 11. 次のいずれかを選択します。
  - すぐに、または後で、1回のみ実行する場合は、「保存して1回実行」を クリックします。「終了」をクリックし、実行の日時を指定して、「実行」 をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」 をクリックします。「終了」をクリックして、実行の頻度、開始日、および 終了日を選択します。「OK」をクリックします。
  - スケジュールまたは実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終了」の順にクリックします。

# 外部リポジトリーにあるコンテンツの検索

アーカイブされたコンテンツを、IBM Cognos Analytics または外部リポジトリー で表示できます。

コンテンツは移動されてアーカイブされた後、外部リポジトリーへのデータ・ソー ス接続を作成した際に指定したフォルダーに保管されます。

# アーカイブされたコンテンツの検索

IBM Cognos Content Store および外部リポジトリーに保管されているコンテンツ にアクセスできます。ユーザーは、最新のコンテンツとアーカイブされたコンテン ツの検索結果を表示して、現行データと履歴データを厳密に比較することができま す。 アーカイブされたコンテンツの検索を実行する際、ユーザーはレポート名に含まれ る要素、またはレポートに含まれるデータ要素を検索できます。アーカイブされた コンテンツは、検索結果のリンクをクリックして表示できます。

レポート・リポジトリーに保管されているコンテンツは、IBM Cognos Workspace では利用できません。 IBM Cognos Workspace で検索を実行する際、アーカイブ されたレポート出力はレポートされません。

# 第10章 セキュリティー・モデル

IBM Cognos ソフトウェアのセキュリティーは、さまざまな環境のセキュリティー 要件を満たすように設計されています。このモデルは、実際にはセキュリティーが 適用されることがほとんどない、コンセプトを実証するためだけのアプリケーショ ンから、大規模な企業で運用するアプリケーションまで、幅広く使用できます。

このセキュリティー・モデルは、1 つ以上の認証プロバイダーに基づいて作成され るため、現在組織で使用されているセキュリティー・インフラストラクチャーと簡 単に統合できます。これらのプロバイダーを使用してユーザー、グループ、および 役割の定義や管理を行い、認証プロセスを制御します。IBM Cognos ソフトウェア

で認識されている各認証プロバイダーは、ネームスペース 🙆 と呼ばれます。

IBM Cognos ソフトウェアには、認証プロバイダーを表すネームスペースに加え て、 210 ページの『Cognos ネームスペース』 という組み込みのネームスペース もあります。Cognos ネームスペースを使用すると、組織のセキュリティー・ポリ シーおよびアプリケーションの配布機能が向上します。

IBM Cognos ソフトウェアのセキュリティーはオプションです。セキュリティーを 無効にした場合、認証プロバイダーは設定されず、すべてのユーザー・アクセスが 匿名で行われます。通常、匿名ユーザーのアクセスは読み取り専用に制限されま す。

### Cognos Proven Practices のセキュリティー・ドキュメント

IBM Cognos Analytics「管理およびセキュリティー・ガイド」には、IBM Cognos Analytics での一般的なセキュリティー実装に関する基本情報のみが記載されていま す。異なるセキュリティー・プロバイダーを使用する特定の実装に関する情報が必 要な場合は、IBM Cognos Proven Practices (http://www.ibm.com/ developerworks/data/library/cognos/cognosprovenpractices.html) に用意されて いるリソースを使用できます。そのページの「Security」リンクをクリックし、セキ ュリティーに関するさまざまなタイプの文書へのリンクをたどってください。

# 認証プロバイダー

IBM Cognos ソフトウェアでは、認証プロバイダーによってユーザー認証を管理します。認証プロバイダーでは、認証を行う際に使用するユーザー、グループ、および役割を定義します。認証プロバイダーに保存される情報には、ユーザー名、ID、 パスワード、地域設定、個人設定などがあります。

IBM Cognos ソフトウェアの認証を設定すると、ユーザーはログオン時にユーザー ID やパスワードなどの有効な資格情報を入力する必要があります。IBM Cognos ソフトウェア環境では、認証プロバイダーはネームスペースとも呼ばれ、ユーザ

ー・インターフェースではネームスペースのエントリー 🙆 によって表されます。

IBM Cognos ソフトウェアでは、認証プロバイダーに定義されているユーザー、グ ループ、および役割は複製されませんが、レポートやその他の内容にアクセス権を 設定するときに IBM Cognos ソフトウェア内で参照することはできます。また、認 証プロバイダーに定義されたユーザー、グループ、および役割を Cognos グループ および Cognos 役割のメンバーにすることもできます。

今回のリリースでサポートされている認証プロバイダーは次のとおりです。

- Active Directory
- OpenID Connect
- カスタム Java プロバイダー
- OpenID Connect 認証プロキシー
- IBM Cognos Series 7
- LDAP
- SAP
- SiteMinder

認証プロバイダーを設定するには IBM Cognos Configuration を使用します。詳細 については「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

### 複数のネームスペース

システムに複数のネームスペースが設定されている場合は、セッションの開始時 に、使用するネームスペースを 1 つ選択します。その場合でも、セッション中に別 のネームスペースにログオンすることができます。例えば、アクセス権を設定する 場合、別のネームスペースのエントリーを参照しなければならないことがありま す。このような場合に別のネームスペースにログオンするには、現在使用している ネームスペースからログアウトする必要はありません。同時に複数のネームスペー スにログオンすることができます。

セッションの開始時のログオンで使用したネームスペースと資格情報は、プライマ リー・ログオンとなります。その後、同じセッションでログオンした別のネームス ペースと資格情報は、セカンダリー・ログオンとなります。

いずれかのネームスペースを削除しても、別のネームスペースを使用してログオン できます。Cognos ネームスペース以外のネームスペースをすべて削除すると、ロ グオンを求めるプロンプトは表示されません。匿名アクセスが可能な場合、自動的 に匿名ユーザーとしてログオンされます。匿名アクセスが無効となっている場合、 ログオン・ページにはアクセスできません。この場合は、IBM Cognos Configuration を使用して匿名アクセスを有効にします。

### ネームスペースの非表示

ユーザーによるログオン時にネームスペースを非表示にすることができます。この ようにすれば、ユーザーのログオン時に表示されるネームスペース選択リストに表 示することなく、信用サインオン・ネームスペースを使用できます。

例えば、複数のシステムでシングル・サインオンを統合する場合に、顧客にはネームスペースの選択を求めるプロンプトを表示せずに、顧客が IBM Cognos ソフトウェアで直接認証されるようにできます。

カスタムの Java プロバイダーや、自分で設定した eTrust SiteMinder のネームス ペースを非表示にできます。

詳細については「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

# 設定解除されたネームスペースの削除と復元

IBM Cognos ソフトウェアで設定を解除されて使用されなくなったネームスペース とその内容すべてを、Content Store 内に保存できます。設定されていないネーム スペースは、ディレクトリー・ツールにアクティブではない状態としてリスト表示 されます。

非アクティブなネームスペースとは、いったん設定された後に、IBM Cognos Configuration で削除されたネームスペースです。システム管理者役割のメンバー は、Content Store からネームスペースを削除できます。アクティブではないネー ムスペースにはログオンできません。

新しいバージョンの IBM Cognos ソフトウェアによって、過去に設定されていて現 在は使用されていないネームスペースが検出された場合、そのネームスペースは非 アクティブとしてディレクトリー・ツールに表示されます。データがまだ必要な場 合は、ネームスペースを再び設定できます。必要のないネームスペースは削除でき ます。

ネームスペースを削除すると、そのネームスペースと関連付けられている個人用フ ォルダーのすべてのエントリーおよびその内容も削除されます。

アクティブなネームスペースは削除できませんが、更新することは可能です。

IBM Cognos Configuration でネームスペースを再作成するには、ネームスペース の元の ID を使用する必要があります。ネームスペースの設定と再作成の方法につ いては、「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

### 非アクティブなネームスペースの削除

ネームスペースが IBM Cognos Configuration から削除されていて、今後は必要な い場合、システム管理者役割のメンバーはディレクトリー・ツールを使用してこの ネームスペースを完全に削除できます。ネームスペースを削除すると、そのネーム スペースと関連付けられている個人用フォルダーのすべてのエントリーも削除され ます。

ディレクトリー管理ツールにアクセスするには、保護されている特性「データ・ソ ース接続」に対する実行権限と、管理用の保護されている機能に対する通過権限が 必要です。

### 手順

1. IBM Cognos Administration の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。

削除するネームスペースの「アクティブ」列にチェック・マークが付いていない ものは現在アクティブではないため、削除できます。

2. 「操作」列で、「削除」ボタンをクリックします。

ネームスペースがアクティブである場合、「削除」ボタンは使用できません。

#### タスクの結果

ネームスペースが完全に削除されます。IBM Cognos ソフトウェア内でこのネーム スペースを再び使用するには、IBM Cognos Configuration を使用してこれを追加 する必要があります。

### 承認

承認とは、ユーザーの ID に基づいて、データへのアクセスを許可または拒否し、 そのデータに対して実行できる操作を指定するプロセスです。

IBM Cognos ソフトウェアの承認では、フォルダーやレポートなどの Content Store オブジェクトに対する読み取りや書き込みなどの処理を行う権限を、ユーザ ー、グループ、および役割に割り当てます。Content Store は、データ・オブジェ クトの階層として表示できます。このようなオブジェクトには、フォルダーやレポ ートだけでなく、レポート作成用のパッケージ、ディレクトリー、サーバーも含ま れます。

IBM Cognos 管理者は、ユーザーにレポートを配布する際に、レポートやその他の オブジェクトを保存するためのフォルダーを作成できます。作成したフォルダー は、承認されたユーザーのみが表示や変更、フォルダーの内容を利用した作業を行 えるように、保護することができます。

IBM Cognos エントリーに対するアクセス権の設定については、 223 ページの『第 12 章 アクセス権と資格情報』を参照してください。Content Manager のオブジェ クト階層、および初期状態のアクセス権については、 473 ページの『付録 C. 初期 アクセス権』を参照してください。

# Cognos ネームスペース

Cognos ネームスペースは、IBM Cognos ソフトウェアに組み込まれたネームスペ ースです。このネームスペースには、グループ、役割、データ・ソース、配布リス ト、連絡先などの IBM Cognos オブジェクトが含まれます。

Content Store の初期化時に、組み込みのセキュリティー・エントリーとあらかじ め定義されたセキュリティー・エントリーがこのネームスペース内に作成されます 255 ページの『第 15 章 セキュリティーの初期設定』。これらのエントリーおよび Cognos ネームスペースに対する初期状態のセキュリティー設定を変更する場合 は、IBM Cognos ソフトウェアのインストールと設定を行った直後に変更する必要 があります 267 ページの『インストール後のセキュリティー設定』。

Cognos ネームスペースの名前は IBM Cognos Configuration を使用して変更でき ますが、削除はできません。このネームスペースは常にアクティブです。

IBM Cognos ソフトウェアにセキュリティーを設定した場合は、Cognos ネームス ペースを使用して IBM Cognos ソフトウェア固有のグループまたは役割を作成でき ます。このネームスペースには、認証プロバイダーのセキュリティー・エントリー を間接的に参照するセキュリティー・ポリシーも作成できます。これにより、IBM Cognos ソフトウェアを任意のインストールから別のインストールに簡単に配布で きるようになります 304 ページの『セキュリティーと配布』。

Cognos ネームスペースは常に IBM Cognos ソフトウェア内に存在しますが、その 中に含まれる Cognos グループおよび Cognos 役割の使用はオプションです。 Cognos ネームスペース内にグループや役割を作成すると、認証プロバイダー内の 既存のユーザー、グループ、および役割が再編成され、IBM Cognos 環境内で最適 化されます。例えば、Cognos ネームスペースに"人事課管理職"というグループを作 成し、そのグループに、認証プロバイダーに定義されている自社の IT 部門と人事 部門の特定のユーザーやグループを追加できます。後から、IBM Cognos ソフトウ ェアのエントリーに対するアクセス権を"人事課管理職"グループに付与できます。

# **IBM Cognos Application Firewall**

IBM Cognos Application Firewall (CAF) は、既存の IBM Cognos ソフトウェ ア・セキュリティー・インフラストラクチャーをアプリケーション・レベルで補助 するために使用するセキュリティー・ツールです。 IBM Cognos Application Firewall は、HTTP および XML 要求がゲートウェイやディスパッチャーによって 処理される前、および要求しているクライアントやサービスに送信される前に、要 求を分析、変更、および検証します。CAF は、IBM Cognos 製品のゲートウェイや ディスパッチャーに対するスマート・プロキシーとして機能し、IBM Cognos のコ ンポーネントを悪意のあるデータから保護します。悪意のあるデータの最も一般的 なものとしては、有効なページへのスクリプトの挿入や別の Web ページへの転送 による、バッファーのオーバーフローや、クロスサイト・スクリプト (XSS) 攻撃な どがあります。

IBM Cognos Application Firewall が IBM Cognos のコンポーネントに提供する セキュリティー機能には、データの検証と保護、ログ記録と監視、および出力の保 護などがあります。詳細については、『データの検証と保護』および 212 ページの 『ログ記録と監視』を参照してください。

IBM Cognos Application Firewall はデフォルトで有効になります。無効にしない でください。

IBM Cognos Application Firewall は、他の IBM Cognos コンポーネントとは別 個に更新できます。

IBM Cognos Application Firewall について詳しくは、「インストールおよび設定 ガイド」を参照してください。

# データの検証と保護

入力データの検証では、あらかじめ定義された一連の変数規則に基づいて、データ が適切な形式であるかどうかが確認されます。HTML 変数、XML データ、Cookie 値、およびパラメーターが、この一連の規則と照合されます。

IBM Cognos Application Firewall (CAF) では、既知のスクリプト挿入タグや一般 的な SQL 挿入シグニチャーを単に検索するのではなく、パラメーターの積極的な 検証が実行されます。各パラメーターは、特定形式の特定データ型を要求する規則 と照合して検証されます。CAF の規則に適合しないデータは拒否されます。 また、さらに強力な検証を行うため、CAF では正規表現パターンと照合して、複雑 な形式を使用するデータ入力が保護されます。

一般的な攻撃のタイプとしては、フォーム・パラメーターを変更することにより、 ユーザーをだまして有害なサイトに誘導するものがあります。製品の「戻る」ボタ ンやエラー URL 機能は、このような攻撃の格好の標的となります。

CAF では、戻り先の URL でアクセス可能なホストおよびドメインのリストを制限 しています。CAF は、ポート番号やドメインを含むホスト名のリストを使用して設 定できます。リストにないホストまたはドメインが戻り先の URL に含まれている 場合、要求は拒否されます。デフォルトでは、ディスパッチャーのホスト名がリス トに追加されます。リストを設定するには IBM Cognos Configuration を使用しま す。

詳細については「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

### ログ記録と監視

IBM Cognos Application Firewall (CAF) では、IBM Cognos のゲートウェイおよ びディスパッチャーに対するすべてのアクセスを監視してログに記録できます。ロ グ記録機能を使用すると、IBM Cognos アプリケーションへの攻撃や、アプリケー ションの不正使用を追跡できます。

CAF は、アクセスを特定のファイルに記録するか、IBM Cognos ログ・アプリケー ション (IPF) ログ記録を使用するように設定できます。ログ記録が有効になってい る場合、CAF による検証が失敗した要求はすべて記録されます。

詳細については「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

Web サーバーの要求ログを使用して、疑わしい攻撃のソース・クライアントの IP アドレスに関する詳細情報を取得できます。

# サイト間スクリプティング (XSS) エンコード

多くの場合、eTrust SiteMinder など他のアプリケーションを使用して、サイト間ス クリプティングの脆弱性チェックを行います。このような製品では、特定の文字を 含んでいる HTTP GET 要求がブロックされます。

CAF は、カスケード・スタイル・シート (CSS) の文字を URL でエンコードする ことにより、他のサイト間スクリプティング・ツールによって文字がブロックされ るのを防ぎます。

CAF XSS エンコード機能は、IBM Cognos Analytics ポータルを使用しているお客 様にのみ適用されます。

デフォルトでは、CAF XSS エンコードは無効になっています。この機能を有効にす るには、IBM Cognos Configuration を使用します。

詳細については「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

# エラー・メッセージのフィルター

エラー・メッセージには、サーバー名などの機密情報が含まれている場合がありま す。デフォルトでは、IBM Cognos ソフトウェアのエラー・メッセージの詳細は IPF ログ・ファイルに転送されます。また、エラー・メッセージの保護機能オプシ ョンは有効になっています。ユーザーに対して表示される情報は、エラーの発生の みを示し、詳細は含みません。

IBM Cognos 管理で「詳細なエラー」機能を変更すると、機密情報を含んでいる可能性のある詳細なエラー・メッセージを取得できるユーザーを指定できます。この機能は通常、ディレクトリー管理者に割り当てられていますが、他のユーザーに割り当てることもできます。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

詳細なエラー・メッセージの取得方法については、 23 ページの『保護されている エラー・メッセージの完全な詳細表示』を参照してください。

### パラメーターの署名

パラメーターの署名機能では、パラメーター値が Web ブラウザーに送信されると きに不正に変更されるのを防ぎます。CAF は、パラメーターや特定のデータに署名 できます。署名は特定の状況でのみ使用されます。CAF を有効にすると、この機能 も有効になります。

# 第11章 ユーザー、グループ、および役割

ユーザー、グループ、役割は、認証と承認を行うために作成します。

使用できるのは、IBM Cognos ソフトウェアで作成されたグループと役割、および 認証プロバイダーで作成されたユーザー、グループ、役割です。IBM Cognos ソフ トウェアで作成されたグループと役割は、それぞれ Cognos グループ、Cognos 役 割と呼ばれます。

# ユーザー

ユーザー・エントリーは、ユーザーやコンピューター・アカウントを一意に識別す るために、認証プロバイダーによって作成、管理されます。IBM Cognos ソフトウ ェアでユーザー・エントリーを作成することはできません。

姓名、パスワード、ID、ロケール、E メール・アドレスなどのユーザーに関する情報は、プロバイダー内に保存されています。ただし、IBM Cognos ソフトウェアで必要な情報がすべて保存されているわけではありません。例えば、プロバイダー内に保存されている情報には、ユーザーの個人用フォルダーの場所やレポート表示用の形式設定は指定されていません。ユーザーに関するこの追加情報は IBM Cognos ソフトウェアに保存されますが、IBM Cognos ソフトウェアでアドレスが指定されている情報は、外部ネームスペースの一部として表示されます。

### Series 7 ユーザー

IBM Cognos Series 7 の認証プロバイダーを設定した場合、そのネームスペースの ユーザーを IBM Cognos ソフトウェアで使用可能にするには、そのユーザーが少な くとも 1 つの Access Manager ユーザー・クラスに属している必要があります。 詳細については、 207 ページの『認証プロバイダー』を参照してください。

例えば、Series 7 Access Manager で新しいユーザーを作成して 1 つのユーザー・ クラスに割り当てたとします。その後、作成したユーザーをそのユーザー・クラス から削除した場合、IBM Cognos ソフトウェアにそのユーザーでログオンすること はできません。

### ユーザーの削除および再作成

Series 7 の認証プロバイダーでは、ユーザーを削除して再作成した場合、関連付け られていたプロパティーとアイテムは保持できません。例えば、あるユーザーが 「個人用フォルダー」にオブジェクトを作成したとします。その後、このユーザー が削除されると、「個人用フォルダー」のオブジェクトとそのユーザーとの関連付 けはなくなります。同じ名前のユーザーが再作成された場合でも、オブジェクトは 復元されません。

LDAP サーバーを使用する場合、「個人用フォルダー」のオブジェクトが復元され るかどうかは ID の使用方法によって決まります。LDAP プロバイダーの設定で一 意の識別子パラメーターに対してデフォルト属性の dn を使用した場合、同じ名前 で復元されたユーザーには、元のユーザーの「個人用フォルダー」のオブジェクト が保持されます。一意の識別子パラメーターを LDAP サーバーで設定された一意の 属性 (Sun Java System の nsuniqueid など) に変更した場合は、削除されたユー ザーと「個人用フォルダー」オブジェクトとの関連付けは失われ、同じ名前のユー ザーには新しい「個人用フォルダー」が作成されます。

ユーザー・プロファイルは、削除、コピー、および変更できます。詳細について は、 341 ページの『第 21 章 ユーザー・プロファイルの管理』を参照してくださ い。

# ユーザー・ロケール

ロケールにより、文字の種類、照合順序、日時の形式、通貨単位、およびメッセー ジに使用する言語や規約の情報が決まります。IBM Cognos ソフトウェアでは、個 々の製品、コンテンツ、サーバー、作成者、およびユーザーにロケールを指定でき ます。

ユーザー・ロケールとは、各 IBM Cognos ユーザーのユーザー・インターフェース のロケールとコンテンツ・ロケールを指します。ユーザーからの要求は関連付けら れたロケールで着信します。レポートをさまざまな言語で配布する場合、IBM Cognos ソフトウェアではユーザーの言語とロケールの設定を判断し、適切なロケ ールで応答する必要があります。

ユーザー・ロケールは、日時、通貨、および数字の形式設定に使用するデフォルト 設定を指定します。IBM Cognos ソフトウェアでは、この情報を使用してユーザー にデータを表示します。

IBM Cognos ソフトウェアでは、次の順番でソースをチェックしてユーザー・ロケ ール値を取得します。

• ユーザー設定

ユーザーがユーザー設定を指定している場合、IBM Cognos ソフトウェアではユ ーザー・インターフェースのロケールとコンテンツ・ロケール、およびデフォル トの形式設定オプションにその値を使用します。ユーザー設定は、認証プロバイ ダーから取得した値よりも優先されます。

• 認証プロバイダー

認証プロバイダーにロケールが設定されている場合、IBM Cognos ソフトウェア ではユーザー・インターフェースのロケールとコンテンツ・ロケールにその値を 使用します。

• ブラウザーの設定

匿名ユーザーとゲスト・ユーザーは、ユーザー設定を設定できません。IBM Cognos ソフトウェアでは、これらのユーザーに対するユーザー・ロケールはユ ーザーのコンピューターに保存されているブラウザーから取得されます。

グループと役割

グループと役割を次のように定義できます。

グループ や役割は、組織内で類似した業務に従事していたり、類似した地位に 就いていたりするユーザーの集合です。グループの例には、従業員、開発者、営業 部員などがあります。グループのメンバーには、ユーザーや他のグループを含める ことができます。ログオンしたユーザーが、セッションで使用するグループを選択 することはできません。ユーザーがログオンすると、所属するグループに設定され たすべての権限が付与されます。

IBM Cognos ソフトウェアの役割¹には、グループと類似した機能があります。 役割のメンバーには、ユーザー、グループ、他の役割を含めることができます。

次の図に、グループと役割の構造を示します。



図 4. グループと役割の構造

ユーザーは、IBM Cognos ソフトウェアで定義されたグループや役割のメンバー と、認証プロバイダーで定義されたグループや役割のメンバーになることができま す。1 人のユーザーが 1 つ以上のグループや役割に所属することもできます。ユー ザーが複数のグループのメンバーである場合、そのアクセス権は結合されます。

Cognos グループと Cognos 役割は次の場合に作成します。

- 認証プロバイダーでグループや役割を作成できない場合
- 複数のネームスペースにまたがるグループや役割が必要な場合
- 配布可能な移植性が高いグループや役割が必要な場合

認証プロバイダーで必要なグループと役割を作成し、適切な Cognos グループと Cognos 役割に追加します。

- IBM Cognos Administration の特定のニーズに対応する場合
- IBM Cognos ソフトウェアでのみ使用する情報を使用して、組織のセキュリティ ー・システムを明瞭にする場合

### Series 7 の役割

IBM Cognos Series 7 の認証プロバイダーを構成した場合は、Series 7 でユーザ ー・クラスと呼ばれるユーザーの集合が IBM Cognos ソフトウェアに役割として表 示されます。単一のログオンを使用して Series 7 と IBM Cognos ソフトウェアに アクセスできます。Series 7 にログオンしてセッションを開始してから IBM Cognos ソフトウェアにアクセスすると、最初にログオンした Series 7 で有効であ った役割が自動的に割り当てられます。Series 7 の別の役割を割り当てることはで きません。認証プロバイダーの構成の詳細については、 207 ページの『認証プロバ イダー』を参照してください。 IBM Cognos ソフトウェアにアクセスした後は、Series 7 の別の役割を割り当てる ことができます。

# レポートおよびジョブの実行に使用する役割

レポートおよびジョブの実行に使用する役割は、対話形式でレポートを実行するユ ーザー、レポート所有者、スケジュールされたレポートおよびジョブの実行に資格 情報が使用されるユーザーに関連付けられます。レポートの実行で選択したオプシ ョンに応じて、処理ごとに異なる役割を割り当てることができます。

- 所有者として実行するようにオプションが選択されたレポートを実行する場合、
   その処理はレポート所有者に関連付けられているすべての役割に割り当てられます。
- スケジュールされたレポートまたはジョブを実行する場合、そのセッションは、 要求の処理に資格情報が使用されたユーザーに関連付けられているすべての役割 に割り当てられます 233 ページの『信頼されている資格情報』。

### グループと役割のメンバーとしての配布リスト

Microsoft Active Directory などの一部のネームスペースでは、配布リストが、グ ループまたは役割の「プロパティーを設定」ページの「メンバー」タブに表示され ます。ただし、配布リストをグループまたは役割のメンバーシップに追加すること はできません。また、配布リストを使用して、IBM Cognos ユーザー・インターフ ェースのエントリーにアクセス権を設定することはできません。

IBM Cognos 配布リストを Cognos グループまたは Cognos 役割のメンバーシッ プに追加するには、Software Development Kit を使用します。ただし、Software Development Kit を使用して Active Directory 配布リストを Active Directory グ ループに追加することはできません。追加するには、Active Directory 管理ツール を使用する必要があります。

### IBM Cognos Controller のグループと役割

IBM Cognos ソフトウェアでは、セキュリティーの設定に IBM Cognos Controller のグループと役割を使用します。これらのグループと役割を使用したセキュリティ ーの設定については、「*IBM Cognos Controller Installation and Configuration Guide*」を参照してください。

# Cognos グループまたは Cognos 役割の作成

認証プロバイダーと IBM Cognos ソフトウェアの両方で作成された複数のネームス ペースのエントリーを、Cognos グループのメンバーとして追加できます。メンバ ーが含まれていない空のグループを作成することもできます。

Cognos グループのメンバーには、ユーザーや他のグループを含めることができま す。Cognos 役割のメンバーには、ユーザー、グループ、他の役割を含めることが できます。

複数のネームスペースからエントリーを参照するグループまたは役割を作成する場合は、タスクを開始する前に各ネームスペースにログオンする必要があります。ロ グオンしないと、参照するエントリーに対する全管理権限が付与されません。 IBM Cognos ソフトウェアのエントリーに対するアクセス権を設定する場合は、配 布処理の簡素化のため、Cognos のグループと役割を使用することが推奨されてい ます。詳細については、 304 ページの『セキュリティーと配布』を参照してくださ い。

Cognos グループまたは Cognos 役割を削除すると、そのグループまたは役割に基 づくユーザーのアクセス権が無効になります。同じ名前のグループまたは役割を作 成してアクセス権を復元することはできません。

ユーザー、グループ、役割を管理するには、保護された特性である「ユーザー、グ ループ、および役割」に対する実行権限と、保護された機能である「管理」に対す る通過権限が必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されてい る機能と特性』を参照してください。

### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. 「Cognos」ネームスペースをクリックします。

ヒント: Cognos グループまたは Cognos 役割を削除するには、そのグループま たは役割の隣にあるチェック・ボックスをオンにして、「削除」ボタンをクリッ クします。

- 3. ツールバーの「グループの新規作成」 🏙 または「役割の新規作成」 🛍 ボタ ンをクリックします。
- 「名前と説明を指定」ページで、名前、および必要に応じて新しいグループまた は役割の説明を入力し、保存先フォルダーを選択して、「次へ」をクリックしま す。
- 5. メンバーを含めずにグループを作成する場合は、「終了」をクリックします。
- 新しいグループまたは役割にメンバーを追加する場合は、「追加」をクリックし、ユーザー、グループ、または役割の選択方法を選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「タイプ」をクリックし、以下の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリーの間はセミコロン (;) で区切ります。 ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザー名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

7. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント: 「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除 するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目 を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザー・エ ントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

8. 「終了」をクリックします。

# **Cognos** グループまたは **Cognos** 役割のメンバーの追加または削除

Cognos グループまたは Cognos 役割のメンバーシップは、メンバーを追加または 削除することで変更できます。

ユーザー、グループ、役割を Cognos グループまたは Cognos 役割から削除して も、認証プロバイダーや IBM Cognos ソフトウェアからは削除されません。

複数のネームスペースからエントリーを参照するグループまたは役割を変更する場合は、タスクを開始する前に各ネームスペースにログオンする必要があります。ロ グオンしないと、変更するエントリーに対する全管理権限が付与されません。

ユーザー、グループ、役割を管理するには、保護された特性である「ユーザー、グ ループ、および役割」に対する実行権限と、保護された機能である「管理」に対す る通過権限が必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されてい る機能と特性』を参照してください。

### 手順

- 1. IBM Cognos Administration の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. 「Cognos」ネームスペースをクリックします。
- 3. 「操作」列で、変更するメンバーシップのグループまたは役割のプロパティー・ ボタンをクリックします。
- 4. 「メンバー」タブをクリックします。
- 5. メンバーを追加するには、「追加」をクリックしてメンバーの選択方法を選択し ます。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザ 一名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

6. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリ ー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント:「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除 するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目 を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザー・エ ントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

- Cognos グループまたは Cognos 役割からメンバーを削除するには、「プロパ ティーを設定」ページで、削除するユーザー、グループ、または役割を指定し、 「削除」をクリックします。
- 8. 「**OK**」をクリックします。

# 第12章 アクセス権と資格情報

組織のデータを保護するためには、アクセス権と資格情報を使用します。IBM Cognos ソフトウェアの個々のレポートやその他のコンテンツに対するアクセス権 を持つユーザーやグループを指定します。また、コンテンツに対して実行できる操 作も指定します。

アクセス権を設定するときは、認証プロバイダーのユーザー/グループ/役割と Cognos のグループ/役割の両方を参照できます。ただし、今後アプリケーションを 配布する予定がある場合は、プロセスを簡単にするために、Cognos のグループと 役割のみを使用して IBM Cognos ソフトウェアのエントリーに対するアクセス権を 設定することを推奨します。

# 権限と許可される操作

次の表に、付与または拒否できるアクセス権を示します。

衣 51. 惟限と計りされる探作	表	51.	権限と評	可さ	れる	操作
------------------	---	-----	------	----	----	----

権限	アイコン	許可される操作
読み取り		レポートのプロパティーであるレポート仕様や出力レ ポートなど、エントリーのすべてのプロパティーの表 一
	<b>e</b>	₮₀
	<u></u>	
書き込み	2	エントリーのプロパティーの変更。
		エントリーの削除。
	9	パッケージやフォルダーなどのコンテナー内へのエン
	9/	
		Reporting および Query Studio で作成されたレポー トに対するレポート仕様の変更。
		出力レポートの新規作成。

表 51. 権限と許可される操作 (続き)

権限	アイコン	許可される操作
実行	8 B	エントリーの処理。
	<del>0</del> 3	レホート、エージェント、評価指標などのエントリーの場合は、ユーザーがエントリーを実行できます。
		データ・ソース、接続、およびサインオンの場合、デ ータ・プロバイダーからデータを取得するためにエン トリーを使用できます。ユーザーは、データベース情 報を直接読み取ることはできません。レポート・サー バーがユーザーの代わりにデータベース情報にアクセ スし、要求を処理します。IBM Cognos ソフトウェア では、ユーザーがエントリーを使用する前に、エント リーに対する実行権限を持っているかどうかが確認さ れます。
		資格情報の場合、ユーザーは他のユーザーに対して自 分の資格情報の使用を許可できます。 注:ユーザーは「所有者として実行」レポート・オプ ションで使用するアカウントの実行権限を持っている 必要があります。
ポリシー設定	<b></b>	エントリーのセキュリティー設定の読み取りおよび変 更。
	•	
	<b>8</b>	
通過	<b></b>	パッケージやフォルダーなどのコンテナー・エントリ ーの内容の表示と、コンテナー自体の全般プロパティ
	•	ーの表示。コンテナーに対する完全なアクセス権はあ りません。
		注: ユーザーは、エントリーに対してなんらかのアク セス権を持っていれば、そのエントリーの全般プロパ ティーを表示できます。全般プロパティーとは、名 前、説明、作成時間など、すべてのエントリーに共通 なプロパティーのことです。

### ユーザーのアクセス権

ユーザーは、アクセスするエントリーの親エントリーに対して、少なくとも通過権 限を持っている必要があります。親エントリーは、フォルダー、パッケージ、グル ープ、役割、ネームスペースなどのコンテナー・オブジェクトです。

ユーザーの権限、個々のユーザー・アカウントに対して設定された権限と、ユーザ ーが属しているネームスペース、グループ、および役割に対して設定された権限に 基づきます。また、権限はエントリーのメンバーシップおよび所有者に関するプロ パティーの影響を受けます。 IBM Cognos ソフトウェアでは、アクセス権の組み合わせがサポートされていま す。複数のグループに属しているユーザーがログオンすると、属しているすべての グループを組み合わせた権限を持ちます。これは、特にアクセスを拒否する場合に 念頭に置く必要があります。

ヒント:ユーザーやグループがパッケージからのレポートを実行でき、同時に IBM Cognos の Studio/Authoring ツールでパッケージを開くことができないようにす るには、ユーザーまたはグループにパッケージへの実行権と通過権限を付与しま す。また、ユーザーには、Studio/Authoring ツールを起動するパッケージに対する 読み取り権限も必要です。

## 操作に必要なアクセス権

特定の操作を実行するには、対象となるエントリー、親エントリー、およびソー ス・エントリーやターゲット・エントリーに対するアクセス権の正しい組み合わせ を、各ユーザー、グループ、または役割に付与する必要があります。次の表に、特 定の操作に必要な権限を示します。

操作	必要な権限
エントリーの追加	親エントリーに対する書き込み権限
エントリーのプロパティ ーに対するクエリー	エントリーに対する読み取り権限
エントリーの子エントリ ーの表示	エントリーに対する通過権限
エントリーの更新	エントリーに対する書き込み権限
エントリーの削除	エントリーに対する書き込み権限、および親エントリーに対する 書き込み権限
エントリーのコピー	エントリーと子エントリーに対する読み取り権限、すべての子エ ントリーに対する通過権限、およびコピー先の親エントリーに対 する書き込み権限と通過権限
エントリーの移動	エントリーに対する読み取り権限と書き込み権限、ソースの親エ ントリーと移動先の親エントリーの両方に対する書き込み権限、 および移動先の親エントリーに対する通過権限

表 52. 操作に必要なアクセス権

### **Cognos Workspace** レポートのための権限と許可されたアクション

Cognos Workspace ユーザーは、レポート、レポート部品、レポート・フォルダ ー、またはワークスペース・オブジェクトに対する権限や権限の組み合わせに基づ いて、操作を実行できるかどうかが決まります。オブジェクトの所有者には、読み 取り、書き込み、通過、および実行の権限が自動的に付与されます。オブジェクト が無効化された場合、オブジェクトを表示して編集するには書き込み権限が付与さ れている必要があります。 レポートで、以下のアクセス権および権限の組み合わせを持つユーザーは、以下の 操作を実行できます。

表 53. レポートのアクセス権と許可される操作

権限	許可される操作
読み取り	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示できません。
	ユーザーはレポートをドラッグできません。
読み取りおよび	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
) 西迎	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示できません。
	保存された出力が存在する場合は、ユーザーがレポートをキャンバスにド ラッグし、その保存された出力を表示することができます。保存された出 力が存在しない場合は、ユーザーがレポートをドラッグできません。この 操作を試行すると、ユーザーに対して次のエラー・メッセージがウィジェ ット内に表示されます。 コンテンツを表示できません。削除されたか、 必要な権限がありません。
	ユーザーは保存された出力をワークスペースに表示できます。
	ユーザーはワークスペースでライブ・レポートを実行できません。この操 作を試行すると、ユーザーに対して次のエラー・メッセージが表示されま す。RSV-CM-0006。このユーザーには、このレポートを実行する権限があ りません。
実行	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示できません。
	ユーザーは、レポートを実行できますが、対話操作を使用できません。対 話操作は、次の場合に使用できません。
	• レポートがキャンバスにドラッグされる場合
	<ul> <li>実行権限を持つユーザーがレポートを保存し、他のユーザーがそのレポ ートを開く場合</li> </ul>
	<ul> <li>実行権限を持つユーザーが、他のユーザーが作成したワークスペースを 開く場合</li> </ul>
	保存された出力をワークスペースに表示することができない場合、ユーザ ーに対して次のエラー・メッセージが表示されます。 コンテンツを表示 できません。削除されたか、必要な権限がありません。

表 53. レポートのアクセス権と許可される操作 (続き)

権限	許可される操作
読み取りおよび	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
美行	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示することができま す。
	ユーザーは、レポートを実行することができ、対話操作が使用可能です。
	コンテンツ・ウィンドウで、ユーザーはレポートの変更を保存できませ ん。
	ユーザーがワークスペースにレポートを追加して保存した場合は、レポー トの変更を保存することができます。
	レポート所有者以外のユーザーがレポートをワークスペースに追加した場合、そのユーザーは変更を保存できません。そのユーザーには、次のエラ ー・メッセージが表示されます。 コンテンツを保存できません。必要な 権限がありません。
読み取り、実	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
行、通過	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示することができま す。
	コンテンツ・ウィンドウで、ユーザーはレポートを実行することができ、 対話操作が使用可能です。
	ユーザーは、ライブまたは保存された出力としてキャンバスにレポートを 追加することができます。追加されるレポートのタイプは、レポートのプ ロパティーで指定したデフォルトの操作によって異なります。
読み取り、書き	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
込み、実行、通 過	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示することができま す。
	ユーザーは、レポートをワークスペースに追加できます。
	ユーザーは、レポートを実行することができ、対話操作が使用可能です。
	ユーザーは、レポートの変更および保存を行うことができます。
	ユーザーは、ライブまたは保存された出力としてキャンバスにレポートを 追加することができます。追加されるレポートのタイプは、レポートのプ ロパティーで指定したデフォルトの操作によって異なります。

表 53. レポートのアクセス権と許可される操作 (続き)

権限	許可される操作
読み取り、実	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウでレポートを表示できます。
設定	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示することができま す。
	ユーザーは、レポートを実行することができ、対話操作が使用可能です。
	コンテンツ・ウィンドウで、ユーザーはレポートの変更を保存できませ ん。
	ユーザーがレポートをワークスペースにドラッグし、保存した場合は、レ ポートの変更を保存することができます。この操作により、レポートのコ ピーが作成されます。コピーされたワークスペース・レポートは、ユーザ ーがポリシー設定権限を持っている場合に、元のレポートから権限を継承 します。

レポート部品で、以下のアクセス権および権限の組み合わせを持つユーザーは、以 下の操作を実行できます。

表 54. レポート部品のアクセス権と許可される操作

権限	許可される操作
読み取りおよび 実行	ユーザーは、レポートを表示できます。
大11	ユーザーは、レポートを展開してレポート部品を表示することができま す。
	ユーザーは、レポート部品をキャンバスにドラッグして、レポート部品を 実行することができます。

フォルダーで、以下のアクセス権および権限の組み合わせを持つユーザーは、以下 の操作を実行できます。

表 55. フォルダーのアクセス権と許可される操作

権限	許可される操作
読み取り	ユーザーは、コンテンツ・ウィンドウにフォルダーを表示して、フォルダ ーのプロパティーを読み取ることができます。
	ユーザーは、フォルダーをキャンバスにドラッグできません。
	ユーザーは、フォルダーを展開して内容を表示できません。
	ユーザーは、このフォルダーにワークスペース・オブジェクトを保存でき ません。
通過	ユーザーは、フォルダーをキャンバスにドラッグできます。
	ユーザーは、フォルダーを展開して内容を表示できます。
	ユーザーは、このフォルダーにワークスペース・オブジェクトを保存でき ません。

表 55. フォルダーのアクセス権と許可される操作 (続き)

権限	許可される操作
書き込みおよび 通過	ユーザーは、フォルダーをキャンバスにドラッグできます。
	ユーザーは、フォルダーを展開して内容を表示できます。
	ユーザーは、このフォルダーにワークスペース・オブジェクトを保存でき ます。

ワークスペースで、以下のアクセス権および権限の組み合わせを持つユーザーは、 以下の操作を実行できます。

表 56. ワークスペースのアクセス権と許可される操作

権限	許可される操作
読み取り	ユーザーは、ワークスペースを表示できます。
	ユーザーは、ワークスペースを開くことができません。
読み取りおよび 通過	ユーザーは、ワークスペースを開くことができます。
	通過権限を使用して、ユーザーはワークスペース・ウィジェットを表示で きます。
読み取り、書き 込み、および通 過	ユーザーは、ワークスペースを表示すること、開くこと、および保存する ことができます。

### エントリーの所有権

ユーザーがあるエントリーの所有者である場合、このユーザーにはエントリーに対 するフルアクセス権限が付与されています。このため、ユーザーはいつでも自身が 所有するエントリーにアクセスして変更できます。デフォルトでは、エントリーの 所有者はエントリーを作成したユーザーです。ただし、エントリーに対するポリシ ー設定権限を持つ他のユーザーも、エントリーの所有者になることができます。

### アクセスの許可と拒否

エントリーに対するアクセスを許可したり拒否したりすることができます。「権限」タブのエントリー名の横に表示されるアイコンは、アクセスのタイプを表します。例えば、あるグループにレポートの実行権限が許可された場合、そのレポートの「権限」タブを開いたときに、このアイコンジンがグループ名の横に表示されます。グループのレポートの実行権限が拒否された場合には、このアイコンジンがグループ名の横に表示されます。

アクセスの拒否は、アクセスの許可よりも優先されます。特定のユーザーまたはグ ループによるエントリーへのアクセスを拒否した場合、この拒否はエントリーへの アクセスを許可する他のセキュリティー・ポリシーよりも優先されます。 アクセス権の付与と拒否が競合する場合、エントリーへのアクセスは常に拒否され ます。例えば、2 つのグループに属しているユーザーがあり、1 つのグループには レポートに対するアクセス権が付与されており、もう 1 つのグループには同じレポ ートに対するアクセス権が拒否されているとします。この場合、このユーザーのレ ポートへのアクセスは拒否されます。

アクセスの拒否は、必要な場合にのみ使用してください。一般的に、権限は拒否よ りも、付与によって管理することを推奨します。

### 親および子の権限

アクセス権は親エントリーから取得されます。アクセス権が定義されていない場 合、エントリーのアクセス権は親エントリーから取得されます。子エントリーのア クセス権を定義することによって、親のアクセス権を置換できます。

他のオブジェクトの子としてのみ存在するオブジェクトへのアクセス権は、常にそ の親から取得されます。このようなオブジェクトの例として、レポート仕様や出力 レポートなどがあります。これらのオブジェクトを表示するには Software Development Kit を使用します。これらのオブジェクトに対してアクセス権を明確 に設定することはできません。

### 権限と配布

管理者がターゲット環境に配布しようとする場合は、 303 ページの『第 19 章 配 布』を参照してください。

### 機能権限

管理者として、保護されている機能と特性に対するアクセス権を設定するには、特定のネームスペース、ユーザー、グループ、または役割に関する実行権限を付与します。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

## Cognos のグループと役割の削除

Cognos のグループまたは役割を削除すると、そのグループまたは役割に基づくア クセス権も削除されます。同じ名前でグループや役割を新たに作成しても、このエ ントリーには異なる内部 ID が与えられるため、以前のアクセス権は復元されませ ん。

グループまたは役割が認証プロバイダーで作成されている場合は、認証プロバイダ ーでこのような状況がどのように処理されるかを確認してください。通常、ID に基 づくアクセス権は再作成できませんが、名前に基づくアクセス権は再作成できま す。

# 複数のネームスペースから保護されているデータ・ソースと関連付け られたエントリーへのアクセス

IBM Cognos ソフトウェアのデータ・ソースは、複数のネームスペースから保護す ることが可能です。環境によっては、データ・ソースを保護するために使用される ネームスペースと、IBM Cognos Analytics にアクセスするために使用される基本 ネームスペースが異なる場合があります。複数のネームスペースから保護されてい るデータ・ソースと関連付けられているエントリー (レポート、クエリー、分析など) にアクセスしようとする場合で、必要なネームスペースの一部にしかログオン していない場合は、認証を求めるプロンプトが表示されます。エントリーにアクセ スする前に、ネームスペースにログオンする必要があります。

シングル・サインオン (SSO) が有効な場合は、認証を求めるプロンプトは表示され ません。ネームスペースに自動的にログオンできます。

この機能は、IBM Cognos Viewer にのみ適用されます。IBM Cognos の Studio/Authoring ツールで同様の状態が生じた場合は、タスクを終了して、現行セ ッションで使用するすべてのネームスペースにログオンする必要があります。

# エントリーに対するアクセス権の設定

エントリーのアクセス権を設定するには、新しいアクセス権を作成するか、または 既存のアクセス権を変更します。アクセス権は、IBM Cognos ソフトウェアのエン トリーすべてに設定できます。エントリーには、レポート、クエリー、分析、パッ ケージ、エージェント、評価指標、ネームスペース、グループ、ユーザー、ディス パッチャーなどがあります。エントリーのセキュリティー・ポリシーにおいて異な るネームスペースからユーザー、グループ、および役割を参照できます。

複数のネームスペースからエントリーを参照する場合は、アクセス権の設定を開始 する前に各ネームスペースにログオンします。ログオンしていないネームスペース のエントリーは、「使用不可」と表示されます。

次の場合にセキュリティー・ポリシーによって参照されるエントリーも「使用不 可」と表示されることがあります。

• エントリーが外部ネームスペースから最近削除された。

IBM Cognos ソフトウェアは、セキュリティー・プロバイダーのコンテンツを制 御できません。

• エントリーが、最近削除された外部ネームスペースに関連付けられている。

この問題を回避するには、「外部ネームスペースへの参照」オプションを選択 し、コンテンツ保守タスクの整合性チェックを実行します。Content Manager により、削除されたネームスペースに関連付けられているエントリーが、セキュ リティー・ポリシーから削除されます。

詳細については、 73 ページの『Content Store 保守タスク』を参照してください。

セキュリティーを管理するには、ポリシー設定権限が必要です。詳細については、 223 ページの『第 12 章 アクセス権と資格情報』を参照してください。

### 手順

- 1. IBM Cognos ソフトウェアで、アクセス権を設定するエントリーを探します。
- 2. 「操作」列で、エントリーの「プロパティーを設定」ボタン 🔲 をクリック します。
- 3. 「プロパティーを設定」ページで、「権限」タブをクリックします。

- 4. 親エントリーの権限を使用するか、エントリー専用の権限を指定するかを選択 します。
  - 親エントリーの権限を使用する場合は、「親エントリーから取得したアクセス権をオーバーライド」チェック・ボックスをオフにし、親の権限を使用するように要求するプロンプトが表示されたら、「OK」をクリックします。
  - エントリーのアクセス権を設定する場合は、「親エントリーから取得したア クセス権をオーバーライド」チェック・ボックスをオンにし、手順5に進 みます。
- 5. リストからエントリーを削除するには、そのエントリーのチェック・ボックス をオンにして「削除」をクリックします。

ヒント:リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

- 6. アクセスを許可または拒否するエントリーを指定するには、「追加」をクリッ クしてエントリーの選択方法を選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

## ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユー ザー名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

7. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント:「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

- リストの隣にあるボックス内のチェック・ボックスをオンまたはオフにして、
   各エントリーに対して付与または拒否するアクセス権のタイプを指定します。
- 9. 「**OK**」をクリックします。

「権限」列で、ユーザー、グループ、または役割の横にアイコンが表示されま す。アイコンは、各エントリーに付与または拒否されたアクセス権のタイプを 表します。 このエントリーに対して設定されている権限を子エントリーが取得できるよう
 に、子エントリーに以前設定されたアクセス権を削除するには、「オプション」セクションの「すべての子エントリーのアクセス権を削除」チェック・ボックスをオンにします。

このオプションは、コンテナー・エントリーのみに表示されます。このオプシ ョンを使用すると、エントリーの階層へのアクセスを制限できます。

警告:このオプションは、子エントリーのアクセス権を安全に変更できることが 確実である場合にのみ選択してください。

11. 「**OK**」をクリックします。

# 信頼されている資格情報

信頼されている資格情報は、データベース・サインオンやグループ・メンバーシッ プなどの機密データを含むエントリーへのアクセス権を持っていないユーザーが、 タスクまたはプロセスを実行する必要がある場合に使用します。エントリーを所有 し、より広範なアクセス権を持つユーザーは、所有者自身の資格情報を使用してエ ントリーにアクセスできるように、信頼できるユーザーを承認できます。

信頼されている資格情報は、夜間など、ユーザーが IBM Cognos ソフトウェアにロ グオンしていないときに、スケジュールされている要求を実行する場合にも使用し ます。要求が実行される際に、ユーザー・セッションが生成されます。信頼されて いる資格情報は、その資格情報が示すユーザーとして IBM Cognos ソフトウェアに ログオンする際に使用され、そのユーザーのアクセス権に基づいてレポートやジョ ブが実行されます。

信頼されている資格情報は、アカウント・オブジェクトの一部としてネームスペー スに格納されます。

デフォルトで、信頼されている資格情報は、1 日に一度自動的に更新されます。管 理者は、IBM Cognos Configuration の「セキュリティー」>「認証」>「詳細プロ パティー」の下にある expiryRenewedTC プロパティーを指定することにより、デフ ォルトの更新頻度を変更することができます。このプロパティーの値として使用で きるのは、整数 (日数を表す) だけです。最小値は、1 です。

パスワードを変更した場合、資格情報を手動で更新する必要があります。そうしな いと、自動更新される前に資格情報が使用された場合に、その資格情報は機能しな い可能性があります。例えば、そのような資格情報を使用するスケジュールされた ジョブは失敗する可能性があります。信頼されている資格情報の手動更新の詳細に ついては、『信頼されている資格情報の作成』を参照してください。

## 信頼されている資格情報の作成

他のユーザーが特定のタスクを実行するのに十分なアクセス権限を保持していない ために、それらのユーザーに対して自分の資格情報を使用することを許可する場合 には、信頼されている資格情報を作成できます。

信頼されている資格情報を使用するユーザーは、そのネームスペースに対する通過 権限が付与されている必要があります。 手順

- 1. 「個人用領域のオプション」ボタン 🚨 、「個人用設定」をクリックします。
- 「個人用」タブの「資格情報」で、まだ資格情報を作成していない場合は「資格 情報を作成」をクリックします。

ヒント: 信頼されている資格情報が既に作成されている場合には、「資格情報を 更新」をクリックしてそれらを更新することだけが必要な場合があります。

3. 資格情報の使用を許可するユーザー、グループ、または役割を選択します。

資格情報の入力を求めるプロンプトが表示された場合、ユーザー ID とパスワ ードを入力します。

- エントリーを追加するには、「追加」をクリックしてエントリーの選択方法を選 択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし ユーザー、グループ、または役割の横にあるチェック・ボックスをオンにし ます。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザ 一名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

5. リストからエントリーを削除するには、そのエントリーの横にあるチェック・ボ ックスをオンにして「削除」をクリックします。

### タスクの結果

これで、対象の資格情報を使用できるユーザー、グループ、役割が「資格情報」セ クションにリストされます。

# 自分のデータ・ソース資格情報の管理

特定のタスクにおいてはユーザーのデータ・ソース資格情報が必須であるため、そ れらの資格情報を管理する作業は非常に重要です。

次の操作を実行するときに、データ・ソース資格情報の入力を求めるプロンプトが 表示される場合があります。

- エントリーを表示する、実行する、開く
- スケジュールまたはジョブを使用する
- パッケージの作成に使用可能なデータ・ソースの選択

Framework Manager を使用するときにも、データ・ソース資格情報の入力を求め るプロンプトが表示される場合があります (「Framework Manager ユーザー・ガイ ド」を参照)。

管理者がデータ・ソース・サインオンの作成や変更 163 ページの『データ・ソー ス・サインオン』を行うこともできますが、多数のユーザーが存在する場合、各ユ ーザーにそれぞれのサインオンが必要なデータ・ソース設定では、各ユーザーの資 格情報を個別に管理する必要があるため、困難な作業になる可能性があります。管 理者は、他のユーザーのデータ・ソース資格情報を表示することもできます。

資格情報は次の順序でチェックされる点に注意してください。

- 最初に、管理者が作成したサインオンがチェックされる
- ユーザーの資格情報が見つからない場合、独自の資格情報が保存されていないか ユーザーのプロファイルがチェックされる
- ユーザーの資格情報がどこにも見つからない場合、ユーザーに対して資格情報の 入力を求めるプロンプトが表示される

つまり、ユーザーが独自の資格情報を保存した後で管理者が資格情報を作成する と、管理者によって作成された資格情報に関連付けられたデータが取得されるた め、ユーザーが必要とするデータとは異なる可能性がある点が重要です。

### 始める前に

ユーザーは、「自分のデータ・ソース・サインオンを管理」機能に対する実行権限 と、その先祖に対する通過権限を、管理者から付与されている必要があります。さ らに、アカウントに対する読み取り権限と通過権限を持っていれば、資格情報を個 人のプロファイルに保存することができます。ただし、データ・ソースに対してあ らかじめ定義されているサインオンへのアクセス権を持っている場合を除きます。 既存のデータ・ソース資格情報へのアクセス権を持ち、個人の資格情報をプロファ イルに保存している場合、資格情報の入力を求めるプロンプトは表示されません。 データ・ソース資格情報の表示や削除は、「個人用設定」ページで行えます。

別のユーザーの資格情報を表示するには、そのユーザーのアカウントに対する読み 取り権限と通過権限が必要です。データ・ソース資格情報を削除するには、そのユ ーザーのアカウントに対する読み取り権限、書き込み権限、および通過権限が必要 です。

# データ・ソース資格情報の保存

自分のデータ・ソース資格情報を保存しておくと、入力を求めるプロンプトが毎回 表示されなくなります。

### 手順

- 1. データ・ソース資格情報の入力を求めるプロンプトが表示された場合、ユーザー ID とパスワードを入力します。
- 2. 「このデータ・ソースに接続する際のユーザー ID とパスワードを記憶する」 チェック・ボックスをオンにします。
- 3. 「**OK**」をクリックします。

# タスクの結果

これで、データ・ソース資格情報が必要な操作を次回に実行すると、データ・ソー ス資格情報が削除されたり期限切れでない限り、入力を求めるプロンプトは表示さ れません。

# データ・ソース資格情報の表示と削除

データ・ソース資格情報を表示したり削除したりできます。

### 手順

- 1. 「個人用領域のオプション」、「個人用設定」をクリックします。
- 2. 「個人用」タブをクリックします。

自分のデータ・ソース資格情報が「データ・ソースの資格情報」にリスト表示さ れます。リストは、「データ・ソース名」または「データ・ソース接続名」でソ ートすることができます。

3. データ・ソース資格情報を削除するには、データ・ソース資格情報のチェック・ ボックスをオンにし、「削除」をクリックします。

# 第 13 章 保護されている機能と特性

機能領域とも呼ばれる保護されている機能領域とその機能領域内の保護されている 特性は、IBM Cognos ソフトウェアのユーザー・インターフェースのさまざまな管 理タスクやさまざまな機能領域へのアクセスを制御します。

保護されている機能の例は、「管理」や「**Reporting**」などです。保護されている特 性の例は、「ユーザー定義 **SQL**」や「バースト」などです。

ログオン時に、Content Manager によってユーザーの権限が読み取られます。保護 されている機能と特性に対する権限に応じて、ユーザーは IBM Cognos ソフトウェ アの特定のコンポーネントにアクセスしたり、特定のタスクを実行したりすること ができます。

Content Store の初期化時に、保護されている機能と特性に対する初期権限が作成 されます。権限によって、提供されている既定の Cognos グループや役割にアクセ スが許可される保護されている機能と特性、アクセスの種類が定義されます。組み 込みの"システム管理者"役割には"すべてのユーザー"グループがメンバーシップに含 まれるため、初期権限では IBM Cognos ソフトウェアに対する無制限のアクセス権 が付与されます。機能に対するアクセスの設定を開始する前に、"システム管理者"の メンバーシップから"すべてのユーザー"グループを削除する必要があります。詳細に ついては、 255 ページの『第 15 章 セキュリティーの初期設定』を参照してくだ さい。

「所有者として実行」オプションを使用してレポートを実行する場合、所有者の機能はバーストおよび HTML 形式でのレポート・レイアウト・プロパティーに使用されます。その他のすべての機能は、レポートを実行するユーザーに基づきます。

管理者は、IBM Cognos Administration の「セキュリティー」タブにある「機 能」ページを使用して、保護されている機能と特性へのアクセス権を設定します。 詳細については、 246 ページの『保護されている機能または特性に対するアクセス 権の設定』を参照してください。

ユーザーは、自分が使用できる保護されている機能と特性のリストを、「個人用設 定」の「個人用」タブで確認できます。

詳細については、 475 ページの『機能に対する初期アクセス権』を参照してください。

### Adaptive Analytics

この保護されている機能により、Adaptive Analytics を使用してパッケージ化され たレポートへのアクセスを制御します。

## Administration

この保護されている機能には、IBM Cognos ソフトウェアの管理に使用される管理 ページへのアクセスを制御する、保護されている特性が含まれています。システム 管理者はこの機能を利用して、管理タスクを別の管理者に委任できます。

以下の保護されている特性は、この機能に関連付けられています。

• Adaptive Analytics 管理

Adaptive Analytics にアクセスし、管理タスクを実行できます。

• 管理タスク

IBM Cognos Administration の「設定」タブで「コンテンツ管理」にアクセス し、エクスポート、インポート、整合性のチェック、レポートの更新を管理でき ます。

• システムの設定と管理

**IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで「システム」、および、 「設定」タブで「ディスパッチャーとサービス」にアクセスし、ディスパッチャ ーやサービスを設定したりシステムを管理したりできます。

• Controller 管理

IBM Cognos Controller の管理機能を使用できます。

• データ・ソース接続

IBM Cognos Administration の「設定」タブで「データ・ソース接続」にアク セスし、データ・ソース、接続、およびサインオンを定義できます。

• 配布リストと連絡先

**IBM Cognos Administration** の「設定」タブで「配布リストと連絡先」にアク セスし、配布リストと連絡先を管理できます。

• Mobile 管理

ユーザーは IBM Cognos Mobile のサービスおよびアプリケーションを管理できます。

• Planning 管理

IBM Cognos Planning - Contributor Administration Console および IBM Cognos Planning - Analyst にアクセスして、管理タスクを実行できます。

• PowerPlay サーバー

IBM Cognos Administration ページへの制限付きアクセス権が与えられます。 これには、PowerPlay ページへのアクセス権や PowerPlay のプロパティーを設 定できる権限も含まれます。

• プリンター

**IBM Cognos Administration** の「設定」タブで「プリンター」にアクセスし、 プリンターを管理できます。

• Query サービス管理
ユーザーは、IBM Cognos Administration の「状況」 > 「データ・ストア」 ページにアクセスし、動的キューブを管理できます。ユーザーは、キューブの開 始と停止、データ・キャッシュの更新、および Query サービス・タスクの作成 とスケジューリングなどの操作をキューブで実行できます。

• 処理とスケジュールの実行

IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで「現在の処理」、「過去 の処理」、「予定されている処理」、および「スケジュール」にアクセスし、サ ーバーの処理を監視したりスケジュールを管理したりできます。監視機能とは無 関係にスケジュール機能へのアクセス権を付与するには、スケジュール機能を使 用します。

• 機能の設定とユーザー・インターフェース・プロファイルの管理

**IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで「機能」および「ユ ーザー・インターフェースのプロファイル」にアクセスすると、保護されている 機能と特性、および Reporting ユーザー・インターフェース・プロファイルを管 理できます。

• スタイルとポートレット

**IBM Cognos Administration** の「設定」タブで「スタイル」および「ポートレット」にアクセスし、スタイルとポートレットを管理できます。

• ユーザー、グループ、および役割

**IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで「ユーザー、グルー プ、および役割」にアクセスし、ネームスペース、ユーザー、グループ、役割を 管理できます。

#### Analysis Studio

この保護されている機能では、IBM Cognos Analysis Studio へのアクセスが制御 されます。この Studio に対するアクセス権を持つユーザーは、ディメンション・ データの閲覧、分析、比較、大規模なデータ・ソースにおける有益な情報の検索、 およびビジネス上の問題に対する回答を行います。

#### **Cognos Viewer**

この保護されている機能では、レポートの表示に使用する IBM Cognos Viewer へのアクセスを制御します。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

• ショートカット・メニュー

ユーザーは IBM Cognos Viewer でショートカット・メニューを使用できます。

注:ショートカット・メニューを表示するには、保護されている特性である「選 択」と「ショートカット・メニュー」の両方に対するアクセス権が必要です。

• オプションを指定して実行

ユーザーはデフォルトの実行オプションを変更できます。ユーザーがこの機能を 実行する権限を持っていない場合、レポートに「オプションを指定して実行」

▶ アイコンは表示されません。

選択

ユーザーはリストおよびクロス集計のテキストを選択できます。

• ツールバー

ユーザーは IBM Cognos Viewer ツールバーを表示できます。

## 共同作業

この保護されている機能では、IBM Cognos から IBM Connections へのアクセス が制御されます。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

コラボレーション・ツールを起動

この保護されている特性により、Cognos Workspace の「ご利用の手引き」ペー ジや「操作」メニューなど、IBM Cognos Analytics 環境内のすべての「起動」 メニューから、ユーザーは IBM Connections を起動できます。リンクをクリッ クすると、ユーザーの IBM Connections ホーム・ページ (設定されている場合) または「アクティビティー」が表示されます。

• コラボレーション機能を許可

この保護されている特性により、 Cognos Workspace 内の「共同作業」アイコ ンおよび IBM Connections の検索結果へのアクセスが制御されます。ユーザー は、Cognos Workspace 内からアクティビティーを作成または表示するためのア クセス権を持っている必要があります。

## **Controller Studio**

この保護されている機能では、IBM Cognos Controller へのアクセスが制御されます。

## ダッシュボード

この保護されている機能では、「新規」 >「ダッシュボード」および「新規」 > 「ストーリー」機能へのアクセスが制御されます。ユーザーには、ダッシュボード とストーリーの両方を作成または表示するための、「ダッシュボード」機能の実行 権限が必要です。実行権限と共にデフォルトで付与される役割のリストが、 481 ペ ージの『「ダッシュボード」機能』セクションにあります。

#### Data Manager

この保護されている機能では、Data Manager へのアクセスが制御されます。

## データ・セット

この保護されている機能では、パッケージとデータ・モジュールのショートカット・メニューから使用できる「データ・セットの作成」メニューへのアクセスが制 御されます。

## デスクトップ・ツール

この保護されている機能では、Cognos デスクトップ・ツール製品へのアクセスが 制御されます。この機能を付与されたユーザーは、Analytics エクスプローラー役割 のメンバーです。 Cognos Analysis For Microsoft Excel、Cognos Framework Manager、Cognos Cube Designer および Dynamic Query Analyzer、Transformer、TM1 Writeback to bundled FLBI TM1 サーバーにもア クセス可能です。

## 詳細なエラー

この保護されている機能では、Web ブラウザーの詳細なエラー・メッセージの表示 に対するアクセスが制御されます。

## ドリルスルー・アシスタント

この保護されている機能では、ドリルスルー「移動」ページにあるドリルスルー・ デバッグ機能、およびドリルスルー定義へのアクセスが制御されます。この機能を 持っているユーザーには、各ドリルスルー・ターゲットの「移動」ページで追加情 報が表示されます。この情報は、ドリルスルー定義をデバッグするのに役立ち、 Cognos Software Services の担当者に転送することもできます。

#### **Event Studio**

この保護されている機能では、Event Studio へのアクセスが制御されます。

## エグゼクティブ・ダッシュボード

この保護されている機能では、 IBM Cognos Workspace へのアクセスが制御され ます。この機能へのアクセス権を持つユーザーには、Cognos Workspace のワーク スペースへの基本的なアクセス権が付与されます。このタイプのアクセス権を持つ ユーザーは、ワークスペースの表示、ワークスペース・データのドリルアップまた はドリルダウン、コメントの追加、ワークスペースの印刷、スライダー・フィルタ ーの使用、および値フィルターの選択を実行できます (これらのフィルターがワー クスペースに含められている場合)。

「エグゼクティブ・ダッシュボード」機能に関連付けられた、保護されている以下 の機能を使用すると、ワークスペースに対するより広範囲な権限が付与されます。

• 拡張ダッシュボード機能の使用

この機能を使用して、ユーザーにワークスペースの最大権限を付与します。

• 対話式ダッシュボード機能の使用

この機能を使用して、ウィジェット・データを対話式に操作できるワークスペー スの機能にアクセスする権限をユーザーに付与します。この権限には、ウィジェ ットのオンデマンド・ツールバーへのアクセス権も含まれます。このツールバー には、行や列のソート、削除、リセット、スワップ、レポート表示タイプの変更 など、レポート・データを対話式に操作するオプションがあります。

#### 外部リポジトリー

この保護されている機能では、外部リポジトリーへのアクセスが制御されます。外 部リポジトリーにより、レポート・コンテンツを長期間保管できます。外部リポジ トリーへの接続をパッケージまたはフォルダーに指定すると、出力レポート・バー ジョンがリポジトリーに自動的にコピーされます。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

• リポジトリー接続の管理

データ・ソース接続が既に存在している場合、ユーザーはパッケージまたはフォ ルダーにリポジトリー接続を設定できます。

• 外部ドキュメントの表示

ユーザーは、外部リポジトリーに保管されているレポート出力を表示できます。

#### CSV 出力の生成

この保護された機能に対する権限がある場合、ユーザーは区切り文字で区切られた テキスト (CSV) 形式のレポート出力を生成できます。この機能がない場合、ユーザ ー・インターフェースには、レポートを CVS 形式で実行するためのオプションが 表示されません。

## PDF 出力の生成

この保護された機能に対する権限がある場合、ユーザーは PDF 形式のレポート出力を生成できます。この機能がない場合、ユーザー・インターフェースには、レポートを PDF 形式で実行するためのオプションが表示されません。

## XLS 出力の生成

この保護された機能に対する権限がある場合、ユーザーは Microsoft Excel スプレ ッドシート (XLS) 形式のレポート出力を生成できます。この機能がない場合、ユー ザー・インターフェースには、レポートを XLS 形式で実行するためのオプション が表示されません。

#### XML 出力の生成

この保護された機能に対する権限がある場合、ユーザーは XML 形式のレポート出力を生成できます。この機能がない場合、ユーザー・インターフェースには、レポートを XML 形式で実行するためのオプションが表示されません。

#### 用語集

この保護されている機能では、IBM InfoSphere Business Glossary へのアクセスが 制御されます。

## エントリーの非表示

この保護されている機能では、ユーザーが IBM Cognos ソフトウェアでエントリー を非表示にしたり、非表示エントリーを表示したりできることを指定します。

「このエントリーを非表示にする」チェック・ボックスは、エントリーのプロパティー・ページの「全般」タブに表示されます。「非表示のエントリーを表示」チェック・ボックスは、ユーザー・プロファイルの「設定」タブ、および「個人用領域のオプション」

リレーショナル・メタデータのインポート

グループが動的クエリー・モードを使用して、Framework Manager プロジェクト または Dynamic Cube Designer プロジェクトにリレーショナル・メタデータをイ ンポートできることを指定します。

デフォルトでは、System Administrator、Directory Administrator、および Report Administrators グループはこの保護された機能に属しています。

他のグループが、リレーショナル・メタデータを動的クエリー・モード・プロジェ クトにインポートする機能を必要とする場合、それらのグループをその機能に追加 する必要があります。例えば、Framework Manager Users グループを作成しその グループに Framework Manager ユーザーを追加する場合、保護された機能「リレ ーショナル・メタデータのインポート」にそのグループを追加する必要もありま す。

## 系統

この保護されている機能では、「系統」操作へのアクセスが制御されます。この機 能を使用して、IBM Cognos Viewer、または Reporting、Query Studio、Analysis Studio のソース・ツリーからデータまたはメタデータのアイテムに関する情報を表 示します。

## コンテンツの管理

この保護されている機能では、「管理」の「コンテンツ」タブへのアクセスが制御 されます。

#### 自分のデータ・ソース・サインオンの管理

この保護されている機能では、「個人用設定」の「個人用」タブにあるデータ・ソ ース資格情報の管理が制御されます。

#### Mobile

この保護されている機能では、 IBM Cognos Mobile へのアクセスが制御されます。

#### Planning Contributor

この保護されている機能では、IBM Cognos Planning - Contributor および IBM Cognos Planning - Analyst へのアクセスが制御されます。

## **PowerPlay Studio**

この保護されている機能では、PowerPlay Studio へのアクセスが制御されます。

#### **Query Studio**

この保護されている機能では、Query Studio に対するアクセスが制御されます。 Query Studio は、テーマやニーズに応じた簡単なレポートを素早く作成する際に使 用します。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

作成

レポートを新規に作成できます。また、新規レポートやカスタム・ビューに対し て「名前を付けて保存」オプションを使用できます。

詳細

複雑なフィルターの作成、スタイルの形式の設定、多言語のサポートなどの高度 なオーサリング機能を使用できます。

## **Report Authoring**

この保護されている機能によって、Reporting ユーザー・インターフェースおよび 基礎となるレポート実行機能へのアクセスが制御されます。Reporting ユーザー・ インターフェースにアクセスするユーザーには、この保護されている機能に対する 実行権限が必要です。関連する保護されている機能 (例えば、カスタム SQL または 埋め込み HTML を使用して作成されたレポートの実行など)を使用するために、 この保護されている機能に対する通過権限または読み取り権限が必要になることが あります。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

• 外部データを許可

ユーザーは、レポートに外部データを使用できます。

• バースト

ユーザーは、バースト・レポートの作成と実行を行えます。

• 作成/削除

ユーザーは、レポートの新規作成、新規レポートおよびレポート・ビューに対する [名前を付けて保存]オプションの使用、モデルの変更が可能です。

• レポートの HTML アイテム

ユーザーは、レポートの作成時にレポート仕様の HTMLItem ボタンおよびハイ パーリンク要素を使用できます。

ユーザー定義 SQL

ユーザーは、クエリー仕様内の SQL 文を直接編集し、編集した SQL 文が含ま れているクエリー仕様を実行できます。 ヒント: この機能を使用できるユーザーの制限は Framework Manager には適用されません。例えば、IBM Cognos Administration の「ユーザー定義 SQL」権限を持たない Framework Manager ユーザーでも、クエリー・サブジェクトの作成や、手動で作成した SQL クエリーの使用によるデータベースの検索が可能です。

#### スケジュール

この保護されている機能では、レポートなどの実行可能なアイテムに対するスケジ ュール機能へのアクセスが制御されます。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

• 日単位のスケジュール

ユーザーは、日単位でエントリーをスケジュールできます。

• 時間単位のスケジュール

ユーザーは、時間単位でエントリーをスケジュールできます。

• 分単位のスケジュール

ユーザーは、分単位でエントリーをスケジュールできます。

「分単位のスケジュール」機能へのアクセスが拒否されたユーザーは、分単位の スケジュールが可能な他の機能 (「月単位のスケジュール」機能など)の単位の スケジュールも拒否されます。

• 月単位のスケジュール

ユーザーは、月単位でエントリーをスケジュールできます。

トリガー単位のスケジュール

ユーザーは、トリガーに基づいてエントリーをスケジュールできます。

• 週単位のスケジュール

ユーザーは、週単位でエントリーをスケジュールできます。

• 年単位のスケジュール

ユーザーは、年単位でエントリーをスケジュールできます。

• スケジュール優先度

ユーザーはスケジュールされたエントリーの処理の優先度を設定および変更でき ます。

#### セルフサービス・パッケージ・ウィザード

この保護されている機能では、パッケージの作成に使用できるデータ・ソースの選 択が制御されます。

#### エントリー固有の機能の設定

この保護されている機能では、ユーザーがエントリー・レベルで機能を設定できる ように指定します。 この機能を使用できるユーザー、およびエントリーに対するポリシー設定権限を持 っているかエントリーを所有しているユーザーの場合、パッケージとフォルダーの 「プロパティーを設定」ページに、「機能」タブが表示されます。

## 仕様の実行

この保護されている機能では、ユーザーまたは Software Development Kit アプリ ケーションがインライン仕様を使用できることが指定されます。

IBM Cognos Analytics の Studio/Authoring ツールといくつかのサービスでは、 内部でインライン仕様を使用してタスクを実行します。この仕様を実行するサービ スは、ユーザーがインライン仕様を使用する権限があるかどうかを確認するために 多数の機能をテストします。詳細については、「*Developer Guide*」で runSpecification メソッドを参照してください。

## ファイルのアップロード (Upload files)

この保護されている機能では、「ファイルのアップロード (Upload files)」機能へのアクセスが制御されます。この機能を使用できるユーザーは、データ・ファイルをアップロードできます。

## 監視規則

この保護されている機能では、「個人用監視アイテム」にある「規則」タブへのア クセスが制御されます。この保護されている機能を使用して、監視規則を作成およ び実行します。

## Web ベース・モデリング (Web-based modeling)

この保護されている機能では、Web ベース・モデリング機能へのアクセスが制御されます。この機能を使用できるユーザーは、「新規」 > 「データ・モジュール (Data module)」メニューからデータ・モジュールを作成できます。

## 保護されている機能または特性に対するアクセス権の設定

保護されている機能と特性に対するアクセス権を設定するには、その保護されてい る機能や特性の実行権限を特定のネームスペース、ユーザー、グループ、または役 割に付与します。

通常、特性に実行権限を付与し、その親である保護されている機能に通過権限を付 与します。例えば、Reporting とそのすべての機能へのアクセス権を付与するに は、保護されている機能である「Reporting」に対する実行権限を付与します。 Reporting の中で保護されている特性である「作成/削除」のみにアクセス権を付与 する場合は、保護されている機能「Reporting」に対する通過権限と、保護されてい る特性「作成/削除」に対する実行権限を付与します。

## 始める前に

保護されている機能と特性を管理するには、ポリシー設定権限が必要です。機能の 管理は通常、ディレクトリー管理者が行います。 機能に対する権限の設定を開始する前に、初期セキュリティー設定が変更済みであ ることを確認します。

## 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 2. 「セキュリティー」タブで「機能」をクリックします。

使用できる保護された機能のリストが表示されます。

- 3. 機能と特性のどちらに対するアクセス権を設定するかを選択します。
  - 機能のアクセスを設定するには、機能名の「操作」ボタン・
     をクリックし、「プロパティーを設定」をクリックします。
  - 特性に対するアクセスを設定するには、特性名の「操作」ボタンをクリックして、「プロパティーを設定」をクリックします。

ヒント:保護されている特性を備えている機能にはリンクが設定されています。

- 4. 「権限」タブをクリックします。
- 5. 親エントリーの権限を使用するか、別の権限を指定するかを選択します。
  - 親エントリーの権限を使用する場合は、「親エントリーから取得したアクセス権をオーバーライド」チェック・ボックスをオフにし、「OK」をクリックします。
  - エントリーのアクセス権を明示的に設定するには、「親エントリーから取得したアクセス権をオーバーライド」チェック・ボックスをオンにし、残りの手順を実行します。
- 6. リストからエントリーを削除するには、そのエントリーのチェック・ボックス をオンにして「削除」をクリックします。

ヒント:ページ内のすべてのエントリーを選択、または選択解除するには、 「すべて選択」または「すべての選択を解除」をクリックします。

- 7. リストに新しいエントリーを追加する場合は、「追加」をクリックし、エント リーの選択方法を選びます。
  - リスト・エントリーから選択するには、適切なネームスペースをクリックして、対象となるユーザー、グループ、または役割のチェック・ボックスを選択します。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
  - 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユー ザー名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

8. 右向きの矢印ボタンをクリックし、目的のエントリーが「選択されたエントリー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ヒント:「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての 項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザ ー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリック します。

- 9. 機能または特性に対するアクセス権を設定するエントリーの隣にあるチェッ ク・ボックスをオンにします。
- 10. リストの横にあるボックスで、適切なチェック・ボックスにチェック・マーク

を付けて、エントリーに対する実行権限 🚱 を付与します。

11. 「適用」をクリックします。

「権限」列で、ネームスペース、ユーザー、グループ、または役割の横に、付 与されている実行権限を示すアイコンが表示されます。

- 12. 各エントリーについて、手順 8~10 を繰り返します。
- 13. 「**OK**」をクリックします。

# 第14章 オブジェクト機能

オブジェクト機能は、さまざまなパッケージに対して、ユーザー、グループ、役割 が使用できる保護された機能と特性を指定するものです。例えば、どの Studio/Authoring ツールを使用してユーザーがパッケージを開けるか、このパッケ ージでユーザーが作業するときに、どの Studio/Authoring ツールの機能を使用で きるかを定義します。

保護されている機能と特性はグローバル機能とも呼ばれ、IBM Cognos ソフトウェ アのさまざまなコンポーネントや機能に対するアクセスを制御します。オブジェク ト機能が正しく動作するためには、該当するグローバル機能と組み合わせて使用す る必要があります。例えば、Reporting と Query Studio のレポートを含むパッケ ージに対してオブジェクト機能を設定する場合は、Reporting と Query Studio の 保護されている機能と、これらの機能に該当する保護されている特性にユーザーが アクセスできるようにしておく必要があります。

Framework Manager などのクライアント・ツールから既存パッケージを再発行しても、以前に指定したパッケージ機能が上書きまたは変更されることはありません。

オブジェクト機能は、保護されている機能である「エントリー固有の機能の設定」 で制御されます 245 ページの『エントリー固有の機能の設定』。

個々のパッケージに対して、次のオブジェクト機能を設定 251 ページの『パッケー ジに対するオブジェクト機能の設定』できます。

## Adaptive Analytics

この保護されている機能により、Adaptive Analytics を使用してパッケージ化され たレポートへのアクセスを制御します。

## Administration

この保護されている機能では、IBM Cognos ソフトウェアの管理ページへのアクセ スが制御されます。「管理」内の次の保護されている特性に対して、オブジェクト 機能を指定できます。

• Adaptive Analytics 管理

Adaptive Analytics にアクセスし、管理タスクを実行できます。

• Planning 管理

IBM Cognos Planning - Contributor Administration Console および IBM Cognos Planning - Analyst にアクセスして、管理タスクを実行できます。

## Event Studio

この保護されている機能では、Event Studio へのアクセスが制御されます。

## 用語集

この保護されている機能では、IBM InfoSphere Business Glossary へのアクセスが 制御されます。

## **Planning Contributor**

この保護されている機能では、IBM Cognos Planning - Contributor および IBM Cognos Planning - Analyst へのアクセスが制御されます。

## **PowerPlay Studio**

この保護されている機能では、PowerPlay Studio へのアクセスが制御されます。

## **Query Studio**

この保護されている機能では、Query Studio に対するアクセスが制御されます。 Query Studio は、テーマやニーズに応じた簡単なレポートを素早く作成する際に使 用します。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

• 作成

レポートを新規に作成できます。また、新規レポートやカスタム・ビューに対し て「名前を付けて保存」オプションを使用できます。

詳細

複雑なフィルターの作成、スタイルの形式の設定、多言語のサポートなどの高度 なオーサリング機能を使用できます。

## **Report Authoring**

この保護されている機能によって、Reporting ユーザー・インターフェースおよび 基礎となるレポート実行機能へのアクセスが制御されます。Reporting ユーザー・ インターフェースにアクセスするユーザーには、この保護されている機能に対する 実行権限が必要です。関連する保護されている機能 (例えば、カスタム SQL または 埋め込み HTML を使用して作成されたレポートの実行など)を使用するために、 この保護されている機能に対する通過権限または読み取り権限が必要になることが あります。

この機能に関連付けられた保護されている特性は、次のとおりです。

外部データを許可

ユーザーは、レポートに外部データを使用できます。

バースト

ユーザーは、バースト・レポートの作成と実行を行えます。

• 作成/削除

ユーザーは、レポートの新規作成、新規レポートおよびレポート・ビューに対する [名前を付けて保存] オプションの使用、モデルの変更が可能です。 • レポートの HTML アイテム

ユーザーは、レポートの作成時にレポート仕様の HTMLItem ボタンおよびハイ パーリンク要素を使用できます。

ユーザー定義 SQL

ユーザーは、クエリー仕様内の SQL 文を直接編集し、編集した SQL 文が含ま れているクエリー仕様を実行できます。

ヒント: この機能を使用できるユーザーの制限は Framework Manager には適 用されません。例えば、IBM Cognos Administration の「ユーザー定義 SQL」権限を持たない Framework Manager ユーザーでも、クエリー・サブジ ェクトの作成や、手動で作成した SQL クエリーの使用によるデータベースの検 索が可能です。

## 系統

この保護されている機能では、「系統」操作へのアクセスが制御されます。この機 能を使用して、IBM Cognos Viewer、または Reporting、Query Studio、Analysis Studio のソース・ツリーからデータまたはメタデータのアイテムに関する情報を表 示します。

## 仕様の実行

この保護されている機能では、ユーザーまたは Software Development Kit アプリ ケーションがインライン仕様を使用できることが指定されます。

IBM Cognos Analytics の Studio/Authoring ツールといくつかのサービスでは、 内部でインライン仕様を使用してタスクを実行します。この仕様を実行するサービ スは、ユーザーがインライン仕様を使用する権限があるかどうかを確認するために 多数の機能をテストします。詳細については、「*Developer Guide*」で runSpecification メソッドを参照してください。

## 監視規則

この保護されている機能では、「個人用監視アイテム」にある「規則」タブへのア クセスが制御されます。この保護されている機能を使用して、監視規則を作成およ び実行します。

# パッケージに対するオブジェクト機能の設定

この機能は、特定のパッケージに対して、ユーザー、グループ、役割が使用できる 保護された機能と特性を指定する場合に使用します。

オブジェクト機能はパッケージ・レベルで指定できます。パッケージがフォルダー に格納されている場合は、フォルダー・レベルでも指定できます。フォルダー・レ ベルで指定された機能は、当該フォルダーおよびサブフォルダー内のパッケージに のみ適用され、レポートを含む他のエントリーには適用されません。例えば、フォ ルダーにパッケージとレポート、および他のパッケージとレポートを含むサブフォ ルダーが含まれている場合は、フォルダーおよびサブフォルダー内のパッケージの みが機能設定の影響を受けます。 以下の機能は、グローバルに適用され、フォルダー・ベースでフォルダーに対して は設定できません。

- CSV 出力の生成
- PDF 出力の生成
- XLS 出力の生成
- XML 出力の生成

#### 始める前に

オブジェクト機能を使用するには、ユーザーが次の条件を満たしている必要があり ます。

- パッケージに関連付けられている、保護されている機能と特性にアクセスできる (237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』)
- 保護されている機能である「オブジェクト機能」にアクセスできる(245 ページの『エントリー固有の機能の設定』)
- パッケージに対するポリシー設定権限 223 ページの『第 12 章 アクセス権と資 格情報』があるか、パッケージを所有している

IBM Cognos ソフトウェアをインストールした後、最初にオブジェクト機能を設定 するときには、「共有フォルダー」から始めることを推奨します。「共有フォルダ ー」の機能はグローバル機能をミラーしたものにすることを推奨します。これによ って、どのオブジェクト機能をさらに微調整していくかに関して、正確なベースラ インが提供されます。

## 手順

1. パッケージまたはフォルダーのプロパティー・ページを開きます。

ヒント:「共有フォルダー」のオブジェクト機能を設定する際は、製品ツールバ

- ーにある「プロパティー」ボタン レーン をクリックします。「共有フォルダ ー」は、Cognos Analytics バージョン 11.0.x で「チーム・コンテンツ」に置 き換えられました。
- 2. 「機能」タブをクリックします。
- 3. 「親エントリーから取得した機能を上書き」チェック・ボックスをオンにしま す。
- 4. 「名前」と「機能」リストで、オブジェクト機能を指定するユーザー、グループ、または役割の横のチェック・ボックスにチェックを入れます。

該当するユーザー、グループ、または役割がリストにない場合は、「追加」をク リックします。リストからユーザー、グループ、または役割を削除するには、対 応するチェック・ボックスをオンにして「削除」をクリックします。

このリストにエントリーを追加または削除する方法の詳細については、 231 ペ ージの『エントリーに対するアクセス権の設定』の手順を参照してください。

 「付与」および「拒否」リストで、該当するチェック・ボックスにチェックを入 れたり外したりして、ユーザー、グループ、または役割に必要なオブジェクト機 能を付与または拒否します。 付与または拒否された機能を表すアイコンが、ユーザー、グループ、役割の名前 の横に表示されます。保護されている機能へのアクセスを拒否すると、この機能 のすべての保護されている特性へのアクセスも自動的に拒否されます。

6. 必要に応じて、「すべての子エントリーの機能を削除」チェック・ボックスをオ ンにします。

このオプションを使用すると、エントリーの階層、例えば、フォルダー内のすべ てのパッケージにオブジェクト機能が指定されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

# 第15章 セキュリティーの初期設定

Content Store を初期化すると、一連のセキュリティー・オブジェクトが作成され、Cognos ネームスペースに格納されます。これらのオブジェクトは、IBM Cognos の管理を簡素化するように設計されています。

初期状態のセキュリティー・ポリシーでは、Content Store 内のオブジェクトすべ てに対する無制限のアクセスが全ユーザーに許可されます。このため、セキュリテ ィー管理者はセキュリティーの初期設定を変更して、Content Store を保護する必 要があります。詳細については、 267 ページの『インストール後のセキュリティー 設定』を参照してください。

Content Manager オブジェクトに対する初期アクセス権の概要については、 473 ページの『付録 C. 初期アクセス権』を参照してください。

## 組み込みのエントリー

組み込みのエントリーには、「匿名ユーザー」アカウント、「全認証済みユーザ ー」グループ、「すべてのユーザー」グループ、および「システム管理者」役割と 「テナント管理者」役割があります。組み込みのエントリーは削除できません。組 み込みのエントリーは、セキュリティー保護された環境とそうでない環境の両方に 表示されます。

## 匿名

このエントリーは、認証なしで IBM Cognos ソフトウェアにアクセスできる一般ユ ーザーが共有するユーザー・アカウントを表します。匿名アカウントは、オンライ ン・カタログを配布するときなどに便利です。

匿名ユーザーは、アクセス権が設定されていないか、匿名アカウント専用のアクセ ス権または"すべてのユーザー"グループ用のアクセス権が設定されているエントリー のみ参照できます。

"匿名ユーザー"アカウントを無効にするには設定ツールで設定パラメーターを変更します。

## 全認証済みユーザー

このグループは、認証プロバイダーによって認証されたユーザーを表します。この グループに属するメンバーは製品によって管理され、表示や変更はできません。

このグループは配布できません。詳細については、 311 ページの『Cognos グルー プと役割の添付』を参照してください。 すべてのユーザー

このグループは、すべての"全認証済みユーザー"と"匿名ユーザー"アカウントを表し ます。このグループに属するメンバーは製品によって管理され、表示や変更はでき ません。

"すべてのユーザー"グループを使用すると、デフォルトのセキュリティーを簡単に設 定できます。例えば、レポートを保護するには、"すべてのユーザー"グループに、そ のレポートに対する読み取り、書き込み、または実行権限を付与します。このセキ ュリティーを設定したら、他のユーザー、グループ、および役割に対してこのレポ ートへのアクセスを許可し、このレポートのセキュリティー・ポリシーから"すべて のユーザー"グループを削除します。すると、指定したユーザー、グループ、および 役割に対してのみ、そのレポートへのアクセスが許可されます。

"すべてのユーザー" グループを使用して配布時にセキュリティーを適用することは 可能です (304 ページの『セキュリティーと配布』を参照してください)。しかし、 "すべてのユーザー" グループ自体を配布することはできません。詳細については、 311 ページの『Cognos グループと役割の添付』を参照してください。

## システム管理者

これは、IBM Cognos ソフトウェアでの特別な役割です。この役割に属するメンバーは、ルート・ユーザーまたはスーパーユーザーとみなされます。これらのユーザーは、Content Store 内のすべてのオブジェクトを、そのオブジェクトに設定されているセキュリティー・ポリシーに関係なくアクセスし、変更できます。"システム管理者"役割に属するメンバーを変更できるのは、この役割に属するメンバーのみです。

"システム管理者"役割を空にすることはできません。"システム管理者"を使用しない 場合は、Cognos ネームスペースまたは認証プロバイダー内に空のグループを作成 し、この空のグループを"システム管理者"役割のメンバーとして追加します。

Content Store の初期化中にこの役割が作成される際、"すべてのユーザー"グループ はこの役割のメンバーになります。したがって、すべてのユーザーが Content Store に対して無制限のアクセス権を持ちます。IBM Cognos ソフトウェアのイン ストールと設定を完了後すぐに、この役割に対するセキュリティーの初期設定を変 更し、"すべてのユーザー"グループをメンバーから削除する必要があります。詳細に ついては、 267 ページの『インストール後のセキュリティー設定』を参照してくだ さい。

この役割は配布できます。これには、Cognos のグループと役割が含まれます。詳 細については、 311 ページの『Cognos グループと役割の添付』を参照してください。

#### テナント管理者

この役割は、マルチテナント IBM Cognos 環境で使用されます。この役割のメンバーは、複数のテナントを管理できます。

Content Store の初期化中にこの役割が作成されるときには、メンバーも機能もあ りません。システム管理者だけが、この役割のメンバーの追加、アクセス権と機能 の割り当てを行えます。

## あらかじめ定義されている役割

あらかじめ定義されている役割には、いくつかの IBM Cognos の役割があります。 各役割にはアクセス権の特定のセットがあり、役割を使用することにより、IBM Cognos ソフトウェアの各種コンポーネントと機能を保護できます。あらかじめ定 義されている役割を使用することも、それを削除することもできます。

Content Store の初期化中にあらかじめ定義されている役割が作成される際、「す べてのユーザー」グループは「システム管理者」役割のメンバーになります。例え ば、"使用者"、"クエリー・ユーザー"、"分析のユーザー"、"作成者"などの役割が考 えられます。あらかじめ定義されている役割を使用する場合、IBM Cognos ソフト ウェアのインストールと構成後すぐに、初期メンバーシップを変更する必要があり ます。詳細については、267 ページの『インストール後のセキュリティー設定』を 参照してください。

あらかじめ定義されている Cognos 役割には、非ライセンス役割とライセンス役割 の 2 つのタイプがあります。

## 非ライセンス役割

以下の表に、ライセンス条件に基づかない、あらかじめ定義されている Cognos 役 割をまとめます。

非ライセンス役割	説明
Adaptive Analytics 管理者	メンバーは、Adaptive Analytics を使用してパッケージ化 されたレポートを管理できる。
Adaptive Analytics ユーザー	メンバーは、Adaptive Analytics を使用してパッケージ化 されたレポートを使用できる。
分析のユーザー	メンバーは、使用者と同じアクセス権を持ち、IBM Cognos Analysis Studio を使用できる。
作成者	メンバーは、クエリー・ユーザーおよび分析のユーザーと同 じアクセス権を持つ。Reporting、Query Studio、Analysis Studio を使用して、レポートや出力レポートなどの公開コ ンテンツを保存できます。
使用者	メンバーは、レポートなどの公開コンテンツの読み取りと実 行ができる。
Controller 管理者	メンバーは、IBM Cognos Controller のメニューへの完全 なアクセス権を持ち、個々の IBM Cognos Controller ユー ザーを作成し、各ユーザーの制限を定義できる。
Controller ユーザー	メンバーは、IBM Cognos Controller のメニューへの全般 的なアクセス権を持つ。
Data Manager 作成者	メンバーは、Data Manager メニューへの全般的なアクセス 権を持ちます。

表 57. あらかじめ定義されている Cognos 非ライセンス役割

表 57. あらかじめ定義されている Cognos 非ライセンス役割 (続き)

非ライセンス役割	説明
ディレクトリー管理者	メンバーは、ネームスペースの内容を管理できる。Cognos ネームスペース内のグループ、アカウント、連絡先、配布リ スト、データ・ソース、プリンターを管理します。
エクスプレス作成者	メンバーは、アクティブ・レポートを含むバースト・レポー トの出力を受け取ったり、スケジュールされたレポートを表 示することができます。IBM Cognos Portal および IBM Cognos Mobile アプリケーションにアクセスすることもで きます。
ライブラリー管理者	メンバーは、IBM Cognos Administration の「ライブラリ ー」タブの内容のアクセス、インポート、および管理を行え る。
評価指標管理者	メンバーは、評価指標パッケージおよびタスクを管理でき る。
Mobile ユーザー	メンバーは、IBM Cognos Mobile アプリケーションを介し て、レポートなどの IBM Cognos コンテンツにアクセスで きます。
Mobile 管理者	メンバーは、IBM Cognos Mobile アプリケーションを管理 できます。
モデル作成者	メンバーは、モデリング・ユーザー・インターフェースを使 用して、データ・モジュールを作成、管理できます。
ポータル管理者	メンバーは、Cognos のポートレットと他のポートレットを 管理できる。これにはポートレットのカスタマイズ、ポート レット・スタイルの定義、ポートレットに対するアクセス権 の設定が含まれます。ポータル管理者は、レポートまたはダ ッシュボードへの画像の追加などをユーザーが実行できるよ うにする拡張をアップロードすることもできます。
Planning Contributor ユーザ ー	メンバーは、Contributor Web クライアント、Contributor Add-in for Microsoft Excel、または Analyst にアクセスで きる。
Planning Rights 管理者	メンバーは、Contributor Administration Console、Analyst、および、アプリケーション内の関連付け られているすべてのオブジェクトにアクセスできる。
クエリー・ユーザー	メンバーは、使用者と同じアクセス権を持ち、IBM Cognos Query Studio を使用できる。
読者	メンバーは、IBM Cognos ソフトウェアに対する読み取り専 用権限を持つ。Content Store の部分に移動したり、ポータ ルに保存された出力レポートを表示したり、Cognos Viewer で保存された出力レポートのセルを選択したり、Cognos Viewer のショートカット・メニューを使用してドリルスル ーなどの操作を実行したりすることができます。
レポート管理者	メンバーは、フルアクセス権を持つ公開コンテンツを管理で きる。IBM Cognos Analytics - Reporting および IBM Cognos Query Studio を使用できる。
サーバー管理者	メンバーは、サーバー、ディスパッチャー、およびジョブを 管理できる。

## ライセンス役割

機能をライセンス条件にマップする際に役立つように、Cognos Analytics には、ラ イセンス資格に基づくあらかじめ定義されている役割も備わっています。

以下の表に、あらかじめ定義されているライセンス役割をまとめます。

表 58. あらかじめ定義されている Cognos ライセンス役割

ライセンス役割	説明
Analytics 管理者	メンバーは、Analytics エクスプローラーと同じアクセス権 を持ちます。IBM Software Development Kit にアクセスす ることもできます。
Analytics エクスプローラー	メンバーは、Analytics ユーザーと同じアクセス権を持ちま す。また、Planning Analytics for Microsoft Excel、Cognos Framework Manager、Cognos Cube Designer および Dynamic Query Analyzer、Transformer にもアクセスできます。
Analytics ユーザー	メンバーは、新しいレポート、ダッシュボード、ストーリ ー、新しいジョブ、データ・サーバー/ソース接続、または データ・モジュールを作成できます。レポートの実行、プロ ンプトへの応答、ファイルのアップロードを行うことができ ます。また、Cognos for Microsoft Office、Cognos Workspace、Cognos Event Studio、Cognos Query Studio、Cognos Analysis Studio にもアクセスできます。
情報配布ユーザー	メンバーは、レポートなどの公開コンテンツの読み取りがで きます。しかし、メンバーは公開コンテンツの実行はできま せん。

# ライセンスに基づくデフォルトの権限

IBM Cognos Analytics の「管理」 > 「ライセンス (Licences)」のライセンス・カ ウンターは、ユーザー、グループ、役割に付与される機能によって決まります。

注: デフォルトの権限に変更を加えると、ユーザーがデフォルトで付与されていない ライセンスに格上げすることができます。

以下の表は、ライセンスごとに付与される機能を示しています。機能は、保護された特性に分割されています。文字 X は、特定の保護された特性に対する権限が付与されていることを示します。

機能	保護された 特性	情報配布	Analytics ユーザー	Analytics エクスプロ ーラー	<b>Analytics</b> 管理者	注記
Adaptive Analytics		該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	
Adminis- tration			Х	Х	Х	

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能

				Analytics		
			Analytics	エクスプロ	Analytics	
	促進された	情報配布	ユーザー	ーラー	管理者	注記
機能	特性					
	Adaptive	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	
	Analytics 管理					
	管理タスク				Х	
	システムの 設定と管理				Х	
	Controller 管理	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	別個の IBM Connec- tions の資 格が必要
	データ・ソ ース接続		Х	X	Х	
	配布リスト と連絡先				Х	
	Metric Studio 管 理				Х	
	Mobile 管 理				Х	
	Planning 管理	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	別個の IBM Planning Contributor の資格が必 要
	PowerPlay サーバー		Х	X	Х	別個の PowerPlay ライセンス が必要
	プリンター				Х	
	Query サ ービス管理				Х	
	処理とスケ ジュールの 実行				Х	

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

機能	保護された 特性	情報配布	Analytics ユーザー	<b>Analytics</b> エクスプロ ーラー	<b>Analytics</b> 管理者	注記
	機能の設定 とユーザ ー・インタ ーフェー ス・プロフ ァイルの管 理				X	
	スタイルと ポートレッ ト				Х	
	ユーザー、 グループ、 および役割				Х	
Analysis Studio			Х	X	Х	
Cognos Insight		該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	
Cognos Viewer		Х	Х	X	Х	
	ショートカ ット・メニ ュー	Х	Х	Х	Х	
	オプション を指定して 実行		Х	Х	Х	
	選択アイテ ム	Х	Х	X	Х	
	ツールバー	Х	Х	X	Х	
共同作業			X	X	X	別個の IBM Connec- tions の資 格が必要
	コラボレー ション機能 を許可		Х	X	X	別個の IBM Connec- tions の資 格が必要

機能	保護された 特性	情報配布	Analytics ユーザー	Analytics エクスプロ ーラー	Analytics 管理者	注記
	コラボレー ション・ツ ールを起動		X	X	Х	別個の IBM Connec- tions の資 格が必要
Controller Studio		該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	別個の IBM Connec- tions の資 格が必要
ダッシュボ ード			Х	Х	Х	
Data Manager		該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	
デスクトッ プ・ツール				Х	Х	
データ・セ ット		Х	Х	Х	Х	
詳細なエラ		X	X	X	X	<ul> <li>管理者がこ</li> <li>の権限をし、</li> <li>ユーザーは</li> <li>Viewer や</li> <li>Report で</li> <li>詳細なエラ</li> <li>ー・メッセ</li> <li>ージを参照</li> <li>できます</li> </ul>

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

				Analytics		
			Analytics	エクスプロ	Analytics	
	旧共としよ	情報配布	ユーザー	ーラー	管理者	注記
HIK AK	保護された					
機能	特性					ferfer error - Let (1)
ドリルスル			Х	X	Х	管理者がこ
ー・アシス						の権限を付
タント						与すると、
						ユーザーは
						「移動」べ
						ージの「ド
						リルスル
						ー・アシス
						タント」を
						使用して、
						どのような
						パラメータ
						ーかソース
						から渡さ
						れ、とのよ
						うにターケ
						ット・オノ
						シェクトで
						マツヒンク
						されるかを
						衣示でさま
E sut			V	V	V	90
Event			X	X	Х	
Index		v	v	v	v	
Formate D		~	~	^	Λ	
Search の 宝伝						
天1」			Ň	X	Ň	
エクセクテ			Х	X	Х	
93 <u>7</u> -r						
	拡張ダッシ		Х	X	Х	
	コボード機					
	能の使用					
	インタラク		Х	Х	Х	
	ティブ・ダ					
	ッシュボー					
	ド機能の使					
	用					

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

				Analytics		
			Analytics	エクスプロ	Analytics	
		情報配布	ユーザー	ーラー	管理者	注記
機能	保護された   特性					
外部リポジ		Х	Х	Х	Х	管理者は、
トリー						ユーザーが
						アーカイ
						ブ・ファイ
						ルにアクセ
						スできるよ
						うに権限の
						設定を変え
						る必要があ
						ります
	リポジトリ				Х	
	ー接続の管   理					
	外部ドキュ	Х	Х	Х	Х	
	メントの表					
	示					
CSV 出力		Х	Х	Х	Х	
の生成						
PDF 出力		Х	Х	Х	Х	
の生成						
XLS 出力		Х	Х	Х	Х	
の生成						
XML 出力		Х	Х	X	Х	
の生成						
用語集		Х	Х	X	Х	IBM
						InfoSphere
						Business
						Glossary との姑本
						この航台。
						回返 Viewer か
						ら使用でき
						ます
エントリー		Х	Х	X	Х	
の非表示						
リレーショ					Х	
ナル・メタ						
データのイ						
ンボート						

## 表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

				Analytics		
			Analytics	エクスプロ	Analytics	
	促灌された	情報配布	ユーザー	ーラー	管理者	注記
機能	保護された特性					
系統		Х	Х	Х	Х	使用可能に
						すると、ユ
						ーザーはビ
						ユーアーか
						らアクセス
						できます
コンテンツ の管理					X	
自分のデー			Х	Х	Х	
タ・ソー						
ス・サイン						
オンを管理						
Metric				Х	Х	
Studio						
	ビューを編  集			X	X	
Mobile		Х	Х	Х	Х	
Planning		該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	別個の
Contributor						IBM
						Planning
						Contributor
						の資格が必
						要
PowerPlay			Х	Х	Х	別個の
Studio						PowerPlay
						ライセンス
						が必要
Query			X	X	Х	
Studio	⇒¥γm		X	X	X	
	i手が円 がた i手を		X	X	X	
	17 Е Л.Х.		X	X	X	
Report Authoring			X	X	X	
	外部データ				Х	
	を許可					
	バースト		Х	Х	Х	
	作成/削除		Х	X	Х	
	レポートの		X	X	X	
	HTML ア					
	イテム					

## 表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

				Analytics		
			Analytics	エクスプロ	Analytics	
		情報配布	ユーザー	ーラー	管理者	注記
機能	保護された 特性					
	ユーザー定		Х	Х	Х	
	義 SQL					
スケジュー			х	X	Х	
ル						
	日単位のス		x	X	X	
	ケジュール					
	時間単位の		v	v	v	
	时间単位の				Λ	
	ハ光片のフ		v	v	v	
	万単位の人		X	X	X	
	クシュール					
	月単位のス		X	X	Х	
	ケジュール					
	トリガー単		X	X	Х	
	位のスケジ					
	ユール					
	週単位のス		X	X	Х	
	ケジュール					
	年単位のス		Х	Х	Х	
	ケジュール					
	優先順位に				Х	
	よるスケジ					
	ュール					
セルフサー					Х	
ビス・パッ						
ケージ・ウ						
ィザード						
エントリー					Х	
固有の機能						
の設定						
スナップシ		x	x	x	X	
ヨット						
仕様の実行					x	
ファイルの			v	v	v	
アップロー						
ド (Unload						
files)						
EE 担担 Fil			v	v	v	
ニ 怳 尻 則				X		

## 表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

表 59. ライセンス役割別の Cognos Analytics 11 機能 (続き)

機能	保護された 特性	情報配布	Analytics ユーザー	Analytics エクスプロ ーラー	<b>Analytics</b> 管理者	注記
Web ベー ス・モデリ ング (Web-based modeling)			Х	Х	Х	

# ライセンス役割に基づく機能の割り当て

ライセンス役割の資格に基づいて機能を割り当てることができます。

- インストール時に自動的にセットアップされたあらかじめ定義されている役割を 使用するには、 How do you restrict users based on their License Roles in Cognos Analytics (version 11.0.7 +) の手順に従います。
- これらの役割を手動でセットアップするには、How do you restrict users based on their License Roles in Cognos Analytics (versions 11.0.0 to 11.0.6) の手順に従います。

# アップグレード・シナリオ: カスタマイズされた役割の名前が新し い **Cognos** ライセンス役割と同じである場合

新しい Cognos ライセンス役割と同じ名前の役割を以前に作成していて、アップグレードを計画している場合、アップグレードの後にどの機能を役割に適用するかを 考慮してください。

詳細については、 259 ページの『ライセンス役割』を参照してください。

- それらの役割に以前に割り当てた機能を今後も使用する場合は、それらの機能を 失うことなくアップグレードを実行できます。
- ただし、新しいライセンス役割の機能を採用する場合は、アップグレードを行う 前に、まず既存の役割を削除または名前変更する必要があります。

## インストール後のセキュリティー設定

IBM Cognos ソフトウェアでは、認証プロバイダーの使用がインストール時に設定 されている必要があります。詳細については、「IBM Cognos Analytics インスト ールおよび設定ガイド」を参照してください。

Content Store の初期化中にあらかじめ定義されている役割が作成される際、「すべてのユーザー」グループは「システム管理者」役割のメンバーになります。したがって、すべてのユーザーが Content Store に対して完全なアクセス権を持ちます。このアクセス権を制限するには、信頼できるユーザーをこの役割のメンバーとして追加してから"すべてのユーザー"グループをメンバーから削除します。

また、「使用者」、「クエリー・ユーザー」、「作成者」などの「すべてのユーザ ー」グループを含む、あらかじめ定義されている役割のメンバーシップを変更する 必要があります。これらの役割の設定を、"システム管理者"役割の設定と同じよう に変更します。これらの変更では、ライセンス条件も考慮に入れる必要がありま す。

使用しないあらかじめ定義されている役割は削除できます。

Cognos ネームスペースを保護するには、必要なユーザーにアクセス権を付与する ことにより、初期アクセス権を変更します。

アクセス権を設定する際には、"すべてのユーザー"グループが設定されたエントリー に対するアクセスを明示的に拒否しないでください。アクセスの拒否は、エントリ ーの他のセキュリティー・ポリシーを上書きします。"すべてのユーザー"が設定され たエントリーに対するアクセスを拒否すると、そのエントリーは使用できなくなり ます。

保護されたインストールを維持するには、ユーザーは、各自に割り当てられたタス クを完了するために必要な権限と機能のみを付与されている必要があります。例え ば、「リーダー」は通常、「共有フォルダー」に対する読み取りと通過の権限に制 限され、Studio/Authoring ツールを使用したレポートの作成は許可されません。使 用者は通常、読み取り、通過、実行の権限に制限されます。

「レポートの HTML アイテム」や「ユーザー定義 SQL」などの特定の機能は、厳 重に管理する必要があります。これらの機能は、レポート作成処理中やレポートの 実行時にチェックされます。これらの機能が必要なレポートを使用者が実行する必 要がある場合は、「所有者として実行」機能を使用して、該当機能を必要とするシ ステム・ユーザーの数を制限できます。「所有者として実行」機能では、レポート 所有者の資格情報を使用して、いくつかの権限チェックが実行され、データにアク セスします。

パッケージに対する機能を付与する方法について詳しくは、オブジェクト機能を参 照してください。

## システム管理者と定義済みの役割の保護

IBM Cognos 環境のセキュリティーをセットアップするための最初のステップの 1 つとして、システム管理者役割と他の定義済みの役割の最初のメンバーシップを変 更します。

グループ「すべてのユーザー」が定義済み役割のメンバーである場合、そのグルー プを役割のメンバーシップから除去します。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 「セキュリティー」タブで「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. 「Cognos」ネームスペースをクリックします。
- 4. 変更する役割について、「操作」列の「プロパティーを設定」ボタンをクリック します。
- 5. 「メンバー」タブで、役割のメンバーシップを次のように変更します。

- 認証プロバイダーに定義されている1つ以上のユーザーをメンバーに含める 必要があります。
- グループ「すべてのユーザー」が役割のメンバーである場合、このグループ を除去します。
- 「**OK**」をクリックします。
- 6. 「権限」タブでこの役割のアクセス権を設定して、アクセス許可のないユーザー によるコンテンツの作成、更新、および削除を禁止し、「**OK**」をクリックしま す。
- 7. 変更するそれぞれの役割について、手順3から6を繰り返します。

## Cognos ネームスペースの保護

Cognos ネームスペースを次のようにしてセットアップできます。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「管理コンソール」から、「IBM Cognos Administration」を開 きます。
- 「セキュリティー」タブで「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. Cognos ネームスペースの隣の「操作」列で、「プロパティーを設定」ボタンを クリックします。
- 4. 「権限」タブで「**Cognos**」ネームスペースのアクセス権を設定して、アクセス 許可のないユーザーによるコンテンツの作成、更新、および削除を防ぎます。

"すべてのユーザー"グループは削除することを推奨します。ただし、必要であれ ば、そのまま残すこともできます。

- 5. 必要に応じて、「すべての子エントリーのアクセス権を削除」チェック・ボック スをオンにします。
- 6. 「**OK**」をクリックします。

# **Content Store** の保護

そのセキュリティーと整合性を保持するために、コンテンツ・ストアには、IBM Cognos Configuration で指定されたシングル・データベース・サインオンを使用し て、Content Manager サービスによってアクセスします。データベース・サインオ ンは、ご使用の暗号化規格によって暗号化されます。ただし、Content Store のセ キュリティーは、IBM Cognos Analytics のセキュリティーだけでなく、ネイティ ブ・データベース、オペレーティング・システム、およびネットワークのセキュリ ティーにも依存します。

データベースを保護するために、次のガイドラインに従います。

- データベース、ネットワーク、オペレーティング・システムで提供されている機構を使用してデータベースとデータベース API を保護する
- データベースのメンテナンスを行うユーザーの数を制限する
- データベースのネイティブのセキュリティー機能を使用して、データベースにア クセスするユーザー・アカウントに対し最小限のアクセス権のみを付与する
  - Microsoft SQL Server

ユーザーは、データベースでテーブルの作成およびドロップを実行する権限 を持っている必要があります。ユーザー・アカウントが

db_ddladmin、db_datareader、および db_datawriter 役割のメンバーであ り、デフォルトのスキーマの所有者であることを確認してください。

- ORACLE

ユーザーは、データベースに接続する権限を持っている必要があります。ま た、表、トリガー、ビュー、プロシージャー、シーケンスの作成、変更およ びドロップに加え、データベース表でのデータの挿入、更新、および削除を 実行できる必要があります。権限はグループまたは役割のメンバーシップを 介さず、ユーザー・アカウントに直接付与する必要があります。

– IBM Db2

ユーザーはデータベースでの作成、ドロップ・テーブル、

CREATETAB、CONNECT、および IMPLICITSCHEMA 権限を持っている 必要があります。また、USER TEMPORARY 表スペースおよびデータベース に関連したその他の適切な表スペースに対して USE 権限を持っている必要が あります。

- Sybase Adaptive Server Enterprise

ユーザーは、データベースでの作成、ドロップ・テーブル、デフォルトの作 成、プロシージャーの作成、規則の作成、テーブルの作成、ビューの作成の 各権限を持っている必要があります。

- Content Manager のテーブルに対する読み取りまたは書き込み権限を持つユー ザーの数を制限する
- データベースを保護する際の他の推奨事項に従う。詳細については、データベースのドキュメントを参照してください。

# 第16章 エントリーのプロパティー

エントリーの表示と動作を制御するには、プロパティーを変更します。エントリー のプロパティーは、エントリーのタイプとユーザーの権限によって異なります。例 えば、レポートには実行オプションを制御するプロパティーがありますが、フォル ダーにはありません。カスタマイズするエントリーのタイプに該当しないプロパテ ィーは、「プロパティーを設定」ページに表示されません。

# 全般プロパティー

全般プロパティーは、「プロパティーを設定」ページの「全般」タブに表示されま す。

次の表に、使用可能な全般プロパティーを示します。

	表	60.	全般エン	トリ	-07	プロノ	パティ	_
--	---	-----	------	----	-----	-----	-----	---

プロパティー	説明
タイプ	エントリーのタイプ。
所有者	エントリーの所有者。デフォルトの所有者は、エントリーの作成者 です。所有者が現在のネームスペースに存在しない場合、または現 在のユーザーと異なるネームスペースに存在する場合、所有者は 「使用不可」として表示されます。
	ポリシー設定権限を持っている場合は、「自分を所有者にする」を クリックすると、エントリーの所有者になります。
連絡先	エントリーの責任者。「連絡先を設定」、「連絡先を選択」の順に クリックしてエントリーの連絡先を設定するか、「E メール・アド レスを入力」をクリックして連絡先の E メール・アドレスを入力 します。
場所	ポータル内のエントリーの場所とエントリーの ID。Content Store 内のエントリーの完全修飾パスと、エントリーの ID を表示するに は、「検索パス、ID、URL を表示」をクリックします。 エントリーには一意の識別子番号 (ID) が割り当てられます。
作成日時	エントリーが作成された日付。
変更	エントリーが最後に変更された日付。
アイコン	エントリーのアイコン。アイコンを変更するには、「編集」をクリ ックします。

表 60. 全般エントリーのプロパティー (続き)

プロパティー	説明
インデックス作成	エントリーのインデックスの前回作成日を示すタイム・スタンプ。 エントリーのインデックスが作成されていない場合、このプロパテ ィーは表示されません。
このエントリーを無効 にする	選択されている場合、このエントリーに対する書き込み権限がない ユーザーはアクセスできない。エントリーはポータルに表示されま せん。
	無効になったエントリーに対するアクセス権が与えられると、エン トリーの隣に無効を示すアイコンが表示されます。
このエントリーを非表 示にする	このプロパティーを選択して、レポート、パッケージ、ページ、フ ォルダー、ジョブ、およびその他のエントリーを非表示にする。不 必要な使用を避けたり、表示を整理したりするために、エントリー を非表示にします。非表示のエントリーには、引き続き他のエント リーからアクセスできます。例えば、非表示のレポートにドリルス ルー・ターゲットとしてアクセスすることもできます。
	非表示のエントリーは表示されたままですが、アイコンの色が薄く なります。「個人用領域のオプション」 の「個人用設定」で 「非表示のエントリーを表示」チェック・ボックスをオフにする と、エントリーが表示されなくなります。
	このプロパティーを表示するには、「エントリーの非表示」機能へ のアクセス権が管理者によって付与されている必要があります。
言語	管理者の設定に基づく、エントリー名、画面のヒント、および説明 に使用可能な言語のリスト。 指定した言語のエントリー名 画面のヒント および説明を削除す
	るには、「この言語に対する値を削除」をクリックします。
名前	選択した言語のエントリー名。
画面のヒント	エントリーの説明 (オプション)。ポータルで、エントリーのアイコ ン上にマウス・ポインターを置くと、画面のヒントが表示されま す。画面のヒントは 100 バイト以内です。
説明	エントリーの説明 (オプション)。詳細表示を使用するように設定で 指定すると、ポータルに表示されます。
	詳細表示は、共有フォルダーおよび個人用フォルダーにのみ表示さ れます。
実行履歴	エントリーの実行履歴の保存件数または保存期間。

表 60. 全般エントリーのプロパティー (続き)

プロパティー	説明
出力レポート・バージ	出力レポートの保存件数または保存期間。
	この値をゼロ (0) に設定すると、無限の数のバージョンが保存され ます。
パッケージ	エントリーに関連付けられているパッケージ。ソース・パッケージ が移動または削除されている場合は、「使用不可」というテキスト が表示されます。
	エントリーを異なるパッケージにリンクするには、「パッケージへ のリンク」をクリックします。
URL	ファイルまたは Web サイト・アドレスへの URL。
	このフィールドは、エントリーに対する読み取り権限を持つユーザ ーにのみ表示されます。読み取り権限を持っていない場合は、書き 込み権限を持っていても、このプロパティーは表示されません。
ソース・レポート	レポート・ビューのソース・エントリーへのパス。ソース・エント リーが移動または削除されている場合は、「使用不可」というテキ ストが表示されます。
	ソース・レポートのプロパティーを表示するには、「レポートのプ ロパティー」をクリックします。エントリーを異なるパッケージに リンクするには「レポートへのリンク」をクリックします。
ソース・エージェント	エージェント・ビューのソース・エントリーへのパス。ソース・エ ントリーが移動または削除されている場合は、「使用不可」という テキストが表示されます。
	ソース・レポートのプロパティーを表示するには、「エージェント のプロパティー」をクリックします。エントリーを異なるパッケー ジにリンクするには「エージェントへのリンク」をクリックしま す。
高度なルーティング	データ・オブジェクト (パッケージ、データ・モジュール、アップ ロードされたファイルなど)、ユーザー・グループ、および役割にル ーティング・タグを適用することができます。これらのタグをサー バー・グループと組み合わせて使用して、ディスパッチャーのルー ティング規則を指定できます。
ゲートウェイ	元の IBM Cognos 製品がある Web サーバーの場所。Series 7 PowerPlay のレポートのみに適用されます。

# レポート、クエリー、分析、および PowerPlay レポート・プロパティー

レポート・プロパティーは、「プロパティーを設定」ページの以下のタブに表示されます。

- Reporting レポートの「レポート」タブ
- Query Studio レポートの「クエリー」タブ
- Analysis Studio レポートの「分析」タブ
- Series 7 PowerPlay レポートの「PowerPlay レポート」タブ

使用可能な用紙サイズを選択できます。 IBM Cognos Administration で、「設定」 > 「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。「用紙サイズの定義」 ボタン をクリックします。新しい用紙サイズを追加するには、「新規」をクリ ックします。用紙サイズを削除するには、「削除」をクリックします。

次の表に、使用可能なレポート・プロパティーを示します。

プロパティー	説明
デフォルトのアクション	レポートが実行されるときのデフォルトのアクション
形式 PDF オプション	レポートの実行時に使用する出力形式。 用紙の向き、用紙サイズ、レポートを開くためのパスワ ードなど、PDF 出力の作成時に使用するオプション。
ユーザー補助機能のサポートを 有効化	アクセシビリティーをサポートするレポート出力を作成 するかどうか。サポートを有効にすると、スクリーン・ リーダーで読み取り可能なレポート出力が作成されま す。
言語	レポートの実行時にレポート・データに使用するデフォ ルトの言語。
プロンプト値	チェック・ボックスを選択すると、レポートの実行時に データをフィルタリングするための値を選択するように 求めるプロンプトがユーザーに出されます。
現在の値	レポートの実行時にデータにフィルターを適用するため に使用する値。詳細については、 389 ページの『レポー トのデフォルト・プロンプト値の指定』を参照してくだ さい。
実行履歴	実行履歴の保存期間を指定します。実行履歴の保存回 数、保存日数、または保存月数を指定できます。
出力レポート・バージョン	レポート出力履歴の保存期間を指定します。一定の実行 回数、または一定期間 (日数や月数) の間、出力レポート を保存することができます。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	HTML レポートで各 Web ページに表示する行数

表 61. レポート、クエリー、分析、および PowerPlay レポート・プロパティー
表 61. レポート、クエリー、分析、および PowerPlay レポート・プロパティー (続き)

プロパティー	説明
所有者として実行	レポートの実行時に所有者の資格情報を使用するかどう か。詳細については、 233 ページの『信頼されている資 格情報』を参照してください。
所有者として実行: 権限のみ	レポートの実行時に所有者の資格情報は使用しないで所 有者の権限のみを使用するかどうか。
HTML オプション: デザイン・ モードで開く	HTML 形式の Series 7 PowerPlay レポートをデザイ ン・モードで開くかどうか。

# ジョブ・プロパティー

ジョブ・プロパティーは、「プロパティーを設定」ページの「ジョブ」タブに表示 されます。

次の表に、使用可能なジョブ・プロパティーを示します。

表	62.	ジョ	ブ・	プロパ	ティー
---	-----	----	----	-----	-----

プロパティー	説明
ステップ	ジョブ内のステップのリスト。
ジョブ・ステップの送信	すべてのジョブ・タスクを一度に実行するか、または順番に実行 するか。
全ステップに対するデフ ォルト値	ジョブ・レベルのデフォルト値を設定します。「設定」をクリッ クしてから、ジョブの全ステップに対するデフォルトを指定しま す。デフォルトが設定されない場合は、個別のステップのデフォ ルトが使用されます。
実行履歴の詳細レベル	実行操作が正常に終了したときに、ジョブ・ステップの完全な履 歴詳細が保存されるようにするには、「すべて」をクリックしま す。ジョブ・ステップの完全な履歴詳細には、名前、要求時刻、 開始時刻、終了時刻、ステータスが含まれます。
	ジョブの限定的な実行履歴詳細が保存されるようにするには、 「限定」をクリックします。限定的な実行履歴詳細には、ジョブ の開始時刻、終了時刻、ステータス、メッセージが含まれます。
	ジョブの実行に失敗した場合、完全な履歴詳細が保存されます。 デフォルト値は「すべて」です。
	ジョブの「実行履歴の詳細レベル」設定は、ジョブ・ステップの 設定をオーバーライドします。

# エージェント・プロパティー

.

エージェント・プロパティーは、「プロパティーを設定」ページの「エージェン ト」タブに表示されます。

次の表に、使用可能なエージェント・プロパティーを示します。

表 63.	エージェント・プロパティー	

プロパティー	説明
タスク	エージェント内のタスクのリスト
デフォルトのアクション	エージェントが実行されるときのデフォルトのアクション
プロンプト値	エージェントが実行されるときにデータにフィルターを掛ける ために使用される値。
所有者として実行	エージェントの実行時に所有者の資格情報を使用するかどう か。詳細については、 233 ページの『信頼されている資格情 報』を参照してください。
所有者として実行: 権限の み	レポートの実行時に所有者の資格情報は使用しないで所有者の 権限のみを使用するかどうか。
アラート・リスト	ユーザーがエージェントのアラート・リストに自分自身を追加 できるようにするかどうか。

# 規則プロパティー

規則プロパティーを使用して、監視規則を定義または変更します。規則プロパティ ーには、「個人用監視アイテム」の「規則」タブから監視規則エントリーの「プロ パティーを設定」アイコンをクリックすることによりアクセスできます。プロパテ ィーは、「プロパティーを設定」ページの「規則」タブにあります。

規則プロパティーは、保存された HTML レポート出力内の条件を指定して、レポ ートが保存されて条件が満たされたときにアラートが出されるようにします。

次の表に、使用可能な規則プロパティーを示します。

表 64. 規則プロパティー

プロパティー	説明
規則を無効化	監視規則を無効にするかどうか。無効にすると、レポート 出力の生成時に監視規則が適用されなくなります。
レポート reportname に次が含 まれている場合にアラートを送 信	監視規則に定義されたレポートと規則の名前。 定義を編集するには、より大 (>) などの既存のフィルター 条件をクリックして、表示されるリスト内にある別の条件 をクリックします。ボックスに別の値を指定します。

表 64. 規則プロパティー (続き)

プロパティー	説明
対象とするコンテキスト	規則が適用されるレポート内のオブジェクト。
アラート・タイプ	規則が満たされたときに受け取るアラートのタイプ。 E メールまたはニュース・アイテムでアラートを受け取るこ とができます。

# 第 17 章 処理の管理

現在、過去、または将来の特定日における、ユーザーのスケジュールされた処理の リストを表示できます。

このリストにフィルターをかけると、目的のエントリーのみを表示できます。横棒 グラフには、毎日の処理の概要が時間単位で表示されます。このグラフを使用し て、処理を再スケジュールする最適な日付を選択できます。エントリーを実行する 優先度を設定できます。また、エントリーの実行履歴の表示、実行履歴の保存期間 の指定、失敗したエントリーの再実行も可能です。

各エントリーを実行したユーザーを確認し、必要に応じてエントリーに対して操作 を実行できます。例えば、あるユーザーの大きなジョブによって重要なエントリー がキューで待ち状態になっている場合に、そのジョブをキャンセルまたは中断でき ます。また、エントリーのインスタンスの優先度を変更したり、エントリー自体の 優先度を完全に変更することができます。

表示を切り替えた場合、最新の情報を表示するには更新を行う必要があります。例 えば、「過去の処理」から「予定されている処理」に切り替えた場合、最新のデー タを表示するにはウィンドウを更新する必要があります。

管理者は「管理」 > 「処理」管理機能か、または「IBM Cognos Administration」を使用して、すべてのユーザー・エントリーの処理を管理できま す。

## 現在の処理の管理

現在の処理とは、現在、IBM Cognos ソフトウェアによって処理中のエントリーの ことです。

各エントリーは名前順にリスト表示され、バックグラウンド処理の要求時刻、ステ ータス、および優先度が表示されます。横棒グラフには、エントリーの合計数と、 保留中、実行中、待機中、および中断中のエントリーの数が表示されます。処理が 実行されると、処理番号が表示されます。

「要求時刻」、「ステータス」、および「優先度」列でソートを行うことができま す。バックグラウンド処理または双方向処理のリストを表示することができます。 また、エントリーを実行したユーザーもリストされます。一覧は、ユーザー順にソ ートすることができます。

バックグラウンド・エントリーを中断し、後で必要に応じて中断を解除して実行す ることもできます。次のいずれかのステータスのエントリーでは、実行を完全にキ ャンセルすることができます。

- キューで保留中
- 実行中
- 中断中

• IBM Cognos ソフトウェアの外部にあるプロセスの終了を待機中

エントリーにフィルターをかけて、目的のエントリーのみを表示できます。特定の ステータス、優先度、タイプ、範囲のエントリーのみを表示するように選択できま す。

現在の双方向エントリーに関して、ステータス、または処理を実行中のディスパッ チャーでフィルターをかけることができます。現在のバックグラウンド・エントリ ーに対しては、ステータス、優先度、タイプ、範囲、エントリーを実行したユーザ ー、エントリーを所有するユーザー、およびディスパッチャーでフィルターをかけ られます。

エントリーが現在実行中の場合、ディスパッチャー、プロセス ID、および開始時刻 が表示されます。処理が最初に表示されたときに、現在のバックグラウンド・エン トリーのプロセス ID とディスパッチャーが使用できない場合があります。更新さ れたプロセス ID とディスパッチャーを表示するには、ページを更新します。

ジョブやエージェントなどの他のエントリーを含むエントリーをキャンセルした場 合、完了していないステップやタスクはキャンセルされます。ただし、すでに完了 したステップやタスクは完了したままです。

エントリーの優先度を変更し 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』 287 ページの『エントリー実行優先度の管理』、実行履歴を表示することができま す。

#### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブの「現在の処理」をクリックします。
- 3. 「フィルター」セクションで、「バックグラウンド処理」または「双方向処理」 をクリックし、使用するフィルター・オプションを指定します。

ヒント:詳細なフィルターのオプションを使用するには、「詳細オプション」を クリックします。すべての選択内容をデフォルトの設定にリセットするには、 「デフォルトにリセット」をクリックします。

4. 「適用」をクリックします。

選択したエントリーがリスト表示されます。

 個々のエントリーに対して操作を実行するには、対象エントリーの「操作」矢印 をクリックし、操作を選択します。複数のエントリーに対して操作を実行するに は、目的のエントリーのチェック・ボックスをオンにして、ツールバーにある次 のボタンのうちの1 つをクリックします。

次の表に、エントリーに使用できる操作、および関連するアイコンを示します。

表 65. 現在の処理の管理の操作およびアイコン

操作	アイコン
詳細を表示 (右上隅)	()
詳細を非表示 (右上隅)	*==-)

表 65. 現在の処理の管理の操作およびアイコン (続き)

操作	アイコン
実行をキャンセル (エントリーの横にある「操作」メニュー)	*
実行を中断 (エントリーの横にある「操作」メニュー)	00
中断中のエントリーを実行 (エントリーの横にある「操作」メニ ュー)	400
重要度をセット (エントリーの横にある「操作」メニュー)	

ヒント:リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

## 過去の処理の管理

過去の処理とは、IBM Cognos ソフトウェアで処理が終了したエントリーのことです。

各エントリーは名前順にリスト表示され、要求時刻、ステータスが表示されます。 「要求時刻」、「ステータス」の列でソートを行うことができます。横棒グラフに は、エントリーの合計数と、ステータスごとの数が表示されます。エントリーでエ ラーが発生した場合は、エラーの重度を示すボタンが表示されます。また、エント リーを実行したユーザーもリストされます。

エントリーにフィルターをかけて、目的のエントリーのみを表示できます。過去 4 時間、過去 1 日などの期間や、日付または時間の範囲を指定して、特定の期間に発 生した処理のリストを表示できます。ステータス、タイプ、有効範囲でフィルター をかけることができます。さらに、エントリーを実行したユーザー、エントリーを 所有するユーザー、処理が実行されたディスパッチャーでフィルターをかけること もできます。

実行履歴を表示できます 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』。

#### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータスタブの「過去の処理」をクリックします。
- 3. ステータスの横のエラー・ボタンの上にカーソルを合わせるとエラーの重度が表 示されます。
- 4. 個々のエントリーに対して操作を実行するには、対象エントリーの「操作」矢印 をクリックし、操作を選択します。

複数の項目に対して処理を実行するには、ツールバーの「詳細の表示」 「「アイコンまたは「詳細を非表示」 「「アイコンをクリックします。

## 特定の日に予定されている処理の管理

特定の日にスケジュールされているすべての処理のリストを表示することができま す。

各エントリーは名前順にリスト表示され、要求時刻、優先度が表示されます。横棒 グラフには、その日の毎時間別に、スケジュールされたエントリーとキャンセルさ れたエントリーの合計数が表示されます。グラフの凡例には、その日のスケジュー ルされたエントリーとキャンセルされたエントリーの合計数が表示されます。

「要求時刻」、「ステータス」、および「優先度」列でソートを行うことができま す。バックグラウンド処理または双方向処理のリストを表示することができます。

各エントリーをスケジュールしたユーザーが表示されます。一覧は、ユーザー順に ソートすることができます。

スケジュールされたエントリー実行をキャンセルしたり、キャンセルされたエント リー実行を再スケジュールしたり、優先度を設定したりすることができます。エン トリーは無期限に中断するか、特定の日まで中断できます。詳細については、 283 ページの『中断された処理』を参照してください。

「詳細を表示」 アイコンをクリックすると詳細情報を表示できます。エントリーごとに、「最終実行応答時刻」と「パス」が表示されます。

エントリーにフィルターをかけて、目的のエントリーのみを表示できます。日時を 選択すると、その日時に予定されている処理を表示できます。ステータス、優先 度、タイプ、有効範囲でフィルターをかけることができます。

さらに、エントリーをスケジュールしたユーザーや、エントリー所有者でフィルターをかけることもできます。

フィルタリングにより、現在中断されているスケジュール済みエントリーの数を判 別できます。詳細については、 283 ページの『中断された処理』を参照してください。

キュー内のエントリーの優先度を変更できます (287 ページの『エントリー実行優 先度の管理』)。

## 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブの「予定されている処理」をクリックします。
- 「フィルター」セクションで、使用するフィルター・オプションをクリックします。

ヒント:詳細なフィルターのオプションを使用するには、「詳細オプション」を クリックします。すべての選択内容をデフォルトの設定にリセットするには、 「デフォルトにリセット」をクリックします。

4. 「適用」をクリックします。

選択したエントリーがリスト表示されます。

- フィルターのステータス行に、リストの生成に使用された条件が表示されます。
- 横棒グラフには、指定日の毎時間別に、スケジュールされたエントリーとキャンセルされたエントリーが表示されます。

フィルターを再定義して「適用」をクリックするたびに、エントリーのリスト、 フィルターのステータス行、およびグラフが更新されます。グラフに別の日付の エントリーを表示した場合、エントリーのリスト、およびフィルターのステータ ス行は変更されません。

 個々のエントリーに対して操作を実行するには、対象エントリーの「操作」矢印 をクリックし、操作を選択します。複数のエントリーに対して操作を実行するに は、目的のエントリーのチェック・ボックスをオンにして、ツールバーにある次 のボタンのうちの1 つをクリックします。

次の表に、エントリーに使用できる操作、および関連するアイコンを示します。

表 66. 特定の日に予定されている処理の管理の操作およびアイコン

操作	アイコン
詳細を表示 (右上隅)	
詳細を非表示 (右上隅)	( ⁼ )
実行をキャンセル (エントリーの横にある「操作」メニ ュー)	*
エントリーを中断 (エントリーの横にある「操作」メニ ュー)	00
中断中のエントリーを実行 (エントリーの横にある「操 作」メニュー)	
キャンセルされた実行を再スケジュール (エントリーの 横にある「操作」メニュー)	
重要度をセット (エントリーの横にある「操作」メニュ ー)	

ヒント: リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボ ックスを選択します。

## 中断された処理

システム要件に応答するためにエントリーを中断し、後でそれを再開することがで きます。

エントリーを中断した後に、無期限に中断されているエントリーのリストを表示で きます。

元の実行時刻が経過した後でも、中断されたエントリーを再開できます。例えば、 レポートを午前 9 時にスケジュールしており、そのレポートを中断した場合、午前 9 時 30 分にそのレポートを再開できます。 「予定されている処理」横棒グラフを使用して、エントリーを再スケジュールする 時期を決定できます。グラフ内で将来の日付を参照して、特定の日のエントリー数 を確認できます。また、特定の日の特定の時間にポインターを置くと、その時間の エントリー数が表示されます。この方法を使用して、需要の低い日付を検索し、そ の日付にエントリーを再スケジュールします。グラフの各列には、その日の毎時間 別に、スケジュールされたエントリーとキャンセルされたエントリーの合計数が表 示されます。グラフの凡例には、その日のスケジュールされたエントリー、キャン セルされたエントリー、中断されたエントリーの合計数が表示されます。

### エントリーの中断

アクティビティーを中断することができます。

例えば、特定の時間にシステムが過負荷になる傾向がある場合、エントリーを無期 限に中断したり後で実行するように再スケジュールすることで、ピーク時の作業負 荷を抑え、ボトルネックを避けることができます。

#### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブの「予定されている処理」をクリックします。
- 3. 「フィルター」セクションで、「日」で日付を選択し、「ステータス」で「スケ ジュール済み」をクリックします。
- 4. 「適用」をクリックします。

選択した日付にスケジュールされているエントリーがリスト表示されます。エン トリーは未実行分としてその日付に保持されているため、一部のエントリーを無 期限に中断し、それ以外のエントリーを再スケジュールできます。グラフ内で将 来の日付を参照して、別の日にエントリーを中断することもできます。

 グラフで将来の日付を参照するには、「次へ」アイコンや「戻る」アイコンをク リックします。グラフには、各日付の毎時間別に、スケジュールされたエントリ ーとキャンセルされたエントリーの両方が表示されます。

重要: 表示されるエントリーのリストは、グラフで選択した日付に応じて変更 されるわけではありません。リストには指定したフィルター条件に一致するエン トリーが表示されるため、新しいフィルターを指定して適用するまでリストは変 更されません。

- スケジュールされたエントリーのリストで、中断するエントリーのチェック・ボ ックスをオンにし、ツールバーの「中断」ボタンをクリックします。「処理の中 断」ダイアログ・ボックスで、次のいずれかの作業を行います。
  - エントリーを無期限に中断するには、「無期限」をクリックします。
  - 別の日付にエントリーを再スケジュールするには、「期限」をクリックし、 日時を選択します。

グラフとエントリーのリストの両方が更新され、中断されたエントリーはエント リーのリストに表示されなくなります。

ヒント: 個々のエントリーを削除するには、エントリーの「操作」メニュー矢 印をクリックして、「中断」をクリックします。

## 特定の日に中断しているエントリーの表示

特定の日に中断状態のエントリーのリストを表示することができます。

## 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブの「予定されている処理」をクリックします。
- 3. 「フィルター」セクションの「日」で日付を選択し、「ステータス」で「中断 中」をクリックします。
- 4. 「適用」をクリックします。

その日に中断中のエントリーがリスト表示されます。

中断されたエントリーは、実行、キャンセル、または再スケジュールできます。 個々のエントリーに対して操作を実行するには、エントリーの右側にある矢印を クリックして操作を選択します。複数のエントリーに対して操作を実行するに は、目的のエントリーのチェック・ボックスをオンにして、ツールバーから適切 なボタンをクリックします。

次の表に、エントリーに使用できる操作、および関連するアイコンを示します。

操作	アイコン
詳細を表示 (右上隅)	
詳細を非表示 (右上隅)	;==;
実行をキャンセル (エントリーの横にある「操作」メニ ュー)	*
エントリーを中断 (エントリーの横にある「操作」メニ ュー)	00
中断中のエントリーを実行 (エントリーの横にある「操 作」メニュー)	00
キャンセルされた実行を再スケジュール (エントリーの 横にある「操作」メニュー)	
優先度を設定 (エントリーの横にある「操作」メニュー)	[2]

表 67. 特定の日に中断状態のエントリーのリスト表示の操作とアイコン

ヒント:リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

## スケジュールされた処理の管理

すべてのユーザーの、スケジュールされたエントリーのリストを表示することがで きます。

各エントリーは名前順、ステータス順、優先度順にリスト表示されます。横棒グラ フには、有効なスケジュールと無効なスケジュールに分類された、処理の概要が表 示されます。

また、スケジュールが変更された日時と、スケジュールしたユーザーもリストされ ます。

エントリーにフィルターをかけて、目的のエントリーのみを表示できます。特定の ステータス、優先度、タイプ、範囲のエントリーのみを表示するように選択できま す。また、エントリーをスケジュールしたユーザーや、エントリー所有者でフィル ターをかけることもできます。

プロパティーの設定、1回のスケジュール実行、スケジュールされたエントリーの 無効化と有効化、スケジュールの変更、スケジュールの削除、優先度の設定 287 ペ ージの『エントリー実行優先度の管理』、実行履歴の表示 288 ページの『エントリ ーの実行履歴の表示』が可能です。エントリーによってはその他に、出力やイベン トのリストを表示する能などを実行できる場合もあります。

スケジュールの詳細については、 293 ページの『第 18 章 スケジュール管理』を 参照してください。

#### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブの「スケジュール」をクリックします。
- 「フィルター」セクションで、使用するフィルター・オプションをクリックします。

ヒント: 詳細なフィルターのオプションを使用するには、「詳細オプション」を クリックします。すべての選択内容をデフォルトの設定にリセットするには、 「デフォルトにリセット」をクリックします。

4. 「適用」をクリックします。

選択したエントリーがリスト表示されます。

 個々のエントリーに対して操作を実行するには、エントリーの横にある「操作」 メニューの矢印をクリックし、操作を選択します。複数のエントリーに対して操 作を実行するには、目的のエントリーのチェック・ボックスをオンにして、ツー ルバーにある次のボタンのうちの1つをクリックします。

次の表に、エントリーに使用できる操作、および関連するアイコンを示します。

表 68. スケジュールされた処理の操作およびアイコン

操作	アイコン
詳細を表示 (右上隅)	

表 68. スケジュールされた処理の操作およびアイコン (続き)

操作	アイコン
詳細を非表示 (右上隅)	* <u></u>
スケジュールを有効化 (エントリーの横にある「操作」 メニュー)	
スケジュールを無効化 (エントリーの横にある「操作」 メニュー)	
重要度をセット (エントリーの横にある「操作」メニュ ー)	[2]

ヒント:リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

## エントリー実行優先度の管理

スケジュールされたエントリーに 1 から 5 までの優先度を割り当てることができ ます。

例えば、優先度 1 のエントリーは優先度 5 のエントリーよりも前に実行されま す。同じ優先度のエントリーが複数ある場合、最初にキューに到着したエントリー が最初に実行されます。デフォルトの優先度は 3 です。

双方向のエントリーは常にすぐに実行され、実行中には優先度を変更できません。

エントリーをスケジュールする際には、エントリーの優先度を設定します 293 ページの『第 18 章 スケジュール管理』。現在のキュー、予定されているキュー、スケジュールされているキューにエントリーがあるときには、優先度を変更できます。

実行に時間がかかるエントリーに対しては、優先度を低く設定して、キュー内の他 のエントリーが遅延しないようにすることができます。

ジョブをスケジュールする 297 ページの『複数のエントリーをスケジュールするジョブの使用』場合、ジョブ内の個々のエントリーではなく、ジョブ全体に優先度を 設定します。多くのエントリーがあるジョブに対しては、優先度を低く設定して、 キュー内の他のエントリーが遅延しないようにすることができます。

親のジョブの優先度をスケジュールします。ジョブが実行されると、すべての子の エントリーは親の優先度を継承します。ジョブがキューにあってまだ実行されてい ないときには、優先度を更新できます。ジョブ内の個々のエントリーに対してこの 操作をすることはできません。ジョブの優先度を変更するとそのすべての子エント リーの優先度が変更されます。実行中には、ジョブの実行履歴 288 ページの『エン トリーの実行履歴の表示』を表示でき、処理が完了したエントリー、実行中のエン トリー、保留中のエントリーを表示できます。

キュー内のエントリーの優先度は、すでに実行中のエントリーには影響しません。 そのエントリーが終了すると、次に実行されるエントリーのキューの優先度がチェ ックされます。 ヒント: IBM Cognos Administration では、フィルターがかけられたオプション に基づいてエントリーの優先度を変更できます。例えば、Joan Jackson が実行した すべてのエントリーの優先度を変更するには、「フィルター」の「実行者」でこの ユーザーを選択します。次に、表示されているエントリーをすべて選択して、すべ てのエントリーの優先度を同時に変更できます。

#### 始める前に

エントリー実行優先度を管理するには、「処理とスケジュールの実行」機能を使用 できる必要があります。

## 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブで、「現在の処理」、「予定されている処理」、「スケジュ ール」のいずれかをクリックします。
- 3. 1 つのエントリーの優先度を変更するには、そのエントリーの横にある「操作」 メニューの矢印をクリックし、「優先度を設定」を選択します。複数のエントリ ーの優先度を変更するには、目的のエントリーのチェック・ボックスにチェッ

ク・マークを付けてから、ツールバーの「重要度をセット」ボタン **!!!** をク リックします。

ヒント:リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

4. メニューから目的の優先度をクリックして、「OK」をクリックします。

#### タスクの結果

選択したエントリーの横にある「優先度」列に、新しい優先度が表示されます。

## エントリーの実行履歴の表示

バックグラウンドで実行するようにスケジュールされているエントリーの実行履歴 を表示することができます (エントリーの表示を待つ必要はありません)。

これには、スケジュールされたエントリーのうち 1 回実行されて保存されるもの や、保存されるか E メールで送信される双方向のエントリーが含まれます。双方向 のエントリーには実行履歴がありません。

IBM Cognos ソフトウェアでは、エントリーがバックグラウンドで実行されるたび に履歴情報が保存されますエントリーの実行履歴には、要求時刻、開始時刻、終了 時刻、レポートが正常に実行されたかどうかなどの情報が記録されます。

さらに、より詳細なエントリーの実行履歴を調べて、エントリーおよび行った操作 に関連する、全般メッセージ、エラー・メッセージ、および警告メッセージを確認 できます。エントリーに任意の E メールが関連付けられている場合は、E メール配 信のステータスも表示されます。

エントリーのタイプによっては、詳細な実行履歴のページに追加の情報が表示され ることもあります。

- レポートの場合は、スケジュールに基づいてレポートが実行されるたびに、出力 レポート・バージョンが保存されます。出力レポート・バージョンは詳細な実行 履歴から表示できます。
- ジョブおよびエージェントの場合は、ステップのリストを表示でき、それぞれの 詳細な実行履歴を確認できます。また、ジョブまたはエージェントのうち、完了 していない部分を確認することもできます。エントリーが親エントリーに属して いる場合は、エントリーを実行した親エントリーを表示できます。
- エージェントに含まれているヒューマン・タスクの場合は、ステップのリストを 表示でき、それぞれの詳細な実行履歴を確認できます。
- 配布のエクスポート・エントリーとインポート・エントリーの場合は、IBM Cognos Administration で共有コンテンツを表示できます。

「現時点では進捗情報のみが提供可能です。この情報は、親処理が完了すると更 新されます。」というメッセージが表示される場合があります。

これは、配布は完了したものの親処理がまだ実行中であることを意味していま す。Content Manager から最終的な完了情報が取得されると、このメッセージ は表示されなくなります。

詳細な実行履歴のページから、失敗したエントリーを再実行できます 290 ページの 『失敗したエントリー・タスクの再実行』。一連の再実行の一部である、関連する 実行のリストを表示でき、それぞれの詳細な実行履歴を確認できます。実行履歴を 保存する回数や期間は指定できます 290 ページの『実行履歴の保存期間の指定』。

#### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブで、「スケジュール」または「過去の処理」をクリックしま す。
- 3. エントリーの横にある矢印をクリックして、「実行履歴を表示」 🛄 をクリッ クします。
- 4. 必要に応じて、表示するエントリーの「ステータス」を選択します。

選択したエントリーのリストが表示されます。

5. 実行履歴の詳細を表示するには、「操作」列で、目的のエントリーの横にある

「実行履歴の詳細を表示」ボタン¹ をクリックします。続いて、必要に応じて、「重大度」リストで、目的のエントリーの重度を選択します。

ジョブ・ステップの下に完全な実行履歴の詳細が表示されます。ジョブの実行履 歴の詳細レベルが「限定」に設定されている場合、ジョブ・ステップの履歴詳細 は記録されません。

6. 出力レポート・バージョンがある場合は、「操作」列で、目的のエントリーの

「出力を表示」ボタン 💽 をクリックします。続いて、「バージョン」リスト で、目的のバージョンをクリックします。バージョンを削除するには、「バージ ョンの管理」をクリックし、バージョンのチェック・ボックスをクリックして、 「削除」をクリックします。  メッセージを表示するには、「メッセージ」列にあるリンクの付いたアイテムを クリックします。

メッセージはネストされています。子メッセージの中にさらに子メッセージが表 示される場合もあります。メッセージがリンクとして表示されていれば、子メッ セージをドリルダウンしていくことができます。

## 実行履歴の保存期間の指定

実行履歴の保存回数、保存日数、または保存月数を指定できます。

例えば、過去 10 回、過去 2 日、または過去 6 カ月の実行履歴を保存するように 設定できます。すべての実行履歴を保存するように設定することもできます。

#### 始める前に

この指定を行うには、エントリーに対する読み取り権限と書き込み権限、およびエ ントリーが格納されているフォルダーに対する読み取り権限または通過権限が必要 です。

### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータス」タブで、「現在の処理」、「予定されている処理」、「スケジ ュール」のいずれかをクリックします。
- 3. エントリーの横にある矢印をクリックして、「プロパティーを設定」をクリック します

エントリーのプロパティー・ページが表示されます。

- 4. 「全般」タブの「実行履歴」で保存方法を選択し、次の値を入力します。
  - 保存する実行履歴の数を指定するには、「保存する数」をクリックし、数値 を入力します。保存する実行履歴の数に制限を設けない場合は、この値を0 に設定します。
  - 実行履歴を一定期間保存するには、「期間」をクリックし、「日間」または 「カ月間」のいずれかをクリックします。ボックスに適切な値を入力しま す。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

# 失敗したエントリー・タスクの再実行

失敗したエントリーを再発信できます。

レポート、エージェント・タスク、ジョブなどのエントリーが、スケジュールに従ってまたはバックグラウンドで実行され、それが失敗した場合、元の実行で指定されたのと同じオプションを使用して、失敗したエントリーを再実行できます。

ジョブ・ステップのうち、一部が正常に実行され、一部が正常に実行されなかった 場合、ジョブ全体を再実行する必要はなく、個別にジョブ・ステップを再実行でき ます。ジョブ・ステップが順番に実行されるものである場合は、失敗したジョブ・ ステップからジョブの実行を再開できます。必要であれば、再実行するステップを 選択して、失敗したステップを省略できます。ただし、選択したジョブ・ステップ が順番に実行される場合に、そのうち 1 つが失敗すると、失敗した後のステップは 実行されません。

ジョブ・ステップを個別に再実行した場合、再実行した単一のジョブ・ステップの みを含む新しい実行履歴が親ジョブに作成されます。実行履歴の詳細については、 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』を参照してください。

エージェント・エントリーを再実行する場合は、E メール受信者のリストに出力レ ポートを送信する E メール送信などの関連付けられているタスクも、初回に失敗し ていれば再実行されます。同時に実行される関連付けられているタスクのうち 1 つ が失敗して 1 つが成功した場合、エージェントを再実行すると失敗したタスクのみ が再実行されます。ただし、失敗時に実行されるタスクが選択されている場合は、 再実行が失敗したときにそれらのタスクが再度実行されます。

実行履歴には正常に実行されたエントリーも表示されますが、成功したエントリー は再実行できません。これらのエントリーでは実行オプションは保存されません。

失敗したエントリーに関連付けられているタスクが削除または更新された場合、再 実行が失敗することがあります。

#### 始める前に

失敗したタスクを再実行するには、実行権限が必要です。

### 手順

- 1. 「管理」メニューから、「管理コンソール」をクリックします。
- 2. 「ステータスタブの「過去の処理」をクリックします。
- エントリーの横にある矢印をクリックして、「実行履歴の詳細を表示」 2 をクリックします。

「実行履歴の詳細を表示」ページに、失敗した実行の開始時刻、完了時刻、実行 ステータス、エラー・メッセージなどの実行の詳細が表示されます。エントリー が単一タスクであるか、複数のステップを含むジョブであるか、またはタスクを 含むエージェントであるかによって、ページにその他の情報が表示される場合が あります。例えば、単一タスクの場合、レポート・オプションと出力レポートが 表示されます。複数のステップを含むジョブの場合、ジョブ・ステップの実行の 詳細を示す「ジョブ」セクションが表示されます。

- 4. 「ステータス」の「失敗」の横にある「再実行」をクリックします。
  - 再実行するタスクが単一タスクの場合、再実行するかを確認するメッセージ が表示されます。
  - 再実行するタスクが複数のジョブ・ステップを含むジョブであるか、または タスクを含むエージェントである場合、「再実行」ページが表示されます。 再実行するエントリーの横にあるチェック・ボックスをオンにします。

ヒント:また、「未完了」セクションの「再実行」をクリックして、失敗したエ ントリーを再実行することもできます。単一のジョブ・ステップを再実行するに は、「ジョブ」セクションの「操作」列で、失敗したステップの「実行履歴の詳 細を表示」ボタン 💷 をクリックします。

# 第 18 章 スケジュール管理

IBM Cognos エントリーを都合の良いときに実行するようにスケジュールできま す。例えば、システムの負荷が少ない業務時間外にレポートやエージェントを実行 できます。または、週単位や月単位で定期的に実行することもできます。

**IBM Cognos Administration** の「スケジュール」は保護された機能であり、この 機能を使用するには適切な権限が必要です。

区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシ ート (XLS)、または XML 出力形式でレポートの実行をスケジュールするには、特 定の形式に対する出力の生成機能が必要です。詳細については、 386 ページの『レ ポートの形式』を参照してください。制限を受けているために自分では実行できな いフォーマットについては、それを指定した既存のスケジュールを更新することは できますが、そのようなフォーマットをスケジュールに導入することはできませ ん。

IBM Cognos Administration では、適切なスケジュール機能を使用して、日単 位、週単位、月単位、年単位、トリガー単位のスケジュールへのアクセスを制御で きます。また、「分単位のスケジュール」機能と「時間単位のスケジュール」機能 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を使用して、日内スケジュー ルを制限することもできます。

管理者権限がある場合は、次のようなタスクもスケジュールできます。

- Content Store の保守 73 ページの『Content Store 保守タスク』
- Query サービスのキャッシュ・タスクのスケジュール 187 ページの『Query サービス管理タスクの作成とスケジュール』
- 配布アーカイブに対するエントリーのインポートまたはエクスポート 303 ページの『第 19 章 配布』
- ジョブの実行 297 ページの『複数のエントリーをスケジュールするジョブの使用』
- ・ 評価指標の保守の実行 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価
   指標』

エントリーを指定の間隔で実行するようにスケジュールできます。エントリーを個 別にスケジュールすることも、ジョブを使用して複数のエントリーを同時にスケジ ュールすることもできます。ジョブには、レポート・スケジュールとは関係ないそ れぞれ独自のスケジュールがあります。

エントリーを毎月の最終日に実行するようにスケジュールできます。また、データ ベースの更新や E メールなどによってエントリーがトリガーされるようにスケジュ ールすることもできます。

レポートを実行して、カスタムで定義した形式、言語、ユーザー補助機能などのオ プションに基づく出力を作成できます。 各エントリーに関連付けることができるスケジュールは 1 つのみです。1 つのレポ ート・エントリーまたはエージェント・エントリーに複数のスケジュールが必要な 場合は、複数のレポート・ビューまたはエージェント・ビューを作成してから、ビ ューごとにスケジュールを 1 つ作成します。

スケジュールを作成すると、エントリーやジョブは指定された日時に実行されま す。スケジュールしたエントリーを表示および管理することもできます。詳細につ いては、 279 ページの『第 17 章 処理の管理』を参照してください。

#### スケジュールしたエントリーの資格情報

スケジュールされているエントリーを開くと、資格情報に現在のスケジュール所有 者が表示されます。自分がまだそのスケジュールの所有者でない場合は、自分を所 有者として指定できます 297 ページの『例 - スケジュールの資格情報の変更』。

スケジュールを変更する際、スケジュールの資格情報は自動的に変更されません。 資格情報は、明示的に変更する必要があります。

データ・ソース資格情報の詳細については、 233 ページの『信頼されている資格情報』を参照してください。

#### スケジュールしたエントリーのプロンプト

プロンプトを含むエントリーをスケジュールする場合は、スケジュールに基づいて レポートが実行されたときに使用できるプロンプト値が存在するように、プロンプ ト値を保存するか、デフォルト値を指定します 389 ページの『レポートのデフォル ト・プロンプト値の指定』。

ジョブでは、ジョブ・ステップのプロンプト値を指定できます。ジョブの一部とし てエントリーを実行すると、エントリーに保存されているプロンプト値ではなく、 ジョブの定義に保存されているプロンプト値が使用されます。ジョブの定義にプロ ンプト値が指定されていない場合は、IBM Cognos ソフトウェアによって、エント リーに保存されている値が使用されます。

#### スケジュールしたエントリーの優先度

エントリーをスケジュールする場合、1 から 5 までの実行の優先度を選択できま す。例えば、優先度 1 のエントリーは優先度 5 のエントリーよりも前に実行され ます。同じ優先度のエントリーが複数ある場合、最初にキューに到着したエントリ ーが最初に実行されます。デフォルトは 3 です。エントリーの優先度に対する権限 がない場合、優先度は表示されますが変更することはできません。

ジョブをスケジュールする際、ジョブ全体の優先度を設定することはできますが、 ジョブ内の個々のエントリーについて優先度を設定することはできません。ただ し、エントリーがキューで待機しているときにそれらの個々のエントリーの優先度 を変更することはできます。

キュー内のエントリーの優先度は、すでに実行中のエントリーには影響しません。 実行のエントリーが終了すると、次に実行されるエントリーについて、キューの優 先度がチェックされます。 詳細については、 287 ページの『エントリー実行優先度の管理』を参照してください。

スケジュールしたエントリーの実行履歴

IBM Cognos ソフトウェアでは、スケジュールしたエントリーが実行されるたびに 履歴情報が保存されます。エントリーの実行履歴を使用すると、エントリーがいつ 実行されたかや正常に実行されたかどうかを確認できます。詳細については、 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』を参照してください。

## エントリーのスケジュール

エントリーのスケジュールには、後で 1 回のみ実行するスケジュールと、定期的な 日時で実行するスケジュールがあります。例えば、レポートまたはエージェントを スケジュールできます。

不要になったスケジュールは削除できます。また、スケジュールの詳細を保持した まま、スケジュールを無効にすることもできます。この場合、必要に応じて後でス ケジュールを有効化することができます。詳細については、 279 ページの『第 17 章 処理の管理』を参照してください。

毎月最終日に実行するようにエントリーをスケジュールすることも、ジョブの一部 として実行するようにスケジュールすることもできます。また、レポートをトリガ ーに基づいてスケジュールすることもできます 301 ページの『トリガー駆動型エン トリー・スケジュール機能』。

**IBM Cognos Administration** の「スケジュール」は保護された機能であり、この 機能を使用するには適切な権限が必要です。

エントリーをスケジュールするには、エントリーを実行するための権限が必要で す。例えば、レポートまたはレポート・ビューをスケジュールするには、これらに 対する読み取り権限、書き込み権限、実行権限、および通過権限が必要です。子レ ポート・ビューをスケジュールするには、親レポートに対する実行権限が必要で す。また、レポートで使用するデータ・ソースに対する次のアクセス権も必要で す。

- dataSource 実行および通過
- dataSourceConnection 実行および通過

実行権限のみの場合、データベースへのログオンを求めるプロンプトが表示され ます。

• dataSourceSignon - 実行

制限された CVS、PDF、XLS、または XML 出力形式でレポートを実行するようス ケジュールするには、特定の形式に対する出力の生成機能が必要です。詳細につい ては、 386 ページの『レポートの形式』を参照してください。

エントリーの優先度を設定するには、保護されている特性である「スケジュール優 先度」にアクセスするための権限が必要です。詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。 必要に応じて、スケジュールされているエントリーの資格情報を変更し、現在のス ケジュール所有者を変更できます。詳細については、 297 ページの『例 - スケジ ュールの資格情報の変更』を参照してください。

## 手順

- スケジュールするエントリーの「スケジュール」ボタン
   をクリックします。
- 2. スケジュールしたエントリーの優先度を設定します。

優先度が高いものには小さな数を選択します。デフォルトは 3 です。

3. 「頻度」で、スケジュールを実行する頻度を選択します。

「頻度」セクションでは選択内容が動的に反映されるため、ページが更新されて から頻度を選択します。

「頻度」セクションで日内スケジュールを指定する場合、スケジュールされたエントリーの毎日の頻度を選択することもできます。これを行うには、手順4に進みます。

日内スケジュールを指定していない場合は、手順 5 に進みます。

 「毎日の頻度」で、手順5 で選択した開始時刻から始まる、対象日にレポート を実行する頻度を指定します。エントリーは、分単位または時間単位のいずれか でスケジュールできます。

毎日の頻度を指定する場合、1 日のうちのどの時間帯にエントリーを実行するか を選択することもできます。例えば、午前 9 時から午後 5 時までの時間を選択 できます。これにより、1 日のうちで更新が必要な時間帯にエントリーが実行さ れるように制限できます。

ヒント:毎時の頻度および期間を指定する際に、24 時間クロックに均一に分割 する毎時の頻度を選択した場合、スケジュールされたエントリーは毎日同じ時間 に実行されます。 24 時間クロックに均一に分割されない毎時の頻度を選択した 場合、スケジュールされたエントリーは後続の日には異なる時間に実行されま す。

		エントリーが 1 日目に実	エントリーが 2 日目に実
毎日の頻度	指定された期間	行する時間	行する時間
3 時間ごと	9:00 a.m. から 6:00	9:00 a.m.	9:00 a.m.
	p.m.	12:00 p.m.	12:00 p.m.
		3:00 p.m.	3:00 p.m.
		6:00 p.m.	6:00 p.m.
5 時間ごと	9:00 a.m. から 6:00	9:00 a.m.	10:00 a.m.
	p.m.	2:00 p.m.	3:00 p.m.

表 69. 期間内で毎時スケジュールされるエントリーの 1 日目および 2 日目の実行時間の例

5. 「開始」で、スケジュールを開始する日付を選択します。

6. 「終了」で、いつスケジュールを終了するかを選択します。

作成したスケジュールをすぐに適用しない場合は、「スケジュールを無効化」チ ェック・ボックスをオンにします。後でスケジュールを有効にするときに、チェ ック・ボックスをオフにします。

 「スケジュール」ページにその他のオプションがある場合は、必要なオプション を指定します。

例えば、レポートの場合は、形式、言語、配信方法 (出力レポート・ファイルの 保存方法を含む)、およびプロンプト値を選択できます。

8. 「**OK**」をクリックします。

#### タスクの結果

スケジュールが作成され、レポートは次回のスケジュール日時に実行されます。

## 例 - スケジュールの資格情報の変更

自分が現在のスケジュール所有者として識別されるように、スケジュールの資格情報を変更するとします。

#### 手順

1. 資格情報を変更するエントリーの「スケジュール」ボタン 🖭 をクリックしま す。

「資格情報」に、現在のスケジュール所有者の名前が表示されます。

2. 「自分の資格情報を使用」リンクをクリックして、自分をスケジュール所有者に します。変更を保存します。

次にスケジュールを開いたときには、自分の資格情報によって自分がスケジュー ル所有者 (例えば、"Sam Carter (scarter)") として識別されます。

注:匿名ユーザーとしてログオンすると、現在のスケジュール所有者に関する情報は表示されません。

## 複数のエントリーをスケジュールするジョブの使用

ジョブを作成すると、複数のエントリーに同じスケジュールを設定できます。ジョ ブにより、まとめてスケジュールされて同じスケジュール設定を共有する一連のレ ポート、レポート・ビュー、およびその他のジョブが識別されます。スケジュール したジョブが実行されると、ジョブに含まれているすべてのエントリーが実行され ます。

ジョブ項目が使用できない場合は、「エントリーへのリンク」をクリックすると、 異なるリンクを選択できます。

ジョブはステップで構成されます。各ステップからは、個々のレポート、ジョブ、 およびレポート・ビューが参照されます。ステップは、一度に実行することも、順 番に実行することもできます。

- ステップを一度に実行すると、すべてのステップが同時に送信されます。すべてのステップが正しく実行されればジョブは成功です。ステップの1つが失敗しても、ジョブの他のステップは影響を受けることなく実行されますが、ジョブのステータスは「失敗」となります。
- ステップを順送りで実行する場合は、実行する順序を指定できます。この場合は、前のステップが問題なく実行された場合のみ、ステップが送信されます。ステップの実行に失敗した場合は、ジョブを停止するか、または他のステップを継続するか、どちらかを選択できます。

ジョブは、指定した時間に実行したり、定期的に実行したり、またはデータベース の更新や E メールなどのトリガーに基づいて実行したりするようにスケジュールで きます。詳しくは、 301 ページの『トリガー駆動型エントリー・スケジュール機 能』を参照してください。

ステップ内の各レポート、ジョブおよびレポート・ビューに対して、個別のスケジ ュールを設定することもできます。個々のステップ・エントリーの実行オプション は、ジョブに対して設定されている実行オプションよりも優先されます。独自の実 行オプションがないステップ・エントリーのデフォルトとなる実行オプションを、 ジョブに対して設定できます。

レポートを実行して、カスタムで定義した形式、言語、ユーザー補助機能などのオ プションに基づく出力を作成できます。

ジョブには、Content Store の保守、および配布のエクスポートとインポートを含めることもできます。詳細については、 73 ページの『Content Store 保守タスク』および 303 ページの『第 19 章 配布』を参照してください。

エントリーをジョブの一部として含めるための権限はエントリーのタイプによって 異なりますが、エントリーをスケジュールするための権限と同じです。詳しくは、 295 ページの『エントリーのスケジュール』を参照してください。

## 手順

- 1. IBM Cognos Analytics ポータルで、 **・** 「新規」を選択してから、 **ビ** 「ジ ョブ (**Iob**)」を選択します。
- 2. 名前を入力し、必要な場合はジョブの説明と画面のヒントを入力します。次 に、ジョブを保存するフォルダーを選択して、「次へ」をクリックします。

「ステップを選択」ページが表示されます。

- 3. 「追加」をクリックします。
- 4. 追加するエントリーのチェック・ボックスにチェック・マークを付けて、矢印
   ボタン をクリックします。目的のエントリーが「選択されたエントリ

ボタン L___」 をクリックします。目的のエントリーか「選択されたエントリ ー」ボックスに表示されたら、「**OK**」をクリックします。

「検索」をクリックし、「検索文字列」ボックスに検索語句を入力することも できます。検索オプションを指定するには、「編集」をクリックします。目的 のエントリーが見つかったら、右向きの矢印ボタンをクリックして「選択され たエントリー」ボックスにエントリーを追加し、「**OK**」をクリックします。 「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエ ントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目を選 択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。ユーザー・エン トリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

5. ジョブの一部として実行する際の個々のエントリーの実行オプションを変更す

るには、「設定」アイコン クリックして、「出力レポートを作成」を クリックし、「デフォルト値をオーバーライド」ボックスにチェック・マーク を付け、変更を加えてから「**OK**」をクリックします。

携帯機器ユーザーに E メールを送信するには、「レポートを携帯機器を使用 する受信者に送信する」を選択し、「受信者を選択」をクリックします。

ヒント:各エントリーの設定をデフォルトに戻すには、「削除」ボタンをクリ ックします。

6. ジョブの実行時にレポートのキャッシュを更新するには、レポートの横にある「編集」アイコンをクリックして、「レポートを実行」メニューから「レポートのキャッシュを更新」をクリックします。「デフォルト値をオーバーライド」をクリックします。表示された言語を受け入れる場合は、「OK」をクリックします。言語を変更する場合は、「言語を選択」をクリックして希望する言語を選択してから「OK」をクリックします。「OK」をクリックして表示された言語を選択します。

ヒント:キャッシュをクリアする場合は、「削除」ボタンをクリックします。

 キャッシュを作成または更新するには、「設定」アイコンをクリックして、 「レポートのキャッシュを更新」をクリックし、「デフォルト値をオーバーラ イド」ボックスをオンにします。必要に応じて言語を追加し、「OK」をクリ ックします。

ヒント: キャッシュをクリアするには、キャッシュをクリアするレポートの横 にある「詳細」をクリックし、「キャッシュをクリア」をクリックして、 「**OK**」を 2 回クリックします。

8. 「ジョブ・ステップの送信」で、ステップを「すべて同時」に送信するか、 「順送り」で送信するかを選択します。

「順送り」を選択すると、ステップは「ジョブ・ステップ」リストに表示され ている順序で実行されます。いずれかのステップが失敗してもジョブを続行す る場合は、「エラー時も継続する」チェック・ボックスをオンにします。

ヒント: 順序を変更するには、「順番を編集」をクリックし、必要な変更を行ってから「**OK**」をクリックします。

9. ジョブ・レベルでデフォルトの実行オプションを指定する場合は、「全ステップに対するデフォルト値」の「設定」をクリックします。

複数のエントリーを含むジョブで使用できる実行オプションは、すべてのエン トリーには適用されない場合があります。オプションが 1 つのエントリーに適 用されない場合、その内容は無視されます。

- デフォルト値を上書きするには、カテゴリーを選択し、「デフォルト値をオー バーライド」チェック・ボックスをオンにし、ジョブのデフォルト・オプショ ンを選択して、「OK」をクリックします。
- 実行操作が正常に終了したときに、ジョブ・ステップの完全な履歴詳細が保存 されるようにするには、実行履歴の詳細レベルのリストから「すべて」をクリ ックします。ジョブの限定的な実行履歴詳細が保存されるようにするには、 「限定」をクリックします。ジョブの実行に失敗した場合、完全な履歴詳細が 保存されます。

デフォルト値は「すべて」です。

- 12. 次のいずれかを行います。
  - 今すぐ実行または後で実行するには、「今すぐ実行、またはあとで実行」、 「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を設定し、「検索の み」または「検索して修正」をクリックし、「実行」をクリックします。実 行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「繰り返し実行するように スケジュール」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、お よび終了日を選択します。「検索のみ」または「検索して修正」をクリック し、「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。詳細については、 279 ページの 『第 17 章 処理の管理』を参照してください。

スケジュールまたは実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終了」の順にクリックします。

タスクの結果

ジョブが作成され、次回のスケジュール日時に実行されます。

# キャッシュされたプロンプト・データ

レポートを実行するたびに値の入力を求めるレポートには、キャッシュされたプロ ンプト・データを使用します。データベースからではなくキャッシュからデータを 取得するため、レポートの実行速度が上がります。

キャッシュが使用されるのは、要求された言語がキャッシュの言語と同じである場 合に限ります。例えば、キャッシュ・データが英語、英語 (米国)、およびドイツ語 (ドイツ) に対応する場合、プロンプトが表示されたときに英語 (米国) をレポート 言語として指定すると、完全一致となり、キャッシュ・データが使用されます。キ ャッシュ・データは部分一致の場合も使用されます。英語 (カナダ) を指定すると、 英語のキャッシュ・データが使用されます。ドイツ語 (オーストリア) を指定する と、一致しないとみなされ、キャッシュ・データは使用されません。

キャッシュは、レポートにもレポート・ビューにも使用できます。レポート・ビュ ーの場合、まずレポート・ビュー用のキャッシュが使用されます。レポート・ビュ ー用のキャッシュが見つからない場合は、関連するレポート用のキャッシュが使用 されます。 キャッシュの作成または更新には、ジョブを使用する必要があります。ジョブを定 期的に実行するようにスケジュールすると、キャッシュを自動的に更新できます。 次回レポートを実行するときに実データを使用したい場合は、キャッシュをクリア します。

# トリガー駆動型エントリー・スケジュール機能

データベース更新や E メールなどの発生に基づいてエントリーをスケジュールでき ます。発生がトリガーとなり、エントリーが実行されます。例えば、データベース が更新されるたびにレポートを実行できます。

トリガー駆動型スケジュール機能は、発生に基づいてエントリーを自動的に実行す る場合に使用できます。また、ユーザーがエントリーを実行できる時期を制限する 場合にも使用できます。例えば、データベースの更新が1週間に1回のみである ウェアハウス環境では、それ以上の頻度でレポートを実行する必要がありません。

レポートが 1 週間に 1 回のみ実行されるように、データベースの更新に基づいて レポートをスケジュールできます。

トリガー駆動型スケジュール機能は、エントリーのみに適用され、エントリーに関 連付けられたエントリー表示には適用されません。例えば、トリガー駆動型スケジ ュール機能がレポートに適用される場合、そのレポートに関連付けられるレポー ト・ビューには適用されません。ただし、トリガーを使用してレポート・ビューを スケジュールすることは可能です。

**IBM Cognos Administration** で、「トリガー単位のスケジュール」機能を使用して、トリガー単位のスケジュールへのアクセスを制御できます。

## トリガー駆動型スケジュール機能の設定

発生に基づいてエントリーをスケジュールし、トリガー駆動型スケジュールを確認 するには、読み取り権限、書き込み権限、実行権限、および通過権限が必要です。

区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシ ート (XLS)、または XML 出力形式でレポートの実行をスケジュールするには、特 定の形式に対する出力の生成機能が必要です。詳細については、 386 ページの『レ ポートの形式』を参照してください。

また、エントリーで使用するすべてのデータ・ソースに対する次のアクセス権も必要です。

データ・ソース	権限
dataSource	実行および通過
dataSourceConnection	実行および通過
	実行権限のみの場合、データベースへのログオンを 求めるプロンプトが表示されます。
dataSourceSignon	実行

表 70. トリガー駆動型スケジュールに必要なデータ・ソースおよび権限

トリガー駆動型スケジュール機能を設定する前に、最新の資格情報が存在すること を確認してください。

ヒント: 「個人用領域のオプション」ボタン 🎒 、「個人用設定」、および「個人 用」タブをクリックし、「資格情報を更新」をクリックします。

次の手順に従って、トリガー駆動型スケジュール機能を設定します。

- 発生に基づいてエントリーをスケジュールする『発生に基づいたエントリーのス ケジュール』
- サーバーでのトリガー発生の設定を管理者に依頼する

トリガーの発生は、Software Development Kit 開発者が IBM Cognos Software Development Kit を使用して設定することもできます。詳細については、 「Software Development Kit Developer Guide」を参照してください。

## 発生に基づいたエントリーのスケジュール

トリガー駆動型スケジュール機能設定の一部として、発生に基づいてエントリー・ スケジュールする必要があります。

トリガー駆動型のスケジュールは、トリガーを発信するユーザーに次の権限がある 場合にアクティブになります。

- スケジュール・エントリーに対する読み取り権限と通過権限
- スケジュール・エントリーのすべての先祖に対する通過権限
- IBM Cognos Administration へのアクセス権

区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシ ート (XLS)、または XML 出力形式でレポートの実行をスケジュールするには、特 定の形式に対する出力の生成機能が必要です。詳細については、 386 ページの『レ ポートの形式』を参照してください。

### 手順

- 1. スケジュールするエントリーの横にある「スケジュール」ボタン ¹ をクリックします。
- 2. 「頻度」の「トリガー」タブをクリックします。
- 3. 「トリガー名」にトリガー発生の名前を入力します。

注:入力するトリガー名は、管理者または開発者から指定される場合がありま す。指定されない場合は、使用するトリガー名を管理者または開発者に伝える必 要があります。

- デフォルトの開始日時は「今すぐ実行」で、デフォルトの終了時は「無期限」で す。これは、トリガーが発生 ("trigger.bat"または Software Development Kit アプリケーションから発生) すると、トリガー・スケジュールが実行されること を意味します。有効な開始日時および終了日時を入力すると、トリガー・スケジ ュールはこれらの日付の間にのみ発信されます。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

# 第 19 章 配布

配布とは、任意のインストール・セットから別のインストール・セットへのアプリ ケーションの移動です。IBM Cognos コンテンツをソース環境からターゲット環境 に配布することができます。

Content Store 全体を配布することも、特定のコンテンツ (パッケージやフォルダー、ネームスペース、ユーザー・アカウント、視覚化など) だけを配布することもできます。

通常、配布によって、エントリーが開発環境からテスト環境に転送され、最終的に は実稼働環境に転送されます。また、異なるオペレーティング・システム間の配布 も可能です。

配布時には、ターゲット環境に支障をきたすことなく正しい情報を配布できるよう に、配布計画を作成することが重要になります。また、ソース環境とターゲット環 境でのセキュリティーを検討することも重要です。

以前のリリースからエントリーをアップグレードするには、配布インポートのウィ ザードを実行します。詳細については、 325 ページの『ターゲット環境へのインポ ート』を参照してください。

オペレーティング・システムやスクリプトの機能を使用して、コマンド行から配布 を実行できます。IBM Cognos Software Development Kit を使用すると、次のよ うな配布プロセスを自動化できます。

- 配布仕様の作成、更新、削除
- 配布アーカイブからの配布仕様のロード
- 配布のエクスポート要求とインポート要求の送信
- 配布履歴へのアクセス

詳細については、IBM Cognos「Software Development Kit Developer Guide」を参照 してください。

マルチテナント IBM Cognos Analytics 環境でのコンテンツの配布の詳細について は、 367 ページの『テナント・コンテンツの配布』を参照してください。

Human Task サービスの配布は独立した 1 つのタスクです。詳細については、 331 ページの『Human Task サービスと Annotation サービスの配布』を参照して ください。

IBM Cognos Analytics コンテンツを 1 つの環境から別の環境に配布することは複 雑な処理で、包括的なアプローチが必要になります。「Proven Practices」ドキュメ ント「IBM Cognos Analytics – Deploy Content Between Environments」 (http://www.ibm.com/developerworks/data/library/cognos/infrastructure/ cognos_specific/page581.html) は、配布を正常に行うために役立つガイドラインと 例を提供します。

# 配布仕様

配布仕様は Content Store にあるエントリーであり、配布されるエントリー、配布 の設定、および配布アーカイブの名前が定義されています。

配布仕様には 2 種類あります。エクスポート仕様はソース環境で作成され、配布ア ーカイブの作成を制御します。インポート仕様はターゲット環境で作成され、配布 アーカイブからのエントリーのインポートを制御します。

各配布仕様をインポートまたはエクスポートした日時および詳細は、配布履歴を表 示することで確認できます。

## 配布アーカイブ

配布アーカイブとは、配布する実際のエントリーが格納される圧縮ファイルであ り、ソース環境からエクスポートするときに作成されます。

配布アーカイブをソース環境からターゲット環境に移動します。次に、配布アーカ イブからターゲット環境にエントリーをインポートします。

配布アーカイブを移動するには、IBM Cognos ソフトウェアがインストールされて いるコンピューター上のインストール・ディレクトリーに対するアクセス権が必要 です。この場所は、設定ツールで設定します。デフォルトの場所は インストールの 場所/deployment です。場所の変更の詳細については、IBM Cognos「インストー ルおよび設定ガイド」を参照してください。

既存の配布アーカイブにエクスポートすると、アーカイブの内容が上書きされま す。

## 配布計画

配布時には、セキュリティーの対応と、どの配布方法を選択するかについて検討す る必要があります。

ターゲット環境で参照が切れないように、別のパッケージやフォルダー内のエント リーを参照しているすべてのエントリーを配備する必要があります。注意すべきエ ントリーは次のとおりです。

- ジョブとレポート・ビュー
- メンバーシップとエントリー権限

## セキュリティーと配布

配布する前に、アクセス権、配布アーカイブのセキュリティー、Cognos 以外のネ ームスペースへの参照を検討する必要があります。

### アクセス権

配布するエントリーに、アクセス可能なユーザーとグループを指定したアクセス権 223 ページの『第 12 章 アクセス権と資格情報』などのセキュリティーが適用され ている場合があります。Content Store 全体を配布する場合 307 ページの 『Content Store 全体の配布』は、アクセス権がすべて保持された状態で配布され ます。パッケージ、共有フォルダー、ディレクトリーの内容を選択して配布する場合は、適用されているアクセス権を保持したまま配布するかどうかを選択できます 309 ページの『選択した共有フォルダーとディレクトリーの内容の配布』。

次の点に注意してください。

対象となるユーザーとグループ

アクセス権をターゲット環境に配布する場合は、対象となるユーザーとグループ がターゲット環境に存在する必要があります。

• アクセス権の規則

エントリーの配布後にもアクセス権が機能するようにするには、ソース環境とタ ーゲット環境で同じ認証プロバイダーを同じ設定で使用する必要があります。そ れ以外の場合、配布後はアクセス権が機能しません。

Cognos ネームスペースを使用して、ソース環境のアクセス権がターゲット環境 でも機能するようにします。例えば、ソース環境で"すべてのユーザー"グループ をメンバーとする Cognos グループを作成し、このグループにアクセス権を設定 します。配布後にターゲット環境で、Cognos グループを認証プロバイダーから の対応するユーザーやグループにマップし、グループのメンバーシップから"すべ てのユーザー"を削除します。

Cognos グループおよび役割を配布する方法については、 311 ページの『Cognos グループと役割の添付』を参照してください。

### 配布アーカイブの保護

配布アーカイブ 304 ページの『配布アーカイブ』には、サインオンや、出力レポー ト内の秘密アカウント、クレジット・カード番号などの機密情報が含まれているこ とがあります。エクスポートする際にパスワードを設定すれば、配布アーカイブを 暗号化できます。この場合、後でインポートするときに暗号化パスワードを入力す る必要があります。パスワードは、8 文字以上で指定します。

配布アーカイブにデータ・ソースのサインオンを含める場合 163 ページの『デー タ・ソース・サインオン』や、Content Store 全体を配布する場合 307 ページの 『Content Store 全体の配布』は、配布アーカイブを暗号化する必要があります。

暗号化は、設定ツールで設定します。詳細については、IBM Cognos「インストール および設定ガイド」を参照してください。

## 他のネームスペースへの参照の添付

グループ、役割、配布リスト、連絡先、データ・ソース・サインオンなどの一部の エントリー、および E メール受信者やレポートの連絡先などの一部のレポート・プ ロパティーからは、「Cognos」ネームスペース以外のネームスペース内のエンティ ティーを参照できます。共有フォルダーとディレクトリーの内容を配布する際に は、これらのエントリーを、これらのネームスペースの参照先を含めて配布するこ とも、参照先は含めずに配布することもできます。

次の点に注意してください。

参照を含める場合

他のネームスペースへの参照を含める場合には、該当するネームスペースに各参 照先エンティティーが存在するかどうかがシステムによって確認されます。この ため、各ネームスペースにログオンできること、およびネームスペース内の必要 なエンティティーにアクセスするために必要となる権限があることを確認する必 要があります。ネームスペースにアクセスできない場合、配布中にエラーが発生 します。

参照を含めない場合

他のネーム・スペースへの参照を含めない場合、グループ、役割、配布リスト、 およびデータ・ソース・サインオンのメンバーシップのリストから、参照先エン ティティーが削除されます。参照が他のプロパティーに設定されている場合は、 そのプロパティーからも削除されます。

Content Store 全体を配布する場合 307 ページの『Content Store 全体の配布』 は、すべてのネームスペースへの参照が含まれます。

# 古いアーカイブのインポート時のローカライズされたオブジェクト 名の維持

IBM Cognos ソフトウェアの新しいリリースには、新しいロケールのサポートが導入されています。古いアーカイブを新しいバージョンにインポートすると、一部の ロケールのオブジェクト名の翻訳が欠落する可能性があります。この問題を回避す るには、インポートを行う前に、詳細プロパティー

CM.UpdateInitialContentNamesAfterImport を設定してください。

## このタスクについて

例えば、IBM Cognos Business Intelligence バージョン 10.1.1 および 10.2 には、 カタロニア語、クロアチア語、デンマーク語、ギリシャ語、カザフ語、ノルウェー 語、スロバキア語、スロベニア語、およびタイ語の各ロケールのサポートが追加さ れました。以前のバージョンで作成されたアーカイブでは、これらのロケールはサ ポートされていません。これらのタイプのアーカイブのインポートを計画する際 は、インポートを開始する前に CM.UpdateInitialContentNamesAfterImport プロパ ティーを設定してください。こうすることで、これらの追加ロケールのオブジェク ト名 (「共有フォルダー」や「個人用フォルダー」など)が翻訳され、適切に表示さ れるようになります。

古いアーカイブをインポートした後、指定した言語でオブジェクト名が表示されな い場合は、「IBM Cognos Analytics トラブルシューティング・ガイド」を参照して ください。

#### 手順

- 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- ContentManagerService」の場合、パラメーター名
   CM.UpdateInitialContentNamesAfterImport を入力します。
- 3. 「値」列に、影響を受けるロケールを入力し、それぞれをコンマで区切ります。

例えば、スロベニア語およびクロアチア語のコンテンツ・ロケールの場合、次の テキスト文字列を入力します。 sl,hr

## タスクの結果

この設定が有効になっているとパフォーマンスに影響が生じるため、古いアーカイ ブのサポートが不要になったときには、この詳細設定を削除してください。

## **Content Store** 全体の配布

Content Store 全体を配布すると、すべてのパッケージ、フォルダー、およびディ レクトリーの内容が新しい場所にコピーされます。

例えば、IBM Cognos ソフトウェアのインストール先のコンピューターを変更する 場合、古い環境から新しい環境に Content Store 全体を移動すれば、管理者やユー ザーが作成したレポートやその他のエントリーをすべてそのまま移動できます。

この他にも、次のような場合には Content Store 全体を配布するとよいでしょう。

- 新しいコンピューターなどの何も登録されていない環境へ、開発環境からアプリケーション全体を移動する場合
- 既存のコンピューターなどにある既存の環境のアプリケーション全体を、開発環境のアプリケーションで更新する場合
- Content Store のデータベース・タイプやオペレーティング・システムが異なる など、別の基礎技術を使用する既存の環境からアプリケーションを移動する場合
- Content Store の内容を更新する場合

Content Store を元の環境から別の環境に移動する場合、Content Store を適切に動作させるためには、ポリシー、ユーザー、役割、グループに対して元の環境と同じネームスペースを使用する必要があります。

Content Store 全体を配布すると、競合がなければ、設定データ以外のターゲット Content Store の内容が削除され、ソースの Content Store の内容に置き換えられ ます。インポート後も、エントリーの所有者権限はソースの Content Store での設 定が引き継がれます。競合の解消方法については、 315 ページの『競合解消の規 則』を参照してください。

配布を完了した後、レポートに関連付けられているパッケージのリンクの一部が動 作しない場合があります。パッケージをレポートに再リンクする必要がある場合も あります。パッケージのレポートへのリンクについては、Studio/Authoring ツール のドキュメントを参照してください。

ヒント:Content Store 全体を配布するのではなく、特定の共有フォルダーやディレクトリーの内容のみをエクスポートすることもできます 309 ページの『選択した共有フォルダーとディレクトリーの内容の配布』。

## **Content Store**

Content Store には、次のようなポータル内のすべてのエントリーが含まれています。

- 共有フォルダー
- ・ パッケージ

- ・ レポート
- データ・ソース
- 配布リストと連絡先
- プリンター
- Cognos ネームスペース
- 配布仕様

配布履歴は含まれません『配布の履歴』。ディスパッチャーのような設定オブジェ クト『設定情報』は、デフォルトでエクスポートには含まれますが、インポートか らは除外されます。

ユーザーの個人用フォルダーや個人用ページを配布する場合は、エクスポートやイ ンポートの際にユーザー・アカウント情報を含める必要があります。

#### 配布の履歴

Content Store 全体をエクスポートすると、ソースの Content Store に存在するエ クスポートおよびインポート配布仕様がエクスポートされます。ただし、配布履歴 はエクスポートされません。

後で Content Store 全体インポートするときは、エクスポートおよびインポート配 布仕様もインポートします。「配布履歴を表示」ページには、インポートした仕様 のエントリーは表示されません。

インポートした配布仕様が、暗号化された配布アーカイブに使用されている場合、 その配布仕様は削除できます。Content Store 全体を初めてインポートするとき は、新しいインポート配布仕様を作成する必要があります。

デフォルトでは、配布レコードに保存される情報には、進捗レポートと集計レポートのみが含まれます。さらに詳細な情報が含まれるようにするには、詳細設定 CM.DEPLOYMENTDETAILENTIRECONTENTを使用して記録レベルを変更します。 68 ページの『詳細な Content Manager パラメーターの設定』の手順に従ってください。部分的配布では、さらに多くの記録レベルを使用できます 312 ページの『配布の詳細の記録』。

## 設定情報

Content Store 全体をインポートする場合、設定データはエクスポートには含まれ ますが、インポートからはデフォルトで除外されます。この設定は変更しないこと を推奨します。ただし、設定データをインポートする必要がある場合は、「詳細設 定」 328 ページの『Content Store 全体のインポートに設定オブジェクトを含め る』からデフォルトを変更できます。

設定データを、特に複数の Content Manager が存在する分散環境でインポートすると、Content Manager のステータスについての現在の情報が、インポートしたデータで上書きされる場合があります。

ヒント:設定データをインポートする場合は、ターゲット環境でサービスを再起動し て正しいステータス情報に更新します。 インポートに設定データを追加する方法については、 328 ページの『Content Store 全体のインポートに設定オブジェクトを含める』を参照してください。

Content Store の特定のオブジェクトをインポートする方法については、 316 ページの『Content Store 全体を配布する場合の競合解消規則』を参照してください。

## 選択した共有フォルダーとディレクトリーの内容の配布

Content Store 全体を配布するのではなく、選択した共有フォルダーとディレクト リーの内容のみを部分的に配布することもできます。

共有フォルダー内の任意のパッケージとフォルダーを配布できます。共有フォルダ ー階層を参照し、パッケージかフォルダーを選択します。この操作により、そのす べての内容が配布されます。パッケージやフォルダー内の特定のエントリーを選択 することはできません。エクスポートの際、親のパッケージとフォルダーはエクス ポートされず、Content Manager によってターゲット環境にそれらのプレースホル ダーの場所が作成されることはありません。また、エクスポートおよびインポート の際、配布される各パッケージおよびフォルダーに対して、Content Manager 階層 でターゲットの場所を新しく指定できます。

配布できるディレクトリーの内容は、Cognos ネームスペース、配布リスト、連絡 先、データ・ソース、データ・ソース接続とサインオンです。

共有フォルダーとディレクトリーの内容を配布する場合、Content Store の設定エ リア、機能エリア、exportDeploymentFolder エリア、および importDeploymentFolder エリア内のオブジェクトを含めることはできません 310 ページの『部分的配布のオプション』。詳細については、 305 ページの『他のネー ムスペースへの参照の添付』を参照してください。

Content Store の特定のオブジェクトをインポートする方法については、 314 ページの『インポートおよびエクスポート時における配布の競合解消規則』を参照して ください。

配布にパッケージとそのレポートが含まれていても、配布を完了した後、レポート に関連付けられているパッケージのリンクの一部が動作しない場合がありますパッ ケージをレポートに再リンクする必要がある場合もあります。パッケージのレポー トへのリンクについては、Studio/Authoring ツールのドキュメントを参照してくだ さい。

ヒント:特定のエントリーを配布するには、共有フォルダーのルート・レベルにフォ ルダーを作成して配布するエントリーのみをそのフォルダーにコピーしておき、配 布時にそのフォルダーを選択するという方法があります。

## パッケージの配布

部分的配布では、1 つ以上のパッケージを同時に配布できます。

パッケージでは、セキュリティー・オブジェクト、データ・ソース、配布リストな ど、パッケージ外のオブジェクトを参照できます。ただし、参照先のオブジェクト がパッケージとともに配布されるわけではありません。 インポートする必要のないパッケージがあれば、インポート時に配布アーカイブか ら除外できます。

## パッケージとフォルダーの名前の変更

部分的配布では、ターゲット環境でパッケージやフォルダーの名前を変更して、新 しい名前を付けることができます。

これは、ターゲット環境にある同じ名前のパッケージやフォルダーを上書きしない ようにする場合に便利です。ターゲット環境の既存のパッケージやフォルダーは残 り、配布したパッケージやフォルダーの名前が変更されます。

パッケージやフォルダーの名前を複数の言語で追加すると、ユーザーはロケールに 対応した名前を表示することができます。ロケールにより、文字の種類、照合順 序、日時の形式、通貨単位、およびメッセージに使用する言語や規約の情報が決ま ります。

## パッケージとフォルダーの無効化

部分的配布では、ターゲット環境でパッケージやフォルダーを無効にして、ユーザ ーがアクセスでないようにすることができます。

ユーザーに公開する前に、ターゲット環境でパッケージやフォルダーをテストする 必要があるようなときに便利です。

パッケージやフォルダーは、エクスポートやインポートの際に無効にできます。

パッケージやフォルダーを無効にすると、ターゲット環境にインポートした後は、 その中のエントリーにアクセスできなくなります。つまり、エントリーの実行、表 示、編集ができなくなります。無効になったエントリーにアクセスできるのは、そ のエントリーに対する書き込み権限があるユーザーのみです。

### 部分的配布のオプション

部分的配布では、エクスポートおよびインポート時に次のオプションを選択できま す。

エクスポート時にオプションを選なかった場合、インポート時にそのオプションを 使用することはできません。

出力レポート・バージョンの添付

出力レポート・バージョンを配布に含めることができます。このオプションを選択 した場合は、競合時の処理を選択できます。配布アーカイブの出力レポート・バー ジョンでターゲット環境の既存の出力レポート・バージョンを上書きするか、ター ゲット環境のバージョンを保持するかを選択できます。

#### 実行履歴の添付

レポートの実行履歴には、配布時におけるレポートの実行ステータスと実行日時に 関する統計情報 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』が表示されます。レ ポートの実行履歴を含めるかどうかを選択できます。
このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。配布アーカイブ のレポート実行履歴でターゲット環境の既存のレポート実行履歴を上書きするか、 ターゲット環境のレポート実行履歴を保持するかを選択できます。

#### スケジュールの添付

スケジュール 293 ページの『第 18 章 スケジュール管理』を配布に含めるかどう かを選択できます。スケジュールを配布しない場合、ターゲット環境のジョブやレ ポートからスケジュールが削除されます。

このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。配布アーカイブ のスケジュールでターゲット環境の既存のスケジュールを上書きするか、ターゲッ ト環境のスケジュールを保持するかを選択できます。

配布でスケジュールをインポートすることを選択するときに、インポートされるス ケジュールの資格情報を自分の資格情報に変更できます。スケジュールの資格情報 は、スケジュールに含まれるレポートを実行するときに使用されます。この資格情 報により、レポートの権限とレポート実行に適用される機能が決まります。レポー トの「所有者として実行」プロパティーが有効に設定されていない場合も、デー タ・ソース、データ接続、および Signon オブジェクトへのアクセスにこの資格情 報が使用されます。資格情報を変更すると、処理に次のような影響を及ぼす可能性 があります。

- 影響なし
- データ・ソースで別の接続またはサインオンが選択される結果、レポートに異なるデータが生成される
- ユーザーに適切な機能または権限がないことから、レポートの実行に失敗する

インポートされるスケジュールの資格情報を、インポート実行ユーザーの資格情報 に変更するには、次の操作を実行します。

- 詳細設定 CM.DeploymentUpdateScheduleCredential を追加し、値を True に 設定します。手順については、 68 ページの『詳細な Content Manager パラメ ーターの設定』を参照してください。
- 「インポートの新規作成ウィザード」を使用してターゲット環境にインポートする場合は 325 ページの『ターゲット環境へのインポート』、「スケジュールを含める」をクリックし、「競合の解消方法」で「既存のエントリーを置換する」を選択します。次に、「エントリーの所有者」で、「インポートを実行するユーザー」を選択します。

#### Cognos グループと役割の添付

Cognos グループと役割 215 ページの『第 11 章 ユーザー、グループ、および役 割』を配布に含めるかどうかを選択できます。

Cognos グループと役割を配布するときは、そのすべてを配布する必要がありま す。ただし、次に示す組み込みグループは配布されません。

- 匿名
- 全認証済みユーザー
- すべてのユーザー

グループを配布すると、システム管理者グループのメンバーは、ターゲット環境に ある既存グループのメンバーと結合されます。これにより、配布したメンバーが無 効でも、ターゲット環境に確実にアクセスできます。ただし、配布完了時にメンバ ーシップのリストを変更しなければならない場合があります。

このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。ターゲット環境 のグループと役割を配布アーカイブのグループと役割に置き換えるか、またはター ゲット環境のグループと役割をそのまま使用するかを指定できます。

#### 配布リストと連絡先の添付

配布リストと連絡先を配布に含めるかどうかを選択できます。配布リストと連絡先 の配布を選択した場合は、そのすべてを配布する必要があります。

このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。ターゲット環境 の配布リストと連絡先を配布アーカイブの配布リストと連絡先に置き換えるか、ま たはターゲット環境の配布リストと連絡先をそのまま使用するかを指定できます。

#### データ・ソースの添付

データ・ソースとそれに関連する接続 117 ページの『第6章 データ・ソースと接続』を配布に含めることができます。データ・ソースの配布を選択した場合は、そのすべてを配布する必要があります。

データ・ソースの配布では、サインオンを含めることも、除外することもできま す。サインオンを配布しない場合は、ターゲット環境でデータ・ソースにサインオ ンを設定します。サインオンを配布する場合、配布アーカイブは暗号化してくださ い。

このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。ターゲット環境 のデータ・ソースを配布アーカイブからのデータ・ソースに置き換えるか、または ターゲット環境のデータ・ソースをそのまま使用するかを指定できます。

ターゲット環境のデータ・ソースを上書きすることを選択した場合、ソース環境と ターゲット環境のデータ・ソース接続が一致していないと、データベース接続を失 う可能性があります。この場合、インポートの後に、データベース・クライアン ト・ソフトウェアを使用してターゲット環境のデータ・ソースに手作業で再接続す る必要があります。

#### アクセス権の添付

アクセス権 304 ページの『アクセス権』を配布に含めることができます。

このオプションを選択した場合は、競合時の処理を選択できます。ターゲット環境 のアクセス権を配布アーカイブからのアクセス権に置き換えるか、またはターゲッ ト環境のアクセス権をそのまま使用するかを指定できます。

#### 配布の詳細の記録

配布の「記録レベル」を設定することにより、配布レコードに保存される情報のタ イプを指定できます。レコードに保存される情報の量はパフォーマンスに影響を与 えます。 次の記録レベルを設定できます。

基本

配布の進捗情報と集計情報を保存する。これはデフォルト・オプションです。

最小限

配布の集計情報のみを保存する。このオプションを選択した場合、メモリー消費 が最小になります。

・ トレース

配布の詳細すべてを記録する。このオプションを選択した場合、メモリー消費が 最大になります。

Content Store 全体を配布する場合に配布の詳細を記録する方法については、 308 ページの『配布の履歴』を参照してください。

#### 所有者に関する考慮事項

インポートしたエントリーの所有者を、インポートを実行するユーザーに変更でき ます。このオプションは、エクスポートやインポートの際に選択できます。ソース 環境での所有者を使用する場合、所有者がエントリーとともにインポートされま す。所有者オプションは、新しいエントリーのみ、または新しいエントリーと既存 のエントリーの両方に適用できます。

# 詳細な配布設定

詳細設定を使用すると、使用環境における配布の機能を指定できます。

詳細な設定を使用すると、以下の操作を実行できます。

- 出力レポートが配布の一部であるかどうかの指定
- 設定オブジェクトと子オブジェクトが配布の一部であるかどうかの指定

# 出力レポートが配布の一部であるかどうかの指定

出力レポートが配布の一部であるかどうかを指定できます。

- 2 つの詳細設定を使用できます。
- CM.DEPLOYMENTSKIPALLREPORTOUTPUT では、「個人用フォルダー」および「共有フォルダー」のすべての出力レポートを含めるかスキップするかを指定します。
- CM.DEPLOYMENTSKIPUSERREPORTOUTPUT では、「個人用フォルダー」の みについて、ユーザーの出力レポートを含めるかスキップするかを指定します。

デフォルトでは、両方とも True (含める) に設定されています。除外するようにデ フォルトを変更するには、False に設定します。

## 始める前に

**IBM Cognos Administration** 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』 にアクセスできる権限が必要です。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」「操作」メニューの「プロパティーを設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「詳細設定」の横にある、「編集」をクリックします。
- 5. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオン にします。
- 6. 「パラメーター」列に、「CM.DEPLOYMENTSKIPALLREPORTOUTPUT」ま たは「CM.DEPLOYMENTSKIPUSERREPORTOUTPUT」と入力します。
- 7. 「値」列に、使用する設定を入力します。
- 8. 「**OK**」をクリックします。
- 9. 「プロパティーを設定」ページで、「OK」をクリックします。

# 設定オブジェクトとその子を配布に含める

設定オブジェクトとその子を配布の一部として含める場合、詳細プロパティー CM.DEPLOYMENTINCLUDECONFIGURATION を true に設定します。デフォル トで、IBM Cognos Analytics では、このプロパティーの値は false です。

#### 始める前に

**IBM Cognos Administration** 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特 性』 にアクセスできる権限が必要です。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 2. 「システム」の横にある「操作」メニューの矢印をクリックし、「プロパティー を設定」をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「詳細設定」の横にある、「編集」をクリックします。
- 5. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオン にします。
- 6. 「パラメーター」列に、「CM.DEPLOYMENTINCLUDECONFIGURATION」 と入力します。
- 7. 「値」列に、使用する設定を入力します。
- 8. 「**OK**」をクリックします。
- 9. 「プロパティーを設定」ページで、「**OK**」をクリックします。

# インポートおよびエクスポート時における配布の競合解消規則

競合解消規則は、ターゲット環境へのインポート時またはエクスポート時に適用されます。

規則は、Content Store 全体と、選択した共有フォルダーやディレクトリーの内容 のどちらを配布するかによって異なります。選択した方法によって、インポートに 含めるオブジェクトと、ターゲット環境にオブジェクトがすでに存在する場合の競 合の解消方法が決まります。

Content Store 内のオブジェクトは、ポータルのエントリーと、これらのエントリ ーのプロパティーを表します。例えば、reportView オブジェクトはポータル内のレ ポート・ビューのエントリーを、runHistory オブジェクトはエントリーの実行履歴 を表します。オブジェクトの詳細については、 IBM Cognos 「*Software Development Kit Developer Guide*」を参照してください。

「共有フォルダー」内のオブジェクトは、Content Store 全体を配布するか、選択 した「共有フォルダー」およびディレクトリーの内容のみを配布するかによって、 デフォルトで配布規則が継承されます。

競合はインポート時のみでエクスポート時には発生しませんが、エクスポート時に アーカイブのオブジェクトを処理する際は、同じ規則が使用されます。オブジェク トに対する規則が「保持」の場合、エクスポート操作ではオブジェクトがアーカイ ブから除外されます。その他の設定の場合、アーカイブにはオブジェクトが含まれ ます。

# 競合解消の規則

配布アーカイブからエントリーをインポートするとき、ターゲットの Content Store にそのエントリーがすでに存在していると競合が発生します。

この競合が発生した場合は、エントリーおよび使用している詳細設定に従って、次 のいずれかの競合解消規則が使用されます。

衣 /1. 況 合 脌 泪 の 規具
--------------------

規則	説明
置換	エントリーとその子エントリーを置き換え る。
	エントリーとそのすべての子エントリーは、 ソースの Content Store から削除されます。 新規のエントリーとそのすべての子エントリ ーが、ソース Content Store に追加されま す。
維持	エントリーを保持する。 エントリーとそのすべての子エントリーのプ ロパティーは更新されません。既存の子エン トリーは保持されます。新しい子エントリー が追加される場合もあります。

表 71. 競合解消の規則 (続き)

規則	説明
更新	エントリーを更新する。
	エントリーとその子エントリーのプロパティ ーが更新されます。既存の子エントリーは保 持されます。新しい子エントリーが追加され る場合もあります。
結合	エントリーのプロパティーを既存のエントリ ーと結合する。

エントリーに子がない場合は、置換または更新のどちらを行っても、結果は同じに なります。

#### コンテンツ

Content Store 全体をインポートすると、Content Store の内容エリア内のオブジェ クトはすべてインポート対象となり、置換されます。

## ディレクトリー

データ・ソース、接続、およびサインオンをインポート対象とし、既存のエントリ ーを保持する場合は、アーカイブ内の関連するオブジェクトがターゲット環境内の オブジェクトに結合されます。オブジェクトが結合された場合でも、保存規則は適 用されます。このため、一部のオブジェクトが削除され、完全な結合が実行されな い場合があります。

Cognos グループと役割、および配布リストと連絡先を含める場合、配布を行うためにはこれらのアイテムをネームスペース内のフォルダーに保存する必要があることに注意してください。

アーカイブ内の配布リスト、グループ、および役割のメンバーは、ターゲット環境 の内容と結合されません。一連の配布リスト、グループ、役割が、ターゲット環境 内にある一連の配布リスト、グループ、役割と結合されます。ただし、システム管 理者グループをインポートした場合、このグループのメンバーは常に結合されま す。詳細については、 311 ページの『Cognos グループと役割の添付』を参照して ください。

## Content Store 全体を配布する場合の競合解消規則

Content Store 全体を配布する場合のデフォルトの競合解消規則は「置換」です。

次の表に、デフォルトの競合解消規則の例外を示します。

オブジェクト名	競合解消の規則
OUTPUT、GRAPHIC、PAGE	<ul> <li>次の場合は保持</li> <li>詳細設定 <ul> <li>CM.DEPLOYMENTSKIPALLREPORTOUTPUT が True に設定されている場合。</li> <li>オブジェクトがユーザー・アカウントの下にあり、 詳細設定 <ul> <li>CM.DEPLOYMENTSKIPUSERREPORTOUTPUT が True に設定されている場合。</li> </ul> </li> <li>設定の詳細については、313 ページの『出力レポート が配布の一部であるかどうかの指定』を参照してください。</li> </ul></li></ul>
ACCOUNT	配布時に「ユーザー・アカウント情報を含める」が選択 されている場合は更新、選択されていない場合は保持 ユーザー・アカウント情報を含める場合の詳細について は、 307 ページの『Content Store 全体の配布』を参 照してください。
SESSION、 CACHEOUTPUT、 REPORTCACHE、 REPORTMETADATACACHE、 DEPLOYMENTDETAIL	維持
FOLDER、 MRUFOLDER、 SUBSCRIPTIONFOLDER	オブジェクトが Cognos ネームスペースのユーザー・ アカウント・オブジェクト (「個人用フォルダー」フォ ルダー) の直下、またはサード・パーティー製ネームス ペースのユーザー・アカウント・オブジェクト (「個人 用フォルダー」フォルダー) の直下にある場合は置換
CAPABILITY, SECUREDFUNCTION, CONFIGURATION, CONFIGURATIONFOLDER, DISPATCHER, DIRECTORY, NAMESPACE, NAMESPACEFOLDER, PORTAL, PORTALPACKAGE, PORTALPACKAGE, PORTALSKINFOLDER, PORTLETFOLDER, PORTLETFOLDER, PAGELETFOLDER, PAGELET, PAGELET, PAGELETINSTANCE, PORTLETINSTANCE	更新

表 72. 完全な配布、デフォルトの競合解決規則に対する例外

表 72. 完全な配布、デフォルトの競合解決規則に対する例外 (続き)

オブジェクト名	競合解消の規則
ROLE, GROUP	置換 (ただし、オブジェクト ID は保持)
CONTENT、 ADMINFOLDER、 TRANSIENTSTATEFOLDER	置換 entireContentStoreReplace 配布オプションは、 Software Development Kit アプリケーションでのみ False (更新) に変更できます。詳細については、 Software Development Kit のドキュメントを参照して ください。
HISTORY, HISTORYDETAIL, HISTORYDETAILREQUEST ARGUMENTS	オブジェクトが ADMINFOLDER オブジェクトの下に ある場合は保持

# 部分的配布に対する競合解消規則

Content Store 全体ではなく共有フォルダーとディレクトリーの内容を配布する際 は、配布する内容を選択できます。

一部の競合解消規則は、ユーザーの選択内容に依存しています。

親オブジェクトが更新される場合、配布アーカイブから新しい子が追加され、ター ゲット環境内にある既存の子に追加されます。競合が発生した場合は、競合解消規 則によって子が置換されます。

ジョブ・ステップはすべて置換されるため、jobStepDefinition オブジェクトのイン ポート時に競合が発生する可能性はありません。

出力レポート・バージョンと実行履歴をインポート対象とし、既存のエントリーを 保持する場合は、アーカイブ内の関連するオブジェクトがターゲット環境内のオブ ジェクトに結合されます。オブジェクトが結合された場合でも、保存規則は適用さ れます。このため、一部のオブジェクトが削除され、完全な結合が実行されない場 合があります。

部分的配布に対するデフォルトの競合解消規則は「置換」です。

次の表に、デフォルトの競合解消規則の例外を示します。

表 73. 部分的な配布、デフォルトの競合解決規則に対する例外

オブジェクト名	競合解消の規則
REPORTVERSIONSQL	「出力レポート・バージョンを含める」が置 換と保持のどちらに設定されているかによっ て異なります 310 ページの『出力レポー ト・バージョンの添付』。

コメーフル・ロトフェリンは自己リレ、 ノーノーオンレート・シンパロ 四年(人)の見り(ニハリ ターの 1/1/2) (初	表 7	73.	部分的な配布、	デフォルトの競合解決規則に対する例外	(続き)
--------------------------------------------------------------	-----	-----	---------	--------------------	------

オブジェクト名	競合解消の規則
OUTPUT	詳細設定 DEPLOYMENTSKIPREPORTOUTPUT が True に設定されている場合は保持です 313 ページの『出力レポートが配布の一部である かどうかの指定』。
	それ以外の場合は、「出力レポート・バージ ョンを含める」が置換と保持のどちらに設定 されているかによって異なります 310 ペー ジの『出力レポート・バージョンの添付』。
GRAPHICPAGE	詳細設定 DEPLOYMENTSKIPREPORTOUTPUT が True に設定されている場合は保持です 313 ページの『出力レポートが配布の一部である かどうかの指定』。
	それ以外の場合は、「出力レポート・バージ ョンを含める」が置換と保持のどちらに設定 されているかによって異なります 310 ペー ジの『出力レポート・バージョンの添付』。
HISTORY	「実行履歴を含める」が置換と保持のどちら に設定されているかによって異なります 310 ページの『実行履歴の添付』。
SCHEDULE	「スケジュールを含める」が置換と保持のど ちらに設定されているかによって異なります 311 ページの『スケジュールの添付』。
JOBSTEPDEFINITION	置換
JOBDEFINITION	任意の JOBSTEPDEFINITION 子を更新して 削除します。PackageHistories が指定されて おり packageHistoriesConflictResolution が 置換に設定されている場合は、HISTORY オ ブジェクトも削除します。
DATASOURCE、 DATASOURCECONNECTION、 DATASOURCENAMEBINDING	「データ・ソースと接続を含める」が保持と 置換のどちらに設定されているかによって異 なります 312 ページの『データ・ソースの 添付』。
DATASOURCESIGNON	「データ・ソースと接続を含める」および 「サインオンを含める」が保持と置換のどち らに設定されているかによって異なります 312 ページの『データ・ソースの添付』。

オブジェクト名	競合解消の規則
DISTRIBUTIONLIST、CONTACT	「配布リストと連絡先を含める」が保持と置 換のどちらに設定されているかによって異な ります 312 ページの『配布リストと連絡先 の添付』。
ROLE, GROUP	「 <b>Cognos</b> グループと <b>Cognos</b> 役割を含め る」が保持と置換のどちらに設定されている かによって異なります 311 ページの 『Cognos グループと役割の添付』 (置換に 設定されている場合、オブジェクト ID は保 持されます)。
CACHEOUTPUT、 REPORTCACHE、 REPORTMETADATACACHE	維持

表 73. 部分的な配布、デフォルトの競合解決規則に対する例外 (続き)

# IBM Cognos エントリーの配布

IBM Cognos ソフトウェアを配布するには、ソース環境で配布アーカイブをエクス ポートし、アーカイブをターゲット環境に移動してそこでそのアーカイブをインポ ートする必要があります。

すべてのエントリーを構成するのと同じ方法でフォルダー内の配布仕様を構成できます。

配布とエージェント

配布はエージェントの一部にすることができます。

### 配布スケジュールと実行履歴

指定した時刻またはジョブの一部として配布を自動的に実行するようにスケジュー ルできます。IBM Cognos ソフトウェアでは、配布仕様ごとに実行履歴が保存され ます。エクスポートやインポートの後で、配布の日時やステータスを確認できま す。また、配布時に生成されたエラー・メッセージや、エクスポートまたはインポ ートしたエントリーのリストも確認できます。詳細については、 279 ページの『第 17 章 処理の管理』を参照してください。

#### 権限

IBM Cognos エントリーを配布するには、保護された特性である「管理タスク」の 実行権限と、保護された機能である「管理」の通過権限が必要です。詳細について は、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

またシステム管理者グループを配布するには、システム管理者グループに所属して、Cognos ネームスペースへの読み取り権限と書き込み権限を持っていることも必要です。詳細については、 231 ページの『エントリーに対するアクセス権の設定』を参照してください。

Content Store 全体をエクスポートする 307 ページの『Content Store 全体の配 布』のではなく、共有フォルダーとディレクトリーの内容を部分的にエクスポート する 309 ページの『選択した共有フォルダーとディレクトリーの内容の配布』場合 は、エクスポートするエントリーに対する読み取り権限と通過権限が必要です。ま た、エクスポート時に配布仕様と配布履歴を作成するため、書き込み権限も必要で す。インポート時には、インポートするエントリーに対する書き込み権限とポリシ ー設定権限が必要です。

## 前提条件

IBM Cognos ソフトウェアおよびその他の製品を、ソース環境とターゲット環境に インストールし、設定しておく必要があります。詳細については、IBM Cognos「イ ンストールおよび設定ガイド」を参照してください。

エクスポートやインポートを行う前に、Content Manager サービスを停止すること を推奨します。Content Manager サービスを停止しておけば、配布中にユーザーが 操作を実行しても、予期せぬ結果が発生することはありません。例えば、パッケー ジのインポート中にユーザーがパッケージ内のレポートを表示すると、出力レポー トを上書きするときにエラーが発生する場合があります。詳細については、 53 ペ ージの『ディスパッチャーとサービスの開始および停止』を参照してください。

作業を開始する前に、配布計画を作成して、使用する配布オプションや配布するエ ントリーを決定する必要があります 304 ページの『配布計画』。配布を行う前に、 バックアップを取ることを推奨します 191 ページの『第 8 章 データのバックアッ プ』。

## ソース環境からのエクスポート

IBM Cognos エントリーをエクスポートするには、エクスポート配布仕様を作成または変更してから、エクスポートを実行します。

以前に保存した配布仕様を使用して、エントリーをエクスポートまたは再配布する こともできます。

エントリーが、ソース環境のエクスポート配布アーカイブ 304 ページの『配布アー カイブ』にエクスポートされます。その後、アーカイブのエントリーをターゲット 環境にインポートします。ターゲット環境のエントリーは、配布アーカイブのエン トリーで更新できます。

配布での競合の解消については、 314 ページの『インポートおよびエクスポート時 における配布の競合解消規則』を参照してください。

エクスポートするときは、配布するエントリーを選択し、インポート時にデフォル トとして使用するオプションを設定します。

#### 新しいエクスポート配布仕様の作成

エクスポート配布仕様は、エクスポートする必要がある内容を定義します。

マルチテナント IBM Cognos Analytics 環境での内容のエクスポートの詳細につい ては、 367 ページの『テナント・コンテンツの配布』を参照してください。

## 始める前に

Content Store をエクスポートするときにデータ・ソース・アクセス・アカウント を保持する場合は、「ユーザー・アカウント情報を含める」を選択する必要があり ます。エクスポート時に構成情報を保持する場合は、

CM.DEPLOYMENTINCLUDECONFIGURATION 詳細設定を TRUE に設定しま す。詳細については、 314 ページの『設定オブジェクトとその子を配布に含める』 を参照してください。

#### 手順

- 1. ソース環境で「IBM Cognos Administration」を開きます。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 3. ツールバーの「エクスポートの新規作成」アイコン¹ をクリックします。 「エクスポートの新規作成」ウィザードが表示されます。
- 配布仕様の一意の名前を入力し、必要に応じて説明や画面のヒントを入力します。保存先のフォルダーを選択し、「次へ」をクリックします。
- 5. Content Store 全体をエクスポートするか、特定の内容のみを部分的にエクス ポートするかを選択します。
  - 特定の内容をエクスポートするには、「共有フォルダー、ディレクトリー、 およびライブラリーのコンテンツを選択」をクリックします。「次へ」をク リックし、手順7に進みます。
  - Content Store 全体をエクスポートするには、「Content Store 全体を選択」をクリックし、ユーザー・アカウント情報を含めるかどうかを選択します。「次へ」をクリックし、手順 15 に進みます。
- 6. 「共有フォルダーの内容を選択」ページで「追加」をクリックします。
- 7. 「エントリーを選択」ページの「使用できるエントリー」ボックスで、以下の エントリーまたはその内容のいずれかを選択します。
  - 共有フォルダー

パッケージおよびフォルダーが含まれます。エクスポートするパッケージお よびフォルダーを選択します。

• ディレクトリー

ネームスペース、ネームスペース・フォルダー、グループと役割、および個 々のユーザー・アカウントが含まれます。ユーザー・アカウントを選択する と、ユーザーと関連付けられているすべての内容 (ユーザーの「個人用フォ ルダー」の内容を含む) がエクスポートに組み込まれます。

• ライブラリー

視覚化などのライブラリー・リソースが含まれます。

- 8. 矢印アイコン → をクリックして、選択したアイテムを「選択されたエント リー」ボックスに移動し、「**OK**」をクリックします。
- 9. エクスポートする各エントリーに対して、以下のいずれかを行います。

- ターゲット環境でエントリーに別の名前を付ける場合、またはターゲットの場所を変更したり名前を複数言語で追加したりする場合は、「編集」アイコン
   をクリックし、変更を行って「OK」をクリックします。
- エントリーおよびその内容にユーザーがアクセスしないようにする場合は、 「インポート後に無効化」列のチェック・ボックスをオンにします。この方 法は、例えば、ターゲット環境で公開する前にレポートをテストする場合に 便利です。
- 「オプション」で、出力レポート・バージョン、実行履歴、およびスケジュー ルをエクスポート対象とするかどうかと、競合時のエントリーの扱いを選択し ます。
- 11. 「ディレクトリーの内容を選択」ページで、Cognos グループと役割、配布リ ストと連絡先、データ・ソースと接続をエクスポートするかどうかと、競合時 のエントリーの扱いを選択します。
- 「全般オプションを設定」ページで、アクセス権および「IBM Cognos」以外のネームスペースへの参照を含めるかどうかと、ターゲット環境へのインポート後のエントリーの所有者を選択します。
- 13. 配布履歴の「記録レベル」を指定します。詳細については、 312 ページの『配 布の詳細の記録』を参照してください。
- 14. 「配布アーカイブの指定」ページの「配布アーカイブ」で、リストから既存の 配布アーカイブを選択するか、新しい名前を入力して新規作成します。

配布アーカイブに新しい名前を入力する場合は、名前にスペースを含めないで ください。新しい配布仕様の名前が既存の配布アーカイブの名前と一致した場 合は、「_#」が名前の末尾に追加されます。「#」は 1 などの番号です。

- 15. 「暗号化」で「暗号化パスワードを設定」をクリックし、パスワードを入力して、「**OK**」をクリックします。
- 16. 「次へ」をクリックします。 概要情報が表示されます。
- 17. 概要情報を確認し、「次へ」をクリックします。 情報を変更するには、「戻る」をクリックして画面の指示に従います。
- 18. エクスポート配布仕様を実行する方法を指定します。
  - すぐに実行する場合または後で実行する場合には、「保存して 1 回実 行」、「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を設定し、「実 行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日を選択して、「OK」をクリックします。

ヒント:

スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効化」チェック・ボックスをオンにします。スケジュールのステータスを確認するには、 286 ページの『スケジュールされた処理の管理』を参照してください。

スケジュールの設定や実行を行わずに保存するには、「保存のみ」をクリックし、「終了」をクリックします。

## タスクの結果

エクスポートの実行後に、配布アーカイブを移動できます。エクスポート実行履歴 を表示することもできます 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』。

## 既存の配布仕様の変更

以前に保存した配布仕様を再利用して、エントリーをエクスポートまたは再配布す ることもできます。

#### 手順

- 1. ターゲット環境で、「IBM Cognos Administration の起動」を開きます。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 3. 「操作」列で、変更する配布仕様の「プロパティー」ボタン をクリックし、 「エクスポート」タブをクリックします。
- 4. 必要に応じて、配布オプションを変更します。

ヒント:エクスポート・ターゲットの場所を変更する場合は、「ターゲット名」 列、「共有フォルダーの内容」セクションのエクスポート名の横にある「編集」 ボタン をクリックし、目的のパッケージまたはフォルダーを選択します。

5. 「**OK**」をクリックします。

#### タスクの結果

これでオプションが保存され、エクスポートを今すぐ実行または後で実行できま す。詳細については、『エクスポートの実行』を参照してください。

#### エクスポートの実行

エクスポート配布アーカイブを新規作成するか、既存のものを変更した後、それを 実行できます。

## 手順

- 1. 「操作」列で、「オプションを指定して実行」ボタン をクリックします。
- 「今すぐ実行」をクリックしてすぐにエクスポートを実行するか、「指定時に実行」をクリックして実行する日時を指定します。

定期的に実行するタスクのスケジュールや、スケジュール済みタスクのリストの 表示も行えます。詳細については、 293 ページの『第 18 章 スケジュール管 理』を参照してください。

複数のネームスペースにログオンしたときに警告メッセージが出ないようにする には、次回エクスポートを実行する前に資格情報を更新します。

## タスクの結果

これで、配布アーカイブを移動できます。

## 配布アーカイブの移動

ソース環境で作成した配布アーカイブをターゲット環境に移動します。

ソース環境とターゲット環境で同じ Content Store を使用している場合、配布アー カイブを移動せずにインポートできます。

配布アーカイブを保存する場所は、設定ツールで設定します。デフォルトの場所は インストールの場所/deployment です。

### 始める前に

LAN 上に配布アーカイブを移動する場合、十分なディスク領域があるか確認しま す。配布アーカイブを暗号化しなかっ場合は、保護された場所にコピーすることを 推奨します。

#### 手順

- 1. ソース環境から LAN 上の場所または CD に配布アーカイブをコピーします。
- 設定ツールで設定したターゲット環境の場所に LAN または CD から配布アー カイブをコピーします。

#### タスクの結果

これで、Content Store 全体をインポートする場合に設定オブジェクトを含めたり、ターゲット環境にインポートしたりできます。

## ターゲット環境へのインポート

インポート配布仕様を新規作成するか既存のものを変更し、インポートを実行しま す。

以前に配布仕様を保存してインポートしなかった場合や、IBM Cognos エントリー を再配布する場合は、既存の配布仕様を使用してインポートできます。ターゲット 環境のエントリーは、配布アーカイブのエントリーで更新できます。

配布での競合の解消については、 314 ページの『インポートおよびエクスポート時 における配布の競合解消規則』を参照してください。

インポートを行う際には、エクスポートしたエントリーから選択します。エクスポ ートの際に設定したデフォルト・オプションをそのまま使用するか、または変更し ます。エクスポートの際に配布アーカイブに含まれていなかったオプションは選択 できません。Content Store の特定のオブジェクトをインポートする方法について は、314 ページの『インポートおよびエクスポート時における配布の競合解消規 則』を参照してください。

また、「インポートの新規作成」ウィザードを使用して、以前の製品リリースのエ ントリーをアップグレードすることもできます。レポート仕様はインポート中にア ップグレードするか、「レポートのアップグレードを新規作成」ウィザードを使用 して後でアップグレードします。詳細については、 329 ページの『レポート仕様の アップグレード』を参照してください。 インポートを実行する際、Content Store ID は削除されて新規 ID が割り当てられ ます。特定の IBM Cognos の機能によって使用されているために、Store ID を保 持する必要がある場合、Store ID の保持を選択できます。詳細については、 330 ページの『コンテンツ ID の割り当て』を参照してください。

既存のインポート配布仕様を使用するには、 327 ページの『既存のインポート配布 仕様の変更』を参照してください。

特定の共有フォルダーとディレクトリーの内容を部分的に配布する場合は、ターゲット環境におけるパッケージやフォルダーの有無と、存在する場合はそれらが最後 に変更された日時がインポート・ウィザードに表示されます。この情報は、競合が 発生したときの対応に使用できます。再配布の際には、パッケージとフォルダーが 元の配布に含まれていたかどうかもウィザードに表示されます。

## 新しいインポート配布仕様の作成

インポート配布仕様は、インポートする必要がある内容を定義します。

マルチテナント IBM Cognos Analytics 環境での内容のインポートの詳細について は、 367 ページの『テナント・コンテンツの配布』を参照してください。

## 手順

- 1. ターゲット環境で、「IBM Cognos Administration」を開きます。
- 2. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 3. ツールバーの「インポートの新規作成」アイコン¹ をクリックします。「インポートの新規作成」ウィザードが表示されます。
- 4. 「配布アーカイブ」ボックスで、インポートする配布アーカイブをクリックし ます。
- 5. 内容の暗号化に使用したパスワードを入力して、「**OK**」、「次へ」の順にク リックします。
- 6. 一意の名前を入力します。必要に応じて、配布仕様に関する説明や画面ヒント を入力します。保存先フォルダーを選択して、「次へ」をクリックします。
- 7. インポートに含める内容を選択します。

ヒント:必要なターゲット・エントリーがターゲット Content Store に存在す

るか確認するために、パッケージの横にある「編集」ボタン をクリックし、場所を確認します。必要に応じて、ここでターゲットの場所を変更することもできます。

- 8. オプションとそのオプションに対する競合解決方法を選択します。
- 「全般オプションを設定」ページで、アクセス権および「IBM Cognos」以外のネームスペースへの参照を含めるかどうかと、ターゲット環境へのインポート後のエントリーの所有者を選択します。
- 10. 配布履歴の「記録レベル」を指定します。詳細については、 312 ページの『配 布の詳細の記録』を参照してください。
- 11. 「次へ」をクリックします。
- 12. 概要情報を確認し、「次へ」をクリックします。

- 13. インポート配布仕様を実行する方法を選択します。
  - すぐに実行する場合または後で実行する場合には、「保存して 1 回実 行」、「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を設定し、「実 行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュー ル」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日 を選択して、「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。スケジュールのステータスを確認 するには、 286 ページの『スケジュールされた処理の管理』を参照してく ださい。

 スケジュールの設定や実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終 了」の順にクリックします。

インポートを実行すると、レポート仕様をアップグレードするかどうかを選 択できます。配布仕様を今すぐアップグレードしない場合は、後でアップグ レードできます。詳細については、 329 ページの『レポート仕様のアップ グレード』を参照してください。

## タスクの結果

インポート実行後に、配布をテストできます。インポート実行履歴を表示すること もできます 288 ページの『エントリーの実行履歴の表示』。

## 既存のインポート配布仕様の変更

既存の配布仕様を変更できます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「コンテンツ管理」をクリ ックします。
- 2. 「操作」列で、変更する配布仕様の「プロパティー」ボタン をクリックし、 「インポート」タブをクリックします。
- 3. 必要に応じて、配布オプションを変更します。

ヒント:インポート・ターゲットの場所を変更する場合は、「ターゲット名」
 列、「共有フォルダーの内容」セクションのインポート名の横にある「編集」ボタン
 をクリックし、目的のパッケージまたはフォルダーを選択します。

4. 「**OK**」をクリックします。

### タスクの結果

これでオプションが保存され、インポートを今すぐ実行または後で実行できます。 詳細については、『インポートの実行』を参照してください。

### インポートの実行

インポート配布仕様を作成または変更した後、インポートを実行します。

#### 手順

- 1. 「操作」列で、「オプションを指定して実行」ボタン をクリックします。
- 2. 「今すぐ実行」をクリックしてすぐにインポートを実行するか、「指定時に実行」をクリックして実行する日時を指定します。
- レポート仕様をアップグレードする場合は、「全レポート仕様を最新のバージョンにアップグレード」をクリックします。

定期的に実行するタスクのスケジュールや、スケジュール済みタスクのリストの 表示も行えます。詳細については、 293 ページの『第 18 章 スケジュール管 理』を参照してください。

- コンテンツ ID の割り当て方法を指定するには、「コンテンツ ID」の下で、次の選択を行ってください。
  - 「インポート時に新しい ID を割り当てる」は、既存のコンテンツ ID を新 規 ID で置き換えます。
  - 「インポート時に新しい ID を割り当てない」は、インポートで既存のコン テンツ ID を保持します。

## タスクの結果

これで、配布のテストが可能になりました。

# Content Store 全体のインポートに設定オブジェクトを含める

Content Store 全体をインポートする際に、設定オブジェクトを含めることができます。

#### 始める前に

設定オブジェクトは、エクスポートには含まれますが、Content Store 全体のイン ポートの際はデフォルトでは、除外されます。設定オブジェクトには、ディスパッ チャーやディスパッチャーのグループ化に使用する設定フォルダーなどがありま す。詳細については、 316 ページの『Content Store 全体を配布する場合の競合解 消規則』を参照してください。

設定オブジェクトはインポートしないことを推奨します。ディスパッチャーは、ソ ース環境からデータをインポートする前にターゲット環境で設定されている必要が あります。設定オブジェクトをインポートする必要がある場合は、インポート前に ソース環境のディスパッチャー・サービスを停止するか、インポート後にターゲッ ト環境で IBM Cognos ソフトウェアを再起動します。この作業を行わないと、ディ スパッチャーのステータスにエラーが発生します。設定オブジェクトをインポート する場合は、短時間のサービスの中断に対する準備を整えておく必要があります。

## 手順

- 1. 536 ページの『特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成』のセクションの手順に従います。
- ContentManagerService」の「パラメーター」名として、
   CM.DEPLOYMENTINCLUDECONFIGURATION と入力します。
- 3. このパラメーターの値として「true」を入力し、「OK」をクリックします。

## 配布したアプリケーションのテスト

配布アーカイブからパッケージをインポートした後、すべてのエントリーがターゲット環境に正しく配布されたかどうか確認します。

次の項目を実行して、配布のテストを行います。

- 配布の実行履歴を確認する
- パッケージとフォルダーがそれぞれの内容とともに正しくインポートされたかを 確認する
- データ・ソース、配布リスト、連絡先、および Cognos グループと役割がインポートされたかを確認する
- インポートされたエントリーのアクセス権を確認する
- スケジュールがインポートされたかを確認する
- 名前を変更したパッケージへの参照が更新されているかを確認する
- インポートしたレポートとレポート・ビューを実行する

# レポート仕様のアップグレード

インポート・ウィザードの実行時にレポート仕様をアップグレードしなかった場合 は、「レポートのアップグレードを新規作成」ウィザードを使用してアップグレー ドできます。

## 始める前に

重要: レポート仕様を作成、変更、または保存する Software Development Kit ア プリケーションがある場合は、レポート仕様をアップグレードしないでください。 まず Software Development Kit アプリケーションを IBM Cognos ソフトウェ ア・レポート仕様スキーマに準拠するように更新する必要があります。この更新を 実行しないと、使用している Software Development Kit アプリケーションがアッ プグレードされたレポート仕様にアクセスできなくなる場合があります。レポート 仕様のアップグレード詳細については、「*IBM CognosSoftware Development Kit Developer Guide*」を参照してください。

### 手順

- 1. 「コンテンツ管理」機能の実行権限を持つ管理者としてログオンします。
- 2. 「**IBM Cognos Administration**」を開きます。
- 3. 「設定」タブで、「コンテンツ管理」をクリックします。
- 4. ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」ボタン 「 の矢印をクリック し、「レポートのアップグレードを新規作成」をクリックします。
- 5. アップグレード・タスクの名前を入力し、必要に応じて説明や画面のヒントを入 力します。「次へ」をクリックします。
- アップグレードするレポート仕様のパッケージと場所を選択します。「次へ」を クリックします。

レポート仕様をパッケージ別にアップグレードする場合は、パッケージのモデル に基づく Content Store 内のすべてのレポートがアップグレードされます。レ ポート仕様をフォルダー別にアップグレードする場合は、フォルダー内のすべて のレポートがアップグレードされます。

- 7. 次のいずれかを選択します。
  - 「保存して 1 回実行」を選択して、「オプションを指定して実行」ページ を開きます。
  - 「保存してスケジュール」を選択して、スケジュール設定ツールを開きます。
  - 「保存のみ」を選択して、後で実行するためにアップグレードを保存します。

# コンテンツ ID の割り当て

インポート配布を実行する際、Content Store のオブジェクトへのコンテンツ ID の割り当て方法を選択できます。

インポート配布を実行しコンテンツをターゲット環境に移動する際、デフォルトで は、Content Store にあるオブジェクトのコンテンツ ID は削除されて新しい ID に置き換えられます。しかし、例えば、レポート出力を外部レポート・リポジトリ ーにアーカイブする場合のように、コンテンツ ID を保持しなければならない場合 があります。その場合、インポートを実行する際に、コンテンツ ID を保持するこ とを選択できます。オブジェクトのインポート時に ID を割り当てる方法の詳細に ついては、 327 ページの『インポートの実行』を参照してください。

コンテンツ ID の保持は、部分的な配布にも Content Store 全体の配布にも適用で きます。

## コンテンツ ID の競合

既存コンテンツ ID を保持する場合、インポートで競合が生じる可能性がありま す。生じる可能性がある競合状態は次のとおりです。

表 74. 同一コンテンツ ID の競合
 「情報 詳細
 説明 インポートされたオブジェクトがターゲット環境の異なるフォルダーに存在し一致するコンテンツ ID を持つ場合、インポートで ID は保持されず新しく生成される ID に置き換えられます。ターゲット環境に存在するオブジェクトは、同じオブジェクトの別のバージョンである場合もあり、完全に別のオブジェクトである場合もあります。
 警告 コンテンツが保持されないことを示す警告メッセージが表示され、セキュリティー権限で許可される場合は、ターゲット環境のどのオブジェクトが競合しているのかも示されます。競合を解決する方法に関する情報は示されません。

表 74. 同一コンテンツ ID の競合 (続き)

情報	i 詳細
解決方法	コンテンツ ID の競合は、以下の方法で解決できます。
	<ul> <li>インポート後、コンテンツ ID を何も変更せずそのままにする。イン ポートされたオブジェクトへの任意のリンクは、ターゲット環境にあ るオブジェクト (おそらく、同じオブジェクトの古いバージョン) を 指すようになります。インポートされたオブジェクトのコンテンツ ID が Content Store の外部から参照されなければ、インポート後に 破損した外部参照はありません。インポートされたオブジェクトは、 別のオブジェクトとして存在し続けます。</li> </ul>
	<ul> <li>インポートされたオブジェクトとターゲット環境のオブジェクトを削除する。オブジェクトを再インポートすれば、オブジェクトは同じフォルダーにそのコンテンツ ID で追加されます。</li> <li>インポートされたオブジェクトのプロパティーにより、手動でターゲット・オブジェクトを更新する。コンテンツ ID は変更されないので、オブジェクトへのリンクがあれば保存されます。インポートされるオブジェクトは、それから削除できます。</li> </ul>

表 75. 異なるコンテンツ ID の競合

情報	詳細
説明	インポートされたオブジェクトがターゲット環境の同じ場所に存在し異な るコンテンツ ID を持つ場合、インポートで ID は保持され、ターゲッ ト環境の既存 ID を置き換えます。
<u> </u>	警告メッセージは出されません。
解決方法	ターゲット・コンテンツ ID へのすべての既存外部参照 (存在する場合) は、コンテンツ ID が置き換えられると永久に失われることに注意して ください。

# Human Task サービスと Annotation サービスの配布

Human Task および Annotation サービスのコンテンツは、メインの Content Store とは別に保管されます。このコンテンツは、Content Store と同じデータベー スに別の表として保管することも、または別のデータベースに保管することもでき ます。このコンテンツを配布するには、配布ツールではなく、スクリプトを使用し ます。

このトピックの手順では、スクリプトを使用して、Human Task および Annotation サービス・コンテンツを配布します。スクリプトを使用した IBM Cognos Workspace コメントの配布については、 333 ページの『IBM Cognos Workspace コメントの配布』を参照してください。

それらを配布するには、ヒューマン・タスクや注釈をソース・データベースから取 得するバッチ・ファイルを実行します。次に、別のバッチ・ファイルを実行して、 取得したヒューマン・タスクや注釈を配布先サーバーにインストールします。

## 手順

1. データベースにタスク・データを作成するには、有効なレポートを指し示すタス クの選択を作成します。

ユーザー・タスクの作成手順については、IBM Cognos Event Studio の「ユー ザー・ガイド」を参照してください。注釈 (コメント) の詳細については、 「*IBM Cognos Workspace* ユーザー・ガイド」を参照してください。

- ソース・サーバーの インストールの場所/bin でコマンド・プロンプトを開きます。
- 3. 次の引数を使用して"htsDeployTool"ファイルを実行します。

htsDeployTool -camUsername *camUsername* -camPassword *camPassword* -camNamespace *camNamespace* -exportFile *exportFileName* -password *exportFilePassword* 

指定項目:

- cam ユーザー名は、ネームスペースのユーザー名です。
- cam パスワードは、ネームスペースのユーザー・パスワードです。
- cam ネームスペースは、ネームスペースの名前です。
- エクスポート・ファイル名 は、作成するエクスポート・ファイルの名前で す (例:HumanTaskExportFile1)。
- エクスポート・ファイル・パスワード は、エクスポート・ファイルのパス ワードです。

引数にスペースを使用する場合は引用符で囲みます。特殊文字の前には円記号を 付けてください。次に例を示します。

htsDeployTool -exportFile "jan\'s file" -password test2Password -camNamespace default -camUsername myId -camPassword myPassword

匿名アクセスを許可するには -cam 引数を省略します。

注釈をエクスポートするには、引数 -persistenceUnit annotations を追加しま す。次に例を示します。

-camPassword <camPassword> -camNameSpace <camNamespace> -exportfile
AnnotationExportFile1 -password <exportFilePassword> -persistenceUnit
annotations.

- インストールの場所/deployment に <エクスポート・ファイル名>.xml.gz とい うファイルが作成されたことを確認します。例えば、 "HumanTaskExportFile1.xml.gz"のようなファイルが作成されます。このファイ ルをコピーします。
- 5. 宛先サーバーの インストールの場所/deployment に、<エクスポート・ファイ ル名>.xml.gz のファイルを貼り付けます。
- コピー先サーバーの インストールの場所/bin でコマンド・プロンプトを開き、 次の引数を使用して htsDeployTool を実行します。

htsDeployTool -camUsername camUsername camPassword -camNamespace camNamespace -importFile importFileName -password importFilePassword

指定項目:

- cam ユーザー名は、ネームスペースのユーザー名です。
- cam パスワードは、ネームスペースのユーザー・パスワードです。
- cam ネームスペースは、ネームスペースの名前です。
- インポート・ファイル名は、手順3で作成したファイルの名前です。
- インポート・ファイル・パスワードは、手順3で作成したファイルのパスワードです。

手順3 に記載されている構文に関するその他のヒントを参照してください。

## IBM Cognos Workspace コメントの配布

次の手順を使用して、IBM Cognos Workspace コメントを配布できます。

## 手順

- 配布する注釈のあるコンピューターで、Content Store をエクスポートします。 Content Store のエクスポートについては、 321 ページの『新しいエクスポー ト配布仕様の作成』を参照してください。
- ソース・サーバーのインストールの場所/bin フォルダーで、コマンド・プロンプトを開きます。
- 3. bin フォルダーで、次の引数を指定して htsDeployTool という名前のファイル を実行します。

htsDeployTool -persistenceUnit annotations -camUsername <*cam* ユーザー名> -camPassword <*cam* パスワード> -camNamespace <*cam* ネームスペース> -exportFile <エクスポート・ファイル名> -password <エクスポート・ファイ ル・パスワード>

パラメーターの説明

<cam ユーザー名> は、ネームスペースのユーザー名です。

<cam パスワード> は、ネームスペースのユーザー・パスワードです。

<cam ネームスペース> は、ネームスペースの名前です。

<エクスポート・ファイル名> は、作成されるエクスポート・ファイルの名前で す。(例: HumanTaskExportFile1)例: htsDeployTool -persistenceUnit annotations -exportFile myFile -password test2Password -camNamespace default -camUsername myId -camPassword myPassword

匿名アクセスを許可するには -cam 引数を省略します。

 エクスポート・ファイル名.xml.gz ファイルが インストールの場 所/deployment に作成されていることを確認します。例えば、 "HumanTaskExportFile1.xml.gz"のようなファイルが作成されます。このファイ ルをコピーします。

- 5. 宛先サーバーで、配布をインポートします。配布およびインポート仕様につい ては、 304 ページの『配布仕様』を参照してください。
- 6. 宛先サーバーの インストールの場所/deployment に、*exportFileName.*xml.gz のファイルを貼り付けます。
- 宛先サーバーの インストールの場所/bin でコマンド・プロンプトを開き、 htsDeployTool を次の引数で実行します。 htsDeployTool -persistenceUnit annotations -camUsername <cam ユーザー名> -camPassword <cam パスワー ド> -camNamespace <cam ネームスペース> -importFile <インポート・ファイ ル名> -password <インポート・ファイル・パスワード>

パラメーターの説明

<cam ユーザー名> は、ネームスペースのユーザー名です。

<cam パスワード> は、ネームスペースのユーザー・パスワードです。

<cam ネームスペース> は、ネームスペースの名前です。

<インポート・ファイル名> は、ステップ 3 で作成したエクスポート・ファイ ルの名前です。

<インポート・ファイル・パスワード> は、ステップ 3 で作成したファイルの パスワードです。

## **IBM Cognos Workspace** コメントの保管とレポート

このトピックでは、Cognos Workspace コメントの保管とレポートに関する情報を 提供します。

## コメントの保管

コメントはそれら自身のデータベース表内に保管されます (この表は、Content Store と同じデータベースまたは別のデータベースのどちらにあってもかまいませ ん)。 IBM Cognos Configuration の Human Task サービスと Annotation サー ビスのプロパティーは、Annotation テーブルが保管されているデータベースへのデ ータベース接続を定義します。 Human Task サービスおよび Annotation サービ スのプロパティーのデータベース接続が指定されていない場合、Annotation テーブ ルは Content Store データベースに作成されます。

Human Task サービスと Annotation サービスのプロパティーは、Human Task サービス・テーブルへのデータベース接続も定義します。しかし、Human Task サ ービスおよび Annotation サービスはデータベース接続を共有するものの、 Annotation テーブルと Human Task テーブルは分離しています。 Annotation テ ーブルの接頭部は ANS_ で、Human Task サービス・テーブルの接頭部は HTS_ です。

それぞれのテーブルから宛先 IBM Cognos サーバーに、Annotation および Human Task データをエクスポートしたりインポートしたりするためのスクリプト がユーザーに提供されます。スクリプトにより、コメントのバックアップやリスト ア、およびサーバー間でのコメントの配布などのアクティビティーを容易に行えま す。

## コメントのレポート

IBM Cognos Analytics には、Cognos Workspace のコメントのためのビュー、ま たはすぐに使用可能なその IBM Cognos Framework Manager モデル表現は含ま れていません。しかし、Framework Manager で Annotation サービス・データベ ース・テーブルに基づいてモデルを作成できます。テーブルは、単純なものであ り、コメントや注釈テキスト、コメントの作成者、コメントの作成日付、およびコ メントが関連付けられているレポートを検索するために使用できます。コメントが 保管されているスキーマのレポート・モデルまたはクエリーを作成して、コメント のコンテキストのレポートも行えます。レポートの注釈のコンテキストは、ディメ ンション、ディメンション・メンバー、メタデータ・アイテム、データ・アイテム から構成されます。

Cognos Proven Practices (http://www.ibm.com/developerworks/data/library/ cognos/cognosprovenpractices.html) で検索キーワードとして「reporting from annotation database」と入力すると、Annotation データベースからのレポートの作 成方法について情報が得られます。

# 第20章 パッケージ

IBM Cognos Administration から、Cognos PowerCube および SAP BW デー タ・ソースのパッケージを作成できます。

モデル作成者は、Transformer から PowerCubes を発行する際にパッケージを作成 することもできます。詳細については、「*Transformer* ユーザー・ガイド」を参照し てください。

モデル作成者は、Framework Manager を使用してパッケージを作成して発行する こともできます。詳細については、「Framework Manager ユーザー・ガイド」を参 照してください。

# **PowerCube** のパッケージの作成

IBM Cognos の Studio/Authoring ツールで PowerCube データ・ソースを使用す るには、その前に、パッケージを作成する必要があります。

PowerCube データ・ソースを作成する際は、新しいデータ・ソースを使用してパッ ケージを作成することができます。既存の PowerCube データ・ソースでパッケー ジを作成することもできます。

この作業を行うには、データ・ソース接続の保護された機能に対する実行権限が必 要です。

## 手順

- 「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. 「データ・ソースの新規作成」ボタンを選択します。
- 3. 「データ・ソースの新規作成」ウィザードの手順を実行します。
  - 「接続を指定」ページの「タイプ」リストで、「IBM Cognos PowerCube」を選択します。
  - 「終了」ページで、「パッケージを作成」を選択します。

# SAP BW パッケージ

IBM Cognos の Studio/Authoring ツールで SAP BW データ・ソースを使用する には、その前に、パッケージを作成する必要があります。

IBM Cognos Administration から SAP BW データ・ソースを作成する際は、新し いデータ・ソースを使用してパッケージを作成することができます。既存の SAP BW データ・ソースでパッケージを作成することもできます。詳細については、 153 ページの『データ・ソース接続』を参照してください。

SAP BW パッケージを作成後に編集するには、 338 ページの『SAP BW パッケー ジの編集』を参照してください。

SAP BW パッケージで使用するオブジェクトの最大数を設定するには、『SAP BW パッケージで使用するオブジェクトの最大数の設定』を参照してください。

この作業を行うには、データ・ソース接続の保護された機能に対する実行権限が必要です。 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

SAP BW パッケージで使用できるオブジェクト数を設定できます。Framework Manager を使用したパッケージの作成と発行については、「*Framework Manager* ユ ーザー・ガイド」を参照してください。

# SAP BW パッケージの作成

SAP BW パッケージを作成する手順は、次のとおりです。

このタスクについて

詳細については、 144 ページの『SAP Business Information Warehouse (SAP BW) データ・ソース』を参照してください。

### 手順

- 「IBM Cognos Administration」の「設定」 タブで、「データ・ソース接続」をクリックします。
- 2. 「データ・ソースの新規作成」ボタンを選択します。
- 3. 「データ・ソースの新規作成」ウィザードの手順を実行します。
  - 「接続を指定」ページの「タイプ」リストで、「SAP BW」を選択します。
  - 「終了」ページで、「パッケージを作成」を選択します。

## SAP BW パッケージの編集

SAP BW パッケージを編集する手順は、次のとおりです。

#### 手順

- 1. パッケージの横にある「その他」をクリックし、次に「パッケージの編集」をク リックします。
- 2. 次のいずれかのオプションを選択します。
  - メタデータの選択項目を変更するには、「メタデータの選択項目を変更」を クリックします。『SAP BW パッケージの作成』の手順5 に戻ります。
  - パッケージ変数を編集するには、「変数を編集」をクリックします。編集する値をクリックしてから、新規変数を選択するか、入力します。「OK」をクリックします。
  - パッケージ設定を変更するには、「パッケージの設定を変更」をクリックし、「動的クエリー・モードの使用」を選択します。

# SAP BW パッケージで使用するオブジェクトの最大数の設定

SAP BW パッケージの作成時に含めることができるキューブおよび情報のクエリーの最大数を設定できます。

SAP BW のインポートに時間がかかると、サーバーでの要求処理時間が長くなるため、他のアプリケーションのパフォーマンスに影響を与える可能性があります。通常のユーザーに必要なキューブ数および情報クエリー数と、サーバー・パフォーマンスに与える潜在的な影響の間のバランスを判断します。

次の (大/小文字を区別する) パラメーターが使用可能です。

com.ibm.cognos.metadatauiservice.sap.maxcubes

SAP BW パッケージで使用できるキューブの最大数。有効な設定は 0 以上で す。デフォルトは 2 です。

• com.ibm.cognos.metadatauiservice.sap.maxInfoQueries

SAP BW パッケージで使用できる情報クエリーの最大数。有効な設定は 0 以上 です。デフォルトは 5 です。

SAP BW のデータ・ソースおよび SAP BW パッケージの作成の詳細については、 117 ページの『第 6 章 データ・ソースと接続』を参照してください。

手順

- IBM Cognos Administration の「ステータス」タブで、「システム」をクリ ックします。
- 「スコアカード」ウィンドウで、現在の表示の「ビューを変更」メニューから 「サービス」 > 「Metadata」とクリックします。

ヒント:現在の表示は「すべてのサーバー」、「すべてのサーバー・グルー プ」、「すべてのディスパッチャー」、または「サービス」のいずれかです。

- 3. 「Metadata サービス」の「操作」メニューから、「プロパティーを設定」を クリックします。
- 4. 「設定」タブをクリックします。
- 5. 「詳細設定」の横にある「編集」をクリックします。
- 6. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオ ンにします。
- 7. 「パラメーター」列で、パラメーター名を入力します。

例えば、「com.ibm.cognos.metadatauiservice.sap.maxcubes」と入力します。

- 8. 「値」列で、パラメーターに関連付ける値を入力します。
- 9. 必要に応じて、パラメーター名と値の入力を続けます。
- 10. 「**OK**」をクリックします。
- 11. 「プロパティーを設定」ページで、「**OK**」をクリックします。

# 第21章 ユーザー・プロファイルの管理

ユーザー・プロファイルでは、ユーザーがアクセスできるポータル・タブを定義 し、ユーザー・インターフェースの言語、レポートの推奨出力形式、ユーザー・イ ンターフェースで使用されるスタイルなどのユーザー設定を指定します。

ユーザー・プロファイルは、ユーザーが最初に IBM Cognos ソフトウェアにログオ ンしたときに作成されます。また、管理者が作成することもできます。初期プロフ ァイルは、デフォルト・ユーザー・プロファイルに基づいています。

ユーザーは、各自のプロファイルに関連付けられた設定を表示および変更できま す。

ユーザー・プロファイルをコピー、編集、または削除するには、管理者は該当ユー ザーを含むネームスペースに対する書き込み権限を持っている必要があります。 IBM Cognos には「ディレクトリー管理者」という役割があらかじめ定義されてい ますが、この役割には Cognos ネームスペース以外のネームスペースに対する書き 込み権限がありません。したがって、「システム管理者」は、「ディレクトリー管 理者」がユーザー・プロファイルを設定できるように、ネームスペースに対する書 き込み権限を付与する必要があります。

ユーザー・プロファイルを管理するには、IBM Cognos Administration に対する 必要なアクセス権がなければなりません。

アカウントの管理について詳しくは、 215 ページの『第 11 章 ユーザー、グルー プ、および役割』を参照してください。

関連概念:

49 ページの『第 5 章 サーバー管理』 サーバー管理には、IBM Cognos システムの管理と保守、およびシステム・パフォ ーマンスの調整が含まれます。

# デフォルト・ユーザー・プロファイルの編集

デフォルト・ユーザー・プロファイルは、**Cognos** ネームスペースで定義されま す。デフォルト・ユーザー・プロファイルには、すべての新規ユーザーに適用され る設定が含まれています。ユーザーのデフォルト・ユーザー・プロファイルを編集 し、各ユーザー・プロファイルへの変更を必要最小限に抑えることができます。

変更したデフォルト・ユーザー・プロファイルは、変更後に初めて IBM Cognos ソ フトウェアにログオンするユーザーにのみ適用されます。他のユーザーが使用する 既存のユーザー・プロファイルは変更されません。

### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. 「Cognos」ネームスペースをクリックします。

- 3. ツールバーで、「デフォルトのユーザー・プロファイルを編集」ボタン 🛄 を クリックします。
- 4. デフォルト・ユーザー・プロファイルを設定し、「OK」をクリックします。

#### タスクの結果

各ユーザーは、IBM Cognos ソフトウェアに最初にログオンするときに自動的にこ れらの設定を継承しますが、後でこれらの設定を変更することもできます。

# ユーザー・プロファイルの表示または変更

ユーザー・プロファイルは表示したり変更したりできます。

ユーザーのプロファイル内の特定のアイテムを削除することができます。これは次 のような場合に便利です。

- ユーザーのコンテンツによって多くのスペースが占有されているため、パフォーマンスに影響が出ている場合。一部またはすべての内容を削除できます。
- ユーザー・プロファイルを削除する前に、重要な内容を削除しないように確認する必要がある場合。

認証プロバイダーを使用してユーザーを削除すると、そのユーザーは IBM Cognos ソフトウェアに表示されなくなるため、ユーザー・プロファイルを変更できませ ん。

1 回以上ログオンしたユーザーのプロファイルのみを表示できます。ユーザーがロ グオンすると、「変更日時」列に日付が表示されます。

ユーザー・プロファイルの表示、内容の削除、または内容の変更を行うには、ユー ザー・アカウントおよびユーザーが所有するコンテンツが含まれるフォルダーに対 する通過権限が必要です。 エントリーを削除するには、対象のエントリーおよびそ の親に対する書き込み権限が必要です。

個々のユーザーのユーザー・プロファイルを変更することはできますが、グループ や役割のユーザー・プロファイルを変更することはできません。

# ユーザー・プロファイルの表示または変更

ユーザー・プロファイルを表示したり変更したりすることができます。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. ユーザーが入っているネームスペースをクリックします。
- 3. 設定を表示または変更するユーザーを検索します。
- 4. 「操作」列の「詳細」をクリックします。
- 5. 「設定」をクリックします。
- 6. 異なるタブをクリックして、設定を表示または変更します。

7. 変更せずに終了するには「キャンセル」を、変更を実行するには「**OK**」をクリ ックします。

## コンテンツの削除

「個人用フォルダー」やページの内容など、ユーザーのプロファイル内の特定のア イテムを削除することができます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. ユーザーが入っているネームスペースを選択します。
- 3. ユーザーを検索します。
- 4. 「名前」列で、ユーザー名をクリックします。

ヒント:ユーザー名がリンクになっていない場合、そのユーザーのユーザー・プ ロファイルは作成されていません。プロファイルを作成するには、「操作」列の

「このユーザーのプロファイルを作成」ボタン 🎫 をクリックしてから、残りの手順を実行します。

そのユーザーのフォルダー・リストが表示されます。

- 5. フォルダーをクリックして内容を表示します。
- 6. フォルダーから削除するアイテムをクリックして、ツールバーの「削除」ボタン をクリックします。

フォルダー自体を削除することはできません。

# ユーザー・プロファイルの削除

Content Store からユーザー・プロファイルを削除できます。

認証プロバイダーのユーザーを削除する場合は、最初に Content Store からユーザ ー・プロファイルを削除して、格納領域が使用されないようにします。

関連するネームスペースからユーザーを削除する前に、IBM Cognos ソフトウェア からユーザー・プロファイルを削除しておく必要があります。ユーザーを削除する と、そのユーザーの情報は IBM Cognos ソフトウェアに表示されなくなるため、

**IBM Cognos Administration** でそのユーザー・プロファイルを管理することはで きなくなります。

関連するネームスペースからユーザー・アカウントがすでに削除されている場合 は、Content Store の保守を使用して、関連するすべてのユーザー・アカウント情 報を IBM Cognos ソフトウェアから検索したり、必要に応じて削除したりできま す。

ユーザー・プロファイルが削除されたユーザーがログオンすると、デフォルト値を 使用してアカウントが作成されます。ユーザーがログオンしているときに、関連す るユーザー・プロファイルを削除すると、そのユーザーの Passport が期限切れに なり、ログオン・ページが表示されます。 ユーザー・プロファイルを削除する前に、重要なものが削除されないように内容を 確認する必要があります。

一度もログオンしたことのないユーザーのプロファイルは管理できません。

#### 始める前に

ユーザー・プロファイルを削除するには、親オブジェクトに対する書き込み権限が 必要です。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Administration の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. ユーザーが入っているネームスペースをクリックします。
- 3. ユーザー・プロファイルを削除するユーザーを検索します。「検索」機能を使用 してユーザーを検索できます。
- 4. 「操作」列の「詳細」をクリックします。
- 5. 「このユーザーのプロファイルを削除」をクリックします。
- 6. 「**OK**」をクリックします。

# ユーザー・プロファイルのコピー

ユーザー・プロファイルをコピーできます。

ユーザー・プロファイルのコピーは次のような場合に便利です。

- ユーザーの名前が変わったため、新しい名前でアカウントを設定する場合。
- ユーザーが別のネームスペースに移動したか、組織のネームスペースが変更されたため、新しいアカウントを設定する必要がある場合。
- 類似のユーザー・アカウントを多数作成する場合。

認証プロバイダーでソース・ユーザーを削除する場合は、そのユーザーを削除する 前にユーザー・アカウント情報をコピーします。ユーザーを削除すると、そのユー ザーは IBM Cognos ソフトウェアに表示されなくなるため、ユーザー・アカウント 情報をコピーできません。

一度もログオンしたことのないユーザーのプロファイルは管理できません。ユーザ ーがログオンすると、「変更日時」列に日付が表示され、ユーザー名がリンクに変 わります。

#### 始める前に

ユーザー・プロファイルをコピーするには、コピー元およびコピー先のユーザーの ネームスペースに対する書き込み権限が必要です。

ヒント: ユーザー・プロファイルをコピーしても、信頼済み資格情報はコピーされま せん。

## 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グ ループ、および役割」をクリックします。
- 2. コピー元のユーザーが入っているネームスペースをクリックします。

ヒント:書き込み権限のあるネームスペースしか選択できません。

- 3. コピー元のユーザーを検索します。
- 4. ソース・ユーザーに対する「操作」列の「詳細」をクリックします。
- 5. 「操作」ページで、「このユーザーのプロファイルをコピー」をクリックしま す。
- 「ユーザー・プロファイルをコピー」ページで、「ターゲット・ユーザーを選 択」をクリックし、移動してターゲット・ユーザーを検索します。
- ターゲット・ユーザーを選択した後、「ユーザー・プロファイルをコピー」ページで、「設定」、「ポータル・タブと個人用フォルダーの内容」、または「個人用フォルダーの内容」の中から、コピーするプロファイル設定を1つ以上選択します。
- 8. 必要に応じて、「ソース・ユーザーのプロファイルをコピー完了後に削除」チェ ック・ボックスをオンにします。
- 9. 「コピー」をクリックします。
# 第22章 マルチテナント環境

マルチテナント環境は、複数の顧客または組織 (テナントと呼ばれる)から構成され ます。マルチテナンシーは、単一の配布から複数のテナントをサポートするための アプリケーションの機能です。この機能により、各テナントの中でユーザーがアク セスできるのは使用を許可されたデータだけとなります。マルチテナンシーを使用 すると、アプリケーションのメンテナンス費用を軽減できます。

IBM Cognos Analytics には、マルチテナンシー機能が組み込まれています。既存 の配布を増分的に移行することにより、マルチテナント機能を実装できます。マル チテナント機能を使用しない既存の配布は、マルチテナンシーが有効になっても影 響を受けません。

すべての Content Manager オブジェクトは、オプションのテナント ID を 1 つ持 つことができます。管理者を含むすべての Cognos ユーザーは、オプションのテナ ント ID を 1 つ持つことができます。 Cognos Analytics セキュリティー・ポリシ ーには関係なく、Cognos ユーザーは、Content Manager オブジェクトのテナント ID と一致するテナント ID がなければ Content Manager オブジェクトにアクセス できません。テナント ID のない Content Manager オブジェクトは共有オブジェ クトと見なされ、任意のユーザーがアクセス可能となります。テナント ID のない ユーザーは、共有オブジェクトにのみアクセスできます。

ヒント: テナント ID 値は単純な文字列です。テナント ID の長さには制限があり ません。ただし、データベース・スキーマ内の tenantID 列の制限である 255 文字 を超えるべきではありません。

以下の図の例は、Cognos Analytics マルチテナンシー機能によって、Content Store 内のオブジェクトへのアクセスがどのように分離されるかを示しています。ユ ーザーは、各テナント・グループ内で、アクセスが許可されたオブジェクトにのみ アクセスできます。



図 5. Cognos Analytics マルチテナンシー機能を使用するように構成された Content Store この例では、ユーザーは以下のオブジェクトにアクセスできます。

347

- テナント 1 に属するユーザーは、object_1、object_2、および object_3 にアクセ スできます。
- テナント 2 に属するユーザーは、object_3、object_4、object_5、および object_6 にアクセスできます。

ヒント: システム管理者は、Content Store 内のすべてのオブジェクトにアクセスできます。

オブジェクトにアクセスするとき、オブジェクトのアクセス権より前にオブジェクト・テナンシーが評価されます。そのため、マルチテナント・アプリケーションの ユーザーには、そのテナントに関連付けられたオブジェクトと、共有としてカテゴ リー化されたオブジェクトだけが表示されます。

マルチテナンシーが有効になった後、監査ログ記録データベースを使用してテナン トの活動を記録できます。IBM Cognos Analytics には、テナンシー情報を使用し て特定のユーザー活動をモニターする方法を示す、サンプルの監査レポートが備わ っています。IBM Cognos Configuration を使用してログ記録データベースをセッ トアップする方法の詳細は、「*IBM Cognos Analytics* インストールおよび設定ガイ ド」を参照してください。サンプル監査レポートの設定については、 https://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSEP7J_11.0.0/ com.ibm.swg.ba.cognos.ig_smples.doc/ c_sampleauditreports.html#SampleAuditReportsを参照してください。

## マルチテナンシーの構成

IBM Cognos Analytics のインストール環境でマルチテナンシーを構成するには、 IBM Cognos Configuration でマルチテナンシー・プロパティーを指定する必要が あります。

マルチテナンシー・プロパティーの値は環境によって異なり、環境内の個々のユー ザーにテナンシー情報をマップする方法によっても異なります。

重要:通常は、マルチテナンシーを構成するために認証プロバイダーに変更を加える 必要はありません。

IBM Cognos Configuration でマルチテナンシーを構成する前に、認証プロバイダ 一内のユーザー・アカウントをどのようにテナントにマップするか決定する必要が あります。この目的で、認証プロバイダーの階層におけるユーザーの位置や、認証 プロバイダー内のユーザー・アカウント・プロパティーを使用することができま す。また、カスタム・テナント・プロバイダーを実装することもできます。最後の オプションとして、IBM Cognos Software Development Kit を使用する必要があ ります。環境に対して最適な実装方法を選択するためには、綿密な計画と、認証プ ロバイダーに関する知識が必要です。

ユーザー・アカウントをテナントにマップする方法に応じて、以下のいずれかの方 法を選択してマルチテナンシーを構成してください。

- 349 ページの『階層ノードに基づくマルチテナンシーの構成』
- 350 ページの『ユーザー・アカウント属性に基づくマルチテナンシーの構成』

 352 ページの『カスタム・テナント・プロバイダーに基づくマルチテナンシー の構成』

マルチテナンシーは、IBM Cognos Configuration の「認証」レベルでグローバル に構成するか、または特定のネームスペースのために構成することができます。特 定のネームスペースのマルチテナンシー・プロパティーを指定した場合、グローバ ルに設定されているマルチテナンシー・プロパティーがオーバーライドされます。

## 階層ノードに基づくマルチテナンシーの構成

テナントを構成するとき、認証プロバイダーの階層内のノード構造情報を再使用で きます。

IBM Cognos Configuration で、「テナント ID マッピング」 > 「パターン」プ ロパティーに階層情報をマップする必要があります。

#### 始める前に

この目的で、ancestors (先祖) ユーザー・アカウント属性を使用することができま す。ancestors 属性は、ユーザー・アカウントへの階層パスを配列形式で表しま す。以下の表に、テナンシー情報を識別するために先祖属性を階層にマップする方 法を示します。

表 76. 先祖属性から階層情報へのマッピング

先祖情報	階層	LDAP の例
ancestors[0]	ディレクトリー・ノ	
	ード	
ancestors[1]	ネームスペース ID	base DN
ancestors[2]	テナントのグループ	organizational units
	化 (例: フォルダー)	

例えば、ユーザーが LDAP ディレクトリーに保管され、テナントが組織単位として 基本識別名 (DN) の直下にある場合、「パターン」タイプの値を ~/ancestors[2]/defaultName と設定できます。

defaultName に加えて、以下の ancestors 限定属性によりテナンシー情報が返され る可能性があります。

name/locale

この例の locale パラメーターは、ネームスペース構成でのマッピングに基づい ています。ロケールが指定されない場合、この名前はオブジェクトのタイトルに なります。例えば、~/ancestors[2]/name/EN-ca と指定できます。

searchPath/objectID

例えば、~/ancestors[2]/searchPath/objectId と指定できます。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- 2. マルチテナンシー設定を、グローバルにすべてのネームスペースに対して構成す るか、特定のネームスペースに対して構成するかを選択します。

- すべてのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。
- 1 つのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 3. 「マルチテナンシー」プロパティー・グループで、「テナント ID マッピン グ」プロパティーの編集ボタンをクリックします。
- 表示される「テナント ID マッピング」ウィンドウで、以下のようにマッピン グを指定します。
  - a. 「タイプ」には「パターン」を選択します。
  - b. 「値」には、このトピックの上記の指示に基づいて作成したストリングを入力します。例えば、~/ancestors[2]/defaultName という値を指定できます。
  - c. 「**OK**」をクリックします。
- Active Directory ネームスペースの場合のみ、「カスタム・プロパティー」の 「値」列の中をクリックして、編集ボタンをクリックします。 MultiDomainTree プロパティーを追加して、その値を true に設定します。
- 6. マルチテナンシー構成をテストします。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。
  - b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「**OK**」をクリックしま す。
  - c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

マルチテナンシーが正しく構成されていれば、テナント ID が詳細に表示され ます。テナント ID が表示されない場合は、値を更新して訂正してから再テス トします。

- 7. テストに成功した場合、「ファイル」メニューから「保存」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再始動して変更を有効にします。

## ユーザー・アカウント属性に基づくマルチテナンシーの構成

テナントにマップするために、認証プロバイダー内の特定のユーザー・アカウント 属性を指定することができます。テナントにマップする対象となるユーザー・アカ ウント属性を選択した後、カスタム・プロパティーを作成して、それをこの属性に マップする必要があります。

IBM Cognos Configuration で「テナント ID マッピング」 > 「パターン」プロ パティーにユーザー・アカウント属性をマップする必要があります。

#### 始める前に

ユーザーのテナントを識別するために選択したユーザー・アカウント属性は、この 目的でのみ使用されるべきです。 例えば、LDAP ユーザー・アカウントの businessUnit 属性によってユーザーのテ ナントを識別することを決定できます。この場合、「パターン」タイプ・プロパテ ィーを、次の例に示すように設定します。 ~/parameters/parameter_name 次に、 parameter_name という名前のカスタム・プロパティーを指定して、このプロパティ ーをユーザー・アカウント属性 businessUnit に関連付けます

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- 2. マルチテナンシー設定を、グローバルにすべてのネームスペースに対して構成す るか、特定のネームスペースに対して構成するかを選択します。
  - すべてのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。
  - 1 つのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 3. 「マルチテナンシー」プロパティー・グループで、「テナント ID マッピン グ」プロパティーの編集ボタンをクリックします。
- 4. 表示される「テナント ID マッピング」ボックスで、以下のようにマッピング を指定します。
  - a. 「タイプ」には「パターン」を選択します。
  - b. 「値」には、このトピックの上記の説明に基づいて作成したストリングを入 力します。

例えば ~/parameters/parameter_name と入力します。ここで ~/parameters は構文の定数部分、parameter_name はカスタム・プロパティー名です。

- c. 「**OK**」をクリックします。
- 5. 「アカウント・マッピング (詳細)」プロパティー・グループで、カスタム・プ ロパティーを指定して、それをアカウント属性にマップします。次のようにしま す。
  - a. 「カスタム・プロパティー」の「値」列の中をクリックして、編集ボタンを クリックします。
  - b. 「値」-「カスタム・プロパティー」ウィンドウで「追加」をクリックしま す。
  - c. 「名前」列にカスタム・プロパティー名を入力します。「値」列に属性の名前を入力します。ステップ 4 の例の場合、カスタム・プロパティーの「名前」 は parameter_name、「値」は businessUnit を使用します。
  - d. 「**OK**」をクリックします。
- 6. マルチテナンシー構成をテストします。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。
  - b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「**OK**」をクリックしま す。
  - c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

マルチテナンシーが正しく構成されていれば、テナント ID が詳細に表示され ます。テナント ID が表示されない場合は、値を更新して訂正してから再テス トします。

- 7. テストに成功した場合、「ファイル」メニューから「保存」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再始動して変更を有効にします。

# カスタム・テナント・プロバイダーに基づくマルチテナンシーの構 成

カスタム Java クラスを作成して、マルチテナンシーを構成する際にそれを参照で きます。複数の認証プロバイダーからのデータの結合や、認証プロバイダーとリレ ーショナル・データベースからのデータの結合を行う必要がある場合に、この方法 を使用できます。この方法では、IBM Cognos Software Development Kit を使用 する必要があります。

この方法を使用する場合、IBM Cognos Configuration の「テナント ID マッピン グ」 > 「プロバイダー・クラス」プロパティーをカスタム Java クラスにマップし ます。

#### 始める前に

この方法を使ってマルチテナンシーを構成する前に、以下のタスクを実行する必要 があります。

- 必要なカスタム Java クラス・ファイルをコンパイルして JAR ファイルにした 後、それらのファイルを関連ファイルと共に インストールの場 所/webapps/p2pd/WEB-INF/1ib ディレクトリーに入れるか、または CLASSPATH 環境変数を更新してこれらのファイルのパスを含めます。
- IBM Cognos Custom Authentication Provider を使って ITenantProvider イン ターフェースを実装し、そのインターフェース内にカスタム Java クラスを定義 します。例えば com.example.class というカスタム Java クラス名にすることが できます。詳細については、「IBM Cognos Software Development Kit Custom Authentication Provider Developer Guide」を参照してください。

ヒント: IBM Cognos Custom Authentication Provider に含まれているサンプ ル・カスタム Java クラスを使用できます。このサンプル・ファイルは、インス トールの場所 ¥sdk¥java¥AuthenticationProvider¥MultiTenancyTenantProviderSample ディレ クトリーにあります。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- 2. マルチテナンシー設定を、グローバルにすべてのネームスペースに対して構成す るか、特定のネームスペースに対して構成するかを選択します。
  - すべてのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。

- 1 つのネームスペースに対してマルチテナンシーを構成する場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 3. 「マルチテナンシー」プロパティー・グループで、「テナント **ID** マッピン グ」プロパティーの編集ボタンをクリックします。
- 4. 表示される「テナント ID マッピング」ウィンドウで、以下のようにマッピン グを指定します。
  - a. 「タイプ」には「プロバイダー・クラス」を選択します。
  - b. 「値」には、IBM Cognos Custom Authentication Provider を使って実装 された IBoundingSetProvider インターフェースで定義されているカスタム Java クラスの名前を入力してください。例えば com.example.class_name と入力します。
  - c. 「**OK**」をクリックします。
- カスタム・プロパティーを指定する必要がある場合には、「アカウント・マッピング(詳細)」プロパティー・グループで、「カスタム・プロパティー」の「値」列の編集ボタンをクリックして、プロパティー名と値を必要に応じて追加します。
- 6. マルチテナンシー構成をテストします。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。
  - b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「OK」をクリックします。
  - c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

マルチテナンシーが正しく構成されていれば、テナント ID が詳細に表示され ます。テナント ID が表示されない場合は、値を更新して訂正してから再テス トします。

- 7. テストに成功した場合、「ファイル」メニューから「保存」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再始動して変更を有効にします。

## 拡張マルチテナンシー機能

拡張マルチテナンシー機能を使用して、テナント管理の委任およびテナント間のコ ンテンツ共有をセットアップすることができます。

Cognos ユーザーは、「テナント ID マッピング」プロパティーに関連付けられた 1 つのテナント ID を持つことができます。「テナント ID マッピング」プロパテ ィーが定義されている場合、「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパ ティーを使用して、Cognos ユーザーに追加のテナント ID を割り当てることがで きます。

Content Manager オブジェクトのテナント ID として単一の仮想テナント ID を割 り当てることができ、その中に複数のテナント ID を含めることができます。これ により、複数のテナントからのユーザーが、フォルダーやレポートなどの共通のコ ンテンツにアクセスできます。 Content Manager オブジェクトの仮想テナント ID と、「テナント ID マッピン グ」および「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーを使用して ユーザー用に実装された複数のテナント ID とは、同時に使用できます。これらの 機能を使用して、テナント管理者が複数のテナントを管理できるようにすることや (テナント管理の委任と呼ばれる)、Cognos ユーザーが複数のテナントの Content Manager オブジェクトにアクセスできるようにすること (テナント間のコンテンツ 共有と呼ばれる) が可能です。

テナント管理の委任が実装されると、システム管理者は特定のタスク (いくつかの テナントのセキュリティー、スケジュール、アクティビティー、イベントの管理な ど)を「テナント管理者」役割のメンバーに委任することができます。テナント管 理者は、自分のテナントに加えて、テナント管理者のバウンド・セットによって定 義されたテナントのセットを管理できます。システム管理者は、テナント管理者の 権限に関する完全な制御を保持します。詳細については、 363 ページの『テナント 管理の委任』を参照してください。

テナント間のコンテンツ共有が実装されると、ユーザーは、そのユーザー自身のテ ナント・コンテンツに加えて、さまざまなテナントのコンテンツにアクセスできま す。ユーザーのコンテンツ共有は、以下のマルチテナンシー機能を使用して実現で きます。

「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティー。

ユーザーは、自分のユーザーのテナント・バウンド・セットにテナント ID が含 まれている、すべての Content Manager オブジェクトにアクセスできます。

• 仮想テナント ID

ある Content Manager オブジェクトに仮想テナント ID が割り当てられている 場合、そのオブジェクトの仮想テナント ID の中にテナント ID が含まれている テナントのユーザーは、これにアクセスできます。

詳しくは、 364 ページの『仮想テナントをセットアップしてテナント間のコンテン ツ共有を有効にする』のトピックを参照してください。

「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーの構成 テナント・バウンド・セットは、複数のテナント ID を含むことができる、複数値 のプロパティーです。

以下のいずれかの方法によって、このプロパティーを IBM Cognos Configuration で構成します。

- 355 ページの『ユーザー・アカウント属性に基づくテナント・バウンド・セットの構成』
- 356 ページの『カスタム・プロバイダーに基づくテナント・バウンド・セットの構成』

ユーザーがシステム管理者の場合は、使用不可にされたテナントもバウンド・セットに示されます。削除されたテナントは、自動的にバウンド・セットから除去され ます。 この設定をグローバルに適用したり、すべての構成済みネームスペースに適用した り、または個別のネームスペースに適用することができます。特定のネームスペー スのマルチテナンシー・プロパティーを指定した場合、IBM Cognos Configuration の「認証」レベルで、グローバルに設定されているマルチテナンシー・プロパティ ーがオーバーライドされます。

ヒント:「テナント ID マッピング」および「テナント・バウンド・セット・マッ ピング」プロパティーの実装を互いに独立させることができます。例えば、「テナ ント ID マッピング」プロパティーを決定するために階層内のユーザーの位置を使 用し、「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーを決定するため にカスタム・プロバイダーを使用することができます。ただし、ほとんどの実装で は、どちらのプロパティーにも同じタイプ (例えば部門番号) のテナント ID が含ま れている必要があります。

# ユーザー・アカウント属性に基づくテナント・バウンド・セットの構成

テナント・バウンド・セットにマップするために、認証プロバイダー内の特定のユ ーザー・アカウント属性を指定できます。マルチテナンシーが既に有効になってい る必要があります。

IBM Cognos Configuration で「テナント・バウンド・セット・マッピング」 > 「パターン」プロパティーにユーザー・アカウント属性をマップする必要があります。

#### 始める前に

テナント・バウンド・セットにマップするユーザー・アカウント属性を認証プロバ イダーで選択した後、カスタム・プロパティーを作成して、それをユーザー・アカ ウント属性にマップする必要があります。

LDAP ユーザー・アカウントの departmentNumber 属性を使用してユーザーのバウ ンド・セットを識別することができます。この場合、「テナント・バウンド・セッ ト・マッピング」、「パターン」プロパティーを、次の例に示すように設定するこ とができます。 ~/parameters/bounding_set次に、bounding_set という名前のカス タム・プロパティーを指定して、このプロパティーをユーザー・アカウント属性 departmentNumber に関連付けます

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- 2. この設定をすべてのネームスペースに対してグローバルに構成するか、または特定のネームスペースに対して構成するかを選択します。
  - すべてのネームスペースに対してこの設定を構成するには、エクスプローラ ー・ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をクリックし ます。
  - 1 つのネームスペースに対してこの設定を構成するには、エクスプローラー・ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をクリックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 「マルチテナンシー」プロパティー・グループで、「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーの編集ボタンをクリックします。

- 4. 表示される「テナント・バウンド・セット・マッピング」ボックスで、以下のようにマッピングを指定します。
  - a. 「タイプ」には「パターン」を選択します。
  - b. 「値」には、このトピックの上記の説明に基づいて作成したストリングを入 力します。

例えば ~/parameters/boundingSet と入力します。ここで ~/parameters は 構文の固定部分、boundingSet はカスタム・プロパティー名です。

- c. 「**OK**」をクリックします。
- 5. 「アカウント・マッピング (詳細)」プロパティー・グループで、カスタム・プ ロパティーを指定して、それをアカウント属性にマップします。次のようにしま す。
  - a. 「カスタム・プロパティー」の「値」列の中をクリックして、編集ボタンを クリックします。
  - b. 「値」-「カスタム・プロパティー」ウィンドウで「追加」をクリックしま す。
  - c. 「名前」列にカスタム・プロパティー名を入力します。「値」列に属性の名前を入力します。ステップ 4 の例の場合、カスタム・プロパティーの「名前」 は boundingSet、「値」は departmentNumber を使用します。
  - d. 「**OK**」をクリックします。
- 6. マルチテナンシー構成をテストします。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。
  - b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「**OK**」をクリックしま す。
  - c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

この設定が正しく構成されている場合、「テナント・バウンド・セット」プロパ ティー値が詳細に表示されます。この設定が表示されない場合、値が正しいこと を確認して、再びテストしてください。

- 7. テストに成功した場合、「ファイル」メニューから「保存」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再始動して変更を有効にします。

カスタム・プロバイダーに基づくテナント・バウンド・セットの構成

テナント・バウンド・セットを判別するために、ユーザー認証プロセス中に開始さ れるカスタム Java クラスを作成することができます。この方法では、IBM Cognos Software Development Kit を使用する必要があります。

この方法を使用する場合、IBM Cognos Configuration の「テナント・バウンド・ セット・マッピング」 > 「プロバイダー・クラス」プロパティーをカスタム Java クラスにマップする必要があります。

#### 始める前に

この方法を使ってテナント・バウンド・セットを構成する前に、以下のタスクを実 行する必要があります。

- 必要なカスタム Java クラス・ファイルをコンパイルして JAR ファイルにした 後、それらのファイルを関連ファイルと共に インストールの場 所/webapps/p2pd/WEB-INF/1ib ディレクトリーに入れるか、または CLASSPATH 環境変数を更新してこれらのファイルのパスを含めます。
- IBM Cognos Custom Authentication Provider を使用して、 IBoundingSetProvider インターフェースを実装します。このインターフェース の中でカスタム Java クラスを定義します。これは、後で「テナント・バウン ド・セット・マッピング」 > 「プロバイダー・クラス」プロパティーを構成す るときに使用されます。例えば com.example.class という名前にすることがで きます。詳細については、「IBM Cognos Software Development Kit Custom Authentication Provider Developer Guide」を参照してください。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- この設定をすべてのネームスペースに対してグローバルに構成するか、または特定のネームスペースに対して構成するかを選択します。
  - すべてのネームスペースに対してこの設定を構成するには、エクスプローラ ー・ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をクリックし ます。
  - 1 つのネームスペースに対してこの設定を構成するには、エクスプローラー・ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をクリックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 3. 「マルチテナンシー」プロパティー・グループで、「テナント ID マッピン グ」プロパティーの編集ボタンをクリックします。
- 表示される「テナント・バウンド・セット・マッピング」ボックスで、以下のようにマッピングを指定します。
  - a. 「タイプ」には「プロバイダー・クラス」を選択します。
  - b. 「値」には、IBM Cognos Custom Authentication Provider を使用して IBoundingSetProvider インターフェースで定義した Java クラス名を入力 します。

例えば ~/parameters/boundingSet と入力します。ここで ~/parameters は 構文の定数部分、boundingSet はカスタム・プロパティー名です。

- c. 「**OK**」をクリックします。
- 5. カスタム・プロパティーを指定する必要がある場合には、「アカウント・マッピング (詳細)」プロパティー・グループで以下の操作を実行します。
  - a. 「カスタム・プロパティー」の「値」列の中をクリックして、編集ボタンを クリックします。
  - b. 「値」-「カスタム・プロパティー」ウィンドウで「追加」をクリックしま す。
  - c. 必要に応じて、プロパティー「名前」および「値」を指定します。
  - d. 「**OK**」をクリックします。
- 6. マルチテナンシー構成をテストします。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。

- b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「**OK**」をクリックしま す。
- c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

この設定が正しく構成されている場合、「テナント・バウンド・セット」が詳細 に表示されます。この設定が表示されない場合、値が正しいことを確認して、再 びテストしてください。

- 7. テストに成功した場合、「ファイル」メニューから「保存」をクリックします。
- 8. IBM Cognos サービスを再始動して変更を有効にします。

## マルチテナンシーを無効にする

マルチテナンシーを無効にするには、マルチテナンシー認証プロパティーが構成されているすべての Content Manager コンピューターで、それらのプロパティーを 削除する必要があります。

Content Store のすべてのオブジェクトからすべてのテナント ID を削除する必要 があります。マルチテナンシーを無効にした後にテナント ID がすべて削除されて いないと、アプリケーションが予測不能な動作をする可能性があります。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration を開きます。
- マルチテナンシー設定をすべてのネームスペースでグローバルに無効にするか、 特定のネームスペースで無効にするかを選択します。
  - すべてのネームスペースでマルチテナンシーを無効にする場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。
  - 1 つのネームスペースでマルチテナンシーを無効にする場合は、 「Explorer」ウィンドウの「セキュリティー」カテゴリーで、「認証」をク リックします。次に、構成するネームスペースをクリックします。
- 3. 「マルチテナンシー」で、「テナント ID マッピング」プロパティーの編集ボ タンをクリックします。

「テナント ID マッピング」ボックスが表示されます。

4. 「パターン」または「プロバイダー・クラス」プロパティーの値を削除します。

また、ネームスペースのカスタム・プロパティーが指定された場合は、それらも 削除する必要があります。

- 5. 構成をテストして、マルチテナンシー・プロパティーが削除されているかどうか を確認します。
  - a. 「認証」またはネームスペース (ステップ 2 での選択に応じて) を右クリッ クして、「テスト」をクリックします。
  - b. システム管理者の資格情報を使ってログオンし、「**OK**」をクリックしま す。
  - c. 「詳細」ボタンをクリックして、表示される情報を確認します。

テナント ID が表示されなくなったはずです。

- 6. 「ファイル」メニューの「保存」をクリックします。
- 7. IBM Cognos サービスを再開します。

#### 次のタスク

マルチテナンシーが無効にされた後に、システム管理者はオブジェクトのポリシー を検討して更新してから、テナンシーをパブリックに更新する必要があります。

## テナント管理

テナント管理タスクは、システム管理者および委任されたテナント管理者によって 実行されます。

システム管理者は、Cognos ネームスペースで「システム管理者」役割のメンバー でなければなりません。システム管理者は、Content Store 内のすべてのオブジェ クトの表示と変更が可能です。また、テナント管理タスクを、Cognos ネームスペ ースにおいて「テナント管理者」役割のメンバーである他の管理者に委任できま す。

「システム管理者」役割のメンバーは、マルチテナントの IBM Cognos Analytics 環境で、以下のタスクを実行できます。

- テナント・オブジェクトの作成、変更、および削除。
- Content Store 内の任意のオブジェクトのテナンシー・プロパティーの変更。
- テナントの移動。
- テナントのセッションの終了。

「管理」の「マルチテナンシー」タブが、テナント管理の中心的な領域になりま す。このタブで、管理者は新規テナントの追加と、現在の Cognos Analytics 環境 に登録されているすべてのテナントの管理を行えます。「マルチテナンシー」タブ にアクセスできるのは、「システム管理者」役割のメンバーのみです。

ヒント: IBM Cognos Administration の「マルチテナンシー」タブでもテナント管 理を行えます。

## マルチテナンシーの格納規則

単一のコンテンツ・ストア内に複数のテナントが共存することができます。テナン トの格納規則によって、テナント間のセキュリティーおよび分離が確保されます。 これらの規則によって、コンテンツの作成方法、およびその配置場所が決定しま す。

Content Store 内のすべてのオブジェクトには、オブジェクトが属するテナントを 示すテナント ID 値が付与されます。テナント ID の作成については、 360 ページ の『テナントの作成』を参照してください。

オブジェクトのテナント ID は、親テナント ID がパブリックでない限り、親のテ ナント ID と同じでなければなりません。親テナント ID がパブリックである場 合、子のテナント ID は任意の値に変更できます。詳細については、 362 ページの 『共有オブジェクトのテナント ID の設定』を参照してください。 現在ログインしているユーザーがオブジェクトを作成した場合、そのオブジェクト のテナント ID はユーザーのテナント ID と同じになります。

モデルおよび modelView オブジェクトは、パッケージからテナント ID を継承し ます。例えば、パブリック・パッケージに発行されたモデルは、常にパブリックに なります。

システム管理者は、Content Store の整合性検査を実行し、テナント格納規則に違反するインスタンスを検出します。詳細については、 374 ページの『Content Store 整合性検査の作成と実行』を参照してください。

## テナントの作成

テナント・ユーザーが IBM Cognos Analytics にアクセスするには、事前にシステ ム管理者がオブジェクトを作成し、有効にしておく必要があります。

#### 始める前に

IBM Cognos Configuration で事前にマルチテナンシーを有効にしておく必要があ ります。

#### このタスクについて

システム管理者は、Cognos Analyticsの「管理」コンポーネントの「マルチテナン シー」タブでテナント・オブジェクトを作成し、固有のテナント ID をそのオブジ ェクトに割り当てます。

テナント ID は、LDAP や Active Directory、カスタム認証プロバイダーなどの認 証プロバイダーで定義されます。詳細については、 348 ページの『マルチテナンシ ーの構成』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「管理」で、「マルチテナンシー」タブを選択します。
- 2. 「テナントの追加 (Add a tenant)」 (+) アイコンを選択します。
- 3. 「名前」パラメーターおよび「テナント ID」パラメーターを指定します。

必ず、認証プロバイダーで事前構成された有効なテナント ID を指定してくだ さい。

このページのその他のパラメーターはオプションです。

4. 「追加」を選択します。

#### タスクの結果

テナント名が「マルチテナンシー」タブに表示されます。デフォルトでは、テナントは無効になっています 🍻 。構成が完了したら、テナントを有効にすることができます。

## テナント ID を既存のコンテンツに割り当てる

マルチテナンシーを有効にした後、システム管理者はテナント ID を既存の Content Store オブジェクトに割り当てます。 1 つのテナントに属するすべてのオ ブジェクトは、同じテナント ID を持ちます。

特定のテナントのユーザーが IBM Cognos Analytics にログインした場合、または システム管理者がテナントの偽名を使用した場合、システムはそのテナント ID を 検査し、コンテンツをフィルタリングします。

Software Development Kit (SDK) を使用すると、テナントを作成して、テナント ID を割り当てることができます。

#### このタスクについて

マルチテナント環境では、Content Store 内のすべてのオブジェクトは共有である かまたは単一のテナントに属するかのどちらかになります。システム管理者は、既 存のオブジェクトに適切なテナント ID が指定されているか、または共有のままに しておかなければなりません。例えば、フォルダー内のコンテンツにテナント ID を割り当てて、フォルダー自体は共有にしておくことができます。

テナント・コンテンツが別のフォルダーに編成されていない場合、各テナント用の ルート・フォルダーを作成できます。これは、Cognos Analytics 環境で名前の固有 性を保つのに役立ちます。

レポート、ダッシュボード、データ・サーバー接続、ユーザー・グループおよび役 割など、個々のオブジェクトにテナント ID を割り当てることもできます。

#### 手順

- 1. システム管理者として IBM Cognos Analytics にログオンします。
- 2. 「チーム・コンテンツ」で、同じテナント ID を割り当てる子孫が属している コンテナー・エントリー (フォルダーやパッケージなど)を見つけます。

データ・サーバー接続、グループ、役割などのオブジェクトにテナント ID を 割り当てる場合は、管理インターフェース内の適切な領域でオブジェクトを見つ けます。

- 3. テナント ID を割り当てるオブジェクトの「プロパティー」パネルを開きま す。
- 「全般」タブの「詳細」セクションで、「テナント」の横にあるリンクをクリックします。
- 5. 使用可能な ID のリストからテナント ID を選択して、「適用」をクリックします。

#### タスクの結果

テナント ID がエントリーに適用されます。エントリーがフォルダーやパッケージ などのコンテナーである場合、テナント ID はエントリーとその子孫に適用されま す。

テナント名は、オブジェクト・プロパティー・ページにある「全般」タブの「詳 細」セクションに表示されます。

## 共有オブジェクトのテナント **ID** の設定

親が共有であるオブジェクトにテナント ID を割り当てることができます。

#### 手順

- テナント ID を指定するオブジェクト (データ・サーバー接続など)の「プロパ ティー」パネルを開きます。
- 2. 「全般」タブの「詳細」セクションで、「テナント」の横にあるリンクを選択し ます。
- 3. 使用可能な ID のリストからテナント ID を選択します。
- 4. 「適用」をクリックします。

## テナントの代理

システム管理者やテナント管理者は、単一のテナントの偽名を使用して、テナント の視点からコンテンツの表示およびコンテンツとの対話を行うことができます。テ ナントの偽名を使用しているときは、そのテナントに実行を許可されているすべて のタスクを実行でき、システムにログオンした状態を保持できます。

システム管理者は、Content Store で定義されているすべてのテナントの偽名を使 用できます。テナント管理者は、管理することが許可されたテナントの偽名だけを 使用できます。

#### 手順

- 1. システム管理者やテナント管理者として IBM Cognos Analytics にログオンし ます。詳細については、 359 ページの『テナント管理』を参照してください。
- 2. メイン・ヘッダーで「テナントの偽装」 アイコンをクリックします。

ヒント: 「IBM Cognos Administration」で、システム管理者は「マルチテナ ンシー」タブからテナントの偽名使用を開始することもできます。いずれかのテ ナントの「アクション」ドロップダウン・メニューから、「偽名を使用」をクリ ックします。

「テナントの偽装」ヘッダーが表示されます。

 テナント選択ボックスで、ドロップダウン・アイコンをクリックし、偽名を使用 するテナントを選択します。

テナント名が選択ボックスに表示されます。「テナントのコンテンツのみを表示」チェック・ボックスが選択されている場合 (デフォルト)、システム管理者 やテナント管理者は、選択したテナントに関連付けられているコンテンツのみを 表示できます。「テナントのコンテンツのみを表示」チェック・ボックスにチェ ックが付いていない場合、システム管理者は Content Store 内のすべてのテナ ントのコンテンツを表示でき、テナント管理者は管理できるすべてのテナントの コンテンツを表示できます。

4. 選択したテナントのために実行を予定していたタスクを実行します。

別のテナントのコンテンツを変更または作成する場合は、選択ボックスでそのテ ナントを選択します。



5. 「テナントの偽装」ヘッダーの「閉じる」アイコン 🙆 をクリックして、テ ナントの偽名使用セッションを終了します。

#### テナント管理の委任

システム管理者は、テナント管理タスクを「テナント管理者」役割のメンバーに委 任できます。

「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーが構成されている場 合、「テナント管理者」がアクセスできるのは、バウンド・セットで定義されてい るテナントのみとなります。それらはさらに、システム管理者によってコンテンツ に割り当てられた Cognos Analytics セキュリティー・ポリシーによっても制限さ れます。この状況の場合、「テナント管理者」は制限のあるテナント管理者と見な されます。

「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーが構成されていない場 合、「テナント管理者」はテナンシー検査をバイパスし、システム管理者によって コンテンツに割り当てられた Cognos Analytics セキュリティー・ポリシーによっ てのみ制限を受けます。この状況の場合、「テナント管理者」は無制限のテナント 管理者と見なされます。

「テナント・バウンド・セット・マッピング」プロパティーについて詳しくは、 IBM Cognos Analytics「管理およびセキュリティー・ガイド」の拡張マルチテナンシ ー機能についての情報を参照してください。

「テナント管理者」は、システム管理者から割り当てられたテナント管理タスクを 実行できます。

「テナント管理者」は、以下のタスクは実行できません。

- 「管理」および IBM Cognos Administration の「マルチテナンシー」タブの利 用。
- テナントの作成、削除、デプロイ、および無効化。
- テナント・ユーザー・プロファイルの管理。ユーザー・セッションの終了および テナントのカスタマイズ。
- Content Store 内のオブジェクトに関するテナンシーの変更。
- サーバー管理タスクの実行 (調整や Content Store 使用状況タスクと整合性検査 の実行など)。

ヒント:「テナント管理者」役割は、Cognos ネームスペースの組み込みエントリー の1つです。

マルチテナント環境での「システム管理者」の役割について詳しくは、 359 ページ の『テナント管理』を参照してください。

### 「テナント管理者」役割のセットアップ

初期状態の Content Store では、「テナント管理者」役割にメンバーがなく、「シ ステム管理者」だけがこの役割に対するアクセス権を持ちます。システム管理者は

この役割にメンバーを追加して、初期アクセス権を変更することにより、委任され たテナント管理に使用できるようにする必要があります。

#### このタスクについて

「テナント管理者」役割にメンバーを追加するときは、適切なテナントからユーザ ー、グループ、または役割を選択します。

#### 手順

以下の手順を使用して、「テナント管理者」役割のメンバーを追加または除去しま す。

- 1. 「システム管理者」役割のメンバーであるシステム管理者として、IBM Cognos Analytics にログオンします。
- 「管理」 > 「アカウント」 > 「ネームスペース」で、「Cognos」ネームスペ ースを選択します。
- 3. エントリーのリストで、「テナント管理者」役割を見つけ、そのショートカット・メニュー で、「メンバーの表示 (View members)」をクリックします。
- 「メンバー」タブで、「メンバーの追加」 アイコンを選択し、セキュリティー・ネームスペースの階層を参照して、この役割のメンバーにするユーザー、 グループ、または役割を選択します。

#### タスクの結果

適切なユーザー、グループ、または役割を「テナント管理者」役割に追加した後 に、その役割を使用して、Content Store 内のオブジェクトのセキュリティー・ポ リシーと機能をセットアップできます。

アクセス権の設定については、 231 ページの『エントリーに対するアクセス権の設 定』を参照してください。機能の設定方法について詳しくは、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してください。

# 仮想テナントをセットアップしてテナント間のコンテンツ共有を有 効にする

仮想テナントをセットアップすると、別のテナントに属するユーザーが Content Store 内のオブジェクトにアクセスできるようになります。

仮想テナントには、Cognos Analytics で既に構成された実際のテナントが含まれます。

#### 始める前に

IBM Cognos Analytics でマルチテナンシーを有効にして、テナントを「管理」 > 「マルチテナンシー」で作成します。詳細については、 360 ページの『テナントの 作成』を参照してください。

### このタスクについて

「マルチテナンシー」タブでは、仮想テナントの項目と実際のテナントの項目とが 同じ表示になります。仮想テナントを簡単に識別できるように、作成時に意味のあ る名前を使用し、説明を指定します。

例えば、「北アメリカ」、「中央アメリカ」、および「南アメリカ」という名前の テナントのコンテンツ共有を構成するとします。その場合、「アメリカ」という名 前の仮想テナントを作成して、このテナントに 3 つのテナントを追加します。それ ら 3 つのテナントのいずれかに属するユーザーは、自分のテナントのコンテンツ、 他の 2 つのテナントのコンテンツ、および公開コンテンツにアクセスできます。

仮想テナントを削除する場合、そのテナントに関連付けられたすべてのコンテンツ も削除されます。

詳しくは、拡張マルチテナンシー機能 (www.ibm.com/support/knowledgecenter/ SSEP7J_11.0.0/com.ibm.swg.ba.cognos.ug_cra.doc/c_config_mt_advanced.html) を 参照してください。

## 手順

以下のステップを実行して、仮想テナントと仮想テナントのコンテンツ用のフォル ダーを作成します。

- 1. 「システム管理者」役割のメンバーとして、IBM Cognos Analytics にログオ ンします。
- 2. 「管理」で、「マルチテナンシー」タブを選択します。
- 3. 「テナントの追加 (Add a tenant)」 🛨 アイコンを選択します。
- 4. 「名前」パラメーターおよび「テナント ID」パラメーターを指定します。

仮想テナント ID を事前構成する必要はありません。任意の値にすることができます。

説明には、そのテナントを Cognos Analytics の他のテナントと区別できるように「仮想テナント」などの文字列を入力します。

- 5. 「追加」を選択します。 テナントのリストに仮想テナント名が表示されます が、デフォルトではテナントは無効になっています。構成が終了した後にテナ ントを有効にすることができます。
- 6. 作成した仮想テナントのショートカット・メニュー U で「メンバーの表示 (View members)」を選択します。
- 7. 「メンバー」タブで、「メンバーの追加」 (サ) アイコンを選択します。
- 8. 仮想テナントに追加するテナントを選択して、「追加」をクリックします。

ヒント:使用不可のテナントも追加できます。ただし、使用不可のテナントの コンテンツには、そのテナントが使用可能になるまでユーザーはアクセスでき ません。

9. 新規フォルダーを作成します。識別を容易にするために、フォルダー名は仮想 テナントの名前と似たものにしてください。  フォルダーのプロパティー・ページの「全般」タブの「詳細」セクションで、 使用可能な ID のリストから該当 ID を選択して「テナント ID」の値を仮想 テナントのテナント ID に変更します。例えば、仮想テナント ID が Americas の場合、リストからこの ID を選択してフォルダーに割り当てま す。

# Cognos Analytics ユーザー・インターフェースにテナント名を表示する

管理権限を持たないユーザーのために Cognos Analytics ユーザー・インターフェ ース内にテナント名を表示するかどうかを指定できます。

デフォルトでは、システム管理者とテナント管理者だけが、オブジェクトに関連付 けられたテナント名を表示できます。管理者ではないユーザーがその同じ権限を持 つことを許可するには、Presentation サービスの詳細設定

portal.showTenantInfoForAllUsers を true に変更します。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- 2. Presentation サービスで、**portal.showTenantInfoForAllUsers** プロパティーを 指定してその値を true に設定します。

## テナント・ユーザー・プロファイルの管理

テナントごとに独自のデフォルト・ユーザー・プロファイルを保持して、それをす べてのテナント・ユーザーで共有することができます。

#### このタスクについて

システム管理者が、テナント・ユーザー・プロファイルを作成します。このプロフ ァイルは、Cognos ネームスペースで定義されたデフォルト・ユーザー・プロファ イルに基づいています。デフォルト・ユーザー・プロファイルは、テナントに関連 するように変更できます。例えば、プロファイルには、テナントに関連付けられた IBM Cognos ユーザー・インターフェースの製品言語、ポータル・タブ、およびス タイルを反映させることができます。

テナント・ユーザーが最初に IBM Cognos ソフトウェアにログオンする際に、その ユーザーのユーザー・プロファイルが自動的に作成されます。このプロファイル は、既存のテナント・ユーザー・プロファイルがある場合は、そのプロファイルに 基づきます。テナント・プロファイルが存在しない場合、そのユーザーにはデフォ ルト・ユーザー・プロファイルが適用されます。

システム管理者は、テナント・ユーザー・プロファイルを変更または削除できま す。プロファイルは、他のテナント・オブジェクトと共にソース環境からターゲッ ト環境に配布することもできます。テナントを配布するときには、他のテナント・ オブジェクトと同じ競合の解消規則がテナント・ユーザー・プロファイルに適用さ れます。

IBM Cognos Analytics のユーザー・プロファイルについて詳しくは、 341 ページ の『第 21 章 ユーザー・プロファイルの管理』を参照してください。

#### 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」で、「マルチテナンシー」タブをクリックします。
- 2. 以下のうちの該当するアクションを選択します。
  - 1 つ以上のテナントにユーザー・プロファイルを作成するには、対象のテナントのチェック・ボックスを選択し、ツールバーの「デフォルトのユーザー・プロファイルを編集」アイコン をクリックします。必要に応じ

て、別のタブでも変更を加えます。

- 1 つのテナントの既存のユーザー・プロファイルを変更するには、テナントの「アクション」ドロップダウン・メニューから、「テナント・ユーザー・プロファイルの編集」をクリックし、別のタブで必要な変更を加えます。
- 1 つ以上のテナントのユーザー・プロファイルを削除するには、対象のテナントのチェック・ボックスを選択し、ツールバーの「テナント・ユーザー・プロファイルの削除」アイコンをクリックします。1 つのテナントのユーザー・プロファイルを削除するには、テナントの「アクション」ドロップダウン・メニューから、「テナント・ユーザー・プロファイルの削除」をクリックします。

## テナント・コンテンツの配布

テナント・コンテンツは、エクスポートおよびインポートすることができます。

テナント・コンテンツは、単独で配布することも、共有コンテンツと共に配布する こともできます。共有コンテンツを単独で配布することもできます。

IBM Cognos Analytics における配布に関する一般情報については、 303 ページの 『第 19 章 配布』を参照してください。

#### テナント・コンテンツの配布アーカイブへのエクスポート

テナント・コンテンツをソース環境から配布アーカイブにエクスポートできます。 後で、このアーカイブをターゲット環境にインポートできます。

#### 始める前に

選択したテナントに属している共有コンテンツおよびオブジェクトだけがエクスポートされます。エクスポートを開始する前に、Content Store でオブジェクトへの テナンシーの割り当てを実行する必要があります。

#### このタスクについて

以下の方法でコンテンツをエクスポートできます。

- 選択したテナントに属するコンテンツと共有コンテンツ
- 選択したテナントに属するコンテンツのみ
- 共有コンテンツのみ

共有ユーザー・アカウントを含むユーザー・アカウント情報は、エクスポートに組 み込んだり、除外したりできます。共有コンテンツを含めたテナントをエクスポー トすると、共有ユーザー・アカウント情報もデフォルトで含められます。このタイ プのエクスポートから共有アカウント情報を除外するには、

**CM.TENANTS_DEPLOYMENT_EXCLUDE_PUBLIC_USER_ACCOUNTS** 詳細設定を使用します。詳 細については、 371 ページの『共有コンテンツの配布時の共有ユーザー・アカウン ト情報の除外』を参照してください。

共有コンテンツがテナント・エクスポートから除外され、テナント・オブジェクト が共有の祖先を持つ場合、ターゲット・システムでコンテンツ参照を保持できるよ うに、その共有の祖先もエクスポートに含められます。例えば、データ・ソース接 続がテナントに属するが、データ・ソース自体は共有である状態で、データ・ソー スがエクスポートされる場合などです。

#### 手順

- 「IBM Cognos Administration」で、「マルチテナンシー」タブをクリックします。
- ツールバーで、「エクスポートの新規作成」アイコン ジン をクリックします。
  「エクスポートの新規作成」ウィザードが開きます。
- 3. 配布仕様の一意の名前を入力し、必要に応じて説明や画面のヒントを入力しま す。保存先のフォルダーを選択し、「次へ」をクリックします。
- 「配布方法を選択」ページで、「テナントの選択」を選択します。該当する場合 は、「ユーザー・アカウント情報を含める」チェック・ボックスも同様に選択し て、「次へ」をクリックします。
- 5. 「テナントの選択」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 矢印アイコンを使用して、該当するテナントを「使用可能」ボックスから 「選択済み」ボックスに移動します。「選択済み」ボックスに正しいテナン ト名が表示されていることを確認してください。

重要:共有コンテンツのみをエクスポートする場合、「選択済み」ボックス は空でなければなりません。

- b. エクスポートに共有コンテンツを含める場合、「共有コンテンツを含める」 チェック・ボックスを選択します。
- c. 「競合の解消方法」オプションのいずれか 1 つを選択してください。これ らのオプションは、配布アーカイブがターゲット環境にインポートされると きに使用されます。「既存のエントリーを置換する」オプションを使用する と、ターゲット環境のオブジェクトは、配布アーカイブのオブジェクトで置 換されます。「既存のエントリーを保持する」オプションを使用すると、配 布アーカイブのオブジェクトは、ターゲット環境の関連オブジェクトとマー ジされます。
- d. 「次へ」をクリックします。
- 6. 「配布アーカイブの指定」ページの「配布アーカイブ」で、リストから既存の配 布アーカイブを選択するか、新しい名前を入力して新規作成します。

配布アーカイブに新しい名前を入力する場合は、名前にスペースを含めないでく ださい。新しい配布仕様の名前が既存の配布アーカイブの名前と一致した場合 は、「_#」が名前の末尾に追加されます。「#」は 1 などの番号です。

7. 「暗号化」で「暗号化パスワードを設定」をクリックし、パスワードを入力して、「**OK**」をクリックします。

- 8. 概要情報を確認し、「次へ」をクリックします。 情報を変更するには、「戻る」をクリックして画面の指示に従います。
- 9. 配布仕様をどのように処理するかを決定します。
  - a. すぐに実行する、または後ほど実行する場合には、「保存して 1 回実 行」、「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を設定し、次 に、「実行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックし ます。
  - b. 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュー ル」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日 を選択します。「OK」をクリックします。

ヒント:スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。

c. スケジュールの設定や実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終 了」の順にクリックします。

#### タスクの結果

エクスポート配布仕様は、IBM Cognos Administration の「設定」タブの「コンテ ンツ管理」で保存します。この場所から、配布仕様を更新および実行したり、配布 アーカイブを別の Content Store に移動したりできます。

ターゲット環境へのテナント・コンテンツのインポート 配布アーカイブからターゲット環境にテナント・コンテンツをインポートできま す。

このタスクについて

配布アーカイブからインポートする際には、エクスポートされたエントリーから選 択します。ユーザー・アカウント情報が共有コンテンツに含まれている場合、この 情報を保持することも、除外することもできます。

コンテンツをインポートするときに、ターゲット環境のコンテンツを配布アーカイ ブのコンテンツで置き換えることができます。

ターゲット環境のテナント・コンテンツ全体が置き換えられることはありません が、アーカイブのコンテンツと競合するコンテンツがターゲット環境にあれば、そ のコンテンツは置き換えられます。

ターゲット Content Store 内のいくつかのエントリーに、テナント配布から除外された共有コンテンツへの参照が含まれている場合があります。共有コンテンツが、 ターゲット Content Store 内にまだ存在しない場合、エントリー間の参照が破損す る結果となります。管理者は、配布の詳細を通じて破損した参照に関する通知を受 けます。破損した参照は、共有コンテンツを別個に配布するか、テナント・コンテ ンツに共有コンテンツを含めて再エクスポートすることで修復できます。

#### 手順

1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「コンテンツ管理」をク リックします。

- 2. ツールバーの「インポートの新規作成」アイコン¹ をクリックします。「インポートの新規作成」ウィザードが表示されます。
- 3. 「配布アーカイブ」セクションで、インポートする配布アーカイブを選択しま す。
- 4. アーカイブの暗号化に使用されたパスワードを入力して、「**OK**」をクリックします。
- 5. 一意の名前を入力します。必要に応じて、配布仕様に関する説明や画面ヒント を入力します。保存先フォルダーを選択して、「次へ」をクリックします。
- 6. テナント ID が正しいことを確認します。
- ユーザー・アカウント情報が配布アーカイブの共有コンテンツに含まれている 場合、この時点で、「ユーザー・アカウント情報を含める」チェック・ボック スを選択またはクリアすることにより、この情報を含めるか除外するかを決定 できます。この選択項目は、ユーザー・アカウント情報がアーカイブに含めら れていない場合には使用不可になっています。
- 「競合の解消方法」オプションのいずれか 1 つを選択してください。「既存の エントリーを置換する」オプションを使用すると、ターゲット環境のオブジェ クトは、配布アーカイブのオブジェクトで置換されます。「既存のエントリー を保持する」オプションを使用すると、配布アーカイブのオブジェクトは、タ ーゲット環境の関連オブジェクトとマージされます。
- 9. 「次へ」をクリックします。
- 10. 概要情報を確認し、「次へ」をクリックします。
- 11. インポート配布仕様をどのように処理するかを決定します。
  - すぐに実行する、または後ほど実行する場合には、「保存して 1 回実 行」、「終了」の順にクリックします。実行する時刻と日付を設定し、「実 行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - 定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュー ル」、「終了」の順にクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日 を選択して、「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。スケジュールのステータスを確認 するには、 286 ページの『スケジュールされた処理の管理』を参照してく ださい。

 スケジュールの設定や実行を行わずに保存するには、「保存のみ」、「終 了」の順にクリックします。

インポートを実行すると、レポート仕様をアップグレードするかどうかを選 択できます。配布仕様を今すぐアップグレードしない場合は、後でアップグ レードできます。詳細については、 329 ページの『レポート仕様のアップ グレード』を参照してください。また、オプションでストア ID を選択でき ます。「インポート時に新しい ID を割り当てる」を選択します。

 インポートを実行すると、レポート仕様をアップグレードするかどうかを選択 できます。配布仕様を今すぐアップグレードしない場合は、後でアップグレー ドできます。詳細については、 329 ページの『レポート仕様のアップグレー ド』を参照してください。また、オプションで「ストア ID」を選択できま す。インポートを実行する際、Content Store ID は削除されて新規 ID が割り 当てられます。Content Store ID を保存する必要がある場合、それらを保持す ることを選択できます。詳細については、 330 ページの『コンテンツ ID の 割り当て』を参照してください。

#### タスクの結果

インポート配布仕様は、IBM Cognos Administration の「設定」タブの「コンテン ツ管理」に保存されます。この場所から、配布仕様を更新および実行することがで きます。

#### 共有コンテンツの配布時の共有ユーザー・アカウント情報の除外

IBM Cognos ソフトウェアのバージョン 10.2.0 では、共有コンテンツを配布する際 にユーザー・アカウント情報を除外するオプションがありませんでした。このオプ ションは、バージョン 10.2.1 以降の製品で装備されました。

#### このタスクについて

Content Manager 10.2.0 からテナントをエクスポートする際に、Content Manager をバージョン 10.2.1 にアップグレードする前に、テナント ID を保持しない多数の ユーザー・アカウントがある場合があります。これらのアカウントを配布から除外 するには、CM.TENANTS_DEPLOYMENT_EXCLUDE_PUBLIC_USER_ACCOUNTS 詳細設定を使用 します。

#### 手順

- 1. 537 ページの『特定のサービスに対する詳細設定の構成』のセクションの手順 に従います。
- ContentManagerService」の場合、パラメーター名
  CM.TENANTS DEPLOYMENT EXCLUDE PUBLIC USER ACCOUNTS を入力します。
- 3. このパラメーターの値として「true」を入力し、「OK」をクリックします。

## テナントのアクティブなユーザー・セッションの終了

テナントを削除する前やテナントの保守操作を実行する前には、テナントのアクテ ィブなユーザー・セッションを終了する必要があります。

#### 始める前に

テナントのアクティブなユーザー・セッションを終了する前に、そのテナントを無効にして、新しいユーザー・セッションを開始できないようにします。詳細については、 372 ページの『テナントの有効化と無効化』を参照してください。

#### このタスクについて

このアクションを使用して、指定されたテナントのすべてのアクティブ・ユーザー・セッションを終了します。他のテナントへのアクセスは影響を受けません。

#### 手順

1. 「管理」 > 「マルチテナンシー」で、該当するテナントを見つけます。

テナントのショートカット・メニュー
 で、「セッションの終了」をクリックします。

#### タスクの結果

終了したユーザー・セッションの数を示すメッセージが表示されます。

## テナントの有効化と無効化

テナント・ユーザーが IBM Cognos Analytics にアクセスしてテナントの内容を変 更することのないように、テナントを無効にすることができます。

### このタスクについて

デフォルトでは、新規作成されたテナントは無効になっているので、そのテナント を構成してから有効にする必要があります。

テナントとそのコンテンツをデプロイする前に、テナントを無効にする必要があり ます。詳しくは、テナント・コンテンツの配布 (www.ibm.com/support/ knowledgecenter/SSEP7J_11.0.0/com.ibm.swg.ba.cognos.ug_cra.doc/ c_mt_deployment.html) を参照してください。

ベスト・プラクティスとしては、テナントのアクティブなユーザー・セッションを 終了する前に、そのテナントを無効にすることも必要です。詳細については、 371 ページの『テナントのアクティブなユーザー・セッションの終了』を参照してくだ さい。

#### 手順

1. 「管理」 > 「マルチテナンシー」で、必要なテナントを見つけます。

2. テナントのショートカット・メニュー 📃 で、「無効」をクリックします。

無効な状態を示すアイコンがテナント・アイコンに追加されます 🏠 。

「有効」を選択するとテナントを有効にできます。

#### テナントの削除

IBM Cognos Analytics からテナントを削除できます。この操作は、テナントが IBM Cognos Analytics の他のインスタンスに永続的に移動された場合に必要とな ることがあります。

#### 始める前に

テナントを削除する前に、そのテナントのアクティブなユーザー・セッションを終 了する必要があります。そのようにしないと、テナントを削除できません。詳細に ついては、 371 ページの『テナントのアクティブなユーザー・セッションの終了』 を参照してください。

#### このタスクについて

テナントを削除すると、レポートやダッシュボードなど、そのテナントに関連付け られたすべてのコンテンツも削除されます。

#### 手順

- 1. 「管理」 > 「マルチテナンシー」で、削除するテナントを見つけます。
- 2. テナントのショートカット・メニュー 📃 で、「削除」をクリックします。

## Content Store 使用状況タスクの作成と実行

Content Store 使用状況タスクは、Content Store の使用法の検討に役立つ情報を提供します。

Content Store 内にテナントのユーザーが持つ各オブジェクト・タイプのインスタンスの数、およびそれらのインスタンスが使用するスペースの量を判別できます。 また、すべてのオブジェクトのサイズなど、より詳細な情報も判別できます。

#### このタスクについて

この情報は、課金およびプロビジョニングの目的で使用できます。例えば、課金 は、レポートなど特定のオブジェクト・タイプのインスタンス・カウントに基づい て決定できます。プロビジョニングの決定は、使用中のスペース量に基づき、別の IBM Cognos インスタンスに移動させるテナントを決めることで行えます。

Content Store 使用状況タスクの作成後、それらのタスクはオンデマンドで、スケ ジュールされた時間で、またはトリガーに基づいて実行できます。結果として生成 される .csv ファイルをデータ・ソースとして使用して、IBM Cognos Analytics で レポートを作成できます。

## 手順

- 「IBM Cognos Administration」で、「マルチテナンシー」タブをクリックします。
- 2. ツールバーで「コンテンツの使用状況の作成」アイコン をクリックしま す。
- 3. タスク名、およびオプションで説明と画面ヒントを指定します。
- 「テナント」プロパティーで、「設定」をクリックしてこのタスクに関連付ける テナント ID を選択します。 この時点でテナントを選択しない場合、タスクは 現行セッションのテナント ID で作成されます。
- 5. 矢印アイコンを使用してテナントを「使用可能」ボックスから「選択済み」ボッ クスに移動して、このコンテンツ使用状況タスクに含めるテナント (複数可)を 選択します。
- 「オプション」セクションで、このタスクの実行後に、ログ・ファイルに情報を 保存する方法を指定します。
  - 「ファイル」の下で「全テナントに対し1つ」を選択すると、すべてのテナントの情報は単一ファイルに保存されます。「テナントにつき1つ」を選択すると、各テナントの情報は別個のファイルに保存されます。

- 「細分性」の下で、「オブジェクト・タイプおよびテナント」を選択する と、各テナントに関する情報の大まかな概要が保存されます。この概要に は、インスタンス・カウント、およびテナントごとにグループ化された Content Store 内の各オブジェクト・タイプの合計サイズが含まれます。 「すべてのオブジェクト」を選択すると、Content Store 内の各オブジェク トの詳細な概要が保存されます。この概要には、オブジェクトの tenantID、 名前、storeID、parentStoreID、およびサイズが含まれます。
- 7. タスクの実行方法を選択します。
  - タスクをすぐに、または後で実行する場合は、「保存して1回実行」をクリックします。実行する日時を指定して、「実行」をクリックします。
  - タスクを定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」をクリックします。次に、頻度、開始日、および終了日を選択して、「OK」をクリックします。

ヒント: スケジュールを一時的に無効にするには、「スケジュールを無効 化」チェック・ボックスをオンにします。スケジュールのステータスを確認 するには、 286 ページの『スケジュールされた処理の管理』を参照してくだ さい。

スケジュールや実行を行わずにタスクを保存するには、「保存のみ」をクリックします。

#### タスクの結果

新しいタスクが「設定」タブの「コンテンツ管理」に表示されます。タスクは後か ら変更または実行できます。

Content Store 使用状況タスクを実行した結果として生成されるログ・ファイル は、次の名前で、 IBM Cognos Configuration に指定された logs ディレクトリー に保存されます。

- cmUtilization_date_stamp.csv (「全テナントに対し 1 つ」オプションを使用した場合)。
- cmUtilization_date_stamp_tenant_ID.csv (「テナントにつき 1 つ」オプション を使用した場合)。

## Content Store 整合性検査の作成と実行

整合性検査を実行して、マルチテナンシーの格納規則に違反するオブジェクトのイ ンスタンスを検出することができます。内容がテナントの格納規則に従っていない 場合、対象ユーザーはその内容にアクセスできない可能性があります。また、所属 先のテナントを削除するときにこの内容が削除されない可能性もあります。

テナントの格納規則によると、オブジェクトのテナント ID は、親テナント ID が パブリックでない限り、親のテナント ID と同じでなければなりません。詳細につ いては、 359 ページの『マルチテナンシーの格納規則』を参照してください。

## 始める前に

Content Store 整合性検査を実行する前に、Content Store をバックアップしてください。

#### このタスクについて

Content Store 整合性検査タスクを実行する際に「検索して修正」オプションを使用すると、オブジェクトがテナントの格納規則に違反しているインスタンスが自動的に解決されます。エラーの原因となっている子オブジェクトに親テナント ID を割り当てることにより、テナントに関連した不整合が修正されます。このタイプのエラーを修正する場合には、IBM Cognos サービスを開始する必要はありません。ただし、Content Store の不整合には、IBM Cognos サービスを開始するまで修正されないタイプのものもあります。それぞれの修復の概要がタスク実行履歴の下に作成されます。

テナントの格納規則違反のインスタンスを確認して手動で解決する場合は、Content Store 整合性検査を実行する際に「検索のみ」オプションを使用することができます。それぞれのエラーの概要がタスク実行履歴の下に作成されます (タスクを実行するユーザーがシステム管理者の場合)。このオプションでは、各オブジェクトを個別に調査して正しいテナント ID をオブジェクトに割り当てるための時間を持つことができるため、より安全である可能性があります。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Administration の「設定」 タブで、「コンテンツ管理」をクリ ックします。
- ツールバーの「コンテンツ保守を新規作成」アイコン [●] をクリックし、「整 合性チェックを新規作成」をクリックします。
- 3. タスク名を入力し、オプションで説明および画面のヒントを入力します。
- 4. 「内部参照」をクリックし、Content Store に不整合がないか調べます。
- 5. タスクの実行方法を選択します。
  - タスクをすぐに、または後で実行する場合は、「保存して1回実行」をクリックします。実行する時刻と日付を指定します。「検索のみ」または「検索して修正」をクリックし、「実行」をクリックします。実行日時を確認し、「OK」をクリックします。
  - タスクを定期的に実行するようにスケジュールするには、「保存してスケジュール」をクリックします。頻度および開始日と終了日を選択します。「検索のみ」または「検索して修正」をクリックし、「OK」をクリックします。
  - スケジュールや実行を行わずにタスクを保存するには、「保存のみ」をクリックします。

#### タスクの結果

新しいタスクが「設定」タブの「コンテンツ管理」に表示されます。タスクは後か ら変更または実行できます。これらのタイプのタスクを IBM Cognos 環境で使用す る方法については、 73 ページの『Content Store 保守タスク』を参照してくださ い。

## マルチテナント環境での双方向処理へのアクセス

IBM Cognos Analytics の双方向処理の内容は、テナント ID でフィルターに掛け られません。そのため、ユーザーの双方向処理へのアクセスを制限するために追加 の数値データが必要になります。 バックグラウンド処理の内容は、すべてのユーザーがその処理を表示できるよう、 テナント ID でフィルターに掛けられます。

バックグラウンド処理と双方向処理は、「個人用処理状況およびスケジュール」か らアクセスすることができます。管理者は、IBM Cognos Administration の「ステ ータス」タブからも処理を確認することができます。詳細については、 279 ページ の『第 17 章 処理の管理』を参照してください。

#### ユーザーの双方向処理へのアクセスの制限

意図していないユーザーにテナントの内容を公開してしまうリスクを回避するため に、システム管理者は双方向処理へのアクセスを制限できます。

#### このタスクについて

**COGADMIN.restrictInteractiveActivitiesToSystemAdministrators** 詳細設定を使用 して、ユーザーの双方向処理へのアクセスを制限し、システム管理者だけがこのタ イプの処理を表示できるようにします。

#### 手順

- 536 ページの『特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成』のセクションの手順に従います。
- 指定したディスパッチャーの「パラメーター」列で、 COGADMIN.restrictInteractiveActivitiesToSystemAdministrators という名前 を入力します。
- 3. このパラメーターに「true」の値を指定し、「OK」をクリックします。
- 4. IBM Cognos サービスを再開します。

#### タスクの結果

IBM Cognos 環境で、システム管理者にのみ双方向処理が表示されるようになります。

#### 不明なユーザーの双方向処理を非表示にする

IBM Cognos 環境のすべてのユーザーを表示する権限がテナント管理者に与えられ ていない場合があります。ただし、管理者は引き続きすべてのユーザーの双方向処 理を参照できます。このタイプの処理は、テナント ID によってフィルターに掛け られることがないためです。

#### このタスクについて

システム管理者は、テナント管理者が表示できないユーザーの双方向処理を、テナ ント管理者の表示から隠すことができます。

#### 手順

- 536 ページの『特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成』のセクションの手順に従います。
- 「パラメーター」名として、
  COGADMIN.filterInteractiveActivitiesOfUnknownUsers という名前を入力します。

- 3. このパラメーターに「true」の値を指定し、「OK」をクリックします。
- 4. IBM Cognos サービスを再開します。

## タスクの結果

テナント管理者には、特定のテナント・ユーザーの双方向処理のみが表示されるようになります。

# 第23章 リソース・ライブラリー

管理者は、視覚化やユーザー・インターフェースのプロファイルなどの再利用可能 リソースを IBM Cognos Administration の「ライブラリー」タブでインポート、 保管、および管理します。

「ライブラリー」タブは、リソースを管理するための中心的な場所となります。

「ライブラリー」タブのコンテンツにアクセスしたり、それを管理したりするに は、「ライブラリー管理者」役割のメンバーである必要があります。詳細について は、257 ページの『あらかじめ定義されている役割』を参照してください。

管理者は、ライブラリーにリソースをインポートし、それらのリソースのアクセス 権を設定する必要があります。その後、適切なアクセス権をもつユーザーは、IBM Cognos でレポートのリソースを使用できるようになります。

管理者はライブラリーからリソースを削除することもできます。

# 視覚化

視覚化は、レポート利用者がパターンや外れ値を識別したり、データを理解したり する上で役立ちます。 IBM Cognos Analytics 視覚化ツールを使用して、さまざま なタイプの視覚化、および、より優れた双方向性を IBM Cognos レポートに組み込 むことができます。

管理者は、ローカル・システムやファイル共有からの視覚化を IBM Cognos Analytics にインポートする必要があります。

IBM Cognos Analytics コミュニティー (www.ibm.com/communities/analytics/ cognos-analytics-blog/cognos-business-intelligence-cognos-analytics-allvisualizations) から、カスタマイズ可能で、すぐに使用できるさまざまな視覚化を 入手できます。ご使用のデータに適合し、業務上の検討事項に対処する視覚化を選 択して、それらをファイル・システムまたはネットワーク共有にダウンロードする ことができます。その後、「ライブラリー」タブを使用して視覚化をライブラリー にインポートし、レポート作成者が使用できるようにします。

視覚化は、Content Store の完全配布に組み込まれます。 Content Store の部分的 な配布を実行する場合は、管理者が、視覚化を組み込むかどうかを選択できます。 詳細については、 303 ページの『第 19 章 配布』を参照してください。

## ライブラリーへの視覚化のインポート

管理者は、ローカル・システムやファイル共有からの視覚化を IBM Cognos Analytics 環境にインポートします。インポートされた視覚化は「ライブラリー」タ ブにリストされ、IBM Cognos のレポートで使用できるようになります。

### このタスクについて

既存の視覚化が変更された場合に、それらを再インポートすることができます。視 覚化への変更は元に戻すことができないため、視覚化を置き換える前に、関連付け られているレポートへの影響を理解しておく必要があります。そうしないと、この アクションの結果、レポートに意図しない変更が加えられたり、レポートが実行さ れなくなったりすることがあります。

視覚化を再インポートする場合、レポート作成者は、視覚化を含んでいるレポート を IBM Cognos Analytics - Reporting で更新して変更を有効にする必要がありま す。ほとんどの変更は、Reporting でレポートを新しいウィンドウで再オープンす るだけで十分です。しかし、レポートの中の変更が必要なケースもあります。例え ば、新しい視覚化でレポートのデータ・セット構造の項目の変更または名前変更を 行った場合、そのレポートは Reporting で変更する必要があります。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「ライブラリー」タブで、「視覚化」をクリ ックします。
- ツールバーの「インポート」アイコン をクリックします。「視覚化を選択・新しい可視化のインポート・ページ」が開きます。
- 「参照」をクリックして、選択する視覚化ファイルにナビゲートします。追加で 視覚化ファイルを選択する場合は、再び参照します。

ヒント: 選択した視覚化のリストから視覚化ファイルを削除するには、「選択内

容の削除」 不イコンをクリックします。

4. 既存の視覚化を置換するには、「既存のエントリーを置換する」チェック・ボッ クスを選択します。

既存の視覚化のインポートを試行する場合に、このチェック・ボックスをクリア すると、インポートは失敗します。これは、既存の視覚化が予期せず上書きされ て、その視覚化を使用するレポートの破損につながることを確実に防ぐためで す。特定の視覚化を置き換えることを決定した場合は、「既存のエントリーを置 換する」チェック・ボックスを選択して視覚化をインポートします。そして、 Reporting で、その視覚化を含んでいるレポートを更新します。

5. 選択した視覚化をインポートするために、「インポート」をクリックします。

#### タスクの結果

インポートされた視覚化が、「視覚化」ページにリストされます。視覚化には、管 理者が変更できるデフォルトのアクセス権があります。

#### 視覚化の管理

視覚化を IBM Cognos Administration にインポートした後、「ライブラリー」タ ブで視覚化を管理することができます。 このタスクについて

視覚化リソースを管理するために、以下の操作を実行できます。

プロパティーを設定

視覚化をインポートする際、デフォルトのプロパティー (アクセス権を含む)が 視覚化に割り当てられます。ライブラリー管理者は、視覚化リソースのデフォル トの設定 (アクセス権を含む)を変更することができます。

詳細については、 271 ページの『第 16 章 エントリーのプロパティー』および 231 ページの『エントリーに対するアクセス権の設定』を参照してください。

重要: ツールバーの「プロパティーを設定」アイコン は、「ライブラリー」 の「視覚化」ページのプロパティー (アクセス権を含む) の設定に使用されま す。

権限を表示

管理者は、各視覚化の独自の権限を表示することができます。

削除

Content Store データベースから視覚化を個別に削除することも、複数削除する こともできます。

• ダウンロード

既存の視覚化をハード・ディスクまたはネットワーク共有にダウンロードして、 視覚化を変更することができます。

手順

- IBM Cognos Administration の「ライブラリー」タブで、「視覚化」ページを クリックします。
- 2. 視覚化リストで、以下のタスクを実行することができます。
  - 1 つの視覚化を管理するには、そのドロップダウンの操作メニューをクリックし、選択した操作をクリックします。
  - 複数の視覚化を削除するには、選択した視覚化と関連付けられている各チェ

ック・ボックスを選択し、ツールバーの「削除」 ズイコンをクリッ クします。
# 第24章 レポートとキューブ

レポート、キューブ、およびドキュメントを使用してデータを分析することで、十 分な情報に基づくタイムリーな意思決定を行えます。

IBM Cognos Analytics では、レポートとキューブをポータルに発行して、組織内 のすべてのユーザーが、必要なときに適切で正確な情報を入手できるようにするこ とができます。

### レポートとキューブの使用

レポートでは、レポートに含める情報を定義した仕様や、結果自体を参照できま す。レポート仕様に保存結果を含めたり、レポートを実行して新しい結果を生成し たりすることができます。

レポートをポータルに発行すると、このレポートを表示、実行、または開くことが 可能になり、さらに、出力レポート・バージョンを表示できるようになります。ま た、レポートをさまざまな形式で表示することもできます。

レポートの配布は、レポートの保存、E メールによる送信、携帯機器への送信、印刷、またはバーストによって行えます。また、現在の実行に対して実行オプション を設定したり、詳細な実行オプションを設定することもできます。

レポートのスケジュールには、後で1回のみ実行するスケジュールと、定期的に実 行するスケジュールがあります。レポートをジョブの一部としてスケジュールする ことも、トリガーに基づいてスケジュールすることもできます。レポートの実行履 歴を表示できます。レポートをエージェントに含めることもできます。

レポートのアラート・リストに自分を追加すると、レポートの新しいバージョンが 作成されたときにアラートを受け取ることができます。また、保存された HTML 出力レポートに監視規則を指定すると、監視規則によって指定されたイベントの条 件が満たされたときにアラートを受け取ることができます。

ドリルアップ、ドリルダウン、ドリルスルーなどの選択に基づく機能を無効にできます。

### 混合通貨

通貨が異なる値を計算すると、通貨が混在する値が生じます。OLAP データ・ソー スを使用した場合、混合通貨の値には、計算単位としてアスタリスク (*) が使用さ れます。

# IBM Cognos のアクティブ・レポート

IBM Cognos Analytics - Reporting を使用すると、アクティブ・レポートを作成で きます。IBM Cognos のアクティブ・レポートは、非常に使いやすい双方向の管理 レポートを作成するための出力レポート・タイプです。ビジネス・ユーザーは、作 成されたアクティブ・レポートを利用して、データを閲覧したり理解を深めたりす ることができます。

レポート作成者は、シンプルで好ましい操作感を保ちながら、ユーザーのニーズに 的を絞ってレポートを作成します。アクティブ・レポートは、ユーザーがオフライ ンの間も利用できるため、販売員などのリモート・ユーザーにとって理想的なソリ ューションとなります。

アクティブ・レポートは、従来の IBM Cognos レポートを拡張するものです。レポ ート作成者は、双方向の動作を追加することで、既存のレポートをアクティブ・レ ポートに変換し、利用しやすいインターフェースをエンド・ユーザーに提供できま す。

## レポート・ビュー

レポート・ビューはソース・レポートと同じレポート仕様を使用しますが、プロン プト値、スケジュール、配信方法、実行オプション、言語、出力形式など、異なる プロパティーを使用できます。

#### このタスクについて

レポート・ビューを作成しても元のレポートは変更されません。レポート・ビュー のソース・レポートは、プロパティーを表示して確認できます。レポート・ビュー のプロパティーでは、ソース・レポートのプロパティーへのリンクも提供されま す。

ソース・レポートを別の場所に移動してもレポート・ビューのリンクは破損しません。ソース・レポートを削除すると、レポート・ビューのリンクは破損し、ソース・レポートへのプロパティー・リンクは削除されます。

汎用レポートを他のレポートの基本構造として使用する場合は、汎用レポートのコ ピーを作成します。

レポート・ビューには、元のエントリーと同じ実行オプションとプロパティーが設 定されます。

## データ・アイテムの系統情報の表示

系統情報を参照すると、パッケージとそのパッケージが使用するデータ・ソースま で、HTML レポートまたはレポート・ビューのデータ・アイテムのメタデータをさ かのぼることができます。

また、系統を表示すると、レポート作成者が追加したデータ・アイテム・フィルタ ー、またはデータ・モデルに定義されたデータ・アイテム・フィルターを確認する こともできます。例えば、クロス集計のセルをクリックして、セルの値がどのよう に計算されたかを確認できます。 携帯機器でレポートを実行したときは、系統情報を表示できません。

IBM Cognos Analytics は、製品に付属のデフォルトの系統ソリューションを使用 するか、カスタムの系統ソリューションを使用するように設定できます。IBM InfoSphere Information Governance Catalog もサポートされています。

レポートに系統情報を表示するにあたって、管理者は系統ソリューションの設定、 「系統」機能の有効化、読み取り権限の付与を行う必要があります。

詳細については、 107 ページの『系統ソリューションの構成』、 237 ページの 『第 13 章 保護されている機能と特性』、および 249 ページの『第 14 章 オブジ ェクト機能』を参照してください。

IBM Cognos の系統ソリューションでは、レポートの系統がその最上位レベルで表示されます。レポートに対してドリルダウンを実行しても系統は変化しません。系統の起動に使用される選択コンテキストはドリルダウン操作によって影響を受ける可能性があるため、常に、レポートに対してドリルダウンを実行する前にレポートの最上位レベルで系統を起動することを推奨します。そうしないと、系統が適切に起動しない可能性があります。

#### 手順

- 1. HTML レポートまたはレポート・ビューを開きます。
- 2. 目的のデータ・アイテムを右クリックし、「系統」をクリックします。

系統ビューが表示されます。

## InfoSphere Business Glossary へのアクセス

組織で IBM InfoSphere Business Glossary を使用している場合は、Cognos ソフ トウェアで IBM Cognos Analytics ビューアーと、Reporting、Query Studio、お よび Analysis Studio のメタデータ・ツリーからも Glossary にアクセスできま す。

#### 始める前に

InfoSphere Business Glossary にアクセスするには、「用語集」機能に対する権限 が必要です。また、管理者によって Glossary の URI が設定されている必要があり ます。

詳細については、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』、 249 ペ ージの『第 14 章 オブジェクト機能』、および 109 ページの『InfoSphere Business Glossary URI の設定』を参照してください。

#### 手順

- Cognos Analytics ビューアーで、HTML レポートまたはレポート・ビューを 開きます。
- 2. 目的のデータ・アイテムを右クリックし、「用語集」をクリックします。

### タスクの結果

デフォルトでは、Cognos ソフトウェアに表示される Glossary の検索結果として、 検索で指定したキーワードを含む用語のみが返されます。他のタイプの資産は返さ れません。

## レポートの形式

IBM Cognos Analytics では、ブラウザーでレポートを表示することや、ユーザー 権限に応じて、他のアプリケーションにインポート可能な形式でレポートを生成す ることができます。管理者は、レポートを区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシート (XLS)、または XML 形式で実行 するために必要な機能に対するアクセスを制限できます。

デフォルトでは、すべてのユーザーが以下の機能に対する権限を保持します。

- CSV 出力の生成
- PDF 出力の生成
- XLS 出力の生成
- XML 出力の生成

これらの個別に保護された機能は、システム・リソースの管理をサポートします。 ユーザーがユーザー・インターフェースで表示および実行可能なフォーマット・オ プションを制御するには、それらの機能に対するアクセス権を設定します。

形式に対するアクセスが制限されている場合、コンテンツを制限された形式で表示 し、レポートのプロパティーで制限された形式を指定できます。

以下の操作を実行するには、適切な機能に対する実行権限および通過権限を保持し ている必要があります。

- レポートを制限された形式で実行。
- 制限された形式で実行するレポートに対するスケジュールまたはジョブの設定。
- 制限された形式で実行するターゲットへのドリル。
- Cognos Workspace ウィジェットでの PDF レポートの印刷。

レポートを実行するときは、出力の生成機能を持つフォーマット・オプションだけ が表示されます。HTML フォーマットは、保護された機能ではありません。

出力の生成機能は、PowerPlay およびアクティブ・レポートには適用されません。

レポートの形式を指定するには、レポートに対する読み取り権限と書き込み権限、 およびレポートを含むフォルダーに対する通過権限も必要です。

レポートの実行時に使用されるデフォルトの形式を指定できます。

レポートの形式は、「実行オプション」ページ、レポート・プロパティー、または 設定で指定できます。

## HTML 形式

IBM Cognos Analytics では、HTML 形式を選択してレポートを出力することができます。

### **PDF** 形式

オンライン・ブック形式でレポートを表示したり配布したりするには、PDF 形式を 使用します。IBM Cognos Analytics で、PDF 形式でレポート出力を生成するに は、「PDF 出力の生成」機能に対する実行権限および通過権限を保持している必要 があります。

詳細な PDF オプションを指定するには、管理者権限が必要になります。

## Microsoft Excel 形式

Microsoft Excel スプレッドシート・ソフトウェアの複数の異なる形式にレポート出 力をエクスポートできます。

IBM Cognos Analytics で Microsoft Excel 形式のレポート出力を生成するには、 「XLS 出力の生成」機能に対する実行権限および通過権限を保持している必要があ ります。

Excel 形式では、ネイティブの Excel XML 形式 (XLSX とも呼ばれる) でレポート 出力が作成されます。

Excel 形式では、レポートに完全な書式設定を行うことができます。この出力は他の Excel 形式に似ていますが、次の点が異なります。

- グラフが静的な画像として表示される
- 表示されたレポートで行の高さを変更して、表示品質を高めることができる
- レポートで明示的に指定されている列の幅が、Microsoft Excel 2007 で無視される
- レポートの外観を整えるため、マージされたセルが使用されている
- ワークシートのデフォルト・サイズが、65,536 行、256 列になる

IBM Cognos 管理者は、拡張サーバー・プロパティーを使用することにより、より大きなワークシートを有効にして、ワークシートの最大行数を変更する (最大 で 16,384 列、1,048,576 行) ことができます。

Excel データは、データに最小限の書式設定が行われます。データ型に基づいてデフォルトのデータ書式がデータに適用され、各列のデータ型は単一であると見なされます。

この出力は他の Excel 形式に似ていますが、次の点が異なります。

- 生成される出力には、レポート内の最初のリスト・クエリーだけが含まれます。
  レポートに複数のクエリーが含まれていて、最初のクエリーがクロス集計または
  グラフの多次元クエリーである場合、レポートの実行時にエラー・メッセージが表示されます。
- ネストされたフレームやマスター/詳細リンクはサポートされていません。

- Microsoft Excel ファイルのセルはデフォルトの幅と高さになります。データが デフォルト・サイズよりも大きい場合は、列の幅と高さを調整する必要がありま す。
- ・ 色、背景色、フォントなどのスタイル仕様はレンダリングされません。
- 枠はレンダリングされません。
- 負の数値に対する例外のハイライトや色規則など、レポート仕様でのユーザー指定のデータ形式は適用されません。

### **CSV** 形式

.csv ファイル・タイプに関連付けられたアプリケーションで開かれる CSV (区切り 文字付きテキスト) 形式で保存されるレポートです。

CSV 形式のレポート出力を生成するには、「CSV 出力の生成」機能に対する実効 権限および通過権限を保持している必要があります。

CSV 形式で保存されるレポートには、次のような特徴があります。

- 多くのクライアント・オペレーティング・システムで Unicode データをサポー トするようにデザインされている
- データが UTF-16 Little Endian でエンコードされている
- ファイルの先頭に BOM (Byte Order Mark) が含まれている
- タブで区切られている
- 文字列が引用符で囲まれていない
- 行を区切るために改行文字が使用されている
- レポート・クエリーの結果のみが表示される (タイトル、画像、paramDisplay 値などのページ・レイアウト・アイテムは CSV 出力に表示されません)

## レポートの言語

レポートの言語を選択できます。

レポートの言語は、レポート・プロパティーまたは設定で指定できます。レポート を実行する際には、レポート・プロパティーで指定した言語が使用されます。レポ ート・プロパティーで言語を指定していない場合は、設定で指定した言語が使用さ れます。

レポートの言語を変更しても、ポータルで使用される言語は変更されません。ポー タルのインターフェースに使用される言語は、設定から変更できます。

レポートを実行する際には、レポート・サーバーから基本データ・ソースに接続し てデータを取得します。SAP BW データ・ソースを使用する際、ユーザーのコンテ ンツ・ロケールに対応した言語が使用する SAP BW サーバーでサポートされてい ない場合、IBM Cognos Analytics ではロケール・マップを使用して対応するロケ ールを確認します。SAP BW サーバーでロケールに対応する言語がサポートされて いる場合は、その言語が使用されます。サポートされていない場合、SAP BW サー バーにインストールされているデフォルト言語を使用してレポートが実行されま す。 レポートの言語を指定するには、レポートに対する読み取り権限と書き込み権限、 およびレポートを含むフォルダーに対する通過権限が必要です。

出力レポートを指定した言語で表示するには、レポートの作成に使用するパッケー ジに多言語データが含まれている必要があります。

### レポートの言語の指定

レポートで使用する言語を指定するには、レポートのプロパティーを変更します。

## レポートのデフォルト・プロンプト値の指定

デフォルトでは、レポートにプロンプトが含まれる場合、レポートを実行するたび に値を選択する必要があります。レポート・プロパティーでプロンプトの動作を変 更できます。

#### このタスクについて

デフォルトのプロンプト値を指定するには、レポートに対する読み取り権限と書き 込み権限、およびレポートを含むフォルダーに対する読み取り権限か通過権限が必 要です。

レポート作成者は、レポートのデフォルトのプロンプト値を作成できます。レポートを実行すると、指定したプロンプト値に基づいてデータに自動的にフィルターが 適用されます。レポート実行時にプロンプト値を指定する必要はありません。これ は、ユーザーの大半がレポートの実行時にいつも同じプロンプト値を使用している 場合に役立ちます。

レポートへの書き込み権限を持っているユーザーがプロンプト値を変更すると、そ の後すべてのユーザーがレポートを実行するときの値として、変更した値が保存さ れます。他の大半のユーザーとは異なるプロンプト値を日常的に使用するユーザー は、レポートのレポート・ビューを作成します。

## 出力レポート・バージョンの保存期間の指定

レポート・プロパティーから、保存する出力レポート・バージョンの数と、保存す る日数または月数を指定できます。

## 出力レポート履歴の保存期間の指定

一定の実行回数、または一定期間 (日数や月数)の間、出力レポートを保存すること ができます。

例えば、最新 10 件の出力レポートを保存したり、出力レポートを 2 日間や 6 カ 月間保存したりできます。

#### このタスクについて

この指定を行うには、エントリーに対する読み取り権限と書き込み権限、およびエ ントリーが格納されているフォルダーに対する読み取り権限または通過権限が必要 です。

## 名前付きセットを持つデータ・ソースで予期しない結果が得られる可能性

ディメンション・データ・ソースに名前付きセットが含まれていて、このセットが 再使用するために作成されたメンバーやセット式のセットである場合に、Query Studio でフィルターやレベルのネストとともに使用すると予期しない結果が得られ ます。

また、データ・ソースにマルチレベルの名前付きセットが含まれる場合も、 Analysis Studio で集計を行うと予期しないデータ結果が得られます。

このため、Query Studio や Analysis Studio のユーザーには、名前付きセットや マルチレベルの名前付きセットを提供しないことを推奨します。

また、Reporting でも、名前付きセットを使って作業すると予期しない結果が得ら れる場合があります。詳細については、IBM Cognos Analytics - Reporting ユーザ ー・ガイド を参照してください。

## IBM Cognos Analytics での Series 7 レポート

PowerPlay 7.3 以降では、Upfront ではなく IBM Cognos Analytics をポータルと して使用するように設定できます。ただし、その他の IBM Cognos アプリケーショ ンや PowerPlay 7.3 以前のバージョンから内容にアクセスする場合、管理者が Upfront ポータルに依存していることがあります。

## Series 7 PowerPlay のレポートとキューブ

Series 7 PowerPlay のレポートとキューブを IBM Cognos Analytics に発行する と、PowerPlay オーサリング・ツールを使用して Series 7 PowerPlay レポートの 作成や編集を行えます。

PowerPlay オーサリング・ツールの詳細については、「*PowerPlay Web* ユーザー・ ガイド」を参照してください。

Series 7 PowerPlay のレポートとキューブのデフォルトの実行オプションを変更したり、多言語のプロパティーを選択したりすることができます。

Series 7 PowerPlay のレポートとキューブの機能は他のレポートとは異なります。 次の操作は、Series 7 PowerPlay のレポートとキューブには適用されません。

- 実行履歴と出力レポート・バージョンの表示。
- 出力レポートと履歴の保存期間の指定。
- レポートの中断とキャンセル。
- PDF 以外のレポート形式のプロンプト値の指定。
- レポートの内容の言語の指定。
- 所有者としてのレポートの実行。
- レポートのスケジューリング。
- レポートの配布。

## シングル・サインオン

シングル・サインオンにより、一度 IBM Cognos アプリケーションにログオンすれ ば、別の IBM Cognos アプリケーションを実行するときに再度認証を求められるこ とはありません。

IBM Cognos Analytics と PowerPlay の認証ソースとして同じ Series 7 ネームス ペースを使用すると、ユーザーがシングル・サインオンの利点を享受できるように なります。この代わりに、IBM Cognos Analytics と PowerPlay の両方の認証ネー ムスペースとして、外部の認証用シングル・サインオンの仕組みを使用するように 設定することもできます。例えば、Series 7 PowerPlay に対するオペレーティン グ・システム・サインオンや、IBM Cognos Analytics における外部 ID マッピン グを使用する LDAP プロバイダーなどです。

Series 7 シングル・サインオンの設定に関する手順については、「Access Manager 管理者ガイド」を参照してください。

IBM Cognos のレポート作成用の製品におけるシングル・サインオンの設定方法に ついては、「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## Series 7 PowerPlay レポートのデフォルト値の変更

Series 7 PowerPlay レポートのデフォルト値を変更できます。

レポートの実行時に次のいずれかのデフォルト操作を選択できます。

- PDF 形式でレポートを実行 (デフォルト)。
- PowerPlay Web Explorer でレポートを開く。

HTML 形式のレポートの場合、デザイン・モードでレポートを開くことができます (データなし)。レポートをデザイン・モードで開けば、レポートの構造を簡単に確認 できます。

PDF 形式のレポートの場合、レポートに含まれるデータの範囲にフィルターを適用 する値を求めるプロンプトを表示できます。例えば、レポートで使用できる日付の サブセットをデータ範囲として指定できます。Series 7 PowerPlay レポートがプロ ンプト値を使用して作成されている場合、レポートの実行時に値を入力するよう求 められます。

## Series 7 のレポートとキューブの多言語プロパティー

IBM Cognos Analytics で、Series 7 のレポートまたはキューブの多言語プロパティーを選択できます。

IBM Cognos Analytics の設定は、内容、データ、データ項目ラベル、およびその 他のラベルに影響しません。これらのアイテムの言語は、レポートまたはキューブ を作成する PowerPlay 管理者が設定します。

## 第25章 ヒューマン・タスクの管理

「個人用受信トレイ」には、承認要求、アドホック・タスク、通知要求という 3 種類のヒューマン・タスクが表示されます。

「個人用受信トレイ」は、「ようこそ」ページの「個人用」メニューから開きま す。

タスクは次のいずれかで作成できます。

• Event Studio (通知要求と承認要求)。

詳細については、「Event Studio ユーザー・ガイド」を参照してください。

- 「個人用受信トレイ」 (通知要求とアドホック・タスク)。
- ・ レポートに設定した監視規則 (通知要求のみ)。

## 承認要求とアドホック・タスク

承認要求は、Event Studio を使用して作成できます。

詳細については、「Event Studio ユーザー・ガイド」を参照してください。

アドホック・タスクは、タスク受信トレイから作成できます。詳細については、 395 ページの『アドホック・タスクを作成する』を参照してください。

承認要求またはアドホック・タスクには、さまざまな受信者を設定できます。

- タスク所有者 1 人の特定ユーザー
- 潜在所有者 複数のユーザー、グループ、役割、または配布リスト
- 利害関係者 潜在所有者ではない 1 人以上のタスク関係者

タスクの潜在所有者が1人のみの場合は、そのユーザーが自動的にタスク所有者に なります。タスクの所有者が複数の場合は、タスクを要求したユーザーがタスク所 有者になります。

1 人以上の利害関係者を含むタスクを作成できますが、そのタスクに所有者または 潜在所有者を含めることはできません。この場合、利害関係者は、タスクが作成さ れた後に、潜在所有者を割り当てることができます。

#### タスク・ステータス

承認要求またはアドホック・タスクのステータスは、次のいずれかです。

- 未開始 タスクは開始を待機中
- 開始済み タスクは所有者により処理中
- 完了 タスクは所有者により完了
- キャンセル済み タスクは受信者によりキャンセル済み

### コメントを表示する

他の受信者によって追加されたコメントや、システムによって記録された監査履歴 コメントを表示できます。

タスクに、自分のコメントを追加することもできます。詳細については、 400 ページの『タスクへのコメントの追加』を参照してください。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. コメントを表示するタスクを選択し、読み取りウィンドウで「ディスカッショ ン」タブをクリックします。

デフォルトでは、ユーザー・コメントのみが表示されます。

3. コメントのドロップダウン・リストから、表示するコメントのタイプを選択しま す。

すべてのユーザー・コメントと監査コメントを表示することも、コメントのタイ プを選択して表示するコメントにフィルターをかけることもできます。

## **E**メール通知に登録する

デフォルトの通知オプションは、タスクの作成時に設定されます。ステータスが 「未開始」または「開始済み」のタスクの登録を変更できます。

次の場合に、通知の登録または登録解除を選択できます。

- タスクが開始日までに開始されない場合
- タスクが期日までに完了しない場合
- タスクのステータスが変わった場合 (開始済み、完了、またはキャンセル済み)
- タスクの所有者が変わった場合
- ユーザー・コメントがタスクに追加された場合

注:

- 通知はタスク所有者に送信され、そのコピーがすべての利害関係者に送信されます。
- 受信者は、タスクのステータスや所有者を変更したり、ユーザー・コメントを追加したりすると、関連する通知を受信できなくなります。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 通知の登録を変更するタスクを選択し、読み取りウィンドウで「通知オプション」タブをクリックします。
- 受信する通知のチェック・ボックスをオンにし、受信しない通知のチェック・ボ ックスをオフにします。
- 4. 「保存」をクリックします。

## アドホック・タスクを作成する

アドホック・タスクを作成し、指定した受信者のタスク受信トレイにそのタスクを 送信できます。

アドホック・タスクを作成するとき、そのアドホック・タスクにデッドラインを追 加できます。また、潜在所有者や利害関係者は、タスク受信トレイのタスクを更新 することにより、デッドラインを後で追加することもできます。

次の場合にタスク所有者が E メールを受信するように、通知オプションを設定できます。

- アドホック・タスクが期日までに完了しない場合
- アドホック・タスクが開始日までに開始されない場合

注:利害関係者にもこれらの E メールのコピーが送られます。

また、タスク所有者やすべての利害関係者に対して、次の場合に E メールを受信す るための通知オプションを設定できます。

- アドホック・タスクのステータスが変わった場合 (開始済み、完了、またはキャンセル済み)
- アドホック・タスクの所有者が変わった場合
- アドホック・タスクにコメントが追加された場合

注: 潜在所有者や利害関係者は、タスク受信トレイのタスクを更新することにより、 特定の通知の受信登録を解除できます。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. タスクのドロップダウン・リストから「タスクの新規作成」 (i) を選択しま す。
- 3. 読み取りウィンドウで「受信者を追加/削除」をクリックします。

「受信者の選択」ページが表示されます。

- 4. 潜在所有者および利害関係者として追加する、目的のユーザー、グループ、役 割、および配布リストを選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし、ユーザー、グループ、役割、または配布リストの横にあるチェック・ボックスをオンにします。

ヒント: ユーザー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示 する」をクリックします。

- エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
- 追加するエントリーの名前を入力するには、「タイプ」をクリックし、以下の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリーの間はセミコロン (;) で区切ります。 ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザー名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

5. 「潜在所有者」または「利害関係者」の矢印ボタンをクリックして「選択され たエントリー」リストを更新して、「**OK**」をクリックします。

ヒント: 「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての 項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

- 6. 「**OK**」をクリックします。
- 7. 「件名」ボックスに、タスクの件名を入力します。
- 8. 必要に応じて、タスクの完了デッドラインを「期日」ボックスに追加します。
- 9. 必要に応じて、タスクの開始デッドラインを「開始期限」ボックスに追加しま す。
- 10. 優先度を「優先度」リストから選択します。
- 11. 「メッセージ」ボックスに、テキストを直接入力します。
- 12. リンクを追加するには、「リンクを追加」をクリックし、使用するエントリー を選択します。矢印のボタンをクリックして「選択されたエントリー」のリス トを更新し、「OK」をクリックします。

ヒント:リンクを削除するには、リンクを選択して「リンクを削除」をクリックします。

- 通知オプションを設定する場合は、「詳細」をクリックします。それ以外の場合は、手順 16 に進みます。
- 14. 必要に応じて、タスクの作成およびデッドラインの通知オプションを選択しま す。
  - 開始日までに開始されない場合に通知を送信
  - 期日までに完了しない場合に通知を送信
- 15. 必要に応じて、承認要求変更時の通知オプションを選択します。
  - 開始済み
  - ・ コメント
  - 所有者変更済み
  - 完了
  - キャンセル済み
- 16. 「保存」をクリックします。

## 承認要求とアドホック・タスクに対して実行できる操作

受信者タイプに応じて、承認要求またはアドホック・タスクに対して実行できる操 作が異なります。

次の表に、各受信者タイプで実行できる操作を要約します。

表 77. 受信者のタイプ別の承認要求およびアドホック操作

操作	潜在所有者	所有者	利害関係者
タスクの所有権の要 求	X		
タスクの受信者の変 更	X	Х	Х
タスクの所有権の取 り消し		Х	
タスクのデッドライ ンの設定	X	Х	Х
タスクの優先度の変 更	X	Х	Х
タスクへのコメント の追加	X	Х	Х
タスクの開始または 停止		X	
タスクの完了		Х	
タスクのキャンセル		Х	Х

### タスクの要求

要求されていないタスクの潜在所有者は、そのタスクを要求できます。この場合、 タスクはその潜在所有者が所有します。

タスクの潜在所有者が1人しかいない場合は、その潜在所有者が自動的にタスク所 有者になります。この場合、タスクを要求する必要はありません。

### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 要求するタスクを選択し、読み取りウィンドウで「自分を所有者にする」をクリ ックします。

### タスクの受信者の変更

タスク受信者は、タスクの現在の所有者を変更できます。

さらに、タスクの潜在所有者や利害関係者を追加または削除できます。その場合、 タスクのステータスが「未開始」または「開始済み」でなければなりません。

注: タスクの所有者は、タスクの所有権を取り消すことができます 399 ページの 『タスクの所有権の取り消し』。

## 現在の所有者を変更する

現在の所有者を変更できます。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 現在の所有者を変更するタスクを選択し、読み取りウィンドウで「所有者を変 更」をクリックします。

「ユーザーを選択」ページが表示されます。

- 3. ユーザーを選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし、目的のユーザーを選択します。
  - エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
- 4. 「**OK**」をクリックします。
- 5. 「保存」をクリックします。

## 潜在所有者および利害関係者を変更する

潜在所有者および利害関係者を変更できます。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 潜在所有者および利害関係者を変更するタスクを選択し、読み取りウィンドウで 「受信者を追加/削除」をクリックします。

「受信者の選択」ページが表示されます。

- 3. 目的のユーザー、グループ、役割、配布リストを選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし、ユーザー、グループ、役割、または配布リストの横にあるチェック・ボックスをオンにします。

ヒント: ユーザー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示 する」をクリックします。

- エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
- 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユーザ 一名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

4. 「潜在所有者」または「利害関係者」の矢印ボタンをクリックして「選択された エントリー」リストを更新して、「**OK**」をクリックします。

ヒント: 「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

- 5. 「**OK**」をクリックします。
- 6. 「保存」をクリックします。

### タスクの所有権の取り消し

タスクの所有者は、自分をタスク所有者から外すことができます

これにより、所有者が「未要求」に変わり、タスクのステータスが「未開始」に変わります。

#### 手順

1. タスク受信トレイを表示します。

2. 取り消すタスクを選択し、読み取りウィンドウで「自分を所有者から外す」をク リックします。

## タスクのデッドラインの設定

タスク受信者は、ステータスが「未開始」または「開始済み」の承認要求またはア ドホック・タスクの開始日や期日を追加できます。また、既存のデッドラインを変 更することもできます。

通知が設定され、タスクが期日までに開始または完了しない場合は、登録されているすべての潜在所有者および利害関係者に E メール通知が送信されます。通知の詳細については、 394 ページの『E メール通知に登録する』を参照してください。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. デッドラインを更新するタスクを選択します。
- 3. 必要に応じて、タスクの完了デッドラインを「期日」ボックスに追加します。
- 4. 必要に応じて、タスクの開始デッドラインを「開始期限」ボックスに追加しま す。
- 5. 「保存」をクリックします。

#### タスクの優先度の変更

タスクが作成されると、タスクの優先度が設定されます。タスク受信者は、ステー タスが「未開始」または「開始済み」のタスクの優先度を変更できます。 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 優先度を変更するタスクを選択し、読み取りウィンドウの「優先度」リストから 優先度を選択します。
- 3. 「保存」をクリックします。

### タスクへのコメントの追加

タスク受信者はタスクにコメントを追加できます。

タスクに追加したコメントの表示については、 394 ページの『コメントを表示す る』を参照してください。

### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- コメントを追加するタスクを選択し、読み取りウィンドウで「ディスカッション」タブをクリックします。



- 3. 「コメントを追加」 をクリックし、表示されたウィンドウにコメントを 入力して、「**OK**」をクリックします。
- 4. 「保存」をクリックします。

## タスクの開始または停止

開始されていないタスクの所有者は、そのタスクを開始できます。

タスクを開始すると、ステータスが「開始済み」に変わり、他のタスク受信者はそ のタスクの進行状況を確認できます。

潜在所有者も、要求されていないタスクを開始できます。この場合、その潜在所有 者がタスクの所有者になります。

すでに開始されているタスクを所有している場合は、そのタスクを停止できます。 タスクを停止すると、タスクのステータスが「未開始」に変わります。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 開始するタスクを選択し、読み取りウィンドウの「ステータス」ドロップダウン・リストから「タスクを開始」を選択します。

ヒント:開始されているタスクを停止するには、「ステータス」ドロップダウ ン・リストから「未開始」を選択します。

3. 「保存」をクリックします。

### タスクの完了

ステータスが「未開始」または「開始済み」のタスクの所有者は、要求されている 操作を実行することでタスクを完了できます。 タスク・タイプに応じて、要求される操作が異なります。アドホック・タスクの場 合は、タスクを完了として設定する必要があります。

承認要求タスクの場合は、タスク作成者のタスクの設定方法に応じて操作が決まり ます。次のいずれかの操作を実行する必要があります。

• 要求を承認または拒否する

このタイプの承認要求の場合、タスク受信トレイから要求を承認または拒否して タスクを完了する必要があります。

タスクの設定方法によっては、タスクの完了に伴って別の操作が実行される場合 があります。例えば、レポート配布の要求を承認すると、タスクの完了時にレポ ートを自動的に配布できます。要求を拒否した場合、実行される操作はありませ ん。

• 承認して実行する残りのタスクを指定する

このタイプの承認要求にはタスクの完了後に実行されるようにスケジュールされ ているタスクが1つ以上含まれています。承認して実行するタスクを選択する 必要があります。

#### アドホック・タスクを完了する

アドホック・タスクを完了するための手順は次のとおりです。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 完了するタスクを選択し、「完了にする」をクリックします。

タスクのステータスが「完了」に変わります。

#### 要求を承認または拒否する

要求を承認または拒否する手順は次のとおりです。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 完了するタスクを選択し、読み取りウィンドウで詳細を確認します。
- 3. 必要に応じて、承認または拒否の決定に関するコメントを「コメント」ボックス に追加します。
- 4. 「承認」または「拒否」をクリックして、タスクを完了します。

注:「承認」および「拒否」はデフォルトのボタン名です。タスクを作成したユ ーザーが、デフォルトとは異なる独自のボタン名を使用している場合がありま す。

タスクのステータスが「完了」に変わります。

#### 承認して実行する残りのタスクを指定する

承認して実行する残りのタスクを指定できます。

手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 完了するタスクを選択し、読み取りウィンドウで詳細を確認します。
- 3. 承認する残りのタスクを選択し、「送信」をクリックします。

注: 「送信」はデフォルトのボタン名です。タスクを作成したユーザーが、デフ ォルトとは異なる独自のボタン名を使用している場合があります。

タスクのステータスが「完了」に変わります。

#### タスクのキャンセル

タスク所有者または利害関係者は、ステータスが「未開始」または「開始済み」の 承認要求またはアドホック・タスクをキャンセルできます。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- キャンセルするタスクを選択し、読み取りウィンドウで「キャンセル済みにする」をクリックします。

タスクのステータスが「キャンセル済み」に変わります。

## 通知要求

通知要求を作成する際に、受信者が要求を確認するオプションを指定できます。確 認応答のデッドラインを指定することもできます。

通知要求には、さまざまな受信者を設定できます。

- 要求が送信されるユーザー、グループ、役割、および配布リスト(「宛先」リスト受信者)
- 要求のコピーが送信される利害関係者 (「CC」リスト受信者)

通知要求のステータスは、次のいずれかです。

- 未読 受信者は要をまだ開封していない
- 既読 受信者は要求をすでに開封している
- 認知済み 「宛先」リストに含まれる受信者は要求をすでに確認している

通知は IBM Cognos Event Studio でも作成できます。詳細については、「*Event Studio* ユーザー・ガイド」を参照してください。

#### 確認

通知要求の作成時に、「宛先」リストに含まれる各受信者が確認応答をするように 要求できます。

注:利害関係者 (「CC」リストの受信者) には、通知要求を確認するオプションがありません。

## デッドライン

通知要求の作成時に、通知要求を確認するデッドラインを指定できます。「宛先」 リストに記載されている受信者のうち、デッドライン日付までに通知要求への確認 を行わない各人に E メールを送信するように指定することもできます。デッドライ ン日付になると、「宛先」リストに記載されている受信者の一部が通知要求への確 認をしていないことを知らせる別の E メールが、「CC」リストに記載されている 利害関係者に送信されます。

ヒント:利害関係者は、E メールまたは監査テーブルを調べることにより、通知要求を確認した受信者を確認できます。

「宛先」リストのすべての受信者が通知要求を確認した場合、デッドラインはキャ ンセルされます。

### 通知要求の作成

指定した受信者の受信トレイにイベントに関する保護された通知を送信するには、 エージェントに通知要求を追加します。

通知要求の確認を要求したり、確認のデッドラインを追加したりすることができま す。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. タスクのドロップダウン・リストから「通知の新規作成」
- 3. 読み取りウィンドウで「受信者を追加/削除」をクリックします。

「受信者の選択」ページが表示されます。

- 4. 受信者として追加する、目的のユーザー、グループ、役割、および配布リスト を選択します。
  - エントリーのリストから選択するには、適切なネームスペースをクリックし、ユーザー、グループ、役割、または配布リストの横にあるチェック・ボックスをオンにします。

ヒント: ユーザー・エントリーを表示するには、「リストにユーザーを表示する」をクリックします。

- エントリーを検索するには、「検索」をクリックし、「検索文字列」ボック スに検索語句を入力します。検索オプションを指定するには、「編集」をク リックします。目的のエントリーを検索してクリックします。
- 追加するエントリーの名前を入力するには、「名前を入力」をクリックし、 次の形式でグループ、役割、またはユーザーの名前を入力します。エントリ ーの間は半角のセミコロン (;) で区切ります

ネームスペース/グループ名;ネームスペース/役割名;ネームスペース/ユー ザー名;

次に例を示します。

Cognos/作成者;LDAP/S. カーター;

5. 「宛先」または「**CC**」の矢印ボタンをクリックして「選択されたエントリー」 リストを更新して、「**OK**」をクリックします。

ヒント: 「選択されたエントリー」リストからエントリーを削除するには、削除するエントリーを選択して「削除」をクリックします。リスト内のすべての 項目を選択するには、そのリストのチェック・ボックスを選択します。

- 6. 「**OK**」をクリックします。
- 7. 「件名」ボックスに、通知要求の件名を入力します。
- 8. 「メッセージ」ボックスに、テキストを直接入力します。
- リンクを追加するには、「リンクを追加」をクリックし、使用するエントリー を選択します。矢印のボタンをクリックして「選択されたエントリー」のリス トを更新し、「OK」をクリックします。

ヒント: リンクを削除するには、リンクを選択して「リンクを削除」をクリッ クします。

- 10. 通知オプションを設定する場合は、「詳細」をクリックします。それ以外の場合は、手順 13 に進みます。
- 11. 「宛先」リスト上の各受信者に確認を要求するには、「確認を要求」ボックスを選択します。
- 12. デッドラインの日付までに要求を確認していない受信者に E メール通知を送 信するには、「この日付までに確認済みにならない場合に通知を送信」ボック スをオンにし、その日付を選択します。
- 13. 「保存」をクリックします。

### 通知要求の開封と確認

タスク受信トレイにある新規の通知要求のステータスは「未読」です。

このオプションが使用可能になっている場合、通知要求を読み取り、それを確認で きます。

#### 手順

- 1. タスク受信トレイを表示します。
- 2. 開封する未読の通知要求を選択し、読み取りウィンドウで詳細を確認します。

通知要求のステータスが「既読」に変わります。

3. 「宛先」リストに自分のユーザー名が表示され、確認が要求されている場合は、 「認知」をクリックします。

通知要求のステータスが「認知済み」に変わります。

注:通知要求の受信者の場合は、「宛先」リストに自分のユーザー名が表示され ます。要求のコピーが送信される利害関係者の場合は、「**CC**」リストに自分の ユーザー名が表示されます。通知要求に対してデッドラインが設定されている場 合は、デッドラインが「デッドライン」ボックスに表示されます。

## タスクのアーカイブ

アーカイブにより、受信トレイから不要なタスクを削除できます。

タスクをアーカイブしても、そのタスクは IBM Cognos Analytics 内でアクティブ なままで、他のタスク受信者はそのタスクを使用して引き続き作業できます。アー カイブされたタスクに関連付けられている通知もアクティブなままです。

アーカイブから削除されたタスクもアクティブなままですが、そのタスクは表示で きなくなります。

#### 手順

1. タスク受信トレイを表示します。

 アーカイブするタスクを選択し、「移動先」ドロップダウン・リストから「アー カイブ」 をクリックします。

## アーカイブしたタスクの表示

アーカイブしたタスクのリストを表示できます。

#### 手順

タスク受信トレイを表示し、「アーカイブ」タブをクリックします。

#### 次のタスク

タスクを選択すると、タスクの詳細を表示できます。タスクの詳細は、読み取りウ ィンドウに表示されます。タスクにレポートなどの添付ファイルが含まれる場合 は、そのファイルをダブルクリックして表示できます。

#### ヒント:

- 受信日の代わりにタスクの期日を表示するには、「受信日を表示」ドロップダウン・リストから「期日を表示」を選択します。
- タスク受信トレイに戻るには、「受信トレイ」タブをクリックします。
- 不要なタスクを削除するには、削除するタスクを選択し、「削除」
  をクリックします。

# 第26章 ドリルスルー・アクセス

ドリルスルー・アプリケーションは、リンクされたレポートのネットワークで、ユ ーザーがコンテキストや焦点を保持したままナビゲートして、情報を閲覧および分 析できます。

ドリルスルー・アクセスは、単一のレポートよりも大規模なアプリケーションの構築に役立ちます。

一例として、収益を示す Analysis Studio レポートがあり、その予定収益と実績収 益の詳細を示す Reporting レポートにドリルスルーできるようにすることが考えら れます。

別の例として、小売業者別プロモーション上位 10 件を表示する Analysis Studio レポートがあり、そのプロモーションの計画収入を示す Reporting レポートにドリ ルスルーできるようにすることも考えられます。

ドリルスルー・アクセスは、ソース・オブジェクトからターゲット・オブジェクト (通常、レポート) に情報を渡すことで機能します。ソース・レポートからターゲッ トに渡すデータを定義する方法として、ソース・レポートの選択コンテキストの情 報とターゲットのコンテンツをシステムで一致させる方法 (動的ドリルスルー) と、 ターゲット内でパラメーターを定義する方法 (パラメーターを使用したドリルスル ー) の 2 つがあります。ソースのドリルスルー・アクセスは、パッケージ・レベル またはレポート・レベルで定義します。パッケージ内で定義する場合、ドリルスル ー・アクセスを使用可能にするデータ範囲をドリルスルー定義で指定します。レポ ート内で定義する場合、レポート・アイテムにドリルスルー・アクセスを定義しま す。

#### 確認事項

ドリルスルー・リンクを有効にするには、次の点を把握しておく必要があります。

- 現在または将来のソース・レポートはどのようなものか。
- 現在または将来のターゲット・レポートはどのようなものか。
- ソース・レポートのドリルスルー・リンクを使用するユーザーが、ターゲット・レポートを表示または実行するための適切な権限を持っているか。
- 2 つのレポートのデータはどのように関連するか。

基になるデータに応じて、ドリルスルー定義を作成する場合 (動的ドリルスルー) と、ターゲット・レポートまたはターゲット・パッケージで定義されたパラメー ターにソース・メタデータをマッピングする場合 (パラメーターを使用したドリ ルスルー) があります。

• ターゲット・レポートを実行するのか、開くのか

通常、ドリルスルー・アクセスのターゲットは保存されているレポート定義にな ります。レポートは Reporting、PowerPlay Studio、Query Studio、または Analysis Studio で作成されます。PowerCube を含むパッケージをドリルスル ー・アクセスのターゲットにすることも可能です。この場合、PowerCube のデ フォルトの表示が作成されます。

ターゲットを実行する場合に、どのような形式でどのようなフィルターを使用して実行するか。

要求時にターゲット・レポートを実行しないようにする場合は、保存された出力 のブックマークにリンクすることができます。

ソースとターゲット

ソースとターゲットの組み合わせは多様です。例えば、次のようにドリルスルーで きます。

- データ・ソース・タイプが異なるさまざまなパッケージで作成されたレポート 間。例えば、キューブに対する分析から、リレーショナル・データ・ソースに対 する詳細レポートにドリルスルーできます。パッケージでのドリルスルー・アク セスの作成について詳しくは、416ページの『パッケージ内のドリルスルー・ アクセスの設定』を参照してください。
- Reporting を使用した、既存のレポートから別のレポートへのドリルスルー。レポートでのドリルスルー・アクセスの作成について詳しくは、 425 ページの 『レポートでのドリルスルー・アクセスの設定』 を参照してください。
- Reporting、Query Studio、PowerPlay Studio、Analysis Studio で作成された IBM Cognos Viewer レポート間のドリルスルー。
- Series 7 PowerPlay Web キューブから IBM Cognos Analytics レポートへのド リルスルー。

## ドリルスルーの概念の理解

ドリルスルー・アクセスを設定する前に、ドリルスルーに関する主な概念を理解し ておく必要があります。これらの概念を知ることで、エラーを防ぎ、レポート利用 者ができる限り効率的にドリルスルーを行うことができます。

### ドリルスルー・パス

ドリルスルー・パスは、ソース・レポート内に作成することも、ドリルスルー定義 を使用して作成することもできます。ドリルスルー・パスとは、あるレポートから 別のレポートに移動するときに使用されるパスの定義のことで、レポート間のデー タ値の渡し方も定義されています。

「ドリルスルー定義」を使用すると、ソース・パッケージ内の任意のレポートから 他のパッケージ内の任意のターゲット・レポートへのドリルスルー・パスを作成で きます。このタイプのドリルスルー定義はソース・パッケージに保存されます。

ターゲット・レポートにパラメーターが含まれている場合は、ドリルスルー・パス でターゲット・パラメーターを正しいメタデータにマッピングする必要がありま す。これにより、ソース・レポートの値が適切なパラメーター値に渡され、ターゲ ット・レポートが正しくフィルターにかけられるようになります。パラメーターを マッピングしていない場合、ターゲット・レポートの実行時にユーザーに対して値 の入力を求めるプロンプトが表示される可能性があります。 レポート・ベースのドリルスルー・パスとは、ソース・レポートに作成および保存 されているパスのことです。このようなドリルスルー・パスのタイプは、「作成さ れたドリルスルー」とも呼ばれます。このパスはソース・レポートの特定のデータ 列、グラフ、またはクロス集計と関連付けられており、ユーザーがレポートでこれ らの領域を選択した場合にのみ使用できます。作成されたドリルスルー定義が使用 可能な場合、ソース・レポートの実行時にハイパーリンクが表示されます。

レポート・ベースのドリルスルーは、レポート作成するソース・レポートと任意の ターゲット・レポート間でのみ可能です。このタイプのドリルスルー・アクセス は、ソース・レポート内からデータ・アイテムの値やパラメーター結果をターゲッ ト・レポートに渡す場合、レポート式の結果をターゲット・レポートに渡す場合、 ドリルスルー定義の一部として URL リンクを使う場合に利用します。

## 選択コンテキスト

選択コンテキストは、ユーザーがソースで選択した値の構造を表すものです。

IBM Cognos Analysis Studio では、この中にコンテキスト領域が含まれます。パ ッケージ・ドリルスルー定義が使用された場合、マッピングされるパラメーター (パラメーターを使用したドリルスルー)の値の指定や、適切なデータ・アイテムと 値のマッピングのために選択コンテキストが使用されます。

ターゲット・オブジェクトをブックマークの位置で開くように、ドリルスルー・リ ンクを定義することも可能です。このブックマークのコンテンツも選択コンテキス トで指定されることがあります。

ドリルスルー・アクセスは、IBM Cognos Analytics Studio/Authoring ツールのほ とんどの組み合わせで設定できます。各 Studio/Authoring ツールは、対象ユーザ ーのスキルや目的に合わせて最適化されており、対象データ・ソース・タイプに合 わせて最適化されているツールもあります。そのため、異なる Studio/Authoring ツールで作成されたオブジェクト間でドリルスルーを行う場合、各ツールで選択コ ンテキストがどのように管理されているか、また、データ・ソースの一致状況につ いて考慮する必要があります。テスト時またはデバッグ時にドリルスルー・アシス タントを使用すると、ソース値が異なるコンテキストにおいてどのようにマッピン グされるかを確認できます。

## さまざまなレポート形式へのドリルスルー

ドリルスルー定義の設定によって、レポート結果の表示形式が決まります。

例えば、IBM Cognos Viewer に HTML Web ページとしてレポートが表示される 場合もあれば、IBM Cognos Query Studio、IBM Cognos PowerPlay Studio、ま たは IBM Cognos Analysis Studio でレポートが開かれる場合もあります。ユーザ ーが PowerPlay Studio を使用していれば、PowerCube のデフォルトの表示も見 ることができます。

レポートは HTML ページ、PDF、XML、CSV、または Microsoft Excel のスプレ ッドシート・ソフトウェアの形式で開くことができます。ドリルスルー・パスを定 義する際に、出力形式を選択することができます。これは、ターゲットのレポート がオンラインによる表示以外の方法で使用されることが予測される場合に便利で す。例えば、レポートが印刷される場合は PDF で、Excel にエクスポートしてデー タが処理される場合は Excel や CSV の形式で出力します。

レポートを実行する、またはレポートを区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシート (XLS)、または XML 出力形式で 実行するターゲットにドリルするには、ユーザーは特定の形式への出力生成機能が 必要です。

注: PDF のドリルスルーは、Adobe PDF プラグインを使用する Internet Explorer でのみサポートされています。

Analysis Studio、PowerPlay Studio、または Query Studio で作成したレポートに ドリルスルー・パスを定義した場合、レポート利用者は IBM Cognos Viewer では なく、作成に使用された Studio/Authoring ツールで開くことができます。これ は、レポートのユーザーがドリルスルー・ターゲット・レポートを元にして分析や クエリー・セッションを作成し、他の情報を探すことが予測される場合に便利で す。

例えば、アプリケーションに上位レベル・データのダッシュボード・スタイルのレ ポートがある場合、Analysis Studio へのドリルスルー・リンクを定義して、興味の あるアイテムを調査できます。Analysis Studio の表示は、印刷用の PDF レポート にドリルスルーできます。

注: IBM Cognos Analytics - Reporting では、データ結果が表示されません。 関連概念:

386 ページの『レポートの形式』

IBM Cognos Analytics では、ブラウザーでレポートを表示することや、ユーザー 権限に応じて、他のアプリケーションにインポート可能な形式でレポートを生成す ることができます。管理者は、レポートを区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシート (XLS)、または XML 形式で実行 するために必要な機能に対するアクセスを制限できます。

## パッケージ間のドリルスルー

パッケージ間でドリルスルー・アクセスを設定できます。

2 つのパッケージは異なるタイプのデータ・ソースに基づくこともできますが、い くつかの制限があります。次の表に、ドリルスルー・アクセスをサポートするデー タ・ソース・マッピングを示します。

ソース・データ・ソース	ターゲット・データ・ソース
OLAP	OLAP
	注:OLAP から OLAP へのドリルスルーは、 データ・ソースのタイプが同じ場合にのみサ ポートされています。例えば、SSAS から SSAS などです。
OLAP	ディメンションを使用してモデル化されたリ
	レーショナル

表 78. ドリルスルー・アクセスをサポートするデータ・ソース・マッピング

表 78. ドリルスルー・アクセスをサポートするデータ・ソース・マッピング (続き)

ソース・データ・ソース	ターゲット・データ・ソース
OLAP	リレーショナル・データ
	注:詳細については、 413 ページの『ビジネ ス・キー』を参照してください。
ディメンションを使用してモデル化されたリ	ディメンションを使用してモデル化されたリ
レーショナル	レーショナル
ディメンションを使用してモデル化されたリ	リレーショナル
レーショナル	
リレーショナル	リレーショナル

## ブックマークによる参照

ドリルスルーをしたとき、一部に例外もありますが、通常は渡した値が、レポート にフィルターをかけるのに使用されます。

IBM Cognos Analytics では、ユーザーが URL パラメーターに基づいてレポート の関連する部分を表示できるように、保存された PDF レポートや HTML レポー ト内でのブックマークがサポートされています。

例えば、リソースを考慮して、毎日または 1 週間に 1 回、業務時間外に実行する 大規模な在庫レポートがあるとします。このレポートでは詳細情報を確認できるた め、ユーザーがこのレポートをターゲットとして表示する必要があるとします。た だし、この大規模なレポートを実行するのではなく、保存されている出力を表示す ればよいようにしたいと考えています。この「操作」オプションとブックマークの 設定を使用すれば、ユーザーは別のソース位置から製品に基づいてドリルスルー し、保存されているレポートを開いて詳細情報が必要な製品のページを表示できま す。

ソース・レポートのブックマークがドリルスルー定義に使用されている場合は、ブ ックマークによって URL パラメーターの値が提供されます。レポートのユーザー がこの定義を使用してドリルスルーを行うと、ターゲット・レポートの関連する部 分が表示されます。

注: PDF のドリルスルーは、Adobe PDF プラグインを使用する Internet Explorer でのみサポートされています。

ブックマークによる参照は、PDF や HTML として出力された、ブックマーク・オ ブジェクトを含む実行済みレポートに限られます。

## メンバーと値

ディメンションを使用してモデル化されたデータでは、キューブに保管されている か、ディメンションを使用してモデル化されたリレーショナル (Dimensionally Modeled Relational:DMR) データに保管されているかにかかわらず、データがディ メンションを使用して整理されています。これらのディメンションには階層が含ま れ、階層にはレベルが含まれます。また、レベルにはメンバーが含まれます。 ディメンションの例としては、地理的な場所をあげることができます。"場所"ディメンションには、"組織構造による場所"と"地理的な場所"の2つの階層が含まれることが考えられます。これらの階層はいずれも、"国"や"地域"および"市"などのレベルを持つことができます。

メンバーとは、レベル内のインスタンスです。例えば、"ニューヨーク"や"ロンドン" は"市"レベルのメンバーです。メンバーは複数のプロパティーを持つことができま す。例えば、"人口"、"緯度"、"経度"などです。メンバーは内部では、メンバー内で 一意の名前 (Member Unique Name:MUN)で識別されます。MUN がどのように決 定されるかは、キューブのベンダーによって異なります。

リレーショナル・データ・モデルは、データ・サブジェクト ("従業員"など) で構成 されます。またデータ・サブジェクトは、データ・アイテム ("名前"や"内線番号"な ど) で構成されます。これらのデータ・アイテムは値 ("Peter Smith"など) を持ちま す。

IBM Cognos Analytics では、次のドリルスルーが可能です。

- ディメンション (メンバー) からディメンション (メンバー)
- ディメンション (メンバー) からリレーショナル (データ・アイテム値)
- リレーショナル (データ・アイテム値) からリレーショナル (データ・アイテム)

ターゲット・パラメーターがメンバーの場合は、ソースはメンバーであることが必要です。通常、ソースとターゲットには、一致するディメンションからのメンバーを使用する必要があります。ただし、データによってサポートされている場合には、ソース・メタデータ・アイテムの別のプロパティーを使用してマッピングを定義することもできます。

ターゲット・パラメーターが値の場合は、ソースには値とメンバーのどちらも使用 できます。ソースがディメンション・メンバーの場合は、ドリルスルー定義におい て、レベルまたはディメンションがターゲットのデータ・アイテムに正しくマップ されていることを確認する必要があります。通常、メンバーの起源であるビジネ ス・キーは、リレーショナル・ターゲットの値(ほとんどの場合はビジネス・キー) と一致する必要があります。ただし、データによってサポートされている場合に は、ソース・メタデータ・アイテムのキャプションからマッピングを定義すること もできます。

### 一致するディメンション

複数のディメンション・データ・ソースを使用して作業する場合、ディメンション の中に、構造が同じものと、構造の異なるものとがあるかもしれません。

ディメンションを異なる構造で構成できるのは、データ・ソースが異なる目的で使 用される場合があるからです。

例えば、"顧客"ディメンションが"収益"データ・ストアにはあり、"在庫"データ・ス トアにはないことが考えられます。ただし、"製品"ディメンションと"時刻"ディメン ションは両方のデータ・ストアにあります。

ディメンションが複数のデータ・ストアにあり、次のすべてが同じである場合、デ ィメンションの構造が一致しているといいます。

- 階層名
- レベル名
- レベルの順序
- 内部キー

異なるディメンションのデータ・ストア間のドリルスルーを実行できるのは、ディ メンションが一致している場合や、ディメンションのデータ・ストアが同じベンダ ー・タイプのものである場合 (ソースとターゲットが IBM Cognos PowerCube で ある場合など)のみです。例えば、"収益"と"在庫"を表す 2 つのデータ・ストアに" 製品"ディメンションと"時間"ディメンションが存在する場合、それぞれのデータ・ ストアで"製品"ディメンションと"時間"ディメンションの定義を変えることができま す。ただし、"製品"ディメンションと"時間"ディメンションの間でドリルスルーを行 うには、各データ・ストアでこれらのディメンションの構造を同じにする必要があ ります。

ディメンションが一致しているかどうかわからない場合は、データ・モデルの作成 者に問い合わせ、ドリルスルーで意味のある結果が表示されることを確認してくだ さい。

IBM Cognos Analytics では、SAP BW データ・ソース用に IBM Cognos Framework Manager によって生成された、一致するディメンションがサポートさ れていません。

ディメンションを使用してモデル化されたリレーショナル・データ・ ソース

PowerCube またはその他の DMR モデルと一致する値を持つビジネス・キーが各 レベルに含まれていることを確認します。また、「ルート・ビジネス・キー」プロ パティーが設定されていて、階層の最初のレベルのビジネス・キーが使用されてい ることも確認する必要があります。これにより、このディメンションのメンバーを 使用してドリルスルーを試みるときに、一致する MUN (メンバー内で一意の名前) が確実に存在することになります。

## ビジネス・キー

メンバーからリレーショナル値へのドリルスルー・アクセスを定義すると、デフォ ルトでは、そのメンバーのビジネス・キーが渡されます。

つまり、リレーショナル・ターゲット・パラメーターは、一致する値を持つデー タ・アイテム (ほとんどの場合はビジネス・キー・データ・アイテム) を使用して設 定されている必要があります。ソース・メタデータ・アイテムのキャプションを渡 すこともできます。

例えば従業員は、名前の同じ従業員がいることも考えられるため、通常従業員番号 を使用して一意に識別されます。ディメンション・メンバーからリレーショナル・ データ・アイテムにドリルスルーする場合は、供される値がビジネス・キーです。 このため、ターゲット・レポートにおけるパラメーターは、ビジネス・キーの値を 受け付けるように定義する必要があります。提供されるビジネス・キーの値がどの ように定義されるかは、キューブのベンダーによって異なります。IBM Cognos PowerCube では、IBM Cognos Transformer でレベルに対して定義される「ソー ス」プロパティーがビジネス・キーの値になります。IBM Cognos Series 7 Transformer PowerCube では、キューブが作成される前にドリルスルー・フラグが 有効になっていた場合にソース値が渡されます。それ以外の場合は、カテゴリー・ コードが使用されます。

IBM Cognos Analytics - Reporting では、roleValue('_businessKey',[Camping Equipment]) などの式を使用して、メンバー・ビジネス・キーに何を使用するかを 決めることができます。この式では、大文字と小文字が区別されます。

SSAS 2005 マルチパートのビジネス・キーは、ドリルスルー処理でサポートされて いません。

ヒント: 他のユーザーがドリルスルー・レポートを実行する際に、ユーザーへのプ ロンプトでビジネス・キーを要求しないようにしたい場合があります。Reporting では、画面にはユーザーになじみのあるテキストを表示し、実際のフィルターには ビジネス・キーを使用するプロンプト・ページを作成できます。IBM Cognos Framework Manager のモデル作成者は、「プロンプト情報」プロパティーの「表 示アイテム参照」オプションを設定して、プロンプトでデータ・アイテムが使用さ れるときにビジネス・キーを使用することもできます。

### 有効範囲

範囲は、「ドリルスルー定義」を使用して作成したドリルスルー定義(パッケー ジ・ドリルスルー定義)に特有の設定です。設定した範囲では、ソース・レポート 内のアイテムに基づいてターゲット・レポートをいつユーザーに表示するかを定義 します。

通常は、ドリルスルー・パスから渡されるパラメーターに対し、一致するドリルス ルー・パスの範囲を定義します。例えば、従業員リストが表示されるターゲット・ レポートの場合、ユーザーがソース・レポートで従業員名を表示しているときにだ け、使用可能なドリルスルーの選択肢としてレポートが表示されればよいという場 合が一般的です。ソース・レポートに従業員名がなく、ドリルスルー定義で範囲に 従業員名が設定されていた場合は、「移動」ページの使用可能なドリルスルー・タ ーゲット・レポートのリストに従業員レポートは表示されません。レポート内の数 値データまたはアイテムに範囲を設定できます。

レポート・ベースのドリルスルー・アクセスでは、ドリルスルー・パスが特定のレ ポート列に関連付けられているため、列が範囲の役割を果たします。

### マッピングされるパラメーター

ドリルスルー・ターゲットには、既存のパラメーターが含まれている場合がありま す。また、ドリルスルー・リンクをより詳細に制御するため、ターゲットにパラメ ーターを追加することもできます。

通常、ドリルスルー・ターゲット内にあるすべてのパラメーターをソースのアイテ ムにマッピングします。

OLAP や DMR のメンバーであるソースのアイテムをターゲットのパラメーターに マップする場合は、ターゲット・パラメーターの要件を満たすように、関連するメ ンバーのプロパティーのセットから選択できます。ディメンション・ターゲットの 場合、ディメンション・ソース・アイテムには、メンバー内で一意の名前がデフォ ルトで使用されます。リレーショナル・ターゲットの場合、ディメンション・ソー ス・アイテムには、ビジネス・キーがデフォルトで使用されます。

例えば、マッピングに使用するソース・メンバーのプロパティーは、リレーショナ ル・ターゲットのパラメーターと一致するビジネス・キーではなく、メンバーのキ ャプションに変更することができます。ディメンション・ターゲットの場合は、特 定のプロパティー (ビジネス・キーや親内で一意の名前など)を受け入れるパラメー ターを定義して、そのターゲットを満たす適切なソース・プロパティーを渡すこと ができます。

注: 一致しないディメンション間のドリルスルーを定義する場合は、慎重にテストして、結果が予想どおりになることを確認してください。

パラメーター・マッピングを指定していない場合、デフォルトで、ドリルスルー・ リンクの使用時にターゲットで必須のパラメーターについてプロンプトが表示され ます。この動作をカスタマイズするには、「プロンプト・ページを表示」の設定を 使用します。

操作を「Dynamic フィルターを使用してレポートを実行」に設定すると、ソース・ レポートのコンテキストの名前が、ターゲット内のアイテム名と一致する場合に、 追加のフィルターが適用されます。この操作は、ターゲットにパラメーターが定義 されていない場合にも使用します。

パラメーターが適切にマッピングされていない場合は、空のレポート、間違った結 果、またはエラー・メッセージが表示される可能性があります。

データ構造が一致している場合も含め、ソースとターゲットが異なるパッケージに 属していると、ソースとターゲットに同じパラメーター名を格納することはできま せん。ソースとターゲットが同じパッケージに属している場合、制限はありませ ん。

必要な権限を持つユーザーであれば、ドリルスルー・アシスタントを使用して、特 定のドリルスルー・リンクでどのようなソース・パラメーターが渡され、どのよう なターゲット・パラメーターがマッピングされるのかを確認できます。

ドリルスルーにおいて、デフォルトの動作であるメンバーのキャプションを使用す るフィルターの代わりにメンバーのビジネス・キーを使用するフィルターを生成し たいという場合は、動的ドリルスルー・フィルターの動作を変更できます。詳細に ついては、*IBM Cognos*「管理およびセキュリティー・ガイド」の「ドリルスルー・ フィルターの動作の変更」を参照してください。

## PowerCube とリレーショナル・パッケージ間での日付のドリルス ルー

通常の方法の OLAP パッケージからリレーショナル・パッケージへのドリルスルー では、リレーショナル・データでビジネス・キーを使用してターゲット・レポート のパラメーターが設定されていることが必要ですが、日付に関してこれが適切に機 能しません。 OLAP データ・ソースでは、通常日付が「2012 年第 1 四半期」などのようなメン バーとして表示されるのに対し、リレーショナル・データ・ソースでは「2012 年 1 月 1 日から 2012 年 3 月 31 日」などのような範囲として表示されます。

PowerCube とリレーショナル・パッケージの間のドリルスルーのために、特別な機能が存在します。ターゲット・レポートのパラメーターは、必ず in_range を使用 して設定してください。パラメーターの型は、整数ではなく日時でなければなりません。

次に例を示します。

[gosales_goretailers].[Orders].[Order date] in_range ?Date?

また、ドリルスルー定義でパラメーターがディメンション・レベルでマッピングさ れており、PowerCube の日付レベルの設定が空白カテゴリーを消去する指定になっ ていないことを確認します。キューブを作成する前に、Transformer のモデルで空 白カテゴリーを消去するオプションが有効になっていると、日付に対するドリルス ルーに失敗する場合があります。この現象が発生するのは、範囲内に欠落値が存在 するためです。

## パッケージ内のドリルスルー・アクセスの設定

ドリルスルー定義は、ドリルスルー・アクセスのターゲットおよびターゲットを使 用可能にする条件 (範囲など)のほか、ターゲットの実行方法、開き方、およびフィ ルターの適用方法を定義するものです。

IBM Cognos Analytics では、ドリルスルー定義がソース・パッケージに関連付け られます。ドリルスルー定義で定義されたドリルスルー・パスは、関連付けられて いるソース・パッケージを基にしたすべてのレポートで使用できます。ターゲット は任意のターゲット・パッケージに基づいたものとすることができ、保存場所は問 いません。例えば、"GO データ・ウェアハウス (分析)"サンプル・パッケージで作 成されたすべてのレポート、または、このパッケージにリンクされているフォルダ ー内のすべてのレポートでは、このパッケージで作成されたすべてのドリルスルー 定義にアクセスできます。

注: パッケージではなくレポート内でドリルスルー定義を設定して特定のレポートに ドリルスルー・アクセスを定義したり、レポートをドリルスルー・ターゲットとし て利用できないようにレポートの設定を変更して、ドリルスルー・アクセスを制限 したりできます。

異なる Studio/Authoring ツールで作成されたレポート間や、異なるパッケージお よびデータ・ソースに基づくレポート間でドリルスルーを定義できます。

ターゲット・レポートは、ドリルスルー定義を作成し始める前に作成しておく必要 があります。ドリルスルーのターゲットにはレポート、分析、レポート・ビュー、 PowerCube パッケージ、クエリーを指定できます。

ドリルスルー定義は、ディメンションとリレーショナルの両方のパッケージをサポ ートします。

#### 始める前に

レポートを実行する、またはレポートを区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシート (XLS)、または XML 出力形式で 実行するターゲットにドリルするためには、特定の形式に対する出力生成機能が必 要です。

#### 手順

- 1. ドリルスルー・ターゲットを確認します。
  - ドリルスルー・ユーザーがターゲットにアクセスできることを確認します。
  - 必要に応じて、ターゲットに直接アクセスできないようにターゲットを非表示にします。
  - 必要に応じて、ターゲットに存在するパラメーターを確認します。

ドリルスルー定義が別のパッケージ内のオブジェクトにリンクしている場合 は、ソースおよびターゲットのオブジェクトで使用されているデータ型を考 慮する必要があります。ドリルスルーで渡されるデータの構造と値を確認し てください。また、動的ドリルスルーが正しく動作することの確認と、パラ メーターを定義した場合はシナリオに適したパラメーターが作成されている ことの確認を行います。

- 2. 「ドリルスルー定義」を起動します。
- 3. ドリルスルー定義を作成するパッケージにナビゲートします。
- 4. ツールバーの「ドリルスルー定義を新規作成」アイコンをクリックします。

ヒント:「ドリルスルー定義を新規作成」アイコンが表示されない場合は、パッケージのフォルダー内ではなく、パッケージ・レベルに移動していることを 確認してください。ドリルスルー定義はパッケージ・レベルに保存する必要が あります。

- 5. ドリルスルー定義の名前を入力します。
- 6. 必要であれば、説明と画面のヒントを入力し、「次へ」をクリックします。
- 7. 画面の指示に従います。
  - 必要であれば、ソース内のクエリー・アイテムまたは数値データに対して範囲を制限します。

ターゲットにパラメーターが含まれている場合は、ターゲット・レポートに マッピングされるパラメーターに対して範囲を設定する必要があります

• 任意のパッケージからターゲットを選択します。

PowerPlay ターゲットを使用できる場合は、ターゲットをレポートとして 設定するか、PowerCube として設定するかを選択する必要があります。

- 「次へ」をクリックします。
- 「操作」セクションで、ドリルスルー・リンクが実行されたときにターゲット・オブジェクトをどのように開くかを指定し、レポートの実行を選択した場合は、「形式」セクションで、レポートを実行する形式を指定します。

注: ユーザーは、ドリルスルー・リンクを使用するときに「操作」の設定を変 更できます。ターゲットでブックマークを使用する場合は、「最新のレポート を表示」操作を選択する必要があります。

「パラメーター値」テーブルで、ソースのメタデータを、ターゲット・レポートまたはオブジェクトに存在するパラメーターにどのようにマッピングするかを指定します。

例えば、OLAP データ・ソース間でドリルスルーする場合、メンバーどうしが マッピングされます。OLAP からリレーショナル・データ・ソースにドリルス ルーする場合、ソース値 (メンバー) がクエリー・アイテム名 (値) にマッピン グされます。

通常、ターゲット内に存在するすべてのパラメーターをソースのメタデータに マッピングする必要があります。パラメーターをマッピングしていない場合、 ドリルスルー・リンクの使用時にレポート・ユーザーに対して欠落値の入力を 求めるプロンプトが表示される可能性があります。

- 10. 「メタデータにマッピング」をクリックするか、「編集」ボタン 🖉 をクリ ックします。
  - 表示された画面で、ターゲット・パラメーターにマッピングするメタデータ をソースから選択します。
  - ソース・パッケージがディメンション・パッケージである場合は、ソース・ メタデータ・アイテムのどのプロパティーをマッピングで使用するかを選択 できます。デフォルトでは、ビジネス・キーはリレーショナル・ターゲット に使用され、メンバー内で一意の名前はディメンション・ターゲットに使用 されます。
  - リスト内の各パラメーターについて、この手順を繰り返します。
- 11. 「プロンプト・ページを表示」セクションで、プロンプト・ページの表示条件 を指定します。
  - 表示された画面で、ターゲット・パラメーターにマッピングするメタデータ をソースから選択します。
  - ソース・パッケージがディメンション・パッケージである場合は、ソース・ メタデータ・アイテムのどのプロパティーをマッピングで使用するかを選択 できます。デフォルトでは、ビジネス・キーはリレーショナル・ターゲット に使用され、メンバー内で一意の名前はディメンション・ターゲットに使用 されます。
  - リスト内の各パラメーターについて、この手順を繰り返します。

この操作を設定できるのは、ターゲット・レポートにパラメーターがあり、そ のターゲット・レポートが実行される場合のみです。例えばブックマーク参照 の場合など、操作を「最新のレポートを表示」に変更した場合、「プロンプ ト・ページを表示」プロパティーは無効になります。これは、以前に実行され たレポートが使用されるためです。レポートを Analysis Studio で直接開く場 合も、「プロンプト・ページを表示」プロパティーは無効になります。

プロンプト設定は、「レポートのプロパティー」、「値をプロンプトする」で 指定します。
- 12. 「終了」をクリックします。
- ソース・パッケージからレポートを実行し、ドリルスルー・リンクをテストします。

注: ドリルスルー定義は、ソースに関連付けられて保管されます。ターゲット に関連するエラーは、ドリルスルー・リンクを実行したときにのみ生成され、 ドリルスルー定義を保存したときには生成されません。

#### 関連概念:

386 ページの『レポートの形式』

IBM Cognos Analytics では、ブラウザーでレポートを表示することや、ユーザー 権限に応じて、他のアプリケーションにインポート可能な形式でレポートを生成す ることができます。管理者は、レポートを区切り文字で区切られているテキスト (CSV)、PDF、Microsoft Excel スプレッドシート (XLS)、または XML 形式で実行 するために必要な機能に対するアクセスを制限できます。

# 既存のドリルスルー定義の編集

既存のドリルスルー定義を編集できます。

## 手順

- 1. IBM Cognos Analytics の「ようこそ」ページで、「新規」 > 「その他」 > 「ドリルスルー定義」をクリックします。
- 2. パッケージ名をクリックして、ドリルスルー定義を表示します。
- 3. 変更するドリルスルー定義に関して、「操作」列で「プロパティーを設定」 アイコンをクリックします。

ヒント:ドリルスルー定義が見つからない場合は、パッケージのフォルダー内に 移動していないことを確認します。すべてのドリルスルー定義は、パッケージの ルート・レベルに格納されています。特定のドリルスルー定義が見つからない場 合は、適切な権限を持っていることを確認します。

- 4. 「ターゲット」タブをクリックします。
- 5. 必要な変更を加えて「OK」をクリックします。
- ソース・パッケージからレポートを実行し、ドリルスルー・リンクをテストします。

注: ドリルスルー定義は、ソースに関連付けられて保管されます。ターゲットに 関連するエラーは、ドリルスルー・リンクを実行したときにのみ生成され、ドリ ルスルー定義を保存したときには生成されません。

# ドリルスルー・レポートのパラメーター設定

ドリルスルー・アクセスをより詳細に制御するため、ターゲット・レポートにパラ メーターを定義できます。

#### ドリルスルー・レポートのパラメーターの設定

ドリルスルー・アクセスをより詳細に制御するため、ターゲット・レポートにパラ メーターを定義できます。

#### 手順

- 1. ターゲット・レポートを開きます。
- 2. レポートでドリルスルー・アクセスを受け入れるようにします。
  - 「データ」メニューの「ドリル動作」を選択します。
  - 「標準」タブで、「このレポートがドリルスルー・ターゲットのときに Dynamic フィルターを受け入れる」を選択し、「OK」をクリックします。
- ドリルスルー列になるパラメーター、またはレポートのフィルターとして使用するパラメーターを作成します(「データ」メニューの「フィルター」)。

例えば、"製品ライン"をドリルスルーする、またはフィルターにかける場合は、 次のようなパラメーターを作成します。

[Product line]=?prodline_p?

ヒント: ターゲット・レポートで複数の値、または値の範囲を受け入れるように するには、演算子 in または in_range を使用します。

- 4. 「使用方法」ボックスで、ドリルスルーの一環であるターゲット・パラメーター の値が渡されない場合の対処方法を指定します。
  - ユーザーがソース・レポートで値をクリックしなければならないようにする
     には、「必須」をクリックします。

ターゲット・パラメーターの値が渡されない場合、値を選択するプロンプト がユーザーに対して表示されます。

ユーザーがソース・レポートで値をクリックしなくてもよいようにするには、「オプション」をクリックします。

ユーザーに対して値の選択を求めるプロンプトが表示されないため、値にフ ィルターはかけられません。

パラメーターを使用しないように指定するには、「無効」をクリックします。

レポートでパラメーターが使用されないため、ドリルスルー定義でパラメー ターを使用できません。レポート・パラメーターの定義の詳細については、 「*Reporting* ユーザー・ガイド」を参照してください。

ヒント:別の用途でレポートにパラメーターが必要な場合、ドリルスルー定 義ではそのパラメーターを使用しないように指定することもできます(「パ ラメーター」テーブル、「方法」、「パラメーターを使用しない」)。

#### タスクの結果

プロンプト・ページやパラメーターがいつ表示されるかは、ドリルスルー定義で指 定します。

Query Studio でのドリルスルー・レポートのパラメーターの設定 ドリルスルー・アクセスをより詳細に制御するため、Query Studio でターゲット・ レポートにパラメーターを定義できます。

#### 手順

- 1. Query Studio でターゲット・レポートを開きます。
- 2. レポートがドリルスルー・アクセスを受け入れることを確認します。
  - メニューから「レポートを実行」、「詳細オプション」を選択します。
  - 「出力レポートでパッケージからのドリルスルーを有効化する」を選択し、「OK」をクリックします。
- ドリルスルー・パラメーターとして機能するフィルター、または、レポートに適用するフィルターを作成します。
  - フィルターをかける列を選択し、「フィルター」ボタンをクリックします。
  - 必要に応じて設定を変更し、「OK」をクリックします。

Analysis Studio でのドリルスルー・ターゲットのパラメーターの設定

ドリルスルー・ターゲット分析を作成し、ディメンションを「移動」パラメーター として設定することで、分析にターゲット・パラメーターを追加できます。

分析のドリルスルー定義を作成するときに、このパラメーターがターゲット・パラ メーターのリストに表示されます。

ディメンション内のドリルダウンとドリルスルーをサポートするには、ソースのメ タデータ内のディメンションをターゲット・ディメンションにマッピングします。 現在表示されているメンバーがフィルター値としてターゲットの分析に渡されま す。これは、ドリルスルー操作で使用されるすべてのクエリー、レポート、分析に 適用されます。特定のレベルからの直接のドリルスルーをサポートするには、ソー スのメタデータ内のレベルをターゲット・ディメンションにマッピングします。

分析ターゲットに複数のパラメーターを設定できます。ただし、Analysis Studio の 選択セット内のメンバーを渡すことはできません。

#### 手順

- Analysis Studio で、ドリルスルー分析用に設定されたパッケージを使用して、 クロス集計分析を作成します。
- 必要に応じて、プロンプトとするデータ・アイテムを行や列として追加できます。
- ターゲット・パラメーターとして設定するディメンションまたはレベルを「コン テキスト」領域に移動または追加します。

注: Analysis Studio の選択セット内のメンバーを渡すことはできません。

- 4. 「コンテキスト」領域にアイテムのリストを表示し、「"移動" パラメーターと して使用」をクリックします。
- 5. この分析をターゲット・レポートとして保存します。

これで、ソース・パッケージにドリルスルー定義を作成できるようになりました。

### タスクの結果

ドリルスルー定義を作成してクロス集計分析をターゲットとして使用する場合は、 分析の「移動」パラメーター・アイテムがドリルスルー・パラメーターとして表示 されます。

# ドリルスルー定義のデバッグ

IBM Cognos Analytics にはデバッグ機能が組み込まれており、ドリルスルー定義の問題を見つけて、ドリルスルー・エラーを修正するために使用できます。

このデバッグ機能は、ドリルスルー機能の動作、とりわけ種類の異なるデータ・ソ ースにまたがっているドリルスルー動作がどのようになっているかを理解するため にも役立ちます。この機能はドリルスルー・アシスタントとも呼ばれます。 PowerCube で作成され、IBM Cognos Analytics に移行されたドリルスルー定義も デバッグ可能です。

ターゲット・レポートにパラメーターが渡されていない場合は、ドリルスルー定義 のマッピングを調べて、ドリルスルーのシナリオに適切なデータ型でパラメーター が作成されていることを確認します。例えば、OLAP パッケージからリレーショナ ル・パッケージに基づいたターゲット・レポートへのドリルスルー定義を作成する 場合は、ターゲット・パラメーターを OLAP ビジネス・キーまたはメンバー・キャ プションと同じ値があるクエリー・アイテムに設定する必要があります。詳細につ いては、 411 ページの『メンバーと値』を参照してください。

不適切な値でターゲット・レポートにフィルターがかけられている場合、ソースか らターゲットにマッピングされている値を確認します。

ドリルスルー・アシスタントを使用するには所定の権限が必要です。ドリルスル ー・アシスタントからの情報は、ドリルスルーを実行したときに「移動」ページで 確認できます。ドリルスルー・アシスタントでは次の情報を参照できます。

#### 渡されたソース値

ソース値とは、ユーザーがターゲット・レポートまたはターゲット・オブジェクト にドリルスルーしたときに、ターゲット・レポートに渡すことができる選択コンテ キストからの値です。例えば、 Analysis Studio にあるソースからドリルスルーし た場合は、ドリルスルー操作をする前に選択した交点の値と、コンテキストの領域 の値が表示されます。

デバッグ・リストに表示される値は、ドリルスルー処理で変換されたソース・レポ ートの値です。

表示する値

このデータ・アイテムやメンバーを使用するときにユーザーに表示される値が表示されます。OLAP メンバーの場合は、メンバーのキャプションかラベルが表示されます。例えば、Telephone は Order Method ディメンションのメンバーです。

使用する値

データ・アイテムやメンバーを取得するときに IBM Cognos レポートおよび分析で使用される値が表示されます。OLAP メンバーの場合は、メンバー内で一意の名前 (MUN) が表示されます。例えば、[great_outdoors_company].[Order Method].[Order Method]->:[PC].[@MEMBER].[2] は、Order Method ディメンションの Telephone メンバーの MUN です。

# ターゲット・マッピングを表示

ターゲットでパラメーターを使用することを選択した場合、ターゲット・マッピン グには、ドリルスルー定義でマッピングされた各パラメーターの名前と、ソースか らパラメーターに渡される値が表示されます。

パラメーター名

ドリルスルー操作を実行したクエリー・アイテム、レベル、階層から情報を受け 取れるようドリルスルー定義でマッピングされている、有効なターゲット・パラ メーターのリストが表示されます。

有効なマッピングが存在するパラメーターとその名前のみが表示されます。例え ば、ターゲット・レポートに Product Type のパラメーターが含まれており、ド リルスルー定義でそのターゲット・パラメーターがソースの Product Type レベ ルのメタデータにマッピングされている場合、このターゲット・パラメーターは ソース・レポートの Product Type レベルでドリルスルーを実行しようとした場 合にのみ表示されます。Product Line レベルでドリルスルーしても、このター ゲット・パラメーターは表示されません。

ドリルスルー定義のターゲット・パラメーターが正しくマッピングされているこ とを確認する必要があります。パラメーターのマッピングが間違っていると、特 に一意ではないデータ値がある場合には、間違ったソース・メタデータから情報 を受け取る可能性があります。「ターゲット・マッピングを表示」リストにター ゲット・パラメーターがまったく表示されないか、予期したパラメーターが表示 されない場合は、ドリルスルー定義のパラメーター・マッピングを確認します。

表示する値

データ・アイテムやメンバーを使用するときにユーザーに表示される値が表示さ れます。OLAP メンバーの場合は、メンバーのキャプションかラベルが表示され ます。例えば、Telephone は Order Method ディメンションのメンバーです。

使用する値

データ・アイテムの値やメンバーをターゲット・パラメーターに渡すときにドリ ルスルー定義で使用される変換済みの値が表示されます。

リレーショナル・ターゲット・パラメーターに OLAP メンバーが渡されると、 メンバーの MUN からビジネス・キーが取得され、ビジネス・キーのみが渡さ れます。 Order Methods の Telephone メンバーの例を使用すると、ビジネス・ キーは 2 です。メンバーのビジネス・キーが不明な場合は、

roleValue('_businessKey',[member]) のような式を記述できます。ターゲット・パラメーターにはこの値が渡されます。

OLAP タイプが同じである別の OLAP パッケージに基づいてターゲット・パラ メーターに渡される OLAP メンバーの場合、変換済みの MUN が表示されま す。Order Methods の例を使用すると、MUN が変換されて、 [great_outdoors_company].[Order Method].[Order Method].[Order Method1]-> [Order Method1]. [2]:[PC].[@MEMBER].[2] という値がドリルスルー定義で使用 されます。OLAP データ・ソースが異なる場合、ドリルスルー定義では中ほどに ある [Order Method1][2] という部分に基づいてターゲット内の正しいメンバー を見つけます。特定のメンバーの MUN を確認するには、Reporting でメンバ ーのプロパティーを表示して、Member Unique Name プロパティーを参照しま す。

# ドリルスルー・アシスタントへのアクセス

ドリルスルー定義の作業を行うときには、デバッグのためにドリルスルー・アシス タントを使用できます。

#### 始める前に

IBM Cognos Administration の「ドリルスルー・アシスタント」は保護された機能 であり、この機能を使用するには適切な権限が必要です。

#### 手順

 ソース・レポート内のリンクを選択し、リンクを右クリックして「移動」を選択 するか、PowerPlay Studio でドリルスルーのボタンをクリックします。

「関連するリンク」ページに使用可能なターゲット・レポートのリストが表示されます。目的のターゲット・レポートが表示されない場合は、ドリルスルー定義 の範囲の設定を確認します。

ヒント:使用可能なターゲットが 1 つのみである場合、「関連するリンク」を選択したときに、「移動」ページは表示されずにターゲットが開かれます。

- 2. ソース・レポートから渡された値を確認するには、「渡されたソース値を表示」 をクリックします。
- 3. ターゲット・レポートの隣の下向きの矢印をクリックし、「ターゲット・マッピ ングを表示」を選択します。

マッピングされている有効なデータのリストが表示され、使用可能なソース値 と、使用する値および表示する値が表示されます。

 いずれかの値のセットで、「詳細情報」をクリックし、ドリルスルー仕様 (ター ゲット・マッピング) または選択コンテキスト (渡されたソース) の XML を確 認します。

# 例 - ドリルスルー定義のデバッグ

次に、ドリルスルー定義のデバッグの例を示します。

OLAP ソースには、"ライン"、"タイプ"、"名前"というレベルがある"製品"ディメン ションがあるとします。この OLAP ソース・ディメンションの各レベルに一致する パラメーターをリレーショナル・ターゲットに定義したとします。この場合、1 つ のディメンションのすべてのターゲット・パラメーターが「ターゲット・マッピン グを表示」リストに表示されることがあります。このようになるのは、ドリルスル ー定義において個々のターゲット・パラメーターが 1 つのディメンション (この場合には"製品"ディメンション) にマッピングされているためだと考えられます。 OLAP データ・ソースでは、ビジネス・キー値、つまりメンバーを作成するために 使用したソース値が、次の表に示されているように 3 つのレベルすべてで重複して います。

パラメーター名	表示する値	使用する値
製品ライン・パラメーター	キャンプ用品	1
製品タイプ・パラメーター	調理用具	1
製品名パラメーター	トレイルシェフ・ウォーター バッグ	1

表 79. 問題となるドリルスルー定義のパラメーター・マッピングの例

使用する値がディメンション内で重複していない場合には、3 つのパラメーターす べてを"製品"ディメンションにマッピングするのは正しい方法です。上記の表では、 3 つのレベルすべてのメンバーは使用する値が同じです。このシナリオではすべて のレベルが有効であることが示唆されているため、ドリルスルー処理においてどの レベルが正しいのかを見極めることができません。この場合は、有効なビジネス・ キーまたは使用する値が最初に見つかったレベルにドリルスルー定義によって値が 設定されます。そのため、予期しない動作になる可能性があります。

この例は、データ・ウェアハウスや OLAP ソースにおいてビジネス・キーやソース 値が一意となるよう設計されていることを常に確認することが重要な理由を示して います。この状況を正すためには、ドリルスルー定義で、個々のターゲット・パラ メーターをディメンション内ではなくソース・メタデータ内の関連する各レベルに マッピングする必要があります。

# レポートでのドリルスルー・アクセスの設定

Reporting を使用してソース・ドリルスルー・レポートを作成すると、関連する情報を含む 2 つのレポートをリンクできます。その後、ソース・レポートで 1 つの 値または複数の値を選択すると、レポートの関連情報または詳細情報にアクセスで きます。ブックマークを作成すれば、同じレポート内でもドリルスルーできます。

#### 始める前に

ヒント:ドリルスルー定義でレポートをソースとして使用する場合は、「パッケージ に基づくドリルスルーを許可」オプションを選択する必要があります(「データ」 メニュー、「ドリル動作」)。このオプションはデフォルトで選択されています。

#### 手順

- 1. ターゲット・レポートを開きます。
- ドリルスルー列になるパラメーター、またはレポートをフィルターするパラメー ターを作成します。

例えば、製品ラインに対してドリルスルーまたはフィルター処理を行うには、次 のパラメーターを作成します。

[Product line]=?prodline_p?

ヒント: ターゲット・レポートで複数の値、または値の範囲を受け入れるよう にするには、演算子 in または in_range を使用します。

- 3. 「使用方法」ボックスで、ドリルスルーの過程でターゲット・パラメーターの値 が渡されない場合の対処方法を指定します。
  - ユーザーが値を選択しなければならないようにするには、「必須」をクリックします。

ターゲット・パラメーターの値が渡されない場合、値を選択するプロンプト がユーザーに対して表示されます。

ユーザーが値を選択しなくてもよいようにするには、「オプション」をクリックします。

ユーザーに対して値の選択を求めるプロンプトが表示されないため、値にフ ィルターはかけられません。

パラメーターを使用しないように指定するには、「無効」をクリックします。

ドリルスルーの間、パラメーターは使用されません。また、パラメーターが 別の用途でレポート内で使用されることもありません。

ヒント:別の用途でレポートにパラメーターが必要な場合、ドリルスルー定義 ではそのパラメーターを使用しないように指定することもできます (「パラ メーター」テーブル、「方法」、「パラメーターを使用しない」)。

#### タスクの結果

ドリルスルー・テキストが、レポートのグラフ以外の領域に青いハイパーリンクの テキスト・アイテムとして表示されます。また、レポート利用者は、「移動」ボタ ンをクリックするか、アイテムを右クリックして「移動」、「関連するリンク」の 順にクリックするという方法でも、ドリルスルー処理を開始できます。必要な権限 を持つユーザーであれば、「移動」ページの「ドリルスルー・アシスタント」を使 用して、どのようなパラメーターがソースから渡され、どのようにターゲット・オ ブジェクトでマッピングされるかを表示できます。

# ドリルスルー・テキストの指定

ユーザーが複数のターゲットにドリルスルー可能な場合に表示される、ドリルスル ー・テキストを指定することができます。

例えば、さまざまな地域のユーザーがレポートを表示する場合、地域ごとに異なる 言語でテキストを表示することが可能です。

## 手順

 ドリルスルー・オブジェクトをクリックし、「プロパティー」ウィンドウで「ド リルスルー定義」をクリックします。

- 2. オブジェクトに複数のドリルスルー定義が存在する場合、「ドリルスルー定義」 ボックスでドリルスルー定義の1つをクリックします。
- 3. 「ラベル」タブをクリックします。
- 4. ラベルを条件にリンクするには、「条件」ボックスで次の手順を実行します。
  - 「変数」をクリックし、既存の変数をクリックするか、新しい変数を作成します。
  - 「値」をクリックし、変数に指定可能な値のいずれかをクリックします。
- 5. 「ソース・タイプ」ボックスで、使用するソースのタイプをクリックします。
- ソースのタイプが「テキスト」である場合、「テキスト」ボックスに対応する省 略記号ボタンをクリックし、テキストを入力します。
- フ. ソースのタイプが「データ・アイテムの値」または「データ・アイテムのラベル」である場合、「データ・アイテム」をクリックし、データ・アイテムをクリックします。
- 8. ソースのタイプが「レポート式」である場合、「レポート式」ボックスに対応す る省略記号ボタンをクリックし、式を定義します。
- 9. ラベルが条件にリンクされている場合は、残りの候補値について手順 5~8 を繰 り返します。

## タスクの結果

ユーザーがソース・レポートを実行してドリルスルー・リンクをクリックすると、 「移動」ページが表示されます。各ターゲットに、指定したドリルスルー・テキス トが表示されます。ターゲットにドリルスルー・テキストを指定しなかった場合 は、ドリルスルー名が使用されます。

# 第 27 章 IBM Cognos Workspace

IBM Cognos Workspace は Web ベースのツールで、これによりIBM Cognos コ ンテンツおよび外部データ・ソースを使用して高度な対話式ワークスペースを構築 できます。IBM Cognos Workspace について詳しくは、「IBM Cognos Workspace ユーザー・ガイド」を参照してください。

Cognos Workspace を開始するには、「ようこそ」ページで「新規」 > 「その 他」 > 「ワークスペース」をクリックします。

# RSS フィード詳細からの HTML マークアップの削除

IBM Cognos Workspace では、ユーザーがツールボックスから RSS ウィジェット を挿入できます。 RSS フィードを設定した後、「フィードの詳細を表示」が有効な ら、RSS フィード・ウィジェットが HTML マークアップを表示します。

ディスパッチャーで拡張設定 CPSRssAllowUnsafeCharacters を指定して「フィード の詳細を表示」オプションを有効にすると、HTML マークアップを隠せます。この パラメーターは各ディスパッチャーに対して設定しなければなりません。複数のデ ィスパッチャーに対して、このパラメーターをグローバルに設定できます。

## 手順

- IBM Cognos Administration で、「設定」 > 「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。
- 単一のディスパッチャーの CPSRssAllowUnsafeCharacters 設定を指定するに は、次のようにします。
  - a. 「名前」列で、ディスパッチャーをクリックし、「プロパティーを設定」を クリックします。
  - b. 「**Presentation** サービス」に移動し、「プロパティーを設定」をクリックします。
  - c. 「設定」タブをクリックし、「環境」、「詳細設定」で、「編集」をクリッ クします。
  - d. 「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」をクリックします。こ れで、手順 4 に進みます。
- 3. 複数のディスパッチャー用にグローバルに CPSRssAllowUnsafeCharacters パラ メーターを指定するには、次のようにします。
  - a. 「設定」ツールバーで、「プロパティーを設定 設定」をクリックしま す。
  - b. 「設定」タブをクリックし、「環境」、「詳細設定」で、「編集」をクリッ クします。
- 「パラメーター」フィールドに CPSRssAllowUnsafeCharacters と入力し、 「値」フィールドに true と入力します。
- 5. 「**OK**」をクリックします。

タスクの結果

RSS フィード詳細に HTML マークアップが表示されません。

# 第 28 章 IBM Cognos Mobile の管理

IBM Cognos Mobile は、既存の IBM Cognos Analytics インストール済み環境の 機能を拡張して、ユーザーがそれぞれのタブレットやスマートフォンで Cognos Analytics のコンテンツを表示したり、やり取りしたりできるようにします。

Cognos Mobile リッチ・クライアントにより、ユーザーはモバイル・デバイスで Cognos Analytics - Reporting からアクティブ・レポートを表示することと、 Cognos Workspace からワークスペースを表示することができます。アクティブ・ レポートは、保存済みの出力としてサーバー上にあるか、モバイル・ユーザーに配 信済みである必要があります。アクティブ・レポートは、クライアントではなく、 サーバーで実行する必要があります。

Cognos Analytics プロンプト機能およびスケジューリング・メカニズムは、カスタ マイズしたレポートをタイムリーな方法で配信するために使用されます。Cognos Analytics セキュリティー、および各種のベンダー固有のセキュリティー・メカニズ ム (デバイス・ベースやサーバー・ベースのセキュリティーなど) は、レポートとワ ークスペースのコンテンツを保護するために使用されます。

Cognos Mobile によって使用されるデバイス固有の管理サーバー・ツールおよび管 理ツールの多くには、リモート側でデバイスのコンテンツを削除したり、デバイス を完全に使用不可にしたりする機能があります。例えば、デバイスが紛失または盗 難に遭った場合、Cognos Analytics 管理者はこの機能を使用してデバイス上の重要 コンテンツを保護できます。Cognos Analytics 管理者がレポートの有効期限日付を 設定することにより、その日付を超過したレポートはユーザーが再認証するまでア クセス不能にすることができます。

Cognos Mobile では、モバイル・デバイスとサーバー環境の間で、以下のプロダク ト機能の要求がサポートされています。

- 検索
- 参照
- 実行

IBM Cognos Administration の「Mobile」タブには、Cognos Mobile に関する一 元管理機能が用意されています。このタブにアクセスするには、管理者には Mobile 管理機能に関する必要なアクセス権限がなければなりません。「Mobile 管 理者」は、Cognos ネームスペース内の事前定義済みの役割の 1 つで、この機能に 関するアクセス権限を指定するために使用できます。

Cognos Mobile は、Cognos Analytics と同じユーザー群を使用します。Cognos Analytics の管理について詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* 管理およびセキュリ ティー・ガイド」の他のセクションを参照してください。

# ユーザーのための Cognos Mobile ネイティブ・アプリケーションの事前 構成

ユーザーによるセットアップを簡素化し、iOS および Android デバイスにおける アプリケーションの動作をコントロールするために、IBM Cognos Mobile アプリ ケーションを構成します。

## このタスクについて

URL で構成設定をエンコードおよび生成して、その URL を E メール、チャット、その他の方法で Cognos Mobile アプリケーション・ユーザーに配布できます。この URL を使用することにより、ユーザーは自分のモバイル・デバイス上のアプリケーションを自動的に構成できます。

構成には Cognos サーバーの URL も含まれるので、ユーザーは、アプリケーションを構成する際にモバイル・デバイス上で URL を入力する必要がありません。

付加的なセキュリティー機能として、構成にパスワードを組み込むこともできま す。モバイルの構成にパスワードを組み込むと、構成 URL の保全性を保証する改 ざん防止シールのような役割を果たし、URL のソースが有効であることを裏付ける ものとなります。構成 URL とパスワードは、同じメディア (E メールやチャット など)、同じタイミングで一緒に送信してはいけません。ユーザーは、構成 URL を開く時に一度だけ、このパスワードを入力します。

## 手順

- 1. 「**IBM Cognos Administration**」で、「モバイル」タブをクリックします。
- 2. 「リモート構成」をクリックします。
- 3. IBM Cognos Server URL の場合、IBM Cognos Analytics サーバー URL を 入力します。 http://server_name:port_number/bi/v1/disp
- 4. 以下の設定を有効または無効にします。
  - パススルー認証

この設定を有効にすると、ユーザーは、ユーザーが表示しているさまざ まな仲介 Web ページを介して、Cognos Analytics サーバーにナビゲ ートできるようになります。

デフォルトでは、IBM Cognos Mobile は、IBM Cognos Analytics サ ーバーへの直接接続を必要とします。セキュリティー製品の干渉ゆえに 直接接続が難しい場合は、この設定をオンにします。干渉を引き起こす 可能性のある製品としては、CA SiteMinder、Tivoli[®] Access Manager、Microsoft ISA Server などがあります。あるいは、パブリッ ク WiFi ネットワークを使ってページにアクセスする際にも干渉が発生 する可能性があります。

#### 自動ダウンロード

この設定を有効にすると、Cognos Mobile アプリケーションは、ユー ザーの受信トレイやユーザーにプッシュされたレポートから、新着のレ ポート出力を自動的にダウンロードします。この設定は、回線容量の問 題があるのでない限り、オンにしておいてください。 サンプル・サーバーの表示

この設定を有効にすると、Cognos Mobile アプリケーションは、 Cognos Mobile サンプル・サーバーにアクセスします。サンプル・サ ーバーには、IBM Cognos ソフトウェアの機能を例示する IBM Cognos レポートのサンプルが置かれています。これらのサンプル・レ ポートは、モバイル・デバイス上での使用に合わせて最適化されていま す。

アプリケーション状態を維持

この設定は、アプリケーションの再始動後に、そのアプリケーションの 最新のコンテンツ・スペースを復元できるようにする場合に有効にしま す。例えば、コンテンツ・スペース「My Reports」内のレポートの表示 中にアプリケーションが閉じられた場合、再始動後にアプリケーション はコンテンツ・スペース「My Reports」を再度開きます。この設定を無 効にすると、アプリケーションは再始動後にメインパネルを表示しま す。

デフォルト:オフ

5. オプション: 「モバイル構成パスワード」チェック・ボックスを選択し、任意の パスワードを入力します。 パスワードには最大 20 文字の英数字を設定できま す。スペースは使用できません。

このパスワードを指定することにした場合、パスワードと構成 URL は別々に ユーザーに知らせてください。

 オプション:「SSL/TLS 証明書の固定」チェック・ボックスを選択して、 Cognos Analytics サーバーへのエントリー・ポイントを保護する SSL または TLS 証明書の SHA-1 フィンガープリントを貼り付けます。Cognos Analytics サーバーのエントリー・ポイントの例としては、Web サーバー、プロキシー・ サーバー、またはロード・バランサーなどがあります。

この設定を有効にして、クライアントが確実に、X.509v3 証明書で構成され、同じ SHA-1 フィンガープリントを持つサーバーとのみ通信するようにします。

この設定の値は、句読記号を含まない 40 個の 16 進文字 (a から f および 0 から 9) のシーケンスです。値をこのフィールドに貼り付ける前に、句読記号を 削除してください。複数の SHA-1 フィンガープリントの値を、コロン (:) で区 切って指定できます。

ヒント: Firefox では、ブラウザーの URL バーの南京錠のアイコンをクリック してから、「詳細」 > 「証明書を表示」をクリックして、SHA-1 フィンガー プリントを入手することができます。

7. 「モバイル構成コードの生成」をクリックします。 指定された構成設定が組み 込まれた、base64 エンコードの URL が生成されます。

以下は、生成される URL の例です。

cmug://aHR0cDovL3ZvdHRtb2IxL2NzcDI-dmVyc21vbj0xLjAmcGFzcz1vZmYmYXV0b 2R3bj1vZmYmZG1zcHNhbXA9b24mcHdkPW9uJnNhbHQ9UW1zQVJoTTNPaFVfJmhhc2g9Q VFnQUFBQk1iV0ZqVTBoQk1iV2U3SEJiUjhkczJBV2wrKzI0Y2d6cWxLMi8.

8. 生成された構成 URL をコピーし、E メール、チャット、その他の方法を使っ て Cognos Mobile アプリケーションのユーザーに提供してください。 URL をコピーおよび送信する際には、以下の条件が満たされていることを確認 してください。

- URL をコピーする際、アンダースコアー (_) を含む URL 内のすべての文 字が選択されていること。
- 構成 URL の送信に使用するアプリケーションが URL の大/小文字を保持 すること。この URL には大/小文字の区別があります。

### タスクの結果

ユーザーが管理者から受け取った構成 URL をタップすると、iOS または Android デバイス上で Cognos Mobile アプリケーションが開きます。自動構成を続行する には、ユーザーによる確認が必要です。ステップ 5 でモバイル構成パスワードを指 定した場合、ユーザーは、プロンプトに応じてパスワードを入力する必要がありま す。URL で指定された設定でアプリケーションが構成されます。

ユーザーが間違ったパスワードを入力した場合や「キャンセル」ボタンをタップし た場合は、構成設定を一切適用しない状態でアプリケーションが開きます。

ヒント:一部の E メール・アプリケーションでは、URL が標準テキスト形式でユ ーザーに送達されます。その場合、管理者はその URL をユーザーからアクセス可 能な Web ページ上に配置できます。また、iOS では、ユーザーが URL をブラウ ザーにコピー・アンド・ペーストしてそこから開くこともできます。

# Cognos Mobile の詳細設定の指定

IBM Cognos Mobile の詳細設定を、すべてのサービス用にグローバルに構成したり、特定のディスパッチャー用に構成したり、特定の Mobile サービス用に構成したりできます。

設定をグローバルに構成すると、指定した値は Mobile サービスのすべてのインス タンスで取得されます。ディスパッチャー・レベルまたは Mobile サービス・レベ ルで指定したカスタム値によって、グローバル値をオーバーライドできます。

構成項目の中に、グローバル設定をオーバーライドする設定を持つ子項目が含まれ る場合、子項目のカスタム設定をリセットしてデフォルト値を使用できます。いず れかの設定値をデフォルトにリセットするには、その設定を削除します。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Administration の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックして、以下のいずれかのアクションを実行します。
  - 詳細設定をグローバルに構成するには、「設定」ページ上のツールバーで、
     「プロパティーを設定 構成」アイコン
     をクリックし、ステップ 3
     に進みます。
  - 特定のディスパッチャーに関する詳細設定を構成するには、ディスパッチャーを見つけ、「操作」列で「プロパティーを設定」アイコン をクリックします。その後、ステップ3に進みます。

 特定の Mobile サービスに関する詳細設定を構成するには、このサービスが 組み込まれているディスパッチャーをクリックします。ディスパッチャー・ サービスのリストで、「Mobile サービス」を見つけます。「操作」列で、

そのサービスに関連した「プロパティーを設定」アイコン [] をクリック し、ステップ 3 に進みます。

- 2. 「設定」タブをクリックします。
- 3. 「詳細設定」で、「編集」をクリックします。

パラメーターがリスト表示されない場合は、その名前を入力します。

4. 設定に該当する値を指定し、「OK」をクリックします。

ヒント:詳細設定を削除するには、そのチェック・ボックスを選択し、「削除」 をクリックします。

# Mobile テーマの構成

Mobile テーマは、IBM Cognos Mobile アプリケーションの「ようこそ」ページの 外観を定義します。デフォルトでは、クライアント・アプリケーションは製品に組 み込まれているデフォルトのテーマを使用します。独自の Mobile テーマを作成し て、アプリケーションの外観をカスタマイズし、選択したユーザーのグループや役 割で使用できるようにテーマを構成できます。管理者はいつでもデフォルトのテー マに戻すことができます。

#### このタスクについて

設定タスクには、Mobile テーマのサポートの使用可能化、テーマの追加、編集、または削除、テーマを使用できるグループや役割の定義が含まれます。

同じユーザーがさまざまなグループや役割に属することができるので、さまざまな テーマに対するアクセス権を持つことができます。ユーザーにとって適切なテーマ が適用されるようにするには、管理者はテーマを構成する際にどのグループや役割 を選択できるか熟慮しなければなりません。

Cognos Mobile のデフォルトのテーマは、製品と共にインストールされる defaultTheme.zip テンプレート内で定義されています。管理者は、カスタム・テー マを作成する際にこのテンプレートから始めることができます。それ以外には、こ のテンプレートは、製品が適切に機能する上で必要ではありません。詳細について は、437 ページの『カスタム Mobile テーマの作成』を参照してください。

## 手順

- 1. デスクトップ・ブラウザーから、Mobile 管理者権限で IBM Cognos Analytics にログオンします。
- 2. 「IBM Cognos Administration」を開き、「Mobile」タブをクリックします。
- 3. 以下のステップを実行して、テーマのサポートが Mobile サービスで使用可能 になるようにします。
  - a. 「サーバー構成」をクリックします。

- b. 設定の「ポリシー」グループ内で、「モバイル・テーマ・サポート」設定を 見つけ、この設定に「themesOn」の値が指定されていることを確認しま す。
- c. 「モバイル構成の適用」ボタンをクリックして構成を保存します。
- 4. 「Mobile UI の構成」ページを開きます。
- 5. 新しいテーマを追加するには、「新規テーマ」 アイコンをクリックしま す。
- 6. 「Mobile テーマの構成」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「テーマ名の指定」ボックスで、テーマ名を入力します。ご使用の環境にとって意味のある名前であれば何でも指定できます。
  - b. 「アップロードするテーマ・ファイルの指定」ボックスで、テーマのリソー スが含まれる zip ファイルを参照します。
  - c. 「グループまたは役割の指定」ボックスで、「グループを選択」ボタンをク リックして、テーマを使用する必要があるグループか役割を選択します。
     Cognos ネームスペースかその他のアクティブなネームスペースからグルー プや役割を選択できます。
  - d. すべてのパラメーターを適切に指定した時点で、「**OK**」をクリックしま す。

「Mobile UI の構成」ページにテーマ名が表示されます。

- 7. テーマを編集する場合は、「操作」列で、そのテーマの「プロパティーを設定」 アイコンをクリックします。テーマのどのパラメーターでも編集できます。
- 8. テーマを削除する場合は、そのテーマのチェック・ボックスを選択して、ツール

バーで「削除」アイコン をクリックします。

Cognos Mobile のデフォルトのテーマに戻すには、現在構成しているテーマを 削除します。このテーマを使用していたユーザーは、次回 Cognos Analytics サーバーに接続するときに、デフォルトのテーマの使用に戻されます。

9. iOS および Android デバイスを使用して、テーマの構成対象のサーバーに接続し、変更内容が適切に適用されたかどうかテストします。

## タスクの結果

ユーザーのデバイスにテーマのリソースがダウンロードされる間、ユーザーは引き 続きアプリケーションを使用できます。ユーザーが次回 Cognos Analytics サーバ ーに接続する時点か自分のアプリケーションを最新表示する時点で、テーマが適用 されます。

ユーザーが、異なるテーマが構成されている可能性がある複数のサーバーに接続す る場合には、最初にクライアントが正常に接続したサーバー用に構成されているテ ーマが、そのユーザーに適用されます。その他のサーバーに接続する場合、そのサ ーバーで別のテーマが使用されていても、ユーザーのテーマは変更されません。別 のサーバー用に構成されているテーマに変更するには、現在のテーマを使用してい るサーバーに対する接続を削除してください。それから、ユーザーは必要なテーマ を使用しているサーバーに接続できます。

# カスタム Mobile テーマの作成

カスタムの Mobile テーマを作成して、IBM Cognos Mobile に付属のデフォルト のテーマと置き換えることができます。

始める前に

カスタム・テーマの設計を計画し、画像ファイルなどの必要なリソースを準備しま す。

このタスクについて

Cognos Mobile をインストールすると、インストール・ディレクトリー インスト ールの場所/templates/mobile に defaultTheme.zip ファイルが含められます。こ れはデフォルトのテーマのテンプレートです。独自のカスタム・テーマを作成する 際にこのテンプレートから始めることができます。

defaultTheme.zip ファイルにはさまざまなディレクトリーやファイルが含まれてい ます。カスタムのテーマにとって必要なファイルは main_panel¥index.html ファイ ルのみです。このファイル内で、画像などのカスタム・テーマ内で使用するリソー スをすべて定義し、カラー・スキームやフォント・スタイルを変更します。

デフォルト・テーマ・テンプレート内の nls ディレクトリーには、言語固有のテーマのディレクトリー構造が含まれています。言語固有のテーマを作成するには、この構造をエミュレートするか、独自のメカニズムを実装することができます。

デフォルト・テーマに基づいてカスタムの Mobile テーマを作成する際には、以下の手順を指針として使用できます。

#### 手順

- インストールの場所/templates/mobile ディレクトリーに進み、 defaultTheme.zip ファイルのコピーを作成して、別の名前で保存します。
- 2. 前のステップで作成した .zip ファイルを解凍してファイルを抽出します。
- 必要に応じて main_panel¥index.html ファイルを編集します。このファイルには、テーマに組み込まれるすべてのリソースに対する参照が含まれていなければなりません。
- 4. テーマのすべてのリソースを 1 つの .zip ファイルに圧縮します。この .zip フ ァイルには、少なくとも変更済みの main_panel¥index.html ファイルが含まれ ていなければなりません。
- 5. 選択したディレクトリーにテーマの .zip ファイルを保存します。

この時点で、カスタムのテーマを使用するように IBM Cognos Mobile を構成 できます。詳細については、 435 ページの『Mobile テーマの構成』を参照し てください。

# Cognos Mobile サービスの構成

IBM Cognos Mobile サービスのすべてのインスタンスをグローバルに構成できます。

## このタスクについて

Mobile 構成設定をグローバルに適用すると、Mobile サービスのすべてのインスタンスが同期していることが保証されるので、エラーの回避に役立ちます。

重要: テナントが複数ある環境で、さまざまなテナント用にこの設定をカスタマイズ することはできません。

## 手順

- 1. デスクトップ・ブラウザーから、Mobile 管理者権限で IBM Cognos Analytics にログオンします。
- 2. 「IBM Cognos Administration」を開き、「Mobile」タブをクリックします。
- 3. 「サーバー構成」ページをクリックします。
- 4. 構成する設定を見つけて、必要に応じてその値を指定します。

複数の設定を構成できます。設定のリストについては、『Cognos Mobile サー ビスの構成設定』を参照してください。

5. 「モバイル構成の適用」ボタンをクリックします。

## Cognos Mobile サービスの構成設定

これらの設定を使用して、IBM Cognos Analytics コンテンツのモバイル・アプリ ケーションへの配信を管理します。

#### ポリシー設定

これらの設定は、Cognos Analytics コンテンツをモバイル・アプリケーションに配 信する方法を定義します。

各レポートを保存する最大ページ数

指定の限度を超えたページは、デバイスから自動的に廃棄されます。

この設定は、IBM Cognos Workspace から起動されるドリルスルー・ター ゲット・レポートに適用できます。

デフォルト:5

ヒント: Cognos Mobile 環境にネイティブ・クライアントだけが含まれる 場合、デフォルトを 50 ページに設定してください。それ以外の場合、推奨 されているデフォルトの 5 を使用してください。

#### レポートを保存する最大日数

レポートがデータベースに保管される最大時間を日数で指定します。この限 度を超えるレポートはデバイスから自動的に削除されます。

値:1 から 999 まで

デフォルト: 30

# ソース・レポートの実行とターゲット・レポートの実行の間の最大時間数 iOS ネイティブ・アプリケーションのアクティブ・レポートで、アプリケー ション・ドリルスルー機能を使用している際に、ソース・レポートの実行と ターゲット・レポートの実行の間隔として許容される最大時間を時間単位で

指定します。 2 つの実行の差がこの量を超えた場合、アプリケーション・ ドリルスルー・ターゲットは使用されません。

デフォルト値の1は、ソース・レポートが実行された後1時間以内にター ゲット・レポートが実行される限り、ターゲット・レポートを正常に開くこ とができることを意味します。

値の 0 では、アプリケーション・ドリルスルー機能が使用不可になりま す。ターゲット・レポートがこの値を使用した後でソース・レポートを実行 すると、ターゲット・レポートは開かず、エラー・メッセージが表示されま す。このエラー・メッセージは、ターゲット・レポートが存在しないため、 最初に実行する必要があることを通知します。

この設定は、Android ネイティブ・アプリケーションには適用されません。

レポート画面キャプチャーの共有の許可

ネイティブ・クライアントのユーザーに、表示中のレポートの画面キャプチャーを共有することを許可または禁止します。ユーザーは、E メールや他の 方法によって、レポートの画面キャプチャーを共有できます。

値: True または False

デフォルト: True

Mobile ルート・フォルダー

Cognos Mobile ユーザーがモバイル・デバイスからコンテンツの表示また は検索を行うときに開始場所にする必要のあるルート・フォルダーの名前を 指定します。

デフォルト: ブランク

この設定の値は、次の形式による、Content Manager 検索パスでなければ なりません。/content/package[@name='<ルート・フォルダー名>']

設定がブランクの場合、Cognos Mobile は、ルート・コンテンツ・フォル ダー、または インストールの場所/templates/ps ディレクトリーに保管さ れているポータル system.xml ファイルで指定されたルート・フォルダーを 使用します。ルート・フォルダーを追加する場合は、system.xml ファイル の consumer-root 設定の構文を使用します。

ヒント: IBM Cognos Analytics で検索パスを見つけるには、Cognos Mobile ルート・フォルダーとして使用するパッケージまたはフォルダーの プロパティーを表示します。それから、「検索パス、ID、URL を表示」を クリックします。

モバイル・テーマ・サポート

IBM Cognos Mobile Web アプリケーションに関するカスタムの Mobile テーマがサポートされるかどうかを指定します。

値: themesOn および themesOff

デフォルト: themesOff

デバイスに保存されている Mobile ローカル・データにアクセスする最大時間数 デバイス上に保管された Cognos Mobile ローカル・データ・ストアにモバ イル・デバイスのユーザーがアクセスできる最大時間数を指定します。 値:0から8760まで

デフォルト: 36

値の 0 は、Lease Key メカニズムを使用不可にします。

キャッシュされた資格情報を保存する最大時間数

資格情報をデバイス上に保管しない場合は、0 を入力します。資格情報をデ バイス上に保管する場合は、IBM Cognos Analytics の現在のタイムアウト 設定よりも大きい任意の値を入力します。ユーザーがログオンしている間 は、キャッシュに入れられた資格情報にアクセスできます。

値:0から8760まで

デフォルト:0

スケジュールされたレポートで期限切れのままになる可能性のあるクライアントの 最大時間数

この設定は、管理者がユーザー用のレポートをサーバーでスケジュールする ときに関係します。ユーザーが、他のレポートを取得したり IBM Cognos Analytics ポータルをブラウズしたりするときなどにサーバーとの通信を行 えなくなった場合でも、この設定で指定された有効期限が切れるまでは通信 が行えるようになります。レポートが既存のスケジュールやユーザーが行っ た操作によって生成されるときなど大半のケースでは、デバイスのサーバー に対する遅延時間は通常は数秒だけなので、この設定が使用されることはあ りません。

値:0から 999 まで

デフォルト:24

値 0 は、レポートがすぐにデバイスにダウンロードされるようにプッシュ します。

# セキュリティー設定

これらの設定を使用して、Cognos Mobile アプリケーションを保護します。

**IBM Cognos Mobile** アプリケーションに関するローカル・ストレージの暗号化レ

ベル iOS または Android デバイスに保管されるデータが暗号化される方法を指 定します。

值: NONE、AES128、AES256

デフォルト: AES128

ヒント: Web アプリケーションはデータをローカルに保管しないので、こ の設定には影響はありません。

セキュリティー・コード・セッション・タイムアウト (秒単位)

Mobile アプリケーションにアクセスするときのセキュリティー・コードの 必要性、およびアプリケーションが非アクティブ状態を保つことのできる最 大秒数を指定します。セキュリティー・コードには、連続する数字や繰り返 される数字を使用できません。

値:1 から 8760 まで

デフォルト: -1

値の -1 は、セキュリティー・コードが必要ないことを示します。値 0 は、ユーザーがセキュリティー・コードを作成して、アプリケーションにア クセスするたびにそれを入力する必要があることを示します。

0 よりも大きな値は、ユーザーがセキュリティー・コードを作成する必要が あること、および設定で指定された秒数の間はアプリケーションが非アクテ ィブであっても、そのアプリケーションを使用するときにコードを再入力す る必要がないことを示します。例えば、値を 60 に設定した場合、ユーザー はセキュリティー・コードを入力する必要があり、その後 Mobile アプリケ ーションを 60 秒間非アクティブにできることを示します。

IBM Cognos Mobile アプリケーションにアクセスする際にセキュリティー・コードを入力する最大試行回数

ユーザーが Mobile アプリケーションにアクセスする際にセキュリティー・ コードの入力を試行できる最大回数を指定します。

値:1 から 99 まで

デフォルト:10

# 通知の設定

これらの設定を使用して、Apple プッシュ通知を構成します。

Apple プッシュ通知の通知 E メール

Apple プッシュ通知証明書の有効期限日付について通知される管理者の E メール・アドレス (複数も可)を指定します。

この設定の値は、admin@domain.com という形式の E メール・アドレスで す。複数の E メール・アドレスはセミコロン (;) で区切って指定する必要 があります。例えば、次のようになります。 admin1@domain.com;admin2@domain.com

Apple プッシュ通知のサポート

iOS ネイティブ・アプリケーション用の Apple プッシュ通知を有効にし、 iOS デバイス・ユーザーに表示されるメッセージの表現を指定します。値は 以下のとおりです。

- None Apple プッシュ通知は無効であり、サーバーから Apple プッシュ通知サービスにメッセージが送信されません。
- Name Apple プッシュ通知は有効です。サーバーから Apple プッシュ通知サービスに送信されるメッセージにはレポート名が含まれます。
- Generic Apple プッシュ通知は有効です。サーバーから Apple プッシュ通知サービスに送信されるメッセージにはレポート名が含まれません。その代わり、汎用メッセージが表示されます。

デフォルト: Name

Apple プッシュ通知証明書の有効期限日付の頻度チェック (時間単位) Cognos Mobile サービスが Apple プッシュ通知の証明書の有効期限日付 を確認する頻度を時間単位で指定します。Cognos Mobile サービスを開始 したときに最初の確認が実施されます。

値:1 から 8760 まで

デフォルト:24

#### Apple プッシュ通知のフィードバック間隔 (時間単位)

失敗した通知に関して Cognos Mobile サーバーが Apple プッシュ通知フ ィードバック・サービスを確認する時間の間隔を時間単位で指定します。フ ィードバック・サービスは、通知の送信の試行に繰り返し失敗したデバイス のリストを保持します。 Cognos Mobile サーバーは、フィードバック・サ ービスからリストを入手したデバイスに通知を送信することを停止します。

値:1 から 720

デフォルト:24

Apple プッシュ通知の期限のしきい値 (日単位) Apple プッシュ通知の証明書の有効期限日付前に、有効期限日付が近づい ていることに関する E メールを管理者が受信し始める日数を指定します。

値:1 から 365 まで

デフォルト:14

# iOS ネイティブ・アプリケーション用の Apple プッシュ通知の構成

Apple プッシュ通知は、iOS ネイティブ・アプリケーション・ユーザーに、新しい IBM Cognos Analytics レポートが使用可能であることを通知します。

プッシュ通知を送信するため、Cognos Mobile サーバーには Apple からの SSL 証明書が必要です。 SSL 証明書は、IBM Cognos Mobile のリリースされた各バー ジョンに含まれており、Apple が発行した日付から 12 カ月の間有効です。管理者 は証明書の有効期限日付を確認し、有効期限が切れる前に証明書を更新する必要が あります。そうしないと、ユーザーのプッシュ通知の受信が停止します。詳細につ いては、『Apple プッシュ通知の SSL 証明書の管理』を参照してください。

Cognos Mobile サーバー、Apple iOS デバイス、および Apple プッシュ通知サー ビス (APNS) 間での通信に、以下の TCP ポートが使用されます。

- ポート 2195 は、Cognos Mobile サーバーによって APNS に通知を送信するために使用されます。
- ポート 2196 は、Cognos Mobile サーバーによって APNS フィードバック・サ ービスにアクセスするために使用されます。
- ポート 5223 は、Wi-Fi を使って APNS に接続する iOS デバイスによって使用 されます。

インターネット接続ファイアウォールでこれらのポートをオープンの状態にしてく ださい。

# Apple プッシュ通知の SSL 証明書の管理

管理者はログ・ファイルおよび E メールを監視して、証明書の有効期限日付が近づ いていることに関するメッセージを探し、必要に応じて証明書を更新します。

#### このタスクについて

Apple プッシュ通知の SSL 証明書は、Apple が発行した日付から 12 カ月の間有 効です。証明書の有効期限日付の 14 日前に、Cognos Mobile サーバーは、証明書 の有効期限日付が近づいているとの警告を <インストールの場所>¥logs¥mob.log フ ァイルに記録することを開始します。証明書の有効期限日付に関する警告が記録されるためには、サーバーのログ記録は少なくとも Warn レベルに設定されている必要があります。ログ記録レベルが Error に設定されている場合、証明書の有効期限メッセージは記録されません。

ログ・ファイルの警告に加えて、証明書の有効期限日付が近づいていることに関し て管理者に E メールを送信するように Cognos Mobile サーバーを構成することが できます。

ログ・ファイルまたは E メール本体の警告のテキスト (英語のみ) は、証明書の有 効期限日付および IBM サポート Web サイト (http://www.ibm.com/support/) の URL を示します。同サイトでは、更新された Apple SSL 証明書を含む最新の IBM Cognos Mobile フィックス・パックを入手することができます。

## 手順

- 次の構成設定が IBM Cognos Administration で指定されていることを確認し ます。これらの設定は、証明書の有効期限日付に関する E メール・メッセージ を管理者に送信するように Cognos Mobile サーバーを構成するために使用され ます。
  - Apple プッシュ通知の通知 E メール
  - Apple プッシュ通知証明書の有効期限日付の頻度チェック (時間単位)
  - Apple プッシュ通知の期限のしきい値 (日単位)

詳細については、『Apple プッシュ通知の使用可能化』を参照してください。

- 2. ログ・メッセージおよび E メールを監視して、証明書の有効期限日付に関する 情報を探します。
- 証明書を更新するには、IBM サポート Web サイト (http://www.ibm.com/ support) に移動して、Apple プッシュ通知用の有効な証明書を含む最新の Cognos Mobile フィックスパックをダウンロードします。
- 4. 新しい証明書を、関係するすべてのサーバーにインストールします。

## Apple プッシュ通知の使用可能化

ユーザーがプッシュ通知を受信できるようになるには、管理者は Apple プッシュ通知に関連した Mobile サービス設定を構成する必要があります。

## このタスクについて

初めてプッシュ対応アプリケーションがプッシュ通知を登録すると、ユーザーは通知の受信を希望するかどうかを尋ねるアラートを受信します。このアラートに応答した後は、デバイスが復元されるか、またはアプリケーションがアンインストール (1日以上の期間)されない限り、アラートは再表示されません。その後、新しいレポートが使用可能になるたびに iOS デバイス・ユーザーはテキスト・アラートによる通知を受け、アプリケーション・アイコンが更新されて新しいレポートの数が示されます。ユーザーは通知からアプリケーションを開くことができます。

IBM Cognos Mobile ネイティブ iOS アプリケーションは、複数の Cognos Analytics サーバーからプッシュ通知を受信することができます。ユーザーが通知の 表示を必要としなくなったときは、iOS 設定でアプリケーションの通知設定をオフ にする必要があります。

# 手順

- 1. IBM Cognos Administration で、「**Mobile**」タブをクリックします。
- 2. 「サーバー構成」をクリックします。
- 3. 以下の「通知」設定を指定します。

Apple プッシュ通知のサポート

- iOS ネイティブ・アプリケーション用の Apple プッシュ通知を有効に し、iOS デバイス・ユーザーに表示されるメッセージの表現を指定しま す。値は以下のとおりです。
- None Apple プッシュ通知は無効であり、サーバーから Apple プッシュ通知サービスにメッセージが送信されません。
- Name Apple プッシュ通知は有効です。サーバーから Apple プッシュ通知サービスに送信されるメッセージにはレポート名が含まれます。
- Generic Apple プッシュ通知は有効です。サーバーから Apple プッシュ通知サービスに送信されるメッセージにはレポート名が含まれません。その代わり、汎用メッセージが表示されます。

デフォルト: Name

 Apple プッシュ通知の通知 E メール

 Apple プッシュ通知証明書の有効期限日付について通知される管理者の

 E メール・アドレス (複数も可)を指定します。

この設定の値は、admin@domain.com という形式の E メール・アドレス です。複数の E メール・アドレスはセミコロン (;) で区切って指定す る必要があります。例えば、次のようになります。 admin1@domain.com;admin2@domain.com

Apple プッシュ通知の期限のしきい値 (日単位)

Apple プッシュ通知の証明書の有効期限日付前に、有効期限日付が近づいていることに関する E メールを管理者が受信し始める日数を指定します。

値:1 から 365 まで

デフォルト:14

Apple プッシュ通知のフィードバック間隔 (時間単位)

失敗した通知に関して Cognos Mobile サーバーが Apple プッシュ通 知フィードバック・サービスを確認する時間の間隔を時間単位で指定し ます。フィードバック・サービスは、通知の送信の試行に繰り返し失敗 したデバイスのリストを保持します。 Cognos Mobile サーバーは、フ ィードバック・サービスからリストを入手したデバイスに通知を送信す ることを停止します。

- 値:1 から 720
- デフォルト:24

Apple プッシュ通知証明書の有効期限日付の頻度チェック(時間単位) Cognos Mobile サービスが Apple プッシュ通知の証明書の有効期限日 付を確認する頻度を時間単位で指定します。Cognos Mobile サービス を開始したときに最初の確認が実施されます。

値:1 から 8760 まで

デフォルト:24

- 4. 「モバイル構成の適用」ボタンをクリックします。
- Mobile サービスに関する Database.DeviceExpiryIntervalDays 詳細設定を指 定します。詳細については、 434 ページの『Cognos Mobile の詳細設定の指 定』を参照してください。

# モバイル・デバイスでのレポート管理

IBM Cognos Mobile ユーザーは、保存済みのアクティブ・レポート出力や送信済 みのアクティブ・レポートを自分のモバイル・デバイスで開くことができます。ユ ーザーは IBM Cognos ワークスペースを実行できます。

アクティブ・レポートは、次の方法でユーザーに送信されます。

- 指定された間隔でユーザーのデバイスに送信されるようにレポートをスケジュー リングする。
- ユーザーのデバイスに、バーストされたレポートを送信する。
- 複数の異なるレポートを1つのジョブとして実行し、それらをユーザーのデバイスに送信する。
- 定義済みのイベントによってレポートの実行を起動して、ユーザーのデバイスに 配信する。

ユーザーはデバイスからレポートを削除できます。これを行う場合、ユーザーは実 際のレポートではなく、デバイス上のコピーだけを削除します。

# モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット

デバイスで IBM Cognos Mobile を扱っているとき、ナビゲーションや他の操作を 実行するためにいくつかのショートカットを使用できます。

操作	ショートカット
ホーム	1
終了	9
上	2
下	8
左	4
右	6
入力	開く
ズームイン	Q
ズームアウト	А
ズーム	Z

表 80. モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット

表 80. モバイル・デバイスでの Cognos Mobile のショートカット (続き)

操作	ショートカット
ページ	P
セルにマークを	5
付ける	

# Cognos Mobile のログ記録機能

IBM Cognos Mobile のログ記録は、製品自体のログ記録機能、および IBM Cognos Analytics のログ記録機能によって提供されます。

両方のログ記録方式はログ・ファイルを生成し、アクティビティーのモニターおよ び問題のトラブルシューティングに使用されます。これらのファイルは、インスト ールの場所/logs ディレクトリーにあります。インストールの場所/configuration ディレクトリーにある設定ファイルおよびアプリケーション層コンポーネントは、 Cognos Mobile ログ記録機能を変更するために使用されます。

両方のログ記録方式は同時に使用することができます。例えば、デフォルトの Mobile ログ記録機構を使用して Mobile サービス・アクティビティーを追跡しなが ら、Cognos Analytics ログ記録機構を使用してデバッグのトレースを有効にするこ とができます。監査ログ記録は、Cognos Analytics ログ記録機能によってのみ使用 可能です。

Cognos Mobile サービスの開始および停止に関連したイベントは、Cognos Analytics の *install_location*/logs/cogaudit.log ファイルに記録されます。

Cognos Mobile および Cognos Analytics のログ記録機能に加えて、iOS および Android の診断機能を使用して、Cognos Mobile ネイティブ・アプリケーションに 関連するイベントをログに記録することができます。

# Cognos Mobile のログ記録

IBM Cognos Mobile は、サービス始動、構成のセットアップ、レポート実行など に関連したアクティビティーを <**インストールの場所**>/logs ディレクトリーにある mob.log ファイルに記録します。これは Cognos Mobile のログ記録のデフォル ト・タイプです。

mob.log ファイルに示されるログ記録情報は、<インストールの場所 >/configuration/mob.log4j.xml ファイルによって決まります。

デフォルトの mob.log4j.xml ファイルを使用している場合、管理者は Mobile サー ビスのイベント (データベース・スキーマのアップグレード、Mobile サービスの構 成設定や詳細設定の変更、および警告とエラーなど) をモニターすることができま す。ただし、デフォルトの mob.log4j.xml ファイルは Debug ログ記録レベルを含 みません。mob.log ファイルでこのログ記録のレベルが必要な場合、デバッグを有 効にする必要があります。詳細については、 447 ページの『デフォルトの Cognos Mobile ログ記録機能のデバッグ・レベルへの変更』を参照してください。

以下の表は mob.log ファイルでのログ記録レベルを指定します (最高レベルから最 低レベルの順)。

表 81. mob.log でのログ記録レベル

ログ記録レベル	説明
デバッグ	デバッグ情報を提示します。このレベルは通常、特定の問題のデ バッグに使用されます。 このレベルはデフォルトでは使用できません。使用可能にする必
	要があります。詳細については、『デフォルトの Cognos Mobile ログ記録機能のデバッグ・レベルへの変更』を参照してくださ い。
情報	IBM Cognos Mobile に関する情報を示します。
警告	追加の調査が必要となる可能性のある疑わしい状態を示します。
エラー	介入の必要な重大なエラー状態を示します。

ユーザーが選択するログ記録のレベルには、それより下位のすべてのレベルも含ま れます。例えば、ユーザーが Info を選択した場合は、警告メッセージとエラー・ メッセージもログ・ファイルに書き込まれます。

# デフォルトの Cognos Mobile ログ記録機能のデバッグ・レベルへの 変更

mob.log ファイルの Debug ログ記録レベルを有効にできます。

### このタスクについて

デフォルトの mob.log4j.xml ファイルは Debug レベルのログ記録を含みません。 デバッグを有効にするには、<**インストールの場所**>/configuration/ mob.log4j.xml.DEBUG.sample ファイルを使用します。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Configuration で Mobile サービスを停止します。
- <インストールの場所>/configuration ディレクトリーで次のように変更を完了 します。
  - a. mob.log4j.xml の名前を mob.log4j.xml.original に変更します。
  - b. mob.log4j.xml.DEBUG.sample の名前を mob.log4j.xml に変更します。
- 3. Mobile サービスを開始します。

#### タスクの結果

IBM Cognos Mobile でデバッグのログ記録すべてが有効になります。

## Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化

IBM Cognos Mobile は、アクティビティーおよびデバッグ情報に加えて、ユーザ ーおよびレポート・アクティビティーについての情報を記録します。

#### このタスクについて

Cognos Mobile ログ・ファイルにログ記録される情報のタイプは、インストールの 場所/configuration ディレクトリーの ipfclientconfig.xml ファイルで定義され たログ記録レベルによって決まります。同じディレクトリーに、 ipfMOBclientconfig.xml.sample ファイルがあります。ログ記録を有効にするに は、ipfMOBclientconfig.xml.sample の名前を ipfclientconfig.xml に変更するだ けです。

以下のログ記録レベルを Cognos Mobile に定義できます。

表 82. Cognos Mobile のログ記録レベル

ログ記録レベル	説明
デバッグ	デバッグ情報を提示します。このログ記録レベルは通常、特 定の問題のデバッグに使用されます。
情報	IBM Cognos サービスに関する情報を示します。
警告	追加の調査が必要となる可能性のある疑わしい状態を示しま す。
エラー	介入の必要な重大なエラー状態を示します。

ユーザーが選択するログ記録のレベルには、それより下位のすべてのレベルも含ま れます。例えば、ユーザーが Info を選択した場合は、警告メッセージとエラー・ メッセージもログ・ファイルに書き込まれます。

IBM Cognos Administration でもログ記録を有効にできます。詳細については、 449 ページの『IBM Cognos Administration での監査ログ記録のセットアップ』を 参照してください。

# 手順

- 1. IBM Cognos Configuration で Mobile サービスを停止します。
- インストールの場所/configuration ディレクトリーで、 ipfMOBclientconfig.xml.sample の名前を ipfclientconfig.xml に変更してく ださい。
- 3. ipfclientconfig.xml ファイルを開き、希望するログ記録レベルを指定し、ファ イルを保存します。
- 4. IBM Cognos サービスを開始します。

### タスクの結果

ipfclientconfig.xml ファイルで指定したログ記録レベルに応じて、インストールの場所/logs ディレクトリーに以下のログ・ファイルが生成されます。

• ipf-MOB_xxxx.log

このファイルは、Cognos Mobile 監査イベント情報を記録します。ログ記録デー タベースが「環境」、「ログ記録」の下の IBM Cognos Configuration で定義 されている場合、監査イベントもこのデータベースに記録されます。デフォルト では、このタイプのログ記録は ipfMOBclientconfig.xml.sample ファイルで有 効です。

ログ記録データベースのセットアップについて詳しくは「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

ipfMOBtrace_xxxx.log

このファイルは、Cognos Mobile のトレースおよびデバッグ・ログ・データを記録します。このファイルにキャプチャーされるデータのタイプは、 mob.log ファイルのデータと同じです。ただし、このファイルは、多量の情報または少量の情報を記録するため、異なるログ記録レベルに構成することができます。デフォルトでは、このタイプのログ記録は ipfMOBclientconfig.xml.sample ファイルで有効です。

ipfMOBperf_xxxx.log

このファイルは、Cognos Mobile パフォーマンス・データを記録します。デフォ ルトでは、このタイプのログ記録は ipfMOBclientconfig.xml.sample ファイル で無効です。

**IBM Cognos Administration での監査ログ記録のセットアップ** 監査ログを使用して、IBM Cognos Mobile ユーザーおよびレポート・アクティビ ティーについての情報を表示します。

#### このタスクについて

監査ログに記録されるアクションの例には、ユーザーのログオンおよびログオフ時 刻、有効期限切れユーザー・セッション、スケジュールされたレポート配信、保存 された出力などが含まれます。

監査ログ記録は、インストールの場所/configuration/ipfclientconfig.xml ファイ ルでも有効です。詳細については、 447 ページの『Mobile サーバーでの Cognos Analytics ログ記録の使用可能化』を参照してください。

監査レポートについて詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* 管理およびセキュリティ ー・ガイド」を参照してください。この文書には、サンプルの Cognos Mobile 監 査レポートについての情報も含まれています。

#### 手順

- 1. Cognos Administration を開きます。
- 2. 「設定」タブで、「ディスパッチャーとサービス」をクリックします。
- 3. ディスパッチャー名をクリックします。
- ディスパッチャー・サービスのリストの中から「Mobile サービス」を見つけ、 「操作」列で「プロパティーを設定」アイコンをクリックします。
- 5. 「設定」タブをクリックし、「カテゴリー」の下で「ログ記録」を選択します。
- 6. 「Mobile サービス用のログ記録監査レベル」の場合、「最小」以外の任意の値 を選択します。

次のログ記録レベルが指定され、監査ログ記録を有効にできます。「標準」、 「要求」、「トレース」、および「最大」。「最小」ログ記録レベルは、監査ロ グ記録を無効にします。

- 7. 「**OK**」をクリックします。
- 8. これらの値を適用するには、IBM Cognos サービスを停止し、再開します。

## ユーザー診断

ユーザーはそれぞれのネイティブ iOS および Android アプリケーションでログ記 録のオンとオフを切り替えることや、収集されるログ記録の詳細レベルを選択する ことができます。

以下のリストはログ記録のサポート・レベル (最高レベルから最低レベルの順) を示 します。

- ネットワーク
- デバッグ
- 情報
- エラー

ユーザーが選択するログ記録のレベルには、それより下位のすべてのレベルも含ま れます。例えば、ユーザーが「情報」を選択した場合は、警告メッセージとエラ ー・メッセージもログ・ファイルに書き込まれます。

ログ記録されるメッセージの最大サイズは 2 KB です。メッセージがこのサイズを 超えると、それは切り捨てられます。

## iOS アプリケーション

ログ記録がオンになると、SupportArtifacts という名前のディレクトリーがアプリ ケーション・ドキュメント・ディレクトリーに作成されます。 mobile_ios.log と いう名前のファイルが、SupportArtifacts ディレクトリーに作成されます。ログ記 録されるすべてのイベントは、このファイルに書き込まれます。

アクティブ・ログ・ファイルの最大サイズは 1 MB です。このサイズに達すると、 アクティブ・ログ・ファイルの内容は mobile_ios.log.old という名前のファイル に移動されます。 mobile_ios.log.old ファイルが存在する場合は、まずそのファ イルが削除されます。新しい mobile_ios.log ファイルが作成されて、アクティ ブ・ログ・ファイルとなります。

ログ記録が無効にされると、ディレクトリーとそのすべての内容がアプリケーショ ン・ドキュメント・ディレクトリーから削除されます。

## Android アプリケーション

ログ記録がオンになると、SupportArtifacts という名前のディレクトリーが /Android/data/com.ibm.cogmob.artoo/files ディレクトリーに作成されます。 cogmob.log という名前のファイルが、SupportArtifacts ディレクトリー内に作成 されます。ログ記録されるすべてのイベントは、このファイルに書き込まれます。

アクティブ・ログ・ファイルの最大サイズは 1 MB です。このサイズに達すると、 アクティブ・ログ・ファイルの内容は cogmob.log.old という名前のファイルに移 動されます。 cogmob.log.old ファイルがすでにある場合は、まずそのファイルが 削除されます。新しい cogmob.log ファイルが作成されて、アクティブ・ログ・フ ァイルになります。 ログ記録が無効にされると、ディレクトリーとそのすべての内容がアプリケーショ ン・ドキュメント・ディレクトリーから削除されます。

# Cognos Mobile のサンプル

IBM Cognos Analytics のサンプルには、モバイル・デバイス上の IBM Cognos Mobile リッチ・クライアントで使用するために最適化されたアクティブ・レポート が含まれています。

モバイル・デバイス・ユーザーは、アクティブ・レポートのインタラクティブ機能 を試してみることができます。これらのレポートにより、ユーザーはビジネスのさ まざまな分野を比較して、期間別、地域別、部門別、あるいはそれらの組み合わせ などによるトレンドを判別することができます。また、複数のビジネス方式や統計 を比較することもできます。

Cognos Mobile のアクティブ・レポートのサンプルでは、以下の製品機能が示されます。

- コントロール間の対話動作。
- ドリルダウン機能を利用したオンデマンドでの詳細へのアクセス。
- グラフの条件パレットおよび詳細のドリルダウン。
- 特定の設計のタブレット・ジェスチャー (スワイプ、スクロールなど)。
- カバー・ページおよびカラー・パレットなどの特定のユーザー・インターフェー ス設計。
- デック、タブ・コントロール、グラフ、ボタン、ドロップダウン・リスト、イテレーター、およびスライダーなどの各種のアクティブ・レポート・アイテム

GO データ・ウェアハウス (分析) パッケージ

GO データ・ウェアハウス (分析) パッケージには、以下のアクティブ・レポートが 含まれています。

#### 主力製品の結果

このアクティブ・レポートは、主力製品の「キャンプ用品」と「ゴルフ用 品」の収益データを表示します。

## 財務レポート

このアクティブ・レポートは、企業の財務状態の現在の実績および変動を示 します。この種の情報はビジネス上の決定に関係するユーザーすべてにとっ て価値があります。ただし、次の場合に財務部門はこの情報から益を得る可 能性が最も高いと考えられます。それは、法律上、税務上、および会計上の 規則や要件に従うためにシステムで検査と統制を実施する場合、およびビジ ネスの今後の方向性、実績、および機会に関するアドバイスを提供する場合 です。このレポートはタブレット用に最適化されています。

#### 棚卸資産回転率レポート

このアクティブ・レポートは、2 年間の比較データに基づく地域ごとの製品 棚卸資産回転率についての情報を示します。このレポートは、企業が棚卸資 産を管理するために使用する重要な棚卸資産評価指標を提供します。各製品 カテゴリーをドリルダウンして、詳細な棚卸資産情報および棚卸資産に関連 して失敗した発注数を表示することができます。このレポートはタブレット 用に最適化されています。

地域ごとの販売目標

このアクティブ・レポートは、計画収益と実収入との差の割合を含む、地域 ごとの販売目標を示します。

# GO データ・ウェアハウス (クエリー) パッケージ

GO データ・ウェアハウス (クエリー) パッケージには、以下のアクティブ・レポー トが含まれています。

宣伝費と収益との比較

このアクティブ・レポートは、年ごとの、宣伝費と収益の比較を示します。 タブ・コントロールは、類似したレポート・アイテムのグループ化に使用さ れます。

#### 顧客満足度

このアクティブ・レポートは、顧客による返品の数を、発注方法別および地 域別に比較します。このレポートは、返品数が最も多い発注方法についての 追加情報を提供します。さらに、さまざまな地域の顧客調査の結果も示しま す。このレポートはタブレット用に最適化されています。

従業員採用

このアクティブ・レポートは、部門、国または地域ごとの従業員採用のさま ざまな方法の有効性を比較します。そこには、組織名、採用済みポジショ ン、予定ポジション、および採用済みポジションと予定ポジションを比較し たブレット・グラフが示されます。このレポートはタブレット用に最適化さ れています。

製品別の収益

このアクティブ・レポートは、選択された製品別の収益を示します。このレ ポートは携帯電話デバイス用に最適化されています。

# Cognos Mobile セキュリティー

IBM Cognos Mobile は、IBM Cognos Analytics のセキュリティー方式とモバイ ル・デバイスに必要な他の追加の方式を結合させています。

セキュリティー方式は、紛失や盗難、さらにワイヤレス・ネットワークへの無許可 アクセスに対する保護を提供します。セキュリティーは、デバイスが接続モードと 切断モードのいずれで使用される場合にも適用されます。

Cognos Mobile ソリューションには、 IBM Cognos とデバイス固有の環境とに実 装される、以下のセキュリティー方式が含まれます。

- 標準の IBM Cognos データ暗号化
- 標準の IBM Cognos 認証 (カスタム IBM Cognos 認証プロバイダーのサポート を含む)
- PKCS12 証明書
- Lease Key 技術

- デバイス・ユーザー認証ポリシー
- デバイス・ベースのモバイル暗号化データベース
- 標準のデバイス固有のセキュア・データ伝送および暗号化
- デバイス・ベースのパスワード保護
- リモート操作によるデバイス・ワイプ

Cognos Mobile は、Microsoft Windows NTLM、Microsoft Active

Directory、CA SiteMinder の一部の構成などの、基本認証を使用するように構成さ れている Web サーバーをサポートします。これらのタイプの認証によって、管理 者がこのオプションを有効にした場合に、アプリケーションはユーザー資格情報を キャッシュに入れることができます。 HTML サーバー応答ページなど、その他の すべてのタイプの認証では、アプリケーションによって、ユーザーが認証プロバイ ダーの意図した方法でページと対話できるようなページが表示されます。

Cognos Mobile は、シングル・サインオン・セキュリティー構成をサポートしま す。しかし通常、モバイル・デバイス・ユーザーは、デスクトップ・ユーザーの場 合と同様にセキュリティー・ドメインに対して事前認証されているわけではありま せん。そのため、モバイル・デバイス・ユーザーは、初めて Cognos Analytics サ ーバーにアクセスするとき、通常シングル・サインオン資格情報を提供する必要が あります。

重要: IBM Cognos Mobile の iPad アプリケーションも、シングル・サインオン・ セキュリティー構成をサポートします。ユーザーは、iPad の「設定」で IBM Cognos アプリケーションの「パススルー認証」設定をオンにして、シングル・サ インオンを有効にすることができます。この設定が有効になっていると、初めて Cognos Analytics サーバーにアクセスするとき、iPad ユーザーにサインオン資格 情報の入力を求めるプロンプトが出されます。

オプションで、ログオン資格情報をモバイル・デバイスのキャッシュに入れるよう に設定すると、各ユーザーは 1 回だけログオンすればデバイスと Cognos Mobile との両方にアクセスできるようになります。 Cognos Mobile は、暗号化データベ ース・テクノロジーをデバイス上の Content Store として提供します。ローカル・ デバイス・ストレージへのアクセスは、中央から付与される Lease Key によって制 御されます。Lease Key は定期的に更新する必要があります。このリース期間の長 さを構成して、デバイスが紛失または盗難に遭った場合にデータをアクセス不能に することが可能です。

組織の必要に応じて、さまざまなレベルのセキュリティーを設定できます。デバイ ス上にログオン資格情報を保管する方法に加えて、匿名ログオンを許可することや モバイル・デバイスのネットワーク・セキュリティー機能に頼ることもできます。

さらに高水準のセキュリティーとして、Cognos セキュリティーをすべての通信に 対して使用することや、Lease Key 技術を使用してデータへのアクセスを制御する ことができます。

Cognos Analytics セキュリティーについて詳しくは、 207 ページの『第 10 章 セ キュリティー・モデル』を参照してください。デバイスのセキュリティーについて は、そのデバイスの資料を参照してください。

# Cognos Mobile の機能

IBM Cognos Administration 内の IBM Cognos Mobile 機能は、ユーザーや管理 者の IBM Cognos Mobile へのアクセスを制限するために使用されます。

ヒント: IBM Cognos Analytics 機能は、保護された機能およびフィーチャーとも呼ばれます。

Cognos Mobile 機能には、以下が含まれます。

ループや役割を作成することもできます。

• Mobile

この保護された機能は、ユーザーの Cognos Mobile へのアクセスを制限するために使用されます。この保護された機能に関する実行権限を持つユーザー、グル ープ、または役割のみが、Cognos Mobile にログオンできます。必要な権限のな いユーザーがログオンを試行すると、Cognos Analytics 管理者に連絡するよう に伝えるエラー・メッセージが表示されます。

• Mobile 管理

この Administration の保護された機能の保護されたフィーチャーは、Cognos Administration 内の「Mobile」タブ上での管理ページへのアクセスを制限する ために使用されます。この保護されたフィーチャーに関する実行権限を持つユー ザー、グループ、または役割のみが、このタブにアクセスして、Mobile サービ ス構成などの Cognos Mobile に関する管理タスクを実行できます。

Mobile および Mobile 管理の機能に関するアクセス権限を設定するプロセスを簡 単にするために、Cognos Administration 内の Cognos ネームスペース内にある定 義済み役割「Mobile ユーザー」および「Mobile 管理者」を使用できます。 「Mobile ユーザー」役割には、正規ユーザーの Cognos Mobile へのアクセスに必 要な権限が含まれています。「Mobile 管理者」役割には、Cognos Administration 内の「Mobile」タブ上での Cognos Mobile 管理機能へのアクセスに必要な権限が 含まれています。ユーザー、グループ、または役割を組織のディレクトリーからこ れらの役割に追加して、これらの役割を Cognos Analytics セキュリティー・ポリ シーに含めることができます。また、これらの役割を無視するか削除して、Cognos Mobile に対するアクセス権限を設定するために使用する独自のセキュリティー・グ

Mobile および Mobile 管理機能に関するアクセス権限の設定は、管理者が Cognos Mobile を構成する際に行う必要のある初期のタスクの 1 つです。詳細に ついては、 237 ページの『第 13 章 保護されている機能と特性』を参照してくだ さい。

# パスワード保護

組織としてモバイル・デバイスを導入するときには、通常、パスワード保護機能が 必要とされます。

ー定時間以上何も操作を行わなかったときにデバイス・パスワードの再入力を求め るプロンプトがユーザーに出されます。パスワードの入力を試行できる回数を制限 することもできます。その回数を超えるとモバイル・デバイスはリセットされて、 すべてのデータがデバイスから削除されます。その場合、ユーザーは適切な操作を 実行してデバイスのデータを復元する必要があります。
ユーザーの IBM Cognos 資格情報をそれぞれのモバイル・デバイスに保管するよう に設定すると、ユーザーが Cognos Mobile に初めてアクセスするときを除き、ユ ーザーが資格情報を入力する必要がなくなります。その後もログオン時に毎回資格 情報の入力を求められますが、Cognos Mobile によってパスワードが自動的に入力 されます。ユーザーが資格情報を再入力する必要が生じるのは、保管された資格情 報に関して制限時間に達したときだけです。

iOS デバイス上でデバイス PIN を構成すると、IBM Cognos Mobile アプリケーシ ョンは、手動でインポートされてそのデバイス上に保管される Cognos アクティ ブ・レポートを暗号化します。この機能は、E メール、iTunes、またはファイル・ サーバーを利用して手動でインポートされるアクティブ・レポートに適用されま す。

モバイル・デバイスのパスワード・ポリシーを使用可能にする方法や、設定する方 法について詳しくは、そのデバイスの資料を参照してください。

# ログオン中の HTML および HTTP のサポート

モバイル・デバイス上で使用される IBM Cognos Mobile 製品は、Web アプリケ ーションではなくネイティブ・アプリケーションです。これは Web ブラウザーを 使用せず、モバイル・デバイス上にレポートを表示する際に HTML を使用しませ ん。

しかし、IBM Cognos Mobile は IBM Cognos Analytics サーバーとの通信に HTTP を使用するので、Cognos Analytics サーバーへのアクセスを制御する Web ベースのセキュリティー・メカニズムと相互運用する必要があります。ユーザーが それらのセキュリティー・メカニズムを認証してその中をナビゲートできるよう に、IBM Cognos Mobile では基本的な HTML フォーム要素が示されて、それら に関連した操作をユーザーが実行することができます。

次の表は、IBM Cognos Mobile でサポートされる HTTP 機能と HTML 機能を示 しています。

関数	説明
HTTP リダイレクト	HTTP 301 Moved Permanently および HTTP 302 Moved Temporarily をサポートします。これは Location ヘッダーで指定さ れる相対 URL および絶対 URL の両方に従います。
HTML リダイレクト	HTTP リダイレクトに相当する HTML の同等機能をサポートしま す。例えば、 <meta content="3;URL=http://&lt;br&gt;" http-equiv="Refresh"/> などです。
HTTP 認証	基本スキームおよび NTLM の両方で、HTTP 401 Unauthorized を サポートします。 NTLM は主に Microsoft 認証スキームであり、 Windows 統合認証とも呼ばれます。
HTML フォーム	HTML ページのテキスト (アンカー・タグのあるテキストを含む)、 ボタン、および入力フィールド・タイプのテキスト、パスワード、お よび非表示部分を表示します。さらに、セキュリティー・ネームスペ ースのリストなど、選択可能な項目のリストを示すために使用され る、選択入力タイプも表示します。

表 83. Cognos Mobile によってサポートされる HTTP および HTML 機能

### 証明書認証

クライアント証明書認証を必要とするように Web サーバーが設定されている場 合、クライアント SSL 証明書 (クライアント X509v3 証明書) を使用して、IBM Cognos Analytics サーバーとネイティブ・アプリケーションの間のシームレス・サ インオンおよびセキュアな通信を提供できます。

ヒント: このタイプの認証は、両方向 SSL 認証または相互認証とも呼ばれます。

証明書ファイルは PKCS12 フォーマット (拡張子が .pkcs12) でなければならず、 クライアントの ID を証明書と秘密鍵の形式で含んでいる必要があります。管理者 は、証明書ファイルをネイティブのアプリケーションにインポートするためのセキ ュアな方式をセットアップするとともに、ユーザーが証明書をインポートする際に 入力する証明書パスワードを提供する必要があります。

管理者は、Cognos Mobile iOS および Android アプリケーション用のクライアン ト SSL 証明書をインポートするために、以下のメカニズムを提供できます。

• Web サイトから証明書ファイルへのリンク。

管理者は、.pkcs12 ファイルへのリンクを含む Web サイトにユーザーを誘導す る必要があります。ユーザーはリンクをタップして、ファイルをアプリケーショ ンにインポートします。 Android デバイスでは、このファイルを保存するよう に指示するプロンプトがユーザーに表示されます。

• 証明書ファイルの添付された E メール。

ユーザーは、添付された .pkcs12 ファイルをダウンロードする必要があります。 Android デバイスでは、このファイルを保存するように指示するプロンプトがユ ーザーに表示されます。

• 証明書ファイルをデバイスにコピーする。

このシナリオでは、モバイル・デバイスがパーソナル・コンピューターに接続されます。 Android の場合、セキュアな方法で管理者が .pkcs12 ファイルをパー ソナル・コンピューターに提供し、次いでそこからファイルをモバイル・デバイ スに手動でコピーできます。 iOS の場合、管理者またはユーザーは .pkcs12 フ ァイルを iTunes 経由で提供できます。その場合は、ファイルを 「IBM Cognos Documents」フォルダーに入れます。

この方法はスケーラブルではなく、一回限りの問題を解決するか一回限りのセッ トアップを実行する場合にのみ役立ちます。

ユーザーはモバイル・デバイス上の .pkcs12 ファイルを選択するとき、「次を使用 して開く」ダイアログ・ボックスで「IBM Cognos Mobile」を選択する必要があ ります。その後、ユーザーに対して、.pkcs12 ファイルに関連付けられたパスワード を「クライアント証明書」ダイアログ・ボックスに入力するように求めるプロンプ トが表示されます。アプリケーションが開いた後、証明書はユーザーのモバイル・ デバイス上のパスワード・ストレージ・システム (iOS デバイスでの Keychain な ど) に保管されます。

ヒント: Android で、Gmail アプリケーションが PKCS12 証明書を開くことがで きない場合、可能な回避策は別のメール・クライアント (デフォルトの Email アプ リケーションなど) を使用することです。それができない場合には、.p12 証明書拡 張子を使用すると、アプリケーションによる正常なインポートが可能になることが あります。ハイパーリンクを介して証明書をインポートするときは、.pkcs12 拡張子 を使用する必要があります。

# Cognos Mobile アプリケーションのセキュリティー

セキュリティー・コードを使用して、iOS および Android デバイス・ユーザー用 に IBM Cognos Mobile アプリケーションへのアクセスを制限することができま す。

Cognos 管理者は、モバイル・デバイス・ユーザーが IBM Cognos Mobile アプリ ケーションにアクセスする際にセキュリティー・コードを入力する必要があるこ と、およびユーザーがアプリケーションを使用するためにコードを再入力する必要 が生じるまでの、Mobile アプリケーションが非アクティブ状態を保つことのできる 時間の長さを指定できます。この機能は、「セキュリティー・コード・セッショ ン・タイムアウト」構成設定で制御されます。

この設定の値がユーザーにはセキュリティー・コードが必要なことを示している場合、この値はまた、ユーザーが Mobile アプリケーションにアクセスする際にコードの再入力を求めるプロンプトが出るようになるまでの、 Mobile アプリケーションが非アクティブであることのできる秒数も示しています。

この設定に加えて、Mobile ネイティブ・アプリケーションに組み込まれている、デフォルトのタイムアウト値もあります。サーバー設定として指定した値は、アプリケーション内のデフォルト値に優先します。

ユーザーはモバイル・デバイス上のサーバー設定をオフにすることができますが、 その値を変更することはできません。設定がオフの場合、サーバー設定ではユーザ ーがセキュリティー・コードを使用することが必要とされていれば、ユーザーが次 にアプリケーションを実行しようとするときサーバーに対する再認証が必要とな り、セキュリティー・コードの作成を求めるプロンプトが出されます。このコード がないと、ユーザーはローカル・コンテンツを表示できません。

また、Cognos 管理者は、Cognos Mobile アプリケーションへのログオン時にセキ ュリティー・コード入力の試行が失敗する回数に限度を設定することもできます。 これは、「IBM Cognos Mobile アプリケーションにアクセスする際にセキュリテ ィー・コードを入力する最大試行回数」構成設定によって制御されます。ユーザー が試行回数の最大値を超えた場合、そのモバイル・デバイス上にあるすべての Cognos コンテンツは破棄されます。ユーザーがサーバーにアクセスするために PIN が必要な場合、サーバーで指定された再試行回数が、モバイル・デバイス上の 再試行の値をオーバーライドします。

詳細については、 438 ページの『Cognos Mobile サービスの構成設定』のセキュ リティー設定を参照してください。

# モバイル・デバイスでのレポート・データのセキュリティー

IBM Cognos Analytics レポートのコンパイルおよび圧縮されたバージョンはすべ て、暗号化されて、モバイル・デバイスのモバイル暗号化データベースにローカル に保管されます。これらのレポートの読み取りや解釈は、IBM Cognos Mobile ク ライアント・アプリケーションによってのみ可能です。 Lease Key 技術を使用して、モバイル・デバイスに保管されるレポート・データの 有効期限を設定できます。有効期限時刻を過ぎると、デバイス上でレポート・デー タにアクセスすることができなくなります。ただし、デバイスがサーバーとの通信 を再確立すると、ユーザーがサーバーに再認証できるようになります。

iOS デバイス上でデバイス PIN を構成すると、IBM Cognos Mobile アプリケーシ ョンは、手動でインポートされてそのデバイス上に保管される Cognos アクティ ブ・レポートを暗号化します。この機能は、E メール、iTunes、またはファイル・ サーバーを利用して手動でインポートされるアクティブ・レポートに適用されま す。

# デバイスからのコンテンツの消去

モバイル・デバイスからすべてのコンテンツを消去する必要が生じることがありま す。これはデバイスが紛失や盗難に遭った場合、または従業員の役割を変更したり 退職したりした場合に必要になることがあります。

デバイス・パスワードおよび Lease Key 技術により、コンテンツを使用できるのは 許可されたユーザーだけとなります。すべてのデバイスで、セキュリティーおよび 管理はサード・パーティーのモバイル・デバイス管理ソリューションによって扱わ れます。

「デバイスに保存されている Mobile ローカル・データにアクセスする最大時間 数」構成設定に指定された時間に基づいて事前に決められた期間、モバイル・デバ イスがサーバーに接続されなかった場合、そのデバイスは IBM Cognos データにア クセスできなくなります。構成設定について詳しくは、 438 ページの『Cognos Mobile サービスの構成設定』を参照してください。

### Lease Key の設定

IBM Cognos Mobile は、リースの概念を使用して、モバイル・デバイスに保管されるデータへのアクセスを管理します。

データは、IBM Cognos 管理者が「デバイスに保存されている Mobile ローカル・ データにアクセスする最大時間数」という名前のサーバー設定で制御する期間、サ ーバーからリースされます。この設定は、サーバーと通信していないモバイル・デ バイス上のデータにユーザーがアクセスできる時間の最大値を指定します。例え ば、オフラインやワイヤレスの範囲外の状態にあるデバイスが該当します。このデ バイスが指定の期間内にリースを更新できなければ、デバイス上のデータはアクセ ス不能になります。この設定値の有効範囲は、時間数で 0 から 8760 です。デフォ ルトは 36 時間です。値の 0 は、Lease Key メカニズムを使用不可にします。この 設定の指定方法について詳しくは、 437 ページの『Cognos Mobile サービスの構 成』を参照してください。

# モバイル・デバイスのユーザー認証ポリシーの設定

IBM Cognos Mobile デバイス・ユーザー認証ポリシーは、IBM Cognos Analytics 認証資格情報をモバイル・デバイスのキャッシュに入れるかどうか、およびユーザ ーがこれらの資格情報を再入力しなければならない頻度を定義します。ユーザーは 資格情報を少なくとも 1 回は入力しなければなりません。 すべての IBM Cognos Analytics タイムアウトがモバイル・デバイス・ユーザーに 適用されます。デバイス・ユーザー認証ポリシーは、IBM Cognos Analytics に関 連付けられたタイムアウトより優先されます。

ユーザーの認証プロセスを簡単にするために、IBM Cognos 管理者は、「キャッシュされた資格情報を保存する最大時間数」の設定を使用して、資格情報をモバイル・デバイスのキャッシュに入れる操作を許可できます。この設定値の範囲は、時間数で 0 から 8760 です。デフォルト値の 0 は、デバイスに資格情報を保管しないことを意味します。この設定の指定方法について詳しくは、 437 ページの『Cognos Mobile サービスの構成』を参照してください。

IBM Cognos Analytics の CAM (IBM Cognos セキュリティー制御メカニズム) パスポート設定で、すべてのデバイスに適用されます。パスポート設定期限が満了 したとき、ユーザー・セッションは終了します。ただし、セッションを終了させた タイムアウトよりデバイス承認の時間制限が長い場合、ユーザー・セッションの終 了後もデバイス承認の時間制限は有効になります。ユーザーが資格情報を再入力す る必要が生じるのは、デバイス認証の時間制限に達したときだけです。

#### 手順

以下の手順によって、CAM パスポートのタイムアウトを設定します。

- IBM Cognos Content Manager がインストールされているコンピューターで、 「IBM Cognos Configuration」を開きます。
- 「エクスプローラー」ウィンドウで、「エクスプローラー」 > 「認証」をクリ ックします。
- 3. 「プロパティー」ウィンドウで、「アイドル・タイムアウト (秒)」に必要な値 を入力します。

IBM Cognos Configuration の詳細については、「*IBM Cognos Analytics* イン ストールおよび設定ガイド」を参照してください。

# 付録 A. ユーザー補助機能

IBM Cognos Administration には、動作が制限されている方、視力の限られた方な ど、身体障害者の方々が IT 製品を使用できるように支援するユーザー補助機能が 用意されています。

ただし、ユーザー補助機能をサポートしない他のページやコンポーネントが Cognos Administration ユーザー・インターフェースに追加された場合は、ユーザ ー補助機能の使用可能度が変化することがあります。

IBM のユーザー補助への取り組みについて詳しくは、IBM アクセシビリティ・セン ター (http://www-06.ibm.com/jp/accessibility/) を参照してください。

以下の機能は、Cognos Administration でのユーザー補助をサポートしています。

- 視力の限られたユーザーは、スクリーン・リーダー・ソフトウェアをデジタル・ スピーチ・シンセサイザーと共に使用して、画面に表示されている内容を聞き取 ることができます。 Cognos Administration は、Web Accessibility Initiative-Accessible Rich Internet Applications (WAI-ARIA) を使用します。
- キーボードだけを使用してソフトウェア内をナビゲートしたりコマンドを発行したりするには、標準の Microsoft Windows キーボード・ショートカットを使用できます。固有のキーボード・ショートカットはありません。
- JAWS ユーザーは、リンク・ウィンドウのリストから「メインにスキップ」リン クを選択することにより、ヘッダーやメニュー内のリンクを無視してそのページ のメイン・コンテンツに直接移動できます。キーボード・ユーザーには、そこに ナビゲートしたときに「メインにスキップ」オプションが表示されます。
- 管理者は、ユーザー補助機能付きの出力レポートに対して、すべてのエントリー に適用されるシステム全体の設定を指定できます。
- ユーザー補助機能付きの出力は、個々のレポート、ジョブ、ジョブ内のステップ、およびスケジュールされたエントリーに対しても、PDF、HTML、および Microsoft Excel 2007 ソフトウェア形式で設定できます。

# システム全体のユーザー補助機能付き出力レポートの使用可能化

ユーザー補助機能付きの出力レポートに対してシステム全体の設定を指定できま す。この設定は、レポート、ジョブ、およびスケジュールされたエントリーなど、 すべてのエントリーに適用されます。

ユーザー補助機能付きのレポートには代替テキストなどの機能が含まれています。 これにより、身体の不自由なユーザーはスクリーン・リーダーなどの支援テクノロ ジーを使用して、レポート・コンテンツにアクセスできます。

IBM Cognos Administration のシステム全体の設定は、ユーザー設定およびレポート・プロパティーのユーザー補助機能の設定によって上書きできます。

ユーザー補助機能付きのレポートは、他のレポートよりも複雑なレポート処理が必 要で、ファイル・サイズも大きくなります。その結果、ユーザー補助機能付きのレ ポートはパフォーマンスに影響を与えます。デフォルトでは、ユーザー補助機能付 きの出力レポートのサポートは無効になっています。

ユーザー補助機能付きの出力レポートは、PDF、HTML、および Microsoft Excel 形式で利用可能です。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. 「設定」ページ・ツールバーで、「プロパティーを設定」ボタン □ をクリッ クします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 「カテゴリー」ドロップダウン・リストで、「管理者によるオーバーライド」を クリックします。
- 5. 「管理者によるオーバーライド」カテゴリーの「レポートでのユーザー補助機能 のサポート」の横にある「値」列で、「編集」をクリックします。
- 「レポートでのユーザー補助機能のサポート」ページで、次のオプションのいず れかを選択します。

オプション	説明
無効にする	ユーザーは、ユーザー補助機能付きの出力レ ポートを使用できません。
必須にする	ユーザー補助機能付きの出力レポートは常に 作成されます。
ユーザーによる指定を許可	ユーザー補助機能付きの出力レポートはユー ザーが指定します。このオプションを「未選 択」に設定すると、ユーザー補助機能付きの 出力レポートは自動的には作成されません。 これはデフォルトです。このオプションを 「選択済み」に設定すると、ユーザー補助機 能付きの出力レポートはデフォルトで作成さ れます。

### Cognos Mobile のユーザー補助機能

IBM Cognos Mobile アプリケーションのユーザー補助機能は、iOS 7 以上のデバ イスで十分に利用できます。これらのデバイスで VoiceOver 機能を有効にする と、それをスクリーン・リーダーとして使用できます。その後、標準の Apple キー ボード・ショートカット・コマンドを使用することにより、Bluetooth キーボード やスクリーン・ジェスチャーでナビゲートできます。詳しくは、デバイスの資料を 参照してください。

Cognos Mobile アプリケーションには、さまざまなビューでナビゲートするために 役立つ、追加のキーボード・ショートカットがあります。

# Cognos Mobile のキーボード・ショートカット

キーボード・ショートカットは、Cognos Mobile アプリケーションのさまざまなビ ュー用に定義されています。

キーボード・ショートカットは、以下の画面、スペース、およびビューのために定 義されています。

- IBM Cognos Mobile ホーム画面。
- 「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サンプル」スペース。
- 「参照」および「検索」ビュー
- レポート・ビューアー。
- 「セキュリティー・コードの入力」ウィンドウ。

### **IBM Cognos Mobile** ホーム画面

「**VoiceOver**」機能が iOS モバイル・デバイスで有効になっている場合、Cognos Mobile ホーム画面で、Cognos Mobile のキーボード・ショートカットを使用して IBM Cognos Analytics をナビゲートできます。

IBM Cognos Mobile ホーム画面では、以下のキーボード・ショートカットを使用 して以下の操作を実行します。

表 84. IBM Cognos Mobile ホーム画面のキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
スペース接続にフォーカスがある場合、「削除」ウィンド	Ctrl+D
ウを開く。	

「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サン プル」スペース

「VoiceOver」機能が iOS モバイル・デバイスで有効になっている場合、「マイ・ レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サンプル」スペースで、 Cognos Mobile のキーボード・ショートカットを使用して IBM Cognos Analytics をナビゲートできます。

キーボード・ショートカットは、現在のモードに応じてさまざまな操作をトリガー します。デフォルトと編集のモードがあります。

#### デフォルト・モード

デフォルト・モードでは、以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操 作を実行します。

表 85. 「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サンプル」スペー ス、デフォルト・モードのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
スペースの終了または最小化。	Ctrl+X
「参照」および「検索」ビューのオープン(「マイ・レポー	Ctrl+B
ト」スペースのみ)。	

表 85. 「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サンプル」スペー ス、デフォルト・モードのキーボード・ショートカット (続き)

操作	キーボード・ショートカット
レポートのリストの最新表示。	Ctrl+R
スペース・タイトルの編集。	Ctrl+T
ユーザー認証設定のオープンまたはクローズ (「マイ・レポ	Ctrl+A
ート」スペースのみ)。	
壁紙背景設定のオープンまたはクローズ。	Ctrl+W
レポート・プレビュー・モードの実行または終了。	Ctrl+P
編集モードに入る。	Ctrl+D

#### 編集モード

編集モードでは、以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操作を実行 します。

表 86. 「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、および「サンプル」スペー ス、編集モードのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
編集が終了すると、再びデフォルト・モードになります。	Ctrl+D
いずれも選択されていない場合にはすべてを選択し、すべて が選択されている場合にはそれらを選択解除する。	Ctrl+A
フォーカスのあるレポートを次のレポートと入れ替える (移 動するレポートのフォーカスは保持する)。	Ctrl+S
選択したレポートを削除して、デフォルト・モードに戻る。	Delete

### 「参照」および「検索」ビュー

「VoiceOver」機能が iOS モバイル・デバイスで有効になっている場合、「参照」 および「検索」ビューで、Cognos Mobile のキーボード・ショートカットを使用し て IBM Cognos Analytics をナビゲートできます。

「マイ・レポート」スペースでは、参照や検索を行うことができます。「参照」お よび「検索」ビューでは、以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操 作を実行します。

表 87. 「参照」および「検索」ビューのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
「参照」または「検索」ビューを閉じる。	Ctrl+X
現在の「参照」または「検索」ページを更新する。	Ctrl+R
次のページに移動する。	Opt+左矢印か右矢印
「保存された出力」ウィンドウが開いている場合は、それを 閉じます。	Return または Enter

### レポート・ビューアー

「VoiceOver」機能が iOS モバイル・デバイスで有効になっている場合、レポート・ビューアーで、Cognos Mobile のキーボード・ショートカットを使用して IBM Cognos Analytics をナビゲートできます。

「マイ・レポート」スペースでは、レポート・ビューアーでレポートを表示しま す。キーボード・ショートカットは、現在のモードに応じてさまざまな操作をトリ ガーします。デフォルトと描画のモードがあります。

### デフォルト・モード

デフォルト・モードでは、以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操 作を実行します。

表 88. レポート・ビューアー、デフォルト・モードのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
レポート・ビューアーのクローズまたは最小化。ドリルスル	Ctrl+X
ーを行っているときには、ソースに戻る。	
ページ・ピッカーのオープンまたはクローズ。	Ctrl+P
操作メニューのオープンまたはクローズ。	Ctrl+A
描画モードに入る。	Ctrl+D
次のページに移動。	Ctrl+. (>)
前のページに移動。	Ctrl+, (<)

#### 描画モード

描画モードでは、以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操作を実行 します。

表 89. レポート・ビューアー、描画モードのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
変更を破棄して描画モードを終了する。	Ctrl+D
レポートを注釈と共に表示する。	Ctrl+M
「描画ボックス」メニューが開いているとき、描画ボックス の幅を 10 ピクセルずつ大きくします。	Ctrl+W
「描画ボックス」メニューが開いているとき、描画ボックス の幅を 10 ピクセルずつ小さくします。	Ctrl+Shift+W
「描画ボックス」メニューが開いているとき、描画ボックス の高さを 10 ピクセルずつ大きくします。	Ctrl+H
「描画ボックス」メニューが開いているとき、描画ボックス の高さを 10 ピクセルずつ小さくします。	Ctrl+Shift+H
「描画ボックス」メニューが開いているとき、「描画ボック ス」メニューを終了します。	Ctrl+X

「セキュリティー・コードの入力」ウィンドウ

「VoiceOver」機能が iOS モバイル・デバイスで有効になっている場合、「セキュ リティー・コードの入力」ウィンドウで、Cognos Mobile のキーボード・ショート カットを使用して IBM Cognos Analytics をナビゲートできます。

以下のキーボード・ショートカットを使用して以下の操作を実行します。

表 90. 「セキュリティー・コードの入力」ウィンドウのキーボード・ショートカット

操作	キーボード・ショートカット
PIN の入力。	キーボードの数字
最後に入力した数字の消去。	Delete

# 既知の問題

Cognos Mobile には、キーボードだけを使用して IBM Cognos Analytics 内をナ ビゲートし、タスクを実行するために役立つキーボード・ショートカットが含まれ ています。ただし、iOS VoiceOver 機能では既知の問題が発生する可能性がありま す。

レポート・コンテンツの表示中に **Cognos** キーボード・ショートカ ットが機能しない

VoiceOver 機能が使用可能になっていて、レポート・ビューアーや Cognos Mobile ホーム画面のレポート・コンテンツなどのレポート・コンテンツを表示する とき、 Cognos Mobile のキーボード・コマンドが機能しません。この問題を解決 するには、フォーカス・カーソルをツールバー領域に戻します。

### 項目がタップされるとキーボード・リスナーは処理を停止する

Cognos Mobile アプリケーションでレポート・コンテンツを表示するとき、項目を タップすると、VoiceOver 機能は処理を停止します。この回避策としては、 VoiceOver 機能をオフにしてから再度オンにするか、または別のビューにナビゲー トしてから元のビューに戻って、VoiceOver 機能をリセットします。

#### Delete キーがテキスト入力フィールドで機能しない

VoiceOver モードのとき、Cognos Mobile アプリケーションのテキスト入力フィ ールドで Delete キーが機能しません。入力を間違えたためにバックスペースで文 字を削除するには、キーボード・ショートカット Ctrl+Delete を使用します。

# 付録 B. Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・セーフティー設定

Shift-JIS は、日本語文字のエンコード方式で、英語での ASCII に相当します。

#### ネイティブのエンコード方式と Unicode

Shift-JIS と ASCII はどちらも単一の言語の文字を定義する、ネイティブのエンコー ド方式です。一方 Unicode は、すべての言語の文字を定義する文字エンコード方式 です。ソフトウェアはグローバルな多言語環境で使用されるため、コンピューター で文字を処理する場合は、ネイティブのエンコード方式と Unicode の間で文字コー ドの変換が行われることがよくあります。

### ラウンド・トリップ・セーフティー

ネイティブのエンコード方式と Unicode 間の変換に際して起こる障害をラウンド・ トリップ・セーフティー問題と呼びます。

Unicode を使用することで、異なる言語による入力データを同時に処理できるアプ リケーションを開発できます。ユーザーが入力したデータやデータベースから取得 されたデータに、ネイティブのエンコード方式でエンコードされた文字が含まれて いることがあります。例えば、Microsoft Windows オペレーティング・システムを 使用するユーザーによって入力された英語の文字は、Windows-1252 でエンコード されます。

アプリケーションでは、ネイティブのエンコード方式でエンコードされた文字は Unicode に変換されてから処理されます。処理の終了後、文字はネイティブのエン コード方式に再変換されます。

ネイティブ文字はそれぞれ単一の Unicode 文字に対応しているため、文字変換は通 常問題なく行われます。ある文字を Unicode 文字に変換した後、元のネイティブの 文字に正しく再変換される場合、その文字はラウンド・トリップ・セーフであると みなされます。

例えば、「A」という文字は Windows-1252 においてラウンド・トリップ・セーフ です。

- Windows-1252 での「A」は 0x41
- Unicode での「A」は U+0041
- Unicode のこのコードに変換される文字は Windows-1252 エンコード方式では「A」のみであるため、「A」は必ず元の 0x41 に再変換される

#### Shift-JIS に固有の問題

多くのネイティブのエンコード方式において、文字はすべてラウンド・トリップ・ セーフですが、Shift-JIS エンコード方式は例外です。Shift-JIS 文字のうち約 400 文 字はラウンド・トリップ・セーフではありません。Unicode の同じ文字に変換され るものが複数あります。例えば、Shift-JIS の 0x8790 と 0x81e0 の 2 つのコードに 対応する文字はどちらも、Unicode の U+2252 に変換されます。

# IBM Cognos Analytics および Shift-JIS

IBM Cognos Analytics では Unicode を使用します。文字のラウンド・トリップ・ セーフティーは、生成されるレポートにおけるデータの正確さを保証するための必 須条件です。

ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを使用する と、次のように文字を変換する場合にのみ、Shift-JIS 文字のラウンド・トリップ・ セーフティーが保証されます。

- Shift-JIS から Unicode
- Unicode から Shift-JIS

データベース内のデータが要求され、そのデータベースに Shift-JIS から Unicode への自動変換メカニズムがある場合は、Unicode から Shift-JIS に文字を変換する ときに IBM Cognos Analytics によってラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーが呼び出されません。データ内の文字のラウンド・ トリップ・セーフティーは保証されません。

ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーの詳細につい ては、 469 ページの『ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティ リティー』を参照してください。

### 例:Shift-JIS のラウンド・トリップ・セーフな変換

次の例では、Shift-JIS から Unicode への変換で発生する問題について説明します。

- Shift-JIS でエンコードされた文字が含まれているデータベースがあり、
- このデータベース内のあるレコードに、0x8790 というコードの Shift-JIS 文字が あるとします。
- ユーザーがブラウザーで 0x8790 というコードに対応する Shift-JIS 文字を入力 すると、
- アプリケーションにこの入力フォームが送信され、Shift-JIS の 0x8790 というコ ードが Unicode の U+2252 というコードに変換されます。
- データベースには Shift-JIS でエンコードされた文字が含まれているため、 U+2252 という Unicode のコードはクエリーに使用できません。
- アプリケーションで U+2252 を Shift-JIS の文字に再変換する必要があります。 U+2252 には、0x8790 と 0x81e0 の 2 つの Shift-JIS コードが対応していま す。変換プロセスによって選択されたコードが 0x81e0 である場合、クエリーからは該当レコードなしという結果が返されることになります。

この問題を解決するには、ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユー ティリティーを使用します。これにより、必ず 0x8790 に変換されるため、目的の レコードが見つかります。

# ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティー

ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを使用して、 IBM Cognos Analytics で正しいレコードが必ず返されるように Shift-JIS 文字の変 換プロセスを設定できます。

このユーティリティーを使用すると、次の2種類のケースに対応できます。

複数の Shift-JIS 文字が Unicode の同じ文字に変換される。

データにこのような Shift-JIS 文字が含まれている場合は、このユーティリティーを使用して、Unicode 文字が常に元の Shift-JIS 文字に変換されるように指定できます。詳細については、『変換の指定』を参照してください。

• 変換後に、複数の Unicode 文字が同じ文字または類似した文字に対応する。

コンピューターの処理においては、このような Unicode 文字は同一文字として 扱われ、相互に代替文字として使用されます。このユーティリティーを使用し て、正しい代替文字が使用されるように設定できます。詳細については、 470 ページの『代替文字の指定』を参照してください。

# 変換の指定

同じ Unicode 文字に変換される複数の Shift-JIS 文字がデータに含まれている場合、ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを使用して、Unicode 文字が常に元の Shift-JIS 文字に変換されるように指定できます。

変換後の Shift-JIS 文字を選択する前に、実際の環境で現在使用されている Shift-JIS 文字を調べる必要があります。特定の環境において、1 つの Unicode 文字に対応付 けることができる Shift-JIS 文字は 1 つだけです。

「変換」タブでは、ネイティブ・エンコーディング文字が 0xYYYY という形式で表示され、Unicode 文字が U+YYYY という形式で表示されます (YYYY はその Unicode 文字を表す 16 進値)。

例えば、「A」という文字は次のように表示されます。

- ネイティブ・エンコーディングでは 0x41
- Unicode では U+0041

各行はマッピング規則を表し、2 文字または 3 文字の Shift-JIS 文字が 1 列目の Unicode 文字と対応しています。

デフォルトでは、1 つの行に表示された Shift-JIS 文字はすべて対応する Unicode 文字に変換されます。例えば、Shift-JIS の 0x8782 と 0xFA59 の 2 つのコードに 対応する文字はどちらも、Unicode の U+2116 に変換されます。

このユーティリティーでは、複数の文字に対する設定を一度に行えます。

#### 手順

1. インストールの場所/bin にあるラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを起動します。

- Microsoft Windows オペレーティング・システムの場合は"rtsconfig.exe"
- UNIX オペレーティング・システムの場合は"rtsconfig"
- 2. 「変換」タブをクリックします。

ヒント:Unicode 文字の隣に漢字などのグリフを表示するには、「表示」メニュ ーの「グリフ」をクリックします。使用しているフォントの種類とサイズによっ ては、一部のグリフを表示できないことがあります。

- 3. 「編集」メニューの「文字を検索」をクリックして、Shift-JIS 文字の 16 進値 を入力します。
- 4. 「**OK**」をクリックします。
- 5. 「最初の Shift-JIS 文字」、「2 番目の Shift-JIS 文字」、または「3 番目の Shift-JIS 文字」列で、Unicode 文字が変換される Shift-JIS 文字を選択しま す。
- 6. 設定するすべての Shift-JIS 文字について、手順 3~5 を繰り返します。
- 7. 次のいずれかの方法で指定内容を保存します。
  - 指定内容の保存のみを行うには、「ファイル」メニューの「保存」をクリックします。
  - 指定内容を保存して適用するには、「ツール」メニューの「設定」をクリックします。

保存のみの場合は、後でその設定を適用できます。詳細については、 471 ページの『変換と代替の適用』を参照してください。デフォルト設定を復元することもできます。詳細については、 472 ページの『変換設定をデフォルトに戻す方法』を参照してください。

設定した内容は、インストールの場所/bin ディレクトリーの shift-jis.xml ファ イルに保存されます。

### 代替文字の指定

変換後も、意味は同じでも外見の異なる文字が Unicode データに含まれていること があります。例えば、全角のチルド (~) と半角のチルドは Unicode では異なるコ ードで表されますが、処理時には同一文字とみなすことができます。

ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを使用して、 このような類似文字のペアを 1 つの文字で代用するように指定できます。例えば、 全角と半角のチルドをともに全角のチルドで代用できます。

「代替」タブでは、Unicode では異なる値で表されるが、通常は同じものとして扱われる文字のペアが 1 列目に表示されます。各行には、代替規則が表示されます。 1 列目には、変換前のデータが表示されます。2 列目には、代替文字の候補が表示されます。

#### 手順

- 1. インストールの場所/bin にあるラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを起動します。
  - Microsoft Windows オペレーティング・システムの場合は"rtsconfig.exe"
  - UNIX オペレーティング・システムの場合は"rtsconfig"

2. 「代替」タブをクリックします。

ヒント:Unicode 文字の隣に漢字などのグリフを表示するには、「表示」メニュ ーの「グリフ」をクリックします。使用しているフォントの種類とサイズによっ ては、一部のグリフを表示できないことがあります。

- 3. 「元のコード」列で、置き換える文字をクリックします。
- 4. 「代替コード」列で、代用する同等の文字をクリックします。

代替文字候補のリストが表示されます。

- 5. リストの中から使用する Unicode 文字をクリックするか、「代替コードを使用 しない」をクリックします。
- 6. 代替するすべての Unicode 文字について、手順 3~5 を繰り返します。
- 7. 次のいずれかの方法で指定内容を保存します。
  - 指定内容の保存のみを行うには、「ファイル」メニューの「保存」をクリックします。
  - 指定内容を保存して適用するには、「ツール」メニューの「設定」をクリックします。

保存のみの場合は、後でその設定を適用できます。詳細については、 469 ページの『変換の指定』を参照してください。デフォルト設定を復元することもできます。詳細については、 472 ページの『変換設定をデフォルトに戻す方法』を参照してください。

設定した内容は、インストールの場所/bin ディレクトリーの shift-jis.xml ファ イルに保存されます。

# 変換と代替の適用

保存時に変更内容を適用しなかった場合は、後でデータを適用できます。インスト ールの場所/bin/shift-jis.xml ファイルに保存されている情報に基づいて、次の 2 つのファイルが生成されます。

- 代替データに関する"i18n_res.xml"
- 変換データに関する"ibm-943_P14A-2000.cnv"

### このタスクについて

デフォルトでは、データの適用時に文字のラウンド・トリップ・セーフティーがチェックされません。設定モードをセットする際、実行時にラウンド・トリップ・セ ーフでない文字が検出された場合に変換エラーを返すオプションを選択すると、ラ ウンド・トリップ・セーフティーをチェックできます。これにより、設定する必要 がある Shift-JIS 文字を最初に検出できて便利です。

#### 手順

- 1. IBM Cognos Analytics を停止します。
- ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーで、「ツ ール」メニューの「設定モードをセット」をクリックします。
- 3. 文字のラウンド・トリップ・セーフティーをチェックするかどうかを指定しま す。

- 4. 「ツール」メニューの「設定」をクリックします。
- 5. IBM Cognos Analytics を開始します。

## 変換設定をデフォルトに戻す方法

設定データおよび代替データはいつでも簡単にデフォルトの設定に戻せます。例え ば、次のような場合にデフォルトの設定に戻せます。

- 異なる設定が必要な異なるデータ・ソースを使用するようにアプリケーションを 設定した後
- プロトタイピングを行った後

### 手順

- 1. IBM Cognos Analytics を停止します。
- ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーで、「ツ ール」メニューの「デフォルトに戻す」をクリックします。

デフォルト値を使用するよう変換プロセスが設定されます。

3. IBM Cognos Analytics を開始します。

# Series 7 PowerPlay Web レポートの変換の指定

IBM Cognos Series 7 は、Shift-JIS エンコード方式の日本語のベンダー定義文字 (VDC) のソリューションに制限があります。PowerPlay Web レポートと IBM Cognos Analytics を併用する場合は、データの整合性と一貫性を確保するために、 文字のマッピングをデフォルト値に設定する必要があります。

### 手順

- 1. IBM Cognos Analytics を停止します。
- ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを起動し ます。 469 ページの『ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユ ーティリティー』を参照してください。
- 3. 「ツール」メニューの「デフォルトに戻す」をクリックします。
- 4. 「ツール」メニューの「設定」をクリックします。

変換テーブルがバックグラウンドでデフォルト値を使用するように設定されま す。

- 5. ラウンド・トリップ・セーフティー Configuration ユーティリティーを閉じま す。
- 6. IBM Cognos Analytics を開始します。

# 付録 C. 初期アクセス権

IBM Cognos Analytics で Content Manager によって Content Store が初期化されるときに、基本的な構造とセキュリティー情報が作成されます。こうした構造には、フォルダーの階層が含まれます。

Content Manager には、以下のフォルダーとフォルダー・コンテンツが含まれています。

/Root 階層における"/Root"の下のすべてのフォルダー

/Root/ディレクトリー

認証プロバイダーに関する情報、および通常ディレクトリー・サービス内に あるその他の情報

/Root/ディレクトリー/Cognos Cognos グループ、データ・ソース、配布リスト、連絡先などが属してい る、Cognos のディレクトリー・ネームスペース

/Root/Directory/<他のプロバイダー>

LDAP、Active Directory など、他のセキュリティー・ネームスペース

/Root/共有フォルダー

Content Manager 内にあるすべてのアプリケーション・データ

/Root/Directory/<アプリケーション・パッケージ>

アプリケーションに関する情報が格納される、アプリケーション別のフォル ダー

/Root/設定

すべての Cognos コンポーネントとテンプレートの設定データ

/Root/機能

特性 (管理、Reporting、Query Studio など) および特殊機能 (ユーザー定 義 SQL やバーストなど) に対するアクセスを制限するポリシーによって保 護できるオブジェクト

/Root/インポート

Content Manager にインポートされた各アーカイブの配布情報

/Root/エクスポート

Content Manager からエクスポートされた各アーカイブの配布情報

初期設定を変更して IBM Cognos ソフトウェアを保護することを推奨します。詳細 については、 255 ページの『第 15 章 セキュリティーの初期設定』および 223 ペ ージの『第 12 章 アクセス権と資格情報』を参照してください。

# ルートおよび最上位の Content Manager オブジェクトの初期アクセス権

IBM Cognos Analytics で Content Manager によって Content Store が初期化さ れるときに、基本的な構造とセキュリティー情報が作成されます。こうした構造に は、ルートおよび最上位の Content Manager オブジェクトの初期アクセス権が含 まれます。

ルート・オブジェクト

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

ポリシー 読み取り 書き込み 実行 設定 通過 グループまたは役 Co 1 4 オブジェクト 割 Root すべてのユーザー χ Х Х

表 91. ルート・オブジェクト、および関連するグループまたは役割の権限

### 最上位の Content Manager オブジェクト

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 92. 最上位の Content Manager オブジェクト、および関連するグループまたは役割の権限

		読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
オブジェクト	グループまたは役 割		Ø	68	â	4
機能	ディレクトリー管 理者				х	Х
	すべてのユーザー					Х
設定	サーバー管理者	X	Х	Х	Х	Х
	すべてのユーザー			Х		Х
共有フォルダー	レポート管理者	Х	Х	Х	Х	Х
	作成者	Х	Х	Х		Х
	クエリー・ユーザ	Х		Х		Х
	-					
	使用者	X		Х		Х
	Express [®] 作成者	X	Х	Х		Х
	読者	Х				Х
エクスポート	レポート管理者	Х	Х	Х	Х	Х
インポート	レポート管理者	Х	Х	Х	Х	Х
ディレクトリー	すべてのユーザー					Х

# 機能に対する初期アクセス権

IBM Cognos Analytics で Content Manager によって Content Store が初期化されるときに、基本的な構造とセキュリティー情報が作成されます。こうした構造には、機能に対する初期アクセス権が含まれます。

機能は、保護されている機能や保護されている特性とも呼ばれます。

### Adaptive Analytics 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	68	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

表 93. Adaptive Analytics 機能、および関連するグループと役割の権限

### Administration (管理) 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 94. Administration (管理) 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	C	â	
ディレクトリー管理者			Х	Х	Х
ライブラリー管理者			Х		Х
Mobile 管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
ポータル管理者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
レポート管理者			Х		Х
サーバー管理者			Х		Х

以下の表の保護された特性は、Administration (管理)機能の子です。

		読み取	書き込		ポリシ	
		り	み	実行	一設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		P	69	2	4
Adaptive Analytics 管理	Adaptive Analytics 管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理 者				Х	х
管理タスク	サーバー管理者			Х		Х
	レポート管理者			Х		Х
	評価指標管理者			Х		Х
	Controller 管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理 者				Х	Х
	PowerPlay 管理者			Х		Х
システムの設定	サーバー管理者			Х		Х
と管理	ディレクトリー管理 者				Х	Х
Controller 管理	Controller 管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理 者				Х	Х
データ・ソース 接続	ディレクトリー管理 者			Х	X	
	モデル作成者			Х		Х
配布リストと連 絡先	ディレクトリー管理 者			Х	Х	Х
Mobile 管理	ディレクトリー管理 者				X	Х
	Mobile 管理者			Х		Х
個人用データ・ セットの管理	ディレクトリー管理 者				X	Х
	サーバー管理者			X		Х
Planning 管理	Planning Rights 管 理者			х		Х
	ディレクトリー管理 者				Х	Х
PowerPlay サー バー	ディレクトリー管理 者				Х	Х
	PowerPlay 管理者			Х		Х
プリンター	ディレクトリー管理 者			Х	Х	Х
Query サービス 管理	ディレクトリー管理 者				X	Х
	サーバー管理者			Х		Х

表 95. Administration (管理)機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

		読み取	書き込		ポリシ	
		り	み	実行	一設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		Ø	Co	ĥ	4
処理とスケジュ	レポート管理者			Х		Х
ールの実行	評価指標管理者			Х		Х
	Controller 管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
	PowerPlay 管理者			Х		Х
機能の設定とユ	ディレクトリー管理			Х	Х	Х
ーザー・インタ	者					
ーフェース・プ						
ロファイルの管						
理						
スタイルとポー	ポータル管理者			Х		Х
トレット	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
	ライブラリー管理者			Х		Х
ユーザー、グル	ディレクトリー管理			Х	Х	Х
ープ、および役	者					
割						

表 95. Administration (管理) 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限 (続き)

# Analysis Studio 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 96. Analysis Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	62	ĥ	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

# Cognos Insight 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表	97.	Cognos	Insight	機能、	および関連するグループと役割の権限
---	-----	--------	---------	-----	-------------------

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	62		4
ディレクトリー管理者				Х	Х

# Cognos Viewer 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 98. Cognos Viewer 機能、および関連するグループと役割の権限

				ポリシー	
	読み取り	書き込み	実行	設定	通過
グループまたは役割		Ø	65	â	4
分析のユーザー			X		Х
Analytics エクスプローラー			X		Х
Analytics ユーザー			X		X
作成者			X		Х
使用者			X		X
ディレクトリー管理者				X	Х
情報配布			X		Х
モデル作成者			Х		Х
PowerPlay 管理者			X		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			X		Х
読者			Х		Х
レポート管理者			X		X
				-	

以下の表の保護された特性は、Cognos Viewer 機能の子です。

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
		m	1		8	
保護された特性	グループまたは役割			9		
ショートカッ	レポート管理者			Х		Х
ト・メニュー	作成者			Х		Х
選択アイテム	使用者			Х		Х
N7 11 1.V	クエリー・ユーザー			Х		Х
9-107(-	分析のユーザー			Х		Х
	読者			Х		Х
	Express 作成者			Х		Х
	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
	PowerPlay 管理者			Х		Х
	PowerPlay ユーザー			Х		Х
オプションを指	レポート管理者			Х		Х
定して実行	作成者			Х		Х
	使用者			Х		Х
	クエリー・ユーザー			Х		Х
	分析のユーザー			Х		Х
	Express 作成者			Х		Х
	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
	PowerPlay 管理者			Х		Х
	PowerPlay ユーザー			Х		Х

表 99. Cognos Viewer 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

# Collaborate 機能

表 100. Collaborate 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		()	62	ĥ	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
使用者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х

				ポリシー	
	読み取り	書き込み	実行	設定	通過
グループまたは役割		Ø	65	ĥ	4
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			X		Х

表 100. Collaborate 機能、および関連するグループと役割の権限 (続き)

以下の表の保護された特性は、Collaborate 機能の子です。

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割			69	Å	4
コラボレーショ	分析のユーザー			Х		Х
ン機能を許可	作成者			Х		Х
コラボレーショ	使用者			Х		Х
ン・ツールを起	ディレクトリー管理				Х	Х
動	者					
	Express 作成者			Х		Х
	PowerPlay 管理者			Х		Х
	PowerPlay ユーザー			Х		Х
	クエリー・ユーザー			Х		Х
	レポート管理者			Х		Х

表 101. Collaborate 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

### Controller Studio 機能

表 102. Controller Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	Co	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

# 「ダッシュボード」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

				ポリシー	
	読み取り	書き込み	実行	設定	通過
グループまたは役割		P	C.	ĥ	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics 管理者			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
情報配布			権限が拒 否されま した		権限が拒 否されま した
ライブラリー管理者			Х		Х
Mobile 管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
ポータル管理者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			Х		Х
サーバー管理者			Х		Х
テナント管理者			Х		Х

表 103. 「ダッシュボード」機能、および関連するグループと役割の権限

# Data Manager 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 104. Data Manager 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	C.	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

# 「データ・セット」機能

				ポリシー	
	読み取り	書き込み	実行	設定	通過
グループまたは役割		Ø	60	ĥ	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			Х		Х

表 105. 「データ・セット」機能、および関連するグループと役割の権限

# デスクトップ・ツール機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 106. デスクトップ・ツール機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	C.	ĥ	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х

# **Detailed Errors** 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 107. Detailed Err	ors 機能、	および関連する	グループ	。と役割の権限
---------------------	---------	---------	------	---------

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	S.	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

# Drill Through Assistant 機能

表 108. Drill Through Assistant 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		N	S.	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

# Event Studio 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 109. Event Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	62	ĥ	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

# Execute Indexed Search 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	C.	â	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics エクスプローラー					
Analytics ユーザー					
作成者					
使用者					
情報配布					
モデル作成者					
PowerPlay 管理者					
PowerPlay ユーザー					
クエリー・ユーザー					
読者					
レポート管理者					
ディレクトリー管理者				X	X

表 110. Execute Indexed Search 機能、および関連するグループと役割の権限

## **Executive Dashboard** 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー設定	通過
グループまた は役割		N	Sec. 1		<u>*</u>
分析のユーザ ー			X		Х
Analytics 管理 者			Х		Х
Analytics エク スプローラー			Х		Х
Analytics ユー ザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリ ー管理者				х	Х
情報配布			権限が拒否さ れました		権限が拒否さ れました
ライブラリー 管理者			Х		Х
Mobile 管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
ポータル管理 者			X		Х
PowerPlay 管 理者			X		Х
PowerPlay ユ ーザー			Х		Х
クエリー・ユ ーザー			Х		Х
レポート管理 者			X		Х
サーバー管理 者			X		Х
テナント管理 者			X		Х

表 111. Executive Dashboard 機能、および関連するグループと役割の権限

以下の表の保護された特性は、Executive Dashboard 機能の子です。

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		1	S.	ă	4
拡張ダッシュボ	作成者			Х		Х
ード機能の使用	ディレクトリー管理				X	Х
インタラクティ	者					
ブ・ダッシュボ	クエリー・ユーザー			Х		Х
ード機能の使用	レポート管理者			Х		Х

表 112. Executive Dashboard 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

# External Repositories 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 113. External Repositories 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	6	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			X		Х

以下の表の保護された特性は、External Repositories 機能の子です。

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 114. External Repositories 機能の保護された特性、およひ関連するクルーフと役
-------------------------------------------------------

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		P	CS C	ĥ	
リポジトリー接	ディレクトリー管理				Х	Х
続の管理	者					
外部ドキュメン	ディレクトリー管理				Х	Х
トの表示	者					
	すべてのユーザー			Х		Х

### CSV 出力の生成

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	68	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			Х		Х

表 115. 「CSV 出力の生成」機能、および関連するグループと役割の権限

### PDF 出力の生成

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 116. 「PDF 出力の生成」機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	60	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			Х		Х

### **XLS** 出力の生成

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 117. 「XLS 出力の生成」機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		N	C.	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			Х		Х

## XML 出力の生成

表 118. 「XML 出力の生成」機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	60 20	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			X		Х

# Glossary 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 119. Glossary 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	C.	ĥ	4
すべてのユーザー			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х

### Hide Entries 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 120. Hide Entries 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	诵调
グループまたは役割		Ø	8 8	ă	4
すべてのユーザー			X		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х

### 「リレーショナル・メタデータのインポート」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 121. 「リレーショナル・メタデータのインポート」機能、および関連するグループと役 割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	62	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
レポート管理者			Х		Х

# Lineage (系統) 機能

表 122. Lineage (系統)機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	68	Ê	4
すべてのユーザー			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х

### 「コンテンツの管理 (Manage content)」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 123. 「コンテンツの管理 (Manage content)」機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	Co.	â	4
ライブラリー管理者			Х		Х
Mobile 管理者					
ポータル管理者					
PowerPlay 管理者					
レポート管理者					
サーバー管理者					
ディレクトリー管理者			Х	Х	Х

# 「自分のデータ・ソース・サインオンを管理」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 124. 「自分のデータ・ソース・サインオンを管理」機能、および関連するグループと役 割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	68	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

### Metric Studio 機能

ポリシー 読み取り 書き込み 実行 設定 通過 Co 1 4 グループまたは役割 Analytics エクスプローラー Х Х ディレクトリー管理者 Х Х

表 125. Metric Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

### Mobile 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

				ポリシー	
	読み取り	書き込み	実行	設定	通過
グループまたは役割		P	^I Y	Ĩ	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
情報配布			Х		Х
Mobile 管理者			Х		Х
Mobile ユーザー			Х		Х

表 126. Mobile 機能、および関連するグループと役割の権限

## Planning Contributor 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 127. Planning Contributor 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	60 80	ĥ	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

### PowerPlay Studio 機能

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	60 20	ĥ	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х

表 128. PowerPlay Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

# Query Studio 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	6	Ê	4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

表 129. Query Studio 機能、および関連するグループと役割の権限

以下の表の保護された特性は、Query Studio 機能の子です。
		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		P	68	â	
作成	作成者			Х		Х
詳細	クエリー・ユーザー			Х		Х
нгие	レポート管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					

表 130. Query Studio 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

## **Report Authoring** 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 131. Reporting 機能、および関連するグループと役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	68	ĥ	4
Analytics エクスプローラー			X		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
ライブラリー管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

以下の表の保護された特性は、Reporting 機能の子です。

表 132. Reporting 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割			Ŷ	ă	4
バースト	作成者			Х		Х
レポートの	レポート管理者			Х		Х
HTML アイテム	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
ユーザー定義						
SQL						

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		P	Co Co	ĥ	4
作成/削除	作成者			Х		Х
	レポート管理者			Х		Х
	ディレクトリー管理				Х	Х
	者					
	Express 作成者			Х		Х
外部データを許	ディレクトリー管理				Х	Х
可	者					

表 132. Reporting 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限 (続き)

# Scheduling 機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表	133.	Scheduling	機能、	および関連する	グルー	プと役割の権限
---	------	------------	-----	---------	-----	---------

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	6	â	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
使用者					Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

以下の表の保護された特性は、Scheduling 機能の子です。

		読み取			ポリシー	
		り	書き込み	実行	設定	通過
保護された特性	グループまたは役割		1	S.	ă	4⊾
日単位のスケジ	分析のユーザー			Х		Х
ュール	作成者			Х		Х
時間単位のスケ	使用者			Х		Х
ジュール	Controller 管理者			Х		Х
分単位のスケジ	Controller ユーザー			Х		Х
ユール	ディレクトリー管理 者				Х	Х
月単位のスケジ	Express 作成者			Х		Х
ュール	評価指標管理者			Х		Х
トリガー単位の	評価指標作成者			Х		Х
スケジュール	クエリー・ユーザー			Х		Х
週単位のスケジ	レポート管理者			Х		Х
ュール	PowerPlay 管理者			Х		Х
年単位のスケジ	PowerPlay ユーザー			Х		Х
ユール	レポート管理者			Y		Y
大方シュール後	· · · · 自生有 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			N V		x x
	叶仙泪惊自垤有 Controllor 答理老					
	Controller 自生有			<u>л</u>		<u>л</u>
	アイレクトリー管理   者				X	Х
	PowerPlay 管理者			Х		Х

#### 表 134. Scheduling 機能の保護された特性、および関連するグループと役割の権限

#### 「セルフサービス・パッケージ・ウィザード」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 135. 「セルフサービス・パッケージ・ウィザード」機能、および関連するグループと役 割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		N	C.		4
ディレクトリー管理者			Х	Х	Х

## 「エントリー固有の機能の設定」機能

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		N	60 20	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х

表 136. 「エントリー固有の機能の設定」機能、および関連するグループと役割の権限

## スナップショット機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 137. スナップショット機能、および関連するグループと役割の初期権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		Ø	C.	â	4
ディレクトリー管理者				Х	Х
すべてのユーザー			Х		Х
モデル作成者			Х		Х

## 「仕様の実行」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 138. 「仕様の実行」機能、および関連するグループと役割の初期権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		<i></i>	C.		⚠
ディレクトリー管理者				Х	Х

# ファイルのアップロード (Upload files)

表 139. 「ファイルのアップロード (Upload files)」機能、および関連するグループと役割の 権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		1	C.	<b></b>	4
分析のユーザー			Х		Х
Analytics 管理者			Х		Х

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割			C.		4
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
情報配布			権限が拒 否されま した		権限が拒 否されま した
ライブラリー管理者			Х		Х
Mobile 管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
ポータル管理者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			Х		Х
サーバー管理者			Х		Х

表 139. 「ファイルのアップロード (Upload files)」機能、および関連するグループと役割の 権限 (続き)

# 「監視規則」機能

表 140. 「監視規則」機能、および関連するグループと役割の権限

	きっ 雨 い	書といっ	中仁	ポリシー	)え,但
	記み取り	書さ込み	夫仃	設定	地迥
グループまたは役割		Ø	C.	â	<b>≜</b>
分析のユーザー			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
使用者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
モデル作成者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			Х		Х

# 「Web ベース・モデリング (Web-based modeling)」機能

以下の表では、文字 X は、オブジェクトに対してグループまたは役割に権限が付与 されていることを示します。

表 141. 「Web ベース・モデリング (Web-based modeling)」機能、および関連するグループ と役割の権限

	読み取り	書き込み	実行	ポリシー 設定	通過
グループまたは役割		P	S.	â	4
Analytics 管理者			Х		Х
Analytics エクスプローラー			Х		Х
Analytics ユーザー			Х		Х
作成者			Х		Х
ディレクトリー管理者				Х	Х
情報配布			権限が拒 否されま した		権限が拒 否されま した
ライブラリー管理者			X		X
Mobile 管理者			Х		Х
モデル作成者			Х		Х
ポータル管理者			Х		Х
PowerPlay 管理者			Х		Х
PowerPlay ユーザー			Х		Х
クエリー・ユーザー			Х		Х
レポート管理者			X		X
サーバー管理者			X		X
テナント管理者			X		X

# 付録 D. サンプル・データベースのローカライズ

IBM Cognos ソフトウェアに付属しているサンプル・データベースでは、多言語レ ポート作成環境のデモンストレーションを行うことができます。

サンプルには、名前や説明などのテキスト・フィールドが 23 カ国語で格納されて います。

この付録では、サンプル・データベースにデータを格納する方法と、多言語データ を使用できるようにサンプル・データベースを設定する方法について説明します。

サンプルについて詳しくは、「IBM Cognos Analytics Samples Guide」を参照してください。

# 1 言語につき 1 列

この構造のテーブルには 23 列があり、1 つの言語に 1 つの列が割り当てられています。

また、各列に格納されている言語を示すために、論理的な命名規則が採用されてい ます。各列の名前の最後には、英語の場合は"_EN"、フランス語の場合は"_FR"など の言語コードのサフィックスが付加されています。例えば、国または地域に関する 情報が格納されている "COUNTRY_FR" という名前の列にはフランス語のデータ が、"COUNTRY_DE" という名前の列にはドイツ語のデータが格納されています。 "PRODUCT_LOOKUP"以外のすべてのテーブルがこの構造になっています。

# モデル内での使用言語 (列)の確定

Framework Manager では、データ・ソース・クエリー・サブジェクトの SQL に マクロを挿入することにより、特定のデータ列を取得することができます。このク エリー・サブジェクトではマクロを使用してロケール設定を適用し、言語コードを 返します。ロケールにより、文字の種類、照合順序、日時の形式、通貨単位、およ びメッセージに使用する言語や規約の情報が決まります。

マクロ runLocale を実行すると、パラメーター・マップを使用して、ユーザーが必要とするコンテンツ言語が列名の全体または一部分に変換されます。この列名が SQL で置換され、その後でクエリーが実行されます。

サンプル・データベースでは、列名のサフィックスとして言語コードが使用されま す。そのためマクロは、パラメーター・マップを使用して有効な実行ロケールを言 語コードに変換し、言語コードを列の基本名に連結します。

## サンプル・クエリー

このサンプル・クエリー内のマクロを実行すると、runLocale セッション変数を Language_lookup パラメーター・マップのキーとして使用し、 列名のサフィックスとして使用する言語コードが返されます。次の SELECT 文で は、言語がフランス語である場合、マクロは"COUNTRY_FR"という列名を生成しま す。

Select COUNTRY.COUNTRY_CODE, #'COUNTRY.COUNTRY_' + \$Language_lookup{\$runLocale}# as Product_Line from [great outdoors].COUNTRY

Framework Manager は柔軟性が高いため、ユーザーはこのサンプルで使用されて いる命名方法を利用する必要はありません。多言語の列に名前をつける際には、任 意の命名方法を使用できます。必要に応じて、命名方式をパラメーター・マップに エンコードすることもできます。また、任意のセッション変数をパラメーター・マ ップのキーとして使用し、SQL 構文を取得することができます。この SQL 文は、 実行時には置き換える必要があります。詳細については、「Framework Manager ユ ーザー・ガイド」を参照してください。

# 1 言語につき 1 行

この構造では、言語を識別するコード列が設定された別々の行が各文字列値に割り 当てられています。

データにはフィルターが適用され、必要な言語データが格納されている行のみが返 されます。通常、多言語データは個別のテーブルに格納されます。これは、記述型 でないデータや単一言語データとの重複を避けるためです。

サンプル・データベースでは、データ・テーブル内にプライマリー・キーと単一言 語データ (日付情報など) が格納されています。多言語テーブルには、データと複合 キーが格納されています。複合キーは、外部キーと言語コードで構成されていま す。例えば、"PRODUCT_NAME_LOOKUP"テーブルには"PRODUCT_NUMBER" 列、"PRODUCT_LANGUAGE"列、および"PRODUCT_NAME"列があり、 "PRODUCT_NUMBER"列と"PRODUCT_LANGUAGE"列がプライマリー・キーにな っています。ローカライズされた各アイテムは、23 個の行で表されます。1 つの言 語に対して、1 つの行になります。

次の外部キー・テーブルには、ローカライズされた 1 つ以上のアイテムが格納され ています。

プライマリー・キー・テーブ		
N	外部キー・テーブル	Database
製品名	PRODUCT_NAME _LOOKUP	GOSALES
SLS PRODUCT DIM	SLS_PRODUCT _LOOKUP	GOSALESDW

表 142. ローカライズされたアイテムを含んだ外部キー・テーブルの例

サンプル・データベースでは、ISO の言語コードを使用して、各データ行を示して います。

# モデル内での言語(行)の確定

Framework Manager では、データ・ソース・クエリー・サブジェクトの SQL に マクロを挿入することにより、特定のデータ行を取得することができます。

このクエリー・サブジェクトではマクロを使用してロケール設定を適用し、言語コードを返します。

## サンプル・クエリー

次のサンプル・クエリー内のマクロは、runLocale セッション変数を Language_lookup パラメーター・マップのキーとして使用し、対応する言語コード を返します。sq() 関数を指定することにより、マクロの戻り値が一重引用符で囲ま れ、有効な SQL フィルター述語が生成されます。次の SELECT 文では、ドイツ語 がロケールである場合、マクロは言語を"DE" (ドイツ語) として識別し、フィルター を生成します (PRODUCT_MULTILINGUAL."LANGUAGE" = 'DE')。

Select P.INTRODUCTION DATE, P.PRODUCT TYPE CODE, P.PRODUCTION COST, P.MARGIN, PRODUCT LOOKUP.PRODUCT NUMBER as PRODUCT NUMBER1, PRODUCT_LOOKUP."PRODUCT_LANGUAGE", PRODUCT LOOKUP.PRODUCT NAME, PRODUCT_LOOKUP.PRODUCT_DESCRIPTION From gosales].PRODUCT as P, [gosales].PRODUCT LOOKUP Where P.PRODUCT NUMBER = PRODUCT LOOKUP.PRODUCT NUMBER and (PRODUCT LOOKUP."PRODUCT_LANGUAGE" = #sq(\$Language_lookup{\$runLocale})#)

# 文字変換と当該国表記拡張

アジア言語の文字変換用のテーブルには、同等の情報を持つ2つの列があります。

1 つ目の列には、ラテン文字セットを使用した文字列値が表示されます。2 つ目の 列には、アジア文字セットとラテン文字セットの両方を使用した文字列が表示され ます。"_MB"をサフィックスとして追加する命名規則が使用されます。

ラテン文字のみの列では、文字変換によって、"_MB"列で定義された値と音声的に同 じ値を定義します。

次に示すテーブルには、文字変換された値が格納される列があります。

表	143.	同等の変換値を持つ列、	例

表	Database
ORDER_HEADER	GOSALES
RETAILER	GOSALES
RETAILER_SITE _MB	GOSALES

表 143. 同等の変換値を持つ列、例 (続き)

表	Database
BRANCH	GOSALES
EMPLOYEE	GOSALES

## モデル内での文字変換

次の例では、2 つのテーブルのクエリー・サブジェクトを基準にして単一のデー タ・ソースを作成します。2 つのテーブルは、一方のテーブルでアジア文字セット を使用していることを除いて同一です。

サフィックス"_MB"で終わる名前を持つ列には、アジア文字 (漢字など)を使用した アジアに関連するデータが格納されます。これにより重複部分が削除され、モデル 内の他のクエリー・サブジェクトに対する関係を定義しやすくなります。

Select RS.RTL RETAILER SITE CODE, RS.RTL RETAILER CODE, RS.RTL_ADDRESS1, RS.RTL_ADDRESS2, RS.RTL_CITY, RS.RTL_REGION, RS.RTL_POSTAL_ZONE, RS.RTL COUNTRY_CODE, RS.RTL ACTIVITY STATUS CODE, RS MB.RTL ADDRESS1 as Address1 MB. RS MB.RTL ADDRESS2 as Address2 MB, RS MB.RTL CITY as City MB, RS_MB.RTL_REGION as Region_MB from [goretailers].RETAILER SITE as RS, [goretailers].RETAILER SITE MB as RS MB パラメーターの説明 RETAILER_SITE.RETAILER_SITE_CODE = RETAILER_SITE MB.RETAILER SITE CODE

### 当該国表記拡張

モデル内でクエリー・サブジェクトを定義すると、"_MB"という拡張子を持つアイテムの名前が、当該国表記拡張によって変更されます。例えば「番地等 1 (当該国表記)」となり、使いやすさと読みやすさが向上します。

### 条件付き表示形式に対する当該国表記拡張の使用

当該国表記拡張の使用例として、郵送先住所があります。この場合、郵送先住所で 当該国表記拡張の値を使用することによって、住所ラベルがその国の取り扱いと配 達に合わせて設定されます。

住所ラベルに値を追加するには、"GO 販売と GO 小売業者"モデルに条件付き表示 形式を適用し、海外の住所形式を生成します。

次の例では、住所欄 3 はユーザーが定義した計算の名前であり、住所ラベルの 3 行目を生成するために使用されます。この式では、国または地域コードの値を使用 して、行の表示形式の方法を指定しています。

```
if ([Retailers].[Retailer
site].[Country or region code] = 6) then
(' ' + [Retailers].[Retailer
site].[Address 1 (multiscript)])
else
if ([Retailers].[Retailer site].[Country or region
code] = 8) then
([Retailers].[Retailer site].[Address
2 (multiscript)])
else
if ([Retailers].[Retailer site].[Country or region
code] = 13) then
([Retailers].[Retailer site].[Region
(multiscript)] + ' ' + [Retailers].[Retailer
site].[City (multiscript)]
+ ' ' + [Retailers].[Retailer
site].[Address 1 (multiscript)] + '
' + [Retailers].[Retailer site].[Address
2 (multiscript)])
else
if ([Retailers].[Retailer site].[Country or region
code] = 14) then
([Retailers].[Retailer site].[Address
2 (multiscript)])
else
([Retailers].[Retailer site].[Address
1 (multiscript)])
```

当該国表記拡張を利用することにより、どの言語を使うユーザーも同じモデル列を 使用して住所ブロックを作成し、配達先に合わせて表示形式が設定された住所を確 認することができます。詳細については、"GO 販売 _GO 小売業者"というサンプ ル・モデル内にある"住所 (郵送先)"というデータ・ソース・クエリー・サブジェク トを参照してください。

# 付録 E. データ・ソース・コマンドのスキーマ

データ・ソース接続の作業を行う際は、データ・ソース・コマンドの追加または編 集も行えます。

データ・ソース・コマンドは、クエリー・エンジンによってデータベース上での接続の開始やユーザー・セッションの終了など特定の処理が行われる際に実行されます。例えば、データ・ソース・コマンドを使用して、Oracle プロキシー接続や仮想 プライベート・データベースの設定が可能です。詳細については、168ページの 『IBM Cognos コンテキストをデータベースに渡す方法』を参照してください。

データ・ソース・コマンド・ブロックは、データベースが実行するコマンドを指定 するのに使用される XML ドキュメントです。

このドキュメントには、コマンド・ブロックを定義する XML スキーマの各要素に ついての参考資料が記載されています。

各要素の説明の後に、次の項目について記述されています。

- 要素に指定できる子要素または必須の子要素
- 要素を収容できる親要素

この他に、コマンド・ブロックでの要素の使用方法を示すサンプル・コードも記載 されています。

各要素の子要素のリストは、DTD モデル・グループとして表されます。また要素は 出現順に記述されています。記述には次の表に示す表記規則を使用します。

表 144. データ・ソース・コマンド編集用の標準表
----------------------------

記号	意味
プラス記号 (+)	前にある要素が 2 回以上繰り返されること がありますが、少なくとも、1 回は、出現す ることを意味します。
疑問符 (?)	前にある要素はオプションです。この要素は 存在しないか、または 1 回のみ出現しま す。
アスタリスク (*)	要素の後にアスタリスク (*) があると、要素 はオプションであることを表します。要素は 0 回以上、出現します。
なし	要素の後にプラス記号 (+)、疑問符 (?)、アス タリスク (*) のいずれも続かない場合、その 要素は 1 回のみ出現します。

表 144. データ・ソース・コマンド編集用の標準表記 (続き)

記号	意味
括弧	要素は括弧によってグループ化されます。要 素グループは、要素と同じ記号を使って制御 されます。
バー ( )	要素間にあるバー (I) は、列記された要素の いずれかが出現することを表します。
コンマ (,)	コンマによって区切られた要素が、指定順に 出現することを表します。

### commandBlock

特定のイベントが発生したときにデータベースが実行するコマンドのグループを定 義します。これはスキーマのルート要素です。

#### commandBlock 要素の子要素

(commands) +

#### commandBlock 要素の親要素

commandBlock 要素に親要素はありません。

#### commands

データベースが実行する一連のコマンドを指定します。コマンドは、 commandBlock に記述されている順序で実行されます。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<argument>
<rname>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>PROXY_USER1</value>
</argument>
</arguments>
</sessionStartCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

## commands 要素の子要素

(sessionStartCommand | sessionEndCommand | setCommand | sqlCommand) *

#### commands 要素の親要素

commandBlock

# sessionStartCommand

データベースでプロキシー・セッションの開始に使用するコマンドを定義します。

各 commandBlock には sessionStartCommand が 1 つのみ存在します。 commandBlock に複数の sessionStartCommand がある場合、最後のもののみがプ ロキシー・セッションで使用されます。

```
commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。
```

<commandblock></commandblock>
<commands></commands>
<sessionstartcommand></sessionstartcommand>
<arguments></arguments>
<argument></argument>
<pre><name>OCI ATTR USERNAME</name></pre>
<value>PROXY_USER1</value>
<argument></argument>
<pre><name>OCI_ATTR_PASSWORD</name></pre>
<value>password1</value>

### sessionStartCommand 要素の子要素

(arguments) ?

sessionStartCommand 要素の親要素

commands

## sessionEndCommand

データベースでプロキシー・セッションの終了に使用するコマンドを定義します。

sessionEndCommand が指定されていない場合、プロキシー・セッションはデータ ベースから切断される時点で終了します。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionEndCommand>
<arguments/>
</sessionEndCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

### sessionEndCommand 要素の子要素

(arguments) ?

#### sessionEndCommand 要素の親要素

commands

#### arguments

```
コマンドで使用する引数の値を指定します。
```

```
commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。
```

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionEndCommand>
<arguments/>
</sessionEndCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

#### arguments 要素の子要素

(argument) *

#### arguments 要素の親要素

- sessionStart
- sessionEnd

## argument

データベース API の呼び出しに使用される引数の値を定義します。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
  <commands>
    <sessionStartCommand>
      <arguments>
        <argument>
          <name>OCI_ATTR_USERNAME</name>
          <value>PROXY_USER1</value>
        </argument>
        <argument>
            <name>OCI ATTR PASSWORD</name>
            <value>password1</value>
        </argument>
      </arguments>
    </sessionStartCommand>
 </commands>
</commandBlock>
```

#### argument 要素の子要素

```
(name および value)
```

#### argument 要素の親要素

arguments

## setCommand

将来使用される予定の要素です。

# sqlCommand

データベースによって実行されるネイティブの SQL 文を表すコマンドを定義しま す。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql> BEGIN PKG1.STORED_PROC1; END; </sql>
</sqlCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

### sqlCommand 要素の子要素

(sql)

## sqlCommand 要素の親要素

commands

## sql

データベースで実行する SQL 文を指定します。SQL 文はネイティブの SQL でなければなりません。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sqlCommand>
<sql> BEGIN PKG1.STORED_PROC1; END; </sql>
</sqlCommand>
</commands>
</commandBlock>
```

sql 要素の子要素

sql 要素に子要素はありません。

sql 要素の親要素

sqlCommand

#### name

設定する引数を指定します。

name 要素の値は次のいずれかにする必要があります。

- OCI_ATTR_USERNAME
- OCI_ATTR_PASSWORD

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<argument>
<rame>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>PROXY_USER1</value>
</argument>
</arguments>
</sessionStartCommand>
</commandBlock>
```

## name 要素の子要素

name 要素に子要素はありません。

# name 要素の親要素

- argument
- setCommand

# value

引数に使用される値を指定します。

commandBlock 内でこの要素を使用する例を示します。

```
<commandBlock>
<commands>
<sessionStartCommand>
<arguments>
<argument>
<rname>OCI_ATTR_USERNAME</name>
<value>PROXY_USER1</value>
</argument>
</arguments/>
</sessionStartCommand>
</commandBlock>
```

value 要素の子要素

value 要素に子要素はありません。

## value 要素の親要素

- argument
- setCommand

# 付録 F. ログ・メッセージのデータ・スキーマ

ログ・メッセージがデータベースに送信されるように IBM Cognos ソフトウェアを 設定すると、IBM Cognos サービスの開始時にテーブルと各テーブルの列が自動的 に作成されます。

名前とデータベース・キーワードの競合を避けるため、ログ・データベース内のす べての列名にプレフィックス"COGIPF"が付いています。独自のログ・データベー ス・モデルを作成した場合は、モデルのログ記録データベース表にプレフィックス "COGIPF"を追加する必要があります。

# テーブルの定義

ログ・メッセージは、一定の条件においてログ記録データベースのテーブルに記録 されます。これらの条件は、Web ポータルに設定するログ記録レベルによって決ま ります。

ログ記録レベルの詳細については、 18 ページの『ログ・メッセージ』を参照して ください。

ユーザーが IBM Cognos ソフトウェアにログオンすると、セッション ID が割り 当てられ、すべてのログ・メッセージに記録されます。このセッション ID を使用 して、ユーザーが実行するすべての操作を識別できます。

# COGIPF_ACTION テーブル

オブジェクトに対して実行される処理に関する情報を格納する。

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_ IPADDR	ログ・メッセージが生成され るホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_ PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システム によって割り当てられるプロ セス ID。	INTEGER
COGIPF_LOCAL TIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーン の時差。	INTEGER

表 145. COGIPF_ACTION テーブルの列、説明、およびデータ型

表 145. COGIPF_ACTION テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_ BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_ LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_ OPERATION	オブジェクトに対して実行さ れる操作。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェク ト。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGET_PATH	ターゲット・オブジェクトの パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (実行が完 了していない場合は空白、成 功、警告、または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)

# **COGIPF_AGENTBUILD** テーブル

エージェントのメール配信に関する情報を格納する。

表 146. COGIPF_AGENTBUILD テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成され るホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システム によって割り当てられるプロ セス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーン の時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
		NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILD NUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_OPERATION	操作。	VARCHAR (128)
COGIPF_ TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェク ト。	VARCHAR (255)

表 146. COGIPF_AGENTBUILD テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_TARGET_ NAME	対象名。	VARCHAR (512)
COGIPF_ TARGET_PATH	対象パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成 功、警告、または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_AGENT_ PATH	エージェント名。	VARCHAR (1024)
COGIPF_ SCHEDULETIME	対象スケジュール時刻。	INTEGER
COGIPF_USER	エージェントを作成したユー ザー。	VARCHAR (512)
COGIPF_EMAIL	E メール・アドレス。	VARCHAR (512)

# **COGIPF_AGENTRUN** テーブル

タスクや配信などの、エージェントの利用状況に関する情報を格納する。

列名 説明 データ型 ログ・メッセージが生成され VARCHAR (128) COGIPF_ HOST_IPADDR るホスト IP アドレス。 COGIPF_HOST_PORT ホストのポート番号。 INTEGER COGIPF_PROC_ID オペレーティング・システム INTEGER によって割り当てられるプロ セス ID。 ログ・メッセージが生成され **TIMESTAMP** COGIPF_ LOCALTIMESTAMP たローカルの日時。 COGIPF_TIMEZONE_OFFSET | GMT からのタイム・ゾーン | INTEGER の時差。 ユーザー・セッションの英数 | VARCHAR (255) COGIPF_SESSIONID 字 ID。

表 147. COGIPF_AGENTRUN テーブルの列、説明、およびデータ型

表 147. COGIPF_AGENTRUN テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILD NUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_OPERATION	操作。	VARCHAR (128)
COGIPF_ TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェク ト。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGET_PATH	対象パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成 功、警告、または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ ERROR_DETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_AGENTPATH	エージェント名。	VARCHAR (1024)
COGIPF_ SCHEDULETIME	対象スケジュール時刻。	INTEGER
COGIPF_TARGET_ NAME	対象名。	VARCHAR (512)
COGIPF_USER	エージェントを作成したユー ザー。	VARCHAR (512)
COGIPF_EMAIL	E メール・アドレス。	VARCHAR (512)
COGIPF_MESSAGEID	メッセージの ID。	VARCHAR (255)

# **COGIPF_ANNOTATIONSERVICE** テーブル

Annotation サービスの処理に関する監査情報を格納する。

詳細については、 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標』を 参照してください。

表 148. COGIPF_ANNOTATIONSERVICE テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成され るホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システム によって割り当てられるプロ セス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーン の時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ステップの英数字 ID (存在 しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_ LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_OPERATION	オブジェクトに対して実行さ れる操作。	VARCHAR (255)

列名	説明	データ型
COGIPF_TARGET_TYPE	ターゲットのタイプ。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGET_PATH	オブジェクトのパス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_ ANNOTATION	注釈の英数字 ID。	BIGINT
COGIPF_USER	注釈処理 (作成、更新、削除 など) を実行したユーザーの ユーザー ID。	VARCHAR (1024)
COGIPF_PARENT_ID	親オブジェクトの ID。	VARCHAR (1024)
COGIPF_ CREATION_TIME	注釈が作成された日時。	TIMESTAMP
COGIPF_ UPDATE_TIME	注釈が更新された日時。	TIMESTAMP

表 148. COGIPF_ANNOTATIONSERVICE テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

# **COGIPF_EDITQUERY** テーブル

クエリー実行に関する情報を格納する。

表 149. COGIPF_EDITQUERY テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホス ト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによっ て割り当てられるプロセス ID。	INTEGER

列名	説明	データ型
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたロー カルの日時。	TIMESTAMP
	レポートの実行中は、レポートの実 行開始時刻を示します。レポートの 実行完了後は、レポートの実行終了 時刻を示します。	
	実行が完了しているかどうかを確認 するには、COGIPF_STATUS を確 認します。エントリーが空白の場合 は、実行が完了していないことを意 味し、エントリーにデータが存在す る場合は、実行が完了していること を意味します。	
	すでに完了しているレポートの実行 開始時刻を計算するには、 COGIPF_LOCALTIMESTAMP か ら COGIPF_RUNTIME を減算し ます。	
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時 差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	 指示を生成するコンポーネントの名 前。	VARCHAR (64)
COGIPF_ BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメ ジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER

表 149. COGIPF_EDITQUERY テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

表 149. COGIPF_EDITQUERY テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_ TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェクト。	VARCHAR (255)
COGIPF_ QUERYPATH	レポート・パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成功、警 告、または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_RUNTIME	ミリ秒単位のクエリーの実行時間。	INTEGER
COGIPF_ QUERYNAME	クエリーが実行されたレポートの名 前。	VARCHAR (512)
COGIPF_PACKAGE	レポートが関連付けられているパッ ケージ。	VARCHAR (1024)
COGIPF_MODEL	レポートが関連付けられているモデ ル。	VARCHAR (512)

# **COGIPF_HUMANTASKSERVICE** テーブル

Human Task サービスの処理に関する監査情報を格納する (タスクおよび対応する タスク状態)。

詳細については、 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標』を 参照してください。

表 150. COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホス ト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによっ て割り当てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたロー カルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_ TIMEZONE_OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時 差。	INTEGER

列名	説明	データ型
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメ ジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_ OPERATION	オブジェクトに対して実行される操 作 (ADD、UPDATE など)。	VARCHAR (128)
COGIPF_TARGET_TYPE	ターゲットのタイプ。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGET_PATH	オブジェクトのパス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (実行が完了して いない場合は空白、成功、警告、ま たは失敗)。	VARCHAR (50)
COGIPF_ LOGENTRYID	COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブルと COGIPF_HUMANTASKSERVICE _DETAIL テーブルのリンクに使用 されるプライマリー・キー。	VARCHAR (50) NOT NULL
COGIPF_TASKID	タスク ID。	VARCHAR (50)
COGIPF_ TRANSACTION_TYPE	Human Task サービスに固有の、 実行される操作 (claim、 setPriority、 getTaskInfo、 changeSubscription など)。	VARCHAR (255)
COGIPF_USER	COGIPF_TRANSACTION_TYPE でトランザクションを実行したユー ザー。	VARCHAR (255)

表 150. COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_TASK_PRIORITY	タスクの優先度。 • 1 = 高 • 3 = 中 • 5 = 低	INTEGER
COGIPF_TASK_STATUS	タスクのステータス (実行が完了し ていない場合は空白、成功、警告、 または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_ ACTIVATION_TIME	タスクがアクティブ化された時刻。 日時の値は、データベースに長い数 値形式で格納されます。	BIGINT
COGIPF_TASK_ EXPIRATION_TIME	タスクの有効期限が切れた日時。	BIGINT
COGIPF_TASK_NAME	タスクの名前。	NTEXT
COGIPF_TASK_SUBJECT	タスクの件名。	NTEXT
COGIPF_TASK_ DESCRIPTION	タスクの説明。	NTEXT
COGIPF_TASK_ TIMEZONEID	タスクのタイム・ゾーン ID。	VARCHAR (50)
COGIPF_TASK_ ACTUAL_OWNER	タスクの所有者。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_ INITIATOR	タスクの開始者 (作成者)。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_CLASS _NAME	タスクがインスタンスであるタス ク・クラスの名前。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_ CLASS_OPERATION	オブジェクトに対して実行される操 作。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_ COMMENT	タスクに関連するコメント。	VARCHAR (2048)

表 150. COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

# **COGIPF_HUMANTASKSERVICE_DETAIL** テーブル

Human Task サービスの処理に関するその他の詳細を格納する (通知の詳細や人の 役割など、監査エントリーすべてに必要とは限らない)。

詳細については、 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標』を 参照してください。

表 151. COGIPF_HUMANTASKSERVICE_DETAIL テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホ スト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_STEPID	ステップの英数字 ID (存在しない 場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TASKID	タスクの英数字 ID。	VARCHAR (50)
COGIPF_ LOGENTRYID	COGIPF_HUMANTASKSERVICE テーブルと COGIPF_HUMANTASKSERVICE _DETAIL テーブルのリンクに使用 されるプライマリー・キー。	VARCHAR (50) NOT NULL
COGIPF_NOTIFICATION_DETAILS	タスクについて送信される E メー ル通知に関する詳細。	NTEXT
COGIPF_HUMANROLE_USER	タスクの役割を実行するユーザー のユーザー ID。	VARCHAR (255)
	COGIPF_HUMANROLE と組み合 わせて、タスクに対するユーザー の役割を定義します。	
COGIPF_HUMANROLE_ROLE	ユーザーの役割。 COGIPF_HUMAN_USER と組み 合わせて、タスクに対するユーザ ーの役割を定義します。	VARCHAR (50)
COGIPF_SUBSCRIPTION_ OPERATION	登録操作 (SUBSCRIBE、UNSUBSCRIBE な ど)。	VARCHAR (50)

表 151. COGIPF_HUMANTASKSERVICE_DETAIL テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_SUBSCRIPTION_EVENT	ユーザーが登録または登録解除し ているタスク・イベント。	SMALLINT
COGIPF_SUBSCRIPTION_USER	タスク・イベントを登録または登 録解除しているユーザー。	VARCHAR (255)
COGIPF_TASK_MESSAGE	タスク・メッセージ。	NTEXT
COGIPF_TASK_MESSAGE_TYPE	COGIPF_TASK_MESSAGE に格納 されるメッセージのタイプ。 値は、INPUT、OUTPUT、または FAULT です	VARCHAR (20)
COGIPF_DETAIL_ID	拝細レコードの連番。	(50)
		NOT NULL

# **COGIPF_NATIVEQUERY** テーブル

IBM Cognos ソフトウェアが他のコンポーネントに対して行うクエリーに関する情報を格納する。

表 152. COGIPF_NATIVEQUERY テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_ IPADDR	ログ・メッセージが生成され るホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_ PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システム によって割り当てられるプロ セス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーン の時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)

列名	説明	データ型
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR2 (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_ BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_ REQUESTSTRING	他のコンポーネントに対する クエリー要求の文字列。	NTEXT (1G)

表 152. COGIPF_NATIVEQUERY テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

# **COGIPF_PARAMETER** テーブル

コンポーネントによってログに記録されるパラメーター情報を格納する。

表 153. COGIPF_PARAMETER テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_OPERATION	オブジェクトに対して実行さ れる操作。	VARCHAR (255)
COGIPF_TARGET_ TYPE	処理が実行されるオブジェク ト。	VARCHAR (255)
COGIPF_ PARAMETER_NAME	コンポーネントによってログ に記録されたパラメーターの 名前。	VARCHAR (255)

表 153. COGIPF_PARAMETER テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_ PARAMETER_VALUE	コンポーネントによってログ に記録されたパラメーターの 値。	VARCHAR (512)
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_PARAMETER_ VALUE_BLOB	レポート・プロンプト・パラ メーターおよびレポート実行 のオプション。	NTEXT

# **COGIPF_RUNJOB** テーブル

ジョブ実行に関する情報を格納する。

表 154. COGIPF_RUNJOB テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによって割 り当てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたローカル の日時。	TIMESTAMP
	レポートの実行中は、レポートの実行開 始時刻を示します。レポートの実行完了 後は、レポートの実行終了時刻を示しま す。	
	実行が完了しているかどうかを確認する には、COGIPF_STATUS を確認しま す。エントリーが空白の場合は、実行が 完了していないことを意味し、エントリ ーにデータが存在する場合は、実行が完 了していることを意味します。	
	すでに完了しているレポートの実行開始 時刻を計算するには、 COGIPF_LOCALTIMESTAMP から COGIPF_RUNTIME を減算します。	

表 154. COGIPF_RUNJOB テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
		NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存 在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_COMPONENTID	指示を生成するコンポーネントの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメジャ ー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェクト。	VARCHAR (255)
COGIPF_JOBPATH	ジョブ・パス。	VARCHAR (512)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成功、警告、 または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_RUNTIME	   ミリ秒単位のジョブの実行時間。	INTEGER

# **COGIPF_RUNJOBSTEP** テーブル

ジョブ・ステップ実行に関する情報を格納する。

表 155. COGIPF_RUNJOBSTEP テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER

表 155. COGIPF_RUNJOBSTEP テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによって 割り当てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたローカ ルの日時。	TIMESTAMP
	レポートの実行中は、レポートの実行 開始時刻を示します。レポートの実行 完了後は、レポートの実行終了時刻を 示します。	
	実行が完了しているかどうかを確認す るには、COGIPF_STATUS を確認しま す。エントリーが空白の場合は、実行 が完了していないことを意味し、エン トリーにデータが存在する場合は、実 行が完了していることを意味します。	
	すでに完了しているレポートの実行開 始時刻を計算するには、 COGIPF_LOCALTIMESTAMP から COGIPF_RUNTIME を減算します。	
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_COMPONENTID	指示を生成するコンポーネントの名 前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメジ ャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_ TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェクト。	VARCHAR (255)

表 155. COGIPF_RUNJOBSTEP テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_JOBSTEPPATH	ジョブ・ステップ・パス。	VARCHAR (512)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成功、警告、 または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_RUNTIME	ミリ秒単位のジョブ・ステップの実行 時間。	INTEGER

# **COGIPF_RUNREPORT** テーブル

レポート実行に関する情報を格納する。

表 156. COGIPF_RUNREPORT テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによって割 り当てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたローカル の日時。	TIMESTAMP
	レポートの実行中は、レポートの実行開 始時刻を示します。レポートの実行完了 後は、レポートの実行終了時刻を示しま す。	
	実行が完了しているかどうかを確認する には、COGIPF_STATUS を確認します。 エントリーが空白の場合は、実行が完了 していないことを意味し、エントリーに データが存在する場合は、実行が完了し ていることを意味します。	
	すでに完了しているレポートの実行開始 時刻を計算するには、 COGIPF_LOCALTIMESTAMP から COGIPF_RUNTIME を減算します。	
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時差。	INTEGER
表 156. COGIPF_RUNREPORT テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
		NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存 在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_COMPONENTID	指示を生成するコンポーネントの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメジャ ー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェクト。	VARCHAR (255)
	<ul> <li>値は次のとおりです。</li> <li>Report ReportService: 双方向レポート</li> <li>PromptForward ReportService: プロンプト後に生成されるレポート</li> <li>PromptBackward ReportService: ユーザーが前のプロンプト・ページに移動した後で生成されるレポート</li> <li>Report BatchReportService: バッチ実行レポートまたはスケジュールされた実行レポート</li> <li>注:この列の値は、実行のオブジェクト・タイプとレポートの実行元サービス(例えば、「Report ReportService」と「Query BatchReportService」)の2つの部分で表されます。</li> </ul>	
COGIPF_REPORTPATH	レポート・パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成功、警告、 または失敗)。	VARCHAR (255)

表 156. COGIPF_RUNREPORT テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_RUNTIME	ミリ秒単位のレポートの実行時間。	INTEGER
COGIPF_REPORTNAME	実行されたレポートの名前。	VARCHAR (512)
COGIPF_PACKAGE	レポートが関連付けられているパッケー ジ。	VARCHAR (1024)
COGIPF_MODEL	レポートが関連付けられているモデル。	VARCHAR (512)

## **COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS** テーブル

システム評価指標のしきい値違反に関する情報を格納する。

詳細については、 29 ページの『第 4 章 システム・パフォーマンス評価指標』を 参照してください。

列名	説明	データ型
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホスト IP ア ドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによって割り当 てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたローカルの日 時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時差。	INTEGER
COGIPF_COMPONENTID	コンポーネントの英数字 ID。	VARCHAR (64)
COGIPF_BUILDNUMBER	ビルドの英数字 ID。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	ログ記録レベル。しきい値違反情報を使用で きるようにするには、常に 1 に設定してく ださい。	INTEGER
COGIPF_ OPERATION	評価指標のしきい値の超過。	VARCHAR (128)

表 157. COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_TARGET_TYPE	ターゲットのタイプ。	VARCHAR (255)
COGIPF_ TARGETNAME	対象名。	VARCHAR (512)
COGIPF_ TARGET_PATH	しきい値マネージャーがあるディスパッチャ ーの対象パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_RESOURCE_ TYPE	しきい値を超過したリソース・タイプ。	VARCHAR (128)
COGIPF_ RESOURCE_PATH	しきい値を超過したリソースのパス。	VARCHAR (512)
COGIPF_METRIC_NAME	評価指標の名前。	VARCHAR (255)
COGIPF_METRIC_VALUE	評価指標の値。	VARCHAR (128)
COGIPF_METRIC_ HEALTH	評価指標のステータス (良好、普通、不良)。	VARCHAR (128)
COGIPF_LOWER_AVG_ THRSHLD	平均下限しきい値の設定。 COGIPF_LOWER_AVG_THRSHLD_XCL が 1 の場合は、評価指標がこのしきい値設定よ りも小さいときに評価指標スコアが平均にな ります。評価指標がこの値に等しいかこの値 よりも大きいときは評価指標スコアが好調に なります。 COGIPF_LOWER_AVG_THRSHLD_XCL が 0 (ゼロ)の場合は、評価指標がこの値に等し いかこの値よりも小さいときに評価指標スコ アが平均になります。評価指標がこの値より も大きいときは評価指標スコアが好調になり ます。	VARCHAR (128)
COGIPF_LOWER_AVG_ THRSHLD_EXCL	評価指標スコアを判定するときに COGIPF_LOWER_AVG_THRSHLD のしき い値設定を含めかうかを示すフラグ。 これが 0 の場合、評価指標スコアを判定す るときにしきい値設定が含められます。これ が 1 の場合、評価指標スコアを判定すると きにしきい値設定が含められません。	DECIMAL (1,0)

表 157. COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_LOWER_POOR_ THRSHLD	<ul> <li>不振下限しきい値の設定。</li> <li>COGIPF_LOWER_POOR_THRSHLD_XCL が 1 の場合は、評価指標がこのしきい値設 定よりも小さいときに評価指標スコアが不振 になります。</li> <li>COGIPF_LOWER_POOR_THRSHLD_XCL が 0 (ゼロ)の場合は、評価指標がこの値に 等しいかこの値よりも小さいときに評価指標 スコアが不振になります。</li> </ul>	VARCHAR (128)
COGIPF_LOWER_POOR_ THRSHLD_EXCL	評価指標スコアを判定するときに COGIPF_LOWER_POOR_THRSHLD のしき い値設定を含めるかどうかを示すフラグ。 これが 0 の場合、評価指標スコアを判定す るときにしきい値設定が含められます。これ が 1 の場合、評価指標スコアを判定すると きにしきい値設定が含められません。	DECIMAL (1,0)
COGIPF_UPPER_AVG_ THRSHLD	<ul> <li>平均上限しきい値の設定。</li> <li>COGIPF_UPPER_AVG_THRSHLD_XCL が 1 の場合は、評価指標がこのしきい値設定よ りも小さいときに評価指標スコアが不振にな ります。</li> <li>COGIPF_UPPER_AVG_THRSHLD_XCL が 0 (ゼロ) の場合は、評価指標がこの値に等し いかこの値よりも大きいときに評価指標スコ アが平均になります。評価指標がこの値に等 しいかこの値よりも小さいときは評価指標ス コアが好調になります。</li> </ul>	VARCHAR (128)
COGIPF_UPPER_AVG_ THRSHLD_EXCL	評価指標スコアを判定するときに COGIPF_UPPER_AVG_THRSHLD のしきい 値設定を含めるかどうかを示すフラグ。 これが 0 の場合、評価指標スコアを判定す るときにしきい値設定が含められます。これ が 1 の場合、評価指標スコアを判定すると きにしきい値設定が含められません。	DECIMAL (1,0)

表 157. COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_UPPER_POOR_ THRSHLD	不振上限しきい値の設定。 COGIPF_UPPER_POOR_THRSHLD_XCL が 1 の場合は、評価指標がこのしきい値設定よ りも小さいときに評価指標スコアが不振にな ります。	VARCHAR (128)
	COGIPF_UPPER_POOR_THRSHLD_XCL が 0 (ゼロ) の場合は、評価指標がこの値に等し いかこの値よりも大きいときに評価指標スコ アが不振になります。	
COGIPF_UPPER_POOR_ THRSHLD_EXCL	評価指標スコアを判定するときに COGIPF_UPPER_POOR_THRSHLD のしき い値設定を含めるかどうかを示すフラグ。 これが 0 の場合、評価指標スコアを判定す るときにしきい値設定が含められます。これ が 1 の場合、評価指標スコアを判定すると きにしきい値設定が含められません。	DECIMAL (1,0)

表 157. COGIPF_THRESHOLD_VIOLATIONS テーブルの列、説明、およびデータ型(続き)

# COGIPF_USERLOGON テーブル

ユーザーによるログオンおよびログオフ情報を格納する。

表 158. COGIPF_USERLOGON テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_CAMID	ユーザーの CAMID	VARCHAR (512)
COGIPF_ HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成され るホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_ HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システム によって割り当てられるプロ セス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成され たローカルの日時。	TIMESTAMP
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーン の時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数 字 ID。	VARCHAR (255)

表 158. COGIPF_USERLOGON テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

列名	説明	データ型
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英 数字 ID (存在しない場合は 空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英 数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの 英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_ COMPONENTID	指示を生成するコンポーネン トの名前。	VARCHAR (64)
COGIPF_ BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネン トのメジャー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成 功、警告、または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_ LOGON_OPERATION	ログオン、ログオフ、または ログオン期限切れ。	VARCHAR (255)
COGIPF_USERNAME	ユーザーの表示名。	VARCHAR2 (255)
COGIPF_USERID	ユーザー名。	VARCHAR (255)
COGIPF_ NAMESPACE	ネームスペース ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REMOTE_IPADDR	ユーザーの IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_TENANTID	テナント ID	VARCHAR (255)

# **COGIPF_VIEWREPORT** テーブル

レポート・ビュー要求に関する情報を格納する。

表 159. COGIPF_VIEWREPORT テーブルの列、説明、およびデータ型

列名	説明	データ型
COGIPF_HOST_IPADDR	ログ・メッセージが生成されるホスト IP アドレス。	VARCHAR (128)
COGIPF_HOST_PORT	ホストのポート番号。	INTEGER
COGIPF_PROC_ID	オペレーティング・システムによって割 り当てられるプロセス ID。	INTEGER
COGIPF_ LOCALTIMESTAMP	ログ・メッセージが生成されたローカル の日時。	TIMESTAMP
	レポートの実行中は、レポートの実行開 始時刻を示します。レポートの実行完了 後は、レポートの実行終了時刻を示しま す。	
	実行が完了しているかどうかを確認する には、COGIPF_STATUS を確認しま す。エントリーが空白の場合は、実行が 完了していないことを意味し、エントリ ーにデータが存在する場合は、実行が完 了していることを意味します。	
	すでに完了しているレポートの実行開始 時刻を計算するには、 COGIPF_LOCALTIMESTAMP から COGIPF_RUNTIME を減算します。	
COGIPF_TIMEZONE_ OFFSET	GMT からのタイム・ゾーンの時差。	INTEGER
COGIPF_SESSIONID	ユーザー・セッションの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_REQUESTID	要求の英数字 ID。	VARCHAR2 (255) NOT NULL
COGIPF_STEPID	ジョブ実行内のステップの英数字 ID (存在しない場合は空)。	VARCHAR (255)
COGIPF_SUBREQUESTID	コンポーネント二次要求の英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_THREADID	要求が実行されたスレッドの英数字 ID。	VARCHAR (255)
COGIPF_COMPONENTID	  指示を生成するコンポーネントの名前。	VARCHAR (64)

列名	説明	データ型
COGIPF_BUILDNUMBER	指示を生成するコンポーネントのメジャ ー・ビルド番号。	INTEGER
COGIPF_LOG_LEVEL	指示のレベル。	INTEGER
COGIPF_TARGET_TYPE	処理が実行されるオブジェクト。	VARCHAR (255)
COGIPF_REPORTPATH	レポート・パス。	VARCHAR (1024)
COGIPF_STATUS	処理のステータス (空白、成功、警告、 または失敗)。	VARCHAR (255)
COGIPF_ERRORDETAILS	エラーの詳細。	VARCHAR (2000)
COGIPF_REPORTNAME	表示されたレポートの名前。	VARCHAR (512)
COGIPF_PACKAGE	レポートが関連付けられているパッケー ジ。	VARCHAR (1024)
COGIPF_REPORTFORMAT	レポートの形式。詳細については、 386 ページの『レポートの形式』を参照 してください。	VARCHAR (255)
COGIPF_MODEL	レポートが関連付けられているモデル。	VARCHAR (512)

表 159. COGIPF_VIEWREPORT テーブルの列、説明、およびデータ型 (続き)

# 付録 G. 詳細設定の構成

詳細設定を IBM Cognos 環境全体に対してグローバルに、またはディスパッチャー やディスパッチャー・サービスに対して個別に設定できます。ベスト・プラクティ スは、設定をグローバルに指定し、必要に応じて、特定のディスパッチャーまたは ディスパッチャー・サービスの値をカスタマイズする方法です。

詳細設定は、IBM Cognos Administration の設定エントリーに関連付けられます。 設定は、ログ記録、調整、環境、および管理者による上書きのカテゴリーに分類さ れます。

設定エントリーに対してグローバルに詳細設定を指定すると、指定した値は、その 中の全エントリーによって取得されます。ただし、中に含まれているエントリーの プロパティーがグローバル設定をオーバーライドするように設定されている場合は 除きます。グローバル設定をオーバーライドして、特定のエントリーに対してカス タマイズした値を指定できます。ただし、このように設定すると、管理上のオーバ ーヘッドが増す可能性があります。

詳細設定を変更するには、設定エントリーおよび影響を受ける子エントリーに対す る以下のアクセス権が必要です。

- 更新するエントリーの読み取り/書き込み権限
- 更新するエントリーの親の通過権限

## 詳細設定のグローバル構成

詳細設定を IBM Cognos 環境全体に対してグローバルに設定できます。

#### このタスクについて

指定する値は、中に含まれているすべてのエントリーによって取得されます。ディ スパッチャー・レベルまたはディスパッチャー・サービス・レベルで指定したカス タム値によって、グローバル値をオーバーライドできます。

設定エントリーの中に、グローバル設定をオーバーライドする設定を持つ子エント リーが含まれる場合、子エントリーのカスタム設定をリセットしてデフォルト値を 使用できます。

ログ記録、調整、環境、および管理者による上書きのカテゴリーに対して、詳細設 定をグローバルに構成できます。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. 「設定」ページのツールバーで、「プロパティーを設定 設定 (Set properties
  - Configuration)」アイコン 🔛 をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。

- 設定のリストをフィルターに掛けるには、「カテゴリー」リストからカテゴリー を選択します。
- 5. リストから必要な設定を選択して、以下のいずれかの方法で値を指定します。
  - 値を入力します。
  - リストから値を選択します
  - 「編集」をクリックし、パラメーター名と値を追加します。
- オプション:子エントリーをリセットしてデフォルト設定を使用するには、「すべての子エントリーの設定を削除」チェック・ボックスを選択します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。
- これらの値を適用するには、IBM Cognos サービスを停止し、再開します。詳細については、「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## 特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成

詳細設定を特定のディスパッチャーに対して設定できます。これにより、IBM Cognos 環境に対して指定されたグローバル設定をオーバーライドするカスタマイ ズ設定をディスパッチャーに対して指定できます。

#### このタスクについて

ディスパッチャーに、グローバル設定をオーバーライドする設定を持つ子エントリ ーが含まれる場合、子エントリーのカスタム設定をリセットしてデフォルト値を使 用できます。

次のカテゴリーに対して、ディスパッチャー・レベルで詳細設定を指定できます。 すなわち、「ログ記録」、「調整」、および「環境」です。

重要:「環境」カテゴリーに関連付けられたいくつかの詳細設定は、ディスパッチャ ー・レベルで指定できません。それらの設定は、グローバルに指定するか、ディス パッチャー・サービスに対して指定する必要があります。

詳細については、 535 ページの『詳細設定のグローバル構成』および 537 ページ の『特定のサービスに対する詳細設定の構成』を参照してください

#### 手順

- IBM Cognos Administration の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- ディスパッチャーを見つけ、「操作」列で「プロパティーを設定」アイコン
   をクリックします。
- 3. 「設定」タブをクリックします。
- 4. 設定のリストをフィルターに掛けるには、「カテゴリー」リストからカテゴリー を選択します。
- 5. リストから構成設定を選択して、以下のいずれかの方法で値を指定します。
  - 値を入力します。
  - リストから値を選択します。

- 「編集」をクリックし、「親エントリーから取得した設定をオーバーライド」チェック・ボックスをオンにして、パラメーター名と値を追加します。
- オプション:子エントリーのカスタム設定をリセットしてデフォルト設定を使用 するには、「すべての子エントリーの設定を削除」チェック・ボックスを選択し ます。
- 7. 「**OK**」をクリックします。
- これらの値を適用するには、IBM Cognos サービスを停止し、再開します。詳細については、「IBM Cognos Analytics インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## 特定のサービスに対する詳細設定の構成

詳細設定を AgentService のような特定のディスパッチャー・サービスに対して設 定できます。これにより、IBM Cognos 環境に対して指定されたグローバル設定を オーバーライドするカスタマイズ設定をサービスに対して指定できます。

#### このタスクについて

次のカテゴリーに対して、ディスパッチャー・サービスの詳細設定が可能です。す なわち、「ログ記録」、「調整」、および「環境」です。

詳細については、 535 ページの『詳細設定のグローバル構成』および 536 ページ の『特定のディスパッチャーに対する詳細設定の構成』を参照してください。

#### 手順

- 1. **IBM Cognos Administration** の「設定」 タブで、「ディスパッチャーとサー ビス」をクリックします。
- 2. ディスパッチャー名をクリックします。
- ディスパッチャー・サービスのリストの中から必要なサービスを見つけ、「操 作」列で「プロパティーを設定」アイコン
   をクリックします。
- 「設定」タブをクリックします。 設定のリストを「カテゴリー」でフィルター に掛けることができます。カテゴリーの選択項目は、「すべて」、「環境」、 「ログ記録」、および「調整」です。
- 5. 以下のいずれかの方法で、設定を定義します。
  - カスタマイズする設定を見つけ、与えられたスペースにその設定の値を入力 するか選択します。
  - 設定がリストされていない場合、「詳細設定」で、関連する「編集」リンク をクリックします。表示されるページで、「親エントリーから取得した設定 をオーバーライド」チェック・ボックスを選択し、設定名と値を追加しま す。
- 6. 「**OK**」をクリックします。
- これらの値を適用するには、IBM Cognos サービスを停止し、再開します。詳細についてはIBM Cognos Analytics「インストールおよび設定ガイド」を参照してください。

## 詳細設定のリファレンス

このセクションでは、IBM Cognos サービスの詳細設定について説明します。

## Agent サービスの詳細設定

このセクションでは、Agent サービスの詳細設定について説明します。

#### asv.preview.maxRows

IBM Cognos Event Studio からの「すべてプレビュー」要求に対して表示する最大 行数を指定します。

データ型: 整数 デフォルト: 500

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## housekeeping.run.startup

以前に実行したタスクによる状態オブジェクトを、始動の際に Content Store から 削除するかどうかを指定します。 false の場合、クリーンアップは housekeeping.run.interval で指定された間隔でのみ実行されます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### housekeeping.run.interval

以前に実行したエージェントのためにハウスキーピング操作が行われる間隔を時間 数で指定します。この値が使用されるのは、housekeeping.run.startup が false に 設定された場合だけです。

データ型: 整数 デフォルト: 12

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### primary.wait.asv

Agent サービスの 1 次待機しきい値の時間を秒数で指定します。値が要求で設定されない場合は、この設定が使用されます。

データ型: 整数

デフォルト**:** 120

secondary.threshold

非同期要求の 2 次待機しきい値の時間を秒数で指定します。 Agent サービスがこ のサービスを使用するのは、そのタスク (rss、レポート、sql、および Web サービ ス・タスク) を実行するときだけです。

データ型:

整数

デフォルト**:** 

30

## Content Manager サービスの詳細設定

このセクションでは、Content Manager サービスの詳細設定について説明します。

## CM.CMSync_CheckActiveTime

アクティブな Content Manager が、別の Content Manager がアクティブになった場合に待機モードになる期間を指定します。

データ型**:** 整数

デフォルト: 10000

## CM.CMSync_NegotiationTime

フェイルオーバーのエレクション時間をミリ秒単位で指定します。

エレクション時間は、Content Manager インスタンスに障害が起きてから他の Content Manager インスタンスがアクティブ・サービスになろうとするまでの間の 待機期間です。この期間により、元の Content Manager に本当に障害が起きてい ない限り、別の Content Manager サービス・インスタンスがアクティブにならな いようにします。

データ型: 整数

デフォルト: 2000

## CM.CMSync_NegotiationTimeForStartUp

コンピューターがシャットダウンした後の、始動エレクション時間をミリ秒単位で 指定します。 このエレクション時間は、その間にデフォルトの Content Manager が始動するも のと予期される待機期間であり、これを過ぎると他の待機中の Content Manager インスタンスが始動しようとします。これにより、コンピューターがシャットダウ ンした後に、優先される Content Manager が始動するようになります。

データ型:

整数

デフォルト:

60000

## CM.CMSync_PingTimeout

ビジー状態の Content Manager が応答を送信するまでに許容される最大時間をミリ秒単位で指定します。

タイムアウト期間の後、エレクション・プロセスは待機中の Content Manager イ ンスタンスから新しい Content Manager を選択する処理を開始します (そのよう なインスタンスが存在する場合)。

データ型:

整数

デフォルト: 120000

## CM.CMSync_ShortNetworkInterruptionTime

その範囲内ならフェイルオーバーが起こらない、短いネットワーク中断時間をミリ 秒単位で指定します。

データ型: 整数 デフォルト:

3000

## CM.DbConnectPoolMax

Content Store に対して許可される、最大の並行データベース接続数を指定します。

有効な設定は、-1、または 5 から 2147483647 の範囲の数値とデータベースの設定 値のうち小さい方の値です。

設定値 -1 は、接続数に制限がないことを示します。

この設定は Content Manager 接続プールの設定にのみ適用されます。同じ Content Store にアクセスする別のサービスが存在する場合は、このパラメーター で指定した数よりも多い同時データベース接続が存在する可能性があります。

```
データ型:
整数
デフォルト:
-1
```

## CM.DbConnectPoolTimeout

プール内の接続が使用可能になるまでスレッドが待機する最大時間をミリ秒単位で 指定します。

0 を設定すると、接続が即座に使用可能にならない場合、スレッドで待機は行われ ません。設定値 -1 は、待機時間に制限がないことを示します。

データ型: 整数 デフォルト: -1

## CM.DbConnectPoolIdleTime

プール内で接続がアイドル状態にとどまる最小時間をミリ秒単位で指定します。

この設定は、DbConnectPoolCleanUpPeriod 設定が正の値である場合にのみ有効です。

0 または -1 が設定されると、アイドル状態にある接続は、Content Manager の再 起動時に終了されます。

データ型: 整数

デフォルト: 300000

## CM.DbConnectPoolCleanUpPeriod

DbConnectPoolIdleTime の設定値よりも長い間プール内でアイドル状態になってい る接続を終了するクリーンアップ・スレッドが起動される間隔を、ミリ秒単位の時 間で指定します。

設定値 0 または -1 は、クリーンアップ・スレッドが起動されないことを示しま す。

データ型: 整数

デフォルト: 300000

#### CM.DeploymentIncludeConfiguration

配布の際に設定オブジェクトを Content Store アーカイブ全体からインポートする かどうかを指定します。

これらのオブジェクトには、ディスパッチャーと、ディスパッチャーをグループ化 するための構成フォルダーが含まれます。例えば、ソース環境から取り入れるサー ビスについての一連の詳細設定があるために、設定をインポートする場合がありま す。 最善の結果を得るためには、設定オブジェクトをインポートしないでください。ソ ース環境からデータをインポートする前に、ディスパッチャーをターゲット環境で 設定します。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## CM.DeploymentSkipUserReportOutput

この設定値が true に設定された場合、ユーザー・アカウントの下のレポート出力 とその子オブジェクト (グラフィックおよびページ) はエクスポートまたはインポー トされません。この設定を使用すると、Content Store アーカイブのサイズを削減 し、配布のパフォーマンスを改善できます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### CM.DeploymentDetailErrorsOnly

true に設定された場合、この設定値は、パッケージおよびフォルダーの配布につい て概要情報とエラー情報だけを生成します。デフォルトでは、Content Manager は パッケージおよびフォルダーの配布履歴の完全な詳細を生成します。この設定を使 用すると、Content Store アーカイブのサイズを削減し、配布のパフォーマンスを 改善できます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### CM.DeploymentDetailEntireContent

true に設定された場合、この設定値は、Content Store の配布履歴の完全な詳細を 生成します。デフォルトで、Content Manager は Content Store 配布全体に関す る概要情報とエラー情報だけを生成します。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### CM.DeploymentUpdateScheduleCredential

true に設定され、かつ配布アーカイブのインポート中に takeOwnership オプショ ンが使用される場合、インポートされるすべてのスケジュール・オブジェクトの資 格情報プロパティーは、配布のインポートに使用されるアカウントに含まれている 資格情報を参照するように変更されます。

データ型: ブール デフォルト**:** 無効

## **CM.OutPutLocation**

生成されるレポート出力が保存されるファイル・システムの場所を指定します。

各出力ファイルには、同じ名前で XML 拡張子を持つ出力記述子もあります。

新しいレポートが保存されても古いレポート・バージョンは削除されません。出力 ディレクトリーの内容を管理して、必要なレポート・バージョンだけを維持する必 要があります。

レポート出力は、必ず、Delivery サービス・インスタンスごとに構成されたディレ クトリーに書き込まれます。レポート出力が複数の場所に書き込まれるのを防ぐに は、実行する Delivery サービス・インスタンスを 1 つのみにするか、共有ネット ワーク・ファイル・ロケーションを使用するようにすべてのサービス・インスタン スを構成します。 Delivery サービスを実行するディスパッチャーはすべて、ファ イル・システムへのアクセス権限を持っている必要があります。あるいは、レポー ト出力を保存しないすべてのシステムでこのようなディスパッチャーを無効化する 必要があります。

データ型:

文字列

デフォルト: none

#### CM.OutputScript

レポート出力が保存されるたびに実行される外部スクリプトの名前と場所を指定します。

スクリプト・パラメーターは、レポート出力と出力記述子のファイル名です。

データ型:

文字列

デフォルト**:** 

none

## CM.OutputByBurstKey

ファイル・システム上で出力をバースト・キーに基づいて編成するかどうかを指定します。

true に設定された場合、出力はバースト・キーと同じ名前のサブディレクトリーに入れられます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## CM.SecurityQueryRequiresRead

Content Manager で外部ネームスペース・クエリーの結果に読み取り権限フィルターを強制的に適用するかどうかを制御します。

これが有効な場合、ユーザーまたはグループの読み取り権限を拒否するように外部 ネームスペース・ポリシーも更新されているなら、Content Manager は外部ネーム スペースの参照を禁止できます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## **CM.SortCollation**

Oracle や SQL Server などいくつかのデータベースのソートで使用されるデータベース固有の照合の名前。

空のままにした場合、データベースはデフォルトの照合を使用します。

例えば、Oracle で、照合順序をデータベース・レベルで Binary に指定した場合、 接続文字列の中に同じ照合順序値を指定する必要があります。

サンプル gosl データベースを使用する Oracle データベースの場合の接続文字列 は、例えば ORACLE@GOSL0703@GOSL/GOSL0703@COLSEQ=Binary のようになります。

サポートされている照合については、Oracle および SQL Server のドキュメントを 参照してください。

CM.SortCollation の値は、IBM Db2 データベースまたは Sybase データベースに 対して実行されている Content Manager には影響を与えません。

**データ型:** 文字列

デフォルト: none

#### CM.UpdateInitialContentNamesAfterImport

以前はサポートされていなかったロケールのローカライズされたオブジェクト名を 追加します。

一部のロケールにおいて、IBM Cognos Analytics を IBM Cognos Business
 Intelligence バージョン 10.1.1 以前からアップグレードし、古いバージョンの
 Cognos BI で作成された Content Store をインポートする予定の場合は、この詳細
 設定を使用してすべてのオブジェクト名が適切にローカライズされるようにします。

影響を受けるロケールは、カタロニア語、クロアチア語、デンマーク語、ギリシャ 語、カザフ語、ノルウェー語、スロバキア語、スロベニア語、およびタイ語です。 これらのロケールのサポートは、IBM Cognos Business Intelligence バージョン 10.1.1 および 10.2 で追加されました。Content Store が前のバージョンで作成さ れ、Content Store をインポートする前に CM.UpdateInitialContentNamesAfterImport 設定が指定されなかった場合、一部の オブジェクト名が、指定された言語ではなく英語で表示される可能性があります。

影響を受けるロケールを、それぞれコンマで区切って指定します。例えば、スロベ ニア語とクロアチア語のコンテンツ・ロケールの場合、sl,hr と入力します。

注: この設定に関連してパフォーマンスに影響が生じるため、古い Content Store のサポートが不要になったときには、この詳細設定を削除してください。

データ型:

文字列

```
デフォルト:
```

```
none
```

## 共通構成設定

このセクションでは、すべてのサービスに共通の詳細設定について説明します。

## trustedSession.pool.max

同時に使用可能な信頼できるセッションの最大数を指定します。信頼できるセッシ ョンは、内部のセキュリティー・メカニズムを使用して内部コンポーネントの通信 を暗号化します。

セッションは、リソース・プールとして実装されます。

データ型: 整数 デフォルト: 100

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### axis.timeout

内部 Axis サーバーのタイムアウト値を秒数で指定します。これは Axis がタイム アウトする前にサービス呼び出しに対する応答を待機する時間です。

Axis は、XML オブジェクトを Java オブジェクトに変換するためのオープン・ソ ース・ツールです。

データ型:

整数

デフォルト:

0

#### COGADMIN.filterInteractiveActivitiesOfUnknownUsers

処理を実行しているユーザーを表示する権限をユーザーが持たない場合に、IBM Cognos Administration の処理を非表示にするかどうかを指定します。

**データ型:** ブール デフォルト: false

#### COGADMIN.restrictInteractiveActivitiesToSystemAdministrators

IBM Cognos Administration での双方向処理をシステム管理者に限定するかどうか を指定します。

この設定を true に設定すると、非システム管理者が「現在の処理」ツールでアク セスできるのは、バックグラウンド処理のみになります。

データ型:

ブール

デフォルト: false

## DISP.InteractiveProcessUseLimit

規定の限度に達した後に、ディスパッチャーがレポート・サーバー・プロセスに要 求を送信することを停止します。

例えば、限度を 500 に設定すると、ディスパッチャーは 500 件の要求を行った後 にプロセスへの要求の送信を停止します。

データ型: 整数 デフォルト:

0

#### DISP.BatchProcessUseLimit

規定の限度に達した後に、ディスパッチャーがバッチ・レポート・サーバー・プロ セスに要求を送信することを停止します。

データ型: 整数

デフォルト: 0

## VIEWER_CW_BACKWARDS_COMPATIBLE_DRILL

IBM Cognos Workspace でレガシー・ドリル機能が使用されるかどうかを指定します。

デフォルトで、この設定は指定されず、Cognos Workspace では現行のドリルアップおよびドリルダウン機能が使用されます。

この設定が true に設定されている場合、Cognos Workspace のドリルアップ機能 はバージョン 10.2.0 以前の動作に戻ります。

この設定が false に設定されている場合、現行の Cognos Workspace のドリル機 能が使用されます。

システムの設定レベルでこの設定を指定します。個々のサービスで設定しないでく ださい。

```
データ型:
ブール
デフォルト:
無効
```

## Portal Services (presentationService) の詳細設定

このセクションでは、Presentation サービスの詳細設定について説明します。

## **CPSMaxCacheSizePerPortlet**

ポートレット、ページ、ユーザーごとにキャッシュされるマークアップ・フラグメ ントの数。

例えば、1000 人のユーザー、10 ページ、1 ページあたり 4 のポートレットに対し て 5 を指定すると、キャッシュには最大 200000 エントリーを生成できます (1000×10×4×5)。

以下の設定が有効です。

- -1 は、保存されるマークアップの数に制限がありません。
- 0 は、マークアップのキャッシュを使用不可にします。
- 1 または 1 より大きい整数は、指定された数にマークアップの数を制限します。

データ型: 整数 デフォルト: -1

#### properties.config.cps.cache.timeToldleSeconds

アイドル状態になったときに、ページ・マークアップ・フラグメントをキャッシュ に保存する時間の長さ (秒)。

この時間が経過するまでに、一度もページに対するアクセスがなければ、ページの キャッシュの内容は削除されます。

IBM Cognos Configuration の「環境」フォルダーの下で「一時ファイルを暗号 化」の値が「**True**」に設定された場合、ディスクに保存したキャッシュ・データを 暗号化できます。

データ型:

整数

デフォルト: 1800 (30 minutes)

#### properties.config.cps.cache.timeToLiveSeconds

ページ・マークアップ・フラグメントをキャッシュに保存する時間の長さを秒数で 指定します。

この指定時間が経過すると、キャッシュがまだアクティブの場合でも、マークアッ プは削除されます。 IBM Cognos Configuration の「環境」フォルダーの下で「一時ファイルを暗号 化」の値が「True」に設定された場合、ディスクに保存したキャッシュ・データを 暗号化できます。

データ型: 整数 デフォルト: 86400 (24 hours)

#### properties.config.cps.cache.checkExpiryIntervalSeconds

制限時間を超えたマークアップ・フラグメントがキャッシュの中に存在するかどう かをチェックする間隔 (秒)。

IBM Cognos Configuration の「環境」フォルダーの下で「一時ファイルを暗号 化」の値が「**True**」に設定された場合、ディスクに保存したキャッシュ・データを 暗号化できます。

データ型: 整数

デフォルト: 300 (5 minutes)

#### xts.tempdir

マークアップ・フラグメントが保管される、ローカル・ドライブ上のフォルダーの 場所を指定します。

ローカル・ドライブ上の任意のパスを値として指定できます。値が指定されない場 合、デフォルトのアプリケーション・サーバー作業域が使用されます。

データ型:

文字列

デフォルト: blank

#### **CPSPropagatePassport**

IBM Cognos パスポート ID を URL パラメーターとして転送するかどうかを指定 します。

このフラグが 0 に設定された場合、IBM Cognos パスポート ID は URL パラメ ーターとして転送されません。

0 以外の値の場合は、パスポート ID の転送が許可されます。

データ型:

デフォルト:

なし

## CPSPropagateTicket

IBM Cognos Configuration チケット ID を URL パラメーターとして転送するか どうかを指定します。 このフラグが 0 に設定された場合、IBM Cognos Configuration チケット ID は URL パラメーターとして転送されません。

0 以外の値の場合は、チケット ID の転送が許可されます。

データ型:

デフォルト: None.

## CPSProtocolScheme

Portal Services for Web Services Remote Portlets (WSRP) プロデューサー用の Web サービス記述言語 (WSDL) エンドポイントを生成するときに使用されるプロ トコル・スキームをオーバーライドします。

WSRP 用の WSDL を生成するために、Portal Services は IBM Cognos Configuration ゲートウェイ・パラメーターで指定されたプロトコル・スキームを使 用します。複数のゲートウェイがあって、そのすべてを同じプロトコル・スキーム (http または https など) で構成できない場合、このパラメーターは他のすべての設 定に優先します。

有効な設定値は、http および https です。

データ型: 文字列 デフォルト: なし

## portal.showTenantInfoForAllUsers

true に設定すると、管理者権限を持たないユーザーがテナント情報を表示できます。

例えば、「プロパティーを設定」ページで、オブジェクトのテナントが表示されま す。ユーザーはオブジェクト・リストでテナント・フィールドを参照できます。

ユーザーはテナンシーを変更することやテナントの偽名を使用することができませ ん。

データ型: ブール デフォルト: False

## Delivery サービスの詳細設定

このセクションでは、Delivery サービスの詳細設定について説明します。

#### emf.archive.filetimestamp.enabled

アーカイブ・ファイルのタイム・スタンプを強制します。

**データ型:** ブール デフォルト**:** 有効

#### max.smtp.connections

SMTP 接続の最大数を指定します。

この設定は、Delivery サービスがメッセージ送信のために生成できるスレッド数を 制限します。

有効な設定値は1以上の整数です。

データ型: 整数 デフォルト:

10

ヒント:この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### primary.wait.dls

Delivery サービスの1次待機しきい値を秒数で指定します。

値が要求で設定されない場合は、この設定が使用されます。

設定値が 0 よりも小さい場合は無視されます。設定値が 0 の場合、クライアント は無期限に待ちます。

データ型: 整数 デフォルト: 120

#### smtp.reconnection.delay

SMTP サーバーへの再接続が試行される前の時間間隔を秒数で指定します。

データ型:

デフォルト: 10

ヒント:この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### enable.tide.metrics.smtpqueue

IBM Cognos Administration Console で、Delivery サービスの評価指標の収集と 表示を使用可能にします。

以下の評価指標がトラッキングされます。

- 高水準キュー待機時間
- 低水準キュー待機時間
- キュー待機時間
- キュー通過要求数
- 高水準キュー長

 低水準キュー長
 データ型: ブール
 デフォルト: 無効

## dls.connection.pool.force.clean

SMTP トランスポート接続のクリーンアップを強制します。この操作を行うと、 close() メソッドを呼び出す必要がなくなるので、ソケットが待機せずに済みます。 代わりに、変数が NULL に設定されるだけです。

データ型:

ブール

デフォルト:

無効

クリーンアップを強制するには、true に設定します。

ヒント:変更を適用し終えたら、true に設定して、設定をテストします。

#### dls.connection.pool.used

DLS トランスポート接続プールを使用するかどうかを指定します。

データ型: ブール デフォルト: 有効

接続プールを使用するには、true に設定します。

ヒント: 接続プールを使用しない場合は、false に設定します。その結果、各 E メ ールで、DLS が E メール・サーバーとの新しい SMTP トランスポート接続を開始 します。これは、メール・サーバー・ソケットが使用後に毎回ドロップされる場合 に便利です。

## ディスパッチャー・サービスの詳細設定

このセクションでは、ディスパッチャーの詳細設定について説明します。

#### DISP.InteractiveProcessUseLimit

規定の限度に達した後に、ディスパッチャーがレポート・サーバー・プロセスに要 求を送信することを停止します。

例えば、限度を 500 に設定すると、ディスパッチャーは 500 件の要求を行った後 にプロセスへの要求の送信を停止します。

データ型: 整数 デフォルト: 0

### DISP.BatchProcessUseLimit

規定の限度に達した後に、ディスパッチャーがバッチ・レポート・サーバー・プロ セスに要求を送信することを停止します。

データ型:

デフォルト: 0

## Event Management サービスの詳細設定

このセクションでは、Event Management サービスの詳細設定について説明します。

## run.task.max.thread

スケジュールされた要求を保留キューに転送するために割り振られるスレッドの最 大数を指定します。

Event Management サービスがタスクを実行すると、そのタスクはキューに入れられて、それを実行するためのリソースを待機します。 Event Management サービスのスケジューラー・スレッドの要求を処理するために、スレッドが作成されます。

デフォルト値:20

データ型: 整数 デフォルト: 20

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### authenticate_when_scheduled

実行されるオブジェクトに対する execute 権限を runAt 要求ヘッダーでチェック するかどうかを決定します。

チェックが必要とされている場合は、チェックが失敗すると例外がスローされま す。

これが設定されている場合は、ユーザーに権限があってもスケジュール時にタスク を実行するために必要な資格情報を取得できない場合にも、このチェックは失敗と なります。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### enable.tide.metrics.jobqueue

IBM Cognos Administration で、Event Management サービスの特定の評価指標の収集と表示を使用可能にします。

以下の評価指標が含まれます。

- 高水準キュー待機時間
- 低水準キュー待機時間
- キュー待機時間
- キュー通過要求数
- 高水準キュー長
- 低水準キュー長

**データ型:** ブール

デフォルト**:** 無効

#### ems.action.requires.permissions.check

オブジェクト権限のチェックを強制します。

有効にされた場合、canUseMonitorActivityTool ユーザー権限を持つ呼び出し元 は、 Event Management サービスに対して runSpecification() メソッドを呼び出す 前に以下のいずれかの条件を満たす必要があります。

呼び出し元のアカウントは、イベントのスケジュールに使用されるアカウント資格情報と一致しなければならない。

•

•

呼び出し元はターゲット・オブジェクトに対する通過および実行権限を持たなけ ればならない。

## データ型:

ブール

デフォルト**:** 無効

#### emf.schedule.validation.enabled

Content Manager プロセスによりスケジュールの追加または更新が要求されるとき に、開始日、終了日、データ型、ユーザー・アカウント資格情報などのスケジュー ル・プロパティーを検証します。無効なスケジュールを使用不可にします。

使用不可にされたスケジュールの詳細は、ログ・ファイルに記録されます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### emf.dls.attachment.timestamp.enabled

true に設定されると、E メールの添付ファイルには日付タイム・スタンプのあるレ ポート名が付きます。タイム・スタンプのデフォルト形式は yyyy.MM.dd で、 yyyy は 4 桁の年、MM は 2 桁の月、dd は 2 桁の日です。

例えば、レポート「Annual Result」をメッセージに添付する場合、送信される E メールは「Annual result - 2014.07.15.pdf」という添付ファイルを持ちます。

日付タイム・スタンプを E メールのレポート添付ファイルに追加する必要がある場 合、この詳細プロパティーを設定します。オプションで、詳細プロパティー emf.dls.attachment.timestamp.format を設定して、デフォルトの日時形式を変更で きます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### emf.dls.attachment.timestamp.format

emf.dls.attachment.timestamp.enabled 詳細プロパティーが true に設定されている 場合に E メールの添付ファイルのレポート名に追加される日時形式を指定します。

可能な値には、さまざまな日付形式が含まれます。例えば、15.07.2014 は dd.MM.yyyy の形式であり、140704120856-0700 は yyMMddHHmmssZ の形式となりま す。SimpleDateFormat について詳しくは、Oracle の Web サイトを参照してくだ さい。形式にはスラッシュや特殊文字を使用しないでください。

データ型:

文字列

デフォルト:

yyyy-MM-dd

## emf.preview.max.items

この設定を使用して、イベント・リストに表示可能なイベントの最大数を大きくします。

この値を大きくすると、ユーザー・インターフェース内でより多くデータの読み取 りおよび表示が必要なシステムのパフォーマンスに影響が出る可能性があります。

データ型:

整数

デフォルト:

50

## Job サービスの詳細設定

このセクションでは、Job サービスの詳細設定について説明します。

#### primary.wait.js

Job サービスの 1 次待機しきい値の時間を秒数で指定します。

値が要求で設定されない場合は、この値が使用されます。

データ型: 整数 デフォルト: 120

## Metrics Manager サービスの詳細設定

このセクションでは、Metrics Manager サービスの詳細設定について説明します。

## initialConnections

接続プールが初期化されるときに作成される接続数を指定します。

データ型: 整数 デフォルト: 5

ヒント:これらの設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## incrementConnections

接続プールの拡大が必要な場合に増分される接続数を指定します。

データ型: 整数 デフォルト: 5

ヒント:これらの設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## maximumConnections

このプールで使用可能な接続の最大数を指定します。

データ型: 整数 デフォルト:

200

ヒント:これらの設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## Monitor サービスの詳細設定

このセクションでは、Monitor サービスの詳細設定について説明します。

## enable.session.affinity

セッションの親和性を有効にするかどうかを指定します。

この設定は、session.affinity.services 詳細設定と共に使用されます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## event.check.active

整合性検査をアクティブにするかどうかを指定します。

可能な値:1 は true、0 (または他の値) は false を示します。

データ型: 整数 デフォルト:

#### event.check.interval

イベントの Monitor サービス・レコードが Content Store のレコードと一致して いることを確認するための整合性検査を行う間隔を分単位で指定します。

イベント整合性の検査機能のスレッドは、不一致をクリーンアップします。

データ型: 整数 デフォルト:

10

#### event.finished.check.active

NC テーブル内にある完了したタスクの一括クリーンアップ処理を有効または無効 にします。この処理では、BulkFinishedTaskCleanerThread スクリプトを使用しま す。このスクリプトは、Monitor サービスが Cognos サービスの始動の一部として 開始する際に、Monitor サービスによって開始されます。

このプロパティーが有効になっていることがシステムで検出されると、クリーンア ップ・スクリプトが BulkCleanStmtsObjectFactory から読み込まれます。このスク リプトはデータベース固有で、削除条件を満たす完了済みレコードをすべて削除す るための単一トランザクションで実行されます。

データ型:

ブール

デフォルト**:** 有効

## event.finished.check.interval

NC テーブル内に完了したタスクが存在するかどうかを一括クリーンアップ処理で 検査する間隔を秒数で指定します。 24 時間より前に完了したタスクが一括クリー ンアップの処理候補です。

デフォルトは 3600 秒 (1 時間) ですが、86400 秒 (24 時間) が理想的です。

データ型: 整数 デフォルト: 3600

## event.finished.check.threshold

NC テーブル内にある完了したタスクのうち、削除対象として選択されるタスクの 最大数を定義します。

データ型: 整数 デフォルト:

10

#### primary.wait.ms

Monitor サービスの 1 次待機しきい値を秒数で指定します。

値が要求で設定されない場合は、この設定が使用されます。

データ型: 整数

デフォルト: 120

## session.affinity.services

enable.session.affinity が true に設定されると、この設定はセッションの親和 性のために構成するサービスを指定します。

N/N-1 シナリオでは、この設定は IBM Cognos Planning サービス

planningAdministrationConsoleService、planningDataService、 planningRuntimeService、および planningTaskService でのみサポートされていま す。それ以外の場合、同種の分散環境において、この設定はすべてのサービスでサ

ポートされます。

サービスを指定するには、必須の serviceName パラメーターを使用します。複数サ ービスを設定するには、各サービスをセミコロン (;) で区切ります。以下に 2 つの 例を示します。

- serviceName=planningTaskService
- serviceName=planningTaskService;serviceName=planningDataService

次の2 つのオプション・パラメーターでは、より具体的な構成を選択できます。

- serverGroup: サーバー・グループの名前を指定します。
- numThreads: 許可される並行タスクの最大数を指定します。デフォルトは 2 です。

パラメーターはコンマ (,) で区切る必要があります。例えば、次のようになりま す。

serviceName=planningTaskService,serverGroup=mygroup,numThreads=4

データ型: 文字列 デフォルト: なし

#### sds.instance.interval

サービス・インスタンスが実行中であることを登録する更新間隔を秒数で指定しま す。

Monitor サービスはこのメカニズムを使用して、他の Monitor サービスがアクティ ブかどうかを判別します。 Monitor サービスが失敗した場合、別の Monitor サー ビスが、失敗したタスクの履歴の更新を含むクリーンアップ処理を、失敗した Monitor サービスの代わりに行うことを選択できます。

サービスが妥当な制限時間内に登録を更新しない場合、別のサービスが、そのサービスの代わりにクリーンアップを行うことを選択できます。現在、その制限は sds.instance.interval 設定の 2 倍の値です。

データ型: 整数

デフォルト**:** 30

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

### enable.tide.metrics.taskqueue

IBM Cognos Administration で、Monitor サービスの特定の評価指標の収集と表示 を使用可能にします。

以下の評価指標が含まれます。

- 高水準キュー待機時間
- 低水準キュー待機時間
- キュー待機時間
- キュー通過要求数
- 高水準キュー長
- 低水準キュー長

データ型:

ブール

デフォルト: 無効

#### sdk.service.poll.interval

再接続するサービスへのクライアント・アプリケーション要求を再試行する前に Monitor サービスが待機する時間を秒数で指定します。 データ型: 整数 デフォルト: 30

### advanced.history.write

最終履歴が拡張 (エンハンスト) スレッド・プールを使用して書き込まれるかどうか を示します。

true の場合、最終履歴は複数のスレッドを使用して書き込まれます。false の場合、最終履歴は単一スレッドを使用して書き込まれます。

データ型: ブール デフォルト: 有効

## advanced.parent.history.threads

Content Store でルート履歴オブジェクトを作成するために使用されるワーカー・ スレッドの数。

この設定を有効にするには、advanced.history.write を true に設定します。

データ型: 整数 デフォルト: 2

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## advanced.child.history.threads

Content Store でステップの子履歴オブジェクトを作成するために使用されるスレッドの数。

この設定を有効にするには、advanced.history.write を true に設定します。

データ型: 整数 デフォルト: 5

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## write.child.histories

Content Store への子履歴オブジェクトの書き込みを制御します。

true のときは、すべての子タスクの最終履歴オブジェクトが書き込まれます。 false のときは、ルート・タスクの最終履歴オブジェクトだけが書き込まれ、子タ スクの履歴オブジェクトは破棄されます。子履歴オブジェクトの書き込み時間が非 常に長い場合に、この設定を使用してタスクのパフォーマンスを改善できます。

データ型: ブール デフォルト: 有効

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### write.child.histories.during.failover

フェイルオーバーの際に、タスクの最終履歴オブジェクトが Content Store に書き 込まれるかどうかを指定します。

write.child.histories の値が true に設定された場合、子履歴オブジェクトおよ びルート・タスクの履歴オブジェクトが書き込まれます。

データ型: ブール デフォルト: 有効

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### connection.tracker.use

接続の使用方法をトラッキングします。

true の場合は、JDBC オブジェクトのアクティビティーのトラッキングに Java プ ロキシー・オブジェクトが使用されます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

#### connection.write.maxwaittime

オブジェクトが JDBC 接続プールから読み取り/書き込み接続を取得するために待 機する最大時間を秒数で示します。

データ型:

整数

デフォルト: 10

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## connection.write.maxConnections

接続プールで使用される読み取り/書き込み JDBC 接続の最大数。

最小値よりも小さい値が設定された場合には、その値が無効となり、指定された最 小値が適用されます。

最小值:5

データ型: 整数 デフォルト: 10

## connection.read.maxwaittime

オブジェクトが JDBC 接続プールから読み取り専用接続を取得するために待機する 最大時間を秒数で示します。

データ型: 整数 デフォルト: 10

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## connection.read.maxConnections

接続プールで使用される読み取り専用 JDBC 接続の最大数。

最小値よりも小さい値が設定された場合には、その値が無効となり、指定された最 小値が適用されます。

データ型: 整数 デフォルト: 8

注:

この設定を有効にするには、サービスを再始動させる必要があります。

## **Report** サービスと Batch Report サービスの詳細設定

このセクションでは、Report サービスと Batch Report サービスの詳細設定につい て説明します。

## BDS.split.maxKeysPerChunk

バースト・レポート処理のキー制限の最大値を指定します。キーの制限を設定する ことで、RSVP.BURST_DISTRIBUTION 設定を true に設定したときに SQL 節が 複雑にならないようにすることができます。値 0 を設定すると、パラメーターの制 限がなくなります。

**データ型:** 正の整数

デフォルト: 1000

## EnableChartTransparencyIE

グラフで Internet Explorer 表示フィルターを使用して透明性を使用可能にするか どうかを指定します。

データ型: ブール デフォルト: 有効

## HyperlinkButtonNewWindow

ハイパーリンク・ボタンをクリックしたとき、新しいウィンドウが作成されるかど うかを指定します。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## HyperlinkMultipleToolbars

HTML レポート内で重複するツールバーが許可されることを指定します。重複する ツールバーの表示を防止するためには、false に設定します。

データ型: ブール デフォルト: 有効

## **RSVP.ATTACHMENTENCODING.BASE64EXTENDED**

MHT または XWLA 形式でレポート出力を生成する際に Base64 エンコードを使用するかどうかを指定します。

場合によっては、カスタム・アプリケーションがレポートに対して MHT または XLWA 出力形式を指定すると、XML 出力で使用される行末文字に関する問題によ り、アプリケーションでレポートが開けなくなることがあります。

データ型: ブール
デフォルト: false

### **RSVP.BURST_DISTRIBUTION**

バースト・レポートを並列実行するか、順次実行するかを指定します。デフォルト 値の false を使用するとジョブが順次実行されるので、所要時間が長くなります。

この設定は、ユーザー・インターフェースの「並列で実行」バースト・オプション に相当します。この設定は、「並列で実行」が「デフォルト」に設定されている場 合にのみ有効です。「並列で実行」オプションが「無効」または「有効」に設定さ れている場合は、その設定がこの設定をオーバーライドします。

データ型:

ブール

デフォルト:

無効

### **RSVP.BURST_QUERY_PREFETCH**

このオプションを true に設定すると、クエリー・プリフェッチが有効になりま す。その結果、クエリーがレポート・レンダリングと並行して実行されるので、バ ースト・レポートの出力がより高速に生成されます。この設定は、動的クエリー・ モードのリレーショナル・モデルにのみ適用されます。

**データ型:** ブール

デフォルト: 無効

### **RSVP.CHARTS.ALTERNATECOLOURS**

グラフのインスタンスにパレットの順番で色を割り当て、アイテムの色をグラフ間 で引き継がないようにするかどうかを指定します。

**データ型:** ブール

デフォルト**:** 無効

## RSVP.CONCURRENTQUERY.ENABLEDFORINTERACTIVEOUTPUT

Report サービスで双方向出力を行うときに、クエリーの同時実行を有効にすることができます。

データ型: ブール デフォルト: 無効

### RSVP.CONCURRENTQUERY.MAXNUMHELPERSPERREPORT

レポートごとのクエリー実行ヘルパーの最大数を指定できます。このパラメーターは、使用可能なすべてのクエリー実行ヘルパーが1つのレポートで消費されてしまうのを防ぐために使用します。

データ型: 整数 デフォルト: 1

RSVP.CONCURRENTQUERY.NUMHELPERSPERPROCESS

クエリーの同時実行を有効化し、各 Report サービス・プロセスおよび Batch Report サービス・プロセスのクエリー実行ヘルパーの最大数を設定することができ ます。デフォルトでは値は 0 で、クエリーの同時実行は無効になっています。

データ型: 整数 デフォルト:

0

#### **RSVP.CSV.DELIMITER**

CSV 出力に使用されるフィールド区切り文字を指定します。

データ型: 文字列

デフォルト: TAB

#### **RSVP.CSV.ENCODING**

CSV 出力を生成するときに使用されるエンコード方式を指定します。

**データ型:** 文字列

デフォルト: utf-16le

### **RSVP.GROUP_METADATA_REQUESTS**

パフォーマンスを改善させるために、可能であれば複数のメタデータ要求をグルー プ化するかどうかを指定します。ユーザーはこのパラメーターを false に設定する ことで、メタデータ要求のグループ化を無効にすることができます。

データ型:

ブール

デフォルト: 有効

#### **RSVP.CSV.MIMETYPE**

CSV 出力の MIME タイプ属性を指定します。

データ型:

文字列

デフォルト:

application/vnd.ms-excel/

## **RSVP.CSV.QUALIFIER**

CSV 出力に使用される文字列修飾子を指定します。

データ型:

文字列

デフォルト**:** 

### **RSVP.CSV.REPEAT_XTAB_LABELS**

ネストされたクロス集計レポートで、エッジ・ラベルを繰り返すかどうかを指定します。

データ型: ブール

デフォルト:

無効

## **RSVP.CSV.TERMINATOR**

CSV 出力に使用される行末記号を指定します。

データ型: 文字列 デフォルト:

LF

### RSVP.DRILL.clearAllMappedParamsOnMismatch

ー部のパラメーターのマッピングが失敗した場合、ドリルスルー処理中に、渡され たパラメーター値のマッピングをどのように扱うかを指定します。パラメーター・ マッピングを継続する (デフォルト) か、すべてのマッピングを破棄してユーザーが 値を入力するようプロンプトが出されるようにします。

このプロパティーを 1 に設定すると、いずれかのパラメーターのマッピングが失敗 した場合、マップされる他のすべてのパラメーターがマッピング表から削除されま す。これにより、欠落しているすべてのパラメーターの入力を再び求められること があります。このプロパティーを 0 に設定すると、ドリルスルー・コンポーネント がパラメーターのマッピングを試みたときにいずれかのパラメーターのマッピング が失敗した場合、残りのパラメーターのマッピングは影響を受けません。

データ型:

整数

デフォルト:

0

#### **RSVP.CSV.TRIMSPACES**

CSV 出力から末尾のスペースを除去するように指定します。

データ型: ブール デフォルト: 無効

#### RSVP.DRILL.DynamicFilterUsesBusinessKey

動的なドリルスルー・フィルターの動作を指定します。ドリルスルーで、デフォルトの動作であるメンバーのキャプションを使用するフィルターの代わりにメンバーのビジネス・キーを使用するフィルターを生成するには、このオプションを1 に設定します。

データ型:

正の整数

デフォルト**:** 

0

#### RSVP.DRILL.ExtractSourceContextFromRequest

新しいメタデータ要求を発行する代わりに、要求のソース・コンテキストからドリ ルスルー要求のパラメーターのメタデータを抽出するようレポート・サーバーに試 行させるかどうかを指定します。このような処理により、ドリルスルー操作のパフ ォーマンスが改善されます。デフォルトでは、これがオンに設定されます。

このプロパティーを 0 に設定すると、常にメタデータ要求が発行されます。

データ型: 整数 デフォルト: 1

#### RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_LARGE_WORKSHEET

Microsoft Excel 2007 の大規模ワークシートに対するサポートを有効にすることが できます。このオプションが true に設定されている場合、最大 1,048,576 行のワ ークシートがサポートされます。

**データ型:** ブール

デフォルト**:** 無効

### RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_OUTPUT_FRAGMENT_SIZE

IBM Cognos Analytics サーバーがディスクへのフラッシュ前に生成する、内部メ モリー断片サイズ (行単位) を調整します。このプロパティーは、デフォルト値を使 用したレポートの生成時に、メモリー不足などの問題がある場合に有用です。レポ ートが正常に実行されるようにするには、値を小さくする必要がある場合がありま す。 データ型: 整数

デフォルト**:** 45000 (概算)

### RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_WORKSHEET_MAXIMUM_ROWS

新しいワークシートに移動する前に、出力する行数を指定します。

データ型: 整数

### RSVP.EXCEL.PAGEGROUP_WSNAME_ITEMVALUE

Microsoft Excel 2007 形式で出力を生成する際、改ページが指定されている場合 に、ワークシートのタブに、ページの分割に使用されるデータ・アイテムのための 名前を付けることを指定します。

注: このプロパティーは Analysis Studio には適用されません。

データ型:

ブール

デフォルト: 毎か

無効

### RSVP.EXCEL.XLS2007_PRINT_MEDIA

「表示しない」スタイルを Excel 2007 出力レポートに適用するかどうかを指定します。

データ型: ブール デフォルト:

有効

### **RSVP.FILE.EXTENSION.XLS**

HTML の代わりに XLS 拡張子を XLS 出力形式の E メールの添付ファイルに使用 するかどうかを指定します。

データ型: 文字列

~ ~ ~ ~

デフォルト:

無効

### **RSVP.PARAMETER_CACHE**

サーバー・レベルでパラメーター・キャッシングを有効にするか、それとも無効に するかを指定します。デフォルトでは、パラメーター・キャッシングは有効です。

RSVP は getParameters 要求を発行すると、IBM Cognos Content Manager 内の レポート・オブジェクトの下にある子オブジェクトに結果を格納します。これによ り、レポートの仕様を変更することなく、キャッシュを作成または更新できるよう になります。 RSVP はパラメーター情報を必要とするときに、Content Manager からのキャッシュ情報を使用します。キャッシュに、RSVP で必要な情報が含まれ ない場合、RSVP はクエリー・エンジンを直接呼び出して情報を取得します。

次のように実行オプションを指定して Batch Report サービスへの ReportService getParameters SOAP 要求を発行すると、キャッシュに情報が入ります。 http://developer.cognos.com/ceba/constants/

runOptionEnum#createParameterCache。この方法では独立した要求によってキャッシュが作成されるため、RSVP がキャッシュの欠落または失効を判別した場合にキャッシュを作成しても、レポートの実行に影響を与えることはありません。ただし、Batch Report サービスによって要求が処理されるため、履歴エントリーが作成され、それはレポートの実行履歴に表示されます。

キャッシュの作成は、Cognos Analytics Reporting からレポートを作成または更新 したときにトリガーされます。また、レポートを実行した際に、既存のキャッシュ が失効していると RSVP によって判別されたときにトリガーされます。 RSVP は、レポートのルート・モデルまたはモジュールのバージョンを利用して、キャッ シュが失効しているかどうかを判別します。

データ型:

ブール

デフォルト**:** 

有効

### **RSVP.PARAMETERS.LOG**

レポート実行のオプションおよびプロンプト・パラメーターをログ・システムに記 録する必要があるかどうかを指定します。

データ型:

ブール

デフォルト: 無効

無効

### **RSVP.PARAMETERS.SAVE**

ユーザーが入力するレポート・プロンプト値を自動的に保存するかどうかを指定し ます。

**データ型:** ブール

デフォルト: 無効

無効

### **RSVP.PRINT.POSTSCRIPT**

UNIX オペレーティング・システムから PDF 文書を印刷するために使用するイン ターフェースを指定します。このオプションが false に設定されている場合、 Adobe Acrobat PDF インターフェースが使用されます。それ以外の場合は、内部 ポストスクリプト・インターフェースが使用されます。

#### データ型:

ブール

デフォルト**:** 有効

### **RSVP.PROMPT.CASTNUMERICSEARCHKEYTOSTRING**

数値データ・アイテムを文字列 (varchar) の形式に変換するように指定します。デ ータ・ソースで数値データ・アイテムが文字列に変換されない場合、このことが必 要になる可能性があります。

データ型: ブール デフォルト: 有効

### **RSVP.PROMPT.EFFECTIVEPROMPTINFO.IGNORE**

メタデータ要求の effectivePromptInfo 属性の発行を無効にし、事実上、レベルの caption 属性より下からレベル自体へのプロンプト情報の移動を無効にすることがで きます。これはデフォルトの動作です。

データ型:

ブール

デフォルト:

### **RSVP.PROMPT.RECONCILIATION**

クエリーやクエリー・グループを処理する方法を定義する、システム全体での構成 を指定します。

この設定のために可能な値について詳しくは、「*IBM Cognos Analytics* 管理および セキュリティー・ガイド」でクエリーの優先度を設定する方法に関するトピックを 参照してください。

データ型:

正の整数または文字列

デフォルト**:** 

0 またはCOMPLETE

### **RSVP.PROMPT.RECONCILIATION.CHUNKSIZE**

RSVP.PROMPT.RECONCILIATION 設定の値が CHUNKED または CHUNKED GROUPED の場合、チャンク・サイズを指定します。

データ型:

正の整数

デフォルト:

5

### **RSVP.PROMPTCACHE.LOCALE**

プロンプトのキャッシュ・データが作成、更新、または使用されるときには常に、 レポートに指定されたロケールの代わりに使用されるロケールを指定します。つま

無効

り、レポート・ユーザーのロケールとは関係なく、単一のプロンプト・キャッシュ が各レポートで使用されるということです。

#### データ型:

文字列

#### RSVP.RENDER.PDF_FONT_SWITCHING

文字列の各文字が優先フォントで表示されることを指定します。優先フォントと は、レポート仕様でリストされている任意のフォントのことです。その後に、グロ ーバル・スタイルのカスケード・スタイル・シート (css) ファイルにリストされて いるフォントが続きます。優先フォントで表示できない文字があった場合、リスト の次のフォントを使って表示されます。

以前のバージョンでは、あるフォントを使用して文字列内のすべての文字を表示で きる場合にのみ、そのフォントが使用されていました。IBM Cognos Business Intelligence 10.1 以降、優先フォントが文字レベルで適用されるようになりまし た。その結果、1 つの単語が異なるフォントで表示されることがあります。フォン トによってはサイズが他より大きいものがあり、ワード・ラップが生じる可能性が あります。

このパラメーター値を false に設定すると、前のバージョンのフォント選択動作に 戻すことができます。

データ型: ブール デフォルト: 有効

#### **RSVP.RENDER.ROUNDING**

データ形式の丸め規則を指定します。

前のバージョンでは、数値を丸めるときに halfEven 規則が使用されていました。 この規則は簿記でよく使用されます。しかし、一部の分野の精度規則には、halfUp 規則などの別の丸め規則を必要とするものもあります。IBM Cognos Business Intelligence 10.2.0 以降では、組織の精度規則に準拠した丸め規則を選択できます。

以下の丸め規則を使用できます。

#### halfEven

最も近い隣接値に丸めます。等距離の値の場合は、最も近い偶数に丸めま す。

#### halfDown

最も近い隣接値に丸めます。等距離の値の場合は切り捨てられます。

#### halfUp

最も近い隣接値に丸めます。等距離の値の場合は切り上げられます。

#### ceiling

正の方向の数値に丸めます。

floor 負の方向の数値に丸めます。

down ゼロの方向に丸めます。

up ゼロから離れる方向に丸めます。

**データ型:** 文字列

デフォルト: halfEven

### **RSVP.RENDER.VALIDATEURL**

IBM Cognos Application Firewall 検証を、レポート仕様の中に含まれる URL (イ メージ・タグ、ボタン、ハイパーリンク、および CSS 規則内の背景画像にある URL を含む) や、レポートの cssURL 実行オプションによって指定された URL に 対して行うかどうかを指定します。

このオプションが true に設定され、かつ CAF が使用可能のとき、検証が以下の 規則を使用して行われます。

• 完全修飾 URL つまり絶対 URL:

protocol://host[:port]/path[?query]

protocol は 'http' または 'https' のどちらかであり、host は有効なドメイン・ リストに照らして検証されます。

• サーバー・インストール Web ルートからの相対 URL

/<install root>/.*

ここで、<install root> は、IBM Cognos Configuration の「ゲートウェイ URI」から取得されるゲートウェイ・ファイルのパスです。例え ば、/ibmcognos/ps/portal/images/action_delete.gif などのようになります。

- 特に許可された次の URL のいずれか:
  - about:blank (大文字と小文字の区別なし)
  - JavaScript:window.close() (大文字と小文字の区別なし、末尾のセミコロン は省略可能)
  - JavaScript:parent.close() (大文字と小文字の区別なし、末尾のセミコロン は省略可能)
  - JavaScript:history.back() (大文字と小文字の区別なし、末尾のセミコロン は省略可能)
  - parent.cancelErrorPage() (大文字と小文字の区別なし、末尾のセミコロンは 省略可能)
  - doCancel()(大文字と小文字の区別なし、末尾のセミコロンは省略可能)

データ型:

ブール

デフォルト**:** 

無効

### **RSVP.REPORTSPEC.LOG**

レポートの仕様をログ・システムに記録する必要があるかどうかを指定します。

データ型: ブール デフォルト: 無効

## Repository サービスの詳細設定

このセクションでは、Repository サービスの詳細設定について説明します。

#### repository.maxCacheDocSize

キャッシュに格納できる各レポートの最大サイズ (MB 単位)。

この値は、正の整数 (0 より大きい) でなければなりません。指定のサイズより大き いレポートはキャッシュに入れられずに、リポジトリーから取得されます。

データ型:

整数

デフォルト**:** 

10

## UDA 詳細設定

このセクションでは、Universal Data Access (UDA) の詳細設定について説明します。

以下のデータベース名は、UDA の詳細設定で認識されます。

- SYBASE ASE
- IBM Db2
- INFORMIX
- MICROSOFT SQL SERVER
- NETEZZASQL
- NCLUSTER
- WEBSPHERE CLASSIC FEDERATION
- GREENPLUM
- INTERBASE
- INGRES
- SYBASE IQ
- INGRES_VECTORWISE
- PARACCEL
- POSTGRESQL
- TERADATA
- VERTICA DATABASE
- ORACLE
- SAP R3
- XML

データベース名が認識されない場合、設定は読み取られません。リストされていない他のデータベースがある場合、または ODBC ドライバーが異なるデータベース 名を返す場合は、ODBC SQLGetInfo() 属性の SQL_DBMS_NAME から取得された データベース名を使用します。

#### UDA.CALL_ODBC_SQLNUMRESULTCOLS

クエリーのために設定された列数を取得します。

構文:

UDA.CALL_ODBC_SQLNUMRESULTCOLS= "データベース名: ブール値"

データ型:

ブール

デフォルト: _

## True

### UDA.CONVERT_TIMESTAMP_LITERAL_TO_DATE_LITERAL

Oracle DATE 列には日付と時刻の部分が含まれるので、UDA は Oracle DATE の データ型を TIMESTAMP として報告します。

IBM Cognos 製品は、Oracle DATE 列を TIMESTAMP として扱い、フィルター 内に TIMESTAMP リテラルを生成します。

DATE 列と TIMESTAMP リテラルを比較するとき、Oracle 最適化は内部関数を DATE 列に追加して、比較に互換性を持たせます。これにより、Oracle のパフォー マンスが影響を受けます。

これは、Oracle にのみ固有の項目です。ブール値が TRUE に設定されると、UDA は時間値が 0 の TIMESTAMP リテラルを DATE リテラルに変換します。 Oracle は、DATE 列でインデックス・スキャンを使用します。

#### 構文:

UDA.CONVERT_TIMESTAMP_LITERAL_TO_DATE_LITERAL= "データベー ス名: ブール値"

データ型:

ブール

デフォルト: False

#### UDA.INCLUDE_DST_TIMEZONE

この設定は、タイム・ゾーン付きタイム・スタンプのデータ型に夏時間調整 (DST) を含めるために使用します。

この設定を true にすると、タイム・ゾーン付きタイム・スタンプのデータ型 (current_timestamp など) を使用するすべての操作に DST が含められます。この 設定が false の場合、そのような操作から DST が除外されます。

#### 構文:

UDA.INCLUDE_DST_TIMEZONE= ブール値

データ型: ブール デフォルト: True

#### UDA.NATIVE_SQL_IN_CTE

WITH 節のコマンド表式にあるネイティブ SQL を処理する方法を制御します。

ブール値が KEEP に設定された場合、WITH 節の一部であるネイティブ SQL は基礎のデータベースにプッシュされます。

ブール値が PT に設定された場合、ネイティブ SQL はパススルー・ネイティブ SQL と見なされます。 SQL 自体がデータベースにプッシュされます。

ブール値が DT に設定された場合、WITH 節は除去されて、すべてのコマンド表式 は派生表に変換されます。

#### 構文:

UDA.NATIVE SQL IN CTE= "データベース名:ストリング値"

データ型:

ブール

デフォルト: KEEP

#### UDA.PARSE_ANSI_NUMERIC_LITERAL

UDA SQL パーサーが小数点のある数値リテラル (1.23 など) を、厳密な数値 (10 進数など) として読み取るか、または近似値 (倍精度など) として読み取るかを指定 します。

TRUE に設定された場合、UDA SQL パーサーは、小数点のある数値リテラルを厳 密な数値として読み取ります。桁数が 9 未満の数値は、小数部桁数のある整数とし て読み取られます。桁数が 10 から 18 の数値は、小数部桁数のある Biginteger と して読み取られます。桁数が 19 から 77 の数値は、10 進数 (精度、小数部桁数) として読み取られます。桁数が 77 を超える数値は、倍精度値として読み取られま す。 FALSE に設定された場合、UDA SQL パーサーは、小数点のある数値リテラ ルを倍精度値として読み取ります。

#### 構文:

UDA.PARSE_ANSI_NUMERIC_LITERAL= ブール値

データ型:

ブール

デフォルト: True

#### UDA.PARSE_STRING_LITERAL_AS_VARCHAR

この設定は、ストリング・リテラルを char データ型として解析するか、それとも varchar データ型として解析するか指定します。

この設定値が false の場合、UDA SQL パーサーはストリング・リテラルを char として読み取り、接頭部 N を持つストリング・リテラルを nchar として読み取り ます。この設定値が true の場合、UDA SQL パーサーはストリング・リテラルを varchar として読み取り、接頭部 N を持つストリング・リテラルを nvarchar とし て読み取ります。

#### 構文:

UDA.PARSE_STRING_LITERAL_AS_VARCHAR= ブール値

データ型:

ブール

デフォルト:

False

#### UDA.REPREPARE_QUERY_FOR_PARAMETER_VALUE

UDA ODBC ゲートウェイがパラメーター値ごとにクエリーを再準備するかどうか を指定します。

構文:

UDA.REPREPARE_QUERY_FOR_PARAMETER_VALUE= "データベース名: ブ ール値"

データ型:

ブール

デフォルト:

False

#### UDA.SET_READONLY_TRANSACTION_AUTOCOMMIT

複数のデータベースに接続する場合に、このプロパティーを true に設定すると、 個々のデータベースの自動コミット・モードが有効になります (データベースで自 動コミット・トランザクションがサポートされる場合)。

デフォルトでは、接続操作の対象データベースに自動コミット・トランザクション をサポートしないものが 1 つでも含まれていると、その接続操作ではすべてのデー タベースでこのようなトランザクションがサポートされなくなります。このプロパ ティーを true に設定すると、読み取り専用トランザクションの自動コミットが有 効になります。値を false にすると、この機能は無効になります。

自動コミット・トランザクションをサポートしないデータベースがある場合に、この機能を有効にすると、以下の例外が発生する可能性があります。

UDA-SQL-0178 "start " パラメーター・ブロック・オプションはサポートされていません。

構文:

UDA.SET_READONLY_TRANSACTION_AUTOCOMMIT= "データベース名: ブール値"

データ型: ブール デフォルト: False

## UDA.THREADSTART_TIMEOUT

UDA sqlAOpen API でスレッドの開始を待機する際のタイムアウトを秒数で指定 します。 sqlAOpen API で、UDA は別個のスレッドを使用して結果セットを作成 し、sqlCancelOpen API によって結果セットを取り消すことができるようにしま す。

過去の機能をさかのぼって利用できるよう、Cognos Configuration で設定された UDA_THREADSTART_TIMEOUT 詳細プロパティーは引き続きサポートされま す。ただし、詳細設定に UDA.THREADSTART_TIMEOUT 詳細プロパティーが存 在する場合は、Cognos Configuration にある UDA_THREADSTART_TIMEOUT 詳細プロパティーが無視されます。

構文:

UDA.THREADSTART_TIMEOUT= 数值

データ型:

正の整数 (1 - 600)

デフォルト:

20

## 索引

日本語,数字,英字,特殊文字の順に配列されてい ます。なお,濁音と半濁音は清音と同等に扱われて います。

## [ア行]

アーカイブ アドホック・タスク 405 承認要求 405 タスク 405 通知要求 405 配布 304 IBM Cognos コンテンツ 193 アーカイブされたコンテンツ、検索 206 アーカイブ時刻 指定方法 198 アーカイブのインポート 306 アイドル接続タイムアウト Query サービス 183 アクセス権 246 エントリーの所有権 229 機能 475 許可または拒否する 229 資格情報 233 初期 473, 474 設定 231 匿名 255 保護されている機能と特性 246, 475 ユーザー 224 参照: 権限 アクセスを許可する 229 アクセスを拒否する 229 アクティブにする サービス 55 アクティブ・スクリプト Web ブラウザーで有効にする 9 アクティブ・レポート 384 アップグレード レポート仕様 329 アップロードされたファイル ルーティング・タグの設定 60 アドホック・タスク アーカイブ 405 開始 400 完了 401 キャンセル 402 コメント 394,400 作成 395 受信者の変更 398 所有権の取り消し 399

アドホック・タスク (続き) 操作する 393, 397 停止 400 デッドライン 399 要求 397 E メール通知の登録 394 priority 400 アプリケーション層コンポーネント ログ・サーバー 17 あらかじめ定義されているエントリー 257, 267 一時オブジェクトの場所 73 移動 ディスパッチャー 58 配布アーカイブ 325 イベント 記録 18 ログ記録 18 印刷 プリンターの設定8 UNIX オペレーティング・システム 114 インストール フォント 6 インポート 共有フォルダー 326 個々のユーザー・アカウント 326 個人用フォルダー 326 視覚化 326 設定 328 FileNet に対するカスタム・クラスのインポート 196 エージェント サービス 49 失敗したものを再実行 291 プロパティー 276 エクスポート 321 共有フォルダー 322 個々のユーザー・アカウント 322 個人用フォルダー 322 視覚化 322 仕様を作成する 321 データ 321 エクスポート配布アーカイブ 累積 324 エラー・メッセージ 機密保護機能 23 エラー・メッセージ保護機能, 詳細表示 23 エントリー 過去 281 現在 280 実行のキャンセル 280 実行の中断 280 実行優先度 288

エントリー (続き) 実行履歴 289 失敗したものを再実行 291 スケジュール 286, 296 中断中 283 発生に基づいたスケジューリング 302 プロパティー 271 有効化 271 予定されている 282 エントリーの実行をキャンセルする 280 オブジェクト機能 249 系統 249 設定 252 用語集 249 参照: 保護されている機能 親和性の設定 82

# [カ行]

開始 アドホック・タスク 400 サービス 53, 55 承認要求 400 回数 ピークの設定 82 階層 Essbase 128 外部オブジェクト・ストア 103 外部ネームスペース 207 参照の制御 71 参照を配布する 304 eTrust SiteMinder 207 IBM Cognos Series 7 207 LDAP 207 Microsoft Active Directory 207 SAP 207 外部リポジトリー コンテンツのアーカイブ 193 書き込み権限 223 確認 通知要求 404 過去 エントリー 281 処理 281 仮想テナント マルチテナンシー 353 仮想プライベート・データベース Oracle データベース 168, 174 ガバナー上限の設定 Report Data サービスのレポートのサイズ 92 環境 多言語環境を設定する 5 監査レポート 22 設定 22 監査ログ ログ宛先 17

監査ログ (続き) 参照: ログ・メッセージ 監視アイテム 規則プロパティー 276 監視する イベント 18 サービス 49 監視リスト出力 保存 90 管理 IBM Cognos Analytics 1 完了 アドホック・タスク 401 承認要求 401 キーボード・ショートカット 463 「参照」および「検索」ビュー 464 「セキュリティー・コードの入力」 ウィンドウ 466 「マイ・レポート」、「インポート済みコンテンツ」、およ び「サンプル」スペース 463 レポート・ビューアー 465 IBM Cognos Mobile ホーム画面 463 記述子ファイル IBM Cognos ソフトウェアの出力レポート・ファイル 104 規則 配布 315 プロパティー 276 機能 保護されている機能 237 Mobile 454 Mobile 管理 454 機能、 参照: 保護されている機能 キャッシュ クリア, Query サービス 186 セッション 73 セッションで無効にする 100 Content Manager のサイズの上限 71 キャッシュ管理 Query サービス 186 キャッシュ状態の書き込み 187 キャッシュの使用 Query サービス 186 キャンセル アドホック・タスク 402 承認要求 402 キューの制限 設定 85 キュー評価指標 有効化 111 キューブ 383 再構築された PowerCube の Report サービス接続の更新 47 IBM Cognos Series 7 390 IBM Cognos Series 7 多言語プロパティー 391 共有フォルダー 配布 309

拒否 承認要求 401 均衡階層 Essbase 128 クエリー 優先順位付け 98 クエリー計画トレース Query サービス 183 クエリーにおける数値検索ストリングから文字列への変換 99 クエリーの実行 同時 95 クエリーの同時実行 95 クエリーの文字列 数値検索キーからの変換 99 クエリーの優先順位付け 98 クライアント・サイド証明書 456 クラスター互換モード 81 グループ 217 インストール後にセキュリティー設定を変更する 267 組み込み 255 作成 219 セキュリティー 215 配布 311 配布リストを追加する 218 メンバーを追加および削除する 220 ルーティング・キーワードの設定 60 IBM Cognos Controller 218 Mobile テーマの割り当て 435 グループ化 ディスパッチャー 58 ゲートウェイ Report Data サービス用のマッピングの指定 62 計画 配布 304 形式設定 レポート 386 レポートを CSV 形式に設定する 388 Excel 形式のレポート 387 HTML のレポート 387 形式文字列 130 系統 オブジェクト機能 249 設定 107 ドリルダウン操作 385 表示 385 保護されている機能と特性 237 IBM InfoSphere Information Governance Catalog 107 IBM Metadata Workbench 385 権限 親/子 230 書き込み 223 許可または拒否する 229 グループと役割の削除 230 実行 223 操作 225 通過 223

権限 (続き) 配布 230, 320 保護されている機能と特性 237, 246 ポリシー設定 223 読み取り 223 参照: アクセス権 権限と許可される操作 Cognos Workspace レポート、レポート部品、フォルダー、ワークスペース 225 言語 レポートのデフォルト 389 レポート用に選択する 388 SAP BW データ・ソース 388 現在 エントリー 280 処理 280 検索、アーカイブされたコンテンツ 206 検索キー クエリーにおける文字列への変換 99 コア・ダンプ・ファイル 24 向上させる パフォーマンス 77 更新 キャッシュ・データ 298 グループおよび役割 220 信頼されている資格情報 233, 234 Report サービス接続 47 構成 マルチテナンシー 348 個人用ページ IBM Cognos Series 7 のコンテンツを追加する 13 コマンド データベース 504 ネイティブ SOL 507 プロキシー・セッションを開始する 505 プロキシー・セッションを停止する 505 コマンド行 API Query サービス 189 コマンド・ブロック データベース接続 168 コメント アドホック・タスク 394,400 承認要求 394, 400 ネイティブ SQL 178, 180 Cognos SQL 178, 180 コメント、Cognos Workspace の配布 334 コメント、Cognos Workspace のもののレポート 334 コメントの配布、IBM Cognos Workspace 333 コンテンツ ID の割り当て 330 コンテンツ ID、割り当て 330 コンテンツ保守タスク 202,203 コンテンツ・アーカイブ 202 コンテンツ・アーカイブ保守タスクの作成 202

## [サ行]

サーバー 管理 49 クエリーの同時実行 95 サーバー構成設定 438 サーバー・グループ 設定 78 ルーティング規則の設定 61,78 サービス 49 アクティブにする 55 イベント管理 50 エージェント 49 開始または停止する 53 画像 50 クエリー 52 システム 53 ジョブ 50 プレゼンテーション 49,52 メタデータ 51 モバイル 51 リポジトリー 53 リレーショナル・メタデータ 52 レポート 49,53 ログ 49 Agent サービス 49 Annotation 50 Batch Report 50 Content Manager 50, 68 Delivery 50 Delivery サービス 49 Event Management サービス 49 Human Task 50 IBM Cognos Analytics 52 Interactive Discovery Visualization 50 Job サービス 49 log 51 Migration 51 Monitor 52 Monitor サービス 49 Planning Data 52 Report Data 52 Visualization Gallery サービス 53 最適化 パフォーマンス 77 モデル 77 サインオン データ・ソース 163, 235 変更 165 サインオンの変更 165 削除 ディスパッチャー 56 ネームスペース 209 ユーザー・プロファイル 344 作成 設定フォルダー 58

参照 外部ネームスペースの制御 71 サンプル 多言語データを使用する 497 Mobile 451 視覚化 インポート 380 権限の表示 381 削除 381 配布 322 プロパティーおよびアクセス権の設定 381 IBM Cognos Analytics コミュニティー 379 資格情報 信頼されている 233 スケジュールの変更 297 データ・ソース 163, 235 しきい値 評価指標の設定 46 システム パフォーマンス 29 システム管理者 配布 311 システム管理者役割 256 システム全体のユーザー補助機能付き出力レポート 3,462 システム評価指標 リセット 47 システム・パフォーマンスの評価 44 システム・パフォーマンスの評価指標 29 キュー 31 セッション 31 データ収集 29 評価指標のリスト 30 プロセス 40 要求 36 **IVM 34** Report サービス接続の更新 47 実行権限 223 保護されている機能と特性 246 実行時間 maximum 89 実行ツリー・トレース Query サービス 183 実行トレース Query サービス 183 実行優先度 288 実行履歴 スケジュールされたエントリー 295 表示 289 保存期間 290 失敗したエントリー 再実行 291 出力形式 制限する 200 出力レポートの保存 104 出力レポート場所 104

```
出力レポート履歴
  保存期間 389
出力レポート・バージョン
 保存 389
出力レポート・ファイル
  保存 103
 IBM Cognos ソフトウェア外部での保存 103
  IBM Cognos ソフトウェアに保存する 104
ショートカット 445
仕様
  配布 304
消去
  デバイス・データ 458
  null 值 337
詳細設定
  グローバル設定 535
  サービスの設定 537
  設定 535
  ディスパッチャーの設定 536
  Mobile サービス 434
詳細なエラー
  保護されている機能と特性 237
承認 210
  承認要求 401
承認要求
  アーカイブ 405
  開始 400
  完了 401
  キャンセル 402
  拒否 401
  コメント 394,400
  受信者の変更 398
  承認 401
  所有権の取り消し 399
  操作する 393, 397
  停止 400
  デッドライン 399
  要求 397
  E メール通知の登録 394
 priority 400
証明書認証
 PKCS12 456
初期セキュリティー設定 255
ジョブ
  サービス 49
  失敗したものを再実行 291
  ジョブ・ステップの送信 275
  スケジュール 298
  ステップ 298
  配信オプション 275
  プロパティー 275
ジョブ・キュー評価指標
  有効化 111
所有者
  アドホック・タスク 398
  承認要求 398
```

処理 管理 279 処理容量 79 シングル・サインオン IBM Cognos Analytics および PowerPlay 391 Microsoft Analysis Services 132 Microsoft SOL Server 137 進行中の要求係数 79 診断 参照: トラブルシューティング 信頼されている資格情報 233 更新 233, 234 作成 233 スケジュール 233 信頼できるドメイン・リスト 115 数値検索キー クエリーにおける文字列への変換 99 数値データ 形式文字列 130 ドリルスルーにフィルターを適用しない 425 数値の形式 numeric formats 130 スキーマ データ・ソース・コマンド 503 スケジュール 445 エントリー 296 管理 286, 289, 293 資格情報 233 資格情報の変更 297 実行履歴 295 ジョブ 298 中断されたエントリーを管理する 283 追加または更新時におけるプロパティーの検証 115 トリガーに基づいた 301 発生に基づいたエントリー 302 複数エントリー 298 プロンプト 294 保護されている機能と特性 237 予定されている処理の管理 282 レポートとレポート・ビュー 293 Ouerv サービス管理タスク 188 Ouery サービスのキャッシュ・タスク 186 スケジュールの追加/更新時におけるロックの回避 115 スコアカード・ウィンドウのステータス 42 スコアカード・ウィンドウの評価指標スコア 42 スレッド実行時間 指定方法 199 セキュリティー アクセス権 223 アプリケーション・レベル 211 あらかじめ定義されているエントリー 257,267 インストール後にセキュリティー設定を変更する 267 機能と特性 237 組み込みのエントリー 255 システム管理者役割 256 初期設定 255 初期ポリシー 255

セキュリティー (続き) 設定 255, 267 データ・ソース 181 認証 207 認証ポリシー 459 ネイティブ・アプリケーション 457 配布 230, 304 パスワード保護 455 プロバイダー 207 モデル 207 ユーザー、グループ、および役割 215 CAM パスポート設定 459 IBM Cognos Analytics へのアクセスを制限する 14 IBM Cognos Application Firewall 211 Lease Key 458 Lease Key 技術 458 PDF 出力に対して設定する 387 Report Data 458 "すべてのユーザー" グループ 14,256 セキュリティー・ドキュメント Cognos Proven Practices 207 セキュリティー・メカニズム 452 セッション プロキシーを開始する 505 プロキシーを停止する 505 セッション変数 163 セッション・キャッシュ 無効化 100 接続 数を設定する 82 管理 69 ディスパッチャー 82 接続情報 更新 47 接続情報, 更新 47 接続パラメーター 142, 156, 163 接続プール設定 Content Manager データベース 69 設定 アクセス権 231 監視リスト出力の保存 90 最大実行時間 89 定期的ドキュメント保存 90 ディスパッチャーおよびサービス 77 ディスパッチャー・ステータスのスキャンの頻度 66 日本語のエンコード方式 467 フォルダー 58 プリンター 8 保護されている機能と特性へのアクセス 246 Cognos Mobile ネイティブ・アプリケーション 432 Shift-JIS 文字 467 Web ブラウザー 9 潜在所有者 アドホック・タスク 398 承認要求 398

```
前提条件
配布 320
ソース
配布環境 303
ソート
英語以外のロケール 70
操作
権限 225
資格情報 233
双方向処理
マルチテナンシー 376
属性
評価指標スコア 45
```

# [夕行]

ターゲット環境 配布 303 タイムアウト 85 データ・ソース接続 162 Content Manager のデータベース接続数を指定する 69 多言語データの文字変換 497 タスク アーカイブ 405 アーカイブの表示 405 開始 400 確認 404 完了 401 キャンセル 402 コメント 394,400 自動化 3 所有権の取り消し 399 所有者 398 潜在所有者 398 操作する 393, 397 通知要求 402 停止 400 デッドライン 399 要求 397 利害関係者 398 E メール通知 394 priority 400 タスクの自動化3 タスク・キュー評価指標 有効化 111 注釈 実行済みの有効期限 112 中断 エントリー 280 調整 サーバー・パフォーマンス 77 通貨 混合を表示する 383 通過 権限 223 通知要求 402

通知要求 (続き) アーカイブ 405 確認 404 作成 403 読み取り 404 データ インポート 325 エクスポート 321 系統の表示 385 多言語サンプル 497 デバイスからの消去 458 配布 320 バックアップ 191 データのモデルを作成する 337 データベース 英語以外のロケールのエントリーのソート 70 コマンド 168, 504 コマンド・ブロック 175 コマンド・ブロックの例 171 多言語用に設定する 6 ネイティブ SQL コマンド 507 プロキシー・セッションを開始する 505 プロキシー・セッションを停止する 505 ログ・メッセージの表 509 データベース接続 コマンド・ブロック 168 データをインポートする 規則 315 IBM Cognos Analytics 325 データ・サーバー 接続パラメーター 156 データ・ストア 一致するディメンション 412 データ・ソース 117, 132 既存の接続の変更 161 コマンド 503 コマンド・ブロック 175 コマンド・ブロックの例 171 サインオン 163, 235 サインオンの作成 163 資格情報 163, 235 セキュリティー 181 接続 154 接続コマンド 504 接続タイムアウト 162 ソースの変更 163 データベース・コマンド 168 配布 312 ファイル・ベースのデータ・ソース接続へのパス 154 複数のネームスペースから保護する 230 分離レベル 166 Cognos キューブ 121 Db2 118 Db2 OLAP 126, 127 IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services 130 Informix 131

データ・ソース (続き) **IDBC** 接続を使用する 153 Microsoft SQL Server 137 Microsoft SQL Server Analysis Services 2005 (SSAS 2005) 132 Microsoft SQL Server Analysis Services 2008 (SSAS 2008) 132 **ODBC 139** Oracle 142 Oracle Essbase 126 SAP Business Information Warehouse (SAP BW) 144 Sybase Adaptive Server Enterprise 147 TM1 149 XML ファイル 151 データ・ソース接続 142, 163 新しい接続の追加 160 サインオン 163 作成 153, 154 設定の変更 162 データ・ソースへの接続 117 データ・ソース・サインオン 作成 163 変更 163 データ・モジュール ルーティング・タグの設定 60 テーブル ログ・メッセージのデータベース 509 テーマ 作成 437 定期的ドキュメント設定 90 停止 アドホック・タスク 400 サービス 53 承認要求 400 ディスパッチャー 49,66,67 移動 58 インポート 328 開始または停止する 53,55 クラスター互換モード 81 グループ化 58 削除 56 処理容量を使用した負荷の分散 79 進行中の要求係数を使用して負荷を分散する 79 ステータスのスキャンの設定 66 テスト 64 名前変更 63 負荷分散 81 複数ディスパッチャーのフェイルオーバー 65 保護 66 ルーティング規則の設定 59 ディスパッチャーの負荷を分散する 処理容量 79 進行中の要求係数 79 ディメンション ドリルスルー・アクセス用の一致するディメンション 412 ディレクトリー 内容の配布 309 テスト ディスパッチャー 64 配布 329 デッドライン 承認要求 399 テナント アクティブなユーザー・セッションの終了 371 削除 372 作成 360 マルチテナント環境 347 無効化 372 ユーザー・プロファイル 366 有効化 372 テナント ID 共有オブジェクト 362 「テナント管理者」役割 256 テナント・バウンド・セット カスタム・プロバイダーに基づく構成 356 ユーザー・アカウント属性に基づく構成 355 テナント・バウンド・セットのプロパティー マルチテナンシー 353 デフォルト サービス 55 ユーザー・プロファイル 341 レポートの言語 389 レポートのプロンプト値 389 PowerPlay レポート 391 当該国表記拡張 497 同期する 待機中の Content Manager 70 登録解除 ディスパッチャー 56 ネームスペース 209 特性、 参照: 保護されている特性 特定ユーザーのログ記録 25 トラブルシューティング 特定ユーザーの問題の診断 25 メッセージをログに記録する 18 ログ記録 17 トリガーに基づいたスケジュール 301 取り消し アドホック・タスク 399 承認要求 399 ドリルスルー 407 一致するディメンション 412 概念 408 選択コンテキスト 409 ターゲット・パラメーターを設定する 419 ドリルスルー・テキストの指定 426 パス 408 パッケージ 410 パッケージでのアクセスの定義 417, 419 パッケージでの設定 417, 419

ドリルスルー (続き) ビジネス・キー 413 日付の使用 416 フィルターの動作を変更する 113 複数の値 426 ブックマークを使用する 411 メンバーと値 412 モデル・ベースのアクセス 408 モデル・ベースのレポートで範囲を使用する 414 レポート形式 409 レポートの作成 425 レポート・ベースのアクセス 408 Analysis Studio でのターゲットの設定 421 PowerCube とパッケージ 416 URL を使用する 411 ドリルスルー、 参照: ドリルスルー ドリルスルー定義 デバッグ 422 ドリルスルー・アシスタント 422 ドリルスルー・アクセス デバッグ 422 ドリルスルー支援 422 ドリルダウン操作 系統 385

## [ナ行]

名前付きセット 制限 390 名前変更 ディスパッチャー 63 日本語文字 ラウンド・トリップ・セーフティー 468 認証 207 プロンプト 230 ユーザー通過, Microsoft Analysis Services 132 認証プロバイダー 207 認証ポリシー 459 ネームスペース 207 外部参照を配布する 304 外部の参照 71 削除 209 復元 209 複数 207, 230 IBM Cognos 210 IBM Cognos Series 7 ネームスペースを使用する 13 参照: 外部ネームスペース 参照: 認証プロバイダー ネイティブ SQL コマンド 507 SQL 文にコメントを追加する 178, 180 ネイティブ・クエリー・ログ記録 20

# [ハ行]

バージョン 出力レポートを配布する 310 バースト 結果の配布 304 配布 303 アーカイブ 304 アーカイブの移動 325 インポート 325 エクスポート 321 エクスポート仕様を作成する 321 外部ネームスペースの参照 304 規則 315 共有フォルダー 309 グループ 311 計画 304 権限 320 更新済み PowerCube 181 コマンド行 303 システム管理者 311 仕様 304 セキュリティー 230, 304 設定オブジェクト 328 前提条件 320 データ 320 データ・ソース 312 ディレクトリーの内容 309 テスト 329 パッケージ 309 部分的な配布 309 マルチテナント環境 367 役割 311 レポート 303 Content Store 全体 307 Human Task サービス Annotation サービス 332 「Proven Practices」ドキュメント 303 参照: 配布 配布オプション 部分的 310 配布仕様 既存の変更 324 配布リスト グループと役割のメンバーシップ 218 パスワード保護 455 バックアップ データ 191 ファイルの復元 191 バックグラウンド・アクティビティー 開始または停止 76 Content Manager 76 パッケージ 337 外部リポジトリーを指定 202 管理する 337 ドリルスルー 410 ドリルスルー・アクセスの設定 417, 419

パッケージ (続き) 配布 309 配布時に無効にする 310 ルーティング・タグの設定 60 PowerCube 用の作成 337 SAP BW 用に作成する 337 SAP BW を編集する 337 パッケージの作成 PowerCube 337 SAP BW 用 337 バッチ レポート 49 Report サービス 49 パフォーマンス システム 29 システム評価 44 調整 77 ピークの回数 82 バランスのとれていない階層 Essbase 128 範囲 ドリルスルー・アクセスでの使用 414 ビジネス・キー ドリルスルーに使用する 413 日付 ドリルスルー・アクセスでの使用 416 ビュー レポート 384 ヒューマン・タスク 393 実行済みの有効期限 112 評価指標 システムのリセット 47 リセット 47 評価指標スコア 属性の表示 45 評価指標のしきい値 設定 46 表示する 混合通貨 383 ファイアウォール IBM Cognos Application Firewall 211 ファイルへのモデルの書き込み Query サービス 183 ファイル・ベースのデータ・ソース パス 154 フィルター ドリルスルー、数値データ 425 ドリルスルー、説明的ディメンション 425 ドリルスルー・フィルターの動作を変更する 113 フェイルオーバー 複数ディスパッチャー 65 フォルダー 外部リポジトリーへのアーカイブ 202 外部リポジトリーを指定 202 共有の配布 309 設定 58

フォルダー (続き) 配布時に無効にする 310 レポート 202 フォント インストール 6 PDF ファイル 85 負荷 Content Manager の負荷の削減, ユーザー・セッション・ ファイル 73 負荷分散 79 処理容量 79 進行中の要求係数 79 ディスパッチャー 81 復元 データ 191 ネームスペース 209 ブックマーク ドリルスルー・アクセス用に作成する 411 プッシュ通知 442 Apple 442 ブラックアウト期間 指定方法 198 プリンター 設定 8 プロキシー接続 Oracle データベース 168, 173 プロキシー・サーバー 66,67 プロキシー・セッション データベースで開始する 505 データベースで停止する 505 プロジェクト バックアップ 191 プロセス 数を設定する 82 ディスパッチャー容量 79 プロセスおよび接続 最大値の設定 84 プロバイダー セキュリティー 207 プロパティー エージェント 276 エントリー 271 画面のヒント 271 規則 276 形式 274 言語 271, 274 実行履歴 271 出力レポート・バージョン 271 ショートカット 271 ジョブ 275 所有者 271 所有者として実行 274 ソース・レポート 271 プロンプト値 274 連絡先 271

プロパティー (続き) IBM Cognos Series 7 レポートとキューブの多言語プロパ ティー 391 Query サービス 183 プロファイル ユーザー 341 プロンプト 445 キャッシュ・データ 298 スケジュールされたエントリー 294 デフォルト・レポート値の指定 389 ログ記録 20 プロンプト・キャッシュ ロケールのオーバーライド 73 分離レベル データ・ソース 166 保護 ディスパッチャー 66 Content Store 269 保護されている機能 アクセス権 246 系統 237 個人用データ 237 詳細なエラー 237 スケジュール 237 用語集 237 Administration 237 Analysis Studio 237 CVS 出力の生成 237 Event Studio 237 IBM Cognos Viewer 237 Mobile 237 PDF 出力の生成 237 Query Studio 237 Reporting 237 XLS 出力の生成 237 XML 出力の生成 237 保護されている機能と特性 初期アクセス権 475 Cognos Mobile 454 保護されている特性 アクセス権 246 参照: 保護されている機能 保存 203 出力レポート・ファイル 103 IBM Cognos ソフトウェア外部への出力レポートの 103 IBM Cognos ソフトウェアの出力レポート・ファイル 104 保存規則の更新 203 ホット・スポット,制限する 91 ポリシー設定権限 223

## [マ行]

マルチテナンシー 階層ノードに基づく構成 349 格納規則 359 カスタム・テナント・プロバイダーに基づく構成 352 マルチテナンシー (続き) 仮想テナント 353 構成 348 双方向処理 376 テナント 347, 359 テナント ID 362 テナント管理 359 テナントへのコンテンツの割り当て 361 テナント・コンテンツの配布 367 テナント・バウンド・セット 355, 356 テナント・バウンド・セットのプロパティー 353 マルチテナンシー設定の無効化 358 ユーザー・アカウント属性に基づく構成 350 Content Store 使用状況タスク 373 Content Store 整合性検査 374 無効化 エラー・メッセージ機密保護機能 23 コア・ダンプ・ファイル 24 コンテンツ保守ジョブ 76,189 セッション・キャッシュ 100 配布時にパッケージを無効にする 310 配布時にフォルダーを無効にする 310 レポートへのアクセス 383 メタデータ 337 メッセージ ログ記録 18 モデル 337 最適化 77 バックアップ 191 モバイル・デバイスでの Cognos Analytics 431

# [ヤ行]

役割 217 インストール後にセキュリティー設定を変更する 267 組み込み 255 作成 219 事前定義 257, 267 セキュリティー 215 配布 311 配布リストを追加する 218 メンバーを追加および削除する 220 ルーティング・キーワードの設定 60 レポートの実行 218 IBM Cognos Controller 218 IBM Cognos Series 7 217 Mobile 管理者 454 Mobile テーマの割り当て 435 Mobile ユーザー 454 ユーザー 215 クラスと権限 224 削除および再作成する 215 セキュリティー 215 特定ユーザーの問題の診断 25 匿名 255 認証済み 255

ユーザー (続き) プロファイル 341 プロファイルの削除 344 プロファイルの変更 342 ロケール 216 IBM Cognos Series 7 215 ユーザー通過認証, Microsoft Analysis Services 132 ユーザー補助機能 461, 462 ユーザー補助機能付き出力レポート システム全体の設定 3,462 ユーザー補助機能付きレポート 有効化 2,461 ユーザー補助機能のサポート 出力レポートに対する有効化 2,461 ユーザー補助の既知の問題 テキスト入力フィールドでの削除 467 レポート・コンテンツの表示 466 VoiceOver モードでのタップ 466 ユーザー・アカウント インポート 326 エクスポート 322 ユーザー・プロファイル コピー 344 マルチテナンシー 366 default 341 ユーティリティー ラウンド・トリップ・セーフティー設定 469 有効化 エントリー 271 キュー評価指標 111 クエリーにおける数値検索キーの文字列への変換 99 有効期限 実行済みヒューマン・タスクと注釈 112 ユーザー・セッション・ファイル 73 有効なドメイン・リスト 115 要求 アドホック・タスク 397 承認要求 397 処理 82 負荷分散 79 用語集 オブジェクト機能 249 保護されている機能と特性 237 参照: InfoSphere Business Glossary 用紙サイズ 定義 274 容量 ディスパッチャー 79 予定されている処理 282 読み取り 通知要求 404 読み取り権限 223

## [ラ行]

ライブラリー 視覚化 379, 381 ライブラリー管理者 リソース・ライブラリー 379 ラウンド・トリップ・セーフティー デフォルトの変換設定値の復元 472 日本語文字 468 変換と代替を適用する 471 変換の指定 469 Configuration ユーティリティー 469 Series 7 PowerPlay Web レポート 472 利害関係者 アドホック・タスク 398 承認要求 398 リセット システム評価指標 47 評価指標 47 リポジトリー 外部の指定 202 リポジトリー・サービス 53 両方向 SSL 認証 456 履歴 配布 329 ルーティング規則 59 設定 61 ルーティング・キーワード グループ/役割用の設定 60 ルーティング・タグ 59 サーバー・グループの設定 78 データ・オブジェクトの設定 60 累積 エントリー履歴 289 例 Shift-JIS のエンコード 468 レポート 383 アクティブ 384 キューの時間制限の設定 85 形式 386 言語を選択する 388 失敗したものを再実行 291 出力形式へのアクセスの制限 386 出力の生成機能 386 スケジュール 293 体の不自由なユーザーのためのユーザー補助機能 383 多言語用に設定する 6 デスクトップ・コンピューターからの実行 445 デバイスからの実行 445 デフォルトの言語 389 デフォルト・プロンプト値の指定 389 配布 303 ビューの作成 384 ビューをスケジュールする 293 ユーザー補助機能付きの作成 2,461 CSV 形式 388

レポート (続き) CSV 出力の生成 386 Excel 形式 387 HTML 形式 387 IBM Cognos Series 7 390 IBM Cognos Series 7 多言語プロパティー 391 PDF 形式 387 PDF 出力の生成 386 PowerPlay レポートのデフォルト値を変更する 391 XLS 出力の生成 386 XML 出力の生成 386 レポート検証レベル 19 レポート仕様 アーカイブのオフ設定 201 アップグレード 329 ログ記録 20 レポートの実行 役割 218 レポート・コンテンツ、アーカイブされたものの検索 206 レポート・サーバー 接続タイムアウトの管理 162 設定 98 レポート・データのセキュリティー 458 レポート・リポジトリー 142 ログ サービス 49,51 メッセージ処理 17 メッセージのデータベース表 509 ログ宛先 タイプ 17 ログオンする 複数のネームスペース 230 ログ記録 監査レポート 22 設定 18 特定ユーザー 26 特定ユーザーの問題の診断 25 特定ユーザーのログ記録の無効化 27 ネイティブ・クエリー 20 方式 446 メッセージ 18 メッセージのデータ・スキーマ 509 レベル 18 レベルの設定 21 レポート検証レベル 19 レポート実行オプション 20 Cognos Mobile の Cognos Analytics ログ記録 447 mob.log ファイル 446 ログ・メッセージ リモート・ログ・サーバー 17 参照: トラブルシューティング ログ・メッセージのデータ・スキーマ 509 ロケール 306 エントリーのソート 70 プロンプト・キャッシュでのオーバーライド 73 ユーザー 216

ロケール (続き) Microsoft Analysis Services 132

# [ワ行]

ワークシート Excel 2007 106 ワークスペース IBM Cognos Workspace 429 ワークスペース・ドメイン 115

10 進数の精度 削減 102

# A

Active Directory グループと役割のメンバーとしての配布リスト 218 Administration 保護されている機能と特性 237 Agent サービス 49 WebSphere Web サービス・タスクからのエージェントの コンテキスト ID の除外 92 Analysis Studio ドリルスルー・ターゲットの設定 421 保護されている機能と特性 237 ホット・スポットを制限する 91 レポート・プロパティー 274 Android 診断 cogmob.log 450 Android デバイス ユーザーのための構成 432 Annotation サービス 50 配布 332 API 3 Apple プッシュ通知 SSL 証明書 442

## В

Batch Report サービス 50

## С

CAM Passport Cookie 101 CAM パスポート設定 タイムアウト 459 cogmob.log 450 Cognos Mobile サービス グローバル設定 438 Cognos Proven Practices セキュリティー・ドキュメント 207 Cognos SQL SQL 文にコメントを追加する 178, 180 Cognos Viewer セッション・キャッシュを無効にする 100 Cognos Workspace、コメントのレポート 334 Cognos キューブ 121 Collaboration ディスカバリー URI 設定 110 Content Manager オブジェクト 474 オブジェクトの階層 473 外部ネームスペース参照の制御 71 キャッシュ・サイズの上限 71 サービス 49 最大接続数 69 詳細設定 68 初期アクセス権 473, 474, 475 待機中を同期する 70 データベース接続プール設定 69 バックグラウンド・アクティビティー 76 負荷の削減, ユーザー・セッション・ファイル 73 Content Manager 8 レポート仕様のアーカイブをオフに設定する 201 Content Manager サービス 50 デフォルトの指定 56 Content Store 配布 307 バックアップ 191 保護 269 保守 73 Content Store 使用状況タスク マルチテナンシー 373 Content Store 整合性検查 マルチテナンシー 374 Content Store データベース 115 Cookie Web ブラウザーで有効にする 9 CSV 形式を設定する レポート 388

## D

Db2 Db2 CLI 接続属性のサポート 177 Db2 OLAP データ・ソース 126, 127 Db2 データ・ソース 118 Delivery サービス 49 Delivery サービス 50

## Ε

E メール通知 アドホック・タスク 394 E メール通知 (続き) 承認要求 394
Essbase
参照: Oracle Essbase
eTrust SiteMinder ネームスペース 207
Event SiteMinder ホーレブス 49, 50
Event Studio
保護されている機能と特性 237
Excel 2007
大規模ワークシート 106
Excel 2007 レポート
ワークシート・タブに名前を付ける 107
Excel レポート
形式設定 387

## F

FileNet カスタム・クラスのインポート 196 レポート仕様のアーカイブをオフに設定する 201 Firefox 設定 9 Fix Pack 2 の新機能 Db2 CLI 接続属性 177 forwardURLParamsToCM パラメーター 113 Framework Manager バックアップ 191

## G

GDPR 準拠 監査レポート 22 Google Chrome 設定 9 Graphics サービス 50

## Η

HTML レポートの形式設定 387 HTML および HTTP のサポート 455 HTTPOnly 101 Human Task サービス 50 配布 332

## I

IBM Cognos ネームスペース 210 IBM Cognos Administration 詳細設定 535 ステータス・ページ 42 IBM Cognos Administration のスコアカード・ウィンドウ 42 IBM Cognos Administration のステータス・ページ 42 IBM Cognos Administration の設定ウィンドウ 44

IBM Cognos Administration の評価指標ウィンドウ 42 **IBM Cognos Analytics** 管理 1 サービス 52 ディスパッチャー 52 IBM Cognos Analytics および PowerPlay シングル・サインオン 391 IBM Cognos Analytics コミュニティー 視覚化 379 IBM Cognos Analytics へのアクセスを制限する 14 IBM Cognos Application Firewall 211 IBM Cognos Controller セキュリティー 218 IBM Cognos Series 7 ネームスペースを使用する 13 ポータルにコンテンツを追加する 13 ユーザー 215 PowerPlay のレポートとキューブ 390 IBM Cognos Series 7 ネームスペース 207 シングル・サインオン 391 IBM Cognos Viewer 保護されている機能と特性 237 IBM Cognos Workspace ワークスペース 429 IBM Cognos Workspace、コメントの配布 333 IBM Cognos Workspace、コメントの保管 334 IBM Cognos グループ 更新 220 IBM Cognos コンテンツ・アーカイブ 外部リポジトリー 193 IBM Cognos ソフトウェアの出力レポート・ファイル 記述子ファイル 104 IBM Cognos のグループ 作成 219 IBM Cognos の役割 作成 219 IBM Cognos 役割 更新 220 **IBM** Connections コラボレーションの設定 110 IBM Content Manager 8 インポート カスタム・クラスを IBM Content Manager 8 へ 197 カスタム・クラスのインポート 197 IBM Db2 参照: Db2 IBM FileNet Content Manager 142, 193 IBM InfoSphere Information Governance Catalog 系統ソリューション 107 IBM InfoSphere Warehouse Cubing Services 130 IBM Metadata Workbench 系統ソリューション 385 Informix データ・ソース 131 InfoSphere Business Glossary Cognos Viewer 385 URI の設定 109

Interactive Discovery Visualization サービス 50 Internet Explorer 設定 9 iOS 診断 mobile_ios.log 450 iOS デバイス ユーザーのための構成 432 ipf ファイル ログ記録 25 ipf ファイルを使用したログ記録 25

## J

Java Management Extensions 67 Java スクリプト Web ブラウザーで有効にする 9 JDBC データ・ソース接続 153, 163 JMX 66 JMX プロキシー・サーバー 67 jmxProxyHostDispatchers 66 job サービス 50

## L

LDAP ネームスペース 207 Lease Key 458 Lease Key 技術 458

## Μ

Map Manager 多言語用に設定する 5 MDX クエリー 138 members ドリルスルー・アクセス 412 IBM Cognos グループおよび役割 220 Metadata サービス 51 Microsoft Active Directory 207 Microsoft Analysis Services シングル・サインオン 132 データ・ソース 132 Microsoft SQL Server Analysis Services 2005 (SSAS 2005) 132 Microsoft Office Report Data サービス 52 Microsoft Office 機能 MDX クエリー用のインストール 138 Microsoft SQL Server 137 シングル・サインオン 137 データ・ソース 137 VBA アプリケーション用の Microsoft Office 機能のイン ストール 138 Migration サービス 51 Mobile 保護されている機能と特性 237

Mobile 管理機能 454 Mobile 管理者役割 454 Mobile 機能 454 Mobile サービス 51 詳細設定 434 Mobile テーマ 削除 435 設定 435 編集 435 有効化 435 Mobile のサンプル 451 Mobile ユーザー役割 454 mobile_ios.log 450 mob.log ファイル 446 デバッグ・レベルの追加 447 monitor サービス 52

## Ν

Null 値の消去 337

## 0

ODBC データ・ソース 139 Oracle Essbase データ・ソース 126 Oracle データベース 仮想プライベート・データベース 168, 174 プロキシー接続 168, 173 Oracle データ・ソース 142

## Ρ

pcactivate 更新済み PowerCube の配布 181 PDF 形式 圧縮アルゴリズム・レベルの設定 85 コンテンツ圧縮タイプの設定 85 ファイルの設定 85 フォントの埋め込みの設定 85 文字エンコードの設定 85 レポート 387 PDF セキュリティー レポートで設定する 387 PDF ファイルでの圧縮アルゴリズム・レベル 85 PDF ファイルでのコンテンツ圧縮タイプ 85 PDF ファイルでの文字エンコード方式 85 PKCS12 456 Planning Administration Console サービス 52 Planning Data サービス 52 Planning Job サービス 52 Planning Web サービス 52 PowerCube キューブ・ファイルへのパス 154

PowerCube (続き) 更新 181 パッケージの作成 337 pcactivate 181 Report サービス接続の更新 47 PowerPlay レポート 390 レポートのデフォルト値の変更 391 レポート・プロパティー 274 PowerPlay レポート・オーサリング・ツールを使用する 390 Series 7 Web レポートのフォント変換 472 Presentation サービス 49 presentation サービス 52 priority アドホック・タスク 400 承認要求 400 「Proven Practices」ドキュメント 配布 303

# Q

Query Studio セッション・キャッシュを無効にする 100 保護されている機能と特性 237 レポート・プロパティー 274 Query サービス 52 アイドル接続タイムアウト 183 管理 183 管理タスクの作成とスケジュール 188 キャッシュ管理 186 キャッシュの使用 186 キャッシュの使用状況の分析 186 キャッシュをクリア 186 クエリー計画トレース 183 コマンド行 API 189 実行ツリー・トレース 183 実行トレース 183 ファイルへのモデルの書き込み 183 プロパティー 183 Query サービスのキャッシュ 使用法の分析 187 Query サービスのキャッシュ・タスク スケジュール 186

## R

Relational Metadata サービス 52 Report Data サービス 49, 52 ゲートウェイ・マッピングの指定 62 Report Data サービス (RDS) レポート・サイズの上限 92 Report サービス 49, 53 接続 47 Reporting セッション・キャッシュを無効にする 100 ドリルスルー・レポートの作成 425 保護されている機能と特性 237 レポート・プロパティー 274 Map Manager 5 RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_LARGE_WORKSHEET 106 RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_OUTPUT_FRAGMENT_SIZE 106 RSVP.EXCEL.EXCEL_2007_WORKSHEET_MAXIMUM_ROWS 106 RSVP.EXCEL.PAGEGROUP_WSNAME_ITEMVALUE 107 RSVP.PRINT.POSTSCRIPT 114 RSVP.PROMPT.RECONCILIATION の設定 98

## S

Safari 5 設定 9 SAP Business Information Warehouse (SAP BW)  $\vec{\tau} - \beta \cdot \mathcal{Y}$ ース 144 SAP BW パッケージ、最大オブジェクト 339 パッケージの作成 337 パッケージ, 編集する 337 SAP BW データ・ソース 言語 388 SAP BW パッケージでの最大オブジェクト 339 SAP ネームスペース 207 Series 7 PowerPlay Web  $\nu \# - h$ ラウンド・トリップ・セーフティー 472 Shift-JIS のエンコード 例 468 SMTP キュー評価指標 有効化 111 SQL 参照: Cognos SQL 参照: ネイティブ SQL Sybase Adaptive Server Enterprise データ・ソース 147 system サービス 53

# Т

TM1 データ・ソース 149

## U

UNIX オペレーティング・システム 印刷 114 Upfront Newsbox ポータルに追加する 13

## V

Visualization Gallery サービス 53

## W

Web サービス・タスク WebSphere のエージェントのためのコンテキスト ID の除 外 92 Web ブラウザー 設定 9 Web ブラウザー・セッション 101

# X

XML データ・ソース 151

[特殊文字]

\$nopage>監査ログ 参照: トラブルシューティング .cnv 代替を適用する 471 .xml 変換の指定 469 変換を適用する 471 "すべてのユーザー" グループ 256